ソ連共産党
（ボリシェビキ）
歴史小教程

東方書店出版部訳

『ソ連共産党（ボリシェビキ）歴史小教程』は、ここ百年らいの全世界の共産主義運動の最高の総合と総括であり、理論と実際の結合の典型であって、いまのところ全世界で完全な典型はこの一つしかない。

毛沢東（『われわれの学習を改革しよう』）

東方書店　￥1200

ソ連共産党
（ボリシェビキ）
歴史小教程

東方書店出版部訳

東方書店

凡例

一　本訳書は、スターリン同志の指導のもとに、ソ連共産党（ボリシェビキ）中央委員会特別委員会が編集した『ソ連共産党（ボリシェビキ）歴史小教程』――一九三八年版――の全訳です。

一　本訳書があえて一九三八年版を新訳したわけは、「訳者あとがき」でのべています。

一　翻訳にあたり、できるかぎりやさしい文章にするため努力しました。また、中国語訳と英訳、とくに中国語訳を参照しました。

一　編者注のほかに、訳注を一部おぎない、どちらもその箇所の文末にのせています。

一　原文のイタリック体の箇所は、訳文では傍点にしてこれをしめしました。

一　原文では、引用文献はロシア語版によるページ数がしめされていますが、これをすべて文献名にかえました。

目次

まえがき

ソ連共産党（ボリシェビキ）は、ロシアで一九世紀八〇年代に最初にあらわれたマルクス主義の小さなサークルやグループから、いま、世界最初の労働者農民の社会主義国家を指導している偉大なボリシェビキ党になるまで、ながい光栄ある道をたどってきた。

ソ連共産党（ボ）は、革命前のロシアの労働運動を土台にし、そして労働運動と結びつき、それに社会主義意識をつぎこんだ、マルクス主義のサークルやグループから成長してきた。ソ連共産党（ボ）はこれまでも、またいまも、マルクス・レーニン主義の革命的学説を指針としている。ソ連共産党（ボ）の指導者たちは、帝国主義、帝国主義戦争、およびプロレタリア革命の時代という新しい条件のもとで、マルクス・エンゲルスの学説をよりいっそう発展させ、新しい段階にたかめた。

ソ連共産党（ボ）は、労働運動内部では、小ブルジョア諸党派、すなわち、社会革命党員〔エス・エル〕（それよりまえには、その先行者であった、ナロードニキ〔人民主義者〕）、メンシェビキ、無政府主義者、各種のブルジョア民族主義者との原則的な闘争の中で、また、党内では、メンシェビズム、日和見主義の諸潮流、すなわち、トロツキスト、ブハーリン派、民族主義偏向者、そのほかの反レーニン主義グループとの原則的な闘争のなかで、成長し、強固になった。

ソ連共産党（ボ）は、労働者階級のあらゆる敵、勤労大衆のあらゆる敵、すなわち、地主、資本家、富農、

陰謀家、スパイとの革命的闘争のなかで、包囲していた資本主義勢力のあらゆる手先との革命的闘争のなかで、強固になり、きたえられた。

ソ連共産党（ボ）の歴史は、三回の革命、すなわち、一九〇五年のブルジョア民主主義革命、一九一七年二月のブルジョア民主主義革命、一九一七年の十月社会主義革命の歴史である。

ソ連共産党（ボ）の歴史は、ツァー制度の打倒、地主と資本家の権力の打倒の歴史であり、国内戦争時代に外国の武力干渉を粉砕した歴史であり、わが国にソビエト国家、社会主義社会を建設した歴史である。

ソ連共産党（ボ）の歴史を研究すれば、わが国の労働者、農民が、社会主義のために奮闘したゆたかな経験を、会得することができる。

ソ連共産党（ボ）の歴史の研究、すなわち、マルクス・レーニン主義のあらゆる敵、勤労大衆のあらゆる敵とたたかったわが党の歴史を研究すれば、ボリシェビズムを体得することをたすけ、政治的警戒心をたかめることができる。

ボリシェビキ党の英雄的な歴史の研究、それは、社会発展と政治闘争の法則についての知識、革命の原動力についての知識によって、われわれを武装する。

ソ連共産党（ボ）の歴史を研究すれば、レーニン・スターリンの党の偉業の最終的勝利、全世界における共産主義の勝利にたいする確信を、強めることができる。

本書は、ソ連共産党（ボ）の歴史を、簡潔にのべたものである。

第一章　ロシアにおける社会民主労働党結成のための闘争

（一八八三年―一九〇一年）

一、農奴制度の廃止とロシアの産業資本主義の発展　近代産業プロレタリア階級の出現　労働運動の第一歩

ツァー・ロシアが、資本主義発展の道にはいったのは、ほかの諸国にくらべておそかった。一九世紀の六〇年代以前には、ロシアの工場の数はまだひじょうに少なかった。当時は、貴族・地主の農奴制経済が、おもな地位を占めていた。工業は、農奴制度のもとでは、真に発展することはできなかった。農業では、農奴の強制労働が労働生産性をきわめて低いものにしていた。当時の経済発展の全過程は、農奴制度の消滅をうながした。ツァー政府は、クリミヤ戦争の時期に、軍事的敗北をなめて勢力がおおいに弱り、また地主に反抗する農民の「一揆」におびえて、一八六一年には、農奴制度を廃止せざるをえなくなった。

しかし、農奴制度の廃止後も、地主はひきつづき農民を抑圧した。農民を「解放」したとき、地主は、農民

が以前に耕していた土地の大部分を切りとり、とりあげて、農民をすっかり略奪した。それで、これらの土地を、農民は「切取り地」とよんだ。農民は、自身を「解放」するために、二十億ルーブル近くの買取金を地主におさめなくてはならなかった。

農奴制度の廃止後、農民は、もっともひどい条件で、地主の土地を小作しなくてはならなくなった。農民は、地主に現金で小作料をおさめるほかに、自分の農具や馬をつかって、地主の一定のひろさの土地を強制的に、無報酬でしばしば耕作させせられた。これを「雇役」あるいは「賦役」といった。農民はおおくの場合、小作料として収穫の半分を現物で地主におさめなくてはならなかった。これを「折半」労働といった。

これからもわかるように、当時の状態は、以前の農奴制度のときとほとんど同じであった。ただちがうところといえば、農民は身分上は自由になっていて、もう品物のように売買されることがなくなったというだけであった。

地主はいろいろな略奪手段（小作料や罰金）をもって、たちおくれた農民経済からしぼれるだけのものをしぼりとった。大部分の農民大衆は、地主の抑圧のために自分の経済を改善することができなかった。そのため、革命前のロシアの農業は、極度にたちおくれ、しばしば凶作や飢饉にみまわれた。

農奴制経済の残りかす、そして、農民経済の収入をうわまわる重い租税や、地主に支払う土地買取金のために、農民大衆は破産し、貧困にくるしみ、賃仕事をさがしに農村をはなれなくてはならなかった。これらの農民は工場にはいった。そして工場主は、安い労働力を手にいれることができた。

労働者と農民の頭上にのしかかっていた郡警察の署長や署員、憲兵や警察官、村巡査は、一団となって勤労

者や被搾取者に敵対し、ツァー、資本家、地主を擁護した。体刑は、一九〇三年までつづいた。農奴制度は廃止されたが、農民はささいな過失や、租税未納のかどで、あいもかわらず鞭でうたれた。労働者もまた、しばしば警察やコサックにひどくなぐられた。とくに、工場主の酷使にたえきれずに仕事を放棄しストライキをおこなったときに、それはひどかった。ツァー・ロシアの時代には、労働者と農民は、なんらの政治的権利ももっていなかった。ツァー専制制度は、人民のもっとも凶悪な敵であった。

ツァー・ロシアは、諸民族の牢獄であった。ツァー・ロシアに住んでいたロシア民族以外の多くの民族は、まったく無権利で、つねにありとあらゆる軽蔑や侮辱をうけていた。ツァー政府は、各民族地区に住む土着民族を下等な人種とみなすように、ロシアの住民を習慣づけ、これらの民族を公然と「異民族」とよび、さげすみ憎悪するようしむけた。ツァー政府は、わざと民族間の反目をあおり、ある民族をそそのかして他の民族に反対させ、ユダヤ人にたいする暴虐行為を組織し、後カフカズでは、タタール人とアルメニア人とが殺しあうようにけしかけた。

民族地区の国家の職務は、全部あるいはほとんど全部をロシア官吏が担当した。政府機関や裁判所のすべての事務には、ロシア語が使われた。各民族の言葉で書籍や新聞を出版することは禁止され、学校では、自分の民族の言葉で授業することが禁じられた。ツァー政府は、民族文化のあらわれとあればどんなものにたいしても極力おさえつけ、ロシア民族以外のすべての民族に「ロシア化」を強制する政策をとった。ツァー制度は、非ロシア民族の死刑執行人、および迫害者としてふるまった。

農奴制度の廃止後、ロシアの産業資本主義は、農奴制度の残りかすになおさまたげられはしたが、かなり急

速に発展していった。一八六五年から一八九〇年までの二十五年間に、大工場と鉄道の労働者だけで、七十万六千人から百四十三万三千人に、つまり二倍以上にふえた。

九〇年代には、ロシアの資本主義的大工業は、いっそう急速に発展した。九〇年代の末には、大工場、鉱業、鉄道の労働者は、ヨーロッパ・ロシアの五十県だけでも、二百二十万七千人に、全ロシアでは、二百七十九万二千人にふえた。

これらの労働者は、すでに近代的産業プロレタリア階級であった。かれらは、資本主義大企業の労働者にそなわった団結性の点からも、戦闘的革命的性質の点からも、農奴制度時代の工場労働者、小工業、家内工業労働者や、そのほかのすべての労働者とは、まったくことなっていた。

九〇年代の産業の興隆は、主として、さかんな鉄道建設と結びついていた。十年間(一八九〇年から一九〇〇年までの)に、あわせて二万千露里以上の新しい鉄道が建設された。鉄道には、レール、機関車、車両用の大量の金属が必要だったし、ますますおおくの燃料、石炭、石油を必要とした。その結果、冶金工業と燃料産業が発達した。

革命前のロシアでも、すべての資本主義国と同じように、産業の好景気の時期のあとには、つねに産業の恐慌や不景気の時期がつづいた。それで、労働者階級は、ひどい打撃をうけ、数十万の労働者が、失業と貧困におちいった。

ロシアの資本主義は、農奴制度の廃止後、かなり急速に発展はしたものの、やはり、ロシアは経済の発展では、ほかの資本主義諸国にくらべて、大いにたちおくれていた。大部分の住民は、あいかわらず農業に従事し

ていた。レーニンは、その有名な著作『ロシアにおける資本主義の発展』のなかで、一八九七年の全国国勢調査の重要な数字を引用して、当時農業に従事していたものは総人口の約六分の五だが、大小工業、商業、鉄道、水上運輸業、建築業、木材伐採業その他に従事していたのは、総人口の約六分の一にすぎなかったことを指摘している。

これからわかるように、ロシアは、資本主義は発展したが、まだ農業国であり、経済的にたちおくれた国であり、小ブルジョア的な国であった。つまり、小所有者的な、生産性のいたって低い、個人農経済がまだまだ支配的な国であった。

資本主義は、都市だけでなく、農村にも発展していった。農民という、革命前のロシアで人口のもっとも多かった階級は、日ましに分解し、分化していった。農村では、もっともゆたかな農民のなかから富農の上層、つまり農村ブルジョア階級が生まれる一方、また、数多くの農民がおちぶれていった。貧農、農村プロレタリア、半プロレタリアの数が、しだいにふえていった。中農の数は、年ごとにへっていった。

一九〇三年には、ロシアにおよそ一千万戸の農家があった。レーニンがその小冊子『貧農に訴える』のなかで算出しているところによると、農家総数のうち、すくなくとも三百五十万戸は、馬をもたない農民であった。普通こうした極貧の農家は、猫の額ほどの土地しかつくらず、残りの土地は富農にかして、自分では出稼ぎにでていた。これらの極貧農は、その地位からいえば、プロレタリア階級にひじょうに近かった。レーニンは、かれらを、農村のプロレタリア階級、または半プロレタリア階級とよんだ。

一方、百五十万戸の富農（一千万戸の農家総数の一五パーセントをしめた）は、全農民の耕地面積の半分を

もっていた。この農民ブルジョア階級は、貧農や中農をしぼりあげ、作男や日雇い農の労働を搾取することによって金持ちになり、農業資本家にかわっていった。

すでに一九世紀の七〇年代、とくに八〇年代に、ロシアの労働者階級はめざめはじめ、資本家との闘争をすすめた。ツァー・ロシア時代の労働者の生活は、きわめて苦しかった。工場の労働時間はすくなくても十二時間半で、繊維産業では、十四—十五時間におよんだ。八〇年代には、工場の労働者の労働にたいする搾取は、ひじょうに広範におこなわれた。少年労働者は、成年労働者と同じ時間はたらいたが、その賃金は、婦人労働者と同じように、成年男子労働者とくらべ、きわめてすくなかった。賃金の水準は、おどろくほど低く、大部分の労働者は、毎月わずか七—八ルーブル、金属加工工場や鋳造工場の最高給の労働者でも、多くて毎月せいぜい三五ルーブルしかもらえなかった。労働保護などまったくなかったので、不具になったり、死亡したりする労働者が、ひじょうに多かった。労働保険なども全然なかったので、労働者は、料金を払わなければ医療をうけられなかった。住居の条件も、きわめてひどいものだった。労働者宿舎の天井の低い狭い「うすぐらい小部屋」に、十人から十二人の労働者が住んでいた。工場主は、しばしば労働者の賃金をごまかしたり、労働者に工場主経営の店で高い値段の食料品を買うことを強制したり、また罰金制をとって労働者をしぼりあげた。

それで労働者は、たえがたい生活を改善するために、仲間同士話合って、共同で工場主に要求をだした。労働者たちは、たびたび仕事を放棄した。つまり、ストライキを宣言した。七〇年代と八〇年代におきた初期のストライキは、ふつう、工場主の法外な罰金や、賃金の支払のさいの詐欺・ごまかしや賃金基準の引下げなど

によっておこった。
初期のストライキのころは、労働者は、堪忍袋の緒をきって、しばしば機械をこわし、工場の窓ガラスを叩きわり、工場主の店舗や工場事務所を破壊したりした。
先進的な労働者は、資本家との闘争を有利にすすめるためには、組織しなければならないことをさとりはじめていた。それで、労働者の同盟が、つぎつぎに現われた。
一八七五年、オデッサに「南ロシア労働者同盟」がつくられた。この最初の労働者の組織は、わずか八、九ヵ月存在しただけで、ツァー政府によってつぶされてしまった。
一八七八年、ペテルブルグに、建具師のハルトゥーリンと仕上工のオブノルスキーの指導する「ロシア北部労働者同盟」が組織された。この同盟の綱領には、同盟はその任務の点で西ヨーロッパの社会民主労働党と類似するものである、ということが指摘されていた。同盟の最終目的は、社会主義革命を実現すること、つまり、「きわめて不公平な制度であるから、国内に現存する政治経済制度をくつがえすこと」であった。同盟の組織者の一人オブノルスキーは、外国にしばらく住んでいたことがあり、そこで、マルクス主義的社会民主党や、マルクスに指導された第一インターナショナルの活動を知るようになった。このことは、「ロシア北部労働者同盟」の綱領に影響をあたえた。同盟は、当面の任務として、人民のために政治的自由と政治的権利（言論の自由、出版の自由、集会の権利など）をかちとることをあげていた。労働時間の制限も、同盟のうちだした当面の要求の一つであった。
同盟の加盟者は、二百人におよんだ。同情者も、同じくらいいた。同盟は、労働者のストライキ闘争に参加

し、闘争を指導しはじめた。そのご、この労働者同盟も、ツァー政府によってつぶされた。
しかし、労働運動は、ひきつづき発展し、ますます多くの新しい地区にひろがっていった。八〇年代には、ひじょうに多くのストライキがおきた。五年間（一八八一年から一八八六年までの）に、四十八回以上のストライキがおき、八万人の労働者が参加した。
一八八五年、オレホボ・ズーエボのモロゾフ工場で大規模なストライキがおこった。このストライキは、革命運動史上とくに重要な意義をもっていた。
当時、この工場にはおよそ八千人の労働者がいた。労働条件は、日ましに悪くなっていた。一八八二年から一八八四年までのあいだに、賃金は五回も引下げられた。一八八四年のときには、賃金基準がいっきょに四分の一、つまり二五パーセント引下げられた。そのうえ、工場主のモロゾフは、罰金で労働者を搾取した。ストライキのあと、裁判所の調べで判明したところによると、工場主は、労働者の賃金一ルーブルごとに、三〇カペイカから五〇カペイカを、罰金という名目で差引いていた。労働者は、こうした強奪にたえきれなくなり、一八八五年一月にストライキを宣言した。このストライキは、事前に準備されていた。ストライキを指導したのは、先進的労働者ピョートル・モイセエンコだった。かれは、以前は「ロシア北部労働者同盟」の一員で、すでに革命活動の経験をもっていた。ストライキの直前、モイセエンコは、もっとも自覚のたかかった他の数人の織物工たちと協力して、工場主にだす多くの要求をきめ、これらの要求を、労働者の秘密会議にかけて承認をえた。労働者のだした第一の要求は、略奪的な罰金をやめろということだった。
このストライキは、武力によって弾圧された。六百余人の労働者が逮捕され、そのうちの数十人は、裁判に

かけられた。

一八八五年には、イワノボ・ボズネセンスクのいくつかの工場でも、同じようなストライキがおきた。そのつぎの年、ツァー政府は、労働運動のもりあがりにおどろいて、罰金にかんする法律を公布せざるをえなかった。この法律には、罰金は工場主がふところにいれてはならず、労働者自身の必要なことに使わなくてはならない、とかかれていた。

労働者は、モロゾフ工場やそのほかのストライキの経験から、組織された闘争によって多くのものをかちとれることを知った。労働運動は、その隊伍のなかから、労働者階級の利益を断固まもる有能なおおくの指導者や組織者をうみだしはじめた。

同時に、国内の労働運動のもりあがりと、さらに西ヨーロッパの労働運動の影響もうけて、ロシアに最初のマルクス主義の組織が創立されはじめた。

二、ロシアにおけるナロードニキ主義とマルクス主義　プレハーノフとその「労働解放団」　ナロードニキ主義とのプレハーノフの闘争　マルクス主義のロシアでの普及

マルクス主義のグループがあらわれるまえ、ロシアでは、マルクス主義の敵であったナロードニキが、すで

に革命運動をおこなっていた。
ロシア最初のマルクス主義グループは、一八八三年にあらわれた「労働解放団」だった。それは、プレハーノフが、革命活動をおこなったかどでツァー政府におわれ、やむなく国外にのがれてジュネーブに住むようになったとき、つくられたものである。
プレハーノフ自身、もとはナロードニキであった。国外でマルクス主義を知ってから、ナロードニキ主義と手を切り、マルクス主義のすぐれた宣伝家になったのである。
「労働解放団」は、ロシアでマルクス主義を普及させるうえで、きわめて多くの仕事をした。「労働解放団」は、マルクスとエンゲルスの著作『共産党宣言』、『賃労働と資本』、『空想から科学への社会主義の発展』などをロシア語に訳し、国外で印刷して、ロシア国内で秘密にばらまいた。プレハーノフ、ザスリッチ、アクセリロードやそのほかのこの団の参加者は、またマルクス・エンゲルスの学説を解説し、科学的社会主義思想を解説したおおくの著作をかいた。
プロレタリア階級の偉大な教師マルクスとエンゲルスは、空想的社会主義者とは反対に、社会主義が、夢想家（空想家）のつくり話ではなく、現代の資本主義社会の発展の必然的な結果であることを、はじめて解明した。そして、農奴制度がすでに崩壊したように、資本主義制度がかならず崩壊すること、資本主義が自己の墓掘人、つまりプロレタリア階級をうみだすことを指摘した。マルクスとエンゲルスは、プロレタリア階級の階級闘争によってのみ、プロレタリア階級がブルジョア階級にうちかつことによってのみ、資本主義のもとから、搾取制度のもとから、人類を救いだすことができると指摘した。

マルクスとエンゲルスは、プロレタリア階級に、自己の力を知り、自己の階級的利益を認識し、団結してブルジョア階級と断固たたかうようおしえた。マルクスとエンゲルスは、資本主義社会の発展の法則を発見し、さらに、資本主義社会の発展とその社会での階級闘争が、かならず資本主義の崩壊、プロレタリア階級の勝利、プロレタリア階級独裁をもたらすことを、科学的に証明した。

マルクスとエンゲルスは、つぎのようにおしえている。資本の権力からぬけだし、資本主義的所有を社会的所有にかえることは、平和的手段では不可能である。それを実現するためには、労働者階級は、革命的暴力によってブルジョア階級に反対し、プロレタリア革命を実現し、自己の政治支配、つまりプロレタリア階級独裁をうちたてて、搾取者の反抗をおしつぶし、階級のない新しい社会である共産主義社会を樹立しなくてはならない、と。

また、マルクスとエンゲルスは、つぎのようにおしえている。産業プロレタリア階級が、もっとも革命的な階級であり、したがってまた資本主義社会でもっとも先進的な階級である。プロレタリア階級のような階級だけが、資本主義に不満をもつ全勢力を自分のまわりに結集し、それをみちびいて資本主義に向かって突撃できる、と。しかし、旧世界にうちかち、階級のない新しい社会をうちたてるためには、プロレタリア階級は、マルクス・エンゲルスが共産党とよんだ自己の労働者の党をつくらなくてはならない。

マルクス・エンゲルスの見解の普及という仕事にあたったのは、ロシアでの最初のマルクス主義のグループ、すなわちプレハーノフが中心になった「労働解放団」であった。

「労働解放団」が、国外でロシア語の出版物によって、マルクス主義の旗をかかげたときには、ロシアには

まだ社会民主主義運動はなかった。この運動をすすめるためには、なによりもまず、理論上・思想上で道をきりひらかなくてはならなかった。当時、マルクス主義の普及と社会主義運動の拡大の途上でおもな思想的障害となったのは、先進的労働者と革命的な気分をもった知識分子のあいだに、もっともひろまっていたナロードニキ主義的見解であった。

ロシアでの資本主義の発展とともに、労働者階級は、すでに組織的な革命闘争をすすめることのできる強大な先進的勢力となっていた。しかし、それにもかかわらずナロードニキは、労働者階級の先進的役割を理解しなかった。ロシアのナロードニキは、おもな革命勢力は、労働者階級ではなくて、農民であり、農民の「一揆」だけで、ツァーと地主の権力をくつがえすことができる、というあやまった考えをもっていた。ナロードニキは労働者階級を知らなかった。かれらは、農民が労働者階級と同盟せず、労働者階級の指導をうけずに自身の力だけでは、ツァー制度と地主にうちかつことができないことがわからなかった。ナロードニキは、労働者階級が社会でもっとも革命的な先進的な階級であることを理解していなかった。

はじめ、ナロードニキは、農民をたちあがらせてツァー政府にたいする闘争をすすめようとした。この目的をはたすために、革命的な知識青年は、農民の服をきて、農村、つまり、当時いわれていた「民衆のなかへ」(ブ・ナロード)はいっていった。これから「ナロードニキ」という名称がうまれた。しかし、農民はかれらについていかなかった。それは、かれらが農民について正しい知識をもっていなかったし、理解もしていなかったからである。ナロードニキの大多数は官憲に捕えられた。そこで、ナロードニキは人民をぬきにして、自分たちの力だけで、ツァー専制制度にたいする闘争をつづけることをきめた。その結果、さらに重大な誤りをおかした。

ナロードニキの秘密結社「民衆の意志〔ナロードナヤ・ボーリヤ〕」が、ツァー暗殺の準備をはじめた。はたして、一八八一年三月一日、「民衆の意志」派の投じた爆弾でツァー・アレクサンドル二世は暗殺された。しかしそれは、人民に少しも利益をもたらさなかった。個人を暗殺することによっては、ツァー専制制度をくつがえすことも、地主階級を消滅させることもできなかった。ツァーが暗殺されると、すぐ別のツァー、すなわちアレクサンドル三世がそれにかわった。アレクサンドル三世の支配のもとで、労働者、農民の生活は、さらに苦しくなっていった。

ナロードニキがとったこうした個人暗殺、個人テロによるツァー制度との闘争手段は、革命に有害な誤ったものであった。個人テロ政策の出発点となったのは、いわゆる積極的な「英雄」と、消極的な「群集」とを、対立させるまちがったナロードニキの理論であり、「群集」は、「英雄」がすばらしい功績をたてるのを待て、というものであった。このまちがった理論によれば、個々のすぐれた人物だけが歴史をつくることができ、大衆、人民、階級、あるいはナロードニキの作家たちが軽蔑していう「群集」は、自覚的な組織的な行動をとることができず、盲目的にただ「英雄」についていくだけだということになる。だから、ナロードニキは、農民や労働者階級のなかでの大衆的な革命活動をすてて、個人テロの闘争手段をとるようになったのである。ナロードニキは、当時の最大の革命家の一人ステパン・ハルトゥーリンに、革命的な労働者同盟を組織する仕事をやめて、もっぱらテロ活動をやるようにさせた。

ナロードニキは、抑圧階級の個々の代表的人物の暗殺という革命に無益な行動をとって、抑圧階級とのたたかいから勤労大衆の視線をそらせた。かれらは、労働者階級と、農民の革命的な自発性と積極性の成長をさま

たげた。
ナロードニキは、労働者階級が革命におけるその指導的役割を理解することをさまたげ、労働者階級の独自の政党を結成することをさまたげた。
ナロードニキの秘密組織は、ツァー政府によってつぶされたが、ナロードニキの見解は、革命的気分をもつ知識分子のあいだに、なお長いあいだのこった。ナロードニキの残党は、ロシアにおけるマルクス主義の普及に頑強に抵抗し、労働者階級の組織化をさまたげた。
だから、当時ロシアのマルクス主義は、ナロードニキ主義と闘争することによってのみ、はじめて成長し強固になることができた。
「労働解放団」は、ナロードニキの誤った見解にたいする闘争をくりひろげ、ナロードニキの学説とその闘争方法が、労働運動にどんなに大きな害をもたらしているかをあきらかにした。
ナロードニキに反論してかいた著作のなかで、プレハーノフは、ナロードニキも社会主義者だと自称しているが、ナロードニキの見解が、科学的社会主義となんの共通点もないことを指摘した。
プレハーノフが最初に、ナロードニキの誤った見解にマルクス主義的批判をくわえた。プレハーノフは、ナロードニキの見解の急所に痛撃をあたえるとともに、マルクス主義の見解をりっぱにまもった。
プレハーノフが壊滅的な打撃をあたえたナロードニキの誤った基本的見解とは、一体どんな見解だろうか？
第一に、ナロードニキは、資本主義はロシアでは「偶然的な」現象であって、ロシアにおいては、発展しないので、プロレタリア階級も成長しないし発展しないだろう、と主張した。

第二に、ナロードニキは、労働者階級が革命における先進的な階級だとはみなさなかった。かれらは、プロレタリア階級をぬきにしても社会主義を実現できると夢みていた。ナロードニキは、知識分子の指導する農民と、社会主義の萌芽であり基礎であるとかれらがみていた農民共同体とが、おもな革命勢力だと考えていた。

第三に、ナロードニキは、人類の歴史の全過程について、誤った有害な見解をもっていた。かれらは、社会の経済と政治の発展法則を知らず、また理解しなかった。かれらは、この面ではまったくおくれた人間であった。ナロードニキの意見によると、歴史は、階級や階級闘争がつくりだすものではなくて、個々のすぐれた人物、すなわち、いわゆる「英雄」だけがつくりだすものであって、大衆、「群集」、人民、階級は、こうした「英雄」に盲目的についていくだけだということになる。

プレハーノフは、ナロードニキとたたかい、それを暴露するにあたって、マルクス主義の多くの著作をかいた。当時のロシアのマルクス主義者は、これらの著作から学び、育てられていった。プレハーノフの『社会主義と政治闘争』、『われわれの意見の相違』、『歴史における一元論の発展にかんする問題について』などの著書は、ロシアにおけるマルクス主義の勝利のために地ならしをした。

プレハーノフは、その著作のなかで、マルクス主義の基本問題についてのべている。一八九五年に出版されたかれの『歴史における一元論の発展にかんする問題について』は、とくに重要な意義をもっていた。レーニンは、この著書によって「ロシアのマルクス主義者の全世代が教育された」（レーニン『「フペリョード派」の分派について』）と指摘した。

プレハーノフは、ナロードニキのように資本主義がロシアで発展するかどうかというように問題をたてるこ

とが、どんなにばかげているかを、ナロードニキに反論してかいた著作のなかで立証した。プレハーノフは、このことを事実をもって立証しながら、つぎのようにのべた。問題は、ロシアは資本主義発展の道をすでに歩んでおり、しかも、どんな力もこの道からそれをそらすことはできない、ということである

革命家の任務は、けっしてロシアの資本主義の発展をおくらせることではなかった。――たとえ、そうしようとしても、できることではなかった。革命家の任務は、資本主義の発展によってうみだされる強大な革命勢力、すなわち労働者階級に依拠し、労働者階級の階級意識をたかめ、労働者階級を組織し、労働者階級をたすけて独自の労働者の党を結成させることであった。

プレハーノフは、ナロードニキの第二の基本的にあやまった見解、つまり革命闘争におけるプロレタリア階級の先進的役割を否定する見解をも、うちやぶった。ナロードニキは、プロレタリア階級がロシアにあらわれたことは一種の「歴史的不幸」だとみなし、著作のなかで「プロレタリア禍」などと書いた。プレハーノフは、マルクス主義の学説をまもり、マルクス主義の学説がロシアで完全に適用できることを弁護し、農民が数のうえでは優位をしめ、プロレタリア階級が少数ではあるが、革命家はおもな希望を、プロレタリア階級にこそ、その成長にこそたくすべきであることを立証した。

なぜ、プロレタリア階級にこそたくすべきなのか？　なぜなら、プロレタリア階級は、いまはまだ数も少ないが、もっともすすんだ経済形態、すなわち大規模生産と結びついており、そのために大きな将来性をもった勤労者階級だからである。

なぜなら、プロレタリア階級は、年ごとに増大している階級であり、政治的に発展している階級であって、

しかも大規模生産という労働条件によって組織されやすいからであり、革命で失うものは鉄鎖だけだというプロレタリアの境遇にあるので、もっとも革命的な階級であるからである。

農民になると、事情がちがう。

農民（ここでは個人農をさす——編者注）は、数は多かったが、それはもっともおくれた経済形態、すなわち小規模生産と結びついており、したがって大きな将来性をもっていなかったし、またもつことのできない勤労者階級である。

農民は、増大していく階級でないばかりか、逆に年々ブルジョア階級（富農）と貧農（プロレタリア、半プロレタリア）に分解していく。それだけでなく、農民は、その分散性のためにプロレタリア階級にくらべて組織することがむつかしく、また小所有者的境遇にあるので、プロレタリア階級のように革命運動にすすんではいってこない。

ナロードニキは、ロシアにおいて社会主義に向かう道は、プロレタリア階級独裁ではなく、かれらが社会主義の萌芽であり基礎であるとみていた農民共同体であると主張した。しかし、共同体は、社会主義の基礎でも萌芽でもなかったし、そうなることはありえなかった。それは、共同体で支配的地位をしめていたのは、富農すなわち、貧農・雇農や経済力の弱い中農を搾取していた「寄生虫」だったからである。共同体土地所有制が形式上は存在しており、頭わりによる土地の再分配がときどきおこなわれたが、すこしも事態を変えなかった。土地を利用できたのは、共同体の成員で役畜、農具、種子をもっていたもの、つまり富裕な中農や富農だった。馬をもっていない農民、貧農や一般に経済力の弱い農民は、やむなく土地を富農にゆずり、自分では賃仕

事にでたり、日雇い農夫になったりした。農民共同体は、実際には富農の圧制をおおいかくす都合のいい形態であり、ツァー政府が連帯責任の原則によって農民から税金をまきあげるための便利な道具であった。だから、ツァー政府は、農民共同体に一指もふれなかったのである。こうした共同体を、社会主義の萌芽とか基礎とかとみなすのは、もちろんまったくばかげたことであった。

プレハーノフは、ナロードニキの第三のあやまった基本的な見解、つまり「英雄」、すぐれた人物とその思想が、社会の発展に最大の役割をはたすが、大衆、「群集」、人民、階級の役割はとるにたりないものだとみる見解をも、うちやぶった。プレハーノフは、ナロードニキを唯心論者だと非難し、正しいのは唯心論ではなくてマルクス・エンゲルスの唯物論であることを立証した。

プレハーノフは、マルクス主義的唯物論の観点を展開させ、論証した。かれはマルクス主義的唯物論の観点にしたがってつぎのことを証明した。社会の発展を決定するものはつまるところ、すぐれた人物の願望や思想などではなく、社会に現存する物質的条件の発展、社会の存続に必要な物質的財貨の生産様式の変化、物質的財貨の生産面での各階級の相互関係の変化、物質的財貨の生産と分配の面での役割と地位をめぐる階級間の闘争であることを立証した。思想が人びとの社会的経済的状態を決定するのではなく、人びとの社会的経済的状態が人びとの思想を決定するのである。もしもすぐれた人物の思想や願望が、社会の経済的発展と逆行し、先進的階級の要求に反するなら、こうしたすぐれた人物は無用のものになる。これに反し、もしすぐれた人物の思想と願望が、社会の経済的発展の要求、先進的階級の要求を正しくあらわしておれば、それはほんとうにすぐれた人物となる。

ナロードニキが、大衆を群集とみなして、英雄のみが歴史をつくりだし、群集を人民にかえることができると主張したとき、マルクス主義者はかれらに答えた。英雄が歴史をつくりだすのではなく、歴史が英雄をつくりだすのであり、つまり、英雄が人民をつくりだすのではなく、人民が英雄をつくりだし歴史をおしすすめるのである、と。英雄、すぐれた人物は、かれらが社会の発展条件を正しくつかみ、これらの条件をどのように改善するかを理解したとき、はじめて社会生活のなかで重要な役割をはたすことができるのである。英雄やすぐれた人物が、社会の発展条件を正しくつかむことができず、社会の歴史的要求にさからってすすみながら、歴史の「創造者」だと自負するなら、かれらは、笑止千万な無用のばかげた人物になってしまう。

ナロードニキとは、まさにこうしたばかげた英雄の部類にぞくするものである。

プレハーノフの著作、かれのナロードニキとの闘争は、革命的知識分子のあいだにあったナロードニキの影響を根本的にたたきこわした。しかし、ナロードニキ主義を思想上から粉砕することは、まだ不十分であった。マルクス主義の敵であるナロードニキ主義にとどめをさすという任務は、レーニンの肩にかかってきた。

「民衆の意志」党が壊滅すると、大多数のナロードニキは、ツァー政府にたいする革命的闘争をすぐにやめ、そして、ツァー政府との協調、妥協を説教しはじめた。八〇年代と九〇年代には、ナロードニキは富農の利益の代弁者にかわってしまった。

「労働解放団」は、ロシア社会民主主義者の綱領草案を二つつくった（第一の草案は一八八四年に、第二の草案は一八八七年だった）。これは、ロシアにおけるマルクス主義的社会民主党創立の準備にとって、ひじょうに重要な一歩であった。

しかし、「労働解放団」には、重大な誤りもあった。その第一の綱領草案には、まだナロードニキの見解の残りかすがあり、個人テロの戦術をうけいれていた。つぎに、プレハーノフは、プロレタリア階級が、革命の過程で農民をみちびいて前進することができるし、そうしなければならず、また農民との同盟によってのみ、ツァー制度にうちかつことができることを考慮しなかった。さらに、プレハーノフは、自由主義的ブルジョア階級を、もろいけれども革命に支持をあたえる勢力とみなしていたのに、農民については、一部の著作のなかで、それをまったく無視していた。たとえば、プレハーノフは、「反政府連合、あるいは革命連合がよりどころとできる社会的勢力は、わが国では、ブルジョア階級とプロレタリア階級のほかには、みあたらない。」(『プレハーノフ著作集』)とのべている。

プレハーノフのこれらの誤った見解こそ、かれのそのごのメンシェビキ的見解の芽ばえであった。

「労働解放団」も、当時のマルクス主義諸グループも、まだ労働運動と実際に結びついていなかった。それはまだ、マルクス主義の理論、マルクス主義の思想、社会民主主義の綱領原則が、ロシアでうまれ強固になっていく時期だった。一八八四年から一八九四年までの十年間、社会民主主義派は、まだ個々の小さいグループやサークルでしかなく、大衆的労働運動とは、まだ結びついていないか、ほんの少ししか結びついていなかった。当時の社会民主主義派は、まだ生まれでてはいないが、もう母親の体内で発育しつつある胎児に似て、レーニンがかいているように「胎内で発育している過程」にあった。

「労働解放団」は、「ただ理論上から社会民主主義を基礎づけ、労働運動にむかって第一歩をふみだしただけである」とレーニンは指摘している。

ロシアにおいて、マルクス主義と労働運動とを結びつけ、「労働解放団」のおかした誤りをただす任務は、レーニンによって解決されるのをまつほかなかった。

三、レーニンの革命活動の開始　ペテルブルグ「労働者階級解放闘争同盟」

ボリシェビズムの創始者ウラジミル・イリイッチ・レーニンは、一八七〇年にシンビルスク市（現在のウリヤノフスク市）に生まれた。一八八七年、レーニンは、カザン大学に学んだが、まもなく革命的学生運動にくわわったため捕えられ、退校処分にあった。レーニンは、カザンでフェドセーエフの組織したマルクス主義サークルに参加した。レーニンがサマラに転居すると、レーニンを中心にすぐにサマラに最初のマルクス主義者サークルがつくられた。その当時すでに、レーニンはマルクス主義を深く理解していることでみなを驚かせた。

一八九三年の末、レーニンは、ペテルブルグにうつった。レーニンがペテルブルグで最初におこなった数回の講演は、ペテルブルグのマルクス主義サークルに参加していた人びとに強烈な印象をあたえた。レーニンは、マルクスをひじょうに深く認識し、マルクス主義を当時のロシアの経済と政治の情勢に巧みに適用し、また労働者の事業がかならず勝利するという熱烈なかたい信念をもち、卓越した組織能力をもっていたが、これ

らすべてのことが、レーニンをペテルブルグのマルクス主義者のおしもおされもせぬ指導者にさせた。

レーニンは、かれが指導した諸サークルの先進的な労働者たちに心からしたわれた。

労働者バブーシュキンは、レーニンが労働者サークルで講義をしたときの模様を回想して「わたしたちのきいた講義は、ひじょうにいきいきとしてたいへん興味のあるものだった。みんなは、講義にすっかり満足し、講師の学識にいつも感服していた」と語った。

一八九五年、レーニンは、ペテルブルグのすべてのマルクス主義労働者サークル（当時こうしたサークルはすでにおよそ二十もあった）を「労働者階級解放闘争同盟」に統一した。こうして、レーニンは革命的マルクス主義的労働者党の創立を準備した。

レーニンは、大衆的労働運動とさらに密接に結びつき、それを政治的に指導していくことを、「闘争同盟」の任務とした。宣伝的サークルに集まった少数の先進的労働者にだけマルクス主義の宣伝をすることから、労働者階級の広範な大衆のなかで切実な政治的扇動をすることにうつっていくよう、レーニンは主張した。大衆的扇動活動へというこの転換は、ロシアの労働運動のその後の発展にとって、重要な意義をもっていた。

九〇年代は、産業の高揚の時期にあった。労働者の数は増加した。労働運動は強化された。一八九五年から一八九九年のあいだに、ストライキに参加した労働者の数は、きわめて不完全な統計によっても、二十二万千人をくだらなかった。労働運動は、全国の政治生活のなかで重要な勢力となった。マルクス主義者がナロードニキとの闘争でまもった見解、すなわち労働者階級が革命運動で先進的役割をはたすことができるという見解は、実際の生活そのものによって立証された。

レーニンの指導のもとで、「労働者階級解放闘争同盟」は、労働条件の改善、労働時間の短縮、賃金の引上げなどの経済的要求のための労働者の闘争を、ツァー制度にたいする政治闘争と結びつけた。「闘争同盟」は、政治的に労働者を教育した。

レーニンの指導のもとで、ペテルブルグの「労働者階級解放闘争同盟」は、ロシアではじめて社会主義と労働運動とを結びつけはじめた。ある工場でストライキが起きると、「闘争同盟」は、自分たちのサークル員をつうじて企業の状況をよくつかんでいるので、すぐにビラや社会主義的檄文を刷ってくばり、これに呼応した。これらのビラには、工場主による労働者虐待の事実が暴露され、労働者が自己の利益のためにどのように奮闘すべきかがかかれ、労働者の要求がかかげられていた。これらのビラには、資本主義の害悪、労働者の生活の貧困、毎日十二時間から十四時間におよぶ途方もなくきつい労働、労働者の無権利な状態などの実状が、あますところなく暴露されていた。同時に、これらのビラには、適切な政治的要求がうちだされていた。一八九四年末、レーニンは、労働者バブーシュキンの参加のもとで、ペテルブルグのセミヤンニコフ工場のストライキ労働者にあてて、はじめてこの種の扇動ビラとよびかけをかいた。一八九五年の秋、レーニンは、ソーントン工場のストライキ中の男女労働者によびかけたビラをかいた。この工場は、イギリスの資本家が経営していたもので、巨万の利益をあげていた。ここでは、労働時間は十四時間以上におよんだが、織物工の毎月のかせぎは、約七ルーブルにすぎなかった。ストライキの結果は、労働者の勝利におわった。短期間に、「闘争同盟」は、各種の工場の労働者にむけてこの種のビラやよびかけを何十種も刷ってくばった。どのビラも、労働者の意気を大いにたかめた。労働者は、社会主義者が自分たちをたすけ、守っていることを知った。

一八九六年の夏、「闘争同盟」の指導のもとでペテルブルグの紡績労働者三万人の大ストライキがおこった。おもな要求は、労働時間の短縮であった。このストライキの圧力で、ツァー政府は、一八九七年六月二日に、労働時間を十一時間半に制限する法律を公布せざるをえなかった。この法律がでるまえは、労働時間は一般に制限されていなかった。

一八九五年十二月、レーニンはツァー政府によって捕えられた。しかし、レーニンは、監獄のなかでも革命闘争をやめなかった。レーニンは、いろいろな意見や指示をだして「闘争同盟」を援助し、獄中から自分のかいた小冊子やビラを送った。レーニンは、獄中で『ストライキについて』という小冊子と、ツァー政府の暴虐な圧政をあますところなく暴露した『ツァー政府にあたう』というビラをかいた。同時にまた、レーニンは獄中で党綱領草案をかきあげた（かれは、医学書の行間に牛乳でかいた）。

ペテルブルグの「闘争同盟」が力強い刺激となって、ロシアのそのほかの都市や地方でも労働者サークルがこうした同盟に合同していった。九〇年代のなかごろ、後カフカズにマルクス主義の団体がつくられた。一八九四年、モスクワにモスクワ「労働者同盟」が組織された。九〇年代の末に、シベリアにシベリア「社会民主主義同盟」が組織された。九〇年代には、イワノボ・ボズネセンスク、ヤロスラブリ、コストロマなどにマルクス主義のグループが生まれ、のちにこれらのグループは、「社会民主党北部同盟」に統一された。九〇年代の後半には、ドン河畔のロストフ、エカチェリノスラフ、キエフ、ニコラエフ、トゥーラ、サマラ、カザン、オレホボ・ズーエボ、その他の都市にも、社会民主主義のグループや同盟が結成された。

ペテルブルグの「労働者階級解放闘争同盟」の意義は、レーニンがのべたように、それは労働運動に依拠し

た革命政党の最初の重要な芽ばえだったということにある。

レーニンは、のちにロシアにマルクス主義的社会民主党を創設する仕事のなかで、一貫してペテルブルグ「闘争同盟」の革命的経験をよりどころにした。

レーニンとそのもっとも親しい戦友が捕えられたあと、ペテルブルグ「闘争同盟」の指導部の顔ぶれは大いにかわった。新しい人物があらわれ、自分たちを「若もの連中」と称し、レーニンやその戦友を「年寄り連中」とよんだ。かれらは、誤った政治路線を歩みはじめた。かれらは、もっぱら工場主にたいする経済闘争だけをすすめるよう労働者によびかければいいし、政治闘争は自由主義ブルジョア階級のやることで、政治闘争の指導権は自由主義ブルジョア階級にある、と主張した。

このような人びとが、「経済主義者」とよばれるようになった。

それは、ロシアのマルクス主義組織のなかに最初にあらわれた協調主義的、日和見主義的なグループであった。

四、ナロードニキと「合法マルクス主義」にたいするレーニンの闘争　レーニンの提起した労働者階級と農民の同盟の思想　ロシア社会民主労働党第一回大会

すでに八〇年代に、プレハーノフがナロードニキの見解の体系に重大な打撃をあたえたが、ナロードニキの

見解は、九〇年代の初期には、まだ一部の革命的青年のあいだで共鳴をえていた。一部の青年は、ロシアは資本主義発展の道を通らずにすむし、また、将来の革命で主要な役割をはたすのは、労働者階級でなくて、農民だとあいかわらず考えていた。ナロードニキの残党は、ロシアにおけるマルクス主義の普及をあらゆる手をつかってさまたげ、マルクス主義者を攻撃し、いろいろと誹謗することにつとめた。それで、マルクス主義思想のいっそうの普及をはかり、社会民主党創立を可能にするために、思想上からナロードニキ主義を徹底的に粉砕することが必要であった。

この任務は、レーニンによってなしとげられた。

レーニンは、『「人民の友」とはなにか、そしてかれらはどのように社会民主主義者とたたかっているか?』（一八九四年）という著書のなかで、「人民の友」だとみせかけ、実は人民の敵であるナロードニキの正体を徹底的に暴露した。

九〇年代のナロードニキは、実際にはとっくにツァーリ政府にたいするいっさいの革命闘争をすてさっていた。自由主義的なナロードニキは、ツァーリ政府との協調妥協を宣伝普及した。レーニンは、当時のナロードニキについて論じたときつぎのようにのべた。「この政府にできるかぎり丁重におねがいしさえすれば、政府が万事よろしくやってくれる、とかれらはひたすら考えていた」（『「人民の友」とはなにか』）。

九〇年代のナロードニキは、農村の状態、農村の階級闘争、富農の貧農にたいする搾取をわざと一切抹殺して、富農経営の発展を讃美した。かれらは、実際には富農の利益の代弁者になった。

同時に、ナロードニキはまた、自分たちの雑誌でマルクス主義者をさかんに攻撃した。ナロードニキは、ロ

シアのマルクス主義者の見解をわざと歪曲し、白を黒といいなし、マルクス主義者が農村の破産をのぞんでいるとか、「農民を一人ひとり工場のボイラーで煮つめよう」としている、とか、といいくるめようとした。レーニンは、ナロードニキのこうしたまちがった批判を暴露して、問題はマルクス主義者の「願望」にあるのではなく、ロシアでは資本主義の発展が実際に進んでいる点であり、この過程のなかでプロレタリア階級の数は必然的にふえる、そして、プロレタリア階級は資本主義制度の墓掘人になるであろう、と指摘した。

レーニンは、資本家と地主の抑圧を絶滅し、ツァー制度の絶滅をねがっている真の人民の友は、ナロードニキではなくて、マルクス主義者である、と指摘した。

レーニンは、『「人民の友」とはなにか』という著書のなかで、労働者階級と農民の革命的同盟が、ツァー制度をくつがえし、地主、ブルジョア階級を打倒する主要な手段であるという思想を、はじめて提起した。

レーニンは、この時期にかいた多くの著作のなかで、ナロードニキの主要なグループである「民衆の意志」派が用い、その後またナロードニキの継承者である社会革命党員が用いたナロードニキの政治闘争手段、とりわけ個人テロ戦術を非難した。レーニンは、こうした戦術は、個々の英雄の闘争をもって、大衆の闘争にすりかえるものだから、革命運動に有害だと考えた。こうした戦術は、人民の革命運動にたいする不信を意味した。

レーニンは、『「人民の友」とはなにか』という著書のなかで、ロシアのマルクス主義者の基本的任務をきめた。レーニンの意見によれば、ロシアのマルクス主義者はなによりもまず、分散しているマルクス主義諸グループを、単一の社会主義的労働者党に組織しなければならなかった。さらにレーニンはまた、ロシアの労働者階級こそ農民と同盟を結んで、ツァーの専制制度をくつがえすことができ、そのあとロシアのプロレタリア階

級は勤労者および被搾取大衆と同盟を結び、諸外国のプロレタリア階級と肩をならべ、公然たる政治闘争のまっすぐの道にそって勝利にかがやく共産主義革命に向かうことができるであろう、と指摘した。

このように、レーニンは、すでに四十年以上もまえに、労働者階級の闘争の道をただしくさししめし、労働者階級の役割を社会の先進的な革命勢力と規定し、農民の役割を労働者階級の同盟者と規定した。

レーニンとその擁護者がナロードニキ主義との闘争をすすめた結果、すでに九〇年代にナロードニキ主義は思想的には決定的に粉砕された。

「合法マルクス主義」にたいするレーニンの闘争も、きわめて大きな意義をもっていた。歴史のうえでつねにみられるように、大きな社会運動には、一時的な「同伴者」がいつもまぎれこんでくるものである。いわゆる「合法マルクス主義者」なるものも、こうした「同伴者」であった。ロシアでは、マルクス主義がひろく普及されるようになった。それで、ブルジョア階級の知識分子は、マルクス主義の衣をまといはじめた。かれらは、よく合法的な、すなわちツァー政府の許可した新聞や雑誌に自分たちの論文を発表した。それで、かれらは「合法マルクス主義者」とよばれるようになった。

かれらも、かれら流にナロードニキに反対する闘争をすすめた。しかし、かれらの目的は、この闘争とマルクス主義の旗を利用して、ブルジョア社会の利益とブルジョア階級の利益に労働運動を服従させ、順応させることにあった。かれらは、マルクス学説のなかからもっとも主要なもの、すなわちプロレタリア革命についての学説、プロレタリア階級独裁についての学説をすてさった。合法マルクス主義者としてもっとも知られているピョートル・ストルーベは、ブルジョア階級をさかんに賛美し、資本主義にたいする革命闘争をすすめるか

わりに「われわれの非文明性を認めて資本主義に見習うべきだ」とよびかけた。
レーニンは、ナロードニキ反対の闘争では、「合法マルクス主義者」と一時的な協定を結んで、かれらをナロードニキ反対のために利用する、たとえば共同でナロードニキ反対の論文集を出版する、ことは許されるものと考えた。しかし、レーニンは同時にまた、「合法マルクス主義者」をきわめて痛烈に批判し、自由主義的ブルジョア階級としてのかれらの本質を暴露した。
のちに、これらの「同伴者」の多くは、立憲民主党〔カデット〕(ロシアのブルジョア階級の主要な政党)の党員となり、国内戦争の時期には狂信的な白衛派になりさがった。
ペテルブルグ、モスクワ、キエフなどの「闘争同盟」のほかに、ロシア西部の各民族地区にも、社会民主主義の組織がうまれた。九〇年代には、マルクス主義分子がポーランド民族主義党から分れて、「ポーランド・リトアニア社会民主党」を結成した。九〇年代の末には、ラトビアのいくつかの社会民主主義の組織がつくられた。一八九七年十月には、ロシアの西部諸県にユダヤ人社会民主主義総同盟(略称ブンド)が成立した。
一八九八年に、いくつかの「闘争同盟」、すなわちペテルブルグ、モスクワ、キエフ、エカチェリノスラフなどの「闘争同盟」とブンドとが、一つの社会民主党に統一する最初の試みがおこなわれた。そのために、一八九八年三月にミンスクで、ロシア社会民主労働党第一回大会がひらかれた。
ロシア社会民主労働党第一回大会に出席したのは、全部で九人だった。レーニンは、当時シベリアに流刑になっていたので、この大会には参加しなかった。大会で選出された党中央委員会は、まもなく検挙された。大会の名で発表された『宣言』は、まだおおくの点で満足できないものであった。『宣言』は、プロレタリア階

級の政治権力奪取の任務をぬかしており、プロレタリア階級の指導権の問題にまったくふれておらず、ツァー制度とブルジョア階級にたいする闘争でのプロレタリア階級の同盟者の問題も、ぬかしていた。
大会は、その決議と『宣言』のなかで、ロシア社会民主労働党の創立を宣言した。
ロシア社会民主労働党第一回大会の意義は、大会という正式の手続きをとることによって、大きな革命的宣伝の役割を演じたという点にある。
第一回大会はひらかれたが、ロシアのマルクス主義的社会民主党は、実際には、まだ樹立されていなかった。この大会は個々のマルクス主義的諸サークルや諸団体を統一し、これらを組織的に一つに結びつけることはできなかった。各地方組織の活動にはまだ統一した方針がなく、党の綱領や規約もなく、単一の中央部からの指導もなかった。
こうしたことやその他の多くの原因によって、各地方組織内の思想的混乱がひどくなりはじめ、その結果、労働運動内で日和見主義的潮流である「経済主義」を強める好適な条件をあたえてしまった。
レーニンとかれが組織した新聞『イスクラ〔火花〕』の多年にわたる緊張した活動によって、はじめてこうした混乱は克服され、日和見主義の動揺思想がうちやぶられ、ロシア社会民主労働党創立の基礎がととのえられたのであった。

五、「経済主義」にたいするレーニンの闘争　レーニンの新聞『イスクラ』の誕生

レーニンは、ロシア社会民主労働党第一回大会に出席しなかった。レーニンは、そのときシベリアの流刑地にいた。つまり、「闘争同盟」事件でペテルブルグにながく投獄されたあと、ツァー政府によって追放されたシュシェンスコエ村にいたのである。

しかし、レーニンは流刑地でも革命活動をつづけた。レーニンは、流刑地できわめて重要な科学的著作『ロシアにおける資本主義の発展』をかきあげ、思想的にナロードニキ主義を粉砕する仕事をやりとげた。レーニンはまた、そこで『ロシア社会民主主義者の任務』という有名な小冊子をかいた。

当時レーニンは、直接の革命的実際活動ときりはなされていたが、つねに実際活動家とはなんらかの連絡をたもち、流刑地から文通して、種々の状況をきき、いろいろな意見をだしてかれらをたすけた。当時レーニンがとくに関心をもっていたのは、「経済主義者」の問題であった。「経済主義」が協調主義、日和見主義の基礎となるものであり、「経済主義」が労働運動で勝利することは、プロレタリア階級の革命運動の破壊とマルクス主義の敗北を意味することを、レーニンはだれよりもよく知っていた。

だからレーニンは、「経済主義者」があらわれた最初の日から、かれらに猛烈な攻撃を開始したのである。

「経済主義者」は、労働者は経済闘争だけをやるべきで、政治闘争は自由主義的ブルジョア階級にまかせ、労働者は自由主義的ブルジョア階級を支持すべきだと主張していた。レーニンは、「経済主義者」のこうした主張は、マルクス主義を裏切るものであり、労働者階級の独自の政党の必要性を否定するものであり、労働者階級をブルジョア階級の政治的付属物にかえようとするものである、とみなした。

一八九九年、「経済主義者」の一グループ（あとで立憲民主党員になりさがったプロコポビッチ、クスコワ

その他）が、かれらの宣言を発表した。かれらは、公然と革命的マルクス主義に反対し、そして、プロレタリア階級独自の政党の樹立を放棄すること、労働者階級独自の政治的要求を放棄することを要求した。「経済主義者」は、政治闘争は自由主義的ブルジョア階級のやることで、労働者は工場主にたいする経済闘争をやるだけで十分だと主張した。

レーニンは、この日和見主義の文書をよむと、すぐに近くの各地に流刑になっていたマルクス主義者を集めて会合をひらいた。そして、レーニンをはじめとする十七人の同志は、「経済主義者」の見解を暴露したはげしい抗議文を採択した。

レーニンの起草したこの抗議文は、全ロシア各地のマルクス主義組織のあいだにつたわり、ロシアにおけるマルクス主義思想とマルクス主義党の発展のために大きな意義をもたらした。

ロシアの「経済主義者」が宣伝普及した見解は、外国の社会民主党内でマルクス主義に反対したいわゆるベルンシュタイン派、すなわち、日和見主義者ベルンシュタインの信奉者たちの宣伝普及した見解でもあった。それで、「経済主義者」にたいするレーニンの闘争は、同時に国際的日和見主義にたいする闘争でもあった。

「経済主義」に反対し、プロレタリア階級の独自の政党を樹立する闘争は、主として、レーニンの組織した非合法新聞『イスクラ』によっておこなわれた。

一九〇〇年のはじめ、レーニンとその他の「闘争同盟」員が、シベリアの流刑地からロシア（ヨーロッパ部）にかえってきた。レーニンは、マルクス主義の大規模な全ロシア的非合法新聞の創刊を決意した。当時ロ

シアには、おおくの小さいマルクス主義のサークルや団体があったが、しかし相互にまだ連絡がなかった。当時は、スターリン同志がのべたように「手工業的なやり方とサークル主義とが上から下まで党をむしばんでおり、思想上の混乱が党内生活の特徴となっていた」時であった。だから全ロシア的非合法新聞の創刊は、ロシアの革命的マルクス主義者の基本的任務であった。このような新聞だけが、個々ばらばらになっているマルクス主義組織の連絡をとり、真の党の樹立を準備することができたのである。

しかし、こうした新聞を、ツァー・ロシア内で発行することは、警察の追求のためにできなかった。一、二ヵ月もたてば、新聞は、ツァーのスパイによって嗅ぎつけられ、つぶされてしまうに違いなかった。それで、レーニンは、国外でこの新聞を発行することをきめた。この新聞は、もっともうすい丈夫な紙で国外において印刷され、秘密にロシア国内に送りこまれた。『イスクラ』の何号かは、ロシア国内のバクー、キシニョフ、シベリアなどの秘密印刷所で複製したこともあった。

一九〇〇年の秋、レーニンは、国外にいき「労働解放団」の同志たちと全ロシア的政治新聞の創刊について話合った。この考えは、レーニンが流刑中に、ひじょうにこまかく、慎重に計画したのであった。レーニンは、流刑からの帰途、ウファ、プスコフ、モスクワ、ペテルブルグなどで、この問題についてなんどか会合をひらいた。いたるところで、レーニンは、いつも同志たちと、秘密通信の暗号や、印刷物の宛先その他について打合せ、また将来の闘争の計画について討議した。

ツァー政府は、レーニンという人物がかれらのもっとも危険な敵だということをさとった。ツァーの保安課員である憲兵ズバトフは、秘密の報告書に「いま革命のなかでウリヤノフ（レーニン）以上の大人物はいな

い」と書いており、だから、かれは、なんとかしてレーニンを暗殺しなければならないと主張した。（訳注：保安課は、革命運動取締のためツァー政府がもうけた秘密警察）

レーニンは、国外にいくと、「労働解放団」、すなわち、プレハーノフ、アクセリロード、ベ・ザスリッチらと『イスクラ』の共同発行について話しあった。発行の全計画は、レーニンが一から十まできめた。

一九〇〇年十二月、『イスクラ』紙の創刊号が国外で発行された。新聞の題字の下には、「一点の火花も燃えあがる焔となる」という格言（題詞）が書かれていた。この言葉は、十二月党員〔デカブリスト〕が、かれらのシベリア追放に挨拶をおくった詩人プーシキンにあてて書いた返事のなかからとったものである。（訳注：十二月党員は、貴族出身の革命家で、一八二五年十二月、ツァー政府と農奴制度に反対して蜂起したので、この名がうまれた）

はたせるかな、レーニンの点火した「火花」は、そのごほんとうに偉大な革命の焔となって燃えあがり、貴族・地主のツァー制度とブルジョア階級の権力を焼きつくして灰にしてしまった。

要約

ロシアのマルクス主義的な社会民主労働党は、なによりもまず、ナロードニキ主義との闘争、ナロードニキ主義の誤った、革命事業にとって有害な見解との闘争のなかで創立された。

思想的にナロードニキの見解をうちやぶってはじめて、ロシアにおいてマルクス主義的な労働者党を樹立するための地盤を切りひらくことができた。一九世紀の八〇年代に、プレハーノフとその「労働解放団」は、ナロードニキ主義に決定的な打撃をくわえた。

レーニンは、九〇年代に、ナロードニキ主義を思想的に粉砕する任務をはたし、ナロードニキ主義を徹底的にうちやぶった。

一八八三年に創立された「労働解放団」は、マルクス主義をロシアに普及させるうえでひじょうに多くの活動をやりとげた。それは、理論上から社会民主主義の基礎をきずき、労働運動にむかって第一歩をふみだした。

ロシアの資本主義の発展につれて、産業プロレタリア階級の数は急速にふえた。八〇年代のなかごろには、労働者階級は、組織された闘争の道にはいり、組織されたストライキによって大衆をたちあがらせる道にはいった。しかし、当時のマルクス主義の諸サークル、諸グループは、ただ宣伝にたずさわるだけであって、労働者階級のなかにはいって大衆的扇動をおこなうやりかたにうつることが目的に適っていることを理解していなかった。だから、かれらは、労働運動との実際の結びつきがなく、労働運動を指導していなかった。

ペテルブルグの「労働者階級解放闘争同盟」（一八九五年）は、労働者のあいだで大衆的扇動をおこない、大衆のストライキを指導したが、この同盟がレーニンによって結成されたことは新しい段階を意味した。すなわち、労働者のあいだで大衆的扇動をおこなうやり方への移行、マルクス主義と労働運動との結合、という新しい段階をきりひらいたことを意味した。ペテルブルグの「労働者解放闘争同盟」は、ロシアにおける革命的

プロレタリア階級政党の最初の芽ばえであった。ペテルブルグの「闘争同盟」が結成されたあと、おもな工業中心地や各辺境地区にも、マルクス主義の組織が創設された。

一八九八年、マルクス主義的な社会民主主義の諸組織を一つの党に統一しようとする最初の試みが、成功はしなかったが、おこなわれた。つまり、ロシア社会民主労働党第一回大会がひらかれた。しかし、この大会では党を創立するにいたらなかった。それは、まだ党の綱領や規約をきめなかったし、単一中央部からの指導もなかったし、個々のマルクス主義的諸サークル、諸グループのあいだにはほとんどなんらの連絡もなかったからである。

個々ばらばらのマルクス主義諸組織を一つの党に統一し、結合させるために、レーニンは、革命的マルクス主義者の最初の全ロシア的新聞『イスクラ』を創刊する計画をたて、それを実現した。

この時期に単一の労働者政党創立に反対した主要な敵は、「経済主義者」であった。かれらは、こうした党の必要性を否定した。かれらは、個々のグループの分散状態と手工業的やり方を支持した。レーニンとかれの創刊した『イスクラ』は、とくに「経済主義者」に砲火を集中した。

『イクラ』の最初の数号（一九〇〇年から一九〇一年のあいだ）を発行したことは、新しい時期、つまり個々ばらばらだったグループやサークルを、単一のロシア社会民主労働党に、実際に組織していく時期への移行を意味した。

第二章　ロシア社会民主労働党の成立。党内におけるボリシェビキ派とメンシェビキ派の出現

（一九〇一年—一九〇四年）

一、一九〇一年から一九〇四年にいたるロシア革命運動の高揚

一九世紀の末、ヨーロッパに産業恐慌が勃発した。この恐慌は、たちまちロシアに燃えひろがった。恐慌の期間に（一九〇〇年から一九〇三年まで）倒産した大小の企業は、ほぼ三千にたっした。街頭に投げだされた労働者は、十万余人をかぞえた。工場に残った労働者の賃金も、大幅に切り下げられた。労働者がさきにねばりづよい経済ストで資本家からかちとったわずかな譲歩も、いまやふたたび資本家に奪いかえされた。

産業恐慌と失業は、労働運動をおしとどめもしなかったし、弱めもしなかった。それとは反対に、労働者の闘争はますます革命性をもつようになった。労働者は、経済ストから政治ストへと移りはじめた。最後には、労働者はデモ行進をおこない、民主的自由の政治的要求をかかげ、「ツァー専制制度打倒」のスローガンをう

ちだすにいたった。

一九〇一年、ペテルブルグのオブホフ兵器廠でおきたメーデーのストは、労働者と軍隊の流血の衝突に発展した。労働者たちは、石と鉄片だけで、ツァーの武装した軍隊に立ちむかった。労働者たちの頑強な抵抗は、撃破された。ついで、残酷な懲罰がくわえられた。およそ八百人の労働者が捕えられ、多くのものが牢獄にぶちこまれ、懲役に処せられた。しかし、英雄的な「オブホフ防衛戦」は、ロシアの労働者にきわめて大きな影響をあたえ、労働者のあいだに同情の波をまきおこした。

一九〇二年三月、バツーミ労働者の大規模なストとデモがおきた。それは、バツーミ社会民主党委員会が組織したものであった。バツーミのデモは、後カフカズの労働者、農民をふるいたたせた。

同じ一九〇二年、ドン河畔のロストフでも大がかりなストライキがおきた。はじめにストライキにはいったのは鉄道労働者で、つづいて多くの工場の労働者がこれにくわわった。ストライキは全労働者をふるいたたせた。市外で数日間つづいた大衆集会には、三万にのぼる労働者が参加した。これらの大衆集会では、社会民主党の宣言が読みあげられ、多くの人たちが演説した。警察やコサック軍も、何万という大衆の参加した労働者集会をけちらす力はなかった。数人の労働者が警官によって殺されると、翌日の葬儀には大がかりな労働者のデモがおこなわれた。ツァー政府は近くの都市から多数の軍隊を出動させて、やっとこのストライキを鎮圧することができた。ロストフの労働者の闘争を指導したのは、ロシア社会民主労働党ドン川地区委員会である。

一九〇三年のストライキ運動は、いっそう大規模なものとなった。この年には、南部で大衆的な政治ストがおき、後カフカズ一帯（バクー、チフリス、バツーミ）やウクライナの大都市（オデッサ、キエフ、エカチェ

リノスラフ）にひろがった。ストも、ますます頑強で、組織的なものになった。これまでの労働者階級の行動とはちがって、いまではほとんどいたるところで、労働者の政治闘争を社会民主党委員会が指導するようになった。

ロシアの労働者階級は、ツァー権力にたいする革命闘争にたちあがった。

労働運動は、農民に影響をあたえた。一九〇二年の春と夏には、ウクライナ（ポルタワ県とハリコフ県）やボルガ川一帯で農民運動がおこった。農民は、地主の家屋に火をつけて焼きはらい、地主の土地を奪いとり、憎しみのまとだった地方行政長官や地主を殺害した（訳注・地方行政長官とは、ツァー政府が貴族のなかから任命した地方長官で、警察権、行政権、司法権を一手ににぎっていた）。政府は、軍隊を出動させて、これらの蜂起した農民に発砲し、おびただしい数の農民を捕え、農民の指導者や組織者をたくさん牢獄にぶちこんだが、しかし、革命的な農民運動はひきつづきもりあがっていった。

労働者と農民が革命に立ちあがったことは、ロシアの革命が日ましに成熟し、近づいていることを物語っていた。

学生の反政府運動も、労働者の革命闘争の影響のもとで強まった。政府は、学生のデモとストに対抗して、大学を閉鎖し、数百の学生を投獄し、最後には、屈服しない学生を兵役にとることまで考えた。政府のこうしたやりかたにこたえて、全国の各大学の学生は、一九〇一年から一九〇二年にかけて冬にゼネストをおこなった。このストには、三万人が参加した。

労働者と農民の革命運動、とくに学生にたいする政府の弾圧によって、自由主義的資本家と、いわゆる地方

自治会〔ゼムストボ〕を牛耳っていた自由主義的地主たちも、やむなく行動をおこし、大学で勉強中のかれらのむすこを弾圧したツァー政府の「ゆきすぎ」に「抗議」せざるをえなくなった。

地方自治派の自由主義分子は、地方自治会をかれらの拠点としていた。地方自治会とは、村の住民にかかわりのある純然たる地方的事務（道路の敷設や病院、学校の建設）を管理する地方管理機構であった。自由主義的地主は、地方自治会で大きな勢力をもっていた。かれらは、自由主義的資本家と密接な連係をもっており、ほとんど一体となっていた。それらは、かれらが自分たちの所有地を、半農奴制的経済から、いっそう有利な資本主義経済に移しはじめていたからである。この二つの自由主義グループは、もちろん、ツァー政府を擁護していたが、同時に、ツァー政府の「ゆきすぎ」には反対していた。こうした「ゆきすぎ」が革命運動を強めることをおそれていたからである。かれらは、ツァー政府の「ゆきすぎ」をおそれていたが、それよりもっと革命をおそれていた。自由主義派がツァー政府の「ゆきすぎ」に抗議したのには、一石二鳥のねらいがあった。その一つは、ツァーを「啓蒙」することである。その二は、ツァー政府にたいする「大きな不満」というレッテルを自分にはって、人民の信頼をかちとり、人民あるいは一部人民を革命からひきはなして、革命を弱めることである。

たしかに、地方自治派の自由主義運動は、ツァー制度の存在にとってなんの危険ももたらしはしなかった。だが、それにしても、この運動は、やはりツァー制度の「永遠」の支柱が、あまりおもわしくなっていることを示すきざしではあった。

地方自治派の自由主義運動の結果、一九〇二年に、ブルジョア階級の「解放団」〔オスボボジュデェニエ〕

がつくられた。この「解放団」は、のちにロシアのおもなブルジョア政党、つまり立憲民主党の中核となった。

ツァー政府は、労働者と農民の運動が日ごとにおそろしい勢いで全国にもえひろがるのをみて、なんとか革命運動を阻止しようと必死になった。労働者のストやデモにたいして、ますます頻繁に武力がつかわれるようになった。銃弾や鞭は、立ちあがった労働者と農民にたいするツァー政府の常套の報復手段となり、監獄や流刑地はいっぱいになった。

ツァー政府は、弾圧の強化のほかに、弾圧の性格をもたないかなり「柔軟な」方法もつかって、労働者を革命運動からひき離そうとした。かれらは、憲兵や警察の保護のもとにニセの労働者組織をつくろうとした。こうした組織は、当時、「警察社会主義」の組織、あるいはズバトフ組織（この警察的労働者組織をつくった憲兵大佐ズバトフの名をとった）とよばれた。ツァーの保安課は、自分たちの手先をつかって、ツァー政府は労働者に援助をあたえて、経済的要求をかちとらせる用意があるかのように思いこませようとした。ズバトフ分子は、「ツァー自身が労働者の側に立っているのに、君たちはなぜ政治活動をしたり、革命をやったりするのか」などと労働者にいった。ズバトフ分子は、いくつかの都市に自分たちの組織をつくった。一九〇四年、司祭ガポンも、ズバトフの組織をみならい、同じような目的で、「ペテルブルグ・ロシア工場労働者会議」という組織をつくった。

しかし、労働運動を取締ろうとしたツァー保安課のこのたくらみは、成功しなかった。ツァー政府は、日ましにもりあがる労働運動にこうした方法で対抗することはできなかった。ひきつづきもりあがっていく労働者

階級の革命運動は、こうした警察組織をその行く手から一掃してしまったのである。

二、レーニンのマルクス主義党建設の計画　「経済主義者」の日和見主義的立場　レーニンの計画のための『イスクラ』の闘争　レーニンの著書『なにをなすべきか？』　マルクス主義党の思想的基礎

一八九八年にロシア社会民主党第一回大会がひらかれ、党の成立を宣言したにもかかわらず、党はやはり創立されてはいなかった。党の綱領も規約もなかった。第一回大会で選出された党の中央委員会は検挙され、それきり再建されなかった。再建に手をつけるものが全くいなかったからである。それだけでなく、第一回大会のあと、党内の思想的混乱と組織的分散性がいよいよひどくなった。

一八八四年から一八九四年までは、ナロードニキ主義にうちかって、思想的に社会民主党の創立を準備した時期、一八九四年から一八九八年までは、個々のマルクス主義的組織を社会民主党に統一しようと試みた——失敗の試みではあっても——時期とするなら、一八九八年以後の時期は、党内の思想、組織的乱脈がいっそうひどくなった時期ということができる。マルクス主義のナロードニキ主義にたいする勝利と、労働者階級の革命的行動によって、マルクス主義者の正しさが立証されたため、革命的青年はマルクス主義にますます共鳴す

るようになった。マルクス主義は、一種の流行となった。このため、知識界の多くの革命的青年が、ぞくぞくとマルクス主義の組織にくわわった。かれらは、理論にとぼしく、組織的、政治的な経験もなく、ただそのころ出版界にあふれていた「合法マルクス主義者」の日和見主義的な文献のなかから、マルクス主義についてのあいまいな、大部分が正しくない観念をいくらか頭にいれていただけであった。そのため、マルクス主義的組織は理論的、政治的水準が低下し、内部に「合法マルクス主義的」日和見主義の気分がはいりこみ、思想的な混乱、政治的な動揺、組織的な乱脈がいっそうひどくなった。

労働運動がますますもりあがり、革命の時機があきらかに近づいていたため、革命運動を指導できる統一した集中的な労働者階級の政党を創立することが要求されていた。しかし、党の各地方機関や各地方委員会、団体、グループが、きわめてなげかわしい状態にあったし、その組織的分散性と思想的混乱もひじょうにひどかったので、こうした党を創立する任務ははなはだ困難なものになっていた。

この困難は、組織のすぐれた活動家がツァー政府によってつねにとらえられ、流刑、監獄、徒刑場におくられていたような、ツァー政府の残酷な迫害のあらしのなかで党建設をすすめなくてはならないというこの点だけにあったのではない。その困難はまた、当時の大部分の地方委員会とその活動家が、その地方のせまい実際的な仕事のほかはなにも知ろうとせず、党の組織的、思想的統一がかけているための弊害を理解せず、党の組織的分散性と思想的混乱になれてしまい、統一的集中的な政党がなくてもやっていける、と考えたというこの点にもあった。

集中的な政党をつくるためには、地方機関のこうした立ちおくれ、沈滞、せまい事務主義を一掃しなくては

ならなかった。
しかし、それだけではなかった。当時、党内には、ロシアには『ラボーチャヤ・ムィスリ』〔労働者の思想〕、国外には『ラボーチェエ・デーロ』〔労働者の事業〕というそれぞれの機関紙誌をもった大きな一団があって、党の組織的分散性と思想的混乱を理論的に弁護し、しばしばこうした状態を賛美さえし、統一的、集中的な労働者階級の政党を創立することは不必要で、観念的な課題であるとみなしていた。
これは、「経済主義者」とその追随者たちであった。
統一的なプロレタリア階級の政党を創立するには、なによりもまず「経済主義者」を粉砕しなければならなかった。
これらの任務の遂行と労働者階級政党の建設にとりかかったのが、レーニンである。
統一的な労働者階級政党の建設をなにからはじめるべきかという問題については、いろいろ違った意見があった。一部の人たちは、党の建設は、第二回党大会の召集からはじめるべきだ、それによって、各地方組織を統一し、党を創立することができる、と考えた。しかし、レーニンはこうした意見に反対した。レーニンは、つぎのように考えた——大会を召集するまえに、党の目的と任務の問題をはっきりさせる必要がある。われわれが建設しようとしているのはどんな党であるかを明確にする必要がある。「経済主義者」と思想的に一線を画す必要がある。党の目的と任務について二つの異なる意見、すなわち「経済主義者」の意見と革命的社会民主主義者の意見があることを、率直に、公然と党につげる必要がある。「経済主義者」がその機関紙でかれら自身の観点を宣伝しているように、われわれもまた革命的社会民主主義の観点を出版物で広範に宣伝する必要

がある。各地方組織がこの二潮流の一つを意識的に選べるようにさせる必要がある。こうした必要な準備をしたあと、はじめて党大会を召集することができる――レーニンはこう考えた。

レーニンは、きっぱりといった。

「統一するまえに、そして統一するためには、なによりもまず断固として、はっきりと境界線をひく必要がある。」（レーニン『なにをなすべきか？』）

だから、レーニンは、労働者階級の政党をうちたてるには、革命的社会民主主義の観点を宣伝、扇動する全ロシア的戦闘的政治新聞を創刊することからはじめるべきで、こうした新聞の創刊こそ、党建設の第一歩でなければならない、と考えた。

レーニンは、その有名な論文『なにからはじめるべきか？』で党建設の具体的な計画をたて、そのご、名著『なにをなすべきか？』でさらにそれを発展させた。

レーニンは、その論文でつぎのようにのべている。

「われわれの意見によれば、全ロシア的政治新聞の創刊は、活動の出発点となり、われわれが望んでいる組織の創立(党創立のことである――編者注)への実践的第一歩となり、そして最後には、われわれがこの組織をたえず発展、深化、拡大させることのできる基本的な糸口となるものである。……この新聞がなくては、原則的に一貫した全面的な宣伝と扇動を、系統的にすすめることはできない。こうした宣伝と扇動は、社会民主派の一般の経常的な主要な任務であり、現在においてはとくに切実な任務である。なぜなら、現在は最も広範な住民層が、政治や社会主義の諸問題に興味をよびさまされているから

である。」（レーニン『なにをなすべきか？』）

レーニンは、こうした新聞は、党を思想的に団結させる手段となるばかりでなく、各地方組織を組織的に統一する手段ともなる、と考えた。この新聞の代理員網と通信員網は、各地方組織の代表であるから、党をその周囲に組織的に統一する骨幹となる。なぜなら、レーニンものべているように

「新聞は、集団的な宣伝員、集団的な扇動家であるだけでなく、また集団的な組織者でもある。」からである。

レーニンは、同じ論文でつぎのようにのべている。

「この代理員網は、われわれが必要とする組織の骨幹となるであろう。それは、全国を包括できるほど、巨大である。それは、厳密で綿密な分業をおこなうことができるほど、広範で、多面的である。それは、どんな状況のもとでも、どんな「転換」、どんな不測の事態のもとでも、自己の活動を確固として遂行できるほど、断固としている。それは、敵が全力を一ヵ所に集中しているとき、優勢な勢力をもつ、この敵との公然たる闘争をさけることにひいでている一方、この敵の遅鈍さを利用することができ、敵が最も攻撃を予測しにくい場所と時をえらんで、不意打ちをかけることができるほど、柔軟性にとんでいる。」（レーニン『なにをなすべきか？』）

『イスクラ』は、このような新聞にならなくてはならなかった。

そして、たしかに『イスクラ』は、こうした全ロシア的な政治新聞となり、党の思想的、組織的な団結を準備したのである。

党自体の構成と成員については、党は二つの部分からなりたたなくてはならない、とレーニンは考えた。(イ)数は多くないが、つねに活動をおこなう基幹的な指導要員で、そのなかには主として職業革命家がふくまれる。職業革命家とは、党の活動以外は、ほかのどんな仕事もやる必要のない人たちで、また、必要最低限の理論知識、政治経験、組織能力、ツァー警察とたたかう技術、警察の目をたくみにくらます技術を身につけた人たちである。(ロ)広範な党地方組織網であり、数千数百万の勤労者の同情と支持をうけている多くの党員大衆である。

レーニンはつぎのようにかいている。

「わたくしは、つぎのように主張する。(一)安定した、継承性のある指導者の組織がなければ、どんな革命運動も強固にはなりえない。(二)自然発生的に闘争にまきこまれる大衆が……広範になればなるほど、こうした組織の必要性はますます切実となり、この組織はますます強固でなければならなくなる。……(三)こうした組織に参加するのは、主として、職業的に革命活動にしたがう人びとでなければならない。(四)専制制度の国では、この組織の成員の範囲を、職業的に革命活動にしたがい、政治警察と闘争する技術を専門的に訓練された党員だけがその成員となりうるという程度にまでせばめればせばめるほど、この組織を「つかまえる」ことはますますむつかしくなり、(五)労働者階級やそのほかの社会階級のなかからこの運動に参加し、そのなかで積極的に活動することのできる人びとも、ますます多くなるであろう。」(レーニン『なにをなすべきか?』)

創立すべき党の性質、労働者階級にたいするその役割、および党の目的と任務については、党は労働者階級

の先進部隊であり、労働運動の指導力であって、党はプロレタリア階級の階級闘争を統一し、指導すべきだ、とレーニンは主張した。党の最終的目的は、資本主義をくつがえし、社会主義をうちたてることである。当面の目的は、ツァー制度をくつがえし、民主主義制度をうちたてることである。資本主義をくつがえすためには、まずツァー制度をくつがえさなくてはならないのだから、党の当面のおもな任務は、労働者階級をたちあがらせ、全人民をたちあがらせて、ツァー制度とたたかい、人民革命の運動をくりひろげて、ツァー制度に反対し、社会主義への道によこたわる第一の重大な障害としてのツァー制度を打倒することである。

レーニンはいった。

「歴史がいまわれわれに課している緊急の任務は、そのほかのいかなる国のプロレタリア階級も当面するあらゆる緊急任務のなかでももっとも革命的な任務である。この任務を遂行すれば、つまり、ヨーロッパだけでなく、アジアの（いまは、このようにいうことができる）反動勢力のもっとも強大な砦をうちやぶれば、ロシアのプロレタリア階級は、国際プロレタリア階級の前衛となるであろう。」（レーニン『なにをなすべきか？』）

そして、さらに

「個々の要求のために政府とたたかい、個々の譲歩をかちとること、これは敵とのこぜりあいにすぎず、ちっぽけな前哨戦にすぎないのであって、決戦はまだ将来に残されているということを、われわれは銘記しなければならない。われわれの前には、強力な敵の要塞がならんでいて、砲弾の雨をふらせ、われわれの優秀な戦士を奪いさっている。われわれは、この要塞を奪いとらなければならない。もしも目

ざめつつあるプロレタリア階級の全勢力を、ロシアの革命家の全勢力とともに、ロシアのあらゆる生気あるもの、誠実なものがひきつけられている一つの党に統一するなら、われわれはこの要塞をかならず奪いとることができる。そのときこそ、ロシアの労働者の革命家ピョートル・アレクセーエフの偉大な予言——『数百千万の労働者大衆がたくましい鉄拳をふりあげたとき、兵士の銃剣にまもられている専制のくびきは、こなごなに粉砕されるであろう』という予言は実現されるのである。」（レーニン『われわれの運動の緊急な諸任務』）

以上が、ツァー専制ロシアの条件のもとで労働者階級の政党を創立するためのレーニンの計画であった。

「経済主義者」は、すぐさまレーニンの計画に砲火をあびせてきた。

「経済主義者」は、つぎのように主張した。ツァー制度にたいする一般的な政治闘争は、あらゆる階級のやるべきことであり、なによりもまずブルジョア階級のやるべきことであって、この政治闘争は労働者階級にはあまり重要でない。なぜなら、労働者の主要な利益は、賃上げや労働条件の改善をはかるため工場主と経済闘争をすることにあるからである。したがって、社会民主主義者の主要な、当面の任務は、ツァー制度にたいする政治闘争でも、ツァー制度をくつがえすことでもなくて、「工場主と政府にたいする労働者の経済闘争」を組織することである。しかも、このばあい政府にたいする経済闘争というのは、工場法の改善を要求する闘争であった。「経済主義者」は、こうしたやり方で「経済闘争そのものに政治性をあたえる」ことができる、といいはった。

「経済主義者」は、労働者階級がその政党を必要としていることを、もはや正式には否定できなかった。し

かし、かれらはつぎのように考えた——党は労働運動の指導力であってはならない。党は労働者階級の自然発生的な運動に干渉してはならず、それを指導するなどもってのほかである。党は、労働運動のあとからついていき、それを研究し、そのなかから経験をくみとるべきである、と。

「経済主義者」はさらに、つぎのように主張した——労働運動のなかで意識的要素のはたす役割、社会主義意識と社会主義理論のはたす組織上、指導上の役割は、とるにたらないものであるか、あるいはほとんどとるにたらないものである。社会民主党は、労働者を社会主義意識の水準にまで高めるべきではなく、逆に自分の方が労働者階級の中間層か、もっとおくれた層の水準に適応し、そこまで下がっていかなければならない。社会民主党は労働者階級に社会主義意識をつぎこむべきでなく、労働者階級の自然発生運動が自分の力で社会主義意識を育てあげるまでまつべきである、と。

党建設にかんするレーニンの組織計画については、「経済主義者」は、レーニンのこの計画をなにか自然発生的運動にたいする強制のようなものだ、とみなした。

レーニンは、『イスクラ』の紙上、とくにその名著『なにをなすべきか?』のなかで、「経済主義者」のこうした日和見主義的哲学をこっぱみじんに粉砕した。

(一) レーニンは、つぎのように指摘した。労働者階級をツァーリ制度にたいする一般政治闘争からひきはなして、その任務を工場主や政府にたいする経済闘争に限定し、工場主や政府に一指もふれないこと——これは、労働者を永久に奴隷的地位におとしいれることである。工場主や政府にたいする労働者の経済闘争は、よりよい条件で労働力を資本家に売るための組合主義的闘争である。ところが、労働者の闘争の目的は、たんに

自分の労働力をよりよい条件で資本家にうるためだけでなく、自分の労働力を資本家に売って搾取をたえしのばざるをえないようにさせている資本主義制度そのものの息の根をとめるためでもある。しかし、労働運動のまえに、ツァー制度という資本主義制度の忠実な番犬が立ちはだかっているかぎり、労働者は、資本主義反対の闘争をくりひろげることもできないし、社会主義をかちとる闘争をくりひろげることもできない。したがって、党と労働者階級の当面の任務は、ツァー制度を一掃して、社会主義への道を打開することにある。

(二) レーニンは、つぎのように指摘した。労働運動の自然発生的過程を賛美し、党の指導的役割を否定して、党の役割を事件の記録係りの役割にしてしまうこと――それは、「追随主義」を宣伝することである。それは、党を自然発生的過程のしっぽにしてしまい、運動の消極的な勢力にかえてしまい、ただ自然発生的過程を静観し成行きにまかせることしかできない勢力にかえてしまうことを宣伝することである。こうした宣伝をすることは、党の解消をはかることである。いいかえれば、労働者階級を、党なしにすておくこと、つまり武器なしにすておくことである。だが、あらゆる闘争手段をそなえたツァー制度や、近代的に組織されて、自分の政党の指導のもとで労働者階級との闘争をすすめるブルジョア階級のような敵が目のまえにたちはだかっているこんにち、労働者階級を武器なしにすておくことは、労働者階級にたいする裏切りにひとしい。

(三) レーニンは、つぎのように指摘した。労働運動の自然発生性のまえにひざまずき、意識性の役割を引さげること、つまり、社会主義意識と社会主義理論の役割を引きさげること――それは、第一には、光明をもとめるように意識性をめざしている労働者を愚弄することであり、第二には、党に理論をさげすむようにさせること、つまり、現在を認識し将来を予見する武器をさげすむようにさせることであり、第三には、完全に、

そして、最終的に日和見主義の泥沼へ転落することである。

レーニンは、いっている。

「革命的理論なくしては、革命的運動もありえない。……先進的理論に導かれる党だけが、先進的戦士の役割をはたすことができる。」（レーニン『なにをなすべきか？』）

(四)レーニンは、つぎのように指摘した。「経済主義者」は、社会主義的イデオロギーが労働者階級の自然発生的な運動のなかからうまれると主張して、労働者階級をあざむいている。なぜなら、実際には社会主義的イデオロギーは、自然発生的な運動のなかからではなく、科学のなかからうまれるものだからである。「経済主義者」は、労働者階級に社会主義意識をそそぎこまなければならないことを否定して、ブルジョア・イデオロギーのために道を掃き清め、それを労働者階級のなかにもちこみ、根づかせることを容易にしており、したがって、労働運動を社会主義に結びつけるという思想を葬ってしまい。ブルジョア階級を援助している。

レーニンは、つぎのようにいっている。

「労働運動の自然発生性の前にひざまずくことはすべて、また「意識的要素」の役割、社会民主党の役割を軽視することはすべて——軽視する人がのぞむとのぞまないにかかわらず——労働者にたいするブルジョア・イデオロギーの影響を強めるものである。」（レーニン『なにをなすべきか？』）

レーニンはさらに、つぎのようにのべている。

「問題はこうでしかありえない。ブルジョア・イデオロギーか、それとも社会主義的イデオロギーか、と。そこには、中間の道などというものはない。……だから、社会主義的イデオロギーにたいするどの

ような軽視も、どのような離反も、ブルジョア・イデオロギーを強めるものである。」（レーニン『なにをなすべきか？』）

（五）レーニンは、「経済主義者」のこうしたすべての誤りを総括して、つぎのような結論をひきだした。「経済主義者」は、労働者階級を資本主義のもとから解放する社会革命の党ではなく、資本主義支配の温存を考える「社会改良」の党を樹立しようとしている。したがって、「経済主義者」は、プロレタリア階級の根本的利益を売りわたす改良主義者である、と。

（六）レーニンは最後に、つぎのように指摘した。「経済主義者」は、ロシアに偶然にうまれた現象ではない。「経済主義者」は、労働者階級のなかにブルジョア階級の影響をひろめるものである。「経済主義者」は、西ヨーロッパ諸国の社会民主党の内部に、修正主義者、つまり日和見主義ベルンシュタインの支持者という同盟者をもっている、と。当時、西ヨーロッパ諸国の社会民主党の内部では、すでに日和見主義の潮流がますます強まっており、マルクスにたいする「批判の自由」という旗印をかかげて、「修正」、すなわちマルクス学説の修正（ここから「修正主義」の名がうまれた）を要求し、革命の拒否、社会主義の拒否、プロレタリア階級独裁の拒否を要求していた。レーニンはロシアの「経済主義者」も、同じように革命闘争、社会主義、プロレタリア階級独裁を拒否する路線をとっている、と指摘した。

レーニンがその著書『なにをなすべきか？』のなかで展開した基本的な理論的原理は、以上のとおりである。

『なにをなすべきか？』が広く読まれた結果、その出版一年後（出版されたのは、一九〇二年三月）、ロシ

ア社会民主党第二回大会のときには、「経済主義者」の思想的立場としては、思いだすのもいやな印象しか残っておらず、「経済主義者」という名は、党内の大多数の活動家から侮辱とうけとられるようになっていた。それは、「経済主義者」の完全な思想的壊滅であり、日和見主義、追随主義、放任主義の思想の完全な壊滅であった。

しかし、レーニンの著作『なにをなすべきか?』の意義は、これだけではなかった。

『なにをなすべきか?』の歴史的意義は、レーニンがこの名著のなかで、つぎの諸点をなしとげたことにある。

（一）マルクス主義思想の歴史上はじめて、日和見主義の思想的根源を徹底的にえぐりだし、その根源はなによりもまず、労働運動の自然発生性のまえにひざまずき、労働運動における社会主義意識の役割を引きさげた点にあることを明らかにした。

（二）自然発生的な労働運動を革命化し、指導する力として、理論、意識性、党の意義をそれにふさわしい高い地位にひきあげた。

（三）マルクス主義党は労働運動と社会主義との結合である、というマルクス主義の根本的原理をあざやかに論証した。

（四）マルクス主義党の思想的基礎を天才的にきずきあげた。

『なにをなすべきか?』で展開された理論的原理は、のちにボリシェビキ党のイデオロギーの基礎となった。

こうした理論的な宝をもっていたからこそ、『イスクラ』は、「経済主義者」に反対し、ありとあらゆる日和見主義者に反対し、さまざまな修正主義者に反対して、レーニンの党建設計画のため、党勢力の結集のため、第二回党大会のため、革命的社会民主主義のために、広範な運動を展開することができたし、また実際に展開したのである。

『イスクラ』のもっとも重要な任務は、党の綱領草案をつくることであった。周知のように、労働者党の綱領は、労働者階級の闘争の目的と任務を、科学的に簡潔に説明したものである。綱領は、プロレタリア階級の革命運動の最終目的と、この最終目的への途上で党がかちとるべき諸要求とを規定する。だから、綱領草案の作成は、とりわけ重要な意義をもっていた。

党の綱領草案の作成にあたって、『イスクラ』の編集局内部では、レーニンとプレハーノフおよびその他の編集委員とのあいだに、重大な意見の相違がうまれた。こうした意見の相違と論争は、レーニンとプレハーノフとがあやうく完全に決裂するところまでいった。しかし、そのときにはまだ決裂にはいたらなかった。レーニンが頑張りとおした結果、綱領草案には、プロレタリア階級独裁についてのもっとも重要な条項が書きこまれ、革命における労働者階級の指導的役割がはっきりと指摘された。

党綱領の農業にかんする部分もすべて、レーニンが提起したものであった。レーニンは、そのときすでに土地の国有化を主張していた。しかし、闘争の第一段階では、「切取り地」、つまり地主が農民を「解放」したときに農民から切りとった土地を、農民にかえせという要求をだすことが必要である、とレーニンは考えた。プレハーノフは、土地の国有化に反対した。

党綱領についてのレーニンとプレハーノフの論争は、ボリシェビキとメンシェビキとのあいだのその後の意見の相違を、あるていど決定づけるものであった。

三、ロシア社会民主労働党第二回大会　綱領、規約の採択と統一的党の創立　大会での意見の相違と、党内におけるボリシェビキ、メンシェビキ二派の出現

こうして、レーニンの原則が勝利し、レーニンの組織計画のための『イスクラ』の闘争が成功したことによって、党の創立――あるいは当時のいい方によると、真の党の創立――に必要なすべての基本的条件がととのえられた。『イスクラ』の方向は、ロシアの社会民主党の諸組織のあいだで勝利をおさめた。いまでは、第二回党大会を召集することができるようになった。

一九〇三年七月十七日（新暦七月三十日）、ロシア社会民主労働党第二回大会がひらかれた。大会は、国外で秘密裏にひらかれた。その会議は、さいしょブリュッセルで何回かおこなわれたが、そのご、ベルギーの警察が大会代議員にベルギーからの退去をせまったので、大会はロンドンに移された。

大会には、二十六の組織を代表する四十三人の代議員があつまった。各委員会は代議員を二人ずつだす権利をもっていたが、一部の委員会は代議員を一人しかおくらなかった。それで、四十三人の代議員が、議決権の

ある五十一の票数をもっていた。

大会のおもな任務は、「『イスクラ』によって提起され、つくりあげた原則的・組織的基礎にてらして真の党を創立する」（レーニン『一歩前進、二歩後退』）ことであった。

大会の構成は一色ではなかった。大会には、公然とした「経済主義者」の代議員は出席しなかった。かれらはすでに敗北していたからである。しかし、このころ、かれらはたくみに姿をかえていたので、何人かの代議員を大会にまぎれこませることに成功した。このほか、ブンドの代議員も、口先だけは「経済主義者」とちがっていたが、実際には「経済主義者」を支持していた。

だから、大会には『イスクラ』の支持者だけではなく、『イスクラ』の反対者も出席していた。『イスクラ』の支持者は、三十三人で、多数をしめていた。しかし、イスクラ派と称していたものがみな、真のレーニン派のイスクラ派だとはかぎらなかった。大会の代議員は、いくつかのグループにわかれていた。レーニンを支持する人びと、すなわち確固としたイスクラ派は、二十四票をもっていた。九人のイスクラ派は、マルトフを支持しており、イスクラ派の動揺分子であった。また、一部の代議員は、イスクラ派と反イスクラ派のあいだをふらふらしていた。これらが十票をもっていて、それは中間派であった。公然とした反イスクラ派は、八票（「経済主義者」三、ブンド派五）をもっていた。いったんイスクラ派の内部に分裂がおこれば、『イスクラ』の敵は優勢を占めることができた。

ここからもわかるように、大会の情勢はきわめて複雑であった。レーニンは、大会における『イスクラ』の勝利を保証するために全力をかたむけた。

大会のもっとも重要な任務は、党綱領の採択であった。党綱領の討議にあたって、大会の日和見主義分子の反対をよびおこした主要な問題は、プロレタリア階級独裁の問題であった。日和見主義者は、綱領のその他の多くの問題でも大会の革命的部分の意見に賛成しなかった。しかし日和見主義者は、主としてプロレタリア階級独裁の問題に砲火を集中することをきめた。国外の多くの社会民主党の綱領にはプロレタリア階級独裁の条項がないのだから、ロシア社会民主党の綱領にもこの条項はいれなくてもよい、というのがその理由である。

日和見主義は、また、農民問題についての要求を党綱領にいれることにも反対した。これらの人たちは、革命をやろうと考えていなかったから、労働者階級の同盟者である農民を差別あつかいし、毛嫌いしていた。

ブンド派とポーランド社会民主主義者は、民族自決権に反対した。レーニンは、労働者階級は民族抑圧とたたかう義務がある、とつねに教えていた。この要求を党綱領にいれることに反対するのは、プロレタリア国際主義をすて、民族抑圧の援助者になることを提案するのと同じであった。

こうしたすべての反対意見に、レーニンは致命的な打撃をあたえた。

大会は、『イスクラ』の提案した党綱領を採択した。

この綱領は、二つの部分、すなわち最高綱領と最低綱領からなっていた。最高綱領には、労働者階級の主要な任務、すなわち社会主義革命、資本家権力の打倒、プロレタリア階級独裁の樹立についてのべられていた。最低綱領には、資本主義制度をくつがえすまえ、プロレタリア階級独裁を樹立するまえ、党が遂行すべき当面の任務、すなわちツァー専制制度の打倒、民主共和国の樹立、労働者の八時間労働制の実施、農村における農奴制のあらゆる残りかすの消滅、地主が奪いとった農民の土地（「切取り地」）の農民への返還についてのべら

れていた。
その後、ボリシェビキは、「切取り地」返還の要求のかわりに、すべての地主の土地没収の要求をうち出した。
第二回党大会で採択された綱領は、労働者階級の党の革命的綱領であった。
この綱領は、わが党がプロレタリア革命の勝利後、新しい党綱領を採択した第八回党大会のときまで存続した。
第二回大会は、党綱領を採択して、党の思想的統一の基礎をきずいたのだから、大会は、手工業性や派閥主義、組織上の分散性、党内の厳格な規律の欠如などに終止符を打つため、党規約をも採択するのが当然であった。
ところが、綱領の採択はかなり順調だったのに、党規約草案の討議にはいった。綱領を採択して、党の思想的統一の基礎をきずいたあと、党規約の問題は大会ではげしい論争をまきおこした。もっともはげしい意見の対立は、党規約第一条、つまり党員の資格についての規定をめぐって発生した。党員となりうるのはどのような人間か、党の構成はどうあるべきか、党は組織的にどのようなものであるべきか——組織された統一体か、それとも無定形のものか——これが規約第一条をめぐってもちあがってきた問題である。そのとき、二つの定式が対立した。一つは、レーニンが提起し、プレハーノフと確固としたイスクラ派が支持したもので、もう一つは、マルトフが提起し、アクセリロード、ザスリッチ、動揺的なイスクラ派、トロツキー、大会でのすべての公然たる日和見主義者が支持したものである。
レーニンの定式によると、党の綱領を認め、党を物質面で支持し、党の一組織の成員となるものは、すべて党員となることができる、とされていた。ところが、マルトフの定式は、綱領の承認と党にたいする物質的支

持を党員の必要条件とはしていたが、党の一組織に参加することを党員の条件とは認めず、党の一組織の成員でなくてもよいとしていた。
レーニンは、党を組織された部隊とみなした。その成員は、自分勝手に入党するのではなく、党の一組織によって党に採用され、したがって、党の規律にしたがわなければならない、とされる。ところが、マルトフは、党を組織上なにか無定形のものとみなした。その成員は、自分勝手に入党するのであって、党内のどの組織にも参加しなくてよく、党の規律に服従する必要もない、とされる。
このように、マルトフの定式はレーニンの定式とちがって、動揺的な非プロレタリア分子に党の門戸を大きくひらくものであった。ブルジョア民主主義革命の前夜、ブルジョア知識層のなかには、一時的に革命に同情をよせる人たちがいた。かれらも、ときには、党にちょっとした奉仕をすることがある。しかし、こうした連中は、組織に参加しようともしなければ、党の規律に従おうともせず、党から託された任務をはたそうともしない。また、こうしたことからおきる危険に身をさらそうともしない。ところが、マルトフやその他のメンツェビキは、こうした連中を党員と認めるよう主張し、この連中に党内の仕事にたずさわる権利と機会をあたえるよう主張した。かれらは、当時ストライキに参加したもののなかに非社会主義者、無政府主義者、社会革命党員がいたにもかかわらず、ストライキに参加したものはだれでも自分を勝手に党に「編入」する権利があるとさえ主張した。
マルトフ派がのぞんでいたのは、レーニンやレーニン派が大会で目ざしたような、しっかりと一つに結びついた戦闘的な厳密な組織をもった党ではなくて、種々雑多な要素をふくむ、分散的な無定形の党であった。こ

うした党は、種々雑多な要素をふくみ、かたい規律をもちえないということだけからでも、戦闘的な政党となることはできなかった。だが、動揺的なイスクラ派が確固としたイスクラ派からはなれて、中間派と同盟をむすんだうえに、公然たる日和見主義者がそれに合同したため、マルトフはこの問題で優位をしめることとなった。大会では、規約第一条の採決にあたって、賛成二十八票、反対二十二票、棄権一票で、マルトフの提起した第一条の定式で採択された。

規約第一条の問題でイスクラ派に分裂がおきてから、大会での闘争はますますはげしくなった。大会がいよいよ終わりに近づき、全党の指導機関――党中央機関紙（『イスクラ』）編集局と中央委員会を選出することになった。ところが、大会が選挙にはいるまえに、いくつかの事件がおこって、大会での力関係がかわった。

党規約に関連して、大会はブンドの問題にも取りくまなければならなかった。ブンドは、党内で特殊な地位を手にいれようとしていた。かれらは、ロシア各地のユダヤ人労働者の唯一の代表と認められることを要求していた。ブンドのこの要求をうけいれると党組織の内部で労働者を民族別に区分することになり、労働者階級の統一的、階級的な地域別組織を拒否することになる。大会はブンド派のこうした組織問題での民族主義的立場をしりぞけた。そこで、ブンド派は大会から出ていった。二人の「経済主義者」も、かれらの在外同盟を大会が党の在外代表と認めなかったため、大会から出ていった。

七人の日和見主義者が大会から出ていったので、力関係はレーニン派に有利にかわった。

党中央機関の構成は、レーニンがはじめからもっとも重視していた問題であった。レーニンは、確固とした、徹底した革命家を中央委員会に入れる必要がある、と主張した。マルトフ派は、日和見主義の動揺分子に

中央委員会で優位をしめさせようとした。大会の多数は、この問題でレーニンの意見を支持した。中央委員会に選出されたのは、レーニンを支持する人びとであった。

レーニンの提案にもとづいて、『イスクラ』の編集局には、レーニン、プレハーノフ、マルトフの三人が選ばれた。マルトフは、『イスクラ』の旧編集委員六人をぜんぶ、『イスクラ』の編集委員に選ぶよう、大会に要求した。それは、そのうちの大多数がマルトフの支持者だったからである。大会は多数をもってこの提案を否決し、レーニンの提案した三人が選ばれた。そこで、マルトフは、中央機関紙編集局にははいらない、と声明した。

こうして、大会は、党中央機関の問題での投票によって、マルトフ派の敗北とレーニンの勝利を確かなものにした。

このとき以来、大会の選挙で多数の票を獲得したレーニンの支持者はボリシェビキ、少数の票しか獲得できなかったレーニンの反対者はメンシェビキと呼ばれるようになった。（訳注・ボリシェビキは多数派、メンシェビキは少数派の意味である）

第二回党大会の活動を総括すると、つぎのような結論がえられる。

（一）大会は、「経済主義者」すなわち公然とした日和見主義にたいするマルクス主義の勝利を強固にした。

（二）大会は、綱領と規約を採択し、社会民主党を創立して、統一的な党の枠組みをうちたてた。

（三）大会は、組織的で重大な意見の相違があることをあきらかにした。このため、党はボリシェビキとメンシェビキという二つの部分に分かれた。このうち、前者は革命的社会民主党の組織原則を堅持し、後者は組

織上の分散性の泥沼、日和見主義の泥沼に落ちこんでいった。

（四）大会は、新しい日和見主義、つまりメンシェビキが、党によってすでに粉砕されたふるい日和見主義者、つまり「経済主義者」にとってかわりつつあることをしめした。

（五）大会は、組織問題の分野で任務をはたすことができず、動揺をみせ、ときにはメンシェビキに優勢をゆずったことさえあった。大会が終わるときにはいくらか立ちなおったとはいえ、やはり、組織問題におけるメンシェビキの日和見主義をあばきだすことができず、またかれらを党内で孤立させることができなかっただけでなく、こうした任務を党に提起することもできなかった。

この最後の点は、ボリシェビキとメンシェビキとの闘争が、大会後おさまらなかっただけではなく、かえってはげしくなっていったおもな原因の一つでもある。

四、第二回大会後におけるメンシェビキ首脳の分裂行為と党内闘争の先鋭化　メンシェビキの日和見主義　レーニンの著書『一歩前進、二歩後退』　マルクス主義党の組織的基礎

第二回大会のあと、党内闘争はいよいよするどくなった。メンシェビキは、第二回大会の決議をふみにじ

り、党中央をのっとろうとして、全力をあげた。メンシェビキは、『イスクラ』編集局では多数、中央委員会ではボリシェビキと同数になるよう、かれらの代表を編集局と中央委員会にいれることを要求した。それは、第二回大会の決議と根本的にあいいれないことだから、ボリシェビキはメンシェビキの要求を拒否した。そこで、メンシェビキは党にかくれて、マルトフ、トロツキー、アクセリロードをはじめとするかれらの反党分派組織をつくり、マルトフもかいているように「レーニン主義に反対する暴動を起こした」。かれらが党にたいする闘争手段として選んだのは、「すべての党活動を攪乱し、事務を妨害し、あらゆるものにブレーキをかけること」(レーニンの言葉による)であった。かれらはロシアの実際活動からかけ離れた在外知識分子が九割をしめていた「ロシア社会民主主義者在外同盟」に立てこもり、そこから党、レーニン、レーニン派に砲火をあびせはじめた。

プレハーノフは、メンシェビキに大いに手をかした。第二回大会では、プレハーノフはレーニンの側に立っていた。しかし、第二回大会後、プレハーノフはメンシェビキの側からの分裂のおどかしに胆をつぶした。プレハーノフは、是が非でもメンシェビキと「和解」しようと決意した。プレハーノフがメンシェビキの側に引きずりこまれたのは、かれ自身が前々からもっていた日和見主義的誤りの重荷であった。日和見主義者メンシェビキとの調停派であったプレハーノフは、またたくまに、自分自身がメンシェビキにかわってしまった。プレハーノフは、大会でしりぞけられたメンシェビキの編集委員を、全員、『イスクラ』の編集にいれるよう要求した。レーニンがこれに同意できなかったのは、もちろんである。レーニンは、『イスクラ』編集局を去った。それは、党中央委員会での地盤をかため、この陣地から日和見主義者に打撃をくわえるためであった。プ

レハーノフは、大会の意志にそむいて、自分勝手に、メンシェビキの前編集委員を『イスクラ』編集局に追加した。メンシェビキが『イスクラ』をその機関紙にかえ、『イスクラ』を通じてその日和見主義的観点を宣伝するようになったのは、このとき、つまり、『イスクラ』第五十二号からである。

このとき以来、党内では、レーニンのボリシェビキ的『イスクラ』を旧『イスクラ』とよび、メンシェビキの日和見主義的『イスクラ』を新『イスクラ』とよぶようになった。

メンシェビキの手にうつってから、『イスクラ』はレーニンに反対し、ボリシェビキに反対する機関紙、とりわけ組織問題の分野でメンシェビキの日和見主義的観点を宣伝する機関紙となった。メンシェビキは、「経済主義者」がブンド派と結びついて、『イスクラ』紙上で、かれらのいわゆるレーニン主義にたいする大々的な攻撃をはじめた。プレハーノフは、調停主義の立場にとどまることができず、やがて自分もこの攻撃にくわわった。日和見主義者との調停を主張するものは、自分自身が日和見主義に転落しなければならない——これは必然のなりゆきである。新『イスクラ』の紙面は、ぞくぞくと発表されるつぎのような声明や論文でうずめつくされた。すなわち、党は組織された全体であってはならない。党内には、党機関の決議に従わなくてもよい自由なグループや個人の存在をゆるすべきである。党に同情しているどの知識分子にも、「それぞれのストライキ参加者」、「それぞれのデモ参加者」と同様、自分から党員と名のる権利をあたえるべきである。党のすべての決定に従うよう要求するのは、「形式的官僚主義的」態度である。少数に多数への服従を要求するのは、党員の意志を「機械的に抑圧する」ものである。——指導者たると一般党員たるとをとわず、すべての党員に同じように党の規律への服従を要求するのは、党内に「農奴制度」を設けるものである。党内で「われわれ」

に必要なのは、集中制ではなく、個々の党員や個々の党組織に党の決定を遂行しなくてもよい権利をあたえる無政府主義的「自治制」である。

これは、組織上の放漫性や、党性、党規律の破壊を無軌道に宣伝するものであり、知識分子の個人主義を賛美するものであり、無政府主義的に無規律を弁護するものである。

メンシェビキはあきらかに、党を第二回大会から、組織の分散性、派閥主義、手工業性へとひきもどしたのである。

メンシェビキにたいしては、断固たる反撃をあたえる必要があった。

レーニンは、一九〇四年五月に出版した名著『一歩前進、二歩後退』で、かれらにそうした反撃をくわえた。

以下にかかげるのは、レーニンがこの著書で展開した基本的組織原則で、のちにボリシェビキ党の組織的基礎となったものである。

(一) マルクス主義党は、労働者階級の一部分であり、その一部隊である。しかし、労働者階級には、多くの部隊がある。だから、労働者階級のあらゆる部隊が労働者階級の党とよばれるわけではない。党が労働者階級のその他の部隊と違っている点は、なによりもまず、党が普通の部隊ではなくて、労働者階級の先進的部隊、意識的部隊、マルクス主義的部隊であり、社会生活の知識、社会生活の発展法則の知識、階級闘争の法則の知識によって武装され、したがってまた、労働者階級をみちびき、その闘争を指導する能力がある、という点である。だから、部分と全体とを混同してはいけないのと同じように、党と労働者階級とを混同してはいけ

ない。また、ストライキ参加者のだれもが自分勝手に党員だと名のっていい、などと要求することはゆるされない。なぜなら、党と階級とを混同するものは、党の意識水準を「それぞれのストライキ参加者」の水準にまでひきさげ、労働者階級の先進的、意識的部隊としての党の役割を破壊してしまうからである。党の任務は、その水準を、「それぞれのストライキ参加者」の水準にまでひきさげることではなく、労働者大衆を、「それぞれのストライキ参加者」を、党の水準にまでひきあげることにある。

レーニンは、つぎのようにかいている。

「われわれは、階級の党である。だから、ほとんど全階級が（戦争のとき、国内戦争の時代には、完全に全階級さえもが）、わが党の指導のもとに行動し、できるかぎりぴったりとわが党についてこなければならない。しかし、もしも、資本主義制度のもとでも、いつかは、ほとんど全階級が、もしくは全階級が、その先進部隊、つまり、その社会民主党のもつ自覚性と積極性にまでたかまることができると考えるなら、それは、マニロフ精神であり、『追随主義』である（訳注・マニロフ精神は、ゴーゴリの長編小説『死せる魂』にでてくる人物マニロフからとったもので、ばかげた妄想にふけってばかりいること）。資本主義のもとでは、労働組合組織（おくれた層の意識でも、かなりたやすくうけいれられる、より初歩的な組織）ですらも、ほとんどすべての、もしくはすべての労働者階級を、包括することはできない。このことについて、もののわかった社会民主主義者で疑いをいだいたものは、これまでひとりもいなかった。先進部隊と、それにひきつけられているすべての大衆との違いをわすれること、ますますひろまっていく層をこの先進的水準にまでひきあげるという先進部隊の不断の義務をわすれること

は、ただ自分をあざむき、われわれの任務の大きさに目をとじ、これらの任務をせばめることにほかならない。」（レーニン『一歩前進、二歩後退』）

（二）党は、労働者階級の先進的、意識的部隊であるばかりでなく、同時にまた、労働者階級の組織された部隊でもあり、党員が守らなくてはならない規律をもっている。だから、党員は、かならず党内の一組織の成員でなくてはならない。もし党が階級の組織された部隊でもなければ、組織的体系でもなく、自分勝手に党員と名のりはするが党のどの組織にも参加せず、したがって組織されておらず、また党の決定にしたがう義務ももたないという、こうした連中のたんなる集まりにすぎないなら、このような党は、永遠に統一した意志をもつことができず、永遠に党員の行動の統一を実現することができない。したがって、このような党は、労働者階級の闘争を指導する可能性ももたないであろう。党は、全党員が意志の統一、行動の統一、規律の統一によって団結した統一的な共同部隊に組織されたばあいにはじめて、労働者階級の闘争を実際に指導し、労働者階級を一つの目標にむけることができるのである。

メンシェビキは、これに反駁した――そうなると、多くの知識分子、たとえば大学教授や大学生、中学生などは、党のそとにとりのこされるだろう。かれらは、党の規律にたえられないか、あるいはプレハーノフが第二回大会でのべたように、「なんらかの地方組織にはいるのは、自分の顔に泥をぬることだ」と考えているため、党内のなんらかの組織にはいることを望まないからである、と。しかし、メンシェビキのこうした反駁は、語るに落ちるものである。それというのも、党は、党規律にたえられなかったり、党組織への加入をおそれたりするような党員を、必要としないからである。労働者は、規律や組織をおそれないので、党員となる決

意をすれば、よろこんで組織にはいってくる。規律や組織をおそれるのは、個人主義的な気分をもつ知識分子であり、かれらはたしかに党のそとにとりのこされるであろう。しかし、それは、きわめて結構なことである。なぜなら、ブルジョア民主主義革命の高揚がはじまりつつある現在、動揺分子が党内へ殺到する現象がとくにひどくなっているが、それを党はまぬがれることができるからである。

レーニンは、つぎのようにかいている。

「党は、組織の総計(しかも、たんなる算術的な総計ではなく、集合体)でなければならないとわたしがいうばあい、……わたしは、それによってつぎのような自分の希望と要求とを、きわめて明確かつ的確にいいあらわしているのである。つまり、階級の先進部隊としての党は、できるだけよく組織されたものであること、また党は、たとえ最低限にもせよなんらかの組織性をうけいれる分子だけを加入させること、これである……。」(レーニン『一歩前進、二歩後退』)

さらに、

「口先では、マルトフの定式は、プロレタリア階級の広範な階層の利益を擁護しているが、実際には、この定式は、プロレタリア階級の規律性と組織性をおそれるブルジョア階級の知識界の利益に奉仕するものである。現代資本主義社会における特別の階層としての知識界が、一般的、全体的にみて、まさに個人主義の特徴をもち、規律や組織をうけいれることのできないものであることは、だれ一人として否定するものがいない。」(レーニン『一歩前進、二歩後退』)

さらにまた、

「プロレタリア階級は、組織や規律をおそれない。……プロレタリア階級は、組織に加入することをのぞまない大学教授連や中学生諸君が党組織の監督下で活動したということだけで、かれらを党員としてみとめようと気をもんだりはしない。……組織や規律の面で自己教育にかけているものは、プロレタリア階級ではなくて、わが党内の一部の知識分子である。」（レーニン『一歩前進、二歩後退』）

（三）党は、たんに組織された部隊であるばかりでなく、労働者階級のその他すべての組織のなかの「最高の組織形態」であり、労働者階級のその他すべての組織を指導するという使命をもっている。党は、先進的な理論や階級闘争の法則についての知識、さらには革命運動の経験によって武装された、その階級の優秀分子で構成されている最高の組織形態であるから、労働者階級のその他すべての組織を指導することが十分にできるし、また指導する義務がある。メンシェビキは、党の指導的役割を引きさげ、ひくめようとはかっているが、それは、党の指導するその他のすべてのプロレタリア階級の組織をよわめることになり、したがってまた、プロレタリア階級をよわめ、その武装を解除させることになる。なぜなら、「プロレタリア階級は、権力をめざす闘争において、組織のほかには、なんらの武器ももたない」からである。（レーニン『一歩前進、二歩後退』）

（四）党は、労働者階級の先進部隊と労働者階級の何百何千万の大衆との結びつきを体現したものである。党はどんなにすぐれた先進部隊であり、どんなによく組織されていたとしても、もし非党員大衆と結びつかず、この結びつきをふやさず、かためないなら、やはり生存し、発展することはできない。もし自分の殻にとじこもり、大衆からかけはなれ、自分の階級との結びつきをうしない、さらにはこの結びつきをよわめるよう

なことまでするなら、党は大衆の信頼と支持をうしなわざるをえず、したがってまた、滅亡をさけられないであろう。もし充実した生活をおくり、発展をつづけようとするなら、党は大衆との結びつきを強め、自分の階級の何百何千万の大衆の信頼をえなければならない。

レーニンは、「社会民主党であるためには、ほかならぬ階級の支持を獲得しなければならない。」（レーニン『一歩前進、二歩後退』）といっている。

（五）正しく行動し、計画的に大衆を指導するには、党は、集中制の原則にもとづいて組織されなければならず、統一的な規約をもち、統一的な党規律をもち、統一的な指導機関――党大会であるが、大会と大会のあいだには党中央委員会である――をもち、少数は多数に、個々の組織は中央に、下級組織は上級組織にそれぞれしたがわなければならない。これらの条件がなければ、労働者階級の党は、真の党となることができず、階級を指導するという自己の任務をはたすことができない。

もちろん、当時、党はツァー専制制度の条件のもとで非合法の地位におかれていたから、党の組織を下からの選挙にもとづいて建設することはできない。そのため、党はひじょうに秘密的な性格をもたざるをえなかった。しかし、レーニンは、わが党の生活におけるこの一時的な現象は、ツァー制度がくつがえされるとすぐになくなって、党は公然とした合法的な党になり、党組織は民主的な選挙制度の原則、民主集中制の原則のうえにうちたてられるであろうと考えた。

レーニンは、つぎのようにかいている。

「以前には、わが党は、まだ正式に組織された全体ではなく、個々の部分的なグループの総計にすぎな

かった。だから、これらのグループのあいだには、思想的なはたらきかけのほかには、なにも関係はありえなかった。いまでは、われわれは組織された党となった。つまり、これは一種の権力がつくりだされたこと、思想の権威が権力の権威にかわったこと、党の下級機関が党の上級機関にしたがうようになったことを意味する。」(レーニン『一歩前進、二歩後退』)

レーニンは、メンシェビキを、自己の頭上に党の権力と規律を認めようとしない組織的虚無主義、貴族的無政府主義と非難し、つぎのようにかいている。

「この貴族的無政府主義は、ロシアの虚無主義者に特有のものである。党の組織は、かれらにとっては、怪奇な『工場』のようにおもわれ、部分の全体への服従、少数の多数への服従は、かれらにとっては、『奴隷化』のようにおもわれる……。かれらは、中央の指導のもとでの分業ときくと、滑稽な悲鳴をあげて、人間を『歯車やネジ釘』にかえることだと反対する(かれらは、なかでも編集者を平記者にかえることは、とくに胆をつぶすほど驚くべきことだと考えている)。かれらは、党の組織規約に誰かがふれると、馬鹿にしきった顔つきで、相手をみくだした小言(『形式主義者』にむけた)を吐き、規約など全然なくてもいいのだという。」(レーニン『一歩前進、二歩後退』)

(六) 党は、もし隊伍の統一をたもとうとするなら、その実際活動のなかで統一的なプロレタリア的規律を実施し、指導者と一般党員との区別なくすべての党員が同じく守るようにしなければならない。したがって、党内には、規律にしたがう必要のない「エリート」と、規律にしたがう義務のある「非エリート」との区別などは、あってはならない。こうした条件がなければ、党の全一性とその隊伍の統一性をたもつことはできな

い。

レーニンはつぎのようにかいている。

「マルトフとその仲間には大会の任命した編集局に反対する、道理にかなった論拠がまったくないということ――これは、「われわれは農奴ではない！」というかれらのひとことが、もっともよく物語っている……ここには、ブルジョア階級の知識分子の心理が、ひじょうにはっきりとさらけだされている。かれらは、自分を、大衆組織や大衆規律を超越した「エリート」だとみなしている。……知識分子の個人主義にとっては……プロレタリア階級のあらゆる組織や規律が、どれも農奴制度のようにみえるのであろう。」（レーニン『一歩前進、二歩後退』）

さらに

「われわれの真の党がつくりあげられるのにつれて、意識の高い労働者は、プロレタリア階級軍の戦士の心理と、無政府主義的言辞をひけらかすブルジョア階級の知識分子の心理とを見わけることを学びとらなければならず、また、一般党員だけでなく、『上層の人びと』にも党員の義務をはたすよう要求することを学びとらなくてはならない。」（レーニン『一歩前進、二歩後退』）

レーニンは、意見の相違についての分析を総括して、メンシェビキの立場を「組織問題における日和見主義」と規定するにあたり、メンシェビズムの基本的な罪悪の一つは、プロレタリア階級の解放闘争の武器としての党組織の意義を過小評価する点にある、とみなした。メンシェビキは、プロレタリア階級の党組織は革命の勝利にとって大きな意義をもつものではない、とみていた。レーニンは、メンシェビキに反対して、勝利を

かちとるためには、プロレタリア階級の思想的統一だけでは不十分であり、さらにプロレタリア階級の「組織の物質的統一」によって思想的統一を「かためなければならない、と考えた。レーニンは、プロレタリア階級は、この条件のもとではじめて無敵の力となることができる、と考えた。

レーニンは、つぎのようにかいている。

「プロレタリア階級は、権力をめざす闘争において、組織のほかには、いかなる武器ももたない。ブルジョア世界の無政府競争の支配によって分散させられ、資本のための奴隷的労働によっておしひしがれ、まったくの貧困と野蛮と退化の「どん底」にたえず投げこまれているプロレタリア階級は、マルクス主義の原則による思想的統一が、何百何千万の勤労者を労働者階級の大軍に結集させる組織の物質的統一によってうちかためられてはじめて、無敵の力となることができるし、またかならずそうなるであろう。この大軍を前にしては、ロシアのツァー専制制度の老衰した権力も、また国際資本の老衰しつつある権力も、もちこたえることができないのである。」(レーニン『一歩前進、二歩後退』

レーニンは、このような予言的言葉でその著作を結んでいる。

これが名著『一歩前進、二歩後退』のなかでレーニンの展開した基本的な組織原則である。

この著書の意義は、なによりもまず、それが、派閥主義に反対して党性をまもり、撹乱者に反対して党をまもり、組織問題におけるメンシェビキの日和見主義を粉砕し、ボリシェビキ党の組織的基礎をおいた、という点にある。

しかし、この著書の意義はそれにとどまらない。その歴史的意義は、レーニンがこの本のなかで、マルクス

主義の歴史上はじめて党についての学説をつくりあげ、党はプロレタリア階級の指導組織であり、プロレタリア階級の手ににぎられた基本的武器であって、この武器がなければ、プロレタリア階級独裁のための闘争で勝利をおさめることができないことを説明した点にある。

レーニンの著書『一歩前進、二歩後退』が党の活動家のあいだに普及すると、多数の地方組織がレーニンのまわりに結集するようになった。

しかし、各組織がボリシェビキのまわりにますます緊密に結集すればするほど、メンシェビキの指導者たちの行為も、ますますあくどくなってきた。

一九〇四年の夏、メンシェビキは、プレハーノフの援助と、二人の腐敗したボリシェビキ――クラシン、ノスコフの裏切りによって、中央委員会の多数をしめるようになった。メンシェビキが分裂をつくりだそうとしていることは、すでにはっきりしていた。ボリシェビキは、『イスクラ』と中央委員会を失ったあと、困難な立場にたたされた。自分たちのボリシェビキ的新聞をだす必要があった。新しい大会、すなわち第三回党大会をひらいて、党の新しい中央委員会をつくり、メンシェビキと手をきる必要があった。

この仕事に取りかかったのが、レーニンであり、ボリシェビキであった。

ボリシェビキは、第三回党大会召集のための闘争をくりひろげた。一九〇四年八月、スイスで、レーニンの指導のもとに、二十二人のボリシェビキの出席する会議がひらかれた。この会議では、「全党にうったえる」よびかけが採択され、第三回党大会召集のために奮闘するボリシェビキの綱領となった。

三つの地区（南部、カフカズ、北部）でひらかれたボリシェビキ委員会の代表会議で、多数派の党委員会事

務局が選出され、この事務局が第三回党大会の実際の準備をすすめた。

一九〇五年一月四日、ボリシェビキの新聞『フペリョード』〔前進〕の創刊号が出た。

こうして、党内には、ボリシェビキ、メンシェビキという対立した二派の組織がつくられ、それぞれの中央と機関紙をもつことになった。

要約

一九〇一年から一九〇四年にいたる期間、革命的労働運動の成長という基礎のうえで、ロシア各地のマルクス主義社会民主組織も成長し、強固になっていた。「経済主義者」とのねばりづよい原則的な闘争のなかで、レーニンの『イスクラ』がおしすすめた革命路線は勝利し、思想的混乱と「手工業性」が克服されていった。

『イスクラ』は、ばらばらになっていた社会民主主義のサークルとグループを結びつけ、第二回党大会を準備した。一九〇三年にひらかれた第二回大会では、ロシア社会民主労働党が成立し、党の綱領と規約が採択され、党の中央指導機関がうちたてられた。

第二回党大会では、イスクラ派の方針の決定勝利をめざしてすすめられた闘争のなかで、ロシア社会民主労働党の内部に二つのグループがあらわれた。ボリシェビキのグループとメンシェビキのグループがそれである。

第二回党大会の後、ボリシェビキとメンシェビキとのあいだのおもな意見の相違は、組織問題をめぐって展

開された。

メンシェビキは「経済主義者」に接近し、党内で経済主義者の役をつとめた。メンシェビキの日和見主義的な立場は、そのときにはまた組織問題の分野に現われていた。メンシェビキはレーニン型の戦闘的、革命的な党に反対し、分散的な無組織の、追随主義的な党をつくることを主張した。かれらは、党内で分裂路線をすすめた。そして、プレハーノフの手助けをうけて、『イスクラ』と中央委員会をのっとり、これらの中央機関を利用して、その分裂主義の目的をはたそうとした。

メンシェビキによる分裂の危険をみて、ボリシェビキは分裂派をおさえつける方策をとり、第三回党大会召集のため地方組織を動員し、自分たちの機関紙『フペリョード』〔前進〕を創刊した。

こうして、ロシア第一次革命の前夜、すでにはじまっていた日露戦争の時期に、ボリシェビキとメンシェビキは、対立する二つの政治集団として行動するようになったのである。

第三章　日露戦争と第一次ロシア革命の時期におけるメンシェビキとボリシェビキ

（一九〇四年—一九〇七年）

一、日露戦争　ロシアにおける革命運動のいっそうの高揚　ペテルブルグのストライキ　一九〇五年一月九日の冬宮まえでの労働者のデモ　デモ大衆の射殺　革命のはじまり

一九世紀の末いらい、帝国主義諸国は、太平洋の支配権確立、中国分割のための闘争に拍車をかけはじめた。ツァー・ロシアも、この闘争にくわわった。一九〇〇年、日本、ドイツ、イギリス、フランスなどの軍隊と共同して、ツァーの軍隊は、外国帝国主義に矛先をむけた中国人民の蜂起に、かつてみない残酷な弾圧をくわえた。これよりさき、ツァーは中国にせまって、遼東半島と旅順港の要塞をロシアに割譲させていた。ロシアは、中国の領土に鉄道を敷設する権利を獲得した。ロシアは、北満に中東鉄道を建設し、これをまもるために軍隊を進駐させた。北満は、ツァー・ロシアによって軍事的に占領された。ツアー政府の勢力は、朝鮮にま

でしのびよった。ロシアのブルジョア階級は、満州に「黄色ロシア」をつくる計画をたてていた。

ツァー政府は、極東の侵略にあたって、もうひとりの強盗である日本とぶつかった。そのころ、日本は、急速に帝国主義国となり、やはり中国を犠牲にしてアジア大陸を侵略しようとしていた。ツァー・ロシアと同じように、日本は朝鮮、満州をわがものにしようとやっきになっていた。日本は、すでにサハリンと極東地区の占領を夢みていた。イギリスは、極東でロシアの勢力が強まるのをおそれ、ひそかに日本を援助した。日露戦争は近づいていた。新しい市場をもとめていた大ブルジョア階級ともっとも反動的な地主層は、この戦争にツァー政府をかりたてた。

日本は、ツァー政府の宣戦布告をまたず、機先を制して戦争をはじめた。日本は、ロシア国内にすぐれたスパイ網をもっていたので、この戦いで敵の準備がととのっていないことを知っていた。一九〇四年一月、日本は宣戦布告をしないで、突如ロシア軍の要塞の旅順港を襲撃し、旅順港にいたロシア艦隊に大損害をあたえた。

こうして日露戦争がはじまったのである。

ツァー政府は、戦争によってかれらの政治的地位がつよまり、革命は阻止されるものとあてこんでいた。しかし、ツァー政府のあてははずれた。戦争は、ツァー政府を、いっそうぐらつかせた。

装備が貧弱で、訓練がわるく、無能で金に目のない将軍連に指揮されていたロシア軍は、敗北につぐ敗北をかさねた。

資本家、役人、将軍連は、戦争でボロもうけをした。公金横領がいたるところでおこなわれた。軍隊への補給

はきわめてわるかった。砲弾が不足しているとき、まるで人を小馬鹿にするかのように、聖像をつんだ貨車がつぎつぎと軍隊におくられてきた。兵士たちは苦々しげにいった、「日本軍はおれたちに砲弾をうちこんでくるのに、おれたちは奴らに聖像をぶちこむのか。」専用列車は、負傷兵を運ばないで、ツァーの将軍連が略奪した財産を運ぶのにつかわれた。

日本軍は、旅順港の要塞を包囲し、ついでそれを占領した。かれらはツァー・ロシア軍隊をつぎつぎと撃破し、ついに瀋陽付近でこれを粉砕した。ツァーの三十万の大軍は、この会戦で、死傷者と捕虜あわせて十二万をだした。つづいて、旅順港の包囲をとくためバルト海から派遣されたツァーの艦隊も、対馬海峡で完全に粉砕され、壊滅した。対馬海峡での敗北は、完全な破局を意味した。ツァーが派遣した二十隻の軍艦のうち、撃沈、撃破されたものは十三隻、拿捕されたものは四隻にのぼった。戦争は、ツァー・ロシアの決定的な敗北におわった。

ツァー政府は、やむなく日本と屈辱的な講和条約を結んだ。日本は、朝鮮を占領し、ロシアの手から旅順と、サハリンの半分をうばいとった。

人民大衆は、この戦争をのぞんでいなかったし、この戦争がロシアに有害なことを知っていた。ツァー・ロシアがたちおくれていたため、人民は高い代価を支払わなければならなかった。

ボリシェビキとメンシェビキは、この戦争にたいしてちがった態度をとった。

トロツキーをもふくめてメンシェビキは、祖国防衛論の立場、つまり、ツァーや地主、資本家の「祖国」を防衛するという立場に転落していた。

レーニンとボリシェビキは、これとは反対に、この略奪戦争でツァー政府が敗北すれば、ツァー制度が弱まり、革命が強まることになるから、それは有益であると、みていた。

ツァー軍隊の敗北は、広範な人民大衆のまえにツァー制度の腐敗ぶりをあばきだした。ツァー制度にむけられた人民大衆の憎しみは、日ごとにはげしくなっていった。旅順港の陥落は専制制度陥落のはじまりである、とレーニンはかいている。

ツァーは、戦争によって革命をつぶそうと考えていた。だが、ツァーのえたものは反対の結果であった。日露戦争は、革命をはやめたのである。

ツァー・ロシアでは、資本主義的抑圧が、ツァー制度の抑圧によってさらに強められていた。労働者は、資本主義的搾取による苦しみ、苦役的労働による苦しみだけでなく、全人民の無権利による苦しみをなめていた。だから、意識の高い労働者は、都市と農村のあらゆる民主的な人びとの、ツァー制度に反対する革命運動を指導することに力をいれた。農民は、土地がなく、農奴制度の多くの残りかすにしばりつけられて、あえいでいた。かれらは地主や富農のため、奴隷のようにこきつかわれていた。ツァー・ロシア各民族の人民は、その民族とロシア民族との双方の地主、資本家から二重の抑圧をうけて苦しんでいた。一九〇〇年から一九〇三年にいたる経済恐慌は、勤労大衆の苦しみをさらにつのらせ、戦争はそれをさらにはげしくした。敗戦はツァー制度にたいする大衆の憎しみをいっそうかきたてた。人民の忍耐も、ぎりぎりのところまできていた。

ここからもあきらかなように、革命のおきる原因はありあまるほどあった。

一九〇四年十二月、バクーの労働者は、ボリシェビキのバクー委員会の指導のもとで、しっかり組織された

大規模のストライキをおこなった。このストライキは労働者の勝利におわり、労働者と石油業者とのあいだで、ロシア労働運動史上最初の団体協定が結ばれた。

バクーのストライキは、後カフカズとロシアの多くの地区における革命運動の高揚の口火をきった。

「バクーのストライキは、全ロシアにわたる一月から二月にかけてのかがやかしい進出の合図となった。」（スターリン）

このストライキは、偉大な革命のあらしのおとずれをつげる稲妻のようなものであった。

一九〇五年一月九日（新暦二十二日）のペテルブルグでの事件は、革命のあらしのはじまりであった。

一九〇五年一月三日はペテルブルグ最大の工場——プチロフ工場（現在のキーロフ工場）でストライキがはじまった。このストライキの原因は、工場が四人の労働者を解雇したことにあった。プチロフ工場のストライキは、急速にひろがっていき、ペテルブルグのその他の工場もつぎつぎとこれにくわわった。ストライキは、ゼネストとなった。運動は、すさまじい勢いでもりあがった。ツァー政府は、運動を最初のうちにおしつぶそうとした。

一九〇四年、プチロフ工場のストライキのまえに、警察機関は、挑発者の司祭ガポンを手先につかって、労働者のあいだに「ロシア工場労働者会議」という御用団体をつくった。この団体は、ペテルブルグのすべての地区に支部をもっていた。ストライキがはじまったとき、司祭ガポンは、かれの「会議」の集会で挑発的な計画を提案した。すなわち、一月九日に全労働者が集まり、教会旗とツァーの肖像とをかかげて冬宮で平和的に行進し、自分たちの苦しみをうったえた請願書をツァーにささげよう。そうすれば、ツァーは人民の前にで

て、人民の要求をきき、この要求を満足させてくれるであろう、というのである。ガポンは、ツァーの秘密警察に手をかして、労働者射殺の惨事をひきおこし、労働運動を血の海にほうむりさろうとした。しかし、警察の計画はツァー政府反対へと転ずることになった。

請願書は、労働者の集会で討議され、そこで書きたされ、訂正された。これらの集会では、ボリシェビキも演説したが、自分がボリシェビキであると、公然とは名のらなかった。かれらの影響によって、請願書には、言論出版の自由、労働者の結社の自由、ロシアの国家制度をかえるための憲法制定会議の召集、法律のまえでのすべての人民の平等、国家からの教会の分離、戦争の停止、八時間労働制の制定、土地を農民へ、などの要求がかきいれられた。

ボリシェビキは、これらの集会での演説で、自由はツァーへの請願などでえられるものでなく、武器を手にしてうばいとるものだ、と説明した、ボリシェビキは、労働者は射殺されるだろう、と警告した。だが、冬宮への行進をやめさせることはできなかった。まだ、かなり多くの労働者が、ツァーは、自分たちを助けてくれるだろう、と信じていた。運動は、すさまじい勢いで大衆をとらえた。

ペテルブルグの労働者は、請願書につぎのようにかいた。

「わたしたちペテルブルグの労働者は、わたしたちの妻や子供、年老いた両親とともに、正義と保護をもとめて陛下のもとにまいりました。わたしたちは、生活のくるしみにあえぎ、抑圧され、たえきれない労働をせおわされています。あざむかれ、辱しめられ、人間らしい扱いをうけていません。……わたしたちは、どれだけ耐え忍んできたかわかりませんが、しかし、わたしたちはますます貧困と無権利

と無知の泥沼に追い落とされ、専横と暴政におしひしがれています。……もうこれ以上我慢できなくなりました。ついにおそろしい瞬間がやってきました。わたしたちにとっては、たえがたい苦しみをつづけるよりも、むしろ死をえらぶ方がよいと思われるような恐しい瞬間がとうとうやってきました。」

一九〇五年一月九日の早朝、労働者たちは、当時ツァーが住んでいた冬宮にむかって行進した。労働者たちは、妻子や老人もつれ、一家をあげてツァーのところにむかった。かれらは、ツァーの肖像と教会旗をかかげ賛美歌をうたい、武器をもたずに行進した。街頭にでた人は十四万人をこえた。

ニコライ二世は、敵意をもってかれらを迎えた。かれは、武器をもたないこれらの労働者を射殺するよう命令した。この日ツァーの軍隊のため、千人以上の労働者が殺され、二千人以上の労働者が傷ついた。ペテルブルグの街頭は、労働者の血であけにそまった。

ボリシェビキは労働者たちとともに行進した。かれらの多くは殺され、捕えられた。ボリシェビキは、すぐ、労働者の血でそまった街頭でこうした暴虐行為の張本人は誰であるか、奴らとたたかうにはどうすべきかを労働者たちに説いた。

一月九日は、「血の日曜日」とよばれるようになった。労働者は、一月九日に血の教訓をえた。この日、射殺されたのは、ツァーにたいする労働者の信頼であった。権利をかくとくするには闘争によるほかないことを、労働者は知った。九日の夕方、各労働者地区にバリケードがきずかれはじめた。「ツァーがおれたちを叩きのめしたのだから、おれたちもツァーを叩きのめしてやるのだ！」と労働者たちはいった。

ツァーの血なまぐさい暴挙についての恐ろしい知らせは、またたくまに全国に伝えられた。全労働者階級、

全国人民が、怒りと憎しみにもえた。都市という都市で、労働者たちがツァーの罪悪行為にたいする抗議ストに立ちあがり、自分たちの政治的要求をだした。いまや、労働者たちは、「専制制度打倒!」のスローガンをかかげて、街頭におどりでるようになった。一月中のストライキ労働者の数は、四十四万人という膨大な数にのぼった。一ヵ月間にストライキに参加した労働者の数は、これまでの十年間の総数をうわまわった。労働運動は、おどろくべき程度にたかまった。

ロシアでは革命がはじまった。

二、労働者の政治ストとデモ　農民の革命運動の成長　戦艦「ポチョムキン」の蜂起

一月九日の事件のあと、労働者の革命闘争は、いっそうするどい政治的性質をもつようになった。労働者は経済スト、同情ストから政治スト、デモ行進へと移り、ところによっては、ツァー軍隊にたいする武装抵抗の闘争にまでうつりはじめた。ペテルブルグ、モスクワ、ワルシャワ、リガ、バクーなど、非常に多数の労働者が集中している大都市ではストライキはとくに頑強で非常によく組織されていた。たたかうプロレタリア階級の先頭に立ったのは、金属労働者であった。先進的な労働者の隊伍は、自分たちのストライキによって、意識の低い層をふるいたたせ、全労働者階級を闘争に立ちあがらせた。社会民主党の影響は、急速に増大した。

メーデーのデモ行進では、多くの地方で大衆と警察、軍隊とのあいだに衝突がおこった。ワルシャワでは発砲のため、デモの大衆から数百人におよぶ死傷者が出た。労働者は、ポーランド社会民主党のよびかけにこたえ、ゼネストによって、ワルシャワでの射殺に抗議した。ストライキとデモは、五月中、一日もたえたことがなかった。ロシアの各地で、ストライキに参加した労働者は二十余万にたっした。バクー、ルージ、イワノボ・ボスネセンスクなどの労働者は、ゼネストにはいった。スト労働者やデモの大衆がツァーの軍隊と衝突する事件が、日ごとに多くなった。オデッサ、ワルシャワ、リガ、ルージ、その他の多くの都市で、こうした衝突がおきた。

ポーランドの大工場中心地ルージでは、闘争がとくにはげしくおこなわれた。ルージの労働者は、街頭に数千のバリケードをきずき、ツァーの軍隊と三日間にわたる（一九〇五年六月二十二日から二十四日まで）市街戦をくりひろげた。ここでは、武力行動がゼネストと合流した。レーニンはこの戦闘を、ロシアの労働者がすすめた最初の武力行動とみなした。

イワノボ・ボズネセンスクの労働者のストライキは、夏のストライキのなかでとくに目だっていた。このストライキは、一九〇五年五月の末から八月のはじめまで、ほとんど二ヵ月半もつづいた。ストライキに参加した労働者は、七万にたっし、そのなかには多くの婦人もまじっていた。このストライキは、ボリシェビキ北部委員会の指導したものであった。ほとんど毎日、郊外のタルカ川のほとりで数千人の労働者の集会がひらかれた。これらの労働者は、集会で労働者自身の要求について討議した。労働者の集会では、よくボリシェビキが演説した。ストライキを弾圧するため、ツァー当局は、軍隊に労働者をけちらし、労働者に発砲するよう命令

した。数十人の労働者が殺され、数百人の労働者が負傷した。市内には、戒厳令がしかれた。しかし、労働者は頑張りつづけ、仕事につくことを拒んだ。労働者とその家族は、餓えにさらされたが、屈服しなかった。極度に疲労しきったとき、はじめて労働者はやむなく仕事にでた。ストライキは、労働者をきたえあげた。労働者階級は、このストライキのなかで、勇敢で、ねばり強く、断固として、力をあわせてたたかう手本を示した。

イワノボ・ボズネセンスクの労働者は、このストライキのときに、全権代表ソビエトをつくった。これは、実際にはロシアにおける最初の労働者代表ソビエトの一つであった。

イワノボ・ボズネセンスクの労働者にとって政治教育のための真の学校となった。

労働者の政治ストは、全国をわきたたせた。農村も、都市につづいて立ちあがった。春から農民の暴動がはじまった。農民は、一団または一団と立ちあがって地主に反対し、地主の領地や製糖工場、酒造場をこわし、地主の邸宅や屋敷をやきはらった。多くの地方の農民は、地主の土地をうばいとり、地主の森林を大々的に伐採し、地主の土地を人民にわたすよう要求した。農民は、地主の麦やその他各種の穀物をうばいとって、餓えている人びとに分けあたえた。ふるえあがった地主は、やむなく都市に逃げていった。ツァー政府は、農民の蜂起を鎮圧するため、兵士とコサックをおくった。軍隊は、農民に発砲し、「張本人」を逮捕し、鞭うち、拷問にかけた。しかし、農民は闘争をやめなかった。

農民運動は、ロシア中部、ボルガ川流域、後カフカズ、とくにグルジヤで、日ましに広範に燃えひろがっていった。

社会民主主義者は、ますます深く農村にはいっていった。党中央は、農民にあてて「農民のみなさん、われ

われはみなさんにうったえる」というアピールをだした。トゥベリー、サラトフ、ポルタウ、チェルニゴフ、エカチェリノスラフ、チフリス、そのほか多くの地区の社会民主党委員会も、農民にあてたアピールをだした。社会民主党員は、農村で集会をひらき、農民のサークルをつくり、農民委員会を結成した。一九〇五年の夏、多くの地方で、社会民主党員の組織した農業労働者のストライキがおこった。

しかし、これはまだ農民闘争のほんのはじまりであった。農民運動はわずか八十五郡、つまりツァー・ロシアのヨーロッパ部分にある郡総数の七分の一程度にひろがっていたにすぎない。

労働者、農民の運動と、日露戦争でのロシア軍のたびかさなる敗北は、軍隊にその影響をおよぼした。ツァー制度のよりかかっていたこの支柱はゆらぎはじめた。

一九〇五年六月、黒海艦隊の戦艦「ポチョムキン」に蜂起がおきた。この戦艦は、当時オデッサの近くに停泊していた。オデッサの市内では、労働者のゼネストがおこなわれていた。蜂起した水兵は、最も憎んでいた将校たちをかたづけたあと、この戦艦をオデッサに回航した。戦艦「ポチョムキン」は、革命のがわにうつったのである。

レーニンは、この蜂起を非常に重視した。ボリシェビキがこの運動を指導し、これを、労働者、農民、地方守備隊とむすびつけることが必要だ、とレーニンは考えた。

ツァーは、「ポチョムキン」を鎮圧するために軍艦を出動させたが、これらの軍艦の水兵は、蜂起した自分たちの同志に発砲することを拒否した。数日のあいだ、戦艦「ポチョムキン」の艦上には革命の赤旗がひるがえっていた。しかし、一九〇五年当時のボリシェビキは、その後の一九一七年の場合とちがって、運動を指導

する唯一の政党ではなかった。「ポチョムキン」には、多くのメンシェビキ、社会革命党員、無政府主義者がいた。だから、この蜂起には、社会民主主義者の一部が参加していたにもかかわらず、まだ正しい、十分経験にとんだ指導がなかった。一部の水兵は、決定的な瞬間に動揺した。黒海艦隊のそのほかの軍艦は、蜂起した戦艦「ポチョムキン」に呼応しなかった。この革命的戦艦は、石炭と食糧が不足したため、やむなくルーマニア海岸におもむき、ルーマニア当局に投降した。

戦艦「ポチョムキン」の水兵たちの蜂起は、失敗におわった。のちにツァー政府の手におちた水兵は、裁判にかけられ、一部は死刑、一部は流刑に処せられた。しかし、蜂起というこの事実そのものは、きわめて重要な意義をもっていた。戦艦「ポチョムキン」での蜂起は、陸海軍での最初の大衆的革命行動であり、ツァーの軍隊の大部隊が革命のがわにうつった最初の事件であった。この蜂起は、労働者と農民、とくに陸海軍の兵士大衆自身に、陸海軍が労働者階級と結びつかなければならず、人民と結びつかなければならないという考えを、いっそうはっきりと、いっそう切実に理解させた。

労働者が大衆的政治ストとデモにうつったこと、農民運動がつよまったこと、人民が軍隊、警察と武力衝突をしたこと、黒海艦隊で蜂起がおこったこと、――こうしたすべてのことは、人民の武装蜂起の条件が熟してきていることを物語っていた。こうした状態になったので、自由主義的ブルジョワ階級も真剣に行動しなければならなくなった。かれらは、革命をおそれていたが、また、革命をだしにつかってツァーをおどしてもいた。かれらは、ツァーと取引して革命に反対し、「人民のために」わずかな改良を要求して、人民を「なだめ」革命勢力を分裂させ、こうすることによって、「革命による惨禍」をさけようとしていた。自由主義的な地主は、

「土地をさいて農民にあたえなければなるまい。そうしないと、かれらはわしらをひきさいてしまうにちがいない」といった。自由主義的ブルジョア階級は、ツァーと権力を分担する準備をしていた。その当時、レーニンは、労働者階級の戦術と自由主義的ブルジョア階級の戦術について、「プロレタリア階級は闘争しているが、ブルジョア階級は権力をぬすみとろうとしている」とのべた。

ツァー政府は、ひきつづき凶悪な手段で労働者、農民を弾圧したが、弾圧の手段だけでは革命に対処できないことを見ないわけにはいかなかった。それで、ツァー政府は、弾圧の手段のほかに、柔軟政策をとるようになった。つまり、一方では、挑発者をつかってロシアの各民族人民を争わせ、ユダヤ人虐殺事件をひきおこしたり、アルメニア人とタタール人を殺しあわせたりした。他方では、国民会議あるいは国会といったたぐいの「代議機関」の召集を約束し、立法権をもたせないという条件で、その国会原案の作成を大臣ブルィギンに委任した（訳注：国民会議〔ゼムスキー・ソボル〕とは、一六〜一七世紀に国家の重要問題を政府と審議するためにつくられた一種の身分制議会。国会〔デューマ〕は、ツァー・ロシアの立法機関で、反民主的選挙法によって選出された）。こうした方法をとったのも、革命勢力を分裂させ、人民のなかの穏健な階層を革命からきりはなすためであった。

ボリシェビキは、人民代議制を愚弄したこの茶番劇をぶちこわすために、ブルィギン国会のボイコットを宣言した。

これに反して、メンシェビキは、国会を打ちこわさないことにきめ、これに参加すべきだと考えた。

三、ボリシェビキとメンシェビキの戦術上での意見の相違　第三回党大会　レーニンの著書『民主主義革命における社会民主党の二つの戦術』　マルクス主義党の戦術的基礎

革命は、社会のあらゆる階級をうごきださせた。革命によって国内の政治生活に変動がおこったため、これらの階級はそれまでの居なれた地位からはなれ、新しい情勢に応じて自己を再編成せざるをえなくなった。どの階級、どの政党も、自分たちの戦術と行動路線、他の階級にたいする態度、政府にたいする態度をきめることに力をいれた。ツァー政府でさえも、いわゆるブルィギン国会という「代議機関」の召集を約束するかたちで、政府としては異例の新しい戦術をたてざるをえなかった。

社会民主党も、自分たちの戦術をたてることが必要であった。日ましに高まる革命の高揚が、そのことを要求していた。当時プロレタリア階級の直面していた、一刻もゆるがせにできない実際問題が、そのことを要求していた。つまり、武装蜂起の組織、ツァー政府の打倒、臨時革命政府の樹立、また、この政府に社会民主党は参加すべきかどうか、農民にどのような態度をとるか、自由主義的ブルジョア階級にどのような態度をとるか、これがその問題であった。社会民主党は、統一的な、綿密なマルクス主義的戦術をたてる必要があった。

しかし、メンシェビキの日和見主義的立場と分裂策動のために、ロシア社会民主党は、当時、二つの政治集

団に分裂していた。そのときの分裂は、まだ完全な分裂とみなすことはできなかった。また、このことは二つの政治集団も、まだ形式的には二つの異なる政党ではなかった。しかし、実際には二つの別々の党によく似ており、それぞれ自分たちの中央と自分たちの機関紙をもっていた。

ところが、メンシェビキが党内の多数派とのあいだに、組織問題でのこれまでの意見の相違のほか、さらに戦術問題での新しい意見の相違をつけくわえたので、分裂はいっそう深くなった。

統一的な党がなかったので、統一的な党の戦術もありえなかった。

このとき、もしも、すぐに第三回定期党大会を召集して、統一的な戦術をきめ、大会決定の誠実な実行と大会多数派の決定への服従を少数派に義務づければ、当時の状態からぬけだす道をみいだすことができたかもしれなかった。ボリシェビキがメンシェビキに提起したのは、こうした道であった。しかし、メンシェビキは、第三回大会という言葉をきくことさえいやがった。ボリシェビキは、党が承認し全党員が実行するような戦術のないままに党をこれ以上放置しておくのは、罪悪であると考えた。それで、第三回党大会召集の主導権を自分たちでとる決意をかためた。

大会には、ボリシェビキもメンシェビキも、すべての党組織が招かれた。しかし、メンシェビキは、第三回大会への参加を拒否し、自分たちの大会を召集することをきめた。メンシェビキは、自分たちのところでは、代議員が少数であったので、大会を会議とよんだ。しかし、実際は、大会、つまりメンシェビキの党大会であった。この会議の決定は、全メンシェビキがかならず実行しなくてはならないものであった。

一九〇五年四月、ロンドンでロシア社会民主党第三回大会がひらかれた。大会には、二十のボリシェビキ委

員会を代表する二十四人の代議員が出席した。大きな党組織は、すべて代議員をおくった。
大会は、メンシェビキを「党の脱落部隊」と非難したあと、党の戦術をきめる当面の問題に移った。
大会と同時に、ジュネーブではメンシェビキの会議がひらかれた。
「二つの大会――二つの党」と、レーニンは当時の情勢を規定した。
大会と会議は、どちらも実際には同じ戦術問題を討議したが、両者は、この問題について全く相反する決議を採択した。大会と会議でそれぞれ採択された二つの異なる決議をみれば、第三回党大会とメンシェビキの会議とのあいだ、ボリシェビキとメンシェビキとのあいだにはどのような深い戦術上の相違があったかを知ることができる。
これらの意見の相違の基本点は、つぎのとおりである。
第三回党大会の戦術路線。大会はつぎのように考えた――いまおきている革命は、ブルジョア民主主義的性質の革命であり、いまのところ資本主義のもとで可能な範囲をこえることはできないが、しかし、この革命の完全な勝利に関心をもっているのは、だれよりもまずプロレタリア階級である。なぜなら、この革命の勝利によって、プロレタリア階級は、自分自身を組織し、政治的に地位をたかめ、勤労大衆を政治的に指導する経験と能力とを身につけ、ブルジョア革命から社会主義革命に移行する可能性をもつべきであるからである、と。
ブルジョア民主主義革命の完全な勝利を見通したプロレタリア階級のこうした戦術を支持できるのは、農民だけである。なぜなら、革命の完全な勝利なしには、農民は、地主をくつがえすことも、地主の土地を手にいれることもできないからである。だから、農民はプロレタリア階級の本来の同盟者である。

自由主義的ブルジョア階級は、この革命の完全な勝利をのぞんでいない。なぜなら、かれらは、自分がなによりもおそれている労働者農民大衆をむちうつ鞭として、ツァーの権力を必要としているからである。かれらは、ツァー政府の権限を少しばかり制限するだけで、ツァーの権力は残そうと努めるだろう。だから、自由主義的ブルジョア階級は、立憲君主制を土台に、ツァーと取引することによって、問題をかたづけようとするであろう。

革命が勝利するのは、つぎのようなばあいだけである。つまり、プロレタリア階級が革命を指導するばあい、革命の指導者としてのプロレタリア階級が農民との同盟を確保するばあい、自由主義的ブルジョア階級が孤立させられるばあい、社会民主党が、ツァー制度に反対する人民の蜂起を積極的に組織するばあい、蜂起が勝利した結果、反革命の根をとりのぞき、全人民的な憲法制定会議を召集することができるような臨時革命政府が樹立されるばあい、革命を最後までやりぬくために社会民主党が有利な条件のもとでこの臨時革命政府への参加をこばまないばあいがそれである。

メンシェビキの会議の戦術路線。革命はブルジョア革命であるから、自由主義的ブルジョア階級だけが革命の指導者となることができる。プロレタリア階級は、農民に接近すべきではなく、自由主義的ブルジョア階級に接近すべきである。このばあい大切なことは、自分の革命的行動で自由主義的ブルジョア階級をおじけづかせないことであり、革命に背をむける口実を、自由主義的ブルジョア階級にあたえないことである。なぜなら、自由主義的ブルジョア階級が革命から逃げだすと、革命がよわまるからである。

蜂起は、勝利する可能性がある。しかし、社会民主党は、自由主義的ブルジョア階級をおじけづかせないよ

う、蜂起が勝利したあと、わきへ退くべきである。蜂起の結果、臨時革命政府が樹立される可能性はある。しかし、社会民主党は、これに絶対に参加すべきではない。なぜなら、この政府は、その性質上、社会主義的な政府とはなりえない。そして、大切なことは、社会民主党がこの政府に参加し、革命的行動をとるなら、そのことによって、自由主義的ブルジョア階級をおじけづかせ、革命をぶちこわしてしまうおそれがあるからである。

革命の見通しからいえば、いちばんいいのは、国民会議あるいは国会のような何らかの代議機関をつくり、労働者階級が外部から圧力をかけて、それを憲法制定会議にかえるか、もしくは憲法制定会議の召集を促進することであろう。

プロレタリア階級は純労働者的な特殊な利害をもっている。それで、プロレタリア階級は、自分自身のこうした利害に心をくだいておればいいので、ブルジョア革命の指導者になろうなどと考えてはいけない。なぜなら、ブルジョア革命は一般的政治革命であり、したがって、プロレタリア階級だけでなく、すべての階級にかかわりのあることだからである。

簡単にいえば、以上がロシア社会民主労働党の二つの政治集団の二つの戦術である。

レーニンは、歴史的意義をもつその著書『民主主義革命における社会民主党の二つの戦術』のなかで、メンシェビキの戦術に典型的な批判をくわえ、ボリシェビキの戦術に天才的な論証をあたえた。

この著書は、一九〇五年七月、第三回党大会が閉会して二ヵ月後に、出版された。本の題からみると、レーニンはこの著書のなかで、ブルジョア民主主義革命の時期だけの戦術問題をのべ、ロシアのメンシェビキだけ

を念頭においたように思えるかもしれない。しかし実際には、レーニンは、メンシェビキの戦術を批判するとともに、国際日和見主義の戦術をもあばきだしている。また、ブルジョア革命の時期のマルクス主義者の戦術を論証し、ブルジョア革命と社会主義革命とを区別するとともに、ブルジョア革命から社会主義革命に移行する時期のマルクス主義的戦術の基礎をもさだめているのである。

レーニンがその小冊子『民主主義革命における社会民主主義者の二つの戦術』のなかで展開した基本的戦術原則は、つぎのとおりである。

（一）レーニンのこの著書をつらぬいている基本的戦術原則は、プロレタリア階級はロシアにおけるブルジョア民主主義革命の首領、指導者となることができ、またならなくてはならない、という思想である。

レーニンは、この革命がブルジョア的性質のものであることを認めていた。レーニンが指摘しているように、この革命は「民主主義革命の範囲を直接とびでることができない」からである。しかし、レーニンは、また、この革命は上層部の革命ではなく、全人民、全労働者階級、全農民を行動に立ちあがらせる人民革命である、とみていた。それで、レーニンは、プロレタリア階級にとってのブルジョア革命の意義をよわめ、この革命でのプロレタリア階級の役割をひきさげ、この革命からプロレタリア階級を遠ざけようとするメンシェビキの企ては、プロレタリア階級の利益を裏切るものだ、とみなした。

レーニンは、つぎのようにかいている。

「マルクス主義は、プロレタリアにたいして、ブルジョア革命から遠ざかれとも、これに参加するな

とも、その指導権をブルジョア階級にあたえよとも、教えていない、反対に、もっとも積極的に参加せよ、徹底したプロレタリア的民主主義のため、革命を徹底的にやりぬくために、もっとも断固として奮闘せよ、と教えている。」（レーニン『民主主義革命における社会民主党の二つの戦術』）

レーニンは、さらにつぎのように書いている。

「いまのところ、完全な政治的自由、民主共和制のほかには、社会主義の到来をはやめる手段がなく、またありえないことを、忘れてはならない。」（前掲書）

レーニンは、革命の結果につぎの二つがありうることを予見した。

（1）ツァー制度にたいする決定的勝利、ツァー制度の打倒、民主共和制度の樹立におわるか、

（2）それとも、力が足りないばあいには、ツァーとブルジョア階級との、人民の利益を犠牲にした取引、なんらかの尻きれ憲法、手っ取りばやくいえば、こうした憲法の茶番劇でおわる可能性もある。

プロレタリア階級は、ツァー制度にたいする、決定的勝利という最善の結末をのぞんでいる。しかし、こうした結末は、プロレタリア階級が、革命の首領となり、指導者となったときに、はじめて実現されるのである。

レーニンはつぎのようにかいている。

「革命の結末は、労働者階級が、専制制度を攻撃するうえでは強力だが、政治的には無力なブルジョア階級の助手という役割をはたすか、それとも、人民革命の指導者という役割をはたすか、にかかっている。」（レーニン『民主主義革命における社会民主党の二つの戦術』）

レーニンは、プロレタリア階級は、ブルジョア階級の助手となる運命から脱して、ブルジョア民主主義革命の指導者となる可能性を完全にもつことができる、と考えた。レーニンによると、こうした可能性とは、つぎのようなものである。

第一に、「プロレタリア階級は、その地位からいって、最も先進的な、唯一の徹底的に革命的な階級であるので、ロシアの一般民主主義的革命運動で指導的役割をはたす使命をもっている。」（前掲書）

第二に、プロレタリア階級は、ブルジョア階級に依拠しない独自の政党をもち、この政党によって、「統一した、独立の政治勢力」（前掲書）に結集する可能性をあたえられる。

第三に、プロレタリア階級は、ブルジョア階級よりも、さらにつよく革命の徹底的勝利をのぞんでいるので、「ある意味からいえば、ブルジョア革命は、ブルジョア階級にとってよりも、プロレタリア階級にとって、いっそう有利である。」（前掲書）

レーニンはつぎのようにかいている。

「ブルジョア階級にとっては、プロレタリア階級に反対するための旧時代の一部の遺物、たとえば君主制度や常備軍などにたよることが有利である。ブルジョア階級にとっては、ブルジョア革命が、あまりにも断固として旧時代のすべての遺物を一掃してしまうのでなく、むしろその一部をのこしておくほうが、つまり、この革命が、十分に徹底したものでなく、最後までやりぬかれず、容赦のないものでないほうが、有利である。………ブルジョア階級にとっては、ブルジョア民主主義的な方向に必要な改革が、よりゆっくりと、次第に、慎重に、ためらいながら、革命をへないで改良的におこなわれるほうが、

有利である。………これらの改革が、庶民、すなわち農民やとくに労働者の、革命的な自発性、主動性、精力を、できるだけ発展させせないほうが、有利である。労働者にとっていっそう容易になる』からであに『銃を一方の肩から他方の肩へかつぎかえることが、労働者にとっていっそう容易になる』からである。つまり、ブルジョア革命によって労働者が手にいれる武器や自由、農奴制度撤廃によってうまれる民主主義的機関を、逆に、ブルジョア階級自身に反対するために利用するのが、労働者にとっていっそう容易になるからである。これに反して、労働者階級にとっては、ブルジョア民主主義に必要な改革が、改良主義の道をたどらず、革命の道によって実現するほうが、有利である。なぜなら、改良主義という道は、だらだらと長びく道であり、人民という有機体のくさった部分がひどく苦しみながら徐々に死滅していく道だからである。これらの部分がくさることによって最も苦しむのは、だれよりもプロレタリア階級と農民である。革命という道は、すぐにくさった部分を直接切りとり、プロレタリア階級の苦しみを最もすくなくする道であり、君主制度と、それにともなう、不快な、けがわらしい、カビのはえた、腐敗のため臭気ぷんぷんとした機関にたいして、最も譲歩や手加減をしない道である。」(前掲書)

レーニンは、つづけてつぎのように書いている。

「だからこそ、プロレタリア階級は、共和制のための闘争のいちばん先頭にたっており、ブルジョア階級を尻ごみさせないようにという見さげはてた愚劣な意見を、軽蔑の目で拒否するのである。」(前掲書)

プロレタリア階級の革命指導の可能性を現実性にかえるためには、プロレタリア階級が実際にブルジョア革命

の首領、指導者になるためには、レーニンによれば、すくなくとも二つの条件が必要である。

第一に、そのためには、ツァー制度にたいする決定的勝利をのぞみ、プロレタリア階級の指導をすすんでうけいれるような同盟者が、プロレタリア階級に必要である。これは、指導という思想そのものが要求している。指導者は、指導されるものがいなければ指導者ではなくなり、首領は、ひきいられるものがいなければ、首領ではなくなるからである。農民こそ、このような同盟者である、とレーニンは考えた。

第二に、そのためにはプロレタリア階級と革命の指導権をあらそい、自分こそ革命の唯一の指導者になろうとはかっている階級を、指導の舞台から追いだし、孤立させることが必要である。これもやはり、指導という思想そのものが要求している。この思想は、革命に二人の指導者が存在することをまったくゆるさないからである。自由主義的ブルジョア階級こそ、このような階級である、とレーニンは考えた。

レーニンは、つぎのように書いている。

「民主主義制度のための徹底した戦士となりうるのは、プロレタリア階級だけである。プロレタリア階級が、民主主義制度のための勝利の戦士となりうるのは、農民大衆がプロレタリア階級の革命闘争にくわわるという条件があるばあいだけである。」（前掲書）

さらに

「農民には、多数の半プロレタリア分子のほかに、また小ブルジョア階級分子もふくまれている。それが農民を動揺的なものにし、プロレタリア階級を、階級性の非常に厳格な党に結束される。しかし、農民の動揺性とブルジョア階級の動揺性とは、根本的に異なるものである。農民は、いまでは、私的所

有を無条件に保全することよりも、むしろ私的所有の主要な形態の一つである地主の土地を没収することのほうをのぞんでいるからである。そのため、農民は、社会主義者になることはないし、小ブルジョア階級であることはやめないとしても、民主主義革命を支持する完全な、もっとも急進的な勢力となりうる。農民を啓発する革命的事件の進行が、ブルジョア階級の裏切りやプロレタリア階級の失敗によってあまりにも早く中断されないかぎり、農民はかならずそうした民主主義革命を支持する勢力となるであろう。以上のような条件のもとで、農民はかならず革命と共和制の支柱となるであろう。なぜなら、完全に勝利した革命だけが、土地改革の面ですべてのものを農民にあたえ、かれらが夢み、のぞんでおり、ほんとうに必要としているすべてのものを、農民にあたえることができるからである。」(前掲書)

メンシェビキは、ボリシェビキのこのような戦術は「ブルジョア階級を革命の事業からしめだし、革命の展開力をよわめるものだ」といって反対したが、レーニンはこのメンシェビキの反対意見を検討して、このような反対意見は「革命を裏切る戦術」であり、「プロレタリア階級をブルジョア階級のあわれな腰巾着にかえてしまう戦術」である、とみなした。当時、レーニンはつぎのようにかいた。

「勝利するロシア革命のなかで農民のはたす役割を真に理解しているものは、ブルジョア階級が尻ごみすると革命の展開力がよわまる、などいえるはずがない。なぜなら、実際には、ブルジョア階級が尻ごみし、農民大衆が積極的な革命家として、プロレタリア階級とともに奮闘するとき、そのときこそ、ロシア革命のほんとうに大きな展開力が開始され、そのときこそ、ブルジョア民主主義変革の時代に可能な、もっとも大きな革命の展開力がくりひろげられるからである。われわれの民主主義革命をあくま

でもやりぬくためには、ブルジョア階級につきものの不徹底性を麻痺させるような勢力、『まさにブルジョア階級を尻ごみさせる』ような勢力に、依拠しなくてはいけない。」(前掲書)

以上が、プロレタリア階級はブルジョア革命の指導者だとする基本的な戦術の原則であり、プロレタリア階級はブルジョア革命のなかで指導権(指導的役割)をにぎるべきだとする基本的な戦術原則であって、レーニンがその著書『民主主義革命における社会民主党の二つの戦術』のなかで展開したものである。

これは、ブルジョア民主主義革命の戦術問題にかんするマルクス主義政党の新しい方針であって、これまでマルクス主義者の兵器庫にあった戦術方針とはまったくちがったものであった。これまで、たとえば西ヨーロッパ諸国のブルジョア革命では、指導的役割はブルジョア階級の手ににぎられて、プロレタリア階級はいやでもおうでもブルジョア階級の助手になり、農民はブルジョア階級の予備軍にさせられていた。当時、マルクス主義者は、こうした組みあわせを多かれ少なかれ不可避と考えていたが、同時にまた、プロレタリア階級はこうした状況のもとでできるだけ自分自身の当面の階級的要求を堅持し、自分自身の政党をもつべきである、と言っていた。いま、新しい歴史的環境のもとでは、レーニンの方針にそって、プロレタリア階級が、ブルジョア革命の指導力となり、ブルジョア階級が革命の指導から追いだされ、農民がプロレタリア階級の予備軍となる、というように事態は変化したのである。

プレハーノフもプロレタリア階級の指導権を「主張したことがある」というものがいるが、これは誤解にもとづくものである。たしかに、プレハーノフは、プロレタリア階級の指導権の思想に色目をつかい、口先ではこの思想を認めることも辞さなかった。しかし、かれは、実際にはこの思想に頭から反対していた。プロレタ

リア階級の指導権というのは、労農同盟の政策、自由主義的ブルジョア階級を孤立させる政策のもとで、プロレタリア階級がブルジョア革命のなかで、指導的役割をはたすことに、その意義がある。ところが、周知のように、プレハーノフは、自由主義的ブルジョア階級を孤立させる政策に反対し、かれらと妥協する政策を主張し、労農同盟の政策に反対した。実際には、プレハーノフの戦術方針は、プロレタリア階級の指導権を否定するメンシェビキの方針なのであった。

（二）レーニンは、ツァー制度打倒と民主共和制実現のもっとも重要な手段は必勝の人民武装蜂起である、とみなした。レーニンは、メンシェビキとは反対に、「一般民主主義的革命運動は、すでに武装蜂起を必要とするところまできている」、「蜂起のためにプロレタリア階級を組織することは」すでに「党の本質的で、主要な、必要な任務の一つとして日程にのぼされている」、「プロレタリア階級を武装し、蜂起を直接指導できるようにするために、もっとも強力な処置を講じる」ことが必要である、と考えた。（レーニン『民主主義革命における社会民主党の二つの戦術』）

大衆を蜂起にみちびき、それを全人民の蜂起とするためには、大衆の革命的創意性を発揮させ、蜂起のためにかれらを組織し、ツァー制度の権力機関を瓦解させることができるようなスローガン、または呼びかけを大衆にあたえる必要がある、とレーニンは考えた。レーニンは、第三回党大会での戦術問題についての決定が、そのようなスローガンであるとみなした。レーニンの著書『民主主義革命における社会民主党の二つの戦術』は、これらの決定を擁護するためにかかれたものである。

レーニンは、つぎのようなものをこうしたスローガンとみなした。

（1）「蜂起のはじめとその進行過程で重大な意義をもつ大衆的、政治的ストライキ」をおこなうこと。（前掲書）
（2）「八時間労働制その他、労働者階級の切実な要求を革命的手段で即時実現すること。」（前掲書）
（3）地主の土地の没収にいたるまでの「あらゆる民主改革を」革命的手段で「実施する」ため、「ただちに革命的農民委員会をつくること。」（前掲書）
（4）労働者を武装させること。

ここでとくに注目に値するのは、つぎの二点である。

第一に、都市には八時間労働制、農村には民主改革を、革命的手段によって実現する戦術。つまり、権力も考慮にいれず、法律も考慮にいれず、権力も法律も無視して、現行の法律を破棄し、なにはばかることのないやりかた、事後届出のやりかたで新しい秩序をうちたてるというそのような実現の仕方である。これは、新しい戦術手段である。こうした手段をとれば、ツァー制度の権力機関を麻痺させ、大衆の積極性と自発的創意性を発揮させることができる。この戦術を基礎として、都市には革命的ストライキ委員会、農村では革命的農民委員会がそれぞれ成長し、のちに前者は労働者代表ソビエト、後者は農民代表ソビエトに発展した。

第二に、大衆的政治ストライキの採用、政治的ゼネストの採用。こうしたストライキは、のちに革命の進行過程で、大衆を革命的に動員するもっとも重要な役割をはたした。これは、プロレタリア階級の手ににぎられたきわめて重要な、新しい武器で、それまではマルクス主義党の実践において知られていなかったものであるが、のちには一般に公認されるようになった。

レーニンは、人民の蜂起が勝利したときには、ツァー政府のかわりに臨時革命政府を樹立すべきだ、と考えた。臨時革命政府の任務は、革命の成果をかため、反革命の抵抗を鎮圧し、ロシア社会民主労働党の最低綱領を実現することにある。これらの任務を実現することとなしには、ツァー制度にたいして決定的勝利をおさめることはできない、とレーニンは考えた。しかし、これらの任務を実現し、ツァー制度にたいして決定的な勝利をおさめるためには、臨時革命政府は、ありきたりの政府であってはならず、勝利した階級である労働者と農民の独裁の政府でなければならない。すなわち、それは労働者と農民の革命的独裁でなければならない。「革命後のどんな臨時国家制度も、独裁でなければならず、しかも強力な独裁でなければならない」というマルクスの有名な原理にもとづいて、レーニンの到達した結論は臨時革命政府がツァー制度にたいする決定的勝利を保証するためには、労働者と農民の独裁以外にはありえない、ということであった。

　レーニンは、つぎのようにかいている。

　「ツァー制度にたいする革命の決定的な勝利は、**労働者と農民の革命的、民主主義的独裁**である。……そして、このような勝利こそは、まぎれもなく独裁であろう。つまり、この勝利は、『合法的な』『平和的方法で』つくられたなんらかの機関をよりどころとするのではなく、かならず軍事力、大衆の武装、蜂起をよりどころにしないわけにはいかないであろう。それは、独裁以外でありえない。なぜなら、プロレタリア階級と農民がただちにぜひとも必要としているような改革を実現すれば、かならず地主と大資本家およびツァー制度の死にものぐるいの反抗をひきおこすからである。独裁がなければ、こうした抵抗をうちやぶることも、反革命のたくらみを撃退することもできない。しかし、これは、もちろん社

会主義的独裁ではなく、民主主義的独裁である。それは、（革命の発展過程での多くの中間的段階をへなければ）資本主義の土台をゆりうごかすことができない。それは、うまくいっても、農民に有利な、土地所有の根本的再配分をやり、共和制にいたるまでの徹底的な完全な民主主義を実行し、農村の生活だけでなく工場の生活からもアジア的、奴隷的なものを根こそぎ一掃し、労働者の生活状態の真剣な改善とその生活水準向上の基礎をきずき、そして、最後に——順序からは最後であるが、重要さの点では最後ではない——革命の焔をヨーロッパにもえひろがらせるくらいのものであろう。この勝利は、まだ、わが国のブルジョア革命を社会主義革命にかえるようなものではけっしてない。民主主義的変革は、ブルジョア的社会経済関係のワクを直接とび出るようなものではない。しかし、それにもかかわらず、この勝利は、ロシアのためにも全世界のためにも、その将来の発展にとってきわめて大きな意義をもつであろう。ロシアではじまった革命のこの決定的勝利ほど、全世界のプロレタリア階級の革命的気力をこれほどたかめるものはほかになく、全世界のプロレタリア階級の完全な勝利の道をこれほど縮めるものは、ほかにないであろう。」（レーニン『民主主義革命における社会民主党の二つの戦術』）

社会民主党は臨時革命政府にどのような態度をとるか、この政府に参加すべきかどうかについては、レーニンは、この問題についての第三回党大会の決議を完全に堅持した。決議のなかでは、つぎのようにのべられている。

「力関係や、まえもって正確には判定できないそのほかの要素のいかんによっては、あらゆる反革命の企てと容赦なくたたかい、労働者階級の独自の利益をまもりぬくために、わが党の全権代表が臨時革

命政府に参加することはゆるされる。こうした参加のための必要な条件は、党が自己の代表にたいして厳格な監督をおこない、また社会民主党の独立性を断固としてまもることである。社会民主党は完全な社会主義的変革の実現のために努力し、したがって、すべてのブルジョア政党にたいし非妥協的な敵対的態度をとらなければならない。社会民主党の臨時革命政府への参加が可能であるかどうかにかかわらず、革命の戦果をまもり、固め、おしひろげるために、社会民主党に指導される武装したプロレタリア階級は、臨時政府にたいしてたえず圧力をくわえる必要があるという考えを、プロレタリア階級のもっとも広範な層のあいだで宣伝すべきである。」（レーニン『民主主義革命における社会民主党の二つの戦術』）

メンシェビキは、これに反対していった。臨時政府はやはりブルジョア政府であるから、フランスの社会党員ミルランがフランスのブルジョア政府に参加したような誤りをくりかえしたくないなら、社会民主党員は、このような政府に参加すべきではない、と。こうした意見に反論して、レーニンはつぎのようにいった。メンシェビキは、ここでは二つの異なった事がらを混同し、問題をマルクス主義的観点でとりあつかう能力がないことを自ら暴露している。フランスでは、国内に革命的情勢がない時期に、社会党員が反動的なブルジョア政府に参加したことが問題であった。だから、そのとき社会党員はこのような政府に参加すべきではなかった。ところが、ロシアでは、革命のはげしい高揚の時期に、革命の勝利のためたたかっている革命的ブルジョア政府に社会主義者の参加することが問題となっている。だから、いま社会民主党員が、このような政府に参加することは、ゆるされうることであり、条件が有利であれば、当然そうすべきである。これは、反革命を、「下

から」、外部からたたくだけでなく、「上から」、政府の内部からもたたくためである。

(三)　レーニンは、ブルジョア革命の勝利と、民主共和制の樹立をめざして奮闘したが、民主主義的段階に長居したり、革命運動の規模をブルジョア民主主義的任務の達成の範囲にとどめたりしようとは、けっして考えなかった。これとは反対に、レーニンは、民主主義的任務が達成されれば、プロレタリア階級とそのほかの被搾取大衆は、ただちに社会主義革命をめざす闘争をはじめなければならない、と考えた。レーニンは、このことをよく知っていたので、社会民主党はブルジョア民主主義革命が社会主義革命に成長転化するよう、あらゆる手段を講じなければならない、と考えた。レーニンが労働者と農民の独裁を必要としたのは、革命がツァー制度に勝利したあと、革命をここでおわらせるためではなく、革命の状態をできるだけひきのばし、反革命の残りカスを徹底的に消滅し、革命の焔をヨーロッパにもえひろげ、そして、このあいだにプロレタリア階級が政治的に教育され、偉大な軍隊に組織されるようにして、社会主義革命へまっすぐに移行しはじめるためであった。

ブルジョア革命の展開規模はどのようなものか、マルクス主義党はこの革命の展開規模にどのような性格をあたえなければならないかについて、レーニンはつぎのように書いている。

「プロレタリア階級は、民主主義的変革を徹底的におしすすめなければならない。そのためには、農民大衆を味方にひきつけて、力で専制制度の抵抗を粉砕し、ブルジョア階級の動揺性を麻痺させてしまわなければならない。プロレタリア階級は、社会主義的変革をなしとげなければならない。そのためには、半プロレタリア大衆を味方にひきつけて、力でブルジョア階級の抵抗を粉砕し、農民と小ブルジョ

ア階級の動揺性を麻痺させてしまわなければならない。これが、プロレタリア階級の任務であるが、新イスクラ派（すなわちメンシェビキ――編者注）は、革命の展開規模についてのかれらのあらゆる議論や決議のなかで、これらの任務をひじょうにせまく言いあらわしている。」（前掲書）

レーニンは、さらに、つぎのようにのべている。

「完全な自由のために、徹底的な民主主義的変革のために、共和制のために、全人民、とくに農民の先頭に立て！　社会主義のために、すべての勤労者、被搾取者の先頭に立て！　実際には、これこそが革命的プロレタリア階級の政策でなければならない。これこそが、革命の時期に、労働者党のあらゆる戦術問題の解決、あらゆる実際の段取りをつらぬき、規定すべき階級的スローガンである。」（前掲書）

すこしのあいまいさものこさないよう、レーニンは、その著書『二つの戦術』を出版して二ヵ月後に、『農民運動にたいする社会民主党の態度』という論文のなかでつぎのように説明している。

「われわれは、ただちに民主主義革命から社会主義革命へ移行しはじめる。しかも、まさにわれわれの力、自覚した組織されたプロレタリア階級の力に応じて、社会主義革命への移行をはじめる。われわれは、不断革命を主張する。われわれは中途で立ちどまるようなことはしない。」

これは、ブルジョア革命と社会主義革命との相互関係の問題についての新しい方針である。これは、ブルジョア革命の末期に、社会主義革命に直接移行するため、プロレタリア階級のまわりに勢力を再編成する新しい理論である。つまり、ブルジョア民主主義革命を社会主義革命に**成長転化**させる理論である。

この新しい方針をたてるにあたって、レーニンがよりどころにしたのは、第一には、マルクスが前世紀の四

○年代末に「共産主義者同盟への呼びかけ」のなかで提起した不断革命についての有名な原理であり、第二には、マルクスが一八五六年にエンゲルスにあてた手紙のなかでのべている有名な思想、つまり、農民の革命運動をプロレタリア革命に結びつけなければならないという思想であった。マルクスは、この手紙でつぎのようにいっている。「ドイツにおけるすべての事態は、農民戦争の再版ともいうべきものによって、プロレタリア革命が支持される可能性のいかんにかかっている」と。しかし、マルクスのこの天才的な思想は、その後マルクスとエンゲルスの著作のなかでは発展させられなかった。そして、第二インターナショナルの理論家は、この思想を墓場にほうむりさり、忘れてしまうために、あらゆる手をつくした。それで、忘れられたこのマルクスの原理をふたたびあかるみにだして、完全に復活させるという任務は、レーニンの肩にかかった。しかし、このマルクスの原理を復活させるにあたって、レーニンは、それをたんにくりかえすことにとどまらなかったし、またとどまることはできなかった。レーニンは、それをさらに発展させて、ととのった社会主義革命の理論にしあげ、プロレタリア階級と都市、農村の半プロレタリア分子との同盟は、プロレタリア革命の勝利の条件であるという原理を、社会主義革命のかくことのできない新しい要素としてつけくわえたのである。

この方針は、西ヨーロッパ諸国の社会民主主義者の戦術上の見地を完全に粉砕した。その見地によると、ブルジョア革命ののちには、貧農大衆をもふくめた農民大衆は、かならず革命から去っていくにちがいない。そこで、ブルジョア革命ののちには、長い停滞の時期、すくなくとも五十年から百年の「和睦」の時期がおとずれる。その時期には、新しい社会主義革命がやってくるまで、プロレタリア階級は「平和的に」搾取され、ブルジョア階級は「合法的に」金もうけをするであろう、というのである。

レーニンのこの方針は、社会主義革命の新しい理論であって、この革命は、全ブルジョア階級に反対する孤立無援のプロレタリア階級が実現するものではなく、半プロレタリア民衆、幾百千万の「被搾取、勤労大衆」を同盟者とする、指導者としてのプロレタリア階級が実現するものである。

この理論によれば、ブルジョア革命において農民との同盟のもとで実現されるプロレタリア階級の指導権は、社会主義革命において、その他の被搾取、勤労大衆との同盟のもとで実現されるプロレタリア階級の指導権に成長転化させなければならない。そして、労働者と農民の民主主義独裁は、プロレタリア階級の社会主義独裁のための基礎をととのえるものでなければならない。

この理論は、西ヨーロッパ諸国の社会民主主義者のあいだでもてはやされていた理論をくつがえしてしまった。かれらは、都市、農村の半プロレタリア大衆の革命的能力を否定し、「反政府連合、あるいは革命連合がよりどころとできる社会的勢力は、わが国では、ブルジョア階級とプロレタリア階級のほかには、みあたらない」(プレハーノフの言葉で、西ヨーロッパの社会民主主義者の観点をよく代表している)ということを、その理論の出発点としていた。

西ヨーロッパ諸国の社会民主主義者は、社会主義革命のなかでは、プロレタリア階級は単独で全ブルジョア階級にたちむかうことになり、同盟者なしの単独ですべての非プロレタリア的階級・階層にたちむかうことになる、と考えた。かれらは、つぎのような事実をみようとしなかった。つまり、資本はプロレタリアだけでなく、都市、農村の幾百千万の半プロレタリア大衆をも搾取している。これらの大衆は、資本主義の抑圧をうけているので、社会を資本主義の抑圧から解放する闘争でプロレタリア階級の同盟者となりうる、というのがそ

の事実である。だから、西ヨーロッパの社会民主主義者は、ヨーロッパで社会主義革命を実現する条件はまだ熟していないと考え、社会の経済がひきつづき発展して、プロレタリア階級が民族の大多数をしめ、社会の大多数をしめるようになったときにはじめて、社会主義革命を実現する条件は熟するのだと、考えていた。レーニンの社会主義革命の理論は、西ヨーロッパの諸国の社会民主主義者のこうした反プロレタリア的な、くさった方針を完全にくつがえしてしまった。

当時、レーニンのこの理論には、社会主義が単独の一国で勝利できるという直接の結論はまだなかった。しかし、この理論には、おそかれはやかれこのような結論をくだすのに必要な、すべての、もしくはほとんどすべての基本的要素が、すでにふくまれていた。

周知のように、レーニンは、一九一五年、つまり十年後に、このような結論にゆきついたのである。

以上が、歴史的な著書『民主主義革命における社会民主党の二つの戦術』のなかで、レーニンの展開した基本的戦術原則である。

レーニンのこの著書の歴史的意義は、なによりもまず、つぎの点にある。すなわち、メンシェビキの小ブルジョア的戦術方針を思想の面からうちやぶり、ブルジョア民主主義革命のいっそうの発展とツァー制度にたいする新しい攻撃のためにロシアの労働者階級を武装し、ブルジョア革命がかならず社会主義革命へと転化する明確な見通しをロシアの社会民主主義者にさししめしたことである。

しかし、レーニンのこの著書の意義は、まだこれだけではない。その巨大な意義は、それが革命の新しい理論でマルクス主義を豊富にし、ボリシェビキ党の革命的戦術の基礎をさだめたことにある。この戦術によっ

て、わが国のプロレタリア階級は、一九一七年に、資本主義制度にたいする勝利をおさめたのである。

四、革命のいっそうの高揚　一九〇五年十月の全ロシア的な政治スト　ツァー政府の退却　ツァーの詔書　労働者代表ソビエトの出現

一九〇五年の秋、革命運動は全国各地にひろがった。運動は、非常な勢いでもりあがっていった。九月十九日、モスクワでは印刷労働者のストライキがはじまった。ストライキは、ペテルベルグやその他の多くの都市に波及した。当のモスクワでは、印刷労働者のストライキはその他の産業の労働者の援助をうけ、政治的ゼネストに発展した。

十月のはじめには、モスクワ・カザン鉄道でストライキがはじまった。一日後には、モスクワのすべての鉄道分岐点でストライキがおきた。ストライキは、またたくまに全国のすべての鉄道にひろがった。郵便と電信もとまった。全ロシアの各都市の労働者が何千人という大集会をひらき、作業をやめることをきめた。工場という工場、都市という都市、地域という地域が、つぎつぎにストライキにまきこまれていった。下級職員、学生、知識分子、たとえば弁護士、技師、医者なども、ストライキ労働者に呼応した。

十月の政治ストは、全ロシア的なストライキとなって、もっともへんぴな地域にいたるまでほとんど全国に

ひろがり、もっともおくれた層にいたるまでほとんど全労働者をまきこんだ。この政治的ゼネストには、多くの鉄道労働者、郵便電信従業員などのほか、工業労働者だけでも約百万人が参加した。国内の全生活は、とまってしまった。政府の力は、麻痺してしまった。

労働者階級は、専制制度に反対する民衆の闘争を指導した。

ボリシェビキが出した大衆的政治ストのスローガンは、りっぱに実を結んだ。

十月のゼネストがプロレタリア運動の力と威力をしめした結果、胆をつぶしたツァーは、やむなく十月十七日の詔書をだした。一九〇五年十月十七日の詔書には、「公民の自由を保障する確固とした原則、すなわち、人身の真の不可侵、信仰、言論、集会、結社の自由」が人民に約束されていた。また、立法国会を召集して、人民のあらゆる階級を選挙に参加させることも、約束されていた。

こうして、ブルィギンの諮問国会は、革命の力によって掃きすてられてしまった。ブルィギン国会のボイコットというボリシェビキの戦術は、正しかったことがわかった。

だが、それにもかかわらず、十月十七日の詔書は、やはり、民衆をだます手段であり、ツァーのペテンであり、一種の息ぬきであって、この息ぬきは、信じやすいものをねむりこませ、時間をかせぎ、力を結集して、そのあとで革命にふたたびおそいかかるため、ツァーに必要なものであった。ツァー政府は、口先では自由をあたえることを約束はしたが、実際にはなんら実質的なものをあたえなかった。労働者、農民は、いまのところ、口約束のほかには、政府からなにひとつもらえなかった。十月二十一日には、民衆の期待していたような政治大赦ではなく、ごく一部の政治犯が特赦されただけであった。同時にまた、政府は、人民の力を分裂させ

るために、幾多の血なまぐさいユダヤ人虐殺を組織し、おびただしい人びとを殺した。政府はまた革命勢力をおしつぶすために、ギャング的警察団体「ロシア人民同盟」と「ミハイル・アルハンゲル同盟」をつくった。これらの団体で大きな役割を演じたのは、反動的な地主、商人、僧侶、盗賊にちかいごろつきだったので、人民はこれを「黒百人組」とよんだ。黒百人組の連中は、警察の協力のもとで、先進的な労働者、革命的知識分子や学生を公然と殴打、殺害し、大衆の会合や市民の集会の場所を焼打ちし、集会にあつまった大衆を射殺したりした。ツァーの詔書のもたらした結果というのは、まあこんなものであった。

当時、巷には、ツァーの詔書を皮肉ったつぎのような唄がはやっていた。

「ツァーはたまげて、詔書をだした。
死んだ奴にゃ、自由をくれ、
生きている奴は監獄へ」

ボリシェビキは、十月十七日の詔書がワナであることを、大衆に説明した。かれらは、詔書をだしたあとの政府の行動に挑発の烙印をおした。ボリシェビキは、労働者に武器をとれ、武装蜂起を準備せよ、とよびかけた。

労働者は、戦闘隊をつくることにいっそう精力的にとりくんだ。十月十七日に政治ゼネストでかちとった最初の勝利につづいて、ツァー制度を打倒するため、いっそう努力をつづけ、闘争しなくてはならないことが、

労働者には、はっきりとわかってきた。

レーニンは、十月十七日の詔書を、力関係が一時ある種の均衡にたっした契機であると評価した。当時、プロレタリア階級と農民は、ツァーに詔書をださせはしたが、まだツァー制度を打倒するだけの力はなかった。他方、ツァー制度も、もはやこれまでの手段だけでは支配できなくなり、口先だけでも「公民の自由」と「立法」国会を約束せざるをえなかったのである。

十月政治ストがもりあがったとき、ツァーにたいする闘争の焔のなかから、労働者大衆の革命的創造力によって、新しい強大な武器——労働者代表ソビエトがうみだされた。

労働者代表ソビエトは、各工場の代表からなる会議で、これまでの世界になかった労働者階級の大衆的政治組織である。一九〇五年にはじめてうまれたソビエトは、一九一七年、プロレタリア階級がボリシェビキ党の指導のもとでうちたてたソビエト権力の雛形であった。ソビエトは、人民の創造精神をあらわした新しい革命的形態であった。それは、もっぱら革命的民衆によってツァー制度のあらゆる法律や規則をうちやぶってつくりだされたものである。それは、ツァー制度反対に奮起した民衆の自発性をあらわしたものであった。

ボリシェビキは、ソビエトが革命的権力の萌芽である、とみなした。そして、ソビエトがどれだけの力と意義をもつかは、もっぱら蜂起の力と成功のいかんにかかっている、と考えた。

メンシェビキはソビエトを、革命的権力の萌芽的機関であるとも、それが蜂起の機関であるとも認めなかった。かれらは、ソビエトを、民主化された都市自治体のたぐいの、地方自治機関とみなした。

一九〇五年十月十三日（新暦二十六日）、ペテルブルグのすべての工場で、労働者代表ソビエトの選挙がお

こなわれた。その夜、ソビエトの第一回会議がひらかれた。ペテルブルグにつづいて、モスクワでも労働者代表ソビエトが成立した。

ペテルブルグの労働者代表ソビエトは、ロシア最大の工業と革命の中心地のソビエトであり、ツァー帝国の首都であって、本来なら一九〇五年の革命で決定的な役割をはたすべきであった。しかし、このソビエトは、悪辣なメンシェビキの指導をうけたために、その任務をはたすことができなかった。周知のように、そのころレーニンはペテルブルグにはおらず、まだ国外にいた。メンシェビキは、レーニンのいないのに乗じてペテルブルグのソビエトにもぐりこみ、そこの指導部をうばいとった。こうした事情のもとで、フルスタリョフ、トロツキー、パルウスらのメンシェビキが、ペテルブルグのソビエトを蜂起政策反対の道にひきいれることに成功したのは、おどろくにあたらない。かれらは、兵士をソビエトに接近させず、この両者を結びつけた共同闘争をするようなこともせず、逆に兵士がペテルブルグから撤退するよう要求した。労働者を武装し、蜂起の準備をさせるかわりに、ソビエトは、足ぶみをつづけ、蜂起の準備に反対した。

モスクワの労働者代表ソビエトは、革命のなかで、これとは全くちがった役割をはたした。モスクワのソビエトは、成立の当初から、革命的政策を徹底的に遂行した。モスクワのソビエトは、ボリシェビキに指導されていた。ボリシェビキの努力で、モスクワには、労働者代表ソビエトのほかに、兵士代表ソビエトもつくられた。モスクワのソビエトは、武装蜂起の機関となった。

一九〇五年の十月から十二月にかけて、多くの都市、ほとんどすべての労働者中心地に、労働者代表ソビエトがつくられた。兵士・水兵代表ソビエトを組織し、それを労働者代表ソビエトと合同させようという試みが

なされた。一部の地方では、労働者・農民代表ソビエトがつくられた。

ソビエトの影響は、ひじょうに大きかった。ソビエトは、しばしば、自然発生的にうまれ、まだ形をととのえず、成員もあいまいなものがあったにもかかわらず、それは一つの権力機関として行動した。ソビエトは、力づくで、出版の自由を実現し、八時間労働制を確立し、ツァー政府に税金をはらうなと人民によびかけた。あるばあいには、ソビエトはツァー政府の公金を没収し、それを革命のために使用した。

五、十二月の武装蜂起　蜂起の失敗　革命の退却　第一次国会　第四回（統一期成）党大会

一九〇五年の十月と十一月、大衆の革命闘争は猛烈な勢いで発展しつづけた。労働者のストライキはつづいた。

一九〇五年の秋、地主にたいする農民の闘争も、大規模にくりひろげられた。農民運動は、全国の三分の一以上の郡にひろがった。サラトフ、タンボフ、チェルニゴフ、チフリス、クタイシ、その他のいくらかの県で、ほんものの農民蜂起がおきた。しかし、農民大衆の攻撃はまだ不十分であった。農民運動には、まだ組織性と指導がかけていた。

多くの都市——チフリス、ウラジオストック、タシュケント、サマルカンド、クルスク、スフーミ、ワルシ

ヤワ、キエフ、リガなどの諸市では、兵士のあいだにも騒動がひどくなった。クロンシュタットでも、セバストーポリの黒海艦隊の水兵のあいだでも、蜂起がおきた（一九〇五年十一月）。しかし、これらの蜂起は、バラバラにおこったので、ツァー政府によって鎮圧されてしまった。

陸海軍の個々の部隊でおきた蜂起のきっかけは、将校の極度の横暴や、粗悪な食べもの（いわゆる「えん豆一揆」ごとき）などであることがめずらしくなかった。蜂起した陸海軍の兵士大衆は、ツァー政府を打倒し、強力に武装闘争をつづけなければならない、ということをまだはっきりと自覚していなかった。蜂起した陸海軍の兵士は、まだあまりにもおだやかで、おとなしかった。かれらはよく誤りをおかし、蜂起したときに逮捕した将校を釈放したり、上官の約束や誓約をうかつに信じこんだりした。

革命は、いまや武装蜂起の一歩手前まできた。ボリシェビキは、ツァーと地主にたいする武装蜂起にたちあがるよう大衆によびかけ、武装蜂起が不可避であることを大衆に説明した。ボリシェビキは、不眠不休で武装蜂起を準備した。陸海軍の兵士のあいだで、革命的な活動がすすめられ、軍隊に党の軍事組織がつくられた。多くの都市に労働者戦闘隊が組織され、戦闘隊員に射撃訓練がほどこされた。国外で武器を購入し、それをひそかにロシアに運びこむ仕事が組織された。武器輸送の仕事には、党のすぐれた活動家が参加した。

一九〇五年十一月、レーニンはロシアに帰ってきた。ツァーの憲兵やスパイの目をさけて、当時、レーニンは武装蜂起の準備に直接参加した。ボリシェビキの新聞『ノーバヤ・ジーズニ』〔新生活〕に発表されたレーニンの論文は、党の日常活動の指示になった。

そのころ、スターリン同志は、後カフカズで革命活動を大いにすすめていた。スターリン同志は、革命と武

装蜂起の敵としてのメンシェビキを暴露し、粉砕した。スターリン同志は、専制制度にたいする労働者の断固とした戦闘を、敢然と準備した。ツァーの詔書がだされたその日、スターリン同志は、チフリスの大衆集会で労働者につぎのように演説した。

「ほんとうに勝利をかちとるには、われわれになにが必要か？　それには三つのものが必要である。第一に武装、第二に武装、そして第三にもまた武装である。」

一九〇五年十二月、フィンランドのタンメルフォルスで、ボリシェビキの会議がひらかれた。ボリシェビキとメンシェビキは、形式的にはまだ一つの社会民主党内に属していたが、実際には二つの異なった政党で、それぞれ独自の中央部をもっていた。この会議で、レーニンとスターリンははじめて顔をあわせた。このときまで、二人は手紙のやりとりや同志を介して、連絡をとっていたのであった。

タンメルフォルス会議の決議のなかでは、二つの決議に注目する必要がある。一つは、事実上二つの党に分裂している党の統一を復活する問題についての決議である。もう一つは、第一次国会、つまり、いわゆるウィッテ国会のボイコットについての決議である。

このとき、モスクワではすでに武装蜂起がはじまっていたので、会議は、レーニンの意見でその仕事を早々にきりあげた。各代議員は、みずから蜂起に参加するため、それぞれ各地にかえっていった。

しかし、ツァー政府も、居眠りをしてはいなかった。かれらも頑強にたたかう準備をしていた。日本との講和で苦境を緩和したツァー政府は、労働者、農民大衆におそいかかってきた。ツァー政府は、農民蜂起にまきこまれていた多くの県に戒厳令をしき、「その場で片づけろ」「弾薬を惜しむな」という残忍な命令をだし、

革命運動指導者の逮捕と労働者代表ソビトの解散を命じた。
それで、モスクワのボリシェビキと、その指導をうけて広範な労働者大衆とかたく結びついていたモスクワ労働者代表ソビエトは、武装蜂起を即時準備することをきめた。十二月五日（新暦十八日）、モスクワ委員会は、政治的ゼネストの宣言をソビエトに提案し、闘争の過程でそれを蜂起に転化させる、という決議を採択した。この決議は、労働者の大衆集会で支持された。モスクワ・ソビエトは、労働者階級の意志を考慮にいれ、政治的ゼネストの開始を満場一致で決定した。
モスクワのプロレタリア階級は、蜂起を開始するにあたって、自分たちの戦闘組織をもっていた。それにはおよそ千人の戦闘隊員がいたが、大半はボリシェビキであった。モスクワの多くの工場にも、戦闘隊がつくられていた。蜂起の側には、あわせて二千人の戦闘隊員がいた。労働者は、守備隊を中立させ、その一部を引きはなし、味方につける予定であった。
十二月七日（新暦二十日）、モスクワで政治ストが開始された。しかし、このストライキを全国にひろげることには成功しなかった。ペテルブルグがストライキを十分に支持しなかったからである。このことは、蜂起の成功する見込みを最初からすくなくした。ニコライ鉄道（いまのオクチャブリスカヤ鉄道）は、やはりツァー政府の手ににぎられていた。この鉄道の運輸は中止されなかった。それで、政府は、蜂起を鎮圧するため、近衛連隊をペテルブルグからモスクワにおくることができた。
当のモスクワでは守備隊が動揺していた。労働者が蜂起をはじめたのは、守備隊からの支持にいくぶん期待したからでもあった。しかし、革命家は好機をのがした。ツァー政府は、守備隊の騒動をかたづけてしまっ

た。

十二月九日（新暦二十二日）、モスクワに最初のバリケードがあらわれた。つづいて、モスクワの街々はバリケードでおおわれてしまった。ツァー政府は、砲兵を出動させた。ツァー政府は、蜂起者に数倍する軍隊をおくりこんできた。数千の武装した労働者は、九日間にわたって英雄的な闘争をすすめた。ツァー政府は、ペテルブルグ、トゥベーリ、西部辺境地方から数個連隊を出動させて、やっと蜂起を鎮圧することができた。各区の蜂起の指導機関は、戦闘開始の直前に、一部は検挙され、一部は孤立させられた。モスクワのボリシェビキ委員会も検挙された。武装行動は、たがいに連絡のない個々の区の蜂起になってしまった。各区は、指導の中心もなく、全市的な共同の闘争計画もなかったので、主として防禦に終始することになった。これは、のちにレーニンが指摘しているように、モスクワの蜂起の弱さのおもな根源であり、この蜂起の敗因の一つでもあった。

モスクワのクラスナヤ・プレスニャ区の蜂起はとくに頑強で激烈にたたかわれた。クラスナヤ・プレスニャは、蜂起のおもなトリデであり、その中心であった。ここには、ボリシェビキの指導するもっとも精鋭な戦闘隊が集中していた。しかし、クラスナヤ・プレスニャも、ついに砲火と銃剣によって鎮圧され、血の海とかわり、砲撃をうけて炎々ともえあがった。モスクワの蜂起は、鎮圧されてしまった。

蜂起がおきたのは、モスクワだけではなかった。ほかの多くの都市や地区でも、革命的蜂起がおきた。クラスノヤルスク、モトビリハ（ペルミ）、ノボロシイスク、ソルモボ、セバストーポリ、クロンシュタットでも、武装蜂起が勃発した。

ロシアの抑圧されている諸民族も、武装蜂起に立ちあがった。グルジヤのほとんど全土に蜂起がもえひろがった。ウクライナのドンバス一帯、つまり、ゴルロフカ、アレクサンドロフスク、ルガンスク（いまのウォロシーロフグラード）などでも、大規模な蜂起がおこった。ラトビアの闘争は、きわめて頑強であった。フィンランドでは、労働者が赤衛隊をつくり、蜂起にたちあがった。

しかし、これらすべての蜂起も、モスクワの蜂起と同じように、ツァー政府のため、野蛮な残忍きわまるやりかたで、鎮圧されてしまった。

メンシェビキとボリシェビキは、十二月の武装蜂起にたいして異なった評価をあたえた。

武装蜂起ののち、メンシェビキのプレハーノフは、「武器をとる必要はなかった」といって党を非難した。蜂起は不必要で有害なことである。革命は蜂起なしでやれる、勝利は武装蜂起でなく、平和的な闘争手段によってかちとれる、とメンシェビキはいいはったのである。

ボリシェビキは、こうした評価を裏切り的なものときめつけた。ボリシェビキは、モスクワの武装蜂起の経験こそ労働者階級の武装闘争の成功の可能性を確証したものにほかならない、とみなした。「武器をとる必要はなかった」というプレハーノフの非難にこたえて、レーニンはつぎのようにいった。

「その正反対に、もっと決然と、もっと精力的に、もっと攻撃的に武器をとらなければならなかった。平和的ストライキだけではだめで、なにものもおそれない、仮借のない武装闘争がどうしても必要だということを、大衆に説明する必要があった。」（レーニン『モスクワ蜂起の教訓』）

一九〇五年の十二月蜂起は、革命の頂点であった。ツァー専制政府は、十二月に蜂起を敗北させた。十二月

蜂起の敗北のあと、革命は徐々に退却へと転じはじめた。革命は、高揚の時期から、逐次的な退潮の時期にはいっていった。

革命を徹底的にたたきつぶそうと、ツァー政府は、いちはやくこの敗北を利用した。ツァーの死刑執行人や獄吏は、その血なまぐさい仕事をさかんにやりはじめた。ポーランド、ラトビア、エストニア、後カフカズ、シベリアで暴動鎮圧隊が思いのままにあばれくるった。

しかし、革命はまだおしつぶされたわけではなかった。労働者と革命的農民は、戦いながら、徐々に退却した。新しい層の労働者が、ぞくぞくと闘争にくわわってきた。一九〇六年には、百万をこえる労働者がストライキに参加した。一九〇七年には、七十四万人がストライキに参加した。農民運動も、一九〇六年の上半期にはツァー・ロシアの約半分の郡にひろがり、その年の下半期には、郡全体の五分の一におよんだ。陸海軍内部の騒動も、依然としてつづいた。

ツァー政府は、革命に反対する闘争で、ただ高圧の手段だけしかとらなかったわけではない。高圧の手段で最初の成功をおさめると、ツァー政府は、新しい「立法」国会を召集するという手口をつかって、革命に新しい打撃をくわえようと決意した。かれらは、このような国会を召集することによって農民を革命からひきはなし、それによって革命を葬りさろうとはかった。一九〇五年十二月、ツァー政府は、新しい「立法」国会の召集についての法令を出し、これはボリシェビキがボイコットによって一掃した古いブルィギン「諮問」国会とはちがうものだということを示そうとした。ツァー政府の選挙法は、いうまでもなく反民主主義的なものであった。選挙は、普通選挙ではなかった。半数以上の人口、たとえば婦人と二百万以上の労働者が選挙権をまっ

たくうばわれていた。選挙は、不平等のものであった。有権者は、土地所有者（地主）、市民（ブルジョア階級）、農民、労働者という四つの級にわけられていた。選挙は、直接選挙でなくて、何段階にもわかれており、実際には秘密選挙でもなかった。選挙法は、ひとにぎりの地主、資本家が、数千数百万の労働者、農民にたいし国会で圧倒的多数を占めるようになっていた。

ツァーは、国会を利用して大衆を革命からきりはなそうとした。当時、農民の大部分は、国会を通じて土地を手にいれることができる、と信じこんでいた。立憲民主党員、メンシェビキ、社会革命党員は、蜂起をせず革命をしなくても、人民のもとめている制度を達成できるかのようにいって、労働者と農民をあざむいた。こうした人民をあざむく手口に反対するにあたって、ボリシェビキは、タンメルフォルス会議の決議にもとづき、第一次国会のボイコットという戦術を宣言し、実行した。

ツァー制度にたいする闘争をすすめながら、労働者は同時に党勢力の統一、プロレタリア政党の統一を要求した。ボリシェビキは、統一についてのタンメルフォルス会議の周知の決議にもとづいて、労働者のこの要求に賛成し、メンシェビキに全党の統一期成大会召集を提案した。メンシェビキは、労働者大衆からの圧力におされて、やむなく統一に同意した。

レーニンは、統一に賛成していた。しかし、レーニンが賛成していたのは、革命の諸問題についての意見の相違を塗り消してしまわないような統一であった。調停派（ボグダーノフ、クラシンら）はボリシェビキとメンシェビキのあいだに重大な意見の相違などないかのように言いくるめようとして、そのため党に大きな害毒をあたえた。レーニンは、調停派とたたかうにあたって、ボリシェビキが独自の政治綱領をもって大会にのぞ

み、ボリシェビキはどんな立場に立っているか、統一はどんな基礎のうえでおこなうかを、労働者にははっきりさせるべきだ、と考えた。ボリシェビキは、そういう政治綱領をつくり、これを党員の討議にかけた。
一九〇六年四月、統一期成大会とよばれるロシア社会民主労働党第四回大会がストックホルム（スウェーデン）でひらかれた。この大会には、五十七の党地方組織を代表して議決権をもつ百十一人の代議員が出席した。このほか、大会には、各民族の社会民主党の代議員が出席した。つまり、ブンドから三人、ポーランド社会民主党から三人、ラトビア社会民主主義組織から三人であった。
ボリシェビキの組織は、十二月蜂起のさいとその後に破壊されたため、組織のすべてが代議員をおくれたわけではなかった。しかも、一九〇五年の「自由はなやかなりしころ」、メンシェビキは、革命的マルクス主義とは全く縁のない多くの小ブルジョア知識分子を入党させていた。それについては、チフリスのメンシェビキ（当時チフリスには、産業労働者はすくなかった）がおくった大会代議員の数は、最大のプロレタリア組織であるペテルブルグの組織がおくった代議員の数と同じであったことを指摘すれば十分であろう。そのため、ストックホルム大会では、わずかの差ではあったが、メンシェビキが多数をしめた。
大会はこのような構成であったので、多くの問題でメンシェビキ的な決議が採択された。
この大会では、形式的な統一がおこなわれたにすぎなかった。実際には、ボリシェビキとメンシェビキは、依然としてそれぞれの観点をもちつづけ、それぞれ独自の組織をもちつづけた。
第四回党大会で討議されたもっとも主要な問題は、農業問題、現状とプロレタリア階級の任務についての評価、国会にたいする態度、組織問題であった。

メンシェビキは、この大会で多数をしめてはいたが、労働者の支持を失わないためには、党員についての党規約第一条のレーニンの定式を採用せざるをえなかった。

農業問題では、レーニンは、土地の国有化を擁護した。レーニンの見解によると、土地の国有化は革命が勝利したとき、ツァー制度が打倒されたのちにのみ実現される。このようなばあいには、土地の国有化は、プロレタリア階級が貧農と同盟して社会主義革命に移行するのを容易にするであろう。土地の国有化とは、すべての地主の土地を無償でとりあげ（没収）、農民に役だてることである。ボリシェビキの農業綱領は、ツァーと地主に反対して革命に立ちあがるよう、農民によびかけた。

メンシェビキは、別の立場に立っていた。かれらは、土地の自治体有化の綱領を主張した。この綱領によると、地主の土地は農民団体に管理させず、使用さえさせず、自治体（つまり、地方自治体、あるいは地方自治会）の管理にゆだねることになる。そして、農民は各自の能力に応じてこの土地を小作しなければならないのである。

メンシェビキの土地自治体有化の綱領は妥協的なもので、したがって、革命にとって有害な綱領であった。それは、農民を革命闘争に立ちあがらせることはできなかったし、地主の土地所有権の完全な絶滅をはかろうとするものでもなかった。メンシェビキの綱領は、革命を中途半端でおわらせようとするものであった。メンシェビキは、農民を革命にたちあがらせたくなかったのである。

党大会は、メンシェビキの綱領を多数で採択した。

現状の評価と国会についての決議を討議したさい、メンシェビキは、その反プロレタリア的、日和見主義的

本質をとくにはっきりと暴露した。メンシェビキのマルトィノフは、革命におけるプロレタリア階級の指導権に公然と反対した。スターリン同志は、メンシェビキにこたえて、単刀直入に問題を提起した。

「プロレタリア階級の指導権か、それとも、民主主義的ブルジョア階級の指導権か――これが党内で問題になっている点であり、これがわれわれの意見の相違点である。」

国会の問題については、メンシェビキは、その決議案のなかでさかんに国会をもちあげ、これは、革命の諸問題を解決し、人民をツァー制度から解放するための最上の手段である、などとのべた。これに反し、ボリシェビキは、国会を、ツァー制度の無力な付属物であり、ツァー制度の潰瘍をおおいかくすころもであって、ツァー制度は、それが自分の制度の邪魔になると感じれば、いつでもすぐに投げすてるだろう、とみなした。

第四回党大会で選出された中央委員会には、三人のボリシェビキと六人のメンシェビキがいた。中央機関紙の編集局にはいったのは、メンシェビキばかりであった。

党内闘争がつづくであろうということは、すでにはっきりしていた。

第四回大会のあと、ボリシェビキとメンシェビキとの闘争は、いっそうはげしく燃えあがった、形式上で統一していた地方組織でも、二人の報告者、つまり、ボリシェビキから一人、メンシェビキから一人が演壇に立って大会についての報告をするということがしばしばおこった。二つの路線が討議された結果、多くのばあいは、組織員の大多数がボリシェビキの側になった。

実生活は、ボリシェビキの正しさをますます立証した。第四回大会で選出されたメンシェビキ的中央委員会は、それが日和見主義で、大衆の革命闘争を指導する能力にまったく欠けていることを、ますますさらけ出し

た。一九〇六年の夏と秋、大衆の革命闘争はふたたびつよまった。クロンシュタットとスベアボルグでは水兵が蜂起し、地主にたいする農民の闘争も燃えあがった。メンシェビキ的中央委員会は、日和見主義的スローガンをだしたが、大衆はこのスローガンについていかなかった。

六、第一次国会の解散　第二次国会の召集　第五回党大会　第二次国会の解散　第一次ロシア革命の敗因

第一次国会があまり従順ではなかったので、ツァー政府は、一九〇六年の夏、それを解散した。ツァー政府は、人民弾圧に拍車をかけ、暴動鎮圧隊を全国に送って、ほしいままにのさばらせる一方、近いうちに第二次国会を召集すると宣言した。ツァー政府は、露骨に、図々しくふるまうようになってきた。かれらは、革命のあらしが下火になっていくのをみて、もはや革命をおそれなくなった。

ボリシェビキは、第二次国会に参加すべきか、それともこれをボイコットすべきかの問題をきめなければならなかった。ボイコットというばあい、ボリシェビキがいつも念頭においていたのは、積極的なボイコットであって、選挙への参加をたんに消極的に拒否することではなかった。ボリシェビキの考えていた積極的ボイコットとは、革命の道からツァーの「憲法」の道へ人民をひきこもうとするツァーの企てにたいして、これを人民に警告するための手段であり、このような企てをうちやぶって、ツァー制度にたいする人民の新しい攻撃を

組織するための手段であった。

ブルィギン国会ボイコットの経験は、ボイコットが「諸事件によって完全に確認されたただ一つの正しい戦術であった」(レーニン『ボイコットについて』)ことを立証した。このボイコットが成功したのは、それが、ツァー憲法の道の危険性を人民に警告したばかりでなく、国会がうまれるまえに、それをぶちこわしてしまったからである。このボイコットが成功したのはそれがまた、もりあがる革命高揚期に実行され、革命の退潮期に実行されたのではなかったからである。国会は、革命の高揚という条件のもとでのみぶちこわすことができるのである。

ウィッテ国会、すなわち第一次国会のボイコットは、十二月蜂起の失敗後、ツァーが勝利者となったとき、つまり、革命が下火になったと考えてもよいときに実行された。

レーニンは、つぎのようにかいている。

「しかし、そのときには、もちろん、この勝利(ツァーの勝利――編者注)を決定的な勝利とみなす根拠はまだなかった。一九〇五年の十二月蜂起は、まだ一九〇六年夏に、多くの分散した、部分的な軍事的蜂起やストライキという形でつづけられていた。ウィッテ国会のボイコットのスローガンは、これらの蜂起を集中し、総合するための闘争のスローガンであった。」(レーニン『ボイコットに反対する』)

ウィッテ国会のボイコットは、この国会の威信を大いにうちやぶり、国会にたいする一部の人民の信頼をよわめはしたが、しかし、国会をぶちこわすことはできなかった。それはこのボイコットが、いまではあきらかなように、革命が減退し、下火になるという情勢のもので実行されたからである。だから、一九〇六年の第一

次国会のボイコットは、不成功におわった。このことについて、レーニンはその名著『共産主義運動における「左翼」小児病』のなかでつぎのようにかいている。

「一九〇五年にボリシェビキがおこなった『国会』ボイコットは、革命的プロレタリア階級に非常に貴重な政治的経験をあたえた。合法と非合法、議会内と議会外の闘争形態が結合しているばあいには、たくみに、議会内の闘争を拒否することが、しばしば有益であり、必要でさえあることをしめしたからである。……一九〇六年にボリシェビキのおこなった国会ボイコットは、たとえ大きな誤りではなく、たやすく是正できるものであったとしても、それは、すでに誤りであった。……個人について言えることとは、それを適当になおすと、政治や政党にもあてはまる。誤りを犯さないものが、りこうな人間だというわけではない。誤りを犯さない人間は、いないし、いるはずもない。りこうな人間は、重大な誤りを犯さない人、そして、その誤りを、はやく、たやすくなおせる人である。」(レーニン『共産主義運動における「左翼」小児病』)

第二次国会について、レーニンは、情勢の変化と革命の退潮とにかんがみ、ボリシェビキは「国会ボイコットの問題を再検討しなければならない。」(レーニン『ボイコットについて』)と考えた。

レーニンは、つぎのようにかいている。

「国会が召集されるばあい、その内部と周辺から有益な扇動を行なう可能性がうまれること、立憲民主党に反対して革命的農民に接近する戦術を国会の内部でおこなうことができることを、すでに歴史はしめしている。」(前掲書)

これらすべてのことから、つぎのようなことがわかる。すなわち、革命の高揚期に、断固として攻撃し、最前線に立って攻撃することにたけていなければならないだけでなく、すでに高揚がなくなったときにも、正しく退却し、最後尾となって退却することにたけていなければならない。すでに変化した情勢に応じて戦術をかえることにたけていなければならず、算をみだして退却するのではなく、組織的に、平静に、狼狽することなく退却することにたけていなければならない。そして、どんなにわずかな可能性でも利用して、幹部を敵の打撃からまもり、隊伍をたてなおし、力をたくわえ、敵にたいする新しい攻撃をしかけることにたけていなければならない。

そのために、ボリシェビキは、第二次国会の選挙に参加することを決定した。

しかし、ボリシェビキが国会に参加したのは、メンシェビキのように、国会で立憲民主党員と連合して本来の「立法」活動をするためではなく、国会を革命のための演壇として利用するためであった。

メンシェビキ的中央委員会は、逆に、国会はツァー政府を制御できる立法機関であると考え、党に、立憲民主党員と選挙協定をむすび、国会で立憲民主党員を支持するようよびかけた。

大多数の党組織は、メンシェビキ的中央委員会の政策に反対した。

ボリシェビキは、新しい党大会の召集を要求した。

一九〇七年五月、ロンドンで第五回党大会がひらかれた。その当時、ロシア社会民主労働党（各民族の社会民主主義組織もあわせて）には、あわせて十五万の党員がいた。大会には、合計三百三十六人の代議員が参加した。ボリシェビキは百五人、メンシェビキは九十七人であった。そのほかは、前大会でロシア社会民主労働

党に加入をみとめられた各民族の社会民主主義組織、すなわち、ポーランドとラトビアの社会民主主義組織およびブンドを代表していた。

トロツキーは、大会でかれの別個の中間派的グループ、すなわち半メンシェビキ・グループをつくろうと企んだが、だれもかれについていかなかった。

ボリシェビキは、ポーランドとラトビアの代議員の支援をえたので、大会で絶対多数をしめた。

党大会で論争されたおもな問題の一つは、ブルジョア諸政党にたいする態度の問題であった。この問題については、はやくも第二回党大会のさい、ボリシェビキとメンシェビキとのあいだで論争がおこなわれていた。党大会は、すべての非プロレタリア政党——黒百人組、十月党(オクチャブリスト)、立憲民主党、社会革命党——にたいしてボリシェビキ的評価をあたえ、これらの政党にたいするボリシェビキ的戦術をさだめた。

党大会は、ボリシェビキの政策をうけいれ、「ロシア人民同盟」、君主主義派、統一貴族会議などの黒百人組的政党にたいしても、「十月十七日同盟」(十月党)、商工党、「平和革新」党にたいしても、容赦なくたたかうという決定をした。これらの党はすべて、あきらかに反革命の政党であった。

自由主義的ブルジョア階級、立憲民主党については、党大会はこれにたいして非妥協的な暴露闘争をすすめるよう提案した。党大会は、立憲民主党の偽善的な、えせ「民主主義」を暴露し、農民運動の先頭に立とうとする自由主義的ブルジョア階級の企みにたいして闘争するよう提案した。

いわゆるナロードニキ的あるいは勤労者的諸党(人民社会主義者、勤労団、社会革命党)にたいしては、党大会は、社会主義者の仮面をかぶろうとしているかれらの企みを暴露すべきであると勧告した(訳注…勤労団

は、小ブルジョア団体で、一九〇六年第一次国会に参加した一部の農民代議員によってつくられた。その指導者は社会革命党の知識分子であった)。同時に、党大会はまた、これらの政党が、当時はまだ民主主義的な政党であり、都市と農村の小ブルジョア階級の利益を代表している以上、ツァー制度と立憲民主党的ブルジョア階級にたいする闘争を、共同で、一斉にすすめるため、これらの政党と個々に協定を結んでもよい、とみとめた。

党大会のまえに、メンシェビキはすでに、いわゆる「労働者大会」の召集を提案していた。メンシェビキの計画は、社会民主党員も社会革命党員も無政府主義者もいっしょに参加するような大会を召集するというものであった。この「労働者」大会では、「党でない党」でもあり、「広範な」小ブルジョア的な、綱領もない労働者党でもある、といったものをつくりあげるはずであった。レーニンは、メンシェビキのこのもっとも有害な企み――社会民主労働党を解消して、労働者階級の先進部隊を小ブルジョア大衆のなかにとけこましてしまおうとする企みを暴露した。党大会は、「労働者大会」というメンシェビキのスローガンをはげしく非難した。

党大会の活動のうちでとくに重要な地位をしめたのは、労働組合の問題であった。メンシェビキは、労働組合の「中立性」を擁護した。つまり、労働組合における党の指導的役割に反対した。大会は、メンシェビキの提案を否決し、ボリシェビキの提案した労働組合についての決議を採択した。この決議には、党が労働組合の思想的、政治的指導をかちとるべきである、と指摘されていた。

第五回大会は、労働運動でボリシェビキが大きな勝利をかちとったことをしめした。しかし、ボリシェビキ

は、勝利にうぬぼれ、おぼれるようなことはなかった。レーニンは、そのようになるなと教えていた。ボリシェビキは、これからもまだメンシェビキとたたかわなければならないことを知っていた。

スターリン同志は、一九〇七年に発表した『一代議員の手記』という論文のなかで、この大会の結果についてつぎのように評価している。

「革命的社会民主主義の旗のもとに、全ロシアの先進的労働者を単一の全ロシア的党へ実際に結集させたこと、——これが、ロンドン大会の意義であり、その一般的性格である。」

スターリン同志は、この論文のなかで、党大会の構成についての資料をあげている。それによると、大会に参加したボリシェビキの代議員は、主として大工業地域（ペテルブルグ、モスクワ、ウラル、イワノボ・ボズネセンスクなど）から派遣されたが、メンシェビキの代議員は、手工業労働者や半プロレタリア分子が大多数をしめる小生産地域といくつかの純農民地域から出てきたのであった。

スターリン同志は党大会を総括して、つぎのように指摘している。

「あきらかに、ボリシェビキの戦術は、大工業プロレタリアの戦術であり、階級矛盾がとくにきわだち階級闘争がとくにはげしくなっている地域の戦術である。ボリシェビズム——それは真のプロレタリアの戦術である。他方、メンシェビキの戦術が、主として手工業労働者と農村半プロレタリア階級分子の戦術であり、階級矛盾があまりきわだたず階級闘争がおおいかくされている地域の戦術であることも、同様にあきらかである。メンシェビズム——それはプロレタリア階級のなかでの半ブルジョア階級分子の戦術である。数字がそのことを物語っている。」（『ロシア社会民主労働党第五回大会議事録』一

九三五年版）

ツァーは、第一次国会を解散して、第二次国会をもっと従順なものにしたいと考えた。ところが、第二次国会もそうした期待にそわなかった。それで、ツァーはこの国会も解散して、いっそう改悪された選挙法による第三次国会を召集することにきめ、それがもっと従順なものになることを期待した。

第五回党大会後まもなく、ツァー政府は、いわゆる六月三日クーデターをおこした。一九〇七年六月三日ツァーは第二次国会を解散した。社会民主党の国会議員団のあわせて六十五人の代議員は、全員逮捕され、シベリアに流刑された。新しい選挙法が公布された。労働者と農民の権利は、さらにけずりとられてしまった。ツァー政府は、攻勢をつづけた。

ツァーの大臣ストルィピンは、労働者と農民にたいして、血なまぐさい懲罰をくわえた。おびただしい数の革命的な労働者と農民が、暴動鎮圧隊によって銃殺され、絞殺された。ツァーの監獄では、革命家が虐待され、拷問にかけられた。労働者の組織、第一にボリシェビキは、とくに残酷な迫害をうけた。ツァーのスパイは、当時フィンランドに身をかくしていたレーニンをさがしていた。革命の指導者を、かれらはかたづけてしまいたかったのである。一九〇七年十二月、ひじょうな危険をおかして、レーニンはふたたび国外に亡命することに成功した。

ストルィピン反動の困難な時期がやってきた。

こうして、第一次ロシア革命は失敗におわった。

それには、つぎのようないくつかの原因があった。

(一) 革命には、ツァー制度に反対する労働者と農民の強固な同盟がまだなかった。農民は、地主にたいする闘争にたちあがったし、地主に反対するために労働者と同盟を結ぶことをのぞんでいた。しかし、かれらは、ツァーを倒さなければ地主を倒せないことをまだ理解していなかったし、ツァーと地主が一体となって行動していることをまだ理解していなかった。しかも、農民の多数は、まだツァーを信頼していたし、ツァーの御用国会にまだのぞみをかけていた。だから、多くの農民は、ツァー制度を倒すために労働者と同盟を結ぶことをのぞんでいなかった。農民は、ほんとうの革命家であるボリシェビキよりも、協調主義の社会革命党のほうをずっと信用していた。その結果、地主にたいする農民の闘争は、十分に組織されていなかった。レーニンは、つぎのように指摘している。

「……農民の行動は、あまりにも分散的、無組織的で、攻撃性に欠けていた。これが、革命の失敗した根本的原因の一つでもあった。」（レーニン『一九〇五年の革命についての講演』）

(二) 農民の大部分がツァー制度打倒のため労働者とともにすすむことをのぞまなかったその気持ちは、軍隊の態度にも反映した。軍隊の大多数は、軍服をきた農民の息子たちで構成されていたからである。ツァー軍隊の個々の部隊では騒動や蜂起がおこりもしたが、しかし、兵士の多数は、まだツァーをたすけて労働者のストライキや蜂起を鎮圧した。

(三) 労働者の行動も、十分な協力がたらなかった。労働者階級の先進部隊は、一九〇五年に英雄的な革命闘争をくりひろげた。しかし、もっとおくれた層、すなわち工業の発展がもっともおくれていた県の労働者や、農村にすむ労働者は、腰がおもかった。かれらも、一九〇六年にはとくに革命闘争への参加が強まった

が、そのときには、労働者階級の前衛部隊はすでにいちじるしく弱められていた。

（四）労働者階級は、革命の先進的な基本的勢力であったが、当時、労働者階級の党の内部には、必要な統一と団結がまだなかった。ロシア社会民主労働党——労働者階級の党——は二つのグループ、つまりボリシェビキとメンシェビキにわかれていた。ボリシェビキは、徹底的な革命路線をおしすすめ、ツァー制度の打倒を労働者によびかけた。メンシェビキは、その協調主義的戦術で革命にブレーキをかけ、非常に多くの労働者をまごつかせ、労働者階級を分裂させた。そのため、労働者は、革命のさいつねに協力して行動したわけではなかった。労働者階級は、自分自身の隊伍の統一をまだもっていなかったので、革命の真の指導者となることができなかった。

（五）西ヨーロッパの帝国主義者は、ツァー専制政府が一九〇五年の革命を鎮圧するのに手をかした。外国の資本家は、ロシアに投資した資本と莫大な収益を失うことをおそれた。それればかりでなく、かれらは、ロシア革命が勝利したあかつきには、そのほかの国の労働者も革命に立ちあがりはせぬかと恐れた。それで、西ヨーロッパの帝国主義者は、死刑執行人であるツァーをたすけた。フランスの銀行家は、革命を鎮圧するためにツァーに巨額の借款をあたえた。ドイツの皇帝は、ツァーをたすけるために武力干渉用の大軍を待機させていた。

（六）一九〇五年九月に結ばれた対日講和条約は、ツァーを大いに助けた。戦争での敗北と革命運動の大きなもりあがりは、ツァーに講和条約の調印を急がせた。敗戦はツァー制度をよわめたが、講和条約の締結はツァーの地位を強めたのである。

要約

第一次ロシア革命は、わが国の発展途上で歴史的な一時代をなしている。この歴史的な時代は、二つの時期にわかれる。第一の時期は、満州の戦場で敗北をなめたツァーの弱味を利用し、ブルィギン国会を一掃し、ツァーにつぎからつぎへと譲歩させて、十月の政治的ゼネストから十二月の武装蜂起へと革命が高揚していった時期である。第二の時期は、日本との講和締結で勢力をもちなおしたツァーが、革命をまえにおそれおののく自由主義的ブルジョア階級の恐怖心を利用し、農民の動揺を利用し、かれらにウィッテ国会というちっぽけな施しものを投げあたえて、労働者階級にたいし、革命にたいし、攻勢に転じた時期である。

わずか三年間の革命の時期（一九〇五――一九〇七年）に、労働者階級と農民は、普通の平和的発展では三十年かけてもえられないようなゆたかな政治的教育をうけた。平和的発展の条件のもとでは数十年かけてもはっきりしないようなことが、革命の数年間ではっきりしたのである。

革命は、ツァー制度が人民のゆるすことのできない敵であり、墓場にいくよりほか治しようのないせむしであることを、あばきだした。

革命は、自由主義的ブルジョア階級のもとめているものが、人民との同盟ではなく、ツァーとの同盟であること、かれらは反革命勢力であって、これとの妥協は人民への裏切りと同じであることを、立証した。

革命は、ブルジョア民主主義革命の指導者となりうるのが労働者階級だけであること、ただ労働者階級だけが立憲民主党的な自由主義的ブルジョア階級を追いはらい、かれらの影響のもとから農民をすくいだし、地主を粉砕し、革命をあくまでもおしすすめて、社会主義への道を掃き清めることができるということを、立証した。

革命は、最後に、勤労農民がその動揺性にもかかわらず、やはり労働者階級と同盟を結ぶことのできる唯一の重要な勢力であることを、立証した。

革命の時期に、ロシア社会民主労働党の内部では、ボリシェビキの路線とメンシェビキの路線との二つの路線の闘争がおこなわれた。ボリシェビキの方針は、革命をおしひろげ、武装蜂起によってツァー制度をくつがえし、労働者階級の指導権を実現し、立憲民主党的ブルジョア階級を孤立させ、農民との同盟をむすび、労働者、農民の代表からなる臨時革命政府を樹立し、革命を勝利におわらせる、というものであった。これに反して、メンシェビキの方針は、革命をしぼませるというものであった。かれらは、武装蜂起によるツァー制度打倒のかわりに、ツァー制度の改良と「改善」を提唱し、プロレタリア階級の指導権のかわりに、自由主義的ブルジョア階級の指導権を提唱し、農民との同盟のかわりに、立憲民主党的ブルジョア階級との同盟を提唱し、臨時革命政府のかわりに、全国「革命勢力」の中心と称する国会の召集を提唱した。

このように、メンシェビキは協調主義の泥沼にころがりおちて、労働者階級にたいするブルジョア的影響の伝達者となり、事実上、労働者階級の内部におけるブルジョア階級の手先となった。

ボリシェビキは、党内と国内における唯一の革命的マルクス主義勢力となった。

こうした重大な意見の相違があったので、ロシア社会民主労働党が、事実上二つの政党、つまりボリシェビ

キ党とメンシェビキ党に分裂したのは、当然であった。第四回党大会は、党内の実状をすこしもかえることができなかった。この大会は、ただ党の形式的な統一をたもち、いくらかかためたにすぎなかった。党の実際的な統一の方向に一歩をすすめたのは、第五回党大会であり、しかも、この統一は、ボリシェビズムの旗のもとにおこなわれたのである。

第五回党大会は、革命運動を総括して、メンシェビキの協調主義路線を非難し、ボリシェビキの革命的マルクス主義路線をうけいれた。こうして、すでに第一次ロシア革命の全過程で確証されていたことを、第五回党大会はもういちど確証したわけである。

革命は、つぎのことを立証した。ボリシェビキは、情勢が要求するときには、攻撃を実行するのにひいでていること、ボリシェビキは、最前線に立って攻撃し、人民を導いて突撃するすべを習得したということ、がこれである。革命はまた、つぎのことを立証した。ボリシェビキは、情勢が不利で、革命が下火になったときには、秩序整然と退却するのにひいでていること、ボリシェビキは、狼狽もしなければあせりもせずに、ただしく退却し、これによって幹部を保存し、力をたくわえ、新しい情勢に応じて陣容をたてなおし、ふたたび敵の攻撃にむかうすべを、学びとったということ、がこれである。

ただしく攻撃するすべをこころえていなければ、敵にうちかつことはできない。

ただしく退却するすべ、狼狽もしなければ混乱もせずに退却するすべをこころえていなければ、失敗したときに破滅をまぬがれることはできない。

第四章　ストルィピン反動期におけるメンシェビキとボリシェビキ。ボリシェビキ、独立したマルクス主義党を結成

（一九〇八年―一九一二年）

一、ストルィピンの反動　反政府的知識分子の腐敗　退廃　一部知識分子党員の、マルクス主義の敵陣への移行とマルクス主義理論を修正しようとする企て　レーニンの、その著書『唯物論と経験批判論』における修正主義者にたいする反駁とマルクス主義党の理論的基礎の擁護

一九〇七年六月三日、ツァー政府は第二次国会を解散させた。この日を、歴史のうえでは六月三日クーデターといっている。ツァー政府は、新たな第三次国会選挙法を公布した。これは、政府自身が一九〇五年十月十七日にだした詔書にそむくものである。なぜなら、この詔書によると、ツァー政府は国会の同意なしには、新しい法令を公布することはできないことになっていたからである。第二次国会の社会民主党議員団は裁判にか

けられ、労働者階級の代表者たちは、懲役や流刑に処せられた。

新しい選挙法は、国会における地主と商工業ブルジョア階級の代表者の数をずっと増加できるように作成されていた。それと同時に、もともとひどく少なかった労働者、農民の代表の数は、何分の一かに減らされた。

第三次国会は、その構成からいえば、黒百人組と立憲民主党の国会であった。国会議員総数四百四十二人のうち、右翼（黒百人組）が百七十一議席、十月党および同類の党派が百十三議席、立憲民主党およびこれに近い党派が百一議席、勤労者党が十三議席、社会民主党が十八議席をしめていた。

右翼（かれらが国会では右側の座席をしめていたので、こうよばれるようになった）は、労働者、農民のもっとも凶悪な敵、すなわち多くの農民を鞭で打ったり、銃殺するなどの手段で農民運動を弾圧した黒百人組のような地主・農奴制支持者や、ユダヤ人を虐殺し、デモに参加した労働者をうちのめし、革命のとき集会場を無残に焼きはらったりした連中である。右翼は、もっとも残虐な方法で勤労大衆を弾圧すること、ツァーが無制限の権力をもつことを支持し、一九〇五年十月十七日のツァーの詔書に反対した。

国会のなかで右翼に近かったのは、十月党すなわち「十月十七日同盟」であった。十月党は、大産業資本および資本主義的経営方式をとる大地主の利益を代表していた（一九〇五年の革命がはじまってからは、大地主のうちの立憲民主党の大部分は、十月党に鞍がえした）。十月党が右翼と違うところは、かれらが十月十七日の詔書を認める――それも口先だけ――点だけであった。十月党は、ツァー政府の内外政策を完全に支持していた。

第三次国会における「立憲民主」党の議席数は、第一次国会、第二次国会にくらべて減った。それは、前に

は立憲民主党に投票した地主の一部が十月党支持に変わったためである。
　第三次国会にはそのほか、いわゆる勤労者党とよばれる少人数の小ブルジョア的民主主義者の団体が代表をもっていた。かれらは国会では、立憲民主党と労働者民主主義派（ボリシェビキ）のあいだをたえず動揺した。国会における勤労者党の勢力はきわめて弱かったが、やはりかれらは大衆すなわち農民大衆を代表していると、レーニンは指摘した。勤労者党が立憲民主党と労働者民主主義派のあいだをたえず動揺するのは、小所有者としての階級的地位によって生まれる必然的な結果である。レーニンは、ボリシェビキ派の代議員すなわち労働者民主主義派につぎのような任務を提起した。すなわち、「弱い小ブルジョア民主主義者をたすけ、かれらを自由主義者の影響からぬけ出させ、右翼に反対するだけでなく、反革命的立憲民主党に反対する民主主義陣営を結束させること……。」（レーニン『ロシアの諸政党』）
　一九〇五年の革命中に、とりわけ革命が敗北した後には、立憲民主党はかれらが反革命勢力であることをますますはっきりとさらけ出した。かれらは「民主主義」的な仮面をいよいよかなぐりすて、正真正銘の君主主義者すなわちツァー制度の擁護者であることをはっきりしめした。一九〇九年に、立憲民主党の有名な評論家たちが、『ベーヒ』〔道標〕という論文集を出版したが、そのなかで立憲民主党員はツァー制度が革命を鎮圧したことにたいし、ブルジョア階級にかわって感謝している。立憲民主党は鞭と絞首台のツァー政府の前に膝まずき、公然とこう書いている。「この政権を祝福しなければならない。なぜならこの政権だけが、銃剣と牢獄によって、われわれ（すなわち自由主義的ブルジョア階級）を人民の憤怒からなおまもってくれるからである。」

ツァー政府は、第二次国会を解散させるとともに社会民主党国会議員団に弾圧をくわえ、さらにプロレタリア階級の政治、経済団体にたいする攻撃を強めてきた。懲役監獄、要塞や流刑地は革命家でいっぱいになった。革命家は監獄でむごたらしくうちのめされ、拷問や迫害をうけた。黒百人組一味のテロははげしさをきわめた。ツァー政府の大臣、ストルィピンは、全国にくまなく絞首台を設けた。何千人もの革命家が殺された。当時、絞首台は「ストルィピンのネクタイ」といわれていた。

ツァー政府は、労働者、農民の革命運動を弾圧するにあたって、弾圧、懲罰隊、銃殺、投獄、懲役など高圧的な手段にだけたよったのではない。ツァー政府は「父なるツァー」にたいする農民の素朴な信仰がますます失われていくのを見て、おそれと不安の念に駆られていた。そこで大いに術策をめぐらし、数多くの農村ブルジョア階級、すなわち富農という農村における自分たちの強固な支柱をつくりだすことをもくろんだ。

一九〇六年十一月九日、ストルィピンは新しい農地法を公布し、農民が共同体を脱退して別に農場をつくるのを許可するようにした。ストルィピンの農地法によって、土地の共同使用制は破壊されてしまった。すべての農民は自分に割当てられた土地を私有財産として所有し、共同体を脱退するようにすすめられた。以前は許さなかったが、今では農民は自分に割当てられた土地を売っても良いことになった。農民が共同体を脱退するさいには、共同体は、個人農場（フートル）あるいは割当地（オトループ）として一区画の土地を農民にあたえなければならなかった。

そこで富農すなわちクラークは、貧乏な農民からその土地を安い値段で買いたたくことができるようになった。この農地法が公布されて数年のうちに、百万人以上の貧乏な農民が土地を完全に失って破産してしまっ

た。富農のもつ農場または割当地は、貧乏な農民が土地を失うにつれて増加した。こうした農場や割当地のなかには地主の領地同様に、賃労働、雇農労働を大規模にとりいれるものもあった。政府は、共同体の最良の土地を農場経営の富農に分け与えるように農民を強制した。

農民「解放」のさいに農民の土地を奪ったのは地主だったが、いまや共同体の土地を奪っているのは富農であった。富農は最良の土地をもらったうえに、貧農の分有地を捨て値で買いしめた。

ツァー政府は、土地を買って個人経営の農場をつくるために多額の貸付金を富農にあたえた。ストルィピンは富農を小地主に仕立てあげて、ツァー専制制度の忠実な擁護者にしようとした。

一九〇六年から一九一五年までのわずか九年間に、共同体を脱退した農家は二百万をこえた。

ストルィピンの政策によって、わずかな土地しかもたぬ農民や貧農は、いっそうどうにもならない状態に追いこまれた。農民の間の階級分化は日ましにはげしくなった。農民と農場主の富農との間に衝突がおこりはじめた。

それと同時に、農民は、ツァー政府および地主・立憲民主党の国会が存続するかぎり地主の土地を獲得することはできないことを理解しはじめた。

共同体を脱退して個人農場をつくる現象がはげしかったころ（一九〇七〜一九〇九年）、農民運動は、はじめは停滞していた。だが、まもなく、一九一〇年から一九一一年とそれ以後になると、共同体農民と個人農場主との衝突をもとに、地主や富農＝個人農場主に反対する農民の運動がもりあがってきた。

革命後、工業の面でもひじょうに大きな変化が生まれた。工業の集中すなわち、工業規模の拡大と、ますま

す大きな資本家グループの手中への集中が急速にすすんだ。一九〇五年の革命以前にも、資本家は同盟をつくりはじめており、これによって国内の商品価格をつりあげ、かすめとった超過利潤を商品輸出振興資金とし、商品を安い値段で外国に投売りし、国外市場を獲得できるようにした。資本家のこうした同盟、こうした合同体（独占体）が、トラストとかシンジケートとかよばれるものである。革命後、ブルジョア階級のトラストやシンジケートの数はますます増大した。大銀行の数も急激にふえ、産業のなかでの大銀行の役割もますます大きくなった。外国資本のロシアへの流入もはげしくなった。

こうしてロシアの資本主義はますます独占的、帝国主義的資本主義へと転化していった。

工業は数年の停滞ののち、また活気を呈しはじめた。石炭、金属、石油の生産高はふえ、織物と砂糖の生産も増大した。穀物の輸出高も急速にふえた。

当時のロシアは、工業の面でいくらかの発展をとげたとはいえ、西ヨーロッパ諸国にくらべれば依然としておくれた国であり、外国の資本家に依存していた。当時ロシアではまだ機械や工作機械を製作することができず、外国からの輸入にたよるほかなかった。またロシアには自動車工業も、化学工業も、化学肥料製造工業もなかった。当時のロシアでは、兵器製造の面でも、他の資本主義諸国に立ちおくれていた。

レーニンは、ロシアの金属消費が少ないことは、ロシアが後進国であることを示すものだと指摘し、つぎのように書いている。

「農民解放後の半世紀間に、ロシアの鉄消費量は六倍になった。しかしながらロシアはやはり信じられないほど、先例のないほど立ちおくれた国であり、貧弱でほとんど未開発の国であった。近代的生産

用具の装備の点では、イギリスの四分の一、ドイツの五分の一、アメリカの一〇分の一にすぎなかった。」（レーニン『ロシアにおける一人あたり消費量をどのようにして増大させるか？』）
ロシアの経済ならびに政治のたちおくれの直接の結果として、ロシアの資本主義とツァー制度は、それ自体がいずれも西ヨーロッパ資本主義に依存していた。
これは、ロシアの国民経済のうちもっとも重要な部門である石炭、石油、電気産業、冶金工業などがすべて外国資本の手ににぎられ、ツァー・ロシアは機械と設備のほとんどぜんぶを外国から輸入しなければならなかった点にあらわれていた。
このことは法外な利益を収奪する外債にもあらわれていた。こうした外債の利子を支払うために、ツァー政府は毎年数億ルーブルもの金を人民からしぼり取った。
それはまた、ロシアと「同盟国」とのあいだに結ばれた秘密条約にもあらわれていた。これらの条約によれば、ツァー政府は、戦争が勃発したさいには、数百万のロシアの兵士を帝国主義戦線に送って「同盟国」を援助し、イギリスやフランスの資本家の莫大な利潤を保証しなければならないことになっていた。
ストルィピンの反動期には、憲兵や警官、ツァーの秘密挑発者、黒百人組一味の暴力団どもが労働者階級に野蛮な攻撃をかける事件がひんぴんとおこった。しかし、当時、弾圧によって労働者を散々に迫害したのは、ツァーの手兵だけではなかった。この面では工場主もけっしてひけをとらず、不景気で失業者が増大した時期にはとくに労働者階級へ攻撃をつよめた。工場主は労働者の大量解雇（ロックアウト）を宣言し、ストに積極的に参加した階級意識の強い労働者を「ブラック・リスト」にのせた。「ブラック・リスト」にのせられた労

働者は、その産業の部門の工場主の同盟に加盟していた企業では絶対に就職できなかった。一九〇八年には賃金が一〇〜一五パーセントも切下げられた。労働時間はどこでも十時間ないし十二時間に延長された。非道な罰金制度がふたたび幅を利かしはじめた。

一九〇五年の革命が失敗すると、革命の同伴者たちの間に分裂と腐敗が生まれた。こうした腐敗や退廃の傾向は、知識層のあいだにとくにはげしくあらわれた。同伴者たちは、革命の高揚期にはブルジョア的環境から革命の隊伍に身を投じたが、反動期になると党をはなれていった。そのうちの一部は公然とした反革命の陣営に加わり、一部の者は、活動をつづけてきた合法的な労働者階級の団体にいすわり、プロレタリア階級を革命の道からそらすことに浮身をやつし、プロレタリア階級の革命政党の威信を傷つけることに熱中した。同伴者たちは革命に背をむけ、反動勢力に迎合し、ツァー制度と仲良く共存しようとはかった。

ツァー政府は革命の失敗を利用して、臆病で利己心の強い革命の同伴者たちをまねきいれ、かれらの手先、すなわちスパイに仕立てあげた。ツァーの保安課は、こうした恥知らず裏切り者を労働者団体や党組織のなかにスパイとして送りこみ、内情をさぐり、革命家を売る任務にあたらせた。

反革命勢力は、イデオロギーの戦線でも攻撃をかけてきた。多くの流行著述家があらわれ出て、マルクス主義を「批判」し、「こきおろし」、革命に悪罵をあびせ、嘲笑し、裏切り行為を賞賛し、「個性の礼賛」に名をかりて淫靡な風をあおった。

哲学の面では、マルクス主義を「批判」し修正しようとの企てが強化されるとともに、種々さまざまな宗教的思潮が、「科学的」論証の偽装をつけてあらわれ出た。

マルクス主義にたいする「批判」が一種の流行となった。

こうした先生方はいろいろ異なる色あいをもってはいても、目的は一つ、大衆を革命から引きはなすことであった。

党内の一部の知識分子も退廃と懐疑に引きこまれた。かれらはマルクス主義者と称しているが、もともとしっかりとマルクス主義の立場に立ったことはなかった。そのなかには、ボクダーノフ、バザーロフ、ルナチャルスキー（かれらは一九〇五年にはボリシェビキにぞくした）、ユシュケビッチ、バレンチノフ（この二人はメンシェビキ）などの評論家がいた。かれらは、マルクス主義の哲学理論の基礎すなわち弁証法的唯物論にたいする「批判」と同時に、歴史科学の基礎すなわち史的唯物論にたいする「批判」をくりひろげた。これらの批判がふつうの批判とちがうところは、正直に公然とやるのではなく、マルクス主義の基本的立場を「支持する」という仮面のもとに、あいまいで偽善的なやり口をとっていることである。この連中はこう言っている。われわれはだいたいにおいてマルクス主義者であるが、マルクス主義を「改善」し、若干の基本命題をとりのけたいと考えているだけだ、と。しかし実際には、かれらはマルクス主義を敵視している。なぜなら、口先では偽善的な言葉をあやつってマルクス主義にたいする敵意を否定し、二枚舌をつかって相変わらずマルクス主義者を名のっていても、かれらは、マルクス主義の理論的基礎をくつがえそうとしていたからである。こうした偽善的な批判はきわめて危険である。なぜなら、こうした批判は一般の党活動家をあざむくためのものであり、実際にかれらを迷わすことができたからである。マルクス主義の理論的基礎を破壊するこうした批判は、偽善的であればあるほど、党にとってはますます危険なものであった。というのは、これらの批判が、党と革

命にたいする反動勢力の総攻撃と、ますます密接に結びついたからである。マルクス主義を離れたいちぶの知識分子は、新しい宗教をつくる必要があると公然と宣伝することとさえやってのけた（これがいわゆる「求神派」とか「建神派」とかいわれるものである）。

これらマルクス主義理論分野での変節者に当然なすべき反駁をおこない、その仮面をはぎとって、かれらを徹底的に暴露し、マルクス主義党の理論的基礎を守ることは、マルクス主義者に課された緊急の任務となった。

この任務は「マルクス主義の有名な理論家」と自認するプレハーノフやかれのメンシェビキの友人たちが、引きうけるにちがいないとみられた。ところがかれらは批判的な評論風の二、三の短い論文を書いただけでお茶をにごし、身をひそめ口をつぐんでしまった。

この任務は、一九〇九年に出版されたレーニンの名著『唯物論と経験批判論』によって果たされた。

レーニンはこのなかでつぎのように書いている。「半年たらずのあいだに、主として、また、ほとんどもっぱら、弁証法的唯物論の攻撃にむけられた四冊の著書が出版された。その四冊とは、まず第一に、バザーロフ、ボグダーノフ、ルナチャルスキー、ベルマン、ゲリフォンド、ユシュケビッチ、スボーロフの論文集『マルクス主義哲学にかんする（？　に反対する、というべきであった）概説』（サンクト・ペテルブルグ、一九〇八年）であり、つぎにユシュケビッチの著書『唯物論と批判的実在論』、ベルマンの著書『現代の認識論の見地から見た弁証法』、バレンチノフの著書『マルクス主義の哲学的構成』である。……この連中は——政治的見解がはっきりちがっているにもかかわらず——みな弁証法

的唯物論にたいする敵意で統一されており、しかも同時に、自分は哲学ではマルクス主義者であると自負している！　エンゲルスの弁証法は『神秘主義』であるとベルマンは言う。エンゲルスの見解は『古くさくなってしまった』と、バザーロフはいかにも自明のことのように言いすてている。『現代の認識論』だの『最新の哲学』（または『最新の実証主義』）だの、『現代自然科学の哲学』だの、あるいは『二〇世紀の自然科学の哲学』というものまで、ほこらしげに引合いにだしてくるわが勇士たちによって、唯物論はすっかり論破されたかのようだ。」（レーニン『唯物論と経験批判論』）

ルナチャルスキーが、かれの友人である哲学上の修正主義者たちを「われわれはまよっているかもしれないが、われわれは探求している」と弁護したにたいして、レーニンはこうのべている。

「わたしについていえば、わたしもまた哲学上の『探求者』である。すなわち、この覚え書（『唯物論と経験批判論』をさす――編者注）でわたしは、マルクス主義を装って、信じられないほどあいまいな、混乱した、反動的なものを提供している人びとが、どこで道をふみはずしたかを、探求することを自分の課題としたのである。」（前掲書）

しかし事実のうえでは、レーニンのこの著書はそういうひかえ目な任務をはるかにこえていた。実のところレーニンのこの著書は、ボグダーノフ、ユシュケビッチ、バザーロフ、バレンチノフならびにかれらの哲学上の教師アベナリウスやマッハら――かれらはマルクス主義の唯物論に対抗して、技巧をこらしてみがきをかけた観念論をその著作のなかでもちだそうとした――を批判しただけではない。同時にまたレーニンのこの著書は、マルクス主義の理論的基礎としての弁証法的唯物論ならびに史的唯物論を守るものであり、エンゲルスの

死後、レーニンの『唯物論と経験批判論』が出るまでの歴史上の一時期をつうじて、科学、とりわけ自然科学によって達成されたもっとも重要かつ本質的なものを唯物論的に普遍化したものである。

レーニンはこのなかで、ロシアの経験批判論者、ならびにかれらの外国の諸先生方にきびしい批判をくわえたうえで、哲学的、理論的修正主義を反駁するような結論を出している。

（一）「マルクス主義のますます巧妙な偽造、マルクス主義の名をかりた反唯物論的学説のもっとも巧妙な模造――これが政治経済学における、戦術問題における、哲学全般における現代修正主義の特徴である。」（前掲書）

（二）「マッハとアベナリウスの全学派は観念論の方向に進んでいる。」（前掲書）

（三）「わがマッハ主義者たちはのこらず観念論におちこんだ。」（前掲書）

（四）「経験批判論の認識論におけるスコラ（煩瑣）哲学の裏に、哲学上の党派性をもった闘争を見いださざるをえない。この闘争はつまるところ、現代社会における敵対的な諸階級の傾向とイデオロギーをあらわすものである。」（前掲書）

（五）「経験批判論の客観的、階級的役割は、一般的には唯物論、とりわけ史的唯物論に反対する闘争において、信仰主義者（科学を排斥し信仰を尊ぶ反動派――編者注）のために奉仕するものにほかならない。』（前掲書）

（六）「哲学的観念論は……宗教的偏見への道である。」（前掲書）

レーニンのこの著書が、わが党の歴史のうえで果たした偉大な意義を評価し、ストルィピンの反動期のあり

とあらゆる修正主義者や変節者との闘争のなかで、レーニンが、どんなに大きな理論的財宝を守ったかを理解するには、たとえ簡単にでも、弁証法唯物論と史的唯物論の基礎を知っておかなければならない。

どうしてもそうする必要がある。それは、弁証法的唯物論と史的唯物論は共産主義の理論的基礎であり、マルクス主義党の理論的基礎であって、これらの基礎を知ること、つまりこれを把握することはわが党のすべての積極的な活動家の義務であるからである。

それでは、

（一）弁証法的唯物論とはなにか？

（二）史的唯物論とはなにか？

二、弁証法的唯物論と史的唯物論について

弁証法的唯物論は、マルクス・レーニン主義党の世界観である。それが弁証法的唯物論といわれるのは、自然現象の取りあつかい方、自然現象の研究方法、これらの現象の認識方法が弁証法的であり、その自然現象の解釈、自然現象の理解、その理論が唯物論的であるからである。

史的唯物論は、弁証法的唯物論の諸命題を社会生活の研究にひろげたものであり、弁証法的唯物論の諸命題を社会生活の諸現象、社会の研究、社会の歴史の研究に適用したものである。

マルクスとエンゲルスは、自分たちの弁証法的方法を特徴づけるさい、弁証法の基本的特徴を定式化した哲学者としてのヘーゲルを引きあいにだすのがつねである。だが、それだからといって、マルクスとエンゲルスの弁証法がヘーゲルの弁証法と同じだというわけではない。実際には、マルクスとエンゲルスは、ヘーゲルの弁証法からその「合理的な核心」だけをとりだして、ヘーゲルの観念論的な外殻を捨てさり、弁証法をさらに発展させ、そうすることによって、弁証法に近代的な科学的形態をあたえようとしたものである。

マルクスはこう言っている。

「わたしの弁証法的方法は、根本的にヘーゲルの方法と異なるだけでなく、まったく正反対のものである。ヘーゲルにとっては、かれが理念の名のもとに一つの独立した主体にさえ転化させている思考の過程は、現実的なものの創造者であって、現実的なものは、その外面的現象にすぎない。これとは反対に、わたしにとっては、観念的なものは、人間の頭脳に移植され、そこで変形された、物質的なものにほかならない。」（マルクス『資本論』）

マルクスとエンゲルスは、自分たちの唯物論を特徴づけるさい、唯物論を復権させた哲学者としてのフォイエルバッハを引あいにだすのがつねである。だが、それだからといって、マルクスとエンゲルスの唯物論が、フォイエルバッハの唯物論と同じだというわけではない。実際には、マルクスとエンゲルスは、フォイエルバッハの唯物論からその「基本的な核心」をとりだし、これをさらに科学的、哲学的な唯物論に発展させ、その観念的な、宗教的、倫理的な添加物をすてさったのである。フォイエルバッハは本質的には唯物論者でありながら、かれ自身、唯物論という名称に反対したことは周知の事実である。エンゲルスは一度ならずこう言って

いる。フォイエルバッハは「唯物論的基礎をもっていたにもかかわらず、古い観念論の束縛からぬけ出していない」、「フォイエルバッハの倫理学と宗教哲学を見れば、かれが事実上観念論をとっていたことはすぐにわかる。」（エンゲルス『フォイエルバッハ論』）

弁証法というのは、ギリシャ語の「ディアレゴー」という単語からでてきたことばで、対話する、討論する、という意味である。古代の人びとが弁証法といったのは、相手の見解の矛盾を暴露し、それらの矛盾を克服することによって、真理を求めようとする術のことであった。古代の一部の哲学者は思考の矛盾を暴露し、対立した意見をたたかわせることが、真理をみつけだす最良の方法であると考えていた。この弁証法的思考法は、のちに自然現象にもおしひろげられ、自然を認識する弁証法的方法となった。この弁証法的方法は、自然現象を、永遠に運動し、永遠に変化するものとしてとらえ、自然の発展を、自然界における諸矛盾の発展の結果であり、自然界における対立する諸力の相互作用の結果であるとみなした。

弁証法は、その根本において、形而上学とは正反対のものである。

（一）マルクス主義の弁証法的方法の基本的特徴はつぎのとおりである。

(イ)　形而上学とは反対に、弁証法は、自然を、たがいに切りはなされ、たがいに孤立し、たがいに依存しない諸対象、諸現象の偶然的な集積とはみないで、諸対象、諸現象がたがいに有機的につながり、たがいに依存し、たがいに制約しあう、内在的なつながりをもつ統一体とみる。

だから、弁証法的方法では、自然界のいかなる現象も、それを周囲の現象と関連させずに、孤立したものとして見るならば、なに一つ理解することはできないと考える。なぜなら、自然界のいかなる領域のいかなる現

象も、周囲の諸条件と関連させずに、それから切りはなして見るならば、それはまったくなんの意味ももたないものとなり、これと逆に、いかなる現象も、これを周囲の諸現象と不可分に関連させ、周囲の諸現象の制約をうけるものとして見るならば、それを理解して論証することができるからである。

(ロ) 形而上学とは反対に、弁証法は、自然界を、静止と不動の状態、沈滞と不変の状態とは見ないで、たえざる運動と変化の状態、たえざる更新と発展の状態と見、そのなかでつねになにかが生まれ発展し、つねになにかが崩壊し滅亡するものと考える。

だから、弁証法的方法では、現象をその相互の関連や制約の観点から観察するだけでなく、それらの運動、変化、発展の観点、その発生と死滅の観点からも観察することが要求される。

弁証法的方法にとってなによりも重要なものは、その瞬間には強固に見えてもすでに死滅に向かいつつあるものではなく、その瞬間には強固ではないように見えても、いま発生し、発展しつつあるものである。なぜなら、弁証法的方法にとっては、いま発生し、発展しつつあるものだけが、なにものにもうちやぶられないものだからである。

エンゲルスはこう言っている。

「全自然は、最小のものから最大のものにいたるまで、砂粒から太陽にいたるまで、原生生物(原生細胞――編者注)から人類にいたるまで、すべて永遠の発生と消滅、不断の流動、やすみなき運動と変化のなかにある。」(エンゲルス『自然弁証法』)

したがって、弁証法は、「事物とその頭脳における反映、主としてそれらの相互の関連、それらの連鎖、そ

れらの運動、それらの発生と消滅においてとらえるのである。」とエンゲルスはのべている。（エンゲルス『反デューリング論』）

(ハ)　形而上学とは反対に、弁証法は、発展過程を、量的変化が質的変化をもたらさない単なる成長の過程とは見ないで、目にもつかない小さな量的変化から、あからさまな変化、根本的な変化、質的な変化へと移行する発展過程であると見る。この過程では、質的変化は、徐々におこるのではなくて、急激に突発的に、一つの状態から他の状態への飛躍的な移行としてあらわれ、偶然にではなく、合法則的にあらわれ、目にもつかない、逐次的な量的変化の蓄積の結果としてあらわれると見る。

したがって、弁証法的方法では、発展の過程を円環運動として、過ぎさったもののたんなるくり返しとして理解するのではなく、前進的な運動、上昇線をたどる運動、古い質的状態から新しい質的状態への移行、単純なものから複雑なものへ、低度のものから高度のものへの発展過程と理解すべきであると考える。

エンゲルスはつぎのようにのべている。

「自然は弁証法の試金石である。現代の自然科学は、こうした検証をすすめるうえでの、ひじょうに豊富な、日ごとに増加する材料を提供しており、そのことによって、自然のすべての現象は、とどのつまり形而上学的におこるのではなくて、弁証法的におこるということ、自然は永遠に不変の、たえず新たにくり返す循環運動をしているのではなくて、現実の歴史を経過していくのだということを証明した。この点については、まず第一に、ダーウィンの名をあげなければならない。かれは、今日のすべての生物界、すなわち植物と動物、また人間をもふくめてすべて、幾百万年のながいあいだにわたった発

展過程の産物であることを証明することによって、形而上学的な自然観にきわめて強力な打撃をあたえた。」（エンゲルス『空想から科学への社会主義の発展』）

エンゲルスは、弁証法的発展の過程が量的変化から質的変化への移行であることを説明するさい、つぎのようにのべている。

「物理学では……どんな変化もすべて量から質への転化、すなわち、それぞれの物体に固有の、あるいはそれぞれの物体にあたえられたある形態の運動の量的変化の結果である。たとえば、水の温度は、最初のあいだ、水の液体としての状態になんの作用も及ぼさない。だが、液体としての水の温度がたえず上昇するかあるいは下降して一定の温度にたっしたときには、この水の凝集状態に変化が生まれて、水は一つのばあいには、水蒸気に、他のばあいには氷に転化する。……また、プラチナ線を発光させるには、一定の最小限の電流が必要であり、すべての金属はみな一定の融解熱をもっているし、それぞれの液体もまた、必要な温度をつくりだす装置がありさえすれば、その圧力のもとでは一定の氷点と沸点をもっている。最後に、それぞれの気体もまた、それに必要な圧力と冷却を加えさえすれば、液体に変えることができる臨界点をもっている。……物理学でいう定数（一つの状態からべつの状態への転換点――編者注）とは、ほとんどが、運動の量的（変化）増加または減少が該当物質の状態に質的変化をよびおこす、すなわち量が質に転化する結節点をあらわしているにすぎない。」（エンゲルス『自然弁証法』）

エンゲルスは、さらに化学の問題に移って、つぎのようにつづけている。

「化学は、量的構成の変化によって生まれる物体の質的変化を研究する科学であるということができ

る。このことはヘーゲル自身もすでに知っていた。酸素を例にとれば、酸素の分子は普通二個の原子をふくむが、もし一個の分子に三個の原子をふくむようにすれば、その臭気も作用も酸素とはまったく異なる物体——オゾンを得ることができる。酸素が窒素あるいはイオウと化合するばあいのいろいろな比率、そのそれぞれの比率の化合によって、ほかのすべての物体とは質的に異なる物体ができるところのいろいろな比率については、いまさら言うまでもない！」（エンゲルス『自然弁証法』）

最後に、ヘーゲルにあらんかぎりの悪罵をあびせながらも、無感覚の王国から感覚の王国への転化、無機物の王国から有機物の王国への転化は、新しい状態への飛躍であるという有名な命題を、ヘーゲルからひそかに借用しているデューリングを、エンゲルスは批判してつぎのようにのべている。

「これは、まさしくヘーゲルのいう度量関係の結節点である。これによると、たんなる量的な増減がある特定の結節点で質的飛躍を引きおこすのである。たとえば、水を加熱または冷却するばあいには、沸点と氷点とが結節点であって、そこで——標準気圧のもとでは——新しい凝集状態への飛躍が起こり、こうして量が質に転化するのである。」（エンゲルス『反デューリング論』）

㈡　形而上学とは反対に、弁証法は、自然物や自然現象には本来、内在的矛盾がふくまれていることを出発点している。なぜなら、これらのものにはすべて、否定的な側面と肯定的な側面、過去と未来、衰退しつつあるものと発展しつつあるものとがふくまれていて、こうした対立面の闘争、古いものと新しいものとの闘争、死滅しつつあるものと生まれいでつつあるものとの闘争、衰退しつつあるものと発展しつつあるものとの闘争がとりもなおさず、発展過程の内的内容であり、量的変化から質的変化への転化を生み出す内的内容だからである。

したがって、弁証法的方法では、低度のものから高度なものへの発展の過程は、諸現象の調和のとれた展開としてではなく、それぞれの事物や現象自体に本来ふくまれる諸矛盾の暴露、こうした矛盾にもとづいて作用する対立した諸傾向の「闘争」としてあらわれる、と考える。

レーニンはこう言っている。

「本来の意味からいうと、弁証法とは、対象の本質そのものにおける矛盾の研究のことである。」（レーニン『哲学ノート』）

レーニンは、さらにこう言っている。

「発展とは、対立面の『闘争』のことである。」（前掲書）

簡単にいえば、マルクス主義の弁証法的方法の基本的特徴は、以上にのべたとおりである。

したがって、弁証法的方法の諸命題を社会生活の研究や社会史の研究におしひろげることが、どんなに大きな意義をもつか、この諸命題を社会史やプロレタリア政党の実際活動に適用することが、どんなに大きな意義をもつか、これは容易に理解することができる。

世界には孤立した現象がないとするなら、すべての現象はたがいにつながり、制約しあっているとするなら、歴史のそれぞれの社会制度やそれぞれの社会運動は、歴史家がよくやっているように、「永遠の正義」だとか、そのほかなんらかの先入観の観点からこれを評価すべきではなく、この社会制度やこの社会運動を生みだし、それらとつながりあっている諸条件の観点からこれを評価しなければならないこと、これはあきらかである。

奴隷制度は、現代の諸条件から見れば、はなはだしく無意味なものであり、不自然な馬鹿げたものである。しかし、奴隷制度は、崩壊しつつある原始共同体制度の諸条件のもとでは、ごく当然な、法則にかなった現象である。なぜなら、それは原始共同体制度にくらべて一歩前進を意味しているからである。

ツァー制度とブルジョア社会が存在した諸条件のもと、たとえば一九〇五年のロシアでは、ブルジョア民主共和国をもとめることは、まったく理解できる、正しい、革命的な要求であった。なぜなら、当時はブルジョア共和国が一歩前進を意味していたからである。しかしながら、現在のわがソ連の諸条件のもとでは、ブルジョア民主共和国をもとめることは、馬鹿げた、反革命的な要求である。なぜなら、ブルジョア共和国は、ソビエト共和国にくらべて一歩後退だからである。

すべては、条件、場所、時間によって左右されるのである。

社会現象にたいするこうした歴史的な取りあつかい方がないなら、歴史科学は存在も発展もできないことは明らかである。なぜなら、こうしたあつかいをしたばあいにはじめて、歴史科学は、偶然性の混沌、馬鹿げきった誤りの堆積にならずにすむからである。

さらに、世界がたえず運動し発展しているとするなら、また、古いものが死滅し新しいものが成長するのは発展の法則であるとするなら、「永久不変」の社会秩序とか、私的所有と搾取についての「永遠の原理」とか、農民は地主に服従し、労働者は資本家に服従する「永遠の理念」などといったものがありえないことは、明らかである。

つまり、かつて資本主義制度が封建制度にとってかわったのと同じように、社会主義制度も資本主義制度に

とってかわることができる。

つまり、現在は優勢な勢力をしめていても、これ以上発展しないような社会層にたよるべきではなく、現在は優勢な勢力をしめていなくても、大きな前途をもつ、社会層にたよらなければならない。

一九世紀の八〇年代、マルクス主義者がナロードニキと闘争していた時代には、ロシアのプロレタリア階級は、人口の絶対多数をしめていた個人農民にくらべれば、ごく少数にすぎなかった。しかし、プロレタリア階級は発展する階級であったが、農民は崩壊しつつある階級であった。プロレタリア階級が発展する階級であったからこそ、マルクス主義者は、プロレタリア階級に立脚したのである。そして、かれらはたしかに誤ってはいなかった。なぜなら、周知のとおりプロレタリア階級は、その後、とるにたりない勢力から歴史的にも政治的にも第一級の勢力に成長したからである。

つまり、政治上で誤りをおかさないためには、後ろを見るのではなく、前を見なければならない。

さらに、ゆるやかな量的変化から急激な突発的な質的変化に移行するのが発展の法則であるとするなら、被抑圧階級によってすすめられる革命的変革は、まったく当然の、避けることのできない現象である。

つまり、資本主義から社会主義への移行、抑圧からの労働者階級の解放は、ゆるやかな変化や改良によって実現されるのではなく、資本主義制度の質的変化、すなわち革命によってのみ実現される。

つまり、政治上で誤りをおかさぬようにするには、改良主義者になるのではなく、革命家にならなければならない。

さらに、発展は、内的諸矛盾の暴露をつうじておこなわれ、また、これらの矛盾に根ざす互いに対立する勢

力の衝突をつうじてこれらの矛盾を克服するためにおこなわれるとするなら、プロレタリア階級の階級闘争がまったく自然な、避けることのできない現象であることは、あきらかである。

つまり、資本主義的秩序のもつさまざまな矛盾をおおいかくすのではなく、これらの矛盾をあばき、解きほごさなければならず、階級闘争をもみ消すのではなく、最後までおしすすめなければならない。

つまり、政治上で誤りをおかさないようにするには、非妥協的なプロレタリア階級の階級政策をとるべきであって、プロレタリア階級とブルジョア階級の利益の調和という改良主義的政策をとるべきではなく、資本主義の社会主義への「成長転化」という、協調主義的政策をとるべきではないのである。

マルクス主義の弁証法的方法を社会生活に適用し、社会史に適用すれば、これまでのべたとおりである。

(二)　マルクス主義の哲学的唯物論

マルクス主義の哲学的唯物論についていえば、哲学的観念論とはその根本において正反対のものである。

マルクス主義の哲学的唯物論の基本的特徴は、つぎのとおりである。

(イ)　世界が「絶対理念」や、「世界精神」、「意識」を体現するものと考える観念論とは反対に、マルクスの哲学的唯物論ではつぎのことから出発する。つまり、世界は、その本性において物質的である。世界における多種多様な現象は、運動する物質のさまざまな形態である。弁証法的方法によって明らかにされる諸現象の相互関連と相互制約は、運動する物質の発展法則である。世界は、物質の運動の法則にしたがって発展するものであって、「世界精神」などというものを必要とはしない、ということである。

エンゲルスはこう言っている。

「唯物論的自然観は、なんら外からの付加なしに、自然をありのままにとらえることにほかならな

い。」（エンゲルス『自然弁証法』）

「すべてのものを包括する統一体である世界は、いかなる神によっても、またいかなる人間によって創造されたものではない。それは、合法則的に燃え上がり、合法則的に消えてゆく、永遠に生きる火であったし、現在もそうであり、将来もそうであるだろう。」

という古代の哲学者ヘラクレイトスの唯物論的見解に言及して、レーニンは、「弁証法的唯物論の原理のひじょうにたくみな叙述である」とのべた。（レーニン『哲学ノート』）

(ロ) 現実に存在するものは、われわれの意識だけであって、物質世界、存在、自然はわれわれの意識、われわれの感覚、観念、概念のなかにしか存在しないと主張する観念論とは反対に、マルクス主義の哲学的唯物論は、つぎのことから出発する。つまり、物質、自然、存在は、意識の外に、意識から独立して存在する客観的現実であるということ、物質は、感覚、観念、意識の源泉であるから、第一次的なものであるということ、意識は、物質の反映であり、存在の反映であるから、第二次的なもの、派生的なものであるということ、思考は、高度に発展して完成の域にたっした物質の生み出したもの、すなわち頭脳の生み出したものであり、頭脳は思考の器官であるということ、だから、重大な誤りをおかさないようにするには、思考を物質から切りはなしてはならない、ということから出発する。

エンゲルスはこう言っている。

「存在にたいする思考の関係、自然にたいする精神の関係の問題は、すべての哲学の最高の問題である。……哲学者たちは、この問題にどのように答えるかに応じて、二大陣営に分かれた。自然にたいし

て精神が根源的であると主張した人びとは……観念論の陣営を形成した。自然を根源的なものと見なした人びとは、唯物論にぞくする。」（エンゲルス『フォイエルバッハ論』）

そして、さらにこう言っている。

「感性的に知覚しうる物質的な世界、われわれ自身がぞくしている世界、これが、唯一の現実的なものである。……われわれの意識と思考とは、それがどんなに感覚を超越したもののように見えようとも、物質的な身体的な器官、すなわち脳髄の産物にほかならない。物質が精神の産物ではなくて、精神それ自体が物質の最高の産物にすぎないのである。」（前掲書）

マルクスは、物質と思考との問題について、こう言っている。

「思想を思考するところの物質から切りはなすことはできない。物質は、すべての変化の基体である。」（マルクス・エンゲルス『聖家族』）

レーニンは、マルクス主義の哲学的唯物論を性格づけて、つぎのようにのべている。

「唯物論一般は、人類の意識、感覚、経験等々から……独立した、客観的に実在する存在（物質）を認める……意識は存在の反映にすぎないものであり、せいぜい、存在の近似的に正しい（適応的な、理想的に正確な）その反映にすぎない。」（レーニン『唯物論と経験批判論』）

さらにまたこうのべている。

「物質とは、われわれの感覚器官に作用して、感覚をひきおこすところのものである。物質とは、われわれが感覚によってえた客観的現実である……物質、自然、存在、物理的なものが第一次的なもので

あって、精神、意識、感覚、心理的なものは第二次的なものである。」（前掲書）

「世界像とは、物質がどう運動し、『物質がどう思考するか』をしめす画像である。」（前掲書）

「人の脳髄は思考の器官である。」（前掲書）

(ハ) 世界およびその合法則性を認識する可能性を否定し、われわれの知識の確実性を信用せず、客観的な真理を認めないで、世界は科学によって決して認識することのできない『物自体』で充満していると考える観念論とは反対に、マルクス主義の哲学的唯物論は、つぎのことから出発する。つまり、世界およびその合法則性は、完全に認識可能なのであり、経験と実践によってためされた自然の法則についてのわれわれの知識は、客観的真理の意義をもつ確実な知識であり、世界には認識することのできないものはないのであって、いまのところまだ認識できないものがあっても、将来は科学と実践の力によって明らかにされ、認識できるものであると、いうことから出発する。

世界は認識することのできないものであり、「物自体」は認識することのできないものであるというカントやその他の観念論者の命題を批判するにあたって、エンゲルスは、われわれの知識を確実なものとみる唯物論の周知の命題を主張して、つぎのように書いている。

「これら、およびその他一切の哲学的妄想にたいして、もっとも徹底的な反駁は、実践、すなわち実験と産業である。われわれ自身が自然現象をつくりだし、それをその条件にしたがって引きだし、われわれの目的に役立つようにさせることによって、そうした自然現象にたいするわれわれの認識の正しさを立証することができるならば、カントのいう認識できない『物自体』などというものは、終わりを

告げるだろう。動植物の体内でつくり出された化学的諸物質は、有機化学によってそれらがつぎつぎに生産されるようになるまでは、ずっとあの『物自体』にとどまっていた。だが、有機化学によってこれらのものが生産されるようになると、『物自体』ではなくてわれわれのための物となったのである。たとえばあかね草の色素であるアリザリンなどがそうである。いまではわれわれは野原に自生するあかね草の根からこれを取るのではなくて、はるかに安価で、簡単な方法でコールタールからつくりだしている。コペルニクスの太陽系についての学説は、三百年ものあいだ仮説であった。ひじょうに信頼性の高い仮説とはいえ、やはり仮説にはちがいなかった。しかしながら、ルベリエがこの太陽系学説の論拠にもとづいて、未知の惑星がかならず存在することを証明しただけでなく、この惑星の天体における位置まで算定したときに、そしてのちに、ガリレイがこの惑星を実際に発見したときに、コペルニクスの太陽系学説は証明されたのであった。」（エンゲルス『フォイエルバッハ論』）

レーニンは、ボグダーノフ、バザーロフ、ユシュケビッチ、その他マッハの追随者たちを、信仰主義を奉ずるものとして非難し、自然の合法則性にかんするわれわれの科学的知識は確実なものであり、科学の法則は客観的真理であるという唯物論の周知の命題を主張して、つぎのようにのべている。

「現代の信仰主義は、けっして科学を否認するものではない。科学の『過度の要求』すなわち科学の客観的真理への要求だけを否認するものである。客観的真理が存在するからには（唯物論者が考えているように）、そして自然科学だけが、人類の『経験』のうちに外部の世界を反映して、われわれに客観的真理をあたえることができるとすれば、あらゆる信仰主義は無条件に否認されるのである。」（レーニ

ン『唯物論と験経批判論』)

マルクス主義の哲学的唯物論の特徴は、簡単にいえば以上のとおりである。

哲学的唯物論の諸命題を社会生活の研究や社会史の研究に適用することが、どんなに大きな意義をもつか、またこれらの諸命題を社会史やプロレタリア階級の党の実際活動に適用することが、どんなに大きな意義をもつものであるかは、容易に理解される。

自然の諸現象の関連と相互制約が、自然の発展の合法則性であるとすれば、社会生活の諸現象の関連と相互制約もまた偶然のものではなく、社会の発展の合法則性である。

つまり、社会生活や社会史は、「偶然事」の集積ではなくなる。なぜなら、社会史は社会の合法則的な発展となり、社会史の研究は科学となるからである。

つまり、プロレタリア階級の党の実際活動は絶対に、「傑出した個人」の善意な願望や、「理性」、「普遍的な道徳」などの要求に立脚すべきではなく、社会発展の合法則性と、これらの合法則性の研究に立脚すべきである。

さらに、世界が認識できるものであり、自然の発展法則についてのわれわれの知識が客観的真理の意義をもつ確実な知識であるとすれば、つぎのようなことになる。すなわち、社会生活も、社会の発展もまた認識できるものであって、社会の発展法則についての科学の証拠も、客観的真理の意義をもつ確実な証拠であるということになる。

つまり、社会生活の現象がどんなに複雑であっても、社会史の科学は、たとえば、生物学のように正確な科

学となりうるのであり、社会発展の法則を実際的適用に利用することができる。

つまり、プロレタリア階級の党は、実際活動にあたり、なんらかの偶然の動機などというものではなく、社会発展の法則や、こうした法則のなかからでてきた実際的な結論を指針としなければならない。

つまり、社会主義は、すでに人類のよりよい未来についての空想から、科学に転化する。

つまり、科学と実際活動との結びつき、理論と実践との結びつき、これらの統一は、プロレタリア階級の党にとって指針とならなければならない。

さらに、自然、存在、物質的世界が第一次的なものであって、意識、思考は第二次的なもの、派生的なものであるからには、そして、物質世界が、人間の意識から独立して存在する客観的現実であり、意識は、この客観的現実の反映であるからには、当然つぎのようなことになる。すなわち、社会の物質生活、社会の存在もまた第一次的なものであり、社会の精神生活は第二次的なもの、派生的なものであるということ。また、社会の物質生活は、人びとの意志から独立して存在する客観的現実であり、社会の精神生活は、この客観的現実の反映であり、存在の反映であるということになる。

つまり、社会の精神生活が形づくられる根源、社会的思想、社会的理論、政治的見解、政治的機関の生まれる根源は、思想、理論、見解、政治的機関それ自体のなかに求めるべきではなくて、社会の物質的生活条件のなかに、社会的存在のなかに求めるべきであり、これらの思想、理論、見解などはいずれも社会的存在の反映なのである。

つまり、社会史上のさまざまな時期に、さまざまな社会的思想、理論、見解、政治的機関が見られるなら

ば、もし、奴隷制度のもとではある種の社会的思想、理論、見解、政治的機関があらわれ、封建制度のもとではまた別種のもの、資本主義制度のもとではさらにまたほかのものがあらわれるとすれば、それは、思想、理論、見解、政治的機関そのものの「本性」や「個性」などによるものではなく、社会発展のさまざまな時期における社会の物質生活のさまざまな条件によって説明されるのである。

社会の存在がどんなものであるか、社会の物質生活の条件がどんなものであるかによって、その社会の思想、理論、政治的見解、政治的機関もきまるのである。

この点について、マルクスはこうのべている。

「人間の意識が人間の存在を規定するのではなくて、逆に、人間の社会的存在が人間の意識を規定するのである。」(マルクス『経済学批判』序文)

つまり、政治上で誤りをおかさないようにするには、また、中身の空っぽな夢想家の立場におちいらないようにするには、プロレタリア階級の党は、自己の活動にあたって、抽象的な「人間理性の原則」などに立脚すべきではなく、社会発展の決定的な力としての、社会の物質生活の具体的諸条件に立脚すべきであり、また「偉大な人物」の善意による願望にもとづくべきではなくて、社会の物質生活の発展の現実的な要求にもとづくべきである。

ナロードニキ、無政府主義者、社会革命党員をふくむ空想家たちの没落は、とりわけ、つぎのことによって説明される。すなわち、かれらが社会発展における社会の物質生活的諸条件のはたすもっとも重要な役割を認めず、観念論におちいって、自分たちの実際活動を、社会の物質生活における発展の要求にもとづかず、これ

らの要求とは無関係に、また、これに反して、社会の現実的生活とかけ離れた、「理想的計画」とか「すべてを包括する企画」とかにもとづいておこなったことで説明される。

マルクス・レーニン主義が強大な力をもち、生気はつらつとしているのは、実際活動にあたって、どんなときにも社会の現実生活から遊離せず、社会の物質生活における発展の必要にしっかりもとづいて活動するからである。

しかしながら、マルクスの言葉から、社会的思想、理論、政治的見解、政治的機関が社会生活のなかでなんの意義ももたないとか、これらのものが社会的存在に、社会生活の物質的条件の発展にたいして反作用をおよぼさないとか、という結論をひきだすべきではない。われわれはここで、まずさしあたりの問題として、社会的思想、理論、見解、政治的機関の**起源**とそれらの**発生**についてだけ、社会の精神生活が社会の物質生活の条件の反映であることだけをのべたのである。社会的思想、理論、見解、政治的機関のもつ**意義**について、これらのものが歴史のうえで果たす**役割**についていえば、史的唯物論は、これを否定しないばかりでなく、逆に社会生活や社会史におけるこれらのきわめて大きな役割とその意義とを強調するものである。

種々さまざまな社会的な思想と理論とがある。古い思想、理論があり、これは衰退しつつある社会勢力の利益に奉仕するものであり、すでに生命をおえている。これらのもつ意義は社会の発展、社会の前進を妨げるものである。ところが、また新しい先進的な思想や理論があり、これらは先進的な社会勢力の利益に奉仕するものである。これらは、社会の発展、社会の前進を容易にする役割をはたすものであり、それが、社会の物質生活の発展の要求を正しく反映すればするほど、いっそう大きな意義をもつのである。

新しい社会的な思想と理論は、社会の物質生活の発展によって、社会に新しい課題が提起されたときにはじめて生まれるものである。しかし、これらの思想や理論が生まれると、これらは、社会の物質生活の発展によってもたらされた新しい課題を解決し、社会の前進を容易にすることのできるもっとも重要な力となるのである。この点にこそ、新しい思想、新しい理論、新しい政治的見解、新しい政治的機関のもつ、組織、動員、改革についてのきわめて大きな意義があらわれるのである。本来、新しい社会的思想や理論が生まれるのは、それが社会に必要だからであり、また、それらにもとづく組織、動員、改革活動なしには、社会の物質生活の発展という緊急の任務を、解決することは不可能だからである。社会の物質生活の発展によって提起された新しい任務を基盤として生まれてきた新しい社会的思想と、理論とは、自らの進路をきりひらき、人民大衆の所有となり、衰退していく社会勢力に対抗して、大衆を動員し、組織し、そうすることによって社会の物質生活の発展をさまたげている衰退する社会勢力の打倒を容易にするのである。

このように、社会的思想、理論、政治的機関は、社会の物質生活の発展、社会的存在の発展という緊急の任務を基礎として生まれたが、またそれ自身逆に社会的存在、社会の物質生活に影響をおよぼし、そして、社会の物質生活にとって緊急の任務を、徹底的に解決し、社会の物質生活をいっそう発展させることができるようにするために必要な条件をつくり出す。

この点について、マルクスはこうのべている。

「理論は、大衆をとらえるやいなや、物質的な力となる。」（マルクス『ヘーゲル法哲学批判序説』）

つまり、社会の物質生活の条件に影響をあたえ、その条件の発展をはやめ、改善を促すことができるように

するためには、プロレタリア階級の党は、このような社会的理論、このような社会思想にもとづかなければならない。このような理論、このような思想とは、社会の物質生活の発展の要求を正しく反映し、そうすることによって広範な人民大衆を運動にひきいれることができ、大衆を動員し、そして、社会の反動勢力を粉砕し、先進的勢力のために道をひらく用意のある、プロレタリア階級の党の偉大な軍隊として大衆を組織できるようなものである。

「経済主義者」やメンシェビキの没落は、とりわけつぎのことで説明される。かれらが先進的な理論や先進的な思想のもつ、動員、組織、改革上の役割を認めず、卑俗な唯物論におちいって、先進的な理論、先進的思想の役割をまったく無視したために、党を消極的なものにし、無為無策のものにしようとしたことにある。

マルクス・レーニン主義が強大な力をもち、生気はつらつとしているのは、社会の物質生活の発展の要求を正しく反映した先進的理論にもとづき、その理論をそれにふさわしい高さに引きあげ、この理論のもつ、動員、組織、改革上の力を徹底的に利用することを自己の義務とみなしているところにある。

史的唯物論は、社会的存在と社会的意識との関係、社会の物質生活の発展条件と社会の精神生活の発展との関係についての問題を、以上のように解決している。

㈢　史的唯物論

つぎの問題の説明が残っている。社会の特性、社会的思想、見解、政治的機関などを決定する「社会の物質生活の諸条件」を、史的唯物論の立場からは、いったいなんと解すべきか、という問題である。

「社会の物質生活の諸条件」とは、なにか、その特徴とは、どんなものか？

「社会の物質生活の諸条件」という概念には、まず第一に、社会をとりまく自然、すなわち、社会の物質生活にとって不可欠の、しかも恒常的な条件の一つであって、もちろん社会の発展に影響をおよぼす地理的環境がふくまれる。地理的環境は、社会の発展にどんな役割をはたすのか？　地理的環境は、社会の特性、社会制度の性格およびある制度からべつな制度への移行を規定する主要な力ではないのか？

史的唯物論は、この問題にたいして否と答える。

たしかに、地理的環境は、社会の発展にとって恒常的で、必要な条件の一つであり、もちろん社会の発展に影響をおよぼし、社会の発展をはやめたりおくらせたりする。しかしながら、地理的環境の影響は決定的なものではない。というのは、社会の変化や発展は、地理的環境の変化や発展にくらべて、比較にならないほど急激にすすむからである。三千年のあいだに、ヨーロッパでは、原始共同体制度、奴隷制度、封建制度という三種の異なる社会制度がすでに交代した。しかも、東部ヨーロッパすなわちソ連では、四種の社会制度が交代した。だが、この同じ期間に、ヨーロッパの地理的条件は、まったく変化しなかったか、変化したとしても地理学で問題にならないほどのごくわずかな変化しかおこらなかった。それもきわめて当然のことである。地理的環境にいくらかでも重大な変化が生まれるには、数百万年が必要だが、人間の社会制度のばあいは、きわめて重大な変化でさえ、数百年あるいは千年か二千年もあれば十分足りるからである。

以上のことから、地理的環境は、社会発展の主要な原因、決定的な原因になりえないという結論がえられる。なぜなら、何万年ものあいだほとんど変化しないものが、数百年のうちに根本的変化をとげるものの発展にとって、主要な原因とはなりえないからである。

さらに、「社会の物質生活の諸条件」という概念には、また、人口増加、人口密度のいかんということも、ふくまれることは、たしかである。なぜなら、人間は社会の物質生活の諸条件の不可欠の要素であり、一定の最少限の人間がいなくては、社会のいかなる物質生活もありえないからである。人口の増加は、人間の社会制度の性格を決定する主要な力ではないであろうか？

史的唯物論は、この問題にたいしても否と答える。

たしかに、人口の増加は、社会の発展に影響をおよぼし、社会の発展を容易にしたり、おくらせたりするが、社会の発展にとって主要な力とはなりえないし、社会の発展に決定的な影響をおよぼすことはできない。というのは、甲の社会制度がなぜほかの制度ではなくて、かならず乙の新制度に変わるのか、なぜ原始共同体制度から奴隷制度へ、奴隷制度から封建制度へ、封建制度からブルジョア制度へとかならず変わり、ほかの制度に変わらないのかは、人口の増加それ自体によって説明することはできないからである。

もしも、人口の増加が、社会の発展の決定的な力であるならば、人口の密度が高いところでは、社会制度もそれに見あった高い型を生みださなければならない。ところが、現実にはそうなってはいない。中国の人口密度はアメリカより四倍も高いが、社会発展の程度という見地からは、中国よりもアメリカが高い。なぜなら、中国では、なおまだ封建制度が支配しているのに、アメリカは、すでにとっくに資本主義の最高の発展段階にたっしているからである。ベルギーの人口密度は、アメリカより十九倍高く、ソ連より二十六倍も高いが、社会発展の程度という見地からは、ベルギーよりもアメリカの方が高く、ベルギーは、ソ連より歴史的に一時代たちおくれている。なぜなら、ベルギーでは、なお資本主義制度が支配しているが、ソ連では、資本主義は一

掃され、社会主義制度が確立されているからである。

以上のことから、人口の増加は、社会制度の性格、社会の特性を決定する社会発展の主要な力ではないし、またそうなりえないという結論がえられる。

(イ) それでは、社会の物質生活の諸条件の体系のなかで、社会の特性、社会制度の性格を決定し、一つの制度からべつな制度への社会の発展を決定づける主要な力は、なにか？

史的唯物論がこのような力と見なすのは、人間が生きてゆくために必要な生活手段を得る様式、すなわち、社会の生活と発展に必要な食料、衣類、履物、住宅、燃料、生産用具などの物質的財貨の生産様式である。

人間が生きるためには、食料、衣類、履物、住宅、燃料などが必要である。そしてこれらの物質的財貨をもつためには、これらの物を生産しなければならず、それを生産するには、食料、衣類、履物、住宅、燃料などを生産する生産用具が必要であり、これらの用具を生産し、使いこなすことが、できなければならない。

物質的財貨の生産に使われる生産用具および一定の生産上の経験と労働の熟練をもっていることにより、生産用具を使って、物質的財貨を生産する人間——これらの要素が結合して、社会の生産力を形成する。

しかしながら、生産力は、生産の一つの面、物質的財貨の生産に利用される自然物や自然力と人間との関係をあらわす生産様式の一つの面にすぎない。生産のもう一つの面、生産様式のもう一つの面は、生産の過程における人と人との相互の関係、すなわち人間の生産関係である。人間は、自然とたたかい、また自然を利用して物質的財貨を生産するが、けっしてたがいに孤立したり、たがいにばらばらでひとりぼっちのものとしてやるのではなく、共同して、集団をつくり、社会をつくっておこなうのである。だから、生産は、どんなときに

も、どんな条件のもとでも、社会的生産である。人間は、物質的財貨を生産するさい、生産の内部でなんらかの相互関係、なんらかの生産関係をうちたてる。これらの関係は、搾取から解放された人びとのあいだの協力と相互扶助の関係のばあいもあれば、支配と隷属の関係でもありうるし、最後に、また、ある種の生産関係からべつな生産関係に移行する、過渡的な関係でもありうる。しかし、生産関係がどんな性格をもつものであろうと、それはどんなときでも、どんな制度のもとでも社会の生産力と同じように、生産に不可欠の要素である。

マルクスはつぎのようにのべている。

「生産において、人間は、自然にたいしてのみ作用するのではなく、かれら相互のあいだでも作用しあうのである。人間は、一定の方法で結合してともにはたらき、その活動を相互に交換しあうことなしには、生産をいとなむことはできない。生産するためには、人間は、相互のあいだに一定の連絡や関係を結び、そしてこれらの社会的連絡や社会的関係の内部でのみ、自然にたいするはたらきかけがおこなわれ、生産がおこなわれるのである。」（マルクス『賃労働と資本』）

したがって、生産や生産様式は、社会の生産力をも、人間の生産関係をも包含し、こうして、物質的財貨の生産過程における両者の統一を体現しているのである。

(ロ)　生産の第一の特徴は、生産がけっして長期にわたって一つの所にとどまっていることはなく、つねに変化し、発展してゆく状態にあること、しかも、そのばあい、生産様式の変化は、社会制度全体、社会的思想、政治的見解、政治的機関の変化をひきおこすことは避けられない。つまり、社会的、政治的機構全体の改革をひきおこすということである。それぞれの発展段階において、人間は、それぞれちがった生産様式をもちい

る。あるいは、もっと大まかにいえば、それぞれちがった生活様式をとる。原始共同体制度のもとでは、ある生産様式をとり、奴隷制度のもとではべつの生産様式、封建制度のもとではさらに他の生産様式、といったぐあいである。そして、これらにともない、人間の社会制度、人間の精神生活、見解、政治的機関もまたそれぞれちがってくる。

社会の生産様式の如何によって、社会自体も、本質的には、それに応じてちがってくるし、社会の思想や理論、政治的見解、政治的機関もちがってくる。

あるいは、もっと大まかにいえば、人間の生活様式の如何によって、人間の考え方もそれに応じてちがってくるのである。

このことは、社会発展の歴史とは、まず第一に、生産の発展の歴史であり、何千年らいつぎつぎに新しいものへと交代する生産様式の歴史であり、生産力と人間の生産関係の発展の歴史であることを意味している。

つまり、社会の発展の歴史とは、とりもなおさず、物質的財貨の生産者自身の歴史、生産過程における主要な勢力で社会の存在に必要な物質的財貨の生産をおこなう勤労大衆の歴史である。

つまり、歴史科学が、真の科学になるには、もはや社会発展の歴史を、従来のように国王や司令官の行動、国家の「侵略者」や「征服者」の行動に帰着させることはできないし、なによりもまず、物質的財貨の生産者の歴史、勤労大衆の歴史、各国人民の歴史を研究しなければならない。

つまり、社会史の法則を研究するための鍵は、人間の頭脳のなかに、社会の見解や思想のなかに求めるのではなく、社会のそれぞれの一定の歴史的時期において社会で実際におこなわれている生産様式、すなわち社会

の経済のなかに求めなければならない。
つまり、歴史科学のいちばん重要な課題は、生産の法則、生産力と生産関係の発展法則、社会の経済法則を研究し、これを明らかにすることである。
つまり、プロレタリア階級の党が、真に正しい党になるには、なによりもまず、生産の発展法則にかんする知識、社会の経済発展の法則にかんする知識に精通しなければならない。
つまり、政治上で誤りをおかさないようにするには、プロレタリア階級の党は、その綱領作成にあたっても、実際活動をすすめるうえでも、なによりもまず生産の発展法則、社会の経済発展の法則を出発点にしなければならない。
(ハ)　生産の第二の特徴は、生産の変化と発展とが、いつのばあいもまず生産力の変化と発展とをもって、なによりもまず生産用具の変化と発展から始まることにある。したがって、生産力は、生産のもっとも活動的なもっとも革命的な要素である。まずはじめに、社会の生産力が変化し、発展して、そのあとに、これらの変化に依存し、これらの変化に照応して、人間の生産関係、経済関係にも変化がおこる。しかし、このことは、生産関係が生産力の発展に影響をあたえず、生産力が生産関係に依存しないということを意味するものではない。生産関係は、生産力の発展に依存して発展しながら、同時にまた逆に生産力の発展に作用して、その発展をはやめたりおくらせたりする。このばあい、指摘しなければならないことは、生産関係は、あまりに長いあいだ生産力の増大に立ちおくれ、これと矛盾する状態にとどまることはできないということである。なぜなら、生産関係が生産力の性格やその状態に照応していて、生産力の発展の余地が残されているばあいだけ、十分に発

展をとげることができるからである。したがって、生産関係が生産力の発展にどんなに立ちおくれていても、それらはおそかれはやかれ、かならず生産力の発展水準に照応し、生産力の性格に照応しなければならないし、また実際に照応しているのである。そうでなければ、生産体系における生産力と生産関係の統一が根源から崩れ、生産全体が破裂し、生産の危機、生産力の破壊がおこる。

生産関係が生産力の性格に照応しない例、両者の衝突をしめす例が、資本主義国でおこる経済恐慌である。そこでは、生産手段の資本主義的私的所有が生産過程の共有的性格、生産力の性格にははなはだしく照応しなくなる。この不照応の結果、生産力を破壊にみちびく経済恐慌がおこるし、しかも、こうした不照応そのものが、社会革命の経済的土台をなすのであって、社会革命は、現存の生産関係を破壊し、生産力の性格に照応する新しい生産関係をつくりだすことを使命とする。

これに反して、生産関係が生産力の性格に完全に照応している例は、ソ連の社会主義的国民経済である。ここでは、生産手段の社会的所有が、生産過程の社会的性格に完全に照応しており、そのために、経済恐慌はなく、生産力の破壊もないのである。

したがって、生産力は、生産のなかでもっとも活動的で、もっとも革命的な要素であるだけでなく、生産発展の過程における決定的な要素でもある。

生産力の如何によって、生産関係もまた、生産力に照応しなければならない。

人間はどんな生産用具を使って、自分に必要な物質的財貨を生産するかという問題に答えるのが生産力の状態であるならば、生産関係の状態は、他の問題、すなわち、生産手段（土地、森林、河川、地下資源、原料、

生産用具、生産用建造物、交通、通信機関など）を所有しているものはだれか、生産手段を支配しているのはだれか、社会全体か、それとも他の個人、グループ、階級を搾取するために、それを利用する個人、グループ、階級が支配しているのか、という問題にたいして回答をあたえるのである。

つぎにしめすのが、古代から現代にいたるまでの生産力の発展の概観である。粗末な石器から弓矢への移行と、これにともなう狩猟生活から動物の飼育と原始的牧畜への移行。石器から金属製道具（鉄製の斧、鉄の刃先をつけた鋤など）への移行、ならびにそれにしたがって、植物の栽培、農業への移行。材料加工のための金属製道具のいっそうの改良、鍛冶用ふいごへの移行、陶器生産への移行、これにともなって、手工業の発展、手工業の農業からの分立、独立した手工業生産の発達、これにつづく工場制手工業（マニュファクチュア）生産の発展。手工業的生産用具から機械への移行と手工業、工場制手工業生産から機械工業への転化。さらに機械体系への移行と近代的大規模機械化工業の出現。こういったことが、人類史上における社会の生産力発展のきわめて不完全ではあるが、一般的な状況である。このばあい、生産用具の発達と改良とは、生産にたずさわる人間によって実現されたものであって、人間にかかわりなくおこなわれたのではないということ、したがって、生産用具の変化と発達とにつれて、生産力のもっとも重要な要素としての人間も、変化し発展しており、人間の生産上の経験、労働の熟練、生産用具の操作についての技能も変化し発展したということは、もちろんである。

歴史上における社会の生産力の変化と発展とに照応して、人間の生産関係、経済関係も変化し発展した。歴史のうえでは、生産関係の五つの基本的な型が知られている。すなわち原始共同体制度型、奴隷制度型、

封建制度型、資本主義型、社会主義型がそれである。

原始共同体制度のもとでは、生産関係の基礎は、生産手段の共有である。これは、基本的にはこの時期の生産力の性格に照応している。石器やその後にあらわれた弓矢では、人間は単独で自然界の力や猛獣とたたかうことは不可能であった。人間は、森のなかで果実を集め、水中の魚をとるにも、なんらかの住居をつくるにも、どうしても共同で作業をするほかなく、これを拒めば餓死するか、猛獣や近隣の部落の犠牲となった。共同の労働は、生産手段の共有とともに、生産物の共有をもたらした。ここでは、猛獣からの防御用武器にもなるある種の生産用具が私的所有であったとはいえ、まだ生産手段の私的所有という概念はなかった。ここでは搾取もなければ階級などというものもなかった。

奴隷制度のもとでは、生産関係の基礎は、奴隷所有者が生産手段ならびに生産に従事する者、すなわち、奴隷を所有することにある。この奴隷を、奴隷所有者は、家畜と同様に売買し、殺すことができる。こうした生産関係は、基本的には、この時期の生産力の状態に照応している。いまや、人間は、石器ではなく、金属製道具を自由に使用したのである。牧畜も、農業も知らなかった貧弱な、原始的な狩猟経済のかわりに、牧畜、農業、手工業と、これらの生産部門のあいだの分業があらわれた。また、個々の人間や部落のあいだで生産物の交換がおこなわれる可能性、少数の人びとの手に財貨が集積され、少数者の手中へ生産手段が実際上集積する可能性、少数者への多数者の従属と、これら多数者が奴隷にかわる可能性があらわれた。ここでは、生産過程における社会のすべての成員の共同の自由な労働というものは、もはやないのである。すなわち、ここでは労働しない奴隷所有者に搾取される奴隷の強制労働がひろくおこなわれる。だから、生産手段の共有も生産物の

共有もないのである。公有には私的所有がとってかわる。ここでは、奴隷所有者が、第一位の、主要な、完全な財産所有者である。

富める者と貧乏な者、搾取する者と搾取される者、完全な権利をもつ者となんらの権利ももたない者、これら両者のあいだの激烈な階級闘争――これが、奴隷制度の状況である。

封建制度のもとでは、生産関係の基礎は、封建領主による生産手段の所有と、生産に従事する者、すなわち農奴にたいする封建領主の不完全な所有である。封建領主は、この農奴を殺すことはもはやできないが、売買することはできる。封建的所有とならんで、生産用具と私的経営にたいする農民と手工業者の、本人の労働にもとづく個人的所有が存在する。このような生産関係は、この時期における生産力の状態に、基本的に照応している。鉄の熔解、加工のいっそうの改良、鉄製の鋤や織機の普及、農業、蔬菜栽培、ぶどう酒醸造、製油などのいっそうの発達、手工業職場と工場制手工業企業の出現――これらが生産力の状態をしめす特徴である。

新しい生産力は、働き手が生産のなかでいくらかでも創意性と労働意欲をもち、労働にたいする関心をもつことを要求する。だから、封建領主は、労働に関心をもたず、創意性をまったく欠いた働き手としての奴隷を見放して、農奴を利用する方をえらぶのである。農奴は、自分自身の経営と自分の生産用具をもっていて、土地を耕作し、その収穫の一部を現物で封建領主におさめるために必要な、労働にたいするある程度の関心をもっている。

私的所有は、ここでは一段と発展する。搾取は、奴隷制度のばあいとほとんど同じようにひどいもので、ほんの少し軽減されたにすぎなかった。搾取する者と搾取される者とのあいだの階級闘争は、封建制度の基本的

な特徴である。

資本主義制度のもとでは、生産関係の基礎は、生産手段の資本主義的所有であって、生産に従事する者、すなわち賃金労働者を所有することではない。資本家は、これらの賃金労働者を殺したり、売買したりすることはできない。なぜなら、賃金労働者は人身的な従属からは解放されているからである。しかし、賃金労働者は、生産手段を奪われているので、餓死しないためには、自分の労働力を資本家に売り、苛酷な搾取をよぎなくうけるのである。生産手段の資本主義的所有とならんで、農奴的隷属から解放された農民や手工業者の、生産手段にたいする、本人の労働にもとづく私的所有が存在し、しかも資本主義の初期には、それがひろく普及している。手工業職場や工場制手工業企業のかわりに、機械化された大工場があらわれた。農民の原始的な生産用具で耕作される貴族の領地のかわりに、農業技術にもとづいて経営され、農業機械を供給された資本主義大農場があらわれた。

新しい生産力は、生産に従事する者が、虐げられ無知な農奴よりも文化的で、のみこみの早いこと、機械を理解し、正しく操作できることを要求する。だから、資本家は、農奴制の束縛をはなれ、機械を正しく操作できるだけの十分な教養のある賃金労働者の利用をのぞんだのである。

しかし、資本主義は、生産力を巨大な規模に発展させたとき、それ自身では解決できない矛盾におちいった。資本主義は、ますます多くの商品を生産し、その価格を引下げることによって、競争を激化し、大量の中小の私的所有者を破産させて、プロレタリアにかえ、かれらの購買力を低下させ、その結果、生産された商品を売りさばくことができなくなる。資本主義はまた、生産を拡大し、いく百万の労働者を大工場に集中して、

生産過程に社会的性格をもたせ、まさにこのことによって、自分自身の土台を掘りくずすのである。なぜなら、生産過程の社会的性格は、生産手段の社会的所有を要求しているのに、生産手段の所有は、依然として、生産過程の社会的性格と両立しない資本主義的私有のまま残っているからである。

生産力の性格と生産関係とのあいだの、こうしたあいいれない矛盾は、生産過剰による周期的恐慌としてあらわれる。このとき、資本家は、自分自身が広範な住民を没落させたために、支払能力をもつ需要者がなくなり、その結果、生産物を焼きはらい、つくり上げた商品を破壊し、生産を停止し、生産力を破壊するよりほかはなくなる。また、そのときに、いく百万の住民は、商品不足からではなく、商品の過剰生産のために、失業と飢餓にくるしまなければならなくされる。

このことは、資本主義的生産関係が、社会の生産力の状態に照応しなくなり、社会の生産力とあいいれない矛盾におちいったことを意味する。

このことは、資本主義が、現存の生産手段の資本主義的所有を、社会主義的所有に変えることを使命とする革命をはらんでいることを意味する。

このことは、搾取する者と搾取される者とのあいだのもっとも先鋭な階級闘争が、資本主義制度の基本的特徴であることを意味する。

現在のところまだソ連でだけ実現されている社会主義制度のもとでは、生産関係の基礎は、生産手段にたいする社会的所有である。ここでは、もはや、搾取する者もなければ、搾取されるものもいない。生産物は「働かないものは、食ってはならない」という原則にもとづき、労働に応じて、分配される。ここでは、生産過程

における人間の相互関係は、搾取から解放された働き手の、同志的協力と社会主義的相互援助が特徴である。ここでは、生産関係は、生産力の状態に完全に照応している。なぜなら、生産過程の社会的性格が生産手段にたいする社会的所有によって補強されているからである。

だから、ソ連における社会主義的生産は、生産過剰による周期的恐慌も、これと関連しておこる不合理な現象も知らないのである。

だから、ここでは、生産力は、急速な発展をとげている。なぜなら、生産力に照応する生産関係が生産力にこのような発展をとげるための十分な余地をあたえているからである。

以上が、人類史上における人間の生産関係の発展概況である。

以上が、生産関係の発展が、社会の生産力の発展、なによりもまず生産用具の発展に依存することをしめすものであって、この依存性があるので、生産力の変化と発展は、おそかれはやかれ、これに照応した生産関係の変化と発展をひきおこすのである。

マルクスはつぎのようにのべている。

「労働手段の使用と創造は、ある種の動物にもその萌芽の形があるとはいえ、それは人類特有の労働過程を特徴づけるものである（マルクスのいう「労働手段」は主として生産用具をさしている……編者注）。だから、フランクリンも人類を道具をつくる動物であると定義している。死滅した動物種属の身体組織を研究するのに、その遺骨の構造が重要であるのと同様に、労働手段の遺物は、すでに死滅した社会、経済形態を研究するうえで、きわめて重要な意義をもつものである。経済上の各時代を区別する

ものは、なにが生産されるかではなくて、どのようにして……生産されるかである。労働手段は、たんに人類の労働力の発展をしめす尺度というだけでなく、またその労働が遂行される社会的関係の指標でもある。」（マルクス『資本論』）

さらにつぎのようにのべている。

「社会関係は、生産力と密接に結びついている。新しい生産力を獲得することによって、人間は、自己の生産様式を変え、そしてまた、自己の生計の立て方を変えることによって、自分のすべての社会関係を変える。手ひき臼は、シュゼレン（封建領主——編者注）の支配する社会を君たちにあたえ、蒸気製粉機は産業資本家のいる社会をあたえる。」（マルクス『哲学の貧困』）

「生産力の増大の運動、社会関係の破壊、観念の形成は、間断なくおこなわれている。不動なのは、運動の抽象だけである。」（前掲書）

エンゲルスは、『共産党宣言』のなかで、定式化された史的唯物論を特徴づけて、つぎのようにのべている。

「歴史上の各時代における経済的生産と、またこれから必然的に生まれる社会の構成とが、この時代の政治史と思想史の土台になっている。……したがって——原始共同体的土地所有が崩壊して以来——すべての歴史は、階級闘争の歴史、すなわち社会発展のそれぞれの段階における被搾取階級と搾取階級、被支配階級と支配階級とのあいだの闘争の歴史であった。……しかし、いまやこの闘争は、搾取され、抑圧されている階級（プロレタリア階級）が同時に、全社会を、搾取、抑圧、階級闘争から永久に解放

することなしには、もはやプロレタリア階級を搾取し、抑圧する階級（ブルジョア階級）から自己を解放することはできない段階にたっした……。」（『共産党宣言』ドイツ語版へのエンゲルスの序文）

(二) 生産の第三の特徴は、新しい生産力と、これに照応した生産関係の発生が、古い制度からはなれて独立しておこるのではなく、古い制度がなくなった後ではなく、古い制度の内部でおこること、人間のあらかじめ計画した、意識的な活動の結果ではなく、自然発生的に、無意識のうちに、人間の意志とかかわりなしに、おこるということである。それが、自然発生的に、人間の意志とかかわりなしにおこるのは、つぎの二つの理由による。

第一の原因。人間は、生産様式をあれこれと自由にえらぶことはできないからである。なぜなら、それぞれの新しい世代は、生活をはじめるときには、前の世代の労働の結果として、すでにできあがった生産力と生産関係に出会うものであって、そのために、新しい世代は、物質的財貨を生産できるようにするためには、まずはじめは、生産の分野でできあがった形態で出会うすべてをうけいれ、これに順応しなければならないからである。

第二の原因。人間は、あれこれの生産用具や、あれこれの生産力の要素を改良するさい、この改良がどんな社会的結果をひきおこすかを、意識することも、理解することもないし、熟慮することもなく、ただ自分の日常の利害関係や、自分の労働を軽減し、なんらかの直接的な目に見える利益を得ようと考えるだけだからである。

原始共同体社会の成員のあるものが、模索しながら、だんだんと石器から鉄製道具へと移行したさい、もちろん、かれらは、この革新がどんな社会的結果をもたらすかを知らなかったし、よく考えてもみなかった。か

れらは、金属製道具への移行が生産の変革を意味するものであり、それが結局のところ奴隷制度へみちびくということを理解しなかったし、意識もしなかった。——かれらはただ自分たちの労働を軽減し、目先の、目に見える利益を追求しただけである。——かれらの意識的な活動は、こうした日常の個人的な利益という狭い枠にかぎられていた。

封建制度の時代に、ヨーロッパの新興ブルジョア階級は、同業組合の小さい作業場とならんで、大規模な工場制手工業企業を建設しはじめ、こうして、社会の生産力を前進させたときには、もちろん、かれらはこの革新がどんな社会的結果をもたらすかについては、知りもしなかったし、よく考えもしなかった。また、この「ささやかな」革新が、社会勢力の再編成——かれらがその恩寵をひじょうにありがたく思っていた国王の権力にたてつき、かれらの最上流の代表者たちがその列に加わることをしばしば夢みていた貴族にもたてつく革命に終わらざるをえなかったような再編成——をまねくことを、意識もしなかったし、理解もしなかった。——かれらは、ただ、商品の生産を安くし、より多くの商品をアジアの市場や発見されたばかりのアメリカの市場で売りさばき、いっそう多くの利益をえたいと思っただけであった。——かれらの意識的な活動は、こうした日常の実際活動の狭い枠にかぎられていた。

ロシアの資本家が、ツァー制度には少しもふれずにおき、農民を地主の自由にまかせたまま、外国の資本家と協力して、ロシアに近代的な機械化された大工業の創設に力をいれたときにも、かれらは、もちろん、こうした巨大な生産力の増大が、どんな社会的な結果をもたらすかについて、知らなかったし、よく考えもしなかった。社会の生産力の分野でのこうした大飛躍が、社会勢力の再編成をもたらし、この再編成が、プロレタリ

ア階級に、農民と連合し、勝利のうちに社会主義革命を遂行する可能性をあたえるだろうことを、意識もしなかったし、理解することもできなかった。――かれらは、ただ、工業生産をできるだけ拡大し、巨大な国内市場を占有し、独占者となり、国民経済からできるだけ多くの利潤をしぼりとることを考えただけであった。かれらの意識的活動は、かれらの日常のかぎられた実際的な利害関係の枠から一歩も出なかった。

このことにたいしては、マルクスは、つぎのようにいっている。

「人間は、その生活の社会的生産において（すなわち、人間の生活に必要な物質的財貨の生産において――編者注）一定の、必然的な、かれらの意志から独立した関係、生産関係にはいる。この生産関係は、かれらの物質的生産力の一定の発展段階に照応する。」（マルクス『経済学批判序文』）

――傍点は編集部による。

しかしながら、このことは、生産関係の変化や古い生産関係から新しい生産関係への移行が、なんらの衝突も、激動もなく、円滑にはこぶということを意味しない。その反対に、こうした移行は、古い生産関係を革命的にくつがえし、新しい生産関係をうちたてることによっておこなわれるのが普通である。生産力の発展と生産関係の分野における変化は、一定の時期までは、人間の意志とは無関係に、自然発生的にすすむ。だが、それは、ただ、一定の時期に達するまでのことであり、発生し、発展しつつある生産力が、十分に成熟するまでのことである。新しい生産力が成熟したのちには、現存の生産関係とその担い手である支配階級は、「克服することのできない」障害となる。この障害は、新しい階級の意識的活動、新しい階級の暴力的な行動、すなわち革命によってのみ、はじめて一掃することができる。この点で、古い生産関係を力づくで撤廃することを使

命とする新しい社会的思想、新しい政治的機関、新しい政治権力の巨大な役割がとくに、はっきりとあらわれる。新しい生産力と古い生産関係との衝突にもとづき、また、社会の新しい経済的要求にもとづいて、新しい社会的思想が生まれる。新しい思想は、大衆を組織、動員する。大衆は、新しい政治的軍隊に結集し、新しい革命権力を樹立し、この権力を行使して、生産関係の分野における古い秩序を力づくで撤廃し、新しい秩序をうちたてるのである。自然発生的な発展過程は、人間の意識的な活動に席をゆずり、平和な発展は、暴力による変革に席をゆずり、進化は革命に席をゆずる。

マルクスは、つぎのようにいっている。

「プロレタリア階級は、ブルジョア階級にたいする闘争のなかで、必然的に階級として自らを結成し……革命によって、自己を支配階級に変え、支配階級として古い生産関係を力づくで撤廃する。」(『共産党宣言』)

さらにつぎのようにのべている。

「プロレタリア階級は、その政治的支配を利用して、ブルジョア階級のもつ全資本をつぎつぎに奪いとり、すべての生産用具を国家の手に、すなわち支配階級として組織されたプロレタリア階級の手に集中し、生産力の総量をできるだけ急速に増大させるであろう。」(前掲書)

「暴力は、新しい社会をはらんでいるあらゆる旧社会の助産婦である。」(マルクス『資本論』)

つぎにかかげるのは、マルクスが一八五九年にその名著『経済学批判』の歴史的意義をもつ「序文」のなかでのべた、史的唯物論の本質についての天才的な定式である。

「人間は、かれらの生活の社会的生産において、一定の、必然的な、かれらの意志から独立した諸関係に、すなわち、かれらの物質的生産力の一定の発展段階に対応する生産関係にはいる。これらの生産関係の総体は、社会の経済的構造を形成する。これが現実の土台であり、そのうえに法律的および政治的な上部構造が立ち、そしてそれに一定の社会的意識諸形態が照応する。物質的生活の生産様式が、社会的、政治的、精神的な生活過程一般を制約する。人間の意識がかれらの存在を規定するのではなく、逆に、かれらの社会的存在がかれらの意識を規定するのである。社会の物質的生産力は、その発展のある段階で、その生産力が従来その内部で発展してきた現存の生産関係と、あるいはそれの法律的表現にすぎないところの所有関係と、矛盾するようになる。これらの関係は、生産力の発展のための形態からその桎梏に転化する。そのときに、社会革命の時代がはじまる。経済的土台の変化とともに、巨大な上部構造全体において、あるいは徐々に、あるいは急激に、変化がおこなわれる。このような変革を考慮するにあたっては、自然科学的な正確さで確認できる生産の経済的諸条件における物質的変革と、人間がこの衝突を意識し、これとたたかいぬくところの法律的、政治的、宗教的、芸術的または哲学的な諸形態、つまり、イデオロギー的な諸形態とを、つねに区別しなければならない。ある個人の人物を、その個人が自分自身をどう考えているかによって判断できないのと同様に、このような変革の時代を、その時代の意識から判断することはできないのであって、むしろこの意識を、物質的生活の諸矛盾から、社会的生産力と生産関係とのあいだに現存する矛盾から説明しなければならない。一つの社会構成は、それがうけいれるだけのすべての生産力が発展しきるまでは、けっして没落するものではない。また、

新しい、より高度の生産関係は、その生存の物質的諸条件が古い社会自体の胎内で孵化しおわるまでは、けっして従来のものにとってかわることはない。だから、人間はつねに、自分が解決しうる課題だけを提起するものである。なぜならば、もっと詳しく考察してみると、課題そのものは、その解決の物質的諸条件がすでに現存しているか、あるいはすくなくとも生まれつつあるか、どちらかのばあいにだけ発生することがつねにわかるからである。」（マルクス『経済学批判』序文）

マルクス主義の唯物論を社会生活に適用し、社会史に適用すれば、以上のとおりである。以上が、弁証法的唯物論と史的唯物論の其本的特徴である。

以上のことから、レーニンが修正主義者や裏切り者の攻撃を破って、どんなに大きな理論的宝を党のために守ったか、またレーニンのあらわした『唯物論と経験批判論』の出現が、わが党の発展のうえにどんなに重要な意義をもつかが、明らかであろう。

三、ストルィピン反動期におけるボリシェビキとメンシェビキ

解党派と召還派にたいするボリシェビキの闘争

反動期に党組織で活動することは、いぜんの革命の発展期にくらべてはるかに困難であった。党員の数は激減した。党内の多くの小ブルジョア的同伴者、とくに知識分子は、ツァー政府の弾圧をおそれてつぎつぎに党

の陣列からはなれた。

レーニンは、こういう時期にこそ革命政党はさらに学びぬかなければならないことを指摘した。革命の高揚期には、革命政党はいかに攻撃するかを学んだ。反動期には、革命政党は、いかに正しく退却するか、いかに地下にもぐり、いかに非合法の党を守り、強化するか、党と大衆との連係を強めるためには、いかに合法的な機会を利用し、いかに各種の合法的組織、とくに合法的な大衆組織を利用するかを学ばなければならない。

メンシェビキは、革命の新たな高揚の可能性をまったく信じなかったので、あわてて退却した。かれらは恥知らずにも、党綱領の革命的要求や党の革命的スローガンを捨てさり、プロレタリア階級の革命的非合法党を解消し、なくしてしまおうとした。そのため、この種のメンシェビキは解党派とよばれるようになった。

ボリシェビキは、メンシェビキとはことなり、ここ数年のうちに、革命の高まりがおとずれることを確信し、そして党はこの新しい高まりを迎えるために大衆を組織しなければならないと考えた。革命の基本的任務はまだ解決されていなかった。農民はまだ地主の土地を手にいれていなかったし、労働者はまだ八時間労働制を獲得していなかった。人民の憎悪の的であるツァー専制制度はまだくつがえされてはいなかった。そのうえツァー専制制度は、人民が一九〇五年にかちとったわずかな政治的自由さえも、いまではふたたびふみにじっている。こうして、一九〇五年に革命をひきおこした数々の原因は、依然として残されていた。だからボリシェビキは、革命運動の新たな高まりがかならずくることを確信し、それにそなえ、労働者階級勢力の結集につとめた。

ボリシェビキは、また、大衆的革命闘争によって自分たちの権利をたたかいとるべきことを、一九〇五年の

革命が労働者階級におしえたという事実からも、革命の新たな高まりがかならずくることを確信した。資本家が攻勢に出た反動期に、労働者は一九〇五年に学びとったこれらの教訓をけっして忘れることはできなかった。レーニンは、労働者からきた手紙を引用しているが、手紙には、労働者が工場主によってふたたび虐待され、侮辱されている事実をのべ、こう書いてある。「しばらくの辛抱だ。一九〇五年がまた来る！」

ボリシェビキの基本的政治目的は、やはり一九〇五年と同様、ツァー制度をたおし、ブルジョア民主主義革命を徹底的にやりぬき、社会主義革命に移行することであった。ボリシェビキはこの目的を片時も忘れず、民主共和国、地主の土地没収、八時間労働制という基本的革命スローガンを、つねに大衆の前にかかげた。

しかし、党の戦術は、一九〇五年の革命の高揚期とは同じものというわけにはいかなかった。たとえば、近い将来に政治的ゼネストやあるいは武装蜂起を大衆によびかけてはならなかった。なぜなら、このときには革命運動はすでに下り坂にあり、労働者階級は極度に疲労し、反動階級はいちじるしく強化されていたからである。党は新しい情勢を考慮にいれなければならなかった。攻撃戦術のかわりに、防御戦術、すなわち、勢力を結集し、幹部を地下にもぐらせる戦術、地下から党の活動をすすめる戦術、非合法活動と合法的な労働者組織内の活動とを結合する戦術をとらねばならなかった。

そして、ボリシェビキは、この任務を果たすことができた。

「われわれは、革命前の長い年月、活動することができた。われわれが磐石のような人間とよばれたのにはわけがある。社会民主主義者は、最初の軍事攻撃が失敗したからといって、意気銷沈もしなければ、途方にくれることもなく、冒険行動に心を奪われることのない、プロレタリア階級の党を結成しと

げた」とレーニンは書いている。（レーニン『政治的覚え書』）

ボリシェビキは、非合法の党組織を保持、強化するためにしのぎをけずった。しかし同時にまた、ボリシェビキはあらゆる合法的可能性、どんな合法的なひっかかりをも利用することを不可欠と考えた。これによって、大衆との結びつきを維持し、保持し、まさにそのことによって党を強化することができたのである。

「それは、わが党が、ツァー制度にたいする公然たる革命闘争から、闘争の迂回作戦へ、保険組合から国会の演壇までをふくめた、ありとあらゆる合法的機会の利用へと転換した時期であった。それは、われわれが一九〇五年の革命に敗北してのちの、退却の時期であった。この転期にたって、われわれは、勢力を結集し、ツァー制度にたいする公然たる革命闘争をふたたびはじめるために、新しい闘争方法を習得するよう要求された。」（スターリン『第十五回党大会速記録』一九三五年版）

無事に残った合法的諸組織は、党の地下組織を援護するものとなり、大衆との連係を保つのに役立った。ボリシェビキは、大衆との連係をたもつために、労働組合をはじめ他の合法的な大衆諸組織、たとえば健康保険組合、労働者消費組合、クラブ、文化・教育団体、市民会館などを利用した。ボリシェビキは国会の演壇を利用して、ツァー政府の政策を暴露し、立憲民主党員をあばくとともに、農民をプロレタリア階級の側に獲得するようにつとめた。党は、それ自体の非合法組織を守り、その組織をつうじてあらゆる形の政治活動を指導したからこそ、つねに党の正しい方針を遂行し、新たな革命の高まりにそなえて、勢力を結集することができたのである。

ボリシェビキは革命的方針を遂行するさい、二つの戦線での闘争、すなわち、公然と党に反対する解党派と、

ひそかに党に反対するいわゆる召還派という党内の二種の日和見主義との闘争をすすめなければならなかった。

レーニンとボリシェビキは、解党主義にたいし、その日和見主義的な潮流があらわれはじめたそもそものはじめから、妥協のない闘争をすすめた。レーニンは、解党派が党内での自由主義的ブルジョア階級の手先であると指摘した。

一九〇八年十二月、ロシア社会民主労働党第五回（全ロシア）会議がパリでひらかれた。この会議は、レーニンの提案によって解党派を糾弾した。すなわち「現存のロシア社会民主労働党組織を解消し、これを、たとえあきらかに党の綱領、戦術、伝統を放棄するという代償をはらっても、合法的な枠内で活動するゆるやかな連合体にかえようとする」党内の一部の知識分子（メンシェビキ）の企てを糾弾した。（引用文は『ソ連共産党（ボ）決議集』第一部）

会議は、解党派の企てにだんこ反対することをすべての党組織によびかけた。

しかし、メンシェビキは、会議のこの決議にしたがわず、ますます解党主義の道、革命の裏切り、立憲民主党員に接近する道へと、転落していった。メンシェビキは、プロレタリア党の革命的綱領をいよいよ公然と投げ棄て、民主共和国、八時間労働制、地主の土地の没収という要求を放棄した。メンシェビキは、党の綱領や戦術の放棄を代償として、公然たる合法的な、「労働者」党なるものの存続をツァー政府に許可してもらおうとした。メンシェビキは、ストルィピン支配体制と和解し、ストルィピン支配に順応しようとしていた。そのため、解党派はさらに「ストルィピン労働党」ともよばれたのである。

ボリシェビキは、ダン、アクセリロード、ポトレソフらに指導され、マルトフ、トロツキーその他のメンシェビキ連中に援助された革命の公然たる敵、すなわち解党派と闘争する一方、かくれた解党派、「左翼的」言葉を弄してその日和見主義的本質をおおいかくそうとする召還派にたいしても、妥協のない闘争をおこなった。召還派という名称は、一部の元ボリシェビキにつけられたもので、かれらは、国会から労働者代議員を召還し、合法的組織内のすべての活動を全面的にやめることを要求した。

一九〇八年に、ボリシェビキの一部は、国会から社会民主党議員を召還するように要求した。ここから、「召還派」という名称が生まれた。召還派は、自分たちだけのグループ（ボグダーノフ、ルナチャルスキー、アレクシンスキー、ポクロフスキー、ブブノフら）を組織し、レーニンおよびレーニンの路線にたいして抗争しはじめた。召還派は、労働組合やその他合法的組織のなかで活動することを頑固に拒否した。こうしてかれらは、労働者の事業に重大な損害をもたらした。召還派は、党を労働階級からひきはなし、党外の大衆との連係を失わせた。かれらは、地下組織内に閉じこもろうとし、合法的掩護を利用する可能性を失わせたため、党を攻撃の危険にさらした。召還派は、ボリシェビキが、国会内で、そして国会をつうじて農民に影響をあたえ、ツァー政府の政策をあばき、農民をだまして引き入れようとする立憲民主党員の政策を暴露できることを、理解しなかった。召還派は、革命の新たな高まりを迎えるために勢力を結集することをさまたげた。だから召還派は、「裏がえしの解党派」であった。かれらは、合法的組織を利用する可能性を抹殺することに努め、広範な党外大衆にたいするプロレタリア階級の指導を事実上拒否し、革命活動を拒否したのである。

召還派の行動を討議するために、一九〇九年に召集されたボリシェビキの新聞『プロレタリー』〔無産者〕

の拡大編集会議は、召還派を糾弾した。ボリシェビキは召還派とは何の共通点もないことを声明するとともに、かれらをボリシェビキ組織から除名した。

解党派と召還派はいずれも、プロレタリア階級とその党の小ブルジョア的同伴者にすぎなかった。解党派と召還派は、プロレタリア階級が困難に直面したとき、とくにはっきりとその本体をさらけ出したのである。

四　トロツキズムにたいするボリシェビキの闘争　反党の八月連合

ボリシェビキが、プロレタリア党の一貫した方針のために二つの戦線で、解党派と召還派にたいして妥協のない闘争をおこなっていたときに、トロツキーはメンシェビキ・解党派を支持した。レーニンがかれに「ユードゥシカ・トロツキー」の烙印をおしたのは、ちょうどこのときであった。トロツキーは、ウィーン（オーストリア）で文筆家のグループをつくり、「超分派」と称しながら実はメンシェビキの新聞を創刊した(訳注・ユードゥシカ[1]は、サルティコフ――シチェドリンの小説『ゴロブリョフ家の人びと』にでてくる陰険な人物。レーニンは、トロツキーにたいしてこの名をつかった)。当時レーニンは、トロツキーについてこう書いている。「トロツキーは、かれが卑劣きわまる野心家であり、分派の組織者としてふるまった。……口先だけは党についてもっともらしいことを言うが、そのふるまいは、ほかのすべての分派主義者よりもいっそう悪質である」と。

その後、一九一二年に、トロツキーは、八月連合を組織した。これは、レーニンに反対し、ボリシェビキに反対するすべての反ボリシェビキ的なグループや潮流の連合であった。解党派も召還派も、ボリシェビキを敵視するこの連合にそろってはいり、かれらが同じ穴のムジナであることを立証した。トロツキストは、基本問題についてすべて解党派的立場をとった。しかし、トロツキーは、その解党派的立場を、中道主義、すなわち調停主義の仮面によってかくした。かれは、ボリシェビキとメンシェビキのどちらにもぞくさず、この双方の調停につとめているかのように主張した。レーニンは、この点についてつぎのようにいった。トロツキーはおおっぴらな解党派よりもっと卑劣で、有害である。なぜなら、かれは労働者をだまし、「超分派」の立場にたつといいながら、実はメンシェビキ・解党派を全面的に支持しているからである、と。トロツキズムは、中間主義を育てたおもなグループであった。

スターリン同志はつぎのように書いている。

「中間主義は、一つの政治的概念である。そのイデオロギーは御都合主義のイデオロギーであり、一つの共同の党の構成のなかでプロレタリア階級の利益を小ブルジョア階級の利益に従属させるイデオロギーである。このイデオロギーは、レーニン主義とは縁のない、敵対的なものである。」（スターリン『国の工業化およびソ連共産党（ボ）内の右翼的偏向について』）

この時期に、カーメネフ、ジノビエフ、ルイコフらは、実際には、トロツキーのかくれた代弁者であった。なぜなら、かれらはつねにトロツキーを助けて、レーニンに反対したからである。一九一〇年一月、ジノビエフ、カーメネフ、ルイコフその他トロツキーのかくれた同盟者たちの協力のもとに、レーニンの意志にそむい

て、中央委員会総会が召集された。多くのボリシェビキが逮捕されていたため、当時の中央委員会の構成は変わっていた。そこで動揺分子たちは、レーニンに反対する決定を通過させることができた。たとえば、この総会で、ボリシェビキの新聞『プロレタリー』の発行を停止し、トロツキーがウィーンで発行している『プラウダ』〔真理〕に財政援助をあたえることが決定された。カーメネフは、トロツキーの新聞の編集局にはいり、ジノビエフとともにトロツキーの新聞を中央委員会機関紙にしようとつとめた。

中央委員会の一月総会は、レーニンの強硬な主張によってようやく、解党派と召還派を非難する決定を採択した。しかしここでも、ジノビエフとカーメネフはトロツキーの提案をかたくなにおしとおし、解党派をそのとおりの名で呼ぶことに反対した。

その結果は、レーニンが予想し警告したとおりになった。ボリシェビキだけが中央委員会総会の決定にしたがって、その機関紙『プロレタリー』の発行をやめたが、メンシェビキは解党主義的なその分派の新聞、『ゴーロル・ソツィアル・デモクラータ』〔社会民主主義者の声〕をひきつづき発行した。

スターリン同志はレーニンの立場を全面的に支持し、『ソツィアル・デモクラート』〔社会民主主義者〕第十一号に特別論文を発表した。この論文では、トロツキズムの助力者の行動が非難され、また、カーメネフ、ジノビエフ、ルイコフらの裏切り行為によって、ボリシェビキの内部に生まれた異常事態を一掃する必要がのべられていた。この論文ではまた、後にプラーグ党会議で実現されることになった当面の任務が提起されてあった。すなわち、それは全党会議をひらくこと、合法的党新聞を発行すること、および、ロシアに非合法の実際上の党中央部を創設すること、であった。スターリン同志のこの論文は、レーニンの主張を全面的に支持す

るバクー党委員会の決定にもとづいて書かれたものであった。

解党派やトロツキストから、召還派や建神派にいたるまでの反党分子だけからなる、トロツキーの反党的八月連合に対抗するために、非合法のプロレタリア党を維持し、強化しようとする者による、党擁護連合がつくられた。この連合には、レーニンの指導するボリシェビキと、プレハーノフの指導する少数の党支持メンシェビキが参加した。プレハーノフおよびメンシェビキの党支持グループは、多くの問題でメンシェビキの立場をとってはいたが、八月連合および解党派の意見とは絶対に同調しないことを表明し、ボリシェビキとの協調につとめた。レーニンはプレハーノフの提案をうけいれて、反党分子とたたかうためにプレハーノフとの一時的な連合を結んだ。なぜなら、レーニンは、この連合は党にとって有利であり、解党派にとっては致命的であると考えたからである。

スターリン同志は、この連合を全面的に支持していた。かれは当時、流刑地にいたが、そこからレーニンに手紙を送り、つぎのように書いた。

「わたしの考えでは、連合（レーニンがプレハーノフと結んだ連合）の路線は唯一の正しい路線である。（1）この路線、そしてこの路線だけが、ロシアにおける運動の真の利益に合致するものである。というのは、この利益は真に党的なすべての分子を結集することを要求しているからである。（2）この路線、そしてこの路線だけが、合法的な諸組織を解党派の重圧から解放する過程をはやめて、メキ（メンシェビキの略称＝編者注）労働者を解党派から完全に切りはなし、解党派を追いはらい、絶滅することができるからである。」（スターリン『ソリビチェゴドスクの流刑地から党中央委員会にあてた手紙』）

ボリシェビキは、非合法活動と合法活動とを巧妙に結びつけたために、公然の労働者組織のなかで、大きな勢力となることができた。このことは、とりわけ、ボリシェビキが、そのころひらかれた合法的な四つの大会の労働者グループにあたえた重要な影響のうえにあらわれた。四つの大会というのは、民衆大学大会、婦人大会、工場医大会、禁酒運動大会である。ボリシェビキがこれらの合法的な大会でおこなった演説は、重大な政治的意義をもち、全国各地からの反響をよんだ。たとえば、民衆大学大会で、ボリシェビキの労働者代議員は、すべての文化活動を破壊するツァー制度の政策をあばくとともに、ロシアではツァー制度を打倒しなければ、真の文化の高揚は絶対にのぞめないと指摘した。工場医大会で、労働者代議員は、労働者がきわめて非衛生的な環境ではたらき、生活していることをのべ、ツァー制度を打倒しなければ、工場医療を真に確立することはできないとの結論を出した。

ボリシェビキは、無事に残ったいろんな合法的な組織のなかから、解党派を徐々に追い出していった。プレハーノフの党支持グループとの統一戦線を結ぶという、独特の戦術をとったために、ボリシェビキは多くのメンシェビキ労働者組織（ブィボルグ区〔ペテルブルグ〕、エカチェリノスラフその他）を獲得することができた。

このような困難な時期に、ボリシェビキは合法的な活動と非合法活動をどう結合しなければならないかということの模範をしめした。

五、一九一二年にひらかれたプラーグ党会議　ボリシェビキ、独立したマルクス主義党を結成

解党派や召還派にたいする闘争と同様、トロツキストにたいする闘争をすすめるにあたって、すべてのボリシェビキを一つに結集し、独立したボリシェビキ党を結成することが、ボリシェビキにとって緊急の任務となった。このことが緊急に必要とされたのは、労働者階級を分裂させる党内の日和見主義的潮流を根だやしにするためばかりではなかった。労働者階級の勢力を結集する事業をやりとげ、革命の新たな高まりにむかって労働者階級にそなえをさせるためにも、このことが必要であった。

しかし、この任務を実現するためには、まず日和見主義者、メンシェビキを党からぜひ一掃しなければならなかった。

いまや、ボリシェビキであれば、これ以上一つの党内にメンシェビキとともにとどまるなど考えられなくなったことを、一人もうたがわなかった。ストルィピン反動期におけるメンシェビキの裏切り行為、プロレタリア階級の党を解消して新しい改良主義の党をつくろうとしたかれらの意図は、ボリシェビキとの決裂を避けられないものにした。ボリシェビキはメンシェビキと同じ党内にとどまっていることにより、メンシェビキの行為についても、なにかと道徳的な責任を負った。しかし、ボリシェビキ自らが党と労働者階級にたいする裏切り者になることをのぞまない以上、もはやメンシェビキの公然たる裏切り行為にたいして道徳的な責任を負うことなど、考えられなくなってきた。こうして、一つの党内でメンシェビキとの統一を保つことは、労働者階

級とその党にたいする裏切りにかわったのである。そこで、メンシェビキとの事実上の決裂を徹底させ、かれらとの形式的、組織的な決裂にまでもってゆき、党からメンシェビキを追放しなければならなかった。
こうしてこそ、単一の綱領、単一の戦術、単一の階級組織をもつプロレタリア階級の革命党を、再建することができるのである。
こうしてこそ、メンシェビキによって破壊された党の真の（たんに形式的でない）統一をきずきあげることができるのである。
ボリシェビキが準備していた第六回全党会議こそ、この任務をはたすべきものであった。
けれども、この任務は、問題の一面にすぎなかった。メンシェビキと形式的に決裂して、ボリシェビキが別個の党を結成することは、もちろんひじょうに重要な政治的任務であった。だが、ボリシェビキには、べつの、もっと重要な任務があった。その任務は、たんにメンシェビキと決裂して、別個の党を結成するというだけでなく、まず第一に、メンシェビキと決裂したのち、新しい党をつくりだすこと、西ヨーロッパの在来の社会民主党とことなり、日和見主義分子の介在をゆるさない、権力奪取の闘争にプロレタリア階級をみちびくことのできる新しい型の党をつくりだすことであった。
すべてのメンシェビキは、アクセリロード、マルトィノフからマルトフ、トロツキーにいたるまで、その色合にはかかわりなく、ボリシェビキと抗争するさいに、きまって西ヨーロッパの社会民主主義者の倉庫から借用した武器をつかった。かれらは、ロシアにも、たとえば、ドイツやフランスの社会民主党と同様な党をつくることをのぞんだ。かれらがボリシェビキとたたかったのは、ボリシェビキのなかに、西ヨーロッパの社会民

主党とはちがった、なにか新しい、ふつうではないものがあると感じたためである。ところで、当時の西ヨーロッパ諸国の社会民主党は、いったいどんなものであったか？　それは、混合物であり、混合物のなかにはマルクス主義者もいれば日和見主義者もおり、革命の友もいれば敵もおり、党派性を支持する者もいれば反対する者もおり、前者を後者に思想的にしだいに和解させ、実際的には、前者を後者に事実上しだいに屈服させたものであった。何のために、日和見主義者や革命の裏切り者と和解するのか？　——とボリシェビキは西ヨーロッパの社会民主主義者にたずねた。それは、「党内の平和」のためであり、「統一」のためである——とかれらは答えた。いったい誰と統一するのか、日和見主義者と統一するのか？　そうだ、日和見主義者との統一だ——かれらはこう答えた。そのような党が革命の党にはなりえないことは、明らかである。

ボリシェビキは、エンゲルスの死後、西ヨーロッパ諸国の社会民主党が、社会主義革命を主張する政党から、「社会の改良」を主張する政党へと変質しはじめ、これらのどの党も、組織としては、すでに指導勢力から自己の国会議員団の付属物に変質してしまったことを、見逃すわけにはいかなかった。

ボリシェビキは、このような党は、プロレタリア階級にとってはありがたくないことで、労働者階級を指導して革命をやることなどできないことを、ボリシェビキは見逃すわけにいかなかった。

プロレタリア階級にとって必要なものはこのような党ではなく、べつな型の党すなわち、新しい、ほんとうのマルクス主義党が必要であり、この党は、日和見主義者にたいしては妥協をせず、ブルジョア階級にたいして革命的態度をとり、堅く団結し、一枚岩のようなものであり、社会革命を主張し、プロレタリア階級独裁を主張する党であることを、ボリシェビキは知らないわけにはいかなかった。

ボリシェビキは、まさしくこのような新しい党をもとうとした。ボリシェビキはまた、このような党の建設と準備をすすめた。「経済主義者」、メンシェビキ、トロツキスト、召還派、また経験批判論者にいたるまでのあらゆる色合の観念論者にたいするボリシェビキの闘争の歴史のすべては、まさに、このような党を創設するための活動の歴史であった。ボリシェビキは、真の革命的なマルクス主義党をもつことをのぞむすべての人びとにとって模範となることのできる、新しいボリシェビキ党を創設しようとした。ボリシェビキは、旧『イスクラ』の時代からずっとこのような党の樹立のため活動してきた。かれらは、頑強に、根気づよく、万難を排してこのような党の樹立のため活動してきた。この準備活動のなかで基本的、決定的な役割をはたしたのは、レーニンの『なにをなすべきか?』、『二つの戦術』などの著作であった。レーニンの『なにをなすべきか?』は、このような党のイデオロギー面における準備であった。レーニンの『一歩前進、二歩後退』は、このような党の組織面における準備であった。レーニンの『民主主義革命における社会民主党の二つの戦術』は、このような党の政治面における準備であった。最後に、レーニンの『唯物論と経験批判論』は、このような党の理論面における準備であった。

ボリシェビキのグループのように、一つの党をつくるのに、このように徹底的に周到な準備をすすめた政治グループは歴史上かつてなかったことは、確信をもっていうことができる。

このような条件があったから、ボリシェビキが、正式に一つの党となるのは、すでに十分準備もととのい、十分に機の熟したことであった。

第六回党会議の任務は、メンシェビキを追いだし、新しい党、すなわちボリシェビキ党を結成するという正

式の手つづきによって、すでに準備のととのった仕事を仕上げることであった。

第六回全ロシア党会議は、一九一二年一月にプラーグでひらかれた。この会議には二十以上の党組織の代表が参加した。だから、形式的にも党大会の意義をもっていた。

会議の報告書には、破壊された党中央機関が再建され、党中央委員会が成立したことが報じられ、反動期は、ロシア社会民主党が一定の組織として発足以来の、もっとも困難な時期であることが指摘されていた。プロレタリア階級の党は、あらゆる迫害をうけ、外から重大な打撃をうけ、党内には日和見主義者の裏切り、動揺があったにもかかわらず、その旗じるしと組織を守りとおした。

「無事に残ったのはロシア社会民主党の旗じるしと、その綱領、革命の教訓だけでなく、ロシア社会民主党の組織も無事に残った。この組織は圧迫によって破壊され弱められはしたが、どんな圧迫でも、それを破壊しつくすことはできなかった。」――会議の報告書にはこうのべられている。

会議は、ロシアにおける労働運動の新たな高まりの最初のきざしが見えることと、党活動が活発になってきたことを指摘した。

会議は、地方の報告を討議したのち、つぎの点を確認した。「地方ではいたるところで、社会民主主義派の労働者のあいだに、地方の非合法の社会民主党組織とグループを強化するための、精力的な活動がおこなわれている」と。

会議は、ボリシェビキが後退の時期にとるべき戦術のもっとも重要な原則、すなわち合法的な各種の労働者団体や組合のなかでの合法活動に、非合法活動を結合させることが、すべての地方で認められていることを、

指摘した。

プラーグ会議は、ボリシェビキの党中央委員会を選出した。中央委員には、レーニン、スターリン、オルジョニキッゼ、スベルドロフ、スパンダリヤンらがえらばれた。スターリン同志とスベルドロフ同志は、当時流刑地にあったため、本人欠席のまま中央委員に選出された。中央委員候補には、カリーニン同志が選ばれた。

ロシアにおける革命活動を指導するため、スターリン同志を責任者とする実際上の中央部（中央委員会ロシア局）が創設された。中央委員会ロシア局には、スターリン同志のほか、スベルドロフ、スパンダリヤン、オルジョニキッゼ、カリーニンらの諸同志が参加した。

プラーグ会議は、ボリシェビキがこれまでおこなってきた日和見主義にたいする全闘争を総括するとともに、メンシェビキを党から追放する決議をおこなった。

プラーグ会議は、メンシェビキを党から追放することによって、ボリシェビキ党が独立した存在になったことを正式に確認した。

ボリシェビキは、思想的に、組織的にメンシェビキを壊滅させ、またかれらを党から追放して、ロシア社会民主党という古くからの党の旗じるしを、その手に確保した。そのため、ボリシェビキ党は、一九一八年にいたるまで、カッコ入りの「ボリシェビキ」という言葉を加えて、ロシア社会民主労働党と名のりつづけた。

一九一二年のはじめ、レーニンは、プラーグ会議の活動を総括して、ゴーリキーへの手紙にこう書いている。

「解党派の無頼漢どもをおしきって、ついに、党と中央委員会の再建に成功した。このことについて、

あなたも、われわれとともに喜んでくれるものと思っている。」（レーニン『ア・エム・ゴーリキーへ』）
スターリン同志は、プラーグ会議の意義について、こうのべている。
「この会議は、わが党の歴史のうえでもっとも大きな意義をもっていた。それは、ボリシェビキとメンシェビキとのあいだに境界線を画し、全国のボリシェビキ組織を単一のボリシェビキ党に統一したからである。」（『ソ連共産党（ボリシェビキ）第十五回大会速記録』）
メンシェビキを追放し、ボリシェビキが正式に独立した党となってから、ボリシェビキ党はいっそう強固になり、強力になった。党はその内部から日和見主義分子を一掃することによって強化される――これが、第二インターナショナルの社会民主主義諸党と原則的にちがう新しい型の党としての、ボリシェビキ党の、スローガンの一つである。第二インターの諸党は、口先だけはマルクス主義の党と自称しているが、実際には、マルクス主義の敵対者、公然たる日和見主義者をその陣営内にとどめ、かれらが第二インターを腐敗させ、瓦解させるがままにさせていた。これとは逆に、ボリシェビキは、日和見主義者にたいして妥協のない闘争をすすめ、プロレタリア階級の党から日和見主義の汚物を一掃し、その結果新しい型の党、レーニンの党、のちにプロレタリア階級独裁をかちとった党を創設することに成功した。
もしプロレタリア党の隊列のなかに日和見主義分子を残しておいたならば、ボリシェビキ党は、大道に出てプロレタリア階級の前進をみちびくことはできなかっただろうし、権力をかちとりプロレタリア階級独裁をうちたてることはできなかったし、国内戦争の勝利者になり、社会主義をきずきあげることはできなかったであろう。

プラーグ会議は、その決議のなかで、つぎのような最低綱領を党の当面の政治スローガンとしてうちだした。民主共和国、八時間労働制、すべての地主の土地の没収である。
これらの革命的スローガンのもとに、ボリシェビキは、第四回国会選挙にたいする選挙運動をおこなった。
これらのスローガンのもとに一九一二年から一九一四年にいたる労働大衆の、革命運動の新たな高まりが進行した。

要約

一九〇八年から一九一二年にいたる時期は、革命活動にとってもっとも困難な時期であった。革命が敗北してのち、革命運動が停滞し、大衆が疲労している状況で、ボリシェビキはその戦術を変え、ツァー制度にたいする直接闘争から、迂回手段による闘争へと転換した。ストルィピン反動期のきびしい条件のもとで、ボリシェビキは、大衆との連係を保つために、ほんのわずかな合法的可能性（健康保険組合や労働組合から国会の演壇にいたる）も利用した。ボリシェビキは、革命運動の新たな高まりを迎えるために、たゆまず勢力を結集した。
革命が敗北し、反政府的な諸潮流が離散し、革命に対する希望が失われ、党から脱落した知識分子たち（ボグダーノフ、バザーロフら）が、党の理論的基礎にたいして修正主義的攻撃を強めるというきわめて困難な状

況のもとにあって、党の旗をおろさず、党の綱領をしっかりと守り、マルクス主義の理論にたいする「批評家」たちの攻撃を撃退した唯一の勢力は、党内ではボリシェビキだけであった（レーニンの『唯物論と経験批判論』）。思想上のマルクス・レーニン主義的な鍛錬をへていたからこそ、レーニンを中心に団結したボリシェビキの主要な中核は、革命の見とおしを把握していたからこそ、党とその革命的原則を守ることができたのである。「われわれが、磐石のような人間と呼ばれたのにはわけがある」と、レーニンはボリシェビキについて語った。

この時期に、メンシェビキは、ますます革命からはなれていった。かれらは解党派となり、非合法の革命的プロレタリア階級の党を解消し、絶滅することを要求した。かれらは、党の綱領、党の革命的任務やスローガンをますます公然と放棄し、労働者が「ストルィピン労働党」と名づけたかれら自身の改良主義党を組織しようとくわだてた。トロツキーは、実際には解党派との統一を意味する「党の統一」というスローガンで偽善的に身をかくしながら、解党派を支持した。

また一方では、ボリシェビキの一部は、ツァー制度にたいする闘争をすすめるにあたって、どうしても新たな、迂回手段にうつらざるをえないことを理解しないで、合法的な可能性を利用してはならず、国会の労働者議員を召還すべきであると、党に要求した。召還派は、強硬に党を大衆から引きはなそうと、党が勢力を結集して革命の新たな高まりを迎えるのを妨げた。召還派は、「左翼的」言葉でごまかしはしたが、本質的には、解党派と同じように、革命闘争を放棄するものであった。

解党派と召還派は、レーニンに反対して、共通の連合、つまりトロツキーによって組織された八月連合に統

一された。

ボリシェビキは、解党派と召還派にたいする闘争、八月連合にたいする闘争のなかで勝利をおさめ、非合法のプロレタリア党を防衛することに成功した。

この時期におけるもっとも重要な出来事はロシア社会民主労働党のプラーグ会議である（一九一二年一月）。この会議でメンシェビキは、党から追放され、ボリシェビキとメンシェビキが形式的に一つの党内にいるという事態に、永久に終止符がうたれた。ボリシェビキは、正式に、一つの政治グループから独立したロシア社会民主労働党（ボリシェビキ）となった。プラーグ会議は、新しい型の党、レーニン主義の党、すなわちボリシェビキ党を創設した。

プラーグ会議が、日和見主義者やメンシェビキを、プロレタリア党から一掃したことは、そのごの党と革命の発展にとって、重大な、決定的な意義をもつものであった。もしもそのとき、ボリシェビキが労働者の裏切り者、メンシェビキ協調主義者どもを党から追放しなかったならば、プロレタリア党は一九一七年に、プロレタリア階級独裁をかちとるため大衆をたちあがらせることはできなかったであろう。

第五章　第一次帝国主義戦争前の労動運動の高揚期におけるボリシェビキ党

（一九一二年—一九一四年）

一、一九一二年から一九一四年にいたる革命運動の高まり

ストルィピン反動の勝利は、長くはつづかなかった。鞭と絞首台のほかはなにひとつ人民にあたえようとしなかった政府が、安定するはずはなかった。人民は弾圧に馴れっこになってしまって、もうそれほど恐れなくなった。革命の失敗後数年間みられた労働者の疲労感は、すでに消えはじめた。労働者はふたたび闘争に立ちあがりはじめた。新たな革命の高まりがかならずおとずれるというボリシェビキの予言は実証された。それまでの数年間ストライキに立ちあがった労働者の数は、年五、六万人にすぎなかったが、一九一一年にはそれが十万人をこえた。はやくも一九一二年一月プラーグでひらかれた党会議では、労働運動のもりあがりはじめた事実が指摘された。しかし、革命運動の真の高揚があらわれたのは、一九一二年の四月から五月にいたる時

期、つまり、レナの労働者射殺事件を契機に大衆的な政治ストの波がまきおこされた時期である。

一九一二年四月四日、シベリアのレナ金鉱の労働者がストライキに立ちあがったさい、ツァー憲兵士官の命令による発砲をうけて五百人をこえる死傷者をだした。管理当局と交渉するためおだやかにやってきた素手のレナ労働者が射殺されたという知らせは、全国を憤激にわきたたせた。ツァー専制政府がこの新たな血なまぐさい犯行をやってのけたのは、レナ金鉱の持主であるイギリス資本家の御機嫌をとり結び、金鉱労働者の経済ストをつぶすためであった。イギリスの資本家とロシアにおけるかれらの一味は、労働者にたいする恥知らずな搾取によって、レナ金鉱から年に七百万ルーブルをこえる巨額の利潤をあげていた。かれらは労働者にごくわずかな賃金しか支払わず、粗悪な腐った食料を支給していた。レナ金鉱の六千人の労働者は虐待と屈辱にたえきれず、ストライキに立ちあがったのである。

レナの射殺事件がおこると、プロレタリア階級は、ペテルブルグ、モスクワをはじめ、すべての工業中心地や工業地帯で、大衆的なストライキ、デモ、集会によって抗議した。

「われわれは驚きと怒りに胸も裂けんばかりで、一時は言う言葉も知らなかった。われわれはいかなる抗議声明をおこなったとしても、われわれ一人びとりの燃えたぎる怒りの万分の一もあらわすことはできないであろう。涙や抗議は、何の役にも立ちはしない。いまは組織的な大衆闘争あるのみである。」いくつかの工場の労働者は共同決議のなかでこうのべている。

レナの射殺事件にかんする社会民主党国会議員団の質問に答えてツァー政府の大臣マカロフが「これまでもその通りだったし、将来もその通りだ!」と傲然と言いはなったとき、労働者大衆のあらしのような怒りは、

いっそうはげしく燃えあがった。レナ労働者の流血事件に抗議する政治ストの参加者は、三十万人にのぼった。

レナ事件はまるで暴風のように、ストルィピン体制のつくりだした「平穏」な空気をふきとばしてしまった。

スターリン同志は、一九一二年、ペテルブルグで発行されていたボリシェビキの新聞『ズベズダ』〔星〕につぎのように書いている。

「レナの銃声は沈黙の氷壁をうちくだき、大衆運動の大河がどっと流れはじめた。どっと流れはじめたのだ！……現体制のうみだすすべての弊害、苦難にみちたロシアのすべての不幸が、一つの事実、レナ事件に集中されたのだ。だからこそ、レナの銃声は、ストライキとデモンストレーションの合図となったのである。」

解党派とトロツキストは革命を葬りさろうとしたが、むだ骨折りにおわった。革命勢力はやはり生命力をもちつづけていること、労働者階級のなかには巨大な革命のエネルギーがたくわえられていることが、レナ事件によって立証された。一九一二年のメーデー・ストライキには、ほぼ四十万人の労働者が参加した。このストライキははっきりとした政治的性質をもつもので、民主共和国、八時間労働制、すべての地主の土地の没収という、ボリシェビキの革命的スローガンのもとにたたかわれた。これらの基本的スローガンは、たんに広範な労働者大衆だけでなく、農民、兵士をも一致団結させて、専制制度に革命的攻撃をくわえようとするものであった。

「全ロシアのプロレタリア階級がおこなった大規模なメーデー・ストライキと、これに呼応する街頭デモ、そしてまた労働者大衆の前でおこなわれた革命的宣言と革命的演説は、ロシアが革命の高揚期にはいったことを、はっきりしめした」と、レーニンは『革命的高揚』のなかでこう書いている。

労働者の革命的行動に驚きあわてた解党派は、ストライキ闘争に反対して、「ストライキばくち」などと悪罵をあびせた。かれらは「権利」(結社、ストライキにたいする制限の撤廃)をもとめる「請願書」に署名して、この紙きれを国会にさし出すようにと労働者にすすめた。しかし、解党派はわずか千三百人の署名しか集めることができなかったのに、ボリシェビキのうち出した革命的スローガンのまわりには、数十万の労働者が結集した。

労働者階級は、ボリシェビキがしめした道をすすんだ。

当時、国内の経済状態はつぎのとおりであった。

一九一〇年には、工業の停滞が終わって、基幹産業部門の生産が活況を呈し、生産の拡大がみられた。銑鉄の生産高は、一九一〇年に一億八千六百万プードあったのが、一九一二年には二億五千六百万プードで、一九一三年には二億八千三百万プードに増加した。石炭の採掘高は、一九一〇年には十五億二千二百万プードであったのが、一九一三年には二十二億千四百万プードにたっした。

資本主義的工業の発達にともなって、プロレタリア階級の数も急激にふえた。当時の工業発展の特徴は、生産がますます大企業と巨大企業に集中したことである。五百人以上の労働者をもつ大企業にはたらく者は、一

九〇一年には労働者総数の四六・七パーセントであったが、一九一〇年には五四パーセント、すなわち全労働者の半分以上をしめるようになった。このような工業の集中速度は、これまでにみられなかったものであった。アメリカのように工業の発達した国でさえも、当時、大企業にはたらく者の数は、全労働者のほぼ三分の一をしめるにすぎなかった。

ボリシェビキ党のような革命政党の存在するところで、プロレタリア階級の数がふえ、大企業への集中がすすんだため、ロシアの労働者階級は、国内の政治生活における最大の勢力となった。企業側の労働者にたいする野蛮な搾取形態にくわえて、ツァー当局が耐えがたい警察制度をとったため、重要なストライキはどれも政治的な性質を帯びることになった。また、経済闘争と政治闘争の結合によって、大衆的ストライキはとりわけ大きな革命的力をもつこととなった。

革命的労働運動の先頭には、英雄的なペテルブルグのプロレタリア階級が立った。そのあとにはバルト海沿岸地方、モスクワ市とモスクワ県がつづき、さらにボルガ流域地方と南部ロシアがつづいた。一九一二年には、運動は西部地方、ポーランド、カフカズまでひろがった。一九一二年のストライキ参加者は、政府筋の統計によっても七十二万五千人、比較的完全な他の統計によれば百万以上にのぼった。一九一三年のストライキ参加者は、政府の統計でも八十六万一千人、比較的完全な統計によれば百二十七万二千人にのぼった。一九一四年上半期にストライキに参加した労働者の数は、すでに百五十万前後にたっした。

このように、一九一二年から一九一四年にいたる革命の高揚、ストライキ運動の規模は、一九〇五年の革命初期の情勢に近づいていた。

プロレタリア階級の革命的大衆ストは、全人民的意義をもつものであった。その目標は、専制制度に反対することであった。ストライキは、勤労人民の大多数の支持をうけた。工場主はロックアウトによって労働者のストライキに対抗した。一九一三年、モスクワ県の資本家は五万人の紡績労働者を解雇した。一九一四年三月、ペテルブルグでは、一日のうちに七万人もの労働者が首をきられた。他の企業や他の産業部門の労働者は、大衆的にカンパをつのり、時には同情ストを決行して、ストに立ちあがった労働者やロックアウトをうけた仲間を助けた。

労働運動の高まりと大衆的ストによって、農民大衆も目ざめ、闘争にひき入れられた。農民はふたたび地主に反対する闘争に立ちあがり、地主の領地や富農の農場の打ちこわしをおこなった。一九一〇年から一九一四年までのあいだに、一万三千回以上の農民闘争がおこった。

革命行動は軍隊の内部でもはじまった。一九一二年には、トルキスタン駐屯軍のなかで武装行動がおこった。バルト艦隊やセバストーポリでも蜂起の機が熟しつつあった。

ボリシェビキ党の指導による革命的ストやデモは、労働者階級が闘争するのは、部分的な要求や「改良」のためではなく、人民をツァー制度から解放するためであることを物語っていた。ロシアには新たな革命が近づきつつあった。

レーニンは、ロシアにいっそう近づくため、一九一二年の夏にパリからガリシア（旧オーストリア領）に移った。ここで、党の中央委員と党の重要なはたらき手による合同会議が、レーニンを議長として二回ひらかれた。一回は一九一二年の末にクラカウ市でひらかれ、もう一回は一九一三年の秋にクラカウ市近郊のポローニ

ノという町でひらかれた。これらの会議では、労働運動のもっとも重要な諸問題にかんするいくつかの決議が採択された。革命の高揚、ストライキと党の任務、非合法組織の強化、社会民主党の国会議員団、党の出版物、保険闘争などについての決議がそれである。

二　ボリシェビキの新聞『プラウダ』　第四国会におけるボリシェビキ議員団

ペテルブルグで発行されたボリシェビキの日刊新聞『プラウダ』〔真理〕は、ボリシェビキ党が党の組織を強化し、大衆への影響をかちとるために手にした強力な武器であった。『プラウダ』は、レーニンの指示にしたがい、スターリン、オリミンスキー、ポレターエフの提唱によって創刊されたものである。『プラウダ』は、革命運動のあらたな高まりとともに生まれた大衆的労働新聞である。一九一二年四月二十二日（新暦の五月五日）、『プラウダ』の創刊号が発行された。この日は労働者にとって真の祝日であった。『プラウダ』の誕生を記念して、毎年五月五日を労働者出版デーとして祝うことが決定された。

『プラウダ』が創刊される前にも、先進的労働者のためボリシェビキの週刊新聞『ズベズダ』が発行されていた。『ズベズダ』は、レナ事件の時にひじょうに大きな役割をはたした。同紙は、労働者階級に闘争をよびかけるレーニン、スターリンの戦闘的政治論文を数多く掲載した。しかし、革命的高揚の諸条件のもとに、週

刊新聞では、ボリシェビキ党の必要を十分に満たすことができなくなった。もっとも広範な労働者層を対象とする日刊の大衆的政治新聞がどうしても必要であった。そのような新聞が『プラウダ』である。

この時期における『プラウダ』の役割は、とくに大きかった。『プラウダ』は、労働者階級の広範な大衆をボリシェビキの側に獲得した。たえず警察から取りしまられ、罰金を取られ、すこしでも検閲当局の気にいらない論文や通信をのせればたちまち没収されるという環境で、『プラウダ』がずっと、存在できたのは、まったく数万の先進的労働者の積極的な支持があったからである。『プラウダ』が巨額にのぼる罰金を支払うことができたのも、すべて労働者大衆がすすんでカンパをよせてくれたおかげであった。多くのばあい、発禁処分をうけた号の『プラウダ』が大部分やはり読者の手にわたったのは、先進的労働者が真夜中に印刷所へ来て、自分で新聞の包みをかかえていったからである。

ツァー政府は、二年半の間に八回も『プラウダ』の発行を禁止した。だが、『プラウダ』はそのつど労働者の支持をうけて、『ザ・プラウドゥー』〔真理のため〕、『プーチ・プラウディ』〔真理の道〕、『ツルドバヤ・プラウダ』〔労働の真理〕といった、似たような新しい紙名でひきつづき発行された。

当時、『プラウダ』の平均販売部数は毎日四万部であったが、メンシェビキの日刊新聞『ルーチ』〔光〕の販売部数は一万五、六千部をこえたことがなかった。

労働者は『プラウダ』を自分たち自身の新聞と考え、これに深い信頼をよせ、そのよびかけにただちに応じた。一枚の『プラウダ』はつぎからつぎへと数十人の読者の手にわたり、かれらの階級意識をつちかい、かれらを教育し、組織し、かれらに闘争をよびかけた。

『プラウダ』には、どんなことが書かれたのか？

『プラウダ』には、毎号、数十篇にのぼる労働者の通信がのせられていて、労働者の生活、過酷な搾取、資本家やその支配人、組長などの労働者にたいするさまざまな虐待や侮辱の模様がつたえられていた。それは、資本主義制度にたいする鋭い的確な摘発であった。『プラウダ』の紙面には、飢えに苦しむ失業労働者が職につくあてもないために自殺したという事件が、何回となく報道された。

『プラウダ』は、各工場や各産業部門の労働者の苦痛や要求について書き、労働者がその要求をかちとるためいかにたたかっているかを報道した。また、ほとんど毎号、いろいろな企業でおこっているストライキについて書いた。大規模な長期にわたるストライキがおこった時には、『プラウダ』は、他の企業や産業部門にはたらく労働者のあいだでストライキ労働者支援の基金募集をおこなった。ときには、スト支援の基金が数万ルーブルにたっしたこともある。大部分の労働者の日給がわずか七十カペイカないし八十カペイカにすぎなかった当時としては、この金額は莫大なものであった（訳注：カペイカは、ロシアの貨幣単位で、ルーブルの百分の一）。これによって、労働者のあいだにプロレタリア階級の団結の精神がつちかわれ、全労働者の利益の一致という意識が養われた。

労働者は、政治的な事件がおこるたびに、あるいは勝利や失敗のたびに、手紙や祝辞や抗議文を『プラウダ』によせた。『プラウダ』はその論文で、首尾一貫したボリシェビキの観点から労働運動の任務を明らかにした。当時、合法的な新聞は、ツァー制度打倒を直接によびかけることができなかった。そこで、ぼんやりとほのめかす書き方しかできなかったが、意識の高い労働者はその意味をよく理解し、大衆に説明して聞かせた。

たとえば、『プラウダ』に「完全な、削除なしの一九〇五年の要求」と書けば、それがツァー制度の打倒、民主共和国、地主の土地の没収、八時間労働制という、ボリシェビキの革命スローガンを意味することを、労働者は理解した。

『プラウダ』は、第四回国会選挙を間近にひかえて、先進的な労働者を組織した。同紙は、自由主義的ブルジョア階級との妥協を主張し「ストルィピン労働党」の創立に同調しているメンシェビキの裏切り行為をあばき出した。『プラウダ』は、「削除なしの一九〇五年の要求」を堅持するもの、すなわちボリシェビキに投票するよう労働者によびかけた。当時の選挙は、いくつかの段階をへる間接選挙であった。まず労働者の集会で全権委員を選出し、つぎにこの全権委員が選挙人をえらぶ、そしてこの選挙人だけが国会の労働者議員の選挙に参加するのである。選挙当日、『プラウダ』は、ボリシェビキの候補者名を発表して、この人たちに投票するよう労働者によびかけた。予定された候補者が逮捕される恐れがあるので、名簿を前もって発表するわけにはいかなかったのである。

『プラウダ』はプロレタリア階級が闘争を組織するのを助けた。一九一四年の春、ペテルブルグの多くの工場主が大規模なロックアウトをおこなったとき、労働者が大衆的なストライキを組むのは適切でなかった。そこで、『プラウダ』は、工場内の大衆集会をひらくとか、街頭デモをやるなど、ほかの闘争方法をとるよう労働者によびかけた。当時は、新聞でそのことを公然と書くことができなかった。しかし、意識の高い労働者は、『労働運動の諸形態について』というごく控え目な題で書かれたレーニンの論文を読むと、このよびかけを理解することができた。この論文には、現在の時点でストライキは労働運動のいっそう高いやり方にかえな

ければならないと書いてあったが、それは集会やデモストレーションへのよびかけを意味したのである。

このように、ボリシェビキの非合法の革命活動は、『プラウダ』をつうじて労働大衆を扇動、組織する合法的な活動と結合しておこなわれた。

『プラウダ』は、労働者の生活、労働者のストライキやデモの状況についてだけ書いたのではない。『プラウダ』はまた、農民の生活、農民の飢餓状態、農奴制地主による農民の搾取、ストルィピンの「改良」が実施されたため農民の最良の土地が富農に奪われている事実などについても系統的に報道した。『プラウダ』は階級意識の高い労働者に、農村にはいかに多くの燃えやすい材料が蓄積されているかを明らかにした。『プラウダ』は、一九〇五年の革命の任務がまだ遂行されていないこと、新たな革命が近づいていることを、プロレタリア階級に教えた。『プラウダ』は、プロレタリア階級がこの第二次革命のなかで人民の真の首領、真の指導者となるべきこと、この革命では革命的農民という強力な同盟者があることを教えた。

メンシェビキは、プロレタリア階級に革命を忘れさせようとつとめた。かれらは労働者に、もう人民だとか、農民の飢餓状態だとか、黒百人組的農奴制地主の支配だとかについては考えるな、「結社の自由」のためにだけたたかえ、そのためツァー政府に「請願書」をさし出せ、と吹きこんだ。ボリシェビキは、革命を放棄し農民との同盟を拒否するこうしたメンシェビキの宣伝は、ブルジョア階級に有利なだけである、労働者が農民を同盟者として味方にひきつけるなら、かならずツァー制度にうち勝つことができる、メンシェビキのような悪どい牧師は、革命の敵として葬りさらなければならない、と労働者に説明した。

『プラウダ』は「農民生活」欄にどんなことを書いたのか？

一九一三年の通信文のなかから、いくつかの例をあげてみよう。

「土地事件」と題する通信文は、サマラからつぎのように伝えている。ブグルミンスク郡ノボハスプラタ村では、共有地を個人経営農に分けあたえるさい、測量官に反抗したかどで四十五人の農民が訴えられ、そのうちのほとんどが長期の禁錮刑に処せられた。

プスコフ県からの短い通信文は、こう伝えている。「プシッ村（ザバリエ駅近在）の農民は村巡査に武力で抵抗した。負傷者が出た。衝突の原因は土地をめぐる紛争である。村巡査がプシッ村に集結し、副知事と検事も現場におもむいた。」

ウファ県からの通信文では、農民が分前地を売っている状況をつたえ、飢饉と農村共同体脱退法によって、農民はますます土地を失う破目におちいったと書いている。たとえばボリソフカ部落には二十七戸の農家があって、五四三デシャチンの耕地をもっていた（訳注・一デシャチンは一・〇九二ヘクタール）。ところが、飢饉のとき、そのうちの五戸が三一デシャチンを当時の地価の三分の一か四分の一の値段、つまり、一デシャチンあたり二五ルーブルから三三ルーブルという値段で永久に手放してしまった。同じころ、やはりこの村で、ほかの七戸が一七七デシャチンの土地を抵当にして、一デシャチンあたり、一八ルーブルから二〇ルーブルの金を、返済期限六ヵ年、年利一割二分という条件で借りた。農民の困窮ぶりと、きわめて高い利率を考えにいれれば、一七七デシャチンの土地のうち半分が高利貸の手に落ちてしまうことは間違いないと言える。こんな大金を六年のうちに返してしまえる者など、多く見つもっても負債者の半分にも満たないからである。

レーニンは、『プラウダ』に『ロシアにおける地主的大土地所有と農民的小土地所有』と題する論文を発表

し、どんなに多くの土地が寄生地主の手ににぎられているかを、ひじょうに明確に労働者、農民にしめした。わずか三万の大地主が約七千万デシャチンもの土地をもっているのに、一千万の農家はほぼこれと同じ土地しか持たなかった。大地主は平均一戸あたり二三〇〇デシャチンの土地を持っているのに、農民は富農をふくめても一戸あたり平均七デシャチンの土地しかもたず、全農家の半分をしめる五百万の貧農は、一戸あたり一デシャチンか二デシャチンの土地しか持たなかった。これらの事実は、農民が貧困と飢餓に苦しんでいる根源は大地主の土地所有制すなわち農奴制度の遺制にあるのであって、農民は労働階級の指導のもとにおこなわれる革命によってのみこれをとり除くことができるということを、はっきりと示していた。

『プラウダ』は、農村とつながりのある労働者を通じて農村に浸透し、先進的な農民を革命闘争に立ちあがらせた。

『プラウダ』が創刊された時期には、非合法の社会民主党組織は、完全にボリシェビキの手ににぎられていた。しかし国会議員団、出版物、保険組合、労働組合といった合法的組織は、メンシェビキの手からまだ完全には取りかえしていなかった。労働者階級の合法的諸組織のなかから解党派を追い出すためには、ボリシェビキが断固たる闘争をすすめなければならなかった。この闘争は『プラウダ』のおかげでりっぱに達成された。

『プラウダ』は、党性をまもる闘争、労働者の大衆的革命政党を再建する闘争の中心となった。『プラウダ』は、合法的諸組織をボリシェビキ党の地下中核組織のまわりに結集し、労働運動を一つの明確な目標、すなわち革命の準備へとみちびいた。

『プラウダ』は、きわめて多くの労働者通信員をもち、一年の間に労働者の通信文一万一千篇あまりをのせ

た。だが、『プラウダ』と労働者大衆とのつながりは、手紙や通信だけにかぎられていたわけではない。毎日、多数の労働者が企業から編集局をたずねてきた。『プラウダ』の編集局には、党の組織活動の多くの部分が集中された。ここでは、地方の党細胞の代表との会合がおこなわれた。ここには、各工場の党活動の情報がつたえられた。またここからは、ペテルブルグ党委員会や党中央委員会の指令があたえられた。

大衆的革命的労働者政党を再建するため、ボリシェビキが二年半にわたって解党派とたゆみない闘争をつづけた結果、一九一四年の夏には、ロシアの積極的な労働者のうち、五分の四がボリシェビキ党を支持し、「プラウダ派」の戦術を支持するようになった。このことは、つぎのような事実によっても証明できる。一九一四年には、七千の労働者グループが労働者新聞支援の醵金をおこなったが、そのうち五千六百のグループがボリシェビキの新聞を支援し、メンシェビキの新聞を支援したのは千四百のグループにすぎなかった。そのかわり、メンシェビキのほうには自由主義的ブルジョア階級やブルジョア知識分子のなかに「裕福な友人」たちがたくさんいたので、この人たちがメンシェビキの新聞を維持するのに必要な資金の半分以上をまかなった。

当時、ボリシェビキは「プラウダ派」とよばれた。『プラウダ』とともに革命的プロレタリア階級の全世代が成長し、この世代がのちに十月社会主義革命を遂行することとなった。『プラウダ』は数十万の労働者に支持された。革命の高揚期(一九一二――一九一四年)に、大衆的ボリシェビキ党の強固な基礎がきずかれ、この基礎は、帝国主義戦争の時期におけるツァー政府のいかなる弾圧にも破壊されなかった。

「一九一二年の『プラウダ』――それは一九一七年のボリシェビズムの勝利のために基礎をきずいたものであった。」(スターリン)

党のもう一つの全ロシア的合法機関は、第四回国会のボリシェビキ党議員団であった。

一九一二年に、政府は第四回国会の選挙を実施することにきめた。わが党はこの選挙をひじょうに重視した。社会民主党の国会議員団と『プラウダ』は全ロシア的規模の基本的な合法的拠点であり、ボリシェビキ党はこの二つの拠点を利用して、大衆のあいだにおける革命活動をすすめたのである。

ボリシェビキ党は、独自の立場で、独自のスローガンをもって国会選挙に参加し、政府与党にも自由主義ブルジョア階級（立憲民主党）にも攻撃をくわえた。ボリシェビキは、民主共和国、八時間労働制、地主の土地の没収というスローガンをかかげて、この選挙運動をおこなった。

第四回国会の選挙は一九一二年の秋におこなわれた。十月のはじめ、政府はペテルブルグの選挙の経過に不満をいだき、多くの大工場における労働者の選挙権を制限しようとした。わが党のペテルブルグ委員会は、これに反撃をくわえるため、スターリン同志の提案にもとづいて、一日間のストライキを決行するよう大企業の労働者によびかけた。苦境におちいった政府は譲歩せざるをえなくなり、労働者は自分たちの集会で、自分たちののぞむ選挙人を選出できることになった。大多数の労働者は、スターリン同志の起草した、全権委員と議員への『委託書』に賛成投票をした。『労働者議員にたいするペテルブルグ労働者の委託書』には、一九〇五年に解決されなかった任務があげられていた。

委託書にはこうのべられている。

「ロシアは、いま、一九〇五年よりさらに徹底した、まさに来たらんとする大衆運動の前夜にある、とわれわれは考える……この運動の先鋒は、一九〇五年と同じように、ロシアの社会でもっとも先進

的な階級、すなわちロシアのプロレタリア階級である。その同盟者となりうるのは、ロシアの解放を切実に求める、しいたげられた農民だけである。」

『委託書』は、来たるべき人民の行動はかならず、ツァー政府に反対する戦線と、ツァー制度との妥協をはかる自由主義的ブルジョア階級に反対する戦線との二つの戦線における闘争である、とのべていた。

レーニンは、労働者に革命闘争をよびかけたこの『委託書』をひじょうに重視した。労働者はぞくぞくこのよびかけにこたえる決議をおこなった。

ボリシェビキは選挙で勝利し、バダーエフ同志がペテルブルグ労働者によって国会議員に選出された。

国会選挙のさい、労働者は他の階層の住民とは別に投票した（いわゆる労働者選挙人団――クーリヤ）。労働者選挙人団から選出された九人の議員のなかには、バダーエフ、ペトロフスキー、ムラノフ、サモイロフ、シャゴフ、マリノフスキー（のちにスパイであることが発覚した）という六人のボリシェビキ党員がいた。ボリシェビキの議員は、労働者階級の五分の四以上を擁する大工業の中心地から選出されたものである。ところが、何人かの解党派議員は労働者から選出されたのではなく、労働者選挙人団から選挙されたのではなかった。そのため、国会議員のうち解党派が七人、ボリシェビキは六人という結果になった。国会では、はじめのうち、ボリシェビキは解党派といっしょに社会民主党議員団をつくっていた。しかし、解党派の議員がボリシェビキの革命活動を妨害したので、ボリシェビキの議員はかれらにたいするねばり強い闘争ののち、一九一三年十月、ボリシェビキ党中央委員会の指示にしたがって、合同の社会民主党議員団から脱退し、独自のボリシェビキ党議員団をつくった。

ボリシェビキ議員は、国会で革命的な演説をおこない、専制制度を攻撃し、労働者の虐待や労働者にたいする資本家の苛酷な搾取について政府を詰問した。

かれらはまた、農業問題についても国会で演説し、農奴制地主との闘争を農民によびかけ、地主の土地を没収して農民にあたえることに反対する立憲民主党を暴露した。

ボリシェビキは、八時間労働制についての法案を国会に提出した。この法案はもちろん、黒百人組的反動国会でとりあげられはしなかったが、ひじょうに大きな扇動の役割を果たした。

ボリシェビキの国会議員団は、党中央やレーニン自身と密接な連係をたもち、レーニンからの指示をうけた。スターリン同志も、ペテルブルグで活動していた時期には、直接この議員団の指導にあたった。

ボリシェビキの議員は国会内での活動にかぎらず、国会外でも大いに活動した。かれらは、多くの工場をまわり、全国の労働者中心地へ行って演説し、秘密集会をひらいて党の決定を説明し、新しい党組織をつくった。かれらは合法的な活動と非合法の地下活動とをたくみに結びつけた。

三、合法的組織におけるボリシェビキの勝利　革命運動のいっそうの高揚　帝国主義戦争の前夜

この時期に、ボリシェビキ党は、プロレタリア階級のあらゆる形態の階級闘争を指導するうえで、さまざま

な模範をしめした。党は地下組織をつくった。党は非合法のビラを発行した。党は大衆のなかで秘密の革命活動をすすめた。同時に、党は労働者階級のさまざまな合法的組織をますます多く獲得した。党は労働組合、市民会館、夜間大学、クラブ、保険施設などの獲得につとめた。これらの合法的組織はそれまでずっと、解党派の避難所になっていた。そこでボリシェビキは、これらの合法的諸団体を党の拠点に変えるために奮闘した。ボリシェビキは、非合法活動と合法活動とをうまく結びつけて、ペテルブルグとモスクワにおける労働組合の大部分を獲得した。ボリシェビキがとりわけかがやかしい勝利をおさめたのは、一九一三年、ペテルブルグにおける金属労働組合の幹部を選出する選挙であった。この集会では、金属労働者三千人のうち、解党派に投票したのはわずか百五十人にすぎなかった。

第四回国会の社会民主党議員団のような合法的組織についても、同じことがいえる。国会では、メンシェビキの議員が七人をしめ、ボリシェビキは六人にすぎなかった。だが、メンシェビキの七人組は主として非労働者地域からえらばれ、労働者階級の五分の一たらずを代表するにすぎなかったのにたいし、ボリシェビキの六人組は国内のおもな工業中心地（ペテルブルグ、モスクワ、イワノボ・ボズネセンスク、コストロマ、エカチェリノスラフ、ハリコフ）から選出され、全国の労働者階級の五分の四以上を代表していた。したがって、労働者が自分たちの議員と認めたのは、メンシェビキの七人組ではなく、ボリシェビキの六人組（バダーエフ、ペトロフスキーら）であった。

ボリシェビキが各種の合法的組織を獲得できたのは、ツァー制度の野蛮な迫害や解党派とトロツキストの中傷にめげず、非合法の党と党内の強固な規律を守り、労働者階級の利益をあくまで守り、大衆と密接に結びつ

き、労働運動の敵にたいして妥協のない闘争をすすめたからである。

このように、合法的諸組織のなかで、ボリシェビキは全面的に勝利をおさめ、メンシェビキは全面的に敗北した。国会の演壇における扇動の分野でも、また労働者の出版物や他の合法的組織の分野でも、メンシェビキはうしろに追いやられた。革命運動に身を投じた労働者階級は、メンシェビキに背を向け、ボリシェビキのまわりに固く結集した。

それだけではなく、メンシェビキは民族問題のうえでも破綻をみせた。ロシアの辺境地区における革命運動は、民族問題についての明確な綱領を必要としていた。ところが、メンシェビキは、ブンドのうち出した、誰も満足できない「文化的自治」のスローガンのほかには、綱領といえるようなものを何ひとつ持ち合わせなかった。民族問題についてのマルクス主義的綱領をもっていたのは、ボリシェビキだけであった。この綱領は、『マルクス主義と民族問題』と題するスターリン同志の論文、『民族自決権について』、『民族問題についての論評』と題するレーニンの二つの論文にくわしくのべられている。

メンシェビズムがこのように失敗をかさねると、八月連合がいまにも崩壊しそうになったのは驚くにあたらない。もともとこの連合は雑多な分子の寄せ集めであったから、ボリシェビキの一撃をうけてはひとたまりもなく、バラバラに瓦解しはじめた。ボリシェビキとの闘争のためにつくられた八月連合はいくらもたたぬうちに、ボリシェビキに粉砕されてしまった。まず第一にこの連合から脱退したのはフペリョード一派（ボグダーノフ、ルナチャルスキーら）である。つづいてラトビア人が脱退し、残りの者もバラバラになってしまった。ボリシェビキとの闘争で敗北した解党派は、第二インターナショナルに助けを求めた。そこで、第二インタ

ーナショナルが援助にのりだした。第二インターナショナルは、ボリシェビキと解党派を「調停」し、「党内の平和」を確立するという口実で、解党派の協調政策にたいする批判をやめるよう、ボリシェビキに要求した。だが、ボリシェビキは妥協しなかった。かれらは日和見主義的第二インターナショナルの決議に従うことを拒否し、いかなる譲歩もしなかった。

ボリシェビキが合法的諸組織のなかで勝利をかちえたのは、けっして偶然ではなかったし、また偶然ではありえなかった。偶然でなかったというのは、ボリシェビキのみがマルクス主義の正しい理論と明確な綱領をもち、たたかいのなかで鍛えられた革命的プロレタリア階級の政党であったからだけではない。それはまた、ボリシェビキの勝利が革命のいっそうの高揚を反映しているからでもあった。

労働者の革命運動は日ましに発展し、つぎつぎに新たな都市へ、新たな州へとひろがっていった。一九一四年にはいると、労働者のストライキは静まるどころか、いっそうはげしい勢いで発展していった。ストライキはますますねばり強くつづけられ、参加する労働者の数もますます多くなった。一月九日には、二十五万の労働者がストライキをおこなっており、そのうち十四万がペテルブルグの労働者であった。五月一日には五十万人をこえる労働者がストライキを決行しており、そのうち二十五万人以上がペテルブルグの労働者であった。これらのストライキで、労働者はまれにみる頑強さをしめした。ペテルブルグのオブホフ工場のストライキは二ヵ月以上もつづき、レスネル工場のストライキは約三ヵ月もつづいた。ペテルブルグの多くの企業で発生した集団の中毒事件がきっかけとなって、十一万五千人の労働者のストライキがおこり、つづいて街頭デモがくりひろげられた。運動はひきつづき発展した。一九一四年の上半期（七月の上旬をふくむ）には、合計百四十

二万五千人の労働者がストライキに立ちあがった。
五月には、バクーの石油労働者のゼネストがおこり、ロシアの全プロレタリア階級の注目をあつめた。このストライキは、組織的におこなわれた。六月二十日には、バクーで二万の労働者がデモ行動をおこした。警察はバクーの労働者にたいして、凶暴な措置をとった。これにたいする抗議とバクー労働者への連帯をしめすために、モスクワでストライキがおこり、それが他の地域に燃えひろがっていった。
七月三日、ペテルブルグのプチロフ工場で、バクーのストライキに呼応する集会がひらかれた。このとき警官が労働者に発砲したため、ペテルブルグのプロレタリア階級のあいだに憤激の嵐がまきおこった。七月四日ペテルブルグ党委員会のよびかけにこたえて、ペテルブルグの九万人の労働者が抗議のストライキをおこなった。ストライキの参加者は、七月七日には十三万人、七月八日には十五万人、七月十一日には二十万人にふくれあがった。
すべての工場が憤激にもえ、いたるところで集会や街頭デモがおこなわれた。事態は、バリケードをきずくところまで緊迫した。バクーやルージでもバリケードがきずかれた。多くの地方で警官が労働者に発砲した。政府は運動を弾圧するために「非常」手段をとった。首都は軍営に変わり『プラウダ』は発行を停止された。
しかし、そのとき、帝国主義戦争という国際的な新しい要素が登場したため、事態はべつな方向に発展した。ちょうど七月の革命的な事件がおこった矢先に、フランス大統領ポアンカレが、切迫した戦争の開始について ツァーと協議するためペテルブルグへやって来た。その数日後、ドイツがロシアにたいして宣戦を布告した。ツァー政府は戦争を利用して、ボリシェビキの諸組織を破壊し、労働運動に弾圧をくわえようとした。革

命の高揚は世界大戦の勃発によって中断され、ツァー政府はこれに革命からの救いを見いだそうとした。

要約

新たな革命の高揚期（一九一二――一九一四年）を迎えて、ボリシェビキ党は、労働運動を指導し、ボリシェビキのスローガンのもとに新たな革命へとみちびいた。党は非合法活動と合法活動とを結びつけることに成功した。党は解党派とその一味であるトロツキストおよび召還派の反抗を粉砕して、あらゆる形態の合法運動をにぎり、合法的諸組織を革命活動の拠点に変えた。

党は、労働者階級の敵との闘争、および労働運動内部におけるその手先との闘争のなかで、党の戦列をかため、労働者階級との結びつきをひろげた。党は国会の演壇をひろく利用して革命的扇動をおこなうとともに、大衆的労働者新聞『プラウダ』を創刊し、それによって革命的労働者の新しい世代、すなわちプラウダ派を育てあげた。この層の労働者は、帝国主義戦争の時期にも、国際主義とプロレタリア階級革命の旗にあくまで忠実であった。かれらは、そのご一九一七年の十月革命の時期には、ボリシェビキ党の中核となった。

帝国主義戦争の前夜に、党は労働者階級の革命的行動を指導した。この前哨戦は、帝国主義戦争によって中断されたが、三年後には復活して、ツァー制度を打倒した。ボリシェビキ党は、プロレタリア国際主義の旗を高くかかげて、帝国主義戦争の困難な段階につき進んだ。

第六章　帝国主義戦争の時期におけるボリシェビキ党。ロシアにおける第二次革命（一九一四年——一九一七年）

一、帝国主義戦争の勃発とその原因

一九一四年七月十四日（新暦二十七日）、ツァー政府は総動員を発令した。七月十九日（新暦八月一日）、ドイツはロシアに宣戦を布告した。

ロシアは戦争に突入した。

戦争がはじまるずっと以前から、レーニンとボリシェビキは、戦争が不可避であることを見とおしていた。数回にのぼる社会主義者の国際大会の席上、レーニンは、戦争が勃発したさいに社会主義者のとるべき革命的行動路線を定めるよう、いく度も提案した。

レーニンは、戦争が資本主義の不可避的な同伴者であることを指摘した。他国の領土の強奪、植民地の略奪と征服、新しい市場の略奪、これらは一再ならず、資本主義国家のひきおこす侵略戦争の原因となった。戦争

は資本主義国にとって、労働者階級にたいする搾取と同じように、ごく自然で、あたりまえな状態であった。

とりわけ、一九世紀の末期から二〇世紀の初期にかけて、資本主義が終局的に最高かつ最後の発展段階、すなわち帝国主義に転化したとき、戦争はいっそう不可避のものとなった。帝国主義のもとでは、強大な資本家連合（独占組織）と銀行が資本主義諸国の生活のなかで決定的な役割をはたすようになった。金融資本が資本主義国家の主人公になった。金融資本は、新しい市場を必要とし、新しい植民地の獲得を必要とし、資本輸出の新しい領域、原料の新たな産地を必要とした。

だが、一九世紀の末期には、すでに地球上のすべての地域が資本主義諸国のあいだに分割されつくしていた。しかも、帝国主義の時代には、資本主義はきわめて不均等な、飛躍的な発展をとげる。以前には一位をしめていた国の工業発展速度がにぶる一方、以前にはおくれていた国が逆に急速な飛躍をとげ、前者に追いつき、追いこすこともある。帝国主義諸国の経済的、軍事的な力関係にも変化が生まれる。世界再分割への動きがあらわれ、この再分割の争いのために、帝国主義戦争は不可避のものとなった。一九一四年の戦争は、世界の再分割、勢力範囲の再分割をめぐる戦争であった。すべての帝国主義国家は、この戦争を長いあいだ準備していた。この戦争をひきおこした犯人は、世界諸国の帝国主義者である。

とくに、こんどの戦争を準備したのは、一方ではドイツとオーストリアであり、他方ではイギリス、フランスとこの両国に依存するロシアであった。一九〇七年にイギリス、フランス、ロシアの同盟である三国連合が結ばれた。ドイツ、オーストリア・ハンガリー、イタリアの三国は、別の帝国主義同盟をつくった。だが、イタリアは、一九一四年に戦争がはじまると、この同盟から脱退し、のちに連合国側についた。ドイツとオース

トリア・ハンガリーは、ブルガリアとトルコの支援をうけた。
ドイツは、帝国主義戦争を準備するにあたって、イギリス、フランスから植民地を奪い、ロシアからウクライナ、ポーランド、バルト海沿岸地区を奪おうとねらっていた。ドイツはバクダード鉄道を建設して、近東におけるイギリスの支配をおびやかしていた。イギリスはドイツ海軍の増強をおそれていた。
ツァー・ロシアは、トルコの分割をもくろみ、黒海から地中海につうずる海峡（ダーダネルス海峡）の獲得と、コンスタンティノープルの強奪を夢みていた。ツァー政府の計画には、オーストリア・ハンガリー帝国の一部ガリシアの強奪もふくまれていた。
イギリスは、危険な競争相手ドイツを戦争で粉砕しようとしていた。なぜなら、ドイツの商品は、戦前すでに世界の市場からイギリスの商品を日ましに追いはらいはじめていたからである。それだけでなく、イギリスは、メソポタミアとパレスチナをトルコから奪い、エジプトにおける地位を強化しようとしていた。
フランスの資本家は、ドイツから鉄と石炭の豊富な産地ザール地区を奪うとともに、一八七〇年から一八七一年の戦争でドイツに占領されたアルザス・ローレヌ地区を奪い返えそうとねらっていた。
このように、帝国主義戦争をひきおこしたものは、二つの資本主義国家群のあいだの深刻な矛盾であった。世界再分割のためのこの略奪戦争は、すべての帝国主義の利益につながりをもつものであった。そのため、日本、アメリカその他多くの国が、その後、この戦争に引きずりこまれた。
この戦争は世界大戦となった。
ブルジョア階級は、帝国主義戦争を自国の大衆には知らせず、極秘裏に準備した。大戦が勃発すると、帝国

主義政府はいずれも、自分たちが隣国を侵攻したのではなく、隣国が自分たちを侵攻したのだ、ということを証明しようとした。ブルジョア階級は人民をだまして、この戦争の真の目的をかくし、この戦争の帝国主義的、略奪的性質をかくした。帝国主義諸国の政府はいずれも、祖国を守るために戦争をしているのだと声明した。

第二インターナショナルの日和見主義者は、ブルジョア階級を助けて人民をあざむいた。第二インターナショナルの社会民主主義者は、卑劣にも社会主義の事業を裏切り、プロレタリア階級の国際的連帯の事業を裏切った。かれらは戦争に反対するどころか、ブルジョア階級を助けて、祖国防衛の名のもとに交戦諸国の労働者、農民をたがいに殺し合わせた。

ロシアが、連合国側、つまりイギリス、フランスの側に加担して帝国主義戦争にくわわったのは、けっして偶然ではない。一九一四年以前には、ロシアのもっとも重要な産業部門が外国資本、主としてフランス、イギリス、ベルギーなど連合国側の資本家に握られていたことに注意しなければならない。ロシアのもっとも重要な冶金工場は、フランスの資本家の手ににぎられていた。全体から見れば、冶金業のほとんど四分の三（七二パーセント）までが外国資本に依存していた。ドンバスの石炭産業についても、同じような状況が見られた。石油産業の約半分は、イギリス、フランス資本の手中にあった。ロシアの工業利潤の大部分が外国銀行、おもにイギリス、フランス両国の銀行に流れこんでいた。これらすべての状況にくわえて、ツァーがフランス、イギリス両国から数十億の借金をしていた。そのため、ツァー政府はイギリス、フランス帝国主義にしばりつけられ、ロシアはこれらの国の属国、半植民地になっていた。

ロシアのブルジョア階級は、自分たちの状態を改善しようと考えていた。すなわち、新しい市場を獲得し、軍需品の受注と納入によってボロもうけをし、戦時状態を利用して革命運動を粉砕しようと考えていた。

ツァー・ロシアは、十分な準備なしに参戦した。ロシアの工業は、ほかの資本主義諸国よりもはるかに立ちおくれていた。ロシアの工場のほとんどは、オンボロ機械を使う旧式の工場であった。半農奴制度の土地所有制度がのこっていて、ほとんどの農民が貧困と破滅にさらされていたため、農業は、長期戦にたえる強固な経済的基礎にはなりえなかった。

ツァーのおもな支柱は農奴制的地主であった。黒百人組の反動的大地主は大資本家と結託して、国内と国会を支配していた。かれらは、ツァー政府の内外政策を全面的に支持していた。ロシアの帝国主義的ブルジョア階級は、一方では新たな市場と新たな領土の略奪を保証することができ、他方では労働者と農民の革命運動を弾圧できる強固な鉄拳として、ツァー専制政府に心からの期待をよせていた。

自由主義的ブルジョア階級の党である立憲民主党は、反政府党と称してはいたが、ツァー政府の対外政策を無条件で支持した。

小ブルジョア政党である社会革命党とメンシェビキは、戦争がはじまるとすぐ、社会主義の煙幕のもとに、ブルジョア階級を助けて人民をだまし、この戦争の帝国主義的、略奪的性質をおおいかくした。かれらは、「プロシアの野蛮人」と戦ってブルジョア階級の「祖国」を防衛しなければならないと宣伝し、「国内平和」の政策を支持した。かれらはこうして、ちょうどドイツの社会民主主義者が「ロシアの野蛮人」にたいするドイツ皇帝政府の戦争遂行を助けたのと同様、ロシアのツァー政府の戦争遂行を助けた。

ツァー専制制度にたいし、地主、資本家にたいし、帝国主義戦争にたいしてだんこ反対するマルクス主義の立場をあくまで守りぬき、偉大な革命的国際主義の旗にあくまで忠実であったのは、ただボリシェビキ党だけであった。ボリシェビキ党は、開戦当初から、戦争がはじまったのはけっして祖国防衛のためではなく、他国領土の侵略、他国人民の略奪によって地主と資本家に利益をもたらすためであり、労働者はこの戦争に反対してだんこたたかうべきであるという立場を堅持した。

労働者階級は、ボリシェビキ党を支持した。

戦争の初期に知識分子や富農層をとりこにしたブルジョア愛国主義的熱狂は、たしかに一部の労働者にも感染した。しかし、それは主として、ゴロツキがかった「ロシア国民同盟」の成員と、社会革命党やメンシェビキに同調する労働者の一部にすぎなかった。かれらは、当然、労働者階級の感情を反映してはいなかったし、また、反映できもしなかった。戦争の初期にツァー政府が組織したブルジョア排外主義のデモに参加したのは、これらの連中であった。

二、自国帝国主義政府の側に走った第二インターナショナルの諸党 個々の社会排外主義諸党に分裂した第二インターナショナル

レーニンは、第二インターナショナルの日和見主義とその指導者の動揺性を、一再ならず警告していた。

第二インターナショナルの指導者たちは、口先で戦争反対をとなえているだけだ、いったん戦争がおこれば、かれらはその立場を変えて帝国主義ブルジョア階級の側に走り、戦争の支持者になるかもしれない、とレーニンはつねにくり返していた。戦争がはじまっていく日もたたないうちに、レーニンの予言は実証された。

一九一〇年、コペンハーゲンでひらかれた第二インターナショナルの大会では、社会主義者は国会で軍事予算に反対票を投ずべきであるとの決議が採択された。一九一二年のバルカン戦争にさいし、バーゼルでひらかれた第二インターナショナルの大会では、すべての国の労働者は、資本家の利潤をふやすためたがいに殺し合うことを罪悪であると考える、との声明が発表された。決議のなかで、口先で語られたのは、こうした言葉であった。

ところが、帝国主義戦争の砲声がとどろき、これらの決議を実行にうつすべき時になると、第二インターナショナルの指導者連中は、プロレタリア階級の裏切り者、反逆者になり果て、ブルジョア階級の下僕になり果てた。かれらは戦争の支持者になってしまったのである。

一九一四年八月四日、ドイツ社会民主党は国会で軍事予算と、帝国主義戦争支持に賛成票を投じた。フランス、イギリス、ベルギーその他の諸国の社会民主主義者も、ほとんどが同様の行動をとった。

第二インターナショナルは、すでに存在しなくなった。このインターナショナルは、実際には、たがいに殺し合う個々の社会排外主義政党に瓦解してしまったのである。

社会主義諸党の指導者は、プロレタリア階級を裏切って、社会排外主義と帝国主義ブルジョア階級擁護の立場に転落した。かれらは労働者階級を愚弄し、労働者階級に民族主義の毒をそそぎこんで、帝国主義政府を助

けた。これらの裏切り者社会主義者は、祖国防衛に名をかりて、ドイツの労働者をフランスの労働者にけしかけ、イギリスやフランスの労働者をドイツの労働者にけしかけた。第二インターナショナルのなかで、あくまで国際主義の立場に立ち、時流にさからって進んだものは、ごく一部にすぎなかった。かれらとても十分な確信をもっていたわけではなく、断固として進んだわけでもなかったが、ともかくも時流に抗して進んだ。

当時、すこしもためらわず、ただちに帝国主義戦争断固反対の旗をかかげたのは、ボリシェビキ党だけであった。レーニンは、一九一四年の秋に起草した戦争にかんするテーゼのなかで、第二インターナショナルの崩壊が偶然でないことを指摘した。第二インターナショナルは日和見主義者によってつぶされたが、革命的プロレタリア階級のすぐれた代表は、こうした日和見主義者を警戒しなければならないことを、早くから指摘していた。

第二インターナショナルの諸党は、戦争の前から日和見主義に感染していた。日和見主義者は、革命闘争の放棄をおおっぴらに宣伝し、「資本主義から社会主義への平和的成長」という理論を吹きまくっていた。第二インターナショナルは、日和見主義とたたかうことを望まず、日和見主義との平和共存を主張し、それが強固になることを許した。第二インターナショナルは、日和見主義にたいして協調政策をとったあげく、自分自身も日和見主義になりさがった。

帝国主義的ブルジョア階級は、植民地からの利潤や後進国の搾取による利潤を利用して、熟練労働者の上層部いわゆる労働貴族に比較的高い賃金やその他の施し物をあたえこれを買収した。こうした階層のなかから、労働組合や消費組合の指導者、市町村会議員や国会議員、出版社や社会民主党組織の幹部が多数うまれた。大

戦のさい、こうした連中は、その地位を失うことを恐れて、革命の反対派に鞍替えし、自国のブルジョア階級、自国の帝国主義政府のもっとも熱心な支持者になりさがった。

日和見主義者は、社会排外主義者となった。

社会排外主義者は、ロシアのメンシェビキや社会革命党をもふくめて、国内的には労働者とブルジョア階級との階級的平和、対外的には他国人民との戦争を宣言した。かれらは戦争の真の犯人を大衆からかくし、自国のブルジョア階級は戦争をつくり出した犯人ではないと言った。多くの社会排外主義者が、自国の帝国主義政府の大臣となった。

プロレタリア階級の事業にとって、これにおとらず危険なのは、かくれた社会排外主義者、いわゆる中間派であった。カウツキー、トロツキー、マルトフの中間派は、公然たる社会排外主義者をかばい、弁護し、社会排外主義者とともにプロレタリア階級を裏切った。ただ、かれらは、労働者階級をあざむくため、反戦という「左翼」的な言葉をつかって、自分たちの裏切り行為をおおいかくしたにすぎない。中間派は、実際には戦争を支持した。なぜなら、軍事予算の表決のさい反対投票をせず、棄権だけにとどめるとの提案をしたこと――これは戦争を支持することを意味したからである。かれらも社会排外主義者と同様、自国の帝国主義政府の戦争遂行を妨げないよう、戦時中は階級闘争を放棄すべきであると主張した。中間派のトロツキーは、戦争と社会主義のもっとも重要なすべての問題について、レーニンに反対し、ボリシェビキ党に反対した。

レーニンは、戦争が勃発するとすぐ新たな、第三インターナショナル創設のため、勢力の結集にとりかかった。ボリシェビキ党中央委員会は、一九一四年十一月に発表した反戦宣言のなかで、恥ずべき破滅をとげた第

二インターナショナルのかわりに第三インターナショナルを創設するという任務をうち出した。
一九一五年二月、ロンドンでひらかれた連合国側の社会主義者の会議では、リトビノフ同志がレーニンの委託をうけて演説した。リトビノフは、ベルギー、フランス両国の社会主義者（バンデルベルデ、サンバ、ゲード）にたいしブルジョア政府から出て、帝国主義者と完全に手を切り、かれらとの協力を全面的に拒否するよう要求した。かれはすべての社会主義者に、自国の帝国主義政府とだんこ闘争し、軍事予算への賛成投票を非難するよう要求した。しかし、リトビノフのよびかけは、この会議で何の反応もえられなかった。
一九一五年九月のはじめ、国際主義者の第一回会議がツィンメルワルドでひらかれた。レーニンは、この会議を、国際反戦運動の発展の「第一歩」と呼んだ。レーニンは、この会議でツィンメルワルド左翼グループを組織した。しかし、このツィンメルワルド左翼グループのなかでも、一貫して正しい反戦の立場をあくまでとりつづけたのは、レーニンを先頭とするボリシェビキ党だけであった。ツィンメルワルド左翼は、『フォルボーテ』（先駆者）というドイツ語の雑誌を発行し、これにレーニンの論文をのせた。
一九一六年には、スイスのキンタールという村で国際主義者の二回目の会議がひらかれた。この会議は、第二回ツィンメルワルド会議とよばれた。このころには、ほとんどすべての国に国際主義者のグループができ、国際主義者と社会排外主義者との決裂がいちだんと鋭くなった。とくに重要なことは、この時期になると、大衆自身が戦争と戦禍の影響をうけて左翼化していたことである。キンタール宣言は、会議であらそった各グループ間の妥協の結果つくられたものである。この宣言は、ツィンメルワルド宣言にくらべると一歩前進していた。

だが、キンタール会議でも、帝国主義戦争の国内戦争への転化、自国帝国主義政府の敗戦、第三インターナショナルの結成という、ボリシェビキの政策の基本原則は採択されなかった。それにもかかわらず、キンタール会議は国際主義者の結集をうながし、後日、これらの人びとによって共産主義第三インターナショナルが結成されることになった。

レーニンは、ローザ・ルクセンブルグやカール・リープクネヒトのような、社会民主党左派のなかの不徹底な国際主義者の誤りを批判したが、同時にまた、かれらが正しい立場をとるように助けた。

三、戦争、平和および革命の問題に関するボリシェビキ党の理論と戦術

ボリシェビキは、多くの左翼社会民主主義者のように、ただ平和にあこがれ、平和の宣言に浮身をやつすような、たんなる平和主義者（パシフィスト）ではなかった。ボリシェビキは、平和のために積極的な革命闘争をすすめることを主張し、好戦的な帝国主義的ブルジョア階級の権力をうち倒すまでたたかいぬくことを主張した。ボリシェビキは、帝国主義的ブルジョア階級の権力をうち倒すことこそ、戦争をなくして、領土分割や賠償をともなわない正しい平和をかちとるもっとも確実な方法であると考え、平和の問題とプロレタリア革命の勝利の問題とを結びつけた。

ボリシェビキは、メンシェビキや社会革命党が革命を放棄し、戦争中は「国内平和」を維持しよう、という裏切的スローガンをあげたことに反対して、「帝国主義戦争を国内戦争に転化せよ」とのスローガンをかかげた。軍服をつけた、武装した労働者、農民をふくむ勤労大衆は、もし戦争からぬけだし、正義にもとづく平和をかちとろうとするなら、銃口を自国のブルジョア階級にむけて、その権力をうち倒すべきだ、というのがそのスローガンの意味である。

ボリシェビキは、ブルジョア階級の祖国を守るというメンシェビキ、社会革命党の政策に反対して「帝国主義戦争のなかで自国政府を敗北させる」という政策をうち出した。それはつまり、軍事予算に反対票を投じること、軍隊のなかに秘密の革命組織をつくること、前戦における両軍兵士の交歓運動を支持すること、労働者、農民の革命的反戦行動を組織し、こうした行動を自国の帝国主義政府に反対する蜂起に転化することを意味した。

ボリシェビキは、帝国主義戦争でツァー政府の軍事的敗北こそ、人民にとって最小の悪である、と考えた。なぜなら、こうした敗北によって、ツァー制度に対する人民の勝利が容易となり、資本主義の奴隷状態と帝国主義戦争からの解放をめざす労働者階級の闘争が容易となるからである。同時に、レーニンは、ロシアの革命家だけでなく、すべての交戦国の労働者階級の革命政党も、自国の帝国主義政府を敗北させる政策を遂行すべきであると主張した。

ボリシェビキは、すべての戦争に反対したわけではない。かれらが反対したのは、侵略戦争、帝国主義戦争だけである。ボリシェビキは、戦争には二つの種類があると考えた。

（イ）正義の戦争、つまり侵略的でない、解放のための戦争。これは、外国からの攻撃や人民を隷属化しようとする企てから人民を守ること、資本主義制度の奴隷化から人民を解放すること、あるいは帝国主義の抑圧から植民地や従属国を解放すること、などを目的とする戦争である。

（ロ）不正義の戦争、つまり侵略戦争。これは、他国と他国の人民を侵略し隷属化することを目的とする戦争である。

ボリシェビキは、前者の戦争を支持した。後者の戦争については、この種の戦争に反対して断固たたかい、革命をやりとげ自国の帝国主義政府を打倒するまでたたかいぬかなければならない、と考えた。

レーニンが大戦中に書いた理論的著作は、全世界の労働者階級にとってきわめて大きな意義をもつものであった。一九一六年の春、レーニンは『資本主義の最高の段階としての帝国主義』と題する論文を書いた。レーニンはこのなかで、帝国主義は資本主義の最高の段階であること、この段階の資本主義はすでに「進歩的」な資本主義から寄生的な資本主義、腐敗した資本主義に変わっていること、帝国主義は死にひんした資本主義であることを説明している。言うまでもなく、それは、資本主義がプロレタリア階級の革命なしにみずから滅亡するとか、自然に朽ち果てるとかということではけっしてない。レーニンはつねづね、労働者階級の革命なしには、資本主義制度をくつがえすことはできない、と教えていた。したがって、レーニンは、帝国主義を死にひんした資本主義と規定するとともに、「帝国主義はプロレタリア階級の社会革命の前夜である」と同書のなかで説いている。

レーニンはこう教えている——帝国主義の時代には、資本主義の抑圧はますますはげしくなる。帝国主義の

条件のもとでは、資本主義の基礎にたいするプロレタリア階級の憤激がますます強くなり、資本主義諸国の内部における革命的爆発の要素がますます増大する、と。
レーニンはこう教えている――帝国主義の時代には、植民地、従属国における革命的危機が日ましに先鋭化し、帝国主義にたいする憤激の要素がますます増大し、帝国主義にたいする解放戦争の要素も日ましに増大する、と。
レーニンはこう教えている――帝国主義の条件のもとでは、資本主義の発展の不均等と矛盾がとくに先鋭化する。また、商品販売市場と資本輸出市場を争奪する闘争、植民地と原料産地を争奪する闘争によって、あらたな世界分割のための周期的な帝国主義戦争が不可避のものとなる、と。
レーニンはこう教えている――この資本主義発展の不均等こそ、帝国主義戦争をひきおこすものである。この戦争によって帝国主義の力は弱められ、帝国主義戦線のもっとも弱いところで、これを突破する可能性がつくり出される、と。
以上のすべての点から、レーニンはつぎのような結論をみちびき出した。プロレタリア階級が帝国主義戦線のどこか一ヵ所あるいは数ヵ所を突破することは、十分に可能である。社会主義が、まず最初に数ヵ国で、あるいは一ヵ国においてさえ勝利することは可能である。各国における資本主義の発展が不均等であるため、世界のすべての国で社会主義が同時に勝利をおさめることは、不可能である。社会主義はまず一ヵ国あるいは数ヵ国で勝利をおさめ、その他の国ぐには、ある期間、ブルジョア国家として残るであろう、と。
レーニンは、帝国主義戦争の時期に書いた二つの論文のなかで、このすぐれた結論をつぎのように定式化し

ている。

(1)「経済的、政治的発展の不均等は、資本主義の絶対的法則である。ここから、まず最初に少数の資本主義国で、あるいはただ一つの資本主義国においてさえ、社会主義が勝利することは可能であるという結論が出てくる。この国の勝利したプロレタリア階級は、資本家を収奪し、自国の社会主義生産を組織し、他の資本主義世界に対抗して他の国ぐにの被抑圧階級を自分の側に引きつけるであろう……」(一九一五年に書かれた論文『ヨーロッパ合衆国のスローガンについて』より)

(2)「資本主義の発展は、それぞれの国で、きわめて不均等にすすむ。商品生産のもとでは、それ以外ではありえないのである。ここから、社会主義はすべての国で同時に勝利をおさめることはできないという動かすことのできない結論がえられる。社会主義は、はじめは一ヵ国または数ヵ国で勝利するが、他の国ぐにはなおしばらくブルジョア的あるいは前ブルジョア的な国にとどまるであろう。これによって摩擦がひきおこされるだけでなく、社会主義国家の勝利したプロレタリア階級を粉砕しようとする、他の国ぐにのブルジョア階級の直接の行動をひきおこすであろう。こうした状況のもとでおこる戦争は、われわれの側からいえば、正当な、正義の戦争である。それは、社会主義のための戦争、ブルジョア階級から他の諸民族を解放するための戦争になる。」(一九一六年秋に書かれた『プロレタリア革命の軍事綱領』より)

これは、社会主義革命の新しい、完成された論理である。これは、個々の国における社会主義の勝利の可能性についての理論、社会主義の勝利の条件、勝利の展望についての理論である。この理論の基礎は、早くも一

九〇五年、『民主主義革命における社会民主党の二つの戦術』というパンフのなかでレーニンがのべていたものである。

この理論は、帝国主義以前の資本主義の時期に、マルクス主義者のあいだにもてはやされた定式とは、根本的にちがっていた。当時、マルクス主義者は、どこか一つの国で社会主義が勝利することは不可能である、社会主義はすべての文明国で同時に勝利をおさめる、と考えていた。レーニンは、その名著『資本主義の最高段階としての帝国主義』のなかで明らかにした、帝国主義時代の資本主義にかんする諸種の事実にもとづいて、こうした古くさい見解をくつがえし、新たな理論的定式をあたえた。すべての国で社会主義が同時に勝利をおさめることは不可能であるが、ある一つの資本主義国で社会主義が勝利をおさめることは可能である、というのがその定式である。

レーニンの社会主義革命理論のこのうえもなく偉大な意義は、新たな理論によってマルクス主義を豊富にし、それを前進させた点だけにあるのではない。この理論の意義は、各国のプロレタリアに革命の展望をしめし、自国のブルジョア階級にたいする攻撃の主導権をとらせ、この攻撃のために戦争状態を利用することを教え、プロレタリア革命の勝利にたいするかれらの信念を強固なものにしたことにある。

以上が、戦争、平和および革命の問題についてのボリシェビキの理論的、戦術的定式である。

ボリシェビキは、この定式にもとづいて、ロシアでの実際活動をおこなった。

大戦がはじまると、ボリシェビキの国会議員、バダーエフ、ペトロフスキー、ムラノフ、サモイロフ、シャゴフらは、警察のきびしい弾圧にもかかわらず、多くの組織を訪れて、戦争と革命にたいするボリシェビキの

態度について演説した。一九一四年十一月、戦争にたいする態度について討議するため、ボリシェビキの国会議員団の会議がひらかれた。会議の三日目に、出席者全員が逮捕された。法廷は、これら議員にたいし公民権剝奪と東部シベリアへの流刑という判決を下した。ツァー政府は、ボリシェビキの国会議員に「叛逆罪」の罪名をかぶせた。

法廷で明らかにされた国会議員の活動ぶりは、わが党の名誉を高めるものであった。ボリシェビキ議員は、ツァーの法廷で勇敢にたたかい、法廷をツァー政府の侵略政策の暴露の演壇に変えた。

この事件に連座したカーメネフは、まったく違う行動をとった。かれは危険を感じると、たちまち臆病風をふかせ、ボリシェビキの政策にそむいた。カーメネフは法廷で、戦争の問題についてはボリシェビキと意見が違うと弁明し、この点を立証するためメンシェビキのヨルダンスキーを証人にたてるよう哀願した。

ボリシェビキは戦争のためにつくられた、軍事産業委員会を暴露し、労働者を帝国主義的ブルジョア階級の影響に従わせようとするメンシェビキのたくらみを暴露することにつとめた。ブルジョア階級は、帝国主義戦争が全国民の戦争であるかのように大衆に信じこませることがどうしても必要であった。ブルジョア階級は、大戦中に自分たちの全国的組織――地方自治会同盟と都市同盟をつくり、これによって、国政上ひじょうに大きな影響力をもつようになった。ブルジョア階級は、また、労働者をその指導と影響に従わせる必要があった。ブルジョア階級は、そのための方法として、軍事産業委員会のもとに「労働者団」をつくることを考えついた。メンシェビキは、ブルジョア階級のこの考えにとびついた。軍事産業委員会に労働者の代表を参加させることは、ブルジョア階級にとって有利であった。この代表は砲弾、大砲、銃器、弾薬その他軍需品をつくる工

場で生産能率を高める必要性を、労働者大衆のあいだで宣伝してくれるだろうからである。「すべてを戦争のために、すべてを戦争に」というのが、ブルジョア階級のスローガンであった。このスローガンのほんとうの意味は、「軍需品の調達と他国領土の侵略によって、できるだけ儲けろ」ということだった。ブルジョア階級のたくらんだニセ愛国主義の仕事に、メンシェビキは積極的に参加した。かれらは資本家を助けるため、軍事産業委員会に所属する「労働者団」の選挙に参加するようにと、さかんに労働者に宣伝した。ボリシェビキはこのやり方に反対した。かれらは、軍事産業委員会のボイコットをとなえ、このボイコットに成功した。しかし、一部の労働者は、有名なメンシェビキのグボズデフやスパイのアブロシーモフらにそそのかされて、やはり軍事産業委員会に参加した。一九一五年九月、軍事産業委員会の「労働者団」の最終選挙のため、労働者代表が集まったとき、ほとんどの代表がこうした「労働者団」への参加に反対であることがわかった。労働者代表の大多数は、労働者は平和のためツァー制度打倒のためにたたかうことを自己の任務とみなすと声明し、軍事産業委員会への参加に断固反対するという決議を採決した。

ボリシェビキは、陸、海軍の内部でも大きな活動をすすめた。かれらは陸、海軍の兵士大衆にたいして、この残虐きわまりない戦争をひきおこして人民を苦難の淵におとしいれた犯人は誰であるかを明らかにし、革命こそ、人民が帝国主義戦争からぬけでる唯一の道であることを教えた。ボリシェビキは、陸軍と海軍、前線と後方部隊に細胞をつくり、反戦ビラを配布した。

ボリシェビキは、クロンシュタットに「クロンシュタット軍事組織中央集団」をつくった。この組織は、ペトログラード党委員会と緊密な連係をもっていた。ペトログラード党委員会のもとには、守備隊での活動をう

けもつ軍事組織が設けられた。一九一六年八月、ペトログラードの保安課長はつぎのように報告している。「クロンシュタット中央集団では、何事もひじょうに慎重に、秘密にやられており、その成員はいずれも無口な、慎重な連中である。同集団は、本土にも代表者をおくっている」と。
党は前線でも、交戦する両軍の兵士に交歓をよびかけ、敵は世界のブルジョア階級であること、帝国主義戦争を国内戦争に転化し、銃口を自国のブルジョア階級とその政府に向けてこそ、はじめて戦争を終わらせうることを、とくに強く訴えた。いちぶの部隊が出撃を拒否するような事件が日ましにふえた。こうした事件はすでに一九一五年にもあったが、一九一六年には目立ってふえてきた。
ボリシェビキは、バルト海沿岸地区の北部戦線の軍隊でとりわけ大きな活動をすすめた。北部戦線司令官のルズスキー将軍は、一九一七年のはじめ、ボリシェビキが同戦線でひじょうに大規模な革命活動を展開している、と上級に報告している。
戦争は、各国人民および世界の労働者階級の生活にとってきわめて大きな転換点であった。戦争は、各国の運命、各国人民の運命、社会主義運動の運命を決定的な瀬戸ぎわに立たせた。したがって、戦争はまた、社会主義と称するすべての党派にとって試金石となった。その党派が依然として社会主義の事業、国際主義の事業に忠実であるか、それとも労働者階級を裏切り、自分たちの旗を巻いて、投げ棄て、これを自国のブルジョア階級にふみにじらせるか——当時、問題はこのように立てられていた。
戦争は、第二インターナショナルの諸党がこうした試練に耐えられず、労働者階級を裏切って、自国の帝国主義的ブルジョア階級の前に自己の旗を引きおろしたことを示した。

党内に日和見主義を育て、日和見主義者や民族主義者に譲歩するように教育されたこれらの政党は、これ以外の行動をとることができなかったのである。

戦争は、ボリシェビキ党だけが光栄ある試練に耐えぬき、社会主義の事業、プロレタリア国際主義の事業にあくまで忠実な唯一の政党であることを示した。

そして、これもまた当然なことであった。新しい型の党、日和見主義との妥協のない闘争の精神によって教育された党、日和見主義や民族主義にけがされていない党、ただこのような党だけが偉大な試練に耐えぬき、労働者階級の事業、社会主義と国際主義の事業にあくまで忠実でありうるからである。

ボリシェビキ党こそ、そういう党であった。

四、前線におけるツァーの軍隊の敗北　経済的破綻　ツァー制度の危機

戦争はすでに三年間つづいていた。戦死者、戦傷者、あるいは戦争のために発生した伝染病で死亡した者など、すでに数百万人の命が戦争のためにうばわれた。ブルジョア階級と地主は、戦争によってボロ儲けをした。だが、労働者や農民は、ますますきびしい窮乏と困難に追いこまれた。戦争によって、ロシアの国民経済ぜんたいが破壊された。約千四百万人の健康なはたらき手が職場からひきぬかれ、軍隊に狩り出された。工場

がつぎつぎに生産を止めた。はたらき手がいないために、穀物の作付面積はへった。市民も前線の兵士も飢えにさらされ、衣類やはき物も不足した。戦争によって、国内のすべての資源がつき果てた。

ツァーの軍隊は連戦連敗した。ドイツの大砲がツァーの軍隊に砲弾の雨をふらせているのに、ツァー軍隊には大砲も砲弾も不足し、鉄砲さえ満足に行きわたらなかった。ときには三人の兵士に銃が一挺という場合さえあった。ところが、この戦争のさいちゅう、ツァーの陸軍大臣スホムリノフがドイツのスパイと通じていたという売国行為が明るみに出た。スホムリノフは、前線への弾薬補給をさまたげよ、前戦には大砲も小銃も送るな、というドイツ諜報機関の指令を実行していたのである。ツァーのいく人かの大臣や将軍も、ひそかにドイツ軍をたすけていた。かれらはドイツと結びつきをもつ皇后とぐるになって、軍事機密をドイツ軍にもらしていた。だから、ツァーの軍隊が戦うたびに敗北し、退却せざるをえなかったのも、不思議ではない。一九一六年までに、ドイツ軍は、ポーランド全域とバルト海沿岸地域の一部を占領してしまった。

こうしたことのために、労働者、農民、兵士、知識分子のあいだで、ツァー政府にたいする憎しみと憤激がわきおこり、前線でも後方でも、また中央でも辺境でも、戦争に反対し、ツァー制度に反対する大衆の革命運動がいよいよ強まり、はげしくなった。

ロシアの帝国主義的ブルジョア階級も、不満をしめしはじめた。ラスプーチンのような山師がツァーの宮廷を牛耳り、明らかにドイツとの単独講和の方策をすすめているという事実が、こうしたブルジョア階級の憤激をまねいた。かれらは、ツァー政府に戦争遂行の能力がないことを、ますますさとってきた。かれらはまた、ツァー政府がその苦境からぬけ出すためにドイツと単独講和を結ぶのではないかと懸念した。そこで、ロシア

のブルジョア階級は、宮廷クーデターをおこして、ツァーのニコライ二世を退位させ、かわりにブルジョア階級と結びつきのあるミハイル・ロマノフを立てようと決意した。ブルジョア階級はこれによって、第一にはかれら自身が権力をにぎって帝国主義戦争をつづけ、第二にはこのささやかな宮廷クーデターによって、当時すでに高まりを見せていた人民革命の到来を防ごうという、一石二鳥の効果をねらったのである。

この面では、イギリスとフランスの政府がロシアのブルジョア階級を全面的に支持した。かれらは、ツァーが戦争をつづける能力をもたないことを知っていた。かれらは、ツァーがドイツとの単独講和を結ぶことをおそれていた。もしもツァー政府が単独講和を結ぶようなことになれば、英仏両国政府は、ロシアという同盟国を失うことになる。この同盟国は、自国の戦場に敵の兵力をひきつけているばかりか数万にのぼるロシアの精兵をフランスに送っていたのである。そこでかれらは、宮廷クーデターをおこそうとする陰謀を支持した。

こうして、ツァーは孤立してしまった。

前線でひきつづき失敗をかさねているあいだに、経済的破綻も日ましにはげしくなった。一九一七年の一月と二月には、食糧、原料、燃料の供給の破綻が頂点にたっし、このうえもなくきびしいものになった。ペトログラードとモスクワにたいする食糧の輸送は、ほとんど完全に止まってしまった。企業はあいついで閉鎖された。企業の閉鎖によって、失業者はますます増加した。労働者はとくに耐えがたい困窮におちいった。こうした耐えがたい状況からぬけ出す唯一の道は、ツァー専制制度を倒す以外にはないことを、ますます広範な大衆が信じるようになった。

ツァー制度は、明らかに致命的危機におちいった。

ブルジョア階級は、この危機を宮廷クーデターの方法で解決しようと考えていた。だが、人民は自分たちの流儀でこの危機を解決した。

五、二月革命　ツァー制度の倒壊　労働者・兵士代表ソビエトの樹立　臨時政府の成立　二重政権

一九一七年は、一月九日のストライキにはじまった。このストライキのさい、ペトログラード、モスクワ、バクー、ニジニ・ノブゴロドなどで、デモ行動がおこされた。モスクワでは、一月九日のストライキに全労働者の約三分の一が参加した。ツベルスコイ・ブルバールでは、二千人のデモ行進が騎馬警官によって蹴散らされた。ペトログラードのブィボルグの大通りでおこなわれたデモ行進には、兵士も参加した。

ペトログラードの警察は、こう報告している。「ゼネストの思想は、日とともに新しい支持者をえており、一九〇五年のときと同じように、すでに大衆的なものとなっている」と。

メンシェビキと社会革命党員は、すでにはじまった革命運動を、自由主義的ブルジョア階級ののぞむ枠内にとじこめようと努めた。メンシェビキは、国会開会当日の二月十四日に、国会へ労働者の行進を組織することを提案した。だが、労働者は国会にはゆかず、ボルシェビキに従って、デモ行動をおこした。

一九一七年二月十八日、ペトログラードのプチロフ工場でストライキがはじまった。二月二十二日になる

と、ほとんどの大企業の労働者がストライキに立ちあがった。二月二十三日（新暦三月八日）の国際婦人デーには、婦人労働者がペトログラード・ボリシェビキ委員会のよびかけにこたえて、飢餓反対、戦争反対、ツァー制度反対の街頭デモをおこなった。ペトログラードの労働者は、全市をあげてのストライキによって、婦人労働者のデモを支援した。政治的ストライキは、ツァー制度に反対する政治的総示威運動に成長しはじめた。

二月二十四日（新暦三月九日）には、いっそうはげしいデモがもりあがった。ストライキに参加した労働者は二十万人前後にたっした。

二月二十五日（新暦三月十日）、革命運動はペトログラードの全労働者にひろがった。各区ごとにすすめられていた政治ストは、ペトログラード全市をあげての政治的ゼネストとなった。いたるところでデモがおこなわれ、警官との衝突がおこった。労働者大衆は「ツァーを倒せ！」、「戦争反対！」、「パンをよこせ！」と書いた赤旗をかかげていた。

二月二十六日（新暦三月十一日）の朝、政治ストとデモは、蜂起の性質をおびはじめた。労働者は憲兵や警官を武装解除して、自分たちの手に武器をもった。しかし、警官隊との武力衝突は、ズナメンスカヤ広場でデモ隊が射撃される結果をまねいた。

ペトログラード軍区司令官のハバロフ将軍は、労働者は二月二十八日（新暦三月十三日）に就業せよ、命にそむく者は前線に送る、という布告を出した。二月二十五日（新暦三月十日）、ツァーはハバロフ将軍に、「明日中に帝都の騒乱を制止せよ」と命じた。

だが、革命を「制止」することはもはやできなかった。

二月二十六日（新暦三月十一日）の昼、パブロフスキー連隊後備大隊第四中隊が発砲した。だが、労働者にたいしてではなく、労働者と射ち合っている騎馬警官隊に向けて、発砲したのである。軍隊を味方に獲得するために、もっともねばり強い精力的な闘争がすすめられた。なかでも積極的なのは婦人労働者で、ちょくせつ兵士に話かけ、交歓し、憎むべきツァー専制制度打倒のため人民を助けるように呼びかけた。

当時、ボリシェビキ党では、ペトログラードに設けられたモロトフ同志をはじめとする党中央委員会ビューローが、実際活動の指導にあたっていた。中央委員会ビューローは、二月二十六日（三月十一日）、ツァー制度に反対する武力闘争の継続、臨時革命政府の樹立をよびかける宣言を発表した。

二月二十七日（新暦三月十二日）、ペトログラード駐屯軍は、労働者にたいする発砲を拒否し、蜂起した人民の側に加担しはじめた。二月二十七日の早朝、蜂起にくわわった兵士の数は一万にすぎなかったが、夕方には六万人をこえた。

蜂起した労働者、兵士大衆は、ツァーの大臣や将軍を逮捕し、監獄に入れられていた革命家を解放しはじめた。解放された政治犯は革命闘争に加わった。

街頭では、屋上に機関銃を据えつけた憲兵や警官との射ち合いがなおつづいていた。しかし、軍隊が急速に労働者の側に移ったため、ツァー専制制度の運命は決まった。

ペトログラードで革命が勝利したとの知らせが、他の町や前戦につたわると、各地の労働者、兵士がツァーの官吏を打倒するために立ちあがった。

二月のブルジョア民主主義革命は勝利した。

革命が勝利をおさめたのは、労働者階級が革命の先鋒となり、軍服を着た数百万の農民大衆を指導して、「平和、パン、自由」をかちとる運動をすすめたからである。革命の成功を決定したのは、プロレタリア階級の指導権であった。

「プロレタリア階級が革命を実施した。プロレタリア階級は英雄的精神をあらわし、鮮血を流し、貧困にあえぎきわめて広範な勤労大衆をひきつれていった……。」革命のはじめの数日間に、レーニンはこう書いている。(レーニン『遠方からの手紙』第二信)

一九〇五年の第一次革命によって、一九一七年の第二次革命の急速な勝利が準備された。

「もしも一九〇五年から一九〇七年まで三年間におけるプロレタリア階級の偉大な階級闘争と革命的なエネルギーがなかったならば、第二次革命のこうした急速な進展は見られなかったであろう。すなわち、革命の最初の段階を数日のうちに完成することはできなかったであろう。」――レーニンはこう指摘した。(前掲書)

革命の最初の数日のうちに、ソビエトが誕生した。勝利をおさめた革命は、労働者・兵士代表ソビエトをよりどころとした。蜂起した労働者と兵士は、労働者・兵士代表ソビエトを樹立した。ソビエトは武装蜂起の機関であるとともに、新しい革命権力の芽生えでもあることが、一九〇五年の革命によって明らかにされた。労働者大衆の意識のなかに、ソビエトの思想が生きつづけていたからこそ、かれらはツァー制度をくつがえした翌日、この思想を実現したのである。ただ、一九〇五年には労働者代表ソビエトがつくられただけであったが、一九一七年二月にボリシェビキの提案で成立したのは労働者・兵士代表ソビエトであるという違いがあっ

た。

ボリシェビキが街頭で大衆の直接闘争を指導していたとき、協調主義の党であるメンシェビキと社会革命党は、ソビエトのなかで議席を奪い、多数派になった。こうした状態が生まれたのは、ボリシェビキの多くの指導者が、投獄あるいは流刑されていた（レーニンは国外に亡命中であり、スターリンとスベルドロフはシベリアの流刑地にいた）のに、メンシェビキと社会革命党員は、ペトログラードの町を自由に動きまわれたためでもある。こうして、ペトログラード・ソビエトとその執行委員会は、協調主義の代表であるメンシェビキや社会革命党員に牛耳られてしまった。モスクワやその他多くの都市でも同様であった。ただ、イワノボ・ボズネセンスク、クラスノヤルスクその他数ヵ所では、最初からボリシェビキがソビエトのなかで多数をしめた。

武装した人民——労働者と兵士は、ソビエトを人民の権力機関とみなして、自分たちの代表をソビエトに送った。かれらは、労働者・兵士代表ソビエトは革命人民のすべての要求を実現し、なによりもまず講和条約を結ぶものと考え、そう信じていた。

ところが、労働者と兵士は他人の言をあまりに軽がるしく信じたため、ペテンにかかった。社会革命党やメンシェビキは、戦争を終結させ、平和をかちとろうとする意図など、まるっきり持ち合わせていなかった。かれらは、戦争をつづけるために革命を利用しようと考えていた。そして、革命や人民の革命的要求についていえば、かれらは、革命はすでにおわったとみなし、現在の任務は、革命の成果をかためて、ブルジョア階級との「正常な」、立憲的な共存の軌道に移ることである、と考えていた。したがって、ペトログラード・ソビエトの指導権をにぎる社会革命党とメンシェビキは、戦争終結の問題や平和の問題を握りつぶして、権力をブル

ジョア階級に引きわたすことに全力をあげた。

一九一七年二月二十七日（新暦三月十二日）、国会の自由主義派議員は、社会革命党やメンシェビキの指導者とひそかに取引きして、国会臨時委員会をつくり、地主で君主主義の第四次国会議長ロジャンコを議長にまつりあげた。この国会臨時委員会は、数日後にはまた、労働者・兵士代表ソビエト執行委員会を牛耳る社会革命党やメンシェビキといっしょになって、ボリシェビキには知らせずに、ロシアの新政府を組織するための協議をおこなった。この新政府の首班は、二月革命以前にツァー・ニコライ二世が自分の政府の首相に内定していたリボフ侯爵である。臨時政府には、立憲民主党の党首ミリュコフ、十月党の党首グチコフ、その他有名な資本家階級の代表がはいり、社会革命党のケレンスキーも「民主主義派」の代表として参加した。

その結果、ソビエト執行委員会をあやつる社会革命党とメンシェビキは、権力をむざむざブルジョア階級にひきわたしてしまった。しかも、後になってこのことを知った労働者・兵士代表ソビエトは、ボリシェビキの抗議にもかかわらず、多数決によって、社会革命党やメンシェビキの指導者たちの行動を承認した。

こうして、ロシアには、レーニンが言ったように、「ブルジョア階級とブルジョア化した地主」の代表からなる新しい国家権力がつくられたのである。

しかし、当時は、ブルジョア政府とならんで、もう一つ別な権力すなわち、労働者・兵士代表ソビエトがあった。このソビエトのなかの兵士代表は、主として戦争にかり出された農民である。労働者・兵士代表ソビエトは、ツァー権力に反対する労農同盟の機関であると同時に、かれら自身の権力機関すなわち労農独裁の機関であった。

こうして、一つは臨時政府に代表されるブルジョア階級独裁、もう一つは労働者・兵士代表ソビエトに代表される労農独裁という、この二つの権力、二つの独裁の特殊の組み合わせが生じた。二重政権が生まれたのである。

最初、ソビエトのなかでメンシェビキと社会革命党が多数をしめたのはなぜか？ 勝利をかちとった労働者や農民が、権力を自発的にブルジョア階級の代表にゆずり渡したのはなぜか？

レーニンは、当時、政治にめざめ、政治に参加した人びとが、政治的経験をまったくもたなかったためである、と説明している。かれらの大部分は、小所有者か農民、あるいはつい最近まで農民であった労働者であって、ブルジョア階級とプロレタリア階級との中間に立つ人びとであった。当時のロシアは、全ヨーロッパの大国のなかで、もっとも小ブルジョア的な国であった。そして、この国では、「巨大な小ブルジョアの波がすべてを呑みこみ、たんに数のうえだけでなく、思想の面からも、階級意識をもつプロレタリア階級を圧倒していた。言いかえれば、それがひじょうに広範な労働者の層を、小ブルジョア的な政治的観点に染まらせ、そのとりこにしてしまっていた。」（レーニン『わが国の革命におけるプロレタリア階級の任務』）

メンシェビキや社会革命党のような小ブルジョア政党を表面に浮かびあがらせたのは、こうした小ブルジョア勢力の波がおしよせていたためである。

レーニンはまた、大戦の時期にプロレタリア階級の構成に変化がおこり、革命のはじまったときプロレタリア階級が十分な階級意識をもたず、十分に組織されてもいなかったことが、もう一つの原因であると指摘している。大戦の時期に、プロレタリア階級の構成にはひじょうに大きな変化が生まれた。基幹労働者の約四〇パ

ーセントは軍隊に召集された。大戦の時期には、プロレタリア階級とはちがった心情をもつ小所有者、手工業者、小店主がたくさん、召集をのがれるために工場にはいってきた。

労働者のなかのこれらの小ブルジョア層が、メンシェビキや社会革命党など小ブルジョア政治家を生み出す地盤となった。

だからこそ、政治的経験をもたない広範な大衆は、小ブルジョア勢力の思潮におかされ、革命の第一段階の勝利に酔いしれて、革命の最初の数ヵ月間、協調主義的諸政党のとりこになり、ブルジョア政権はソビエトの仕事を邪魔しないだろうとの幼稚な期待をいだいて、国家権力をブルジョア階級にゆずり渡すことを承諾したのである。

ボリシェビキ党の当面した任務は、大衆に辛抱づよく説明することによって、臨時政府の帝国主義的性質を暴露すること、社会革命党とメンシェビキの裏切り行為を摘発すること、臨時政府をソビエト政府ととりかえないかぎり平和は達成できないことを教えることであった。

そこで、ボリシェビキ党は全力をあげてこの仕事に取りかかった。

党の合法的出版物がふたたび発行された。二月革命の五日後、『プラウダ』がペトログラードで復刊され、数日おくれて『ソツィアル・デモクラート』もモスクワで復刊された。党は、自由主義的ブルジョア階級やメンシェビキ、社会革命党にたいする信頼を失いはじめた大衆の先頭に立って活動した。党は、労働者階級との共同行動が必要であることを、兵士や農民に根気づよく説明した。党はまた、革命をさらに発展させ、ブルジョア臨時政府をソビエト政府ととりかえないかぎり農民は平和を達成できないし、土地を獲得することもでき

ないことを、かれらに説明した。

要　約

帝国主義戦争がおこったのは、資本主義諸国の発展の不均等のためであり、主要列強間の均衡が破れたためであり、帝国主義者が戦争によって世界を再分割し、新たな力の均衡をつくり出すことを必要としたためである。

もしも第二インターナショナルの諸党が労働者階級の事業を裏切らず、数回にもわたる第二インターナショナル代表大会の反戦決議にそむかなかったなら、もしもかれらが自国の帝国主義政府や戦争挑発者に反対して積極的に活動し、労働者階級をたちあがらせる決意をもっていたなら、戦争はこのような破壊的性質をもたず、これほどはげしく拡大しなかったであろう。

社会主義と国際主義の事業にあくまで忠実で、自国の帝国主義政府に反対する国内戦争を組織した唯一のプロレタリア政党は、ボリシェビキ党であった。他のすべての第二インターナショナルの諸党は、上層の指導者をつうじてブルジョア階級と気脈をつうじ、帝国主義のとりことなり、帝国主義者の側に走った。

戦争は資本主義の全般的危機の反映であるが、またこの危機を鋭くし、世界資本主義を弱めた。ロシアの労働者とボリシェビキ党は、世界ではじめて資本主義の弱点をうまく利用し、帝国主義の戦線を突破し、ツァー

を打倒して、労働者・兵士代表ソビエトをうちたてた。
小ブルジョア階層、兵士、労働者などの広範な大衆は、革命の最初の勝利に酔い、今後は万事うまくいくというメンシェビキや社会革命党の言葉に気をゆるして、安易に臨時政府を信じ、これを支持した。
そこで、ボリシェビキ党は、最初の勝利に酔いしれたこれらの労働者、兵士大衆に、つぎのことを説明する任務に直面した。すなわち、革命の完全な勝利にはまだほど遠いこと、権力がブルジョア階級の臨時政府ににぎられ、ソビエトが協調主義のメンシェビキや社会革命党に牛耳られているかぎり、人民は、平和も、土地も、パンも獲得できないこと、完全な勝利をかちとるには、さらに前進し、ソビエトの手に権力をにぎらなければならないこと、これを説明することであった。

第七章　十月社会主義革命の準備と遂行の時期におけるボリシェビキ党
（一九一七年四月―一九一八年）

一、二月革命後の国際情勢　党の地下からの脱出と公然たる政治活動への移行　レーニンのペトログラード到着　レーニンの四月テーゼ　社会主義革命への移行についての党の方針

事態の進展と臨時政府の行動は日ごとにボリシェビキの路線の正しさを実証し、臨時政府が人民を支持するのではなくて人民に反対していること、平和を支持するのではなくて戦争を支持していること、平和、土地、パンをあたえる気もないし、あたえる能力もないということをいっそうはっきりと証明していた。ボリシェビキの解明の活動には有利な地盤があらわれてきた。

労働者、兵士がツァー政府を打ち倒し君主制の根を絶ちつつあるというのに、臨時政府ははっきりと君主制の維持にかたむいていた。一九一七年三月二日、臨時政府は、ひそかにグチコフとシュリギンをツァーのもと

に派遣した。ブルジョア階級は、権力をニコライ・ロマノフの弟ミハイルにうつすことを望んでいた。だが、鉄道従業員の集会で、グチコフが「ミハイル皇帝万歳」と叫んでその演説をむすんだとき、労働者たちは怒って「やつらはおなじ穴のむじなだ」と叫び、グチコフをただちに逮捕し、捜査することを要求した。

労働者が君主制の復活をゆるさないということはあきらかであった。

労働者、農民が、革命を実現し、血をながし、戦争の停止を期待し、パンと土地を手にいれようとつとめ、混乱とたたかうための断固とした処置を要求しているというのに、臨時政府は、人民のこれらの切実な要求にいっこう耳をかそうとしなかった。もっとも有名な資本家、地主の代表者からなるこの政府は、また土地を引き渡せという農民の要求をみたすことも、まったく考えもしなかった。同時に、また臨時政府は、勤労者にパンをあたえることもできなかった。というのは、そのためには、有力な穀物商人の利益をおかさなければならず、あらゆる手段で地主や富農から穀物をとりあげなければならなかったが、政府自体がこれらの階級の利益と結びついていたので、政府はそうすることをのぞんでいなかったからである。おなじように、臨時政府はまた平和をあたえることもできなかった。臨時政府は、イギリス、フランス帝国主義者と結託していて、戦争の停止など考えもしなかった。それどころか、逆に、ロシアをいっそう積極的に帝国主義戦争に参加させ、コンスタンティノープルと海峡の強奪、ガリシアの強奪という帝国主義的計画を実現するために、革命を利用しようとはかっていた。

臨時政府の政策を軽々しく信ずるという人民大衆の態度が、もうすぐ終わりをつげようとしていることは、あきらかであった。

二月革命後に形づくられた二重政権がもはやながつづきできないことがあきらかになっていった。なぜなら、事態の進展は、臨時政府にか、それともソビエトの手中にか、どちらか一方に権力が集中されることを要求していたからである。

たしかに、メンシェビキと社会革命党の協調政策は、なおまだ人民大衆のなかで支持されていた。まだ多くの労働者、とりわけ兵士と農民は、「もうすぐ憲法制定会議ができて、万事うまくいくだろう」と信じ、戦争がおこなわれているのは、強奪のためではなく、必要にせまられているため、つまり国家をまもるためだ、とおもっていた。レーニンは、こういう人びとを、善意ではあるが道をあやまった祖国防衛派とよんだ。当時、こういった人びとのあいだでは、社会革命党とメンシェビキの公約や説得の政策はまだ正しい政策とみなされていた。だがこういった公約や説得ではながくはもたないことはあきらかであった。事態の進展と臨時政府の行動は、社会革命党やメンシェビキの協調政策が引きのばしの政策、信じやすい人びとをだます政策であることを、日ごとにあばきだし、証明したからである。

臨時政府は、大衆の革命運動にたいし、かげで闘争する政策、革命に反対するための舞台裏での結託の政策だけを、いつもとっていたわけではない。臨時政府は、ときには、民主主義的自由にたいする公然たる攻撃に移ること、とりわけ兵士のあいだで「規律を回復」すること、「秩序をととのえる」こと、つまり、革命をブルジョア階級の必要とするわくのなかにとどめることをこころみた。だが、この方向で臨時政府がどんなに努力してみても、結局は失敗におわった。そして、人民大衆は、熱情をもって民主主義的自由、すなわち言論、出版、結社、集会、デモの自由を実現していた。労働者と兵士は、はじめてかちとった民主的権利をあますと

ころなく利用して、国の政治生活に積極的に参加し、そうすることで目前の情勢を認識、理解するとともに、今後の行動の方針をきめようと努力していた。

二月革命後、それまではもっとも困難なツァーリズムの条件下で非合法的に活動していたボリシェビキ党の諸組織は、地下から脱し、公然の政治的、組織的活動を開始した。当時、ボリシェビキ諸組織の人数は、四万ないし四万五千人にすぎなかった。だが、これは闘争のなかできたえぬかれた幹部だった。各級党委員会は民主・集中の原則によって再組織された。すべての党機関の下から上への選挙制が確立した。

党の合法的状態への移行は、党内の意見のくいちがいをあかるみにだした。カーメネフと、モスクワの組織の一部の活動家、たとえばルイコフ、ブブノフ、ノーギンらは臨時政府と祖国防衛派の政策を条件つきで支持するという、なかばメンシェビキ的立場をとっていた。スターリン——かれは流刑地からかえってきたばかりだった——、モロトフらは、党員の多数とともに臨時政府不信任の政策を堅持し、祖国防衛主義に反対するとともに、平和をたたかいとるための積極的な闘争、帝国主義戦争反対の闘争をすすめるよう呼びかけた。党内の一部の活動家は動揺したが、それはかれらのながいあいだの監禁、追放による政治的たちおくれを反映していた。

全党の指導者、レーニンがそのときいないことがくやまれた。

一九一七年四月三日（新暦四月十六日）、レーニンはながいあいだの亡命生活ののち、ついにロシアにもどってきた。

レーニンの到着は、党と革命にとってきわめて大きな意義をもっていた。

レーニンは、革命の第一報をうけとったとき、すぐスイスから『遠方からの手紙』をおくり、党とロシアの労働者階級にあててこう書いた。

「労働者諸君！　諸君はツァー制度に反対する国内戦争でプロレタリア階級的、人民的英雄主義の奇蹟をしめした。諸君はいま革命の第二段階における勝利を準備するために、プロレタリア階級的、全人民的組織の奇蹟をしめさなければならない。」（レーニン『遠方からの手紙』）

レーニンは四月三日夜、ペトログラードについた。フィンランド駅と駅まえ広場には、数千人の労働者、陸海軍の兵士が集まってレーニンをむかえた。レーニンが客車から降りたったとき、大衆の喜びは言葉ではとてもいいあらわせなかった。大衆は、自分たちの指導者レーニンを胴上げにしたまま駅の大ホールにつれていった。そこではメンシェビキのチヘイゼとスコベレフがペトログラード・ソビエトを代表して「歓迎」のあいさつをのべはじめた。かれらは、レーニンがかれらと「同一のことば」を見いだすことを「希望する」といった。だが、レーニンはかれらにとりあわず、そばをすどおりして労働者、兵士大衆のところにいき、装甲車のうえから、あの有名な演説をおこない、社会主義革命の勝利をかちとるための闘争を大衆に呼びかけた。「社会主義革命万歳！」――レーニンは、ながい亡命生活ののちのはじめての演説をこう結んだ。

ロシアに着いてから、レーニンは、全精力を革命の仕事にかたむけた。到着の翌日、レーニンはボリシェビキの集会で、戦争と革命についての報告をおこない、ついでボリシェビキのほかにメンシェビキも出席している集会で、その報告の大綱をかさねてのべた。

これが有名なレーニンの四月テーゼであり、このテーゼは党とプロレタリア階級に、ブルジョア革命から社

会主義革命へ移行する明確な革命的路線をあたえたのである。

レーニンのテーゼでは、革命にとって、党のその後の仕事にとって、巨大な意義をもつものであった。革命は国の全生活のなかでの最大の転換であり、だから、ツァー制度を倒したあとの、闘争のあらたな条件のもとで、大胆に確信をもってあたらしい道を前進するためには、あたらしい方向を定めることが党にとって必要であった。レーニンのテーゼは、党にそのような方向をさししめした。

レーニンの四月テーゼは、ブルジョア民主主義革命から社会主義革命への移行、革命の第一段階から第二段階、つまり社会主義革命の段階への移行のための、党の闘争の天才的な計画を規定した。党のこれまでの全歴史によって、党はこの偉大な任務遂行の準備をととのえていたのである。はやくも一九〇五年、レーニンは、『民主主義革命における社会民主党の二つの戦術』のなかで、ツァー制度を打ち倒したのち、プロレタリア階級は社会主義革命の実現に移行するであろうとのべた。テーゼのなかでのあたらしい点は、テーゼが、社会主義革命への移行に着手するため、理論に裏づけられた具体的な計画をあたえたことにある。

経済の分野では、移行の方策はつぎの諸点に要約された。地主の土地を没収してすべての土地を国有にすること、すべての銀行を併合してひとつの国立銀行とし、労働者代表ソビエトがこれを監督すること、社会の生産、生産物の分配にたいして監督すること、これらの点である。

政治の分野では、議会制共和国からソビエト共和国に移行することを、レーニンは主張した。これは、マルクス主義の理論と実践の面での重大な前進であった。これまでマルクス主義の理論家たちは、議会制共和国を、社会主義へ移行するためのもっともよい政治形態だとみなしてきた。いまやレーニンは、資本主義から社

会主義への過渡期における社会の政治組織のもっともよい形態としてのソビエト共和国をもって、議会制共和国におきかえることを主張したのである。

テーゼにはこうのべられている。「ロシアにおける現在の時点の特徴は、プロレタリア階級の自覚性と組織性が不十分であったためブルジョア階級の手に権力をあたえた革命の第一段階から、プロレタリア階級と農民のもっとも貧しい層に権力をあたえなければならない革命の第二段階への移行にある。」(レーニン『現在の革命におけるプロレタリア階級の任務について』)

さらにこう述べてある。

「議会制共和国ではなくて——労働者代表ソビエトから議会制共和国への復帰は一歩後退である——、全国にわたって下から上まで、労働者・雇農・農民の代表によって構成されるソビエトの共和国でなくてはならない。」(前掲書)

レーニンはこうのべている。戦争は、あたらしい臨時政府のもとでも、依然として、略奪的な、帝国主義的な戦争である。党の任務は、大衆にこの点を説明するとともに、脅迫的な講和によってではなく、ほんとうの民主的な講和によって戦争をおわらせようとするなら、ブルジョア階級をうちたおさなければだめだということを、大衆にはっきり指し示すことである。

臨時政府にたいする態度の問題でレーニンのだしたスローガンは、「臨時政府にいかなる支持もあたえるな！」であった。

つぎに、レーニンはテーゼのなかでこう指摘した。われわれの党はソビエトのなかでさしあたりまだ少数で

あり、そこで支配しているのは、プロレタリア階級のなかにブルジョア階級の影響をもちこんでいるメンシェビキと社会革命党の連合である。したがって、党の任務はつぎのとおりである。

「労働者代表ソビエトが革命政府のただ一つの可能な形態であるということ、したがって、この政府がまだブルジョア階級の影響のもとにあるかぎり、われわれの任務は、辛抱づよく、系統的に、根気よく、とりわけ大衆のじっさいの必要に合致したかたちで、かれらの戦術のあやまりを説明することのほかにはありえないということを、大衆に説明すること。われわれがまだ少数であるかぎり、われわれはあやまりの批判と解明という仕事を進め、同時に、すべての国家権力を労働者代表ソビエトにうつす必要があることを宣伝する。………」(前掲書)

このことは、レーニンが、その時点でソビエトの信任をかちえていた臨時政府にたいして蜂起するように呼びかけないで、この政府の打倒を主張しないで、説明活動と力を結集する活動とによってソビエトのなかで多数を獲得し、ソビエトの政策をかえさせ、ソビエトをつうじて政府の構成と政策をかえさせるように努力したことを意味する。

これは、革命の平和的発展をめざす方針であった。

さらに、レーニンは、「よごれたシャツ」を脱ぎすてること、つまり、「社会民主党」という名称をすてることを要求した。第二インターナショナルの諸党も、ロシアのメンシェビキも、社会民主党と自称していた。この名称は、日和見主義者によって、社会主義の裏切り者どもによって、けがされ、恥ずかしめられていた。レーニンは、マルクスとエンゲルスがその党に名づけたように、ボリシェビキ党を共産党と呼ぶことを提案し

た。ボリシェビキ党の終局の目的は共産主義の達成であるから、この名称は、科学的にいっても正しい。人類は、資本主義から直接には社会主義に移行しうるだけである。すなわち、生産手段の公有と、各人の労働に応じた生産物の分配に移行しうるだけである。レーニンはいっている。われわれの党は、もっと遠くをみとおしている。社会主義は、かならずやしだいに共産主義に転化していくにちがいないし、共産主義の旗のうえにかかれているのは、「各人は能力に応じて、各人にはその要求に応じて」である、と。

最後に、レーニンはそのテーゼのなかで、あたらしいインターナショナルの創設、日和見主義に汚染されない、社会排外主義に汚染されない第三の、共産主義インターナショナルの創設を主張した。

レーニンのテーゼは、ブルジョア階級、メンシェビキ、社会革命党のあいだに気違いじみた怒号をよびおこした。

メンシェビキは労働者にむかって、「革命は危険にひんしている」という警告ではじまる呼びかけをだした。いうところの危険とは、ボリシェビキが権力を労働者・兵士代表ソビエトへ移せという要求を提起したことにある、というのがメンシェビキの見解であった。

プレハーノフは、その新聞『エジンストボ』〔統一〕に一つの論文をかき、そのなかで、レーニンの演説を「たわごと」といった。プレハーノフは、「レーニンただ一人が革命のそとにとりのこされるだろうが、われわれはわれわれの道をあゆむだろう」といったメンシェビキのチヘイゼのことばを引用した。

四月十四日、ボリシェビキのペトログラード全市会議がひらかれた。会議はレーニンのテーゼに賛同し、それをその活動の基礎とした。

その後まもなく、党の各地方組織もまたレーニンのテーゼに賛同した。何人かの孤立した連中、たとえばカーメネフ、ルイコフ、ピャタコフらのたぐいをのぞけば、全党が、このうえない満足の念をもってレーニンのテーゼをうけいれた。

二、臨時政府の危機のはじまり　ボリシェビキ党の四月会議

ボリシェビキが、革命をひきつづきおしひろげる準備を進めていたとき、臨時政府は例によって反人民の仕事をつづけていた。四月十八日、臨時政府の外務大臣ミリュコフは、「全国民は世界戦争を決定的な勝利をおさめるまでおし進めることをのぞんでおり、臨時政府は、わが連合国にたいしておっている義務を完全にまもる決意である」と連合国に声明した。

こうして臨時政府は、ツァーの結んだ条約に忠誠をちかうとともに、「勝利の終結」のためなら、帝国主義が必要とするかぎりいくらでも人民の血をながさせることを請け合ったのである。

四月十九日、この声明（「ミリュコフの覚書」）を労働者や兵士たちが知った。四月二十日、ボリシェビキ党中央委員会は、臨時政府の帝国主義的政策に抗議するよう大衆に呼びかけた。一九一七年の四月二十日と二十一日（新暦五月三日、四日）、十万人以上の労働者・兵士の大衆が、「ミリュコフ覚書」にたいする憤激の念にかられて、デモをおこなった。旗にしるされたスローガンは、「秘密条約を公表せよ！」、「戦争を打倒せよ！」、

「全権力をソビエトへ！」であった。労働者と兵士は、市の周辺から中心へ、臨時政府の所在地へとむかった。ネフスキー通りやその他のところでは、ブルジョア階級のいくつかのグループとのあいだで衝突がおこった。

コルニーロフ将軍らのようなむきだしの反革命分子は、デモの大衆に発砲するように呼びかけ、そうするように命令さえくだした。だが、部隊はこのような命令をうけても、その遂行をこばんだ。

党のペトログラード委員会メンバーのうちの少数のグループ（バグダチェフら）は、デモのとき、臨時政府をすぐ打ち倒せというスローガンをかかげた。ボリシェビキ党中央委員会は、このスローガンはやまった、正しくないものであり、党がソビエトの多数を獲得するのを妨げ、革命の平和的発展をめざす党の方針とあいいれないものであるとみなし、このような「左翼」冒険主義者の行為をきびしく非難した。

四月二十日、二十一日の事態は、臨時政府の危機のはじまりを意味していた。

これは、メンシェビキと社会革命党の協調政策の最初の重大なひびわれであった。

一九一七年五月二日、大衆の圧力によって、臨時政府の成員のなかからミリュコフとグチコフがとりのぞかれた。

第一次連立臨時政府が成立し、そのなかには、ブルジョア階級の代表者のほかに、メンシェビキ（スコベレフ、ツェレテリ）と社会革命党（チェルノフ、ケレンスキー、その他）がくわわった。

こうして、メンシェビキは、一九〇五年には社会民主党の代表者が臨時革命政府にはいるのを否定しておきながら、いまでは、その代表者が臨時反革命政府にはいるのはゆるされる、としたのである。

これは、メンシェビキと社会革命党が反革命のブルジョア階級の陣営にころがりこんだことである。

一九一七年四月二十四日、ボリシェビキ第七回（四月）会議がひらかれた。これは、党が存在していらい最初に公然とひらかれたボリシェビキの会議であり、この会議は党史上、その重要性からいえば、党大会と同じ地位を占めている。

全ロシア四月会議は、わが党がひじょうな勢いで伸びているという事実をしめした。この会議には、議決権をもった百三十三人の代議員、審議権をもった十八人の代議員が参加した。かれらは組織された党員八万人を代表していた。

会議は、戦争と革命のすべての基本的問題についての党の路線を討議し、作成した。そのなかには、時局問題、戦争問題、臨時政府問題、ソビエト問題、農業問題、民族問題などがふくまれていた。

レーニンはその報告のなかで、かれがさきに四月テーゼのなかで提起した論点を発展させた。党の任務は、「……ブルジョア階級の手に権力をあたえた革命の第一段階から、プロレタリア階級と農民のもっとも貧しい層に権力をあたえなければならない革命の第二段階への」（レーニン）移行を実行することにあった。党は社会主義革命を準備する方針をとらなければならなかった。レーニンは、「全権力をソビエトへ！」のスローガンを提起し、それを党のもっとも切迫した任務とした。

「全権力をソビエトへ」というこのスローガンの意味は、二重政権、つまり、臨時政府とソビエトとの権力の分有をおわらせ、全権力をソビエトにわたし、地主と資本家の代表者を権力機関から追放しなければならない、ということであった。

会議は、党のもっとも重要な任務の一つがつぎの点にあることを承認した。すなわち、「臨時政府がその性格からして、地主とブルジョア階級の支配機関である」という真理を、大衆にうむことなく説明することであり、またうその約束で人民をあざむき、人民を帝国主義戦争と反革命の打撃のもとにさらしている社会革命党とメンシェビキの協調政策の危険性を暴露することである。

会議で、カーメネフとルイコフがレーニンに反対した。かれらは、メンシェビキの見解をくりかえし、ロシアは社会主義革命を実現するほどには成熟していない、ロシアではブルジョア共和国を実現するほかない、といった。かれらは、党と労働者階級は臨時政府を「監督」するだけにとどまるよう提案した。じっさいには、かれらもメンシェビキとおなじように、資本主義を維持し、ブルジョア階級の権力を維持する立場にたっていたのである。

ジノビエフも会議でレーニンに反対したが、それは、ボリシェビキ党はツィンメルワルド連合にとどまるべきか、それともこの連合と手を切り新しいインターナショナルを創設すべきか、という問題についてであった。戦争の数年がしめしたように、この連合は、平和のための宣伝はしたが、じっさいには、ブルジョア階級の祖国防衛派と手を切っていなかった。だから、レーニンは、この連合から即刻脱退して、新しい、共産主義インターナショナルを創立することを断固主張したのである。ジノビエフは、ツィンメルワルド派といっしょにとどまることを主張した。レーニンは、ジノビエフのこの意見を断固としてしりぞけ、ジノビエフの戦術は「もっとも日和見主義的な、有害な戦術」とよんだ。

同時に、四月会議はまた農業問題と民族問題をも討議した。

農業問題にかんするレーニンの報告にもとづいて、会議は、地主の土地を没収し、それを農民委員会の管理にうつすこと、国内のすべての土地を国有化することについての決議を採択した。ボリシェビキは、農民を土地闘争に呼びかけ、そして農民が地主を打倒するのを実際に援助するただ一つの革命政党はボリシェビキ党であることを、農民大衆に証明した。

民族問題についてのスターリン同志の報告は大きな意義をもっていた。レーニンとスターリンは革命以前に帝国主義戦争の前夜に、すでに、民族問題についてのボリシェビキ党の政策の基礎をつくりあげていた。レーニンとスターリンはしばしば、プロレタリア党は帝国主義に反対する被抑圧諸民族の民族解放運動を支援すべきであると説いた。したがって、ボリシェビキ党は、分立と独立国家の創建までをふくむ民族の自決権を主張し通した。中央委員会を代表して報告をおこなったスターリン同志が会議でまもったのは、まさにこの観点だった。

レーニン、スターリンに反対したのは、ピャタコフだった。ピャタコフは、戦争中も、ブハーリンといっしょになり、民族問題については民族排外主義の立場をとっていた。ピャタコフとブハーリンは民族自決権に反対した。

党が、民族問題で断固たる、首尾一貫した立場をとっていたため、また、民族的権利の完全な平等を実現し、あらゆる形の民族抑圧や民族的権利の不平等をなくすために努力奮闘したため、党はすべての被抑圧民族の共感と支持をえたのである。

つぎが、四月会議で採択された民族問題についての決議の正文である。

「民族抑圧の政策は、専制政治と君主制の遺産であって、この政策を地主、資本家、小ブルジョア階級が支持しているのは、かれらの階級的特権をまもり、各民族の労働者を分裂させるためである。現代帝国主義は、弱小民族を征服する傾向をつよめつつあり、民族抑圧をはげしくする新たな要因になっている。

資本主義社会においても民族抑圧をとりのぞくことができるとすれば、それは、すべての民族と言語の完全な同権を保証する、徹底して民主主義的な、共和制の国家機構と統治のもとでだけ、はじめて可能である。

ロシアを構成するすべての民族にたいし、自由に分立し、独立国家を創建する権利をみとめなければならない。このような権利を否定したり、このような権利が具体的に実現するのを保障する措置をとらないことは、強奪あるいは領土併合の政策を支持することにひとしい。プロレタリア階級が民族の分立権をみとめてはじめて、さまざまな民族の労働者の完全な団結が保証され、諸民族間のほんとうに民主主義的な接近が促進される。……

民族の自由分立権の問題と、あれこれの民族があれこれの時機に分立するのが妥当かどうかという問題とを、けっして混同してはならない。このあとの問題にたいして、プロレタリア階級の党は、一つひとつの場合について、社会発展の全体の利益および社会主義をめざすプロレタリア階級の階級闘争の利益をもとにし、まったく独自に解決しなければならない。

党は、広い地域的自治、上からの監督の廃止、国語強制の廃止を要求するとともに、経済的条件、生

活慣習的条件および住民の民族構成などについての地方住民自身の判断にもとづいて、自治行政地域および民族自治地域の境界を決定するよう要求する。

プロレタリア階級の党は、いわゆる「文化的民族的自治」、すなわち、学校事業などを国家の所管から除外し、これを一種の民族議会に移管することに断固反対する。文化的民族的自治は、ひとつの地方に住んでいる労働者を、ときには同じ企業ではたらいている労働者でさえも、どの「民族文化」にぞくしているかにしたがって人為的に区分する、つまり、それは、労働者と個々の民族のブルジョア文化とのつながりをつよめる。ところが、社会民主党の任務は、全世界のプロレタリア階級の国際的文化をつよめることにある。

党は、どれかひとつの民族がいかなる特権をもつことも、また少数民族の権利にたいするいかなる侵犯も、すべて無効なことを宣言する基本法規を、憲法にくわえることを要求する。

労働者階級の利益は、ロシアのすべての民族の労働者を統一されたプロレタリア階級の諸組織――政治的、労働組合的、協同組合的、教育的、その他の組織に融合させることを要求している。このように諸民族の労働者を統一された諸組織に融合させてはじめて、プロレタリア階級は、国際資本とブルジョア民族主義にたいして勝利の闘争をおこなうことができる。」(『ソ連共産党(ボ)決議集』、第一部)

こうして、四月会議において、カーメネフ、ジノビエフ、ピャタコフ、ブハーリン、ルイコフおよびその少数の同調者たちの、日和見主義的な、反レーニン的な路線が暴露されたのである。

会議は一致してレーニンの主張を擁護し、すべての重要問題においてはっきりした立場をとり、社会主義革

命の勝利にむかう路線をあゆんだ。

三、首都でのボリシェビキ党の成功　前線における臨時政府軍の攻撃の失敗　労働者、兵士の七月デモンストレーションの弾圧

四月会議の決定にもとづいて、党は、大衆を獲得し、戦闘的精神で大衆を教育し組織するための大々的な活動を展開した。この時期の党の路線は、辛抱づよくボリシェビキの政策を説明し、メンシェビキと社会革命党の協調性を暴露することによって、この両政党を大衆から孤立させ、ソビエトのなかで多数を獲得することにあった。

ソビエトでの活動のほかに、ボリシェビキは、労働組合や工場委員会においても大いに活動した。とりわけ、軍隊のなかでボリシェビキは大々的に活動した。いたるところに軍事組織ができあがりはじめた。ボリシェビキは前線でも後方でも陸海軍の兵士を、うまずたゆまず組織していった。ボリシェビキの前線新聞『アコープナヤ・プラウダ』〔塹壕のプラウダ〕は、兵士を革命化する仕事で、とりわけ大きな役割をはたした。

ボリシェビキのこの宣伝扇動活動の結果、革命の最初の数ヵ月のあいだに、多くの都市で労働者はソビエトを、とくに地区ソビエトを改選し、そこからメンシェビキと社会革命党を追い出し、その代わりにボリシェビ

キ党の支持者を選出した。
ボリシェビキの活動はすばらしい成果をあげた。とくにペトログラードではそうだった。一九一七年の五月三十日から六月三日まで、ペトログラード工場委員会会議がひらかれた。この会議に出席した代議員のうち四分の三がボリシェビキを支持した。ペトログラードのプロレタリア階級は、そのほとんどが、「全権力をソビエトへ！」というボリシェビキのスローガンを支持した。
一九一七年六月三日（新暦六月十六日）、第一回全ロシア・ソビエト大会がひらかれた。ボリシェビキは、まだ、ソビエトのなかで少数派であり、大会にはわずか百余名の代議員しかいなかったのに、メンシェビキと社会革命党およびその他の諸党派は七百—八百名もいた。
ボリシェビキは、第一回ソビエト大会で、ブルジョア階級との協調には危険性があることを暴露し、戦争の帝国主義的性質をあばきだした。レーニンは大会で発言し、その発言のなかで、ボリシェビキの路線が正しいことを証明するとともに、勤労者にパンをあたえ、農民に土地をあたえ、平和をかちとり、国を混乱からぬけ出させるものは、ソビエト権力をおいてほかにないとのべた。
このとき、ペトログラードの労働者地区では、大々的な扇動活動がおこなわれて、デモを組織し、ソビエト大会に種々の要求をだすよう呼びかけていた。ペトログラード・ソビエト執行委員会は、労働者の自発的デモを防ぎ、また、自分たちの目的のために大衆の革命的気分を利用しようとして、六月十八日（新暦七月一日）ペトログラードでデモをおこなうことをきめた。メンシェビキと社会革命党は、このデモが反ボリシェビキのスローガンのもとにおこなわれることを期待していた。ボリシェビキは強力にこのデモにたいする準備をはじ

めた。スターリン同志は当時、『プラウダ』にこうかいた。「……われわれの任務は、ペトログラードの六月十八日のデモがわれわれの革命的スローガンのもとでおこなわれるように努めることである。」

一九一七年六月十八日、革命犠牲者の墓前でおこなわれたデモは、ボリシェビキ党の力をしめすほんとうの閲兵式となった。このデモは、大衆の革命精神がますます高まっていること、ボリシェビキ党にたいする大衆の信頼がますます高まっていることをしめした。メンシェビキと社会革命党のだしたスローガン、すなわち、臨時政府を信頼せよとか、戦争はつづけなければならない、といったスローガンは、ボリシェビキのスローガンの大海原のなかに没しさった。四十万の参加者がかかげたデモの旗やのぼりにかかれたスローガンは、「戦争打倒！」「十人の資本家大臣打倒！」、「全権力をソビエトへ！」であった。

このデモは、メンシェビキと社会革命党の敗北と、臨時政府の首都での敗北をしめした。

だが、第一回ソビエト大会の支持をうけた臨時政府は、ひきつづき帝国主義的政策を遂行していくことをきめた。六月十八日というこの日に、臨時政府はイギリス・フランス帝国主義者の意志にしたがい、前線の兵士を攻撃にかり立てた。ブルジョア階級は、この攻撃が革命にけりをつける唯一の機会だとかんがえた。ブルジョア階級は、攻撃に成功した場合は、全権力を自分の手中にし、ソビエトをおしのけ、ボリシェビキをおしつぶそうともくろんだ。攻撃に失敗した場合でも、ボリシェビキにすべての罪をおわせ、軍隊崩壊の罪をボリシェビキにきせることができるだろう。

攻撃が失敗におわるであろうことは、うたがう余地はなかった。はたして、攻撃は失敗におわった。兵士が疲れきっていたこと、なぜ攻撃するかを兵士がまるで理解していなかったこと、かれらとは無縁な指揮官を兵

士が信頼していなかったこと、弾丸や大砲が不足していたこと——これらのすべてが、前線での攻撃の失敗をもたらした。

前線での攻撃、それにつづく攻撃の失敗のニュースは、首都をゆるがせた。労働者と兵士の怒りはとどまるところをしらなかった。もともと、臨時政府は、平和政策を唱えながら人民をだましていたのだ。もともと、臨時政府は、帝国主義戦争の継続を支持していたのだ。もともと、全ロシア・ソビエト中央執行委員会もペトログラード・ソビエトも、臨時政府の罪悪行為と対決することなど考えてもいなかったし、またできもせず、臨時政府のシッポについてのろのろ行くほかなかったのだ。

ペトログラードの労働者と兵士の革命的憤激は最頂点にたっした。七月三日（新暦七月十六日）ペトログラード市のブィボルグ地区で、自然発生的なデモがはじまった。このデモはまる一日つづいた。個々のデモはひろがって、権力をソビエトへ、というスローガンをかかげた、共同の壮大な武装デモとなった。ボリシェビキ党は、この時点で武装して立ち上がることには反対だった。というのは、革命的な危機はまだ熟しておらず、軍隊と地方は首都の蜂起をたすける用意がまだなかったし、首都での孤立無援の、そしてはやまった蜂起は、反革命勢力が革命の前衛を打ち破るのを容易にするだけだと考えたからである。だが当時大衆のデモをやめさせることができないのはあきらかになっていたので、党はデモに平和的な、組織的な性格を帯びさせるため、デモンストレーションに参加することを決定した。ボリシェビキ党はそれに成功した。こうして、何十万のデモ参加者はペトログラード・ソビエトと全ロシア・ソビエト中央執行委員会にむかってすすみ、ソビエトが権力をその手ににぎり、帝国主義的ブルジョア階級と手を切り、積極的な平和政策を実行することを要求した。

デモは平和的な性格をおびていたのに、政府はデモ参加者に対抗させるため反動的な部隊、すなわち士官学校生徒隊と将校部隊を出動させた。ペトログラードの大通りには、労働者と兵士の血がおびただしくながされた。労働者を粉砕するために、前線からもっとも無知な反革命の部隊がよびもどされた。

メンシェビキと社会革命党は、ブルジョア階級や白衛軍の将軍たちと結託して、労働者、兵士のデモを弾圧したあと、ボリシェビキ党に襲いかかった。『プラウダ』編集局の建物は破壊された。『プラウダ』『ソルダーツカヤ・プラウダ』〔兵士のプラウダ〕その他多くのボリシェビキの新聞が発行停止になった。労働者のボイノフは町で『リストーク・プラウドィ』〔小型版プラウダ〕を売っただけの理由で士官学校生徒にうちころされた。赤衛隊員の武装解除がはじまった。ペトログラード衛戍部隊のなかの革命的な部隊は首都から追い出され前線におくられた。後方でも前線でも逮捕がおこなわれた。七月七日にはレーニン逮捕の命令が発せられた。ボリシェビキ党の多くの重要な活動家が逮捕された。ボリシェビキの出版物を印刷する「トルード」〔労働〕印刷所が破壊された。ペトログラード裁判所検事の通達には、レーニンやその他多くのボリシェビキを、「反逆罪」をおかし武装蜂起を組織したかどで起訴すると述べられていた。レーニンにたいする告発は、スパイと挑発者の証言をもとにしてデニキン将軍の司令部においてでっちあげられたものである。

このようにして、ツェレテリとスコベレフ、ケレンスキーとチェルノフのようなメンシェビキや社会革命党の著名人たちがはいっていた連立臨時政府は、あからさまな帝国主義と反革命の泥沼にころがりこんでいった。臨時政府は、平和政策をとるのではなしに、戦争継続の政策を実施するにいたった。臨時政府は、人民の民主的権利を保護するのではなしに、これら権利を解消し、そして武力で労働者、兵士に制裁をくわえる政策

を実施するにいたった。

ブルジョア階級の代表者グチコフとミリュコフさえあえてしなかったようなことを、「社会主義者」のケレンスキーとツェレテリ、チェルノフとスコベレフがやってのけたのである。

二重政権は、終わりをつげた。

終わりをつげた結果は、ブルジョア階級にとって有利だった。なぜなら、全権力が臨時政府の手にうつり、社会革命党とメンシェビキの指導するソビエトは臨時政府の付属物になってしまったからである。

革命の平和的時期は終わりをつげた。なぜなら、日程にのぼってきたのは、銃剣であったからである。

情勢がかわったので、ボリシェビキ党はその戦術をかえることに決定した。党は地下にうつり、その指導者レーニンを地下ふかくもぐらせるとともに、武力でブルジョア階級の権力をうちたおし、ソビエト権力をうちたてるために、蜂起の準備にとりかかった。

四、ボリシェビキ党の武装蜂起準備の方針　第六回党大会

ブルジョア階級、小ブルジョア階級の出版物からの気ちがいじみた攻撃という状況のもとで、ボリシェビキ党はペトログラードで第六回大会をひらいた。この大会は、第五回ロンドン大会から十年後、そしてボリシェビキのプラーグ会議から五年後にひらかれたものである。大会は非合法にひらかれ、一九一七年七月二十六日

から八月三日までつづいた。新聞には、大会の召集が公表されただけで、大会の場所は明らかにされなかった。さいしょの何回かの会議はヴィボルグ方面でひらかれ、あとの何回かの会議はナルバ門付近のある学校の建物でひらかれた。ここにはいま文化宮殿がたっている。ブルジョア新聞は大会参加者の逮捕を要求した。刑事たちは足を棒にして飛びまわり大会の会場をみつけようとしたが、とうとうさがしだせなかった。

こうして、ツァー制度がうちたおされて五ヵ月後には、ボリシェビキは秘密に集会をもたなければならないことになり、そしてプロレタリア政党の指導者レーニンは、このときにはラズリフ駅のそばの掘立小屋に身をひそめていなければならなかったのである。

レーニンは、臨時政府の犬どもに追われていたので大会に出席できなかったが、地下から、ペトログラードにおけるその戦友や弟子のスターリン、スベルドロフ、モロトフ、オルジョニキッゼをつうじ、大会を指導した。

この大会に参加したのは、議決権をもつ百五十七人の代議員と、審議権をもつ百二十八人の代議員であった。当時の党員数はおよそ二十四万人であった。七月三日まで、つまり労働者のデモが壊滅するまで、ボリシェビキがまだ公然と活動していたころには、党は、あわせて四十一の機関紙をもち、そのうち二十九はロシア語で、十二はその他の言語ででていた。

ボリシェビキと労働者階級が七月事件でうけた弾圧は、われわれの党の影響力をよわめなかっただけでなく、逆に、それを増大させた。地方組織からの代議員は、ひじょうに多くの実例をあげて、労働者や兵士が大量にメンシェビキと社会革命党に見切りをつけ、かれらを「社会看守」と軽蔑してよんでいると説明した。メ

ンシェビキや社会革命党の党員であった労働者や兵士たちは、つぎつぎに自分の党員証をひきさき、いまいましげにその党からはなれ、ボリシェビキに入党を申入れた。

大会の基本問題は、中央委員会の政治報告と政治情勢の問題だった。これらの問題の報告にあたって、スターリン同志は、ブルジョア階級があらゆる方法で革命を弾圧しているにもかかわらず、革命は成長し発展していることを、きわめて明確に指摘した。スターリン同志は、革命が、生産および生産物の分配にたいする労働者の監督を実現する問題、土地を農民に引き渡す問題、権力をブルジョア階級の手から労働者階級、貧農の手に引き渡す問題を提起していることを指摘した。かれは、革命はその性質からいえば社会主義革命になりつつある、といった。

七月事件後は、国内の政治情勢が急激にかわってきた。二重政権はすでに消えさった。社会革命党とメンシェビキの指導するソビエトは、全権力をその手ににぎることを望まなかった。だから、ソビエトは権力のないものとなった。権力はすでにブルジョア階級の臨時政府の手に集中され、この政府はなおもひきつづき革命の武装解除をおこない、革命の組織をうちこわし、ボリシェビキ党を破壊した。革命の平和的発展の可能性は消失した。のこされた道は——スターリン同志はいった——ただ一つ、すなわち、臨時政府を打倒し、力づくで権力を奪取するしかない。だが、力づくで権力をうばいとることができるのは、貧農と同盟したプロレタリア階級をおいてほかにはない。

そのころなおメンシェビキと社会革命党に指導されていたソビエトは、すでにブルジョア階級の陣営に転落してしまっていたし、そして当面の情勢のもとでは、臨時政府の助手という役割をはたしうるだけだった。ス

ターリン同志はいった。七月事件ののちは、「全権力をソビエトへ」というスローガンは撤回されなければならない。だが、このスローガンを暫時撤回することは、ソビエト権力をかちとる闘争の放棄を意味するものではない。いまいわれているのは、革命闘争の機関としてのソビエトのことではなくて、メンシェビキや社会革命党に指導されている正にこのソビエトにほかならない、と。

スターリン同志はそのときこういった。「革命の平和の時期はもはやおわり、平和でない時期、格闘と爆発の時期が到来した。……」(『ロシア社会民主労働党（ボリシェビキ）第六回大会議事録』)

党は、武装蜂起にむかって前進した。

大会では、ブルジョア階級の影響を反映して、社会主義革命の方針に反対するものがあった。

トロツキストのプレオブラジェンスキーは、ロシアを社会主義の道に向けることができるのは、西ヨーロッパにプロレタリア階級の革命がおこったときだけだということを、権力奪取にかんする決議において指摘せよ、と提案した。

このとき立ち上がってこのトロツキスト的な提案に反対したのは、スターリン同志だった。

スターリン同志はこういった。「ほかならぬロシアが、社会主義の道をきりひらく国となることも大いにありうる……。われわれに道をさししめすことができるのはヨーロッパ以外にないという古くさい観念はすてるべきである。教条主義的なマルクス主義もあるし、創造的なマルクス主義もある。わたしが主張するのは、あとの方のマルクス主義である。」(前掲書)

トロツキスト的立場にたって、ブハーリンは、農民は祖国防衛主義的な気分をもっており、かれらはブルジ

ョア階級と同盟をむすんでいて、労働者階級のあとにはけっしてついていかないであろう、と断言した。スターリン同志は、ブハーリンのこの意見を反駁し、こう証明した。農民にもいろいろある。すなわち、富裕な農民は、帝国主義的ブルジョア階級を援助しているが、貧農は、労働者階級との連合をもとめるとともに、労働者階級を援助して革命の勝利をたたかいとろうとしている、と。

大会は、プレオブラジェンスキーとブハーリンのだした修正案を否決し、スターリン同志のだした決議案を承認した。

大会は、ボリシェビキの経済綱領を討議して、それを承認した。この綱領の基本的な要点は、地主の土地の没収、国内のすべての土地の国有化、銀行の国有化、大産業の国有化、労働者の生産および分配の監督、であった。

大会は、生産にたいする労働者の監督実現のためにたたかうことの意義を強調した。この監督は、大産業の国有化への移行にあたって、大きな役割をはたした。

第六回大会は、そのすべての決議のなかで、プロレタリア階級と貧農の同盟を社会主義革命の勝利の条件とみなすレーニンの命題を、とくに力をこめて強調した。

大会は、メンシェビキの労働組合中立論をしりぞけた。大会は、ロシアの労働者階級のになっている重大任務は、労働組合が終始ボリシェビキ党の政治的指導をみとめる戦闘的な階級組織である場合にのみ実現される、ことを指摘した。

大会は、『青年同盟について』の決議を採択した。青年同盟はその当時しばしば自発的につくられていた。

党は、その後の活動の結果、これらの青年組織を党の予備軍として党に結びつけていった。

大会は、レーニンの裁判所への出頭の問題を討議した。大会まえ、カーメネフ、ルイコフ、トロツキーらは、レーニンが反革命の裁判所に出頭すべきだといったが、スターリン同志は、レーニンの裁判所への出頭には断固反対していた。第六回大会もレーニンの裁判所への出頭に反対し、これは裁判などではなくて、私刑だとみなした。大会は、ブルジョア階級が追求しているのは、ただひとつ、レーニンをそのもっとも危険な敵として肉体的に抹殺することにほかならない、ということを疑わなかった。革命的なプロレタリア階級の指導者にたいするブルジョア警察の迫害に抗議するとともに、レーニンにあいさつのことばをおくった。

第六回大会は、あたらしい党規約を採択した。党規約では、党のすべての組織は民主集中制の原則にもとづいて建設されなければならない、ということがしめされていた。

その意味はつぎのとおりである。

(1)　上から下までのすべての指導機関は選挙されること。

(2)　党の諸機関は、定期的にその当該党組織に報告をおこなうこと。

(3)　党規律を厳格にし、少数は多数にしたがうこと。

(4)　下級機関および全党員は、上級機関の決議によって無条件に拘束されること。

党規約には、入党者は二名の党員の推薦にもとづき、党組織の総会で承認されたのち、地方党組織により入党がゆるされる、と規定された。

第六回大会は「中間派」〔メジライオネッツ派〕およびその指導者トロツキーの入党をゆるした。これは、一

九一三年いらいペトログラードに存在して、トロツキスト・メンシェビキや、党から離脱したもとボリシェビキの一部からなる、小さいグループであった。「中間派」は、戦争中は中道主義の組織であった。かれらはボリシェビキに反対してたたかったが、多くの点ではまたメンシェビキとも一致せず、だからかれらがとったのは、中間的、中道主義的、動揺的な立場であった。第六回党大会のときは、「中間派」はすべての点でボリシェビキの主張に同意するという声明をだし、入党を許可してほしいともとめてきた。大会は、ときがたてばかれらもほんとうのボリシェビキになるであろうことを期待して、そのもとめをかなえた。「中間派」のあるもの、たとえばボロダルスキー、ウリツキーらは、その後ほんとうにボリシェビキになった。トロツキーとその親しい一部の友人はどうかといえば、あとでわかったように、かれらの入党の目的は、党のためになる活動をすることではなくて、党を動揺させ、内部から党を爆破することであった。

第六回大会のすべての決議は、プロレタリア階級と貧農を武装蜂起のために準備することにむけられていた。第六回大会は、党を武装蜂起の目標と、社会主義革命の目標にむかわせた。

大会は、その発表した党宣言で、労働者、兵士、農民がブルジョア階級との決戦のために勢力を準備するよう呼びかけた。宣言の結びはつぎのとおりであった。

「われわれの戦友諸君、新しい戦闘のためにそなえよ！　挑発にのらず、堅忍、大胆、平静に力をたくわえ、戦闘隊形をつくれ！　プロレタリアと兵士諸君、わが党の旗のもとにあつまれ！　農村の被抑圧者諸君、われわれの旗のもとにあつまれ！」

五、コルニーロフ将軍の反革命陰謀　陰謀の壊滅　ペトログラードとモスクワのソビエトのボリシェビキ側への移行

全権力を奪いとったのちブルジョア階級は、無力化されたソビエトを破壊し、むきだしの反革命的独裁をうちたてる準備にとりかかった。億万長者のリャブシンスキーは、「飢えにやせほそった手や人民の貧困が、人民のニセの友である民主主義的ソビエトや各種の委員会の首をしめる」ことが、いまの状態からの出路だとみとめる、と不遜なことばを吐いた。戦線では野戦軍法会議と兵士にたいする死刑があれくるっていた。一九一七年八月三日、総司令官コルニーロフ将軍は、後方においても死刑を実施することを要求した。

八月十二日、ブルジョア階級と地主の勢力を動員するために臨時政府が召集した国家参議会が、モスクワの大劇場〔ボリショイ・テアトル〕でひらかれた。この参議会のおもな参加者は、地主、ブルジョア階級、将軍、将校、コサックの代表者たちであった。参議会でソビエトを代表したのはメンシェビキと社会革命党であった。

国家参議会開会の日、ボリシェビキは、抗議のためにモスクワで、多数の労働者の参加するゼネストを組織した。同時に、その他の多くの都市でもストライキがおこなわれた。

社会革命党のケレンスキーは、参議会で演説したさい、地主の土地を勝手にとりあげる農民のこころみをもふくめて、革命運動のすべてのこころみを、「鉄と血」の手段によって弾圧する、とほこらしげに威嚇した。

反革命のコルニーロフ将軍は、「委員会とソビエトを解散せよ」とあけすけに要求した。銀行家、商人、工場主たちが、あとからあとから大本営——総司令部はそのころそう呼ばれていた——につめかけ、コルニーロフ将軍に会って、金銭と援助を約束した。

「同盟国」、すなわちイギリス、フランス両国の代表もコルニーロフ将軍をおとずれ、ぐずぐずしないで革命をおさえる行動をとるよう要求した。

コルニーロフ将軍の反革命の陰謀がまもなくはじまろうとしていた。

コルニーロフの陰謀は公然と準備されていた。陰謀から人びとの注意をそらそうとして、陰謀者はデマをふりまき、ボリシェビキが革命の半周年記念日——八月二十七日にペトログラードで蜂起する準備にとりかかった、という噂をひろめた。ケレンスキーを首班とする臨時政府は、ボリシェビキに襲いかかり、プロレタリア階級の党にたいしテロをつよめた。同時に、コルニーロフ将軍は、軍隊を集めたが、それは軍隊をペトログラードにおくりソビエトを解散させるとともに、軍事独裁の政府をつくるためであった。

コルニーロフによるこの反革命の行動は、事前にケレンスキーと申しあわせてやったことだった。だが、コルニーロフが行動にでたちょうどそのとき、ケレンスキーはにわかに向きをかえ、その同盟者とたもとを分かつことを表明した。ケレンスキーがおそれたのは、もし自分のブルジョア政府がいますぐコルニーロフの反乱とたもとを分かたなければ、人民大衆はコルニーロフの反乱に反対して立ち上がり、これを粉砕したのち、ケレンスキーのブルジョア政府をもついでに一掃するだろう、ということだった。

八月二十五日、コルニーロフは、クルィモフ将軍の指揮する第三騎兵軍団をペトログラードに進撃させ、自

分は「祖国をすくう」つもりだと声明した。コルニーロフの暴動にこたえ、ボリシェビキ党中央委員会は、反革命勢力にたいし、積極的に武力で抵抗するよう労働者、兵士に呼びかけた。労働者はすぐに武装して抵抗にとりかかった。赤衛隊はこの数日で数倍にふえた。労働組合はその組合員を動員した。ペトログラードの革命的な軍隊も戦闘態勢をととのえた。ペトログラードのまわりには塹壕がほられ、鉄条網がはられ、引込線が撤去された。何千名の武装したクロンシュタットの水兵がペトログラード防衛にやってきた。ペトログラードに進撃しつつあった「野蛮師団」へは多くの代表が派遣され、コルニーロフの行動の意味をこの山国育ちの兵士たちに説明した。そのため、「野蛮師団」はペトログラードへの進撃を拒否した。同じようにその他のコルニーロフの部隊にも扇動のため人びとが派遣された。危険のあるところにはどこにも、コルニーロフの反乱とたたかう革命委員会および闘争本部が設けられた。

このとき、びっくり仰天した社会革命党とメンシェビキの指導者たちは、ケレンスキーをもふくめて、ボリシェビキに庇護をもとめてきた。というのは、首都においてコルニーロフを撃破できるただ一つの実際の勢力はボリシェビキだということを、かれらは認めていたからである。

だが、ボリシェビキは大衆を動員しコルニーロフの反乱をやっつけたときでも、ケレンスキー政府との闘争もやめはしなかった。ボリシェビキは、大衆のまえで、ケレンスキー政府を暴露し、メンシェビキと社会革命党を暴露し、かれらの政策のすべてが、客観的にはコルニーロフの反革命の陰謀を手だすけしていると説明した。

すべてこうした処置がとられた結果、コルニーロフの反乱はたたきつぶされた。クルィモフ将軍は自殺し

た。コルニーロフとその一味のデニキンとルコムスキーは逮捕された（もっとも、まもなくケレンスキーはかれらを釈放した）。

コルニーロフの反乱が壊滅したという事実は、革命と反革命とのあいだの力関係をはっきりとあかるみにだした。それは、将軍連中や立憲民主党からブルジョア階級のとりこになってしまったメンシェビキや社会革命党にいたるまでの反革命の陣営全体が、かならず破滅するであろうということを示した。人民大衆のなかでのかれらの影響力が、力に余る戦争をながびかせる政策、そして戦争がながびいたためにひきおこされた経済的破綻によって、根こそぎくつがえされたことは、あきらかとなった。

さらに、コルニーロフの反乱が壊滅したという事実は、ボリシェビキ党が、革命の決定的な勢力にまで成長し反革命のどんな陰謀をも撃破できる、ということをしめした。その当時、われわれの党はまだ権力をにぎった党ではなかったが、コルニーロフの反乱のときには、事実上、権力をにぎった勢力として行動した。なぜなら労働者、兵士は、すこしのためらいもなく党の指令を遂行したからである。

最後に、コルニーロフの反乱の壊滅という事実は、死んでしまったかのようにみえたソビエトが、実際にはもっとも大きな革命的抵抗力をひそめていたことをしめした。ほかでもなく、ソビエトおよびその革命委員会が、コルニーロフの軍隊の進路をはばみ、これらの軍隊の力をうちくじいたことは、うたがう余地もなかった。

コルニーロフの反乱にたいする闘争は、しおれかけていた労働者・兵士代表ソビエトを、ふるいたたせ、協調政策のくびきから解放し、革命闘争の大道にひきいれ、ボリシェビキ党の側に移行させた。

ボリシェビキの影響力は、ソビエトのなかでかつてないほど増大した。

ボリシェビキの影響力は、農村でもまた増大しはじめた。

コルニーロフの暴動は、地主や将軍連中が、ボリシェビキとソビエトを撃破すると、すぐに農民におそいかかってくるであろうということを、広範な農民にしめした。それで、広範な貧農大衆はますますしっかりとボリシェビキのまわりに結集してきた。中農についていえば、かれらは、一九一七年の四月から八月までの時期には動揺したため革命の発展をさまたげたが、コルニーロフが破滅したのちは、貧農大衆に呼応し、はっきりとボリシェビキ党の側にうつりはじめた。広範な農民大衆は、かれらを戦争から救い出すことができ、地主をうちやぶることができ、そして土地を農民にわたそうとしているのは、ボリシェビキをおいてほかにないということを、理解しはじめた。一九一七年の九月と十月に、農民による地主の土地とりあげ事件が大いにふえた。地主の土地をかってにたがやすことが、各地でみられるようになってきた。さとしても、懲罰隊をおくっても、革命にふるいたった農民を阻止することはできなかった。

革命の高まりがますます大きくなっていった。

ソビエトの活躍と刷新の時期、そしてソビエトのボリシェビキ化の時期がはじまった。工場と部隊はその代表の改選に着手し、ボリシェビキ党の代表が、メンシェビキや社会革命党にかわってソビエトに選出された。コルニーロフの反乱に勝利した翌日、すなわち八月三十一日には、ペトログラード・ソビエトは、ボリシェビキの政策を支持すると表明し、チヘイゼを長とするメンシェビキ、社会革命党のもとのペトログラード・ソビエト幹部会は辞職し、道をボリシェビキにゆずることをよぎなくされた。九月五日、モスクワ労働者代表ソビ

エトがボリシェビキの側にうつった。社会革命党とメンシェビキが牛耳っていたモスクワ・ソビエト幹部会も辞職してボリシェビキに道をゆずるほかなかった。

つまりこれは、蜂起の勝利に必要な基本的前提がすでに成熟したということである。

「全権力をソビエトへ」のスローガンがまたもや日程にのぼってきた。

しかしこれは、権力をメンシェビキと社会革命党の牛耳るソビエトにうつすという、かつてのスローガンではなかった。そうではなく、これは、臨時政府にたいするソビエトの蜂起をよびかけるスローガンであって、その目的は、国内の全権力をボリシェビキの指導するソビエトにうつすことにあった。

協調的な諸党のあいだにいざこざがはじまった。

社会革命党のなかでは、革命に共感する農民にせまられて、左翼、すなわち社会革命党「左派」があらわれ、ブルジョア階級との協調政策に不満の意をしめしはじめた。

メンシェビキのなかにも「左派」グループ、いわゆる「国際主義者」グループがあらわれ、ボリシェビキに近づきはじめた。

無政府主義者についていえば、かれらは、もともと影響力のほとんどない小グループだったが、いまや完全に分裂していくつかの小グループになり、あるものは社会のくずである窃盗犯や挑発分子と区別がつかなくなり、あるものは「思想的」強盗となり、もっぱら農民や都市の貧民を略奪し、労働者クラブからその部屋や貯金をまきあげ、あるものは公然と反革命陣営にうつり、ブルジョア階級の屋敷の隅で自分の一身の生活を立てた。かれらはみなすべての権力に反対であり、とりわけ労働者と農民の革命権力に反対だった。というのは、

かれらが人民を略奪し、民衆の財産をかすめとるのを、革命権力はけっしてゆるさないだろうことを、かれらははっきり知っていたからである。

コルニーロフの反乱が壊滅したのち、メンシェビキと社会革命党は、当時の日ましに増大する革命の高まりをよわめる、いまひとつの試みをおこなった。この目的のため、一九一七年九月十二日に、かれらは全ロシア民主主義会議をひらいた。そのなかには、社会主義諸党、協調派のソビエト、労働組合、地方自治会、商工界、部隊の代表者がいた。この会議によって予備議会（臨時共和国会議）がうまれた。協調派は、予備議会を利用して革命を阻止するとともに、国家を、ソビエト革命の道からブルジョア的立憲への道、すなわちブルジョア議会制への道に移そうとおもっていた。だがこれは、すでに破綻した政治家の、革命の車輪を逆転させようとする、絶望的なたくらみだった。このようなたくらみは、失敗するにきまっていたし、そして、実際に失敗におわった。労働者たちは、協調派のこのような議会ごっこをあざわらった。かれらは、予備議会を「銭湯の脱衣場」とよんでひやかした。

ボリシェビキ党中央委員会は予備議会のボイコットを決定した。もちろん、予備議会内の、カーメネフやテオドロビチのたぐいが巣くっていたボリシェビキ党代表団は、予備議会から出ていくことを欲しなかった。だが党中央委員会はかれらを強制的に予備議会から退去させた。

カーメネフとジノビエフは予備議会への参加を頑強に主張したが、その目的は、党を武装蜂起の準備から遠ざけるためだった。スターリン同志は、全ロシア民主主義会議のボリシェビキ党代表団のなかにあって、だんこ予備議会への参加に反対した。かれは、予備議会を「コルニーロフ反乱の流産児」とよんだ。

レーニンとスターリンは、たとえ短期間でも予備議会に参加することは重大なあやまりだ、と考えた。というのは、これに参加することは、予備議会が勤労者のために、実際になにごとかをしてくれるかのような幻想を、大衆のあいだにふりまくおそれがあったからである。

同時に、ボリシェビキは、第二回ソビエト大会の開催を根気よく準備し、その大会で多数を獲得しようと考えていた。全ロシア・ソビエト中央執行委員会に巣くうメンシェビキや社会革命党がいろいろ逃げをはったけれども、ボリシェビキ化したソビエトの圧力のもとで、第二回全ロシア・ソビエト大会は、一九一七年十月の後半にひらかれることにきまった。

六、ペトログラードの十月蜂起と臨時政府員の逮捕　第二回ソビエト大会とソビエト政府の成立　第二回ソビエト大会の平和法令と土地法令　社会主義革命の勝利　社会主義革命の勝利の原因

ボリシェビキは、蜂起の準備に力をいれた。レーニンは、すでに二つの首都——モスクワとペトログラード——の労働者・兵士代表ソビエトのなかで多数を獲得したので、ボリシェビキは国家権力をその手ににぎることができるし、またそうすべきであることを指摘した。レーニンは、いままでの歩みを総括するにあたって、

「人民の多数はわれわれを擁護している」と強調した。レーニンは、その論文および中央委員会とボリシェビキ諸組織にあてた手紙のなかで、蜂起の具体的な計画をさだめた。そのなかには、いかに部隊、艦隊、赤衛隊を利用すべきか、蜂起の勝利を確保するためにペトログラードの決定的な意義をもつ地点を奪取すべきか、などがさししめされていた。

十月七日、レーニンは、フィンランドからひそかにペトログラードに到着した。一九一七年十月十日、党中央委員会は歴史的意義のある会議をひらき、そこで、この数日中に武装蜂起を開始することを決定した。レーニンが起草した党中央委員会の歴史的な決議にはこういわれている。

「中央委員会はつぎのことを確認する。ロシア革命の国際的地位（ドイツ海軍における蜂起、これは全世界的な社会主義革命が全ヨーロッパにおいて成長していることのきわだったあらわれであること、つぎに、ロシア革命を絞殺する目的で帝国主義者たちが講和をむすぶおそれがあること）、その軍事的情勢（ロシアのブルジョア階級、ケレンスキーとその一味が疑いもなくペトログラードをドイツ軍にあけわたすことをきめていること）、プロレタリア党がすでにソビエトのなかで多数を獲得しているという事実——そのほかさらに、農民の蜂起や、人民の信頼がわれわれの党にうつったこと（モスクワの選挙）、最後に、第二のコルニーロフ反乱があきらかに準備されていること（これまでの軍隊のペトログラードからの転出、コサック軍隊のペトログラードへの転入、コサック軍隊のミンスク包囲など）——これらのすべては、武装蜂起を日程にのぼせている。

そこで、中央委員会は、武装蜂起がさけられないものであり、完全に熟していると認め、党のすべて

の組織がこれを基準とするとともに、この観点にたってすべての実際問題（北部州ソビエト大会、ペトログラードからの軍隊の移動、モスクワとミンスクの市民の立ち上がり、その他）を討議し解決するよう指令する。」（レーニン『ロシア社会民主労働党中央委員会会議〔武装蜂起についての決議〕』）

この歴史的意義ある決議の表決にさいし、反対演説をし反対投票した二名の中央委員がいた。それはカーメネフとジノビエフである。かれらもメンシェビキとおなじく、ブルジョア議会制の共和国を夢見ており、労働者階級には社会主義革命を実現するだけの力がなく、まだ権力を奪取するまでには成長していない、と労働者階級を中傷した。

トロツキーはこの会議で、決議に公然と反対投票することはしなかったが、かれは決議に修正をほどこすことを提案した。その修正がもし採択されたならば、結果として、武装蜂起は無に帰し失敗に終わったにちがいない。かれは、第二回ソビエト大会がひらかれるまでは蜂起を開始してはならないと提案したのである。これは実際には、蜂起の仕事をひきのばし、事前に蜂起の日どりをもらし、このことを臨時政府に予告することを意味した。

ボリシェビキ党中央委員会は、ドンバス、ウラル、ヘルシングフォルス、クロンシュタット、西南戦線およびその他の地方に、そこでの蜂起を組織するため、それぞれ全権をもつ代表を派遣した。ウォロシーロフ、モロトフ、ジェルジンスキー、オルジョニキッゼ、キーロフ、カガノビッチ、クイビシェフ、フルンゼ、ヤロスラフスキーおよびその他の同志は、党の特別の指令をうけその地方の蜂起を組織しにいった。当時、ウラルのシャドリンスクの軍隊では、ジダーノフ同志が活動をおこなっていた。中央委員会からの全権代表は、各地の

ボリシェビキ組織の指導者に蜂起の計画を説明するとともに、ペトログラードの蜂起をいつでも支援できるよう万全の用意をととのえさせた。

党中央委員会の指示によって、ペトログラード・ソビエトのもとに軍事革命委員会が成立し、のちそれが合法的な蜂起司令部となった。

同時に、反革命も、いそぎその勢力をかきあつめた。将校団は、反革命の「将校同盟」を組織した。いたるところで、反革命分子は、突撃大隊編成の本部をつくった。十月末には、反革命はすでに四十三の突撃大隊をもっていた。聖ゲオルギー勲章佩用者の突撃大隊も特別に組織された。

ケレンスキー政府は、政府をペトログラードからモスクワにうつす問題を提起した。これではっきりわかったように、政府は、ペトログラードの蜂起を未然にふせぐため、ペトログラードをドイツにひきわたす準備をしていたのである。だが、ペトログラードの労働者、兵士が抗議し、ついに臨時政府もペトログラードにとどまるほかなかった。

十月十六日、党中央委員会は拡大会議をひらいた。この会議でスターリン同志を長とする党の蜂起指導のための中央部が選出された。党中央部は、ペトログラード・ソビエト軍事革命委員会の指導的中核であり、事実上、蜂起のすべてを指導した。

この中央委員会の会議で、投降主義者のジノビエフとカーメネフがまたもや発言し蜂起に反対した。かれらは、反撃をうけるとすぐに出版物のうえで公然と蜂起に反対し、公然と党に反対した。十月十八日、メンシェビキの新聞『ノーバヤ・ジーズニ』〔新生活〕にカーメネフ、ジノビエフの声明が発表されたが、それには、

ボリシェビキが武装蜂起を準備していること、そしてかれらは蜂起を冒険と考えるということがのべられていた。こうして、カーメネフとジノビエフは、蜂起についての、近いうちに蜂起をおこなうことについての、中央委員会の決定を敵のまえでもらしたのである。これは裏切り行為であった。レーニンはこのことについてこうかいている。「カーメネフとジノビエフは、武装蜂起にかんする党中央委員会の決定をロジャンコとケレンスキーに引きわたした。」レーニンは、ジノビエフとカーメネフを党から除名する問題を中央委員会に提起した。

革命の敵は裏切り者から予告をうけたので、蜂起の防止と、革命の指導本部であるボリシェビキ党の撃破のための処置を、ただちにとりはじめた。臨時政府は秘密会議をひらき、その会議でボリシェビキとの闘争のしかたをきめた。十月十九日、臨時政府は、いそぎ前線から軍隊をペトログラードによびよせた。通りという通りには巡察隊が増強されはじめた。反革命は、モスクワでとくに大きな兵力をあつめることができた。臨時政府は、第二回ソビエト大会開催の前日に、ボリシェビキ中央委員会の所在地であるスモーリヌイを攻撃、占領するとともに、ボリシェビキの指導中核を撃破するという計画をたてていた。このために、政府は忠誠で頼りになるとおもわれる軍隊をペトログラードに集結させた。

だが、臨時政府の死期はもう目の前にあった。どんな勢力ももはや社会主義革命の勝利の進行を阻止することはできなかった。

十月二十一日、すべての革命的部隊に、ボリシェビキによって革命軍事委員会の政治委員が派遣された。蜂起まえの数日間、各部隊や各工場では、日夜激しい戦闘準備がおこなわれた。二隻の軍艦——巡洋艦「アウロ

ーラ」〔自由の朝やけ〕にも、一定の任務があたえられた。

トロツキーは、ペトログラード・ソビエトの会議で得意になって、蜂起の期日、すなわちボリシェビキが蜂起を開始することにきめた日時をもらしてしまった。ケレンスキー政府に武装蜂起を挫折させる機会をあたえないようにするため、党中央委員会は予定の日時より早く、すなわち第二回ソビエト大会開会の前日に蜂起を開始し、決行することをきめた。

十月二十四日（新暦十一月六日）の早朝、ケレンスキーは行動を開始し、ボリシェビキ党の中央機関紙『ラボーチイ・プチ』〔労働者の道〕の発行を停止し、同紙の編集局とボリシェビキの印刷所に装甲車を出動させる命令をだした。だが、午前十時、赤衛隊員と革命的兵士たちは、スターリン同志の指令によって装甲車を撃退するとともに『ラボーチイ・プチ』の印刷所と編集局の防衛措置を強化した。午前十一時、『ラボーチィ・プチ』が発行され、それには臨時政府の打倒が呼びかけられていた。それと同時に、党の蜂起中央部からだされた指令をもとに、革命的兵士と赤衛隊との部隊がスモーリヌイに集結した。

蜂起がはじまった。

十月二十四日夜、レーニンが、スモーリヌイにつき、蜂起の指導をみずからの手ににぎった。夜どおし革命的部隊と赤衛隊がスモーリヌイにやってきた。ボリシェビキはこれらの部隊を首都の中心部にさしむけ、臨時政府の巣くう冬宮を包囲させた。

十月二十五日（新暦十一月七日）、赤衛隊と革命的部隊は、各停車場、郵便局、電報局、政府の各省、国立銀行を占領した。

予備議会は解散された。

ペトログラード・ソビエトとボリシェビキ中央委員会がおかれていたスモーリヌイは、革命の戦闘司令部となり、ここから戦闘指令がだされた。

このとき、ペトログラードの労働者は、かれらがボリシェビキ党の指導のもとでみごとに鍛えられていることをしめした。ボリシェビキの活動によって蜂起を準備していた革命的部隊は、戦闘指令を的確に遂行し、赤衛隊と肩をならべてたたかった。海軍も陸軍におくれをとらなかった。クロンシュタットはボリシェビキ党のトリデとなり、ここではすでに早くから、臨時政府の権力はみとめられていなかった。巡洋艦「アウローラ」は、十月二十五日、冬宮にむけてうちこんだその砲声によって、十月二十五日が新しい紀元、すなわち、社会主義大革命の紀元の始まりであることをつげた。

十月二十五日（新暦十一月七日）、ボリシェビキの「ロシア公民へ」のよびかけが発表された。このよびかけには、ブルジョア階級の臨時政府がすでにくつがえされ、国家権力がソビエトの手に帰したことがのべられていた。

臨時政府は冬宮内に身をひそめ、士官学校生徒隊と突撃大隊によってまもられていた。十月二十五日から二十六日にいたる夜半、革命的な労働者、兵士、水兵が突撃によって冬宮を攻めおとし、臨時政府員を逮捕した。

ペトログラードの武装蜂起は勝利した。

一九一七年十月二十五日（新暦十一月七日）の夜十時四十五分、第二回全ロシア・ソビエト大会が、スモー

リヌイでひらかれた。そのとき、ペトログラードの蜂起の勝利はすでに最高潮にたっし、首都の権力は事実上、ペトログラード・ソビエトの手ににぎられていた。

ボリシェビキは大会で絶対多数を獲得した。メンシェビキ、ブンド派、社会革命党右派は、万事休すとみて、大会の活動に参加することを拒否する声明をだして、大会から退場した。かれらは、ソビエト大会で読みあげた声明のなかで、十月革命を「軍事的陰謀」と称した。大会は、メンシェビキと社会革命党を非難するとともに、裏切り者が退場したことによって大会は労働者、兵士代表の真に革命的な大会になったから、かれらの退場をおしむどころか、逆に歓迎する、と指摘した。

大会の名において、全権力がソビエトの手に帰したことが宣言された。

第二回ソビエト大会の宣言にはこうのべられていた。

「労働者、兵士、農民の大多数の意志にもとづき、労働者とペトログラード守備隊の勝利の蜂起にもとづき、本大会は権力をすでにこの手ににぎった。」

一九一七年十月二十六日（新暦十一月八日）の夜、第二回ソビエト大会は平和法令を採択した。大会は、講和交渉をおこなうため、すくなくとも三ヵ月間の停戦協定をただちにむすぶことを、各交戦国に提唱した。大会は、すべての交戦国の政府と人民にうったえると同時に、「人類の三つのもっとも先進的な民族であり、今次の戦争におけるもっとも大きな参戦国、すなわちイギリス、フランス、ドイツの自覚した労働者たち」にうったえた。大会は、これらの労働者にたいして「平和の事業、同時に勤労者、被搾取者の大衆をすべての奴隷状態とすべての搾取から解放する事業を、順調に完遂する」のをたすけるよう、よびかけた。

同じ夜、第二回ソビエト大会は、土地法令をも採択したが、それには、「地主の土地所有制はなんらの補償なしに即時廃止される」と規定してあった。この土地法令は、二百四十二の地方の農民の請願書にもとづいて作成された全農民の請願書を基礎としていた。この請願書にもとづいて、土地の私的所有の権利は永久に廃止され、土地の全人民的・国家的所有にかえられた。地主の土地、帝室の土地および修道院の土地は、すべての勤労者が無償で使用してよいことになった。

この法令にもとづき、農民は十月社会主義革命によって合計一億五千万デシャチン以上の新しい土地を手にいれたが、これらの土地は、これまで地主、ブルジョア階級、皇族、修道院、教会の手にあったものである。農民は、年々地主におさめる約五億金ルーブルの小作料を免除された。

すべての地下資源（石油、石炭、鉱石など）、森林、水域は、人民の所有にうつった。

最後に、第二回全ロシア・ソビエト大会において、最初のソビエト政府、すなわち人民委員会議が成立した。その委員は全部ボリシェビキであった。最初の人民委員会議の議長には、レーニンがえらばれた。

歴史的意義のある第二回ソビエト大会は、こうしておわった。

大会の代議員たちは、ペトログラードでのソビエトの勝利のニュースを広めるとともに、ソビエト権力が確実に全国に拡がるようにするため、各地にもどっていった。

すべての地方で権力が一挙にソビエトにうつったわけではなかった。ソビエト権力がペトログラードですでに確立されていたのに、モスクワではなお数日のあいだ頑強な、はげしい市街戦がつづいた。権力がモスクワ・ソビエトの手にうつるのをさまたげようとして、反革命のメンシェビキ、社会革命党は白衛隊員や士官学

校生徒といっしょになって、労働者、兵士にたいし武力闘争を開始した。数日たってやっと反乱者はうちやぶられ、モスクワにソビエト権力が確立された。

当のペトログラードおよびそのいくつかの地区でも、革命勝利後の最初の数日、ソビエト権力打倒のくわだてが反革命分子によってなされた。蜂起のときペトログラードから北部戦線にのがれていたケレンスキーは、一九一七年十一月十日、若干のコサック部隊をあつめるとともに、それをクラスノフ将軍に指揮させペトログラードに進軍させた。一九一七年十一月十一日、社会革命党を首領にいただく反革命組織「祖国・革命救済委員会」がペトログラードで士官学校生徒の反乱をおこした。だが、この反乱はたちまち粉砕された。わずか一日のうちに、十一月十一日の夕方までに、水兵と赤衛隊員が士官学校生徒の反乱を鎮圧してしまい、そして十一月十三日には、またプルコボ高地でクラスノフ将軍を殲滅した。レーニンは、十月蜂起のときとおなじように、反ソビエトの反乱撃滅をみずから指導した。かれの不屈の精神と勝利を確信する沈着な態度は、大衆を鼓舞し団結させた。敵は撃破された。クラスノフは捕虜となったのち、今後はソビエト権力に反対する闘争はやらない、と「誓い」をたてた。かれはこの「誓い」によって釈放された。だが、その後あきらかにされたようにクラスノフは、その将軍としての誓いをやぶった。ケレンスキーにいたっては、婦人服で変装し、「いずこへともしれず」姿をくらました。

当時、モギリョフにあった総司令部でも、ドゥホニン将軍が反乱を起こそうとたくらんだ。ソビエト政府がドゥホニンに、ただちにドイツ軍統帥部と休戦交渉を開始するよう指令したとき、かれは政府の指令を遂行することを拒否した。そこで、ソビエト権力はドゥホニンを罷免した。反革命的な総司令部は壊滅させられ、そ

のさいドゥホニンは、かれに反旗をひるがえした兵士たちによってうちころされた。
たれしらぬもののない党内の日和見主義者のカーメネフ、ジノビエフ、ルイコフ、シリャプニコフその他のものも、ソビエト権力への襲撃をはかろうとした。かれらは「同質のものばかりの社会主義政府」をつくり、十月革命によって打倒されたばかりのメンシェビキと社会革命党にも参加させることを要求した。一九一七年の十一月十五日、ボリシェビキ党中央委員会は、これら反革命政党と協調せよとの提案をしりぞける決議を採択し、そしてカーメネフとジノビエフを革命のストライキ破りとよんだ。十一月十七日、カーメネフ、ジノビエフ、ルイコフ、ミリューチンは、党の政策に同意できないとして、中央委員会から脱退することを声明した。同日、すなわち十一月十七日、ノーギンは、本人の名において、また、人民委員会議の委員ルイコフ、ベ・ミリューチン、テオドロビチ、ア・シリャプニコフ、デ・リャザノフ、ユレネフ、ラーリンの名において、党中央委員会の政策に同意できないこと、かれら全員が人民委員会議から脱退することを声明した。ひとにぎりの臆病者の逃亡は、十月革命の敵をすっかりよろこばさせた。ブルジョア階級全体とその手先たちはほくそえみ、ボリシェビズムが瓦解におちいったとわめきたて、ボリシェビキ党はかならず滅亡すると予言した。だが、このひとにぎりの脱走者どもは、いささかも党を動揺させることはできなかった。党中央委員会はかれらを、革命からの脱走者、ブルジョア階級の手先として軽蔑をこめて非難し、そしてすぐ正常の仕事にとりかかった。
社会革命党「左派」はどうかというと、かれらは、はっきりとボリシェビキに共鳴していた農民大衆のあいだに影響力をたもとうとして、ボリシェビキとはいざこざをおこさないで、当分はボリシェビキとの統一戦

線を維持することにきめた。一九一七年十一月にひらかれた農民ソビエト大会は、十月社会主義革命によって、かちえたすべての成果とソビエト権力のすべての法令を承認した。当時、ボリシェビキは、社会革命党「左派」と協定をむすび、何人かの社会革命党「左派」（コレガエフ、スピリドーノワ、プロシャン、シティンベルグ）を人民委員会の委員にした。だがこの協定は、ブレスト講和の調印と貧農委員会の成立のときまでつづいたにすぎなかった。そのころ農民のあいだで深刻な分化が生じ、そして社会革命党「左派」はますます富農の利益を反映して、ボリシェビキにたいし反乱をおこし、ソビエト権力に粉砕されてしまった。

一九一七年十月から一九一八年の一—二月にかけて、ソビエト革命は全国各地にひろがっていった。広大な国土においてソビエト権力がこのように急速に拡大したので、これをレーニンは、ソビエト権力の「凱旋行進」とよんだ。

十月社会主義大革命は勝利した。

社会主義革命がロシアにおいて、このように比較的たやすく勝利をかちえた種々の原因のうち、つぎのいくつかの主要原因を指摘しなければならない。

(1)　十月革命が相手にしたのは、ロシアのブルジョア階級という比較的弱い、組織的に不備で、政治的経験にも乏しい敵だった。ロシアのブルジョア階級は、まだ経済的には強固でなく、完全に政府の注文に依存していたので、また現状打開の道を発見するために必要な政治的な独立性も、十分な独創性ももっていなかった。たとえばフランスのブルジョア階級がもっているような、大がかりな政治的かけひきや政治的欺瞞の経験もなければ、また、たとえばイギリスのブルジョア階級がもっているような、大がかりなずるがしこい妥協の訓練

もうけていなかった。かれらは、ついきのうまでは二月革命で倒れたツァーとの妥協をのぞんでいたが、その後権力を手にいれると、すべての基本問題において、にくむべきツァーの政策をつづけていくほかにはなにひとつこれという方法をかんがえつくこともできなかった。かれらは、ツァーとおなじように、「勝つまでたたかう」ことを主張し、国がもうこれ以上たたかうには力がつきはてており、人民も軍隊も戦争で疲れはてているのを、かえりみようとはしなかった。かれらはまた、ツァーとおなじように、基本的には、土地の地主的所有制を維持することを主張し、農民が土地をもたず、地主の抑圧を受けて死ぬほどいためつけられているのを、かえりみようとはしなかった。労働者階級にたいする政策のうえでは、ロシアのブルジョア階級は、ツァー以上に労働者階級を敵視し、工場主の抑圧の維持、強化をはかったばかりでなく、大量のロック・アウトによってこのような抑圧をたえがたいものにしていた。

人民が、ツァーの政策とブルジョア階級の政策とのあいだに大きな差異はないと考えたのはもっともであり、だから人民は、ツァーへの憎しみを、ブルジョア階級の臨時政府にふりむけたのである。

社会革命党とメンシェビキという協調主義な党が人民のあいだでまだかなりの影響力をもっていたころは、ブルジョア階級はかれらのかげにかくれて権力を自分の手に保持することができた。ところが、メンシェビキと社会革命党が、帝国主義的ブルジョア階級の手先であることをさらけだしてしまい、そのため人民のあいだで影響力をうしなってしまってからは、ブルジョア階級とその臨時政府は、宙にういてしまったのである。

(2) 十月革命を指導したのは、ロシアの労働者階級という革命的な階級、すなわち、それは、戦闘のなかできたえられ、短期間に二つの革命をへ、そして第三次革命の前夜において、平和、土地、自由、社会主義のた

めの人民のたたかいにおける指導者としての威信を獲得していた階級であった。ロシアの労働者階級のような、人民に信頼される値うちのある革命の指導者がいなかったなら、労働者と農民の同盟もなかったであろうし、こういう同盟がなかったなら、十月革命が勝利をおさめることはできなかったであろう。

(3)　ロシアの労働者階級は、革命にさいして、農民人口の絶対多数をしめる貧農という重要な同盟者をもっていた。「通常」の発展の数十年の経験にもまったく匹敵するといってよいこの八ヵ月の革命の経験は、勤労農民大衆にとって、むだではなかった。この期間、かれらは、ロシアのすべての政党を実地にためすとともに、立憲民主党も、社会革命党も、メンシェビキも、農民のためにほんきで地主とたたかい、農民のために血をながすことはありえないということ、ロシアでは、地主とつながりがなく、そして地主を打倒して農民のもとめるものをみたそうと決意しているただ一つの党――それはボリシェビキをおいてほかにはない、ということを確信することができた。このような状況がプロレタリア階級と貧農の同盟の実際的な基礎になったのである。労働者階級と貧農との同盟という事実はまた、中農の行動をも決定した。中農は、十月蜂起の前夜になってやっと貧農に呼応し、ほんとうに革命の側にうつってきたが、それまではながいあいだ動揺していたのである。

このような同盟なしには、十月革命が勝利をかちとることはできなかったであろうことは、もとより証明を必要としない。

(4)　労働者階級を指導したのは、ボリシェビキ党という、政治闘争の試練をへた党であった。ボリシェビキ党のように、人民を決定的な突撃にみちびくに足るほど勇敢な、また目的への途上でありとあらゆる暗礁を避

けて通るに足るほど慎重な党、こういう党だけが、多種多様な革命運動、すなわち平和をかちとる一般民主運動、地主の土地を奪取する農民の民主運動、民族の権利平等をかちとる被圧迫民族の民族解放運動、およびブルジョア階級を倒し、プロレタリア階級の独裁を打ち立てるためのプロレタリア階級の社会主義運動を、たくみにひとつの共同の革命の奔流に合流させることができたのである。

このようなさまざまな革命運動の流れを全体として一つの、共同の、雄大、強力な革命の巨流に合流させたことが、ロシアにおける資本主義の運命を決定したということは、うたがいない。

(5) 十月革命は、帝国主義戦争がまだたけなわであり、主要なブルジョア国家が二つの敵対する陣営に分裂し、たがいに戦争に忙殺され、そしてたがいに弱めあっていたので、「ロシア問題」に真剣に干渉し、十月革命に積極的に反対の行動をとることができなかった時点で、開始されたのである。

このような状況が十月社会主義革命の勝利を著しくたやすくしたことは、うたがいない。

七、ソビエト権力をかためるためのボリシェビキ党の闘争　ブレスト講和　第七回党大会

ソビエト権力をかためるためには、旧来のブルジョア階級の国家機関を破壊、打破し、それを新しくうちたてられたソビエト国家機関にかえなければならなかった。つぎに、身分制度の残りかすと民族抑圧の制度を破

壊し、教会の特権をなくし、反革命の出版物およびあらゆる種類の、合法、非合法の反革命組織を駆逐し、ブルジョア階級の憲法制定議会を解散しなければならなかった。最後に、土地の国有を実施したのち、すべての大産業をも国有にし、そのあとで戦争状態から抜け出して、ソビエト権力をかためるのに最大のさまたげとなっていた戦争をおわらせなければならなかった。

すべてこれらの措置は、一九一七年末から一九一八年中の数ヵ月のあいだに実現された。

社会革命党とメンシェビキが組織した旧内閣各省の官吏のサボタージュはうちやぶられ、粛清された。旧来の各省は廃止され、それにかわってソビエトの管理機構とそれぞれの人民委員部があらたに設立された。全国の産業を管理するものとして国民経済最高委員会が設立された。反革命やサボタージュとの闘争のため全ロシア非常委員会がジェルジンスキーを責任者として組織された。赤色陸海軍を創設する法令が発布された。基本的には十月革命以前に選出され、そして第二回ソビエト大会で採択された平和法令、土地法令、および権力をソビエトにうつすことについての法令を認めなかった憲法制定議会が、解散された。

封建制の残りかす、身分制の残りかす、および社会生活の各方面における不平等な権利を一掃するために、身分制の廃止、民族的制限と信教の制限の根絶、教会と国家の分離、学校と教会の分離、婦人の同権、およびロシア国内の各民族の同権について、法令が発布された。

ソビエト政府が採択した「ロシア諸民族の権利の宣言」と題する特別決議のなかで、ロシアの各民族の自由な発展、そして各民族の完全な同権が、法律としてさだめられた。

ブルジョア階級の経済的力をうちやぶるため、そして新しいソビエトの国民経済を組織するため、まず第一

に新しいソビエト産業を組織するために、銀行、鉄道、対外貿易、商船隊およびすべての部門の大産業、すなわち石炭産業、冶金工業、石油産業、化学工業、機械製造業、繊維産業、製糖業などが国有にされた。

わが国を、財政上の依存と外国資本家の搾取から解放するために、ツァーや臨時政府が借りたすべてのロシアの外債が破棄された。わが国の諸民族は、略奪戦争をつづけるために借り、そしてわが国を外国資本の借金奴隷の状態におとしいれた負債を、支払うことは欲しなかった。

すべてこれらの処置や、これに似た処置をとった結果、ブルジョア階級、地主、反動的官僚、反革命的政党の力は根本からうちくだかれ、国内におけるソビエト権力の地位が著しくかたまった。

だが、ロシアはまだドイツ、オーストリアと交戦状態におかれていたので、ソビエト権力の地位はなお完全にかたまっているとはいえなかった。ソビエト権力を徹底的にかためるには、戦争をおわらせなければならなかった。だから、党は十月革命の勝利の当初から、平和をかちとる闘争を展開したのである。

ソビエト政府は、「すべての交戦国人民とその政府に、公正な民主的な講和についての交渉を即刻開始すること」を提案した。

だが、「同盟国」のイギリス、フランスは、ソビエト政府の提案をうけつけなかった。イギリス、フランス両国が講和交渉を拒否したため、ソビエト政府はソビエトの意思を履行して、ドイツとオーストリアとの交渉をはじめることにきめた。

交渉は十二月三日、ブレスト・リトフスクではじまった。十二月五日、休戦協定、つまり軍事行動を一時停止する協定が締結された。

この交渉は、国民経済が破壊をこうむり、だれもが戦争につかれはて、わが国の軍隊が前線から撤退し、前線は崩壊におちいっているという状況のもとでおこなわれた。交渉にあたってはっきりしてきたことだが、ドイツの帝国主義者は、旧ツァー帝国の広大な領土をうばいとろうと努め、ポーランド、ウクライナ、バルト沿海諸国をドイツの従属国にしようとしていた。

当時の条件のもとで戦争をつづけることは、生まれたばかりのソビエト共和国の生命を賭けることにほかならなかった。そこで、労働者階級と農民は、苛酷な講和条件をうけいれ、当時のもっとも危険な強盗ドイツ帝国主義の目のまえで退却し、それによって息つぎのときをかせぎ、ソビエト権力をかためるとともに、敵の襲撃から祖国を防衛することのできる新しい軍隊、赤軍を創設しなければならなかった。

すべての反革命分子は、メンシェビキ、社会革命党からもっとも札付きの白衛派にいたるまで、講和の締結に反対する気違いじみた扇動をおこなった。かれらの路線はきわめてはっきりしていた。かれらは、講和交渉をぶちこわし、ドイツ軍の攻撃を挑発し、まだ強国ではないソビエト権力に打撃をこうむらせ、労働者、農民のかちえた成果に脅威をあたえることを望んでいた。

かれらと結託してこのけがらわしい仕事をやっていたのがトロツキーとその助手ブハーリンであり、当時ブハーリンは、ラデックやピャタコフといっしょに反党集団を指導していた。この反党集団は自分たちを偽装するため、「左派共産主義者」集団と自称していた。トロツキーと「左派共産主義者」集団は、党内においてレーニンに反対する猛烈な闘争をおこない、戦争の継続を要求した。これらの連中は、あきらかにドイツ帝国主義者と国内の反革命分子を手助けしていた。なぜなら、かれらは、生まれたばかりで、まだ軍隊をもたないソ

ビエト共和国を、ドイツ帝国主義の打撃のもとにさらそうとはかっていたからである。

これは、左翼的なことばでたくみに偽装した一種のスパイ的な挑発政策であった。

一九一八年二月十日、ブレスト・リトフスクでおこなわれていた講和交渉は中断した。レーニンとスターリンは党中央委員会を代表し講和の締結を主張したが、ブレスト講和会議に出席していたソビエト代表団の団長であるトロツキーは、ボリシェビキ党を裏切り、その直接の訓令にそむいた。かれは、ソビエト共和国はドイツの要求する条件のもとで講和を締結することを拒否すると声明し、また、ドイツ側に、ソビエト共和国は戦争をおこなわないでひきつづき軍隊の復員を実行すると告げた。

これは実に驚くべき行為だった。ドイツ帝国主義者も当時ソビエト国家の利益の裏切り者に、これ以上の要求はだしようがなかった。

ドイツ政府は休戦を中断して攻撃に転じた。わが国の旧軍隊の残存部隊はドイツ軍の重圧に抗しきれず潰走しはじめた。ドイツ軍は迅速に進撃し、広大な地区を占領し、ペトログラードを脅やかしつつあった。ドイツ帝国主義のソビエト国土への侵入の目的は、ソビエト権力をくつがえし、そしてわれわれの祖国をその植民地にしてしまうことであった。崩壊におちいったツァーの旧軍隊は、ドイツ帝国主義の武装した大部隊には抗しきれなかった。それは、ドイツ軍の打撃のもとで潰走した。

だが、ドイツ帝国主義者の武力干渉は、わが国に強大な革命の高まりをひきおこした。労働者階級は、党とソビエト政府の「社会主義の祖国は危機にひんす」というよびかけにこたえ、赤軍部隊の編成をいそいだ。年若い新しい軍隊――革命人民の軍隊の隊伍は、完全に武装したドイツの強盗どもの攻撃を英雄的に撃退した。

ドイツ侵略者はナルバとプスコフにおいて、頑強な反撃にあった。かれらのペトログラードへの進撃は阻止された。ドイツ帝国主義の軍隊に反撃をくわえたその日、すなわち二月二十三日が、年若い赤軍の誕生日となった。

すでに一九一八年二月十八日、党中央委員会は、即時講和をむすぶことについてドイツ政府に打電すべきだというレーニンの提案を承認していた。ドイツ軍は、より有利な講和の条件を確保するため、攻撃をつづけ、そして二月二十二日になってようやくドイツ政府は、講和の締結に同意するむね表明した。だが、このときの講和の条件は最初の条件よりずっと苛酷なものであった。

レーニン、スターリン、スベルドロフは、講和締結の決定にこぎつけるため、党中央委員会内でトロツキー、ブハーリン、その他のトロツキストときわめてはげしくたたかわなければならなかった。レーニンはこう指摘した。ブハーリンとトロツキーは、「実際にはドイツ帝国主義者を手助けするとともに、ドイツ革命の成長、発展を妨害した。」（レーニン『重大な教訓と重大な責任』）

二月二十三日、中央委員会は、ドイツ軍司令部からだされた条件をうけいれ、講和条約に調印することを決定した。トロツキーとブハーリンの裏切り行為はソビエト共和国に重大な損失をあたえた。ポーランドはいうにおよばず、ラトビア、エストニアはドイツに割譲され、ウクライナはソビエト共和国から切りはなされてドイツの属国（従属国）にかえられた。ソビエト共和国はドイツに賠償金を支払う義務を負わされた。

だが、「左派共産主義者」はひきつづきレーニンにたいする闘争をすすめ、そのつど、ますます裏切りの深みにはまっていった。

党のモスクワ州ビューローは一時「左派共産主義者」（ブハーリン、オシンスキー、ヤコブレワ、ストゥーコフ、マンツェフ）に占拠されていたので、分裂主義的な決議を採択し、中央委員会の不信任を表明するとともに、「近いうちに党が分裂するのはさけがたい」と考える、と声明した。この決議において、「左派共産主義者」は、こともあろうに反ソビエト的な決定さえおこない、この決定のなかで「国際革命のためには、われわれが、いまや純然たる形式的なものになりつつあるソビエト権力をうしなうようなことがあっても、それは妥当である」といった。

レーニンは、この決議を「奇怪きわまるもの」とよんだ。

当時、党はまだトロツキーや「左派共産主義者」のこうした反党行為のほんとうの原因をしってはいなかった。だが、さきごろ反ソビエト的な「右派とトロツキストとの同盟」の裁判をおこなったさい（一九三八年の初め）はじめて確認されたことだが、ブハーリンおよびかれの指導する「左派共産主義者」集団は、当時トロツキーおよび社会革命党「左派」といっしょにソビエト政府にたいする秘密の陰謀を組織していたのである。ブハーリン、トロツキーおよびその陰謀の仲間たちは、ブレスト講和条約をぶちこわし、レーニン、スターリン、スベルドロフを逮捕し殺害して、ブハーリン派、トロツキスト、社会革命党「左派」からなる新政府を組織することをもくろんでいたのであった。

「左派共産主義者」集団は、一方では秘密の反革命陰謀を組織するとともに、他方ではトロツキーの協力のもとで公然とボリシェビキに攻撃をかけ、党の分裂と党の隊伍の瓦解につとめた。だが、党はこの重大な瀬戸ぎわでも、レーニン、スターリン、スベルドロフのまわりにしっかり結集した。党は平和の問題でも、その他

のすべての問題のばあいとおなじように、中央委員会を支持した。

「左派共産主義者」集団は、孤立におちいり、粉砕された。

講和の問題を最終的に解決するために、第七回党大会がひらかれた。

第七回党大会は一九一八年三月六日に開幕した。これは、わが党が権力をにぎってのちにひらいた最初の大会であった。この大会には議決権をもつ四十六人の代議員と、審議権をもつ五十八人の代議員が出席した。この大会は十四万五千人の党員を代表していた。だが、実際には当時党員の総数は少なくとも二十七万人はあった。このようなひらきができたのは、この大会が緊急の性質をもっていたため、多くの組織は代議員を送るのがまにあわず、また、ドイツ軍に一時占領されていた各地区の組織は、代議員を派遣することができなかったからである。

レーニンは、この大会で、ブレスト講和の問題について報告し、こうのべた。「……われわれの党内に左翼反対派が形成されたことにともなって党がぶつかったこの重大な危機は、ロシア革命が遭遇した最大の危機の一つである。」（レーニン『戦争と講和についての報告』）

ブレスト講和についてのレーニンの決議案は、賛成三十票、反対十二票、棄権四票で採択された。

決議が採択された翌日、レーニンは『不幸な講和』のなかでこうかいている。

「講和の条件は苛酷であり、たえがたいものである。だが、歴史は結局はうまくいくであろう。……われわれの仕事は、一にも組織、二にも組織、三にも組織だ。どんな苦労があろうとも、未来はわれわれのものである。」（前掲書）

大会の決議にはこう指摘されている。ソビエト共和国にたいする帝国主義国家の軍事行動はこんごもさけがたいこと、だから大会は、もっとも精力的な、もっとも断固たる方法により、労働者、農民の自制と規律の精神をたかめ、大衆が献身的に社会主義祖国をまもるよう準備し、赤軍を組織し、全人民の普遍的な軍事訓練を実行することが、党の基本任務である、と考える。

大会は、ブレスト講和の問題におけるレーニンの路線の正しさを確認し、トロッキーとブハーリンの立場を非難し、すでに敗北した「左派共産主義者」がこの大会でひきつづき分裂行動をおこなったことを非難した。

ブレスト講和の締結によって、党はソビエト権力をかためるため、全国の経済をととのえるため、ときをかせぐことが可能になった。

講和の締結によって、帝国主義陣営内の衝突(ドイツ、オーストリアはひきつづき連合国と戦争をおこなっていた)を利用して、敵の勢力を分解させ、ソビエト経済を組織し、赤軍を創建することが可能になった。

講和の締結によって、プロレタリア階級は、農民にたいするその指導を確保し、そして国内戦争の時期に白軍の将軍たちをうち破れるだけの力をたくわえることが可能になった。

十月革命の時期、レーニンは、攻撃にとって必要な条件がそなわっているときには、いかに大胆に断固として攻撃をしなければならないかを、ボリシェビキ党におしえた。ブレスト講和の時期、レーニンは、敵の力があきらかにわが方の力にまさっているときには、最大の努力をもって敵にたいするあらたな攻撃を準備するため、いかに秩序よく退却しなければならないかを、党におしえた。

歴史は、レーニンの路線がまったく正しかったことを証明した。

第七回大会は、党名を変更し党綱領を変更する決議を採択した。このときから、党はロシア共産党（ボリシェビキ）とよばれるようになった。レーニンがわが党を共産党とよぶことを提案したのは、この名称が党のさだめた共産主義の実現という目的にぴったり合致しているからだった。

新しい綱領をきめるため、レーニン、スターリンらによって構成される特別委員会が選出され、そして、レーニンが作成した草案が党綱領の基礎として採用された。

こうして、第七回大会は歴史的意義のある大きな事業をはたした。大会は、党にひそんでいた敵、「左派共産主義者」とトロツキストを撃破し、帝国主義戦争から脱出し、平和、すなわち息つぎの時期をかちとり、党に赤軍を組織するときをかせがせ、党にたいし国民経済のなかに社会主義の秩序をうちたてる任務をあたえた。

八、社会主義建設に着手するレーニンの計画　貧農委員会と富農の抑制　社会革命党「左派」の反乱とその消滅　第五回ソビエト大会およびロシア・ソビエト連邦社会主義共和国憲法の採択

ソビエト権力は、すでに講和を締結し、息つぎのときをえたので、社会主義建設の展開にとりかかった。一九一七年十一月から一九一八年二月までの時期を、レーニンは、「資本にたいする赤軍の攻撃」の時期とよんだ。ソビエト権力は一九一八年上半期には、ブルジョア階級の経済的力をうちやぶり、国民経済の重要部門

（工場、銀行、鉄道、対外貿易、商船隊など）をその手に集中し、ブルジョア階級の国家権力機構をうちやぶり、ソビエト権力をくつがえそうとする反革命の最初の何回かの企てを、勝利のうちに消滅させた。

だが、これではまだまだ不十分だった。ひきつづき前進するには、旧制度の破壊から新しい制度の建設にうつらなければならなかった。そこで、一九一八年の春に、社会主義建設の新しい段階への移行——「収奪者を収奪することから」、すでにかちとった勝利を組織的にかためることへ、ソビエト国民経済を建設することへの移行がはじまった。レーニンは、社会主義経済の基礎の建設にとりかかるためには、息つぎの時間を最大限に利用する必要があると考えた。ボリシェビキは、新しい方式で生産を組織し管理することを学びとらなければならなかった。ボリシェビキ党はすでにロシアを説得したし、ボリシェビキ党はすでにロシアを金持の手から奪いとって人民にひきわたした、とレーニンはかいたが、いまやレーニンは、ボリシェビキ党はロシアを管理することを学びとらなければならないと、かたったのである。

レーニンは、この段階における主要な任務は、国民経済で生産されるものを登録するとともに、すべての生産物の使用を監督することだ、とかんがえた。当時ロシアの経済では、小ブルジョア的要素が優勢であった。都市と農村の何百万、何千万もの小経営者は、資本主義の成長の基盤だった。これらの小経営者は、労働規律も、全国家的規律もみとめなかった。かれらは、いかなる登録にも、監督にもしたがわなかった。この困難な瀬戸ぎわにおいて、とくに危険だったのは、小ブルジョア階級の投機と小あきないの衝動であり、小経営者、小商人が人民の困窮につけこんでひともうけしようとする意図であった。

そこで党は、生産のたるみと、工業の面での労働規律欠如の現象をとりのぞくため精力的にたたかった。大

衆が新しい労働習慣を身につけるためには、時間がかかった。それで、労働規律のためにたたかうことが、この時期の中心任務となった。

レーニンは、工業においては社会主義競争を展開し、出来高払いの賃金制を実施し、賃金の均等化に反対すべきこと、国家から少しでも多くとろうとし、ぶらぶら怠けていて投機をやっているものにたいしては、説得という教育的な方法をとる以外になお、強制の方法もとらなければならない、と指示した。レーニンは、新しい規律、すなわち労働の規律、同志的関係の規律、ソビエト的な規律は、何百万、何千万の勤労者の日々の実際の活動のなかでつちかわれるものだ、と考えた。かれはこう指摘した。「これらのことには、歴史上の一時代を必要とするだろう。」（レーニン『国民経済会議第一回大会における演説』）

これらすべての社会主義建設の問題、新しい、社会主義の生産関係をうちたてる問題は、レーニンによってその名著『ソビエト権力の当面の任務』のなかで解明されている。

「左派共産主義者」は、これらの問題においても、社会革命党やメンシェビキといっしょになって、レーニン反対の闘争をおこなった。ブハーリンやオシンスキー、その他は、規律をつちかうことに反対し、企業での単独責任制の実施に反対し、工業のなかで専門家を利用することに反対し、独立採算制の実施に反対した。かれらは、このような政策をとることは資本主義制度に復帰することだといって、レーニンをそしった。同時に、「左派共産主義者」はまた、ロシアでは社会主義建設と社会主義の勝利は不可能であるというトロツキーの観点を宣伝した。

「左派共産主義」は口では「左翼的」なことをいいながら、そのかげでは規律に反対し、経済生活の国家的

調整に敵対し、登録や監督に反対する富農、怠けもの、投機商人を保護したのである。

党は、新しいソビエトの工業を組織する問題を解決したのち、農村問題の解決に着手した。当時、農村においては、貧農の富農との闘争がまきおこっていた。富農は勢力を結集し、地主からとりあげた土地をかすめとっていた。貧農には援助が必要だった。富農はプロレタリア階級の国家に反対し、穀物を公定価格で国家に売りわたすことをこばんだ。そして、飢餓を利用して、かれらは、ソビエト国家を脅迫し社会主義的施策をやめさせようとした。党は、反革命的な富農を粉砕する任務を提起した。貧農を組織するために、そして余剰穀物を占有していた富農とたたかうために、労働者の農村への遠征が組織された。

レーニンはその当時こうかいた。「労働者の同志諸君！　革命が危急の状況にあることを銘記されたい。革命をすくいうるのは諸君をおいてほかに誰もいないことを銘記されたい。何万のよりすぐった、先進的な、社会主義に忠実な労働者、わいろをとらず略奪をせず、富農、投機商人、暴利商人、収賄者、攪乱者とたたかうにあたって鉄のような力のだせる労働者を、いままさに必要としているのである。」

（レーニン『ピーテルの労働者にあてた電報の下書き』）

「穀物のための闘争は、社会主義のための闘争である」と、レーニンは当時そういった。このスローガンのもとに労働者の農村への遠征が組織された。そのころ、食糧独裁制を規定するとともに、公定価格による食糧買上げの非常権限を食糧人民委員部の機関にあたえるいくつかの法令が公布された。

一九一八年六月十一日の法令により貧農委員会（コムベード）が創設された。貧農委員会は、富農との闘争で、没収した土地を再分配し農具を分配するうえで、富農のもっている余剰食糧を調達するうえで、労働者の

中心地域と赤軍に食糧を供給するうえで、巨大な役割をはたした。富農が占有していた五千万ヘクタールの土地が貧農、中農の手にうつった。富農のもっていたおびただしい生産手段が没収され貧農のものとなった。

貧農委員会の組織は、農村での社会主義革命の展開におけるいちだんとすすんだ段階であった。貧農委員会は、プロレタリア階級独裁の農村での拠点であった。農民のうちから赤軍の要員を編成する仕事は、その著しい部分が貧農委員会をつうじて行なわれた。

プロレタリアの農村への遠征と貧農委員会の組織は、農村でソビエト権力をかためるとともに、中農をソビエト権力の側にひきよせるうえで、大きな政治的意義をもっていた。

一九一八年のすえ、貧農委員会は、その任務をまっとうして解消され、農村のソビエトと合体した。

一九一八年七月四日、第五回ソビエト大会がひらかれた。この大会で、社会革命党「左派」は富農を擁護してレーニンにたいする猛烈な闘争を展開した。かれらは、富農にたいする闘争をやめることと、労働者食糧徴収隊の農村への派遣をやめるよう要求した。社会革命党「左派」は、かれらの路線が大会の多数から断固反対されるのをみると、モスクワで反乱をおこし、トリョフスバチーチェリスキー小路を占領し、そこからクレムリンを砲撃しはじめた。だがボリシェビキは数時間のうちに、社会革命党「左派」のこの冒険行為を鎮圧した。国内のその他のいくつかの地点でも社会革命党「左派」の地方組織が反乱をおこそうとしたが、このような冒険行為はいたるところで、たちまち撲滅された。

こんにち、反ソビエト的な「右派とトロツキストとの同盟」の裁判であきらかになったように、社会革命党「左派」の反乱は、ブハーリン、トロツキーの承知のうえで、かれらの同意をえてひきおこされたものであ

り、そしてソビエト権力にたいするブハーリン派、トロツキスト、社会革命党「左派」の反革命的な共同の陰謀計画の一部分であった。

同時に、のちにトロツキーの手先となった社会革命党「左派」のブリュムキンは、ドイツ大使館にもぐりこみ、ドイツを挑発してわが国と戦争させるためにモスクワ駐在のドイツ大使ミルバッハを暗殺した。だが、ソビエト政府はついに戦争を避け、反革命分子の挑発を挫折させた。

第五回ソビエト大会は、ロシア・ソビエト連邦社会主義共和国憲法、すなわち最初のソビエト憲法を採択した。

要約

ボリシェビキ党は、一九一七年二月から十月にいたる八ヵ月のうちに、きわめて困難な問題を解決した。すなわち、労働者階級のなかの多数を獲得し、ソビエトのなかの多数を獲得し、何百何千万の農民を社会主義革命の側にひきいれた。党は、これらの大衆を小ブルジョア政党（社会革命党、メンシェビキ、無政府主義者）の影響からひきはなし、勤労者の利益に反対するこれらの政党の政策を一歩いっぽ暴露した。ボリシェビキ党は、前線と後方で大々的な政治活動をくりひろげ、大衆を十月社会主義革命にそなえさせた。

この時期の党史において決定的意義のある事柄は、レーニンの亡命からの帰国、レーニンの四月テーゼ、党

の四月会議と第六回大会である。労働者階級は、わが党の決議のなかから、力と勝利についての確信をくみとり、革命の重要問題についての回答を見いだした。四月会議は、ブルジョア民主主義革命から社会主義革命への移行をかちとる闘争に党をみちびいた。第六回大会は、ブルジョア階級とその臨時政府に反対する武装蜂起へと党をむかわせた。

協調主義の社会革命党、メンシェビキの党、無政府主義者、その他の非共産主義的政党は、すでにその発展をおえた。すなわち、これらの政党は、十月革命以前に、資本主義制度の保全と維持を主張するブルジョア政党にかわってしまっていた。ブルジョア階級をくつがえし、ソビエト権力をうちたてるための大衆のたたかいを指導したのは、ボリシェビキ党だけであった。

同時に、ボリシェビキは、党内の投降主義者ジノビエフ、カーメネフ、ルイコフ、ブハーリン、トロツキー、ピャタコフらが社会主義革命の道から党をそらせようとする企みを粉砕した。

ボリシェビキ党に指導された労働者階級は、貧農と同盟するとともに、陸、海軍の兵士の協力のもとブルジョア階級の権力をくつがえし、ソビエト権力をうちたて、新しい型の国家、すなわち社会主義ソビエト国家を創立し、地主の土地所有制を廃止し、土地を農民の使用にゆだね、全国のすべての土地を国有にし、資本家を収奪し、戦争から脱出する道――平和をかちとり、必要な息ぬきのときをかちとり、こうして社会主義建設を展開する条件をつくりだした。

十月社会主義革命は、資本主義をうちやぶり、ブルジョア階級の手から生産手段をうばいとり、工場、土地、鉄道、銀行を全人民の所有、すなわち社会的所有にかえた。

十月社会主義革命はプロレタリア階級独裁をうちたて、巨大な国家の指導を労働者階級にゆだね、こうして労働者階級を支配階級とした。

このようにして、十月社会主義革命は、人類の歴史の新しい時代――プロレタリア革命の時代をきりひらいた。

第八章　外国の武力干渉と国内戦争の時期におけるボリシェビキ党
（一九一八年―一九二〇年）

一、外国の武力干渉の開始　国内戦争の初期

西ヨーロッパで戦争がたけなわであったときに、ブレスト講和が締結されたことと、種々の革命的な経済措置が実行された結果、ソビエト権力が強固になったこととは、西側の帝国主義者、とりわけ連合国の帝国主義者たちに最大の不安を引きおこした。連合国の帝国主義者たちは、ロシアとドイツが講和をむすんだことによって、ドイツの軍事情勢を有利にし、それだけ前線における連合国の軍隊の状況を困難にすることをおそれた。つぎに、かれらがおそれたのは、ロシアとドイツの講和が成立したことによって、各国と各戦線での平和へのあこがれがつよまり、その結果戦争の事業、帝国主義者の事業が破壊されるかもしれないということであった。最後に、かれらがおそれたのは、ソビエト権力が、広大な国の領域に存在し、ブルジョア階級の権力をくつがえしたのち多くの成功をかちとったことが手本となって、西ヨーロッパの労働者や兵士を感化しはしない

かということであった。これらの労働者、兵士はながびく戦争に深刻な不満をもっており、ロシア人をみならって、銃剣を逆に自国の主人や抑圧者に向けるおそれがあった。そこで、連合国の政府は、ロシアにたいし武力干渉を開始して、ソビエト権力をくつがえし、ブルジョア権力を成立させることをきめた。そしてこのブルジョア権力がロシアにおいてブルジョア的秩序を復活させ、ドイツとの講和を廃棄し、ドイツ、オーストリアにたいする戦線を再建することをのぞんでいた。

連合国の帝国主義者がすすんでこの悪業に乗りだしたのは、ソビエト権力は強固でなく、ソビエト権力の敵がある程度努力しさえすれば、ソビエト権力はたちどころに滅亡してしまうにちがいないと確信したからである。

ソビエト権力が成功をかちとり、日ましに強国になっていくのに、さらに大きな不安を感じたのは、国内のすでに打倒された階級、すなわち地主と資本家、うちやぶられた政党すなわち立憲民主党、メンシェビキ、社会革命党、無政府主義者、各種各様のブルジョア民族主義者、ならびに白軍の将軍、コサックの将校連中であった。

すべてこれらの敵対分子は、十月革命の勝利の日々からソビエト権力は、ロシアには基盤がないとか、失敗するにきまっているとか、二週間か、一ヵ月か、ながくてせいぜい二、三ヵ月もしたら、かならずほろんでしまうだろうとか、いたるところでわめきたてた。だが、敵がどんなに呪おうと、ソビエト権力は、ひきつづき存在し、強化されていったので、ロシア国内のソビエト権力の敵も、かれらがまえに考えていたよりも、ソビエト権力がずっと強力であること、したがってソビエト権力をくつがえすには、すべての反革命勢力が本腰を

いれ、容赦なくたたかうことが必要であることを、認めざるをえなくなった。このためかれらは、反革命勢力をかきあつめ、幹部軍人をよせあつめ、反乱、まず手はじめにコサック地区、富農地区において反乱を組織することによって、大々的な反革命反乱工作をすすめることを決定した。

こうして、一九一八年の前半には、ソビエト権力をくつがえそうとする明確な二つの勢力、すなわち連合国の外国帝国主義者と国内の反革命とが形成された。

この二つの勢力のうちのどちらも、単独でソビエト権力をくつがえすたたかいをやるだけの十分な条件をそなえていなかった。ロシア国内の反革命勢力は、ソビエト権力反対の暴動に必要な若干の幹部軍人と、主としてコサックの上層、富農からなる若干の人力をにぎってはいたものの、金と武器はもっていなかった。これに反し、外国帝国主義者は金と武器はもっていたものの、干渉に十分なだけの兵力を「ぬきだす」ことはできなかった。それは、この兵力が、ドイツ、オーストリアにたいする戦争に必要であったばかりでなく、この兵力は、ソビエト権力にたいする闘争ではあまりたのみになりえなかったからである。

このようなソビエト権力との闘争の諸条件によって、ついに国の内外の二つの反ソビエト勢力は連合せざるをえなかった。そしてかれらは一九一八年前半に連合したのである。

このようにして、ロシア国内のソビエト権力の敵による反革命的反乱に支持されて、ソビエト権力にたいする外国の武力干渉が形成された。

息つぎのときはおわり、ロシアで国内戦争、すなわち、ソビエト権力の内外の敵にたいする、ロシア諸民族の労働者、農民の戦争が開始された。

イギリス、フランス、日本、アメリカの帝国主義者は、このたびの武力干渉があきらかにロシアにたいする戦争であり、もっとも悪質な戦争であるにもかかわらず、宣戦の布告なしに、武力干渉を開始した。これらの「文明」的な強盗どもは、泥棒のようにこっそりロシアに忍びより、かれらの軍隊をロシアの領土に上陸させた。

イギリス、フランスの軍隊は、ロシアの北部に上陸し、アルハンゲリスクとムルマンスクを占領し、そこで白衛派の反乱にテコ入れして、ソビエト権力をくつがえし、白衛派の「北部ロシア政府」を成立させた。日本軍は、ウラジオストクに上陸し、沿海州を占領し、ソビエトを追いちらし、白衛派の反乱分子にテコ入れをした。この白衛派の反乱分子は、まもなくブルジョア的秩序を復活させた。

後カフカズでは、コルニーロフ、アレクセエフ、デニキンらの将軍たちが、イギリス、フランスの援助のもとに白衛派の「義勇軍」を組織し、コサックの上層分子による反乱をおこし、ソビエト権力への攻撃を開始した。

ドン川一帯では、クラスノフ将軍とマモントフ将軍が、ドイツ帝国主義の内々の援助のもとで（ロシアとの講和条約があったので、おおっぴらな援助は具合が悪かった）、ドン・コサックの反乱をおこし、ドン州を占領し、ソビエト権力への攻撃を開始した。

ボルガ川中流一帯とシベリアでは、イギリス、フランスの陰謀によって、チェコスロバキア軍団の反乱が組織された。この軍団は捕虜からなっており、ソビエト政府によってシベリアと極東をとおって本国にかえることをゆるされていたのだが、途中で、社会革命党とイギリス、フランスに利用され、ソビエト権力にたいする

反乱をおこした。この軍団の反乱が合図となって、ボルガ川一帯やシベリアの富農、およびボトキンスクとイジェフスクの諸工場の社会革命党に同調する労働者が反乱をおこした。ボルガ川一帯にはサマラの白衛派と社会革命党の政府が成立した。オムスクではシベリア白衛派政府が成立した。

ドイツは、イギリス、フランス、日本、アメリカの同盟によっておこなわれたこの武力干渉には、当時この同盟と交戦状態にあったので、参加しなかったし、また参加できなかった。しかしこういう事情があり、またロシアとドイツは講和条約をむすんでいたにもかかわらず、ボリシェビキはだれもが、カイザー・ウィルヘルムの政府もイギリス、フランス、日本、アメリカなどの干渉者とおなじように、ソビエト国家の凶悪な敵であることを疑わなかった。そして実際に、ドイツ帝国主義者もあらゆる方法でソビエト国家を孤立化し、弱体化し、消滅しようとした。かれらは、——なるほどウクライナ・ラダとの「条約」によってではあったが——ソビエト・ロシアからウクライナを奪いとり、白衛派のウクナイナ・ラダの要請にこたえるかたちで軍隊をウクライナに進駐させ、暴虐な手段でウクライナ人民を略奪、抑圧し、ウクライナ人民がソビエト・ロシアといかなる関係をもつことをも禁止した（訳注：ウクライナ・ラダとはウクライナの反革命的、民族主義的ブルジョア階級の政府のこと。この政府は、革命をおしつぶすために、ドイツ・オーストリア帝国主義の軍隊をウクライナによびいれた）。かれらは、ソビエト・ロシアから後カフカズを奪いとり、グルジヤとアゼルバイジャンの民族主義者の要請にこたえるかたちでそこへドイツ軍とトルコ軍を進駐させ、チフリスとバクーでほしいままにふるまった。かれらは、ソビエト権力に反対しドン川地区で反乱をおこしたクラスノフ将軍を、こっそりとではあったが、武器や食糧によっていろいろと支援した。

このようにして、ソビエト・ロシアはその主要な食糧、原料、燃料地区から切りはなされてしまったのである。

当時のソビエト・ロシアの状態は困難をきわめていた。パンがたりなかった。肉類がたりなかった。労働者たちは飢えにさいなまれていた。モスクワとペトログラードの労働者は二日にいちど八分の一フントのパンしか配給されなかった。ときによるとパンの配給がまったくない日さえあった。工場は原料と燃料がなくて、まったく、あるいはほとんど操業しなかった。だが、労働者階級はくじけなかった。ボリシェビキ党はくじけなかった。当時のはかりしれないほどの困難、そしてこの困難を克服するためにおこなった死にものぐるいの闘争は、労働者階級のなかに、いかに、無尽蔵の力が潜んでいるかを証明し、ボリシェビキ党にいかに偉大な、無限の威信があるかを証明した。

党は、全国が軍営であると宣言し、そして全国の経済生活と文化・政治生活を戦時の型に改めた。ソビエト政府は、「社会主義の祖国は危機にひんす」と宣言するとともに、人民に抗戦をよびかけた。レーニンは、「すべてを前線のために」というスローガンを提起し、そして、数十万の労働者と農民が志願兵として赤軍にはいり、前線にくわわった。党員と共産青年同盟員のおよそ半数が前線におもむいた。党は人民を祖国防衛戦争に立ちあがらせて、外国の武力干渉者の軍隊の侵犯とたたかい、革命によって打倒された搾取階級の反乱とたたかった。レーニンの組織した労農国防会議は、前線に人力、食糧、被服、武器を供給する仕事を指導した。志願の原則が強制兵役義務にあらためられた結果、赤軍は数十万人の新しい人員によって補充され、赤軍はごく短期間に百万の大軍となった。

国内の状況が困難で、また赤軍はまだ若くて、強くなるいとまがなかったにもかかわらず、種々の国防措置が講じられた結果、ついに最初の成功がかちとられた。クラスノフ将軍は、かならず占領できるとおもっていたツァリツィン方面から撃退され、ドン川の対岸へ追い出された。デニキン将軍の活動は北カフカズの小地域に局限され、コルニーロフ将軍は赤軍との交戦中に戦死した。チェコスロバキア軍団と社会革命党、白衛派の匪賊どもは、カザン、シンビルスク、サマラから放逐され、ウラルにおしもどされた。モスクワ駐在のイギリス使節団長ロックハートによって組織されたヤロスラブリにおける白衛派のサビンコフの反乱はたたきつぶされ、ロックハートはとらえられた。ウリツキー、ボロダルスキー両同志を暗殺し、そしてまた凶悪にもレーニンの暗殺をはかって果たさなかった社会革命党は、ボリシェビキにたいする白色テロルのむくいとして、赤色テロルをくわえられ、中央ロシアのすべての比較的重要的地点で粉砕されてしまった。

年若い赤軍は、敵との戦闘できたえられ、強大になった。

当時、赤軍のなかで政治委員として活動した共産党員は、軍隊を強固にし政治教育をほどこし、戦闘力と規律を高める点で、決定的な役割をはたした。

赤軍がかちとったこれらの成果は、まだ万事を解決するものでなく、赤軍の初歩的な成果にすぎないことを、ボリシェビキ党は理解していた。党は、より重大な新しい戦いがさし迫っており、ただ敵との長期にわたる重大な闘争の結果はじめて、国は敵にとられている食糧、原料、燃料の地区をとりもどすことができることを、理解していた。そこで、ボリシェビキは、懸命に長期戦にそなえはじめ、後方のすべてをあげて前線に奉仕させることを決定した。ソビエト政府は戦時共産主義を実施した。ソビエト権力は、大衆消費用の商品をた

くわえて軍隊と農村に供給するため、大工業のほかに中小工業も監督のもとにおいた。ソビエト権力は、穀物取引の独占制を実施し、穀物の私的取引を禁止し、食糧徴収制を制定し、それによって農民のもっている余剰食糧を登録し、食糧の予備をたくわえて、食糧を軍隊と労働者に供給しようとした。最後に、ソビエト権力は、すべての階級の普遍的な労働義務制を実施した。党は、ブルジョア階級を義務的な肉体労働に参加させ、こうして労働者を前線にとってより重要な別の労働にふり向け、「働かないものは、食ってはならない」という原則を実現した。

国防のきわめて困難な条件によってひきおこされ、そして臨時的な性格をおびていた、こういう措置の全体系が、戦時共産主義とよばれた。

国は、ソビエト権力の内外の敵との長期にわたる、きびしい国内戦争にそなえた。

国は、一九一八年の末までには、軍隊の兵員数を三倍にしなければならなかった。国はこの軍隊の補給資材をたくわえなければならなかった。

レーニンは当時こう指摘した。

「われわれは春までに百万人の軍隊をもつことをきめた。いまや、われわれは三百万人の軍隊を必要としている。われわれはこのような軍隊をもつことができるし、このような軍隊をもつであろう。」

二、ドイツの軍事的敗北　ドイツの革命　第三インターナショ

ソビエト国家が外国の干渉にたいするあらたな戦闘にそなえていたとき、西ヨーロッパの交戦諸国の後方および前線で、重大な事件がおきた。ドイツとオーストリアは、戦争と食糧の重圧で息もたえだえになっていた。当時、イギリス、フランス、アメリカは、あらての予備軍を続々とくりだしていたのに、ドイツ、オーストリアは、最後のとぼしい予備軍をもつかいはたしていた。ぎりぎりのところまでつかれはてたドイツ、オーストリアの敗北はもう目のまえにせまっていた。

同時に、ドイツ、オーストリアの国内でも、いつはてるかもわからない、破滅的な戦争に反対し、人民を疲労と飢餓に追いやった自国の帝国主義政府に反対する人民の怒りは湧きたっていた。それには、ブレスト講和以前からのソビエト軍兵士とドイツ・オーストリア兵士の戦場における交歓、さらにはソビエト・ロシアとの停戦、講和の影響も、あずかって力があった。ロシアの人民が自国の帝国主義政府をうちたおすことによってのろうべき戦争をおわらせたという実例は、オーストリア・ドイツの労働者に教訓をあたえずにはおかなかった。ブレスト講和の締結後に東部戦線から西部戦線にまわされたドイツ軍の兵士は、ソビエトの兵士との交歓や、ソビエトの兵士たちがどのようにして戦争から離脱したかについて語ったが、これらの話は、そこのドイツ軍を崩壊させずにはおかなかった。オーストリアの軍隊についていえば、これよりずっとまえに、おなじような原因から、崩壊しはじめていた。

すべてこういう事態の結果、ドイツ軍のなかで平和への渇望が強まり、かれらはすでに以前のような戦闘力

をうしない、連合国の軍隊に押され退却を開始した。そして、ドイツ国内では一九一八年十一月ウィルヘルムとその政府をくつがえす革命が爆発した。

ドイツは、自国の敗戦をみとめざるをえなくなり、連合国に和をこうた。

こうして、一等国のドイツは、一挙に二等国になりさがった。

こうした事態は、ソビエト権力の立場からみると、いく分消極的な意義をもっていた。なぜなら、それは、ソビエト権力に武力干渉をおこなっていた連合国の国ぐにをヨーロッパ、アジアの支配的な勢力にしてしまったからであり、また、これらの国ぐにが干渉をつよめ、ソビエトに国家を封鎖し、ソビエト権力をいっそう強く締めつけることを可能にしたからである。結果的にもまさしくそのとおりなったが、これについてはあとでのべられている。だが他の面からみれば、このような事態は、根本的にソビエト国家の立場を楽なものにするという、より重大な積極的な意義をもっていた。第一に、それによって、ソビエト権力は、略奪的なブレスト講和を破棄し、賠償金の支払いを停止し、エストニア、ラトビア、白ロシア、リトアニア、ウクライナ、後カフカズをドイツ帝国主義の抑圧から解放するための、公然たる軍事的・政治的闘争をおこなう可能性をえた。第二に、これが主要なことが、ヨーロッパの中心であるドイツに共和制度と労働者・兵士代表ソビエトが存在したことは、ヨーロッパ諸国を革命化させずにはおかなかったし、そして実際に革命化したのであるが、このことはロシアにおけるソビエトの地位を強化させずにはおかなかった。もちろん、ドイツにおこった革命はブルジョア革命であって、社会主義革命ではなかったし、それに、そこでのソビエトは、ブルジョア議会のいうなりになる道具であった。というのは、これらのソビエトは、ロシアのメンシェビキとおなじような協調派の

社会民主主義者によって支配されており、このことがもともとドイツの革命の弱さの原因だったからである。ドイツでの革命が、どれほど弱かったかは、ドイツの白衛派がルクセンブルグやリープクネヒトのような著名な革命家を殺害しても、なんらの徴罰もしないで見のがしておいたということからでもわかる。だがこれもやはり革命ではあった。ウィルヘルムは倒され、労働者は鎖をたちきった。このことひとつだけでも、西ヨーロッパ諸国に革命をひきおこし、ヨーロッパ諸国の革命の高まりをよびおこさずにはおかなかった。

ヨーロッパの革命の高まりがはじまった。オーストリアの革命運動は発展した。ハンガリーではソビエト共和国が成立した。ヨーロッパ諸国の共産党が、革命の波にのって表面にあらわれた。

各国共産党を第三インターナショナル、すなわち共産主義インターナショナルに統合する実際の基盤がきずかれた。

一九一九年三月、モスクワで世界諸国共産党の第一回大会がひらかれ、この大会ではレーニンとボリシェビキの発案で共産主義インターナショナルが成立した。帝国主義者の封鎖と迫害によって、多くの代議員がモスクワに着くことができなかったが、それでもやはりヨーロッパおよびアメリカのもっとも主要な諸国の代議員が第一回世界大会に参加した。大会はレーニンが指導した。

レーニンは、ブルジョア民主主義とプロレタリア階級独裁について報告のなかで、ソビエト権力が勤労者に真の民主主義を享受させるものであることを説明した。大会は国際プロレタリア階級にあてた宣言を採択し、プロレタリア階級独裁のために、すべての国ぐにおけるソビエト革命の勝利のために断固奮闘するようよびかけた。

大会は、第三インターナショナル、すなわち共産主義インターナショナルの執行機関として、コミンテルン執行委員会を選出した。

このようにして、新しい型の国際的な革命的プロレタリアート階級の組織、すなわち共産主義インターナショナルというマルクス・レーニン主義のインターナショナルが成立した。

一方では、ソビエト権力にたいする連合国諸国の反動的同盟の強化があり、他方では、ヨーロッパの、主として敗戦国における革命の高まりがソビエト国家の状況を大いに楽なものにしたという、こうした矛盾した事態を背景として、一九一九年の三月に、わが党の第八回大会をひらいた。

この大会には、議決権をもつ三百一人の代議員が出席した。かれらは三十一万三千七百六十六人の党員を代表していた。審議権をもつ代議員は百二人であった。

大会の開会にあたって、まずレーニンは、大会開催の直前に死んだボリシェビキ党のすぐれた組織者の一人、スベルドロフに哀悼の言葉をささげた。

大会は新しい党綱領を採択した。綱領では、資本主義およびその最高の段階としての帝国主義の特徴が説明された。綱領には、二つの国家体制、すなわち、ブルジョア民主主義体制とソビエト体制とが対比された。綱領には、社会主義のために奮闘する党の具体的な任務がくわしく示された。すなわち、ブルジョア階級を徹底的に収奪すること、社会主義の統一的計画にしたがって全国の経済を処理すること、国民経済を組織する仕事に労働組合を参加させること、社会主義的な労働規律を実行すること、ソビエト機関の監督のもとに国民経済のなかで専門家を利用すること、順を追い、計画的に徐々に中農を社会主義建設の仕事に参加させること、が

それである。

大会は、第二回大会で採択されたもとの党綱領にある産業資本主義の単純商品経済にかんする説明を、帝国主義が資本主義の最高段階であるという定義とならんで党綱領にもりこむようにとのレーニンの提議を採択した。レーニンは、わが国経済の複雑性を考慮に入れ、わが国には各種の経済形態があり、そのなかには中農が営む小商品経済がふくまれることを、綱領の中で指摘する必要がある、と考えた。したがって、綱領の討議にあたって、レーニンは、資本主義について、小商品生産について、中農経済についての条項を綱領から削除せよというブハーリンの反ボリシェビキ的な観点に、断固として反対した。ブハーリンのこの観点は、ソビエト建設にあたっての中農の役割を否定するメンシェビキやトロツキーの観点である。同時に、ブハーリンは、農民の小商品経済のなかから富農的要素が成長するという事実をごまかした。

レーニンはまた、ブハーリン、ピャタコフの民族問題にかんする反ボリシェビキ的な観点にも反駁をくわえた。かれらは、民族自決権の条項を綱領にいれることに反対し、民族の同権に反対したが、その口実は、このスローガンは、プロレタリア革命の勝利をさまたげ、諸民族のプロレタリア階級の連合をさまたげる、ということであった。レーニンは、ブハーリンやピャタコフのこうしたきわめて有害な大国的排外主義の観点を論駁した。

中農にたいする態度の問題は、第八回党大会の仕事のなかで重大な地位をしめた。有名な土地法令が実現した結果、農村は日ましに中農的なものになったきた。いまでは、中農はすでに農民人口のなかで多数をしめていた。ブルショア階級とプロレタリア階級のあいだで動揺していた中農の気持と行動は、国内戦争と社会主義

建設の運命にとってきわめて大きな意義をもっていた。国内戦争がどう結着するかは、多くの点で、中農がはたしてどちらの側へ揺れ動くか、プロレタリア階級、ブルジョア階級、そのどちらがはたして中農を自分の側にひきつけることができるか、にかかっていた。チェコスロバキア軍団、白衛派、富農、社会革命党、メンシェビキが、一九一八年の夏、ボルガ川一帯でソビエト権力をくつがえしたのも、つまりはかれらが著しい部分の中農の援助をかちえたからであった。富農が中部ロシアで反乱を組織したときの状況もやはりそうだった。しかし、一九一八年の秋以来、中農大衆の気分にはソビエト権力の側への転換がはじまった。農民は、白軍が勝利すれば、地主の権力を復活し、農民の手から土地を奪いとり、農民を略奪し、鞭うち、拷問にかけるであろうことをみてとっていた。貧農委員会の富農粉砕の活動も、農民の気持の変化を促進した。そこでレーニンは、一九一八年十一月に、つぎのようなスローガンを提起した。

「かたときも富農との闘争を放棄せず、しっかりと貧農だけに依拠して、中農と協定に達すること。」

（レーニン『ピチリム・ソローキンの貴重な告白』）

もちろん中農の動揺はまだ完全にはやんではいなかったが、かれらは、ソビエト権力により接近し、よりしっかりとソビエト権力を擁護するようになった。第八回党大会できめられた対中農政策は、この点を大いに促進した。

第八回党大会は、党の対中農政策の転機となった。レーニンの報告と大会の決議は、この問題における党の新しい路線を決定した。大会は、党諸組織およびすべての共産党員が、中農と富農を厳格に区別し、切りはなすとともに、中農の要求にたいし注意深い態度をとることによって、中農を労働者階級の側にひきよせること

を要求した。けっして強制や暴力の方法によらないで、説得によって中農の立ちおくれを克服しなければならなかった。そこで、大会は、農村において社会主義的な措置（コンミューンや農業アルテリの創設）をこうずるさいには、強制は許さない、と指示した。中農の切実な利益にかかわる場合にはすべて、中農と実際的な協定をむすび、社会主義的改造実施の方式を決めるにあたっては、中農に譲歩しなければならない。大会は、中農と強固な同盟をむすぶと同時に、プロレタリア階級がこの同盟のなかで指導的役割を保持する政策を実行することを、提議した。

レーニンが第八回大会で唱えた新しい対中農政策は、プロレタリア階級が、貧農に依拠し、中農と強固な同盟をたもつとともに、富農にたいする闘争をすすめることを要求した。第八回大会以前においては、党は大体において、中農を中立化する政策をとった。当時、党は、中農が富農の側に、一般にブルジョア階級の側にたたないように努めた。だが、いまでは、もはやそれでは不十分であった。第八回大会は、中農の中立化の政策から白衛派や外国の干渉とたたかい、首尾よく社会主義を建設するための、中農との強固な同盟の政策へと移行した。

大会で採択された、農民の基本的な大衆、すなわち中農にたいする態度についての路線は、外国の干渉とその手先白軍にたいする国内戦争を勝利におわらせるうえで、決定的な役割をはたした。一九一九年の秋、ソビエト権力かデニキンかのどちらかをえらばなければならなかったとき、農民はソビエトを擁護した。それで、プロレタリア階級独裁は、そのもっとも危険な敵にうちかったのである。

大会で特殊な地位をしめたのは、赤軍建設の問題であった。大会ではいわゆる「軍事反対派」が登場した。

「軍事反対派」には多くの以前の「左派共産主義者」が加わっていた。しかし、「軍事反対派」には、粉砕された「左派共産主義」の代表者以外になお、いかなる反対派にも参加したことはないが、軍隊におけるトロツキーの指導に不満の意を表す活動家もいた。大多数の軍人代議員は、トロツキーにたいし、また。旧ツァーの軍隊出身の軍事専門家(そのなかの一部は国内戦争の時期、われわれに公然とそむいた)にトロツキーが敬意をはらっていたし、さらにまた、軍隊内の古参ボリシェビキの幹部にトロツキーが尊大な敵意のある態度をとっていることにたいし、はげしい反感をもっていた。大会では多くの「実際の」事例があげられた。たとえば、トロツキーは、多くの自分の気にいらない、軍事上責任のある仕事を担当している前線の共産党員を銃殺して敵を手助けしようとたくらんだが、中央委員会の介入と軍事活動家の抗議によって、ようやくこれらの同志の生命は救われた。

「軍事反対派」は、党の軍事政策を歪曲するトロツキーに反対しながら、しかし、かれらは軍事建設の多くの問題で、正しくない観点を擁護した。レーニンとスターリンは、断固として「軍事反対派」をしりぞけた。なぜなら、「軍事反対派」は、軍隊におけるパルチザン式なやり方の遺物を擁護し、正規の赤軍の創設に反対し、軍事専門家の起用に反対し、真の軍隊には絶対に必要な鉄の規律に反対してたたかったからである。「軍事反対派」を反駁するにあたって、スターリン同志は、もっとも厳格に規律の精神にあふれている正規軍の創設を要求した。スターリン同志はこういった。

「真に労働者、農民の、主として農民の、厳格な規律のある軍隊を創設して共和国をまもるか、それともほろんでしまうか、そのどちらかである。」

大会は、「軍事反対派」からだされた多くの提議を否決すると同時に、トロツキーにも打撃をあたえ、中央軍事機関の仕事を改善し、また軍隊における共産党員の役割を強めることを要求した。

大会に設けられた軍事問題委員会の活動の結果、大会は軍事問題について一致の決議にたっした。軍事問題にかんする大会の決議は、赤軍を強固にし、赤軍をよりいっそう党に接近させた。

つぎに、大会では、党建設とソビエト建設の問題、ソビエトの活動のなかでの党の指導的役割の問題を討議した。この問題の討議にあたって、大会は、ソビエトの活動における党の指導的役割を否定したサプロノフとオシンスキーの日和見主義集団に反撃をくわえた。

最後に、当時、新しい党員が大量に党に流入したので、大会は、党の社会的構成を改善し、再登録をおこなう決議を採択した。

これは、党の隊列の最初の清掃の始まりであった。

三、干渉の強化　ソビエト国家の封鎖　コルチャックの進撃とその粉砕　デキニンの進撃とその粉砕　三ヵ月間の息つぎ　第九回党大会

連合国側の諸国は、ドイツ、オーストリアをうちやぶったので、ソビエト国家にたいし大兵力をさしむける

ことを決定した。ドイツが敗北して、ドイツ軍がウクライナと後カフカズから撤退したのち、イギリス、フランスがドイツにいれかわり、その艦隊を黒海におくり、軍隊をオデッサと後カフカズに上陸させた。連合国の干渉者の占領した地域での野獣のような支配は、多数の労働者、農民を平然として武力で処断するまでにいたった。そしてついに、干渉者は、トルキスタンを占領したのちは、あつかましくも、当時、バクーの指導にあたっていたシャウミャン、フィオレトフ、ジャパリッゼ、マルィギン、アジズベコフ、コルガノフら二十六人のボリシェビキをカスピ海東岸に連行し、社会革命党の協力のもとで凶暴にもかれらを銃殺するにいたった。

その後まもなく、干渉者はロシアの封鎖を宣言した。外界との海上その他の通路は、すべて遮断されてしまった。

こうして、ソビエト国家はほとんどすべての方面から包囲されてしまった。

連合国は、当時おもに望みをシベリアのオムスクにおける連合国の傀儡、すなわちコルチャック提督にかけていた。コルチャックは「ロシアの最高の統治者」であると宣言された。ロシアのすべての反革命がかれにしたがった。

こうして、東部戦線が主戦場となった。

一九一九年の春、コルチャックは、大軍をかりあつめ、ほとんどボルガ川のほとりにまで到達した。当時、コルチャックとたたかうため、もっとも優秀なボリシェビキが派遣され、共産青年同盟員や労働者が動員された。一九一九年四月、赤軍はコルチャックに重大な敗北をこうむらせた。まもなくコルチャック軍は全線にわたって退却をはじめた。

赤軍の東部戦線における攻撃行動がたけなわであったとき、トロツキーは奇怪な計画をだした。すなわち、ウラルの前面で停止し、コルチャック軍への追撃を中止し、軍隊を東部戦線から南部戦線にうつすというものであった。党中央委員会は、ウラルとシベリアをコルチャックの手にのこし、かれが、そこで日本、イギリスの援助で立ち直り、再起するのをゆるすことはできないということを、よく理解していたので、この計画を拒否し、攻撃をつづけるように指示した。トロツキーはこの指示に同意せず、辞表をだした、中央委員会はトロツキーの辞表を却下すると同時に、ただちに東部戦線における作戦の指導から手をひくように命じた。

赤軍のコルチャックへの攻撃はあらたな勢で展開しはじめた。赤軍は、またもやコルチャックに立てつづけにあらたな敗北をなめさせるとともに、白軍後方に起きた強大なパルチザン運動の援助のもとで、ウラルとシベリアを白軍の手から解放した。

一九一九年の夏、西北一帯（バルト海沿岸、ペトログラード付近）の反革命勢力を指導していたユデニッチ将軍は、ペテログラードに攻撃をかけて、赤軍の注意を東部戦線からそらすという任務を、帝国主義者からあたえられた。ペテログラード付近の二つの砲台の守備隊は、もとの将校らの反革命の扇動にまどわされて、ソビエト権力にたいする反乱をおこし、また、前線の司令部においても、反革命の陰謀が発覚した。ペトログラードは敵におびやかされた。ソビエト権力は、労働者、水兵の支援のもとに方策を講じ、ついに反乱をおこした砲台を白軍の手から解放し、ユデニッチの軍隊をやっつけて、ユデニッチをエストニアに追いはらった。

ペトログラード付近でユデニッチを撃破したので、わが軍はコルチャックとたたかうのが容易になった。一九一九年末、コルチャックの軍隊はのこらず壊滅された。コルチャック自身も逮捕され、革命委員会の判決に

よって、イルクーツクで銃殺された。
こうして、コルチャックは片づけられた。
当時、シベリアの人民のあいだで、コルチャックについてつぎのような小唄がうたわれた。

「軍服はイギリス製、
肩章はフランス製、
タバコは日本製、
これがオムスクのおとのさま。
　軍服はすりきれ、
　肩章はおっこち
　タバコは吸いつくし、
　おとのさまは消えうせた。

干渉者は、コルチャックにかけた期待がだめになったのをみて、そのソビエト共和国への攻撃計画をかえた。オデッサに上陸した陸戦隊はよびもどされなければならなかった。というのは、干渉者の軍隊が、ソビエト共和国の軍隊と接触して革命的精神に感染し、それぞれの帝国主義支配者にたいし蜂起しはじめたからである。こうして、オデッサでは、フランスの水兵がアンドレ・マルティの指導のもとで蜂起した。そこで、コルチャ

ックが壊滅されたのち、連合国のおもな注意は、コルニーロフの同僚であり、「義勇軍」の組織者であるデニキン将軍にそそがれた。当時、デニキンは南部、すなわちクバン地区でソビエト権力反対の策動をおこなっていた。連合国は大量の武器、装備をデニキンの軍隊に支給し、それを北部にむかわせてソビエト権力とたたかわせた。

こうして、南部戦線がこんどは主戦場となった。

一九一九年の夏、デニキンは、ソビエト権力にたいするその主攻撃を開始した。トロツキーは南部戦線の活動をめちゃめちゃにし、そのためわが軍はつづけざまに負けた。十月なかばには、白軍がウクライナの全域を占拠し、オリョールを奪取するとともに、わが軍に実弾、小銃、機関銃を供給していたトゥーラにせまった。白軍はモスクワにせまりつつあった。ソビエト共和国の状況は極度にきびしくなった。党は警鐘をうちならし、人民が抗戦に立ち上がるようによびかけた。レーニンは「すべてをデキニンとの闘争へ」のスローガンを発した。ボリシェビキに元気づけられた労働者、農民は、敵を壊滅させるため全力をふるった。

デニキンを殲滅するため、中央委員会は、スターリン、ウォロシーロフ、オルジョニキッゼ、ブジョンヌイらの同志を南部戦線に派遣した。トロッキーは南部での赤軍の作戦指導を免ぜられた。スターリン同志が到着するまえ、南部戦線の司令部はトロツキーといっしょに一つの計画をつくった。その内容は、ツァリツィンからドン川の草原をへてノボロシスクへむかって、主要な打撃をデニキンにくわえるというものであったが、この草原では、赤軍は途中で、まったく道路のない地帯にぶつかることになるうえ、当時、その大部分の住民が白衛派の影響下にあった、コサック住民の地域をとおらなければならなかった。スターリン同志はこの計画に

痛烈な批判をくわえ、中央委員会に、デニキン粉砕の自分の計画をだした。その内容は、ハリコフ――ドンバス――ロストフをへて主要な打撃をデニキンにくわえる、というものであった。わが軍がこの計画を実行すれば、迅速に前進してデニキンを攻めることができる。なぜなら、わが軍が労働者、農民地域を通って前進すれば、住民が同情をよせることは明らかだったからである。そのほかに、この地域には密集した鉄道網があり、そのためわが軍はすべての必需品の規則的な補給を確保できるからである。最後に、この計画を実行すれば、ドンバスを解放し、わが国に燃料を保証することができる。

党中央委員会は、スターリン同志の計画を採択した。一九一九年十月の後半、デキニンは激しい抵抗ののち、オリョールとボローネジ付近の決戦で赤軍に撃破された。デニキンは急いで退却を開始し、ついで、わが軍に追撃されつつ、南方へと落ちのびた。一九二〇年はじめ、ウクライナ全部と北カフカズが白軍の手から解放された。

南部戦線で決戦がおこなわれているとき、帝国主義者は、またもユデニッチ軍団をペトログラードに進撃させ、それによってわれわれの兵力を南部からひきはなし、デニキンの軍隊の状況を緩和させようとした。白軍はすでにペトログラード市のすぐそばまでせまった。ペトログラードの英雄的なプロレタリア階級は、身を挺して最初の革命都市を防衛した。共産党員はいつものように最前線でたたかった。激しい戦闘ののち、白軍は撃破され、ふたたびわが国の国境のかなた、エストニアに追いだされた。

こうしてデニキン軍も片づけられた。

コルチャックとデニキンが壊滅されたあと、短期間ではあったが、息ぬきのときがやってきた。

白軍が壊滅され、干渉が成果をあげず、ソビエト権力が全国的に強固になっており、また。西ヨーロッパでも、ソビエト共和国にたいする干渉者の戦争にたいし労働者の怒りが高まっているのをみて、帝国主義者は、ソビエト国家にたいする態度をかえはじめた。一九二〇年一月、イギリス、フランス、イタリアは、ソビエト・ロシアへの封鎖を解除することをきめた。

これは干渉の壁にうちぬかれた重大なさけめだった。

もちろんこれは、ソビエト国家がすでに干渉と国内戦争を片づけたことを意味するものではなかった。当時まだ、帝国主義的なポーランドが進犯してくる危険があった。極東、後カフカズ、クリミアでは、まだ干渉者は最後的に追っぱらわれてはいなかった。だが、ソビエト国家は、このとき一時的な息ぬきの機会をえた。そして、より多くの力を経済建設に向けることができた。党は、経済問題にたずさわる可能性をもっていた。国内戦争の時期には、工場閉鎖のため多くの熟練労働者が生産からはなれていた。いまや党は、熟練労働者を生産によびもどし、専門に応じた仕事に従事させた。数千の共産党員が、困難な状態にあった運輸業を復興するために派遣された。運輸業の復興なしには、基本的な工業部門の復興に、まともに着手することはできなかった。食糧面の仕事は強化され、改善された。ロシアの電化計画をつくる仕事がはじまった。軍務に服している赤軍の兵士は五百万人近くいたが、軍事的な危険があったので、まだかれらを除隊させることはできなかった。そこで、一部の赤軍部隊を労働軍に編制がえし、経済建設の部門に従事させた。労農国防会議は、労働国防会議に改組され、これを援助するため国家計画委員会〔ゴスプラン〕が設立された。

一九二〇年三月末に、第九回党大会が、こうした環境のもとで、ひらかれた。

この大会には、議決権をもつ五百五十四人の代議員が出席したが、かれらは六十一万千九百七十八人の党員を代表していた。審議権のある代議員は百六十二人だった。

大会は、運輸、工業の部面における国の当面の経済的任務をきめるとともに、経済建設に労働組合が参加すべきことを、とくに指摘した。

大会は、まず第一に、運輸、燃料、冶金業の建て直しを規定する統一的な経済計画の問題について、特別の注意をはらった。この計画でおもな地位をしめたのは、全国民経済の電化の問題であり、レーニンはこの問題を、「一〇～二〇年にわたる偉大な綱領」として提起した。のち、これを基礎として作成されたのが、有名なロシア電化国家委員会の計画であり、いまではそれは、はるかに超過達成された。

大会は、反党的な「民主集中主義」集団に反撃を加えたが、この集団は、工業の面で単独責任制管理者の個人責任制をとることに反対し、工業の指導の面での無制限な「合議制」と無責任制をあくまで主張した。この反党集団中の立役者は、サプロノフ、オシンスキー、スミルノフであった。大会でかれらを擁護したのはルイコフとトムスキーであった。

四、ポーランド地主のソビエト国家にたいする攻撃　ウランゲリ将軍の襲撃　ポーランドの計画の失敗　ウランゲリの壊滅　干渉の終結

コルチャックとデニキンが壊滅したにもかかわらず、ソビエト国家が北部地方、トルキスタン、シベリア、ドン川、ウクライナ、その他を白軍と武力干渉者の手からとりもどし、その地域をいっそう拡げたにもかかわらずまた、連合国がロシアにたいする封鎖をとかざるをえなかったにもかかわらず、やはり連合国の諸国は、ソビエト権力がゆるがすことのできないものであり、ソビエト権力が勝利したという考え方を、受け入れることができなかった。だから、これらの国は、ソビエト国家にもういちど干渉をこころみることにきめた。こんどは干渉者は、一方では、反革命的なブルジョア民族主義者であり、ポーランド国家の事実上の元首であるピルスーツキーを利用し、他方では、クリミアでデニキン軍の残党をかきあつめ、そこからドンバスとウクライナをおびやかしていたウランゲリ将軍を利用することに決定した。

レーニンが形容したように、地主のポーランドとウランゲリとは、ソビエト国家をしめころそうとする国際帝国主義の二本の手だった。

ポーランド人の計画は、ソビエト・ウクライナのドニエプル川右岸地域を占領し、ソビエト・白ロシアを占領し、そこでポーランド地主の権力を復活させ、ポーランド国家の境界を「海から海まで」すなわち、ダンチヒからオデッサまで拡大し、そしてウランゲリの援助にむくいるために、ウランゲリが赤軍をうちやぶり、ソビエト・ロシアに地主・資本家権力を復活させるのを援助することであった。

この計画は、連合国側諸国の承認をえた。

ソビエト政府は、平和を維持し、戦争を防止するために、ポーランドとの交渉を開始しようと試みたが、なんの効果もえられなかった。ピルスーツキーは、もともと平和について交渉する気はなかったのである。ピルスーツキーは、たたかうことを望んだ。かれは、コルチャックやデニキンとの戦闘で赤軍はつかれきっており、ポーランド軍の攻撃のまえにはひとたまりもないだろう、と考えていた。

短期間の息ぬきは、これでおわった。

一九二〇年四月、ポーランド軍はソビエト・ウクライナの境界にせめ入り、キエフを占領した。時をおなじくしてウランゲリも攻勢に転じ、ドンバスをおびやかした。

赤軍部隊は、ポーランド軍の攻撃にこたえて、全線にわたって反撃をくりひろげた。南部戦線の赤軍は、キエフを解放しポーランドの地主をウクライナと白ロシアから追いだしたのち、攻勢の勢にのって一気にガリシアのリボフの郊外にたっし、そして、また西部戦線の赤軍部隊はワルシャワにせまった。事態は、ポーランドの地主軍の完全な敗北へと向かいつつあった。

だが、トロツキーと赤軍参謀本部内のかれの支持者の不審な行動は、赤軍の成功を挫折させてしまった。西部戦線の赤軍部隊のワルシャワ方向への進撃は、トロツキーとトハチェフスキーのあやまちから、まったく非組織的におこなわれた。すなわち、占領した戦闘地域を軍隊にかためさせず、前衛部隊はあまりにも遠く前進させられ、予備隊と弾薬はあまりにも遠く後方にとりのこされた。このため、前衛部隊は、弾薬なしに、予備隊なしに放置された。戦線が極度にひきのばされたので、前線は容易に突破された。すべてこうした状況によって、ポーランドの軍隊のそう大きくない集団がわが国の西部戦線の一地点を突破したとき、わが軍は弾薬の

欠乏により退却せざるをえなかった。リボフの近くにまですすみ、そこでポーランド軍を撃退した南部戦線の部隊はどうかというと、「革命軍事会議議長」トロツキーは、この部隊にリボフ占領を禁じた。そして、リボフの占領が、西部戦線へのただ一つの可能な、もっともよい援助だということは、容易に理解できたにもかかわらず、騎兵軍を、すなわち南部戦線の主力を、西部戦線の援助のためと称して遠く東北方へ移動させた。騎兵軍を南部戦線の戦列から引き抜き、リボフから撤退させたことは、実際には、わが軍が南部戦線からも退却したことを意味したのである。こうして、トロツキーの破壊的な命令によって、不可解な、いわれのない退却が、わが軍の南部戦線の部隊におしつけられ、ポーランドの地主をよろこばせた。

これは直接の援助であったが、それはわが軍の西部戦線にではなく、ポーランドの地主や連合国にあたえられた援助であった。

数日ののち、ポーランド軍の攻勢は阻止され、わが軍の部隊はポーランド軍へのあらたな反攻を準備しはじめた。だが、ポーランドは戦争をつづけるだけの力がなく、そして赤軍の反攻をおそれたので、ついにウクライナのドニエプル川右岸地区と白ロシア強奪の野望を放棄せざるをえなくなり、ロシアと講和をむすぶにいたった。一九二〇年十月二十日、ポーランドとリガで講和条約がむすばれ、ガリシアと白ロシアの一部がポーランド領になることがきまった。

ソビエト共和国はポーランドと講和を締結したのち、ウランゲリを一掃することをきめた。ウランゲリは、イギリス、フランスから最新式の兵器、装甲車、飛行機、軍需品をうけとった。かれは主として将校部隊からなる白衛突撃隊をもっていた。だが、ウランゲリは、クバンとドン川一帯に上陸させた部隊のまわりに、農民

とコサックの多少とも有力な勢力をあつめることができなかった。それでも、ウランゲリはドンバスの直ぐ近くにせまり、われわれの炭田地帯を脅威にさらした。さらにはまた、ソビエト権力の地位を困難におとしいれたのは、赤軍がこのときすでに疲れきっていたことであった。赤軍兵士は、かつてない困難な条件のもとで前進し、一方ではウランゲリ軍を攻撃し、同時に、ウランゲリを援助していた無政府主義者マフノ一味の匪賊を一掃しなければならなかった。ところが、ウランゲリは、すぐれた装備をもっており、赤軍には戦車がなかったにもかかわらず、赤軍はついにウランゲリをクリミア半島においこんだ。一九二〇年十一月、赤軍はペレコプの堅固な陣地を占領し、クリアミ半島につきすすみ、ウランゲリ軍を粉砕して、クリミアを白軍と干渉者の手から解放した。クリミアはソビエトのものとなった。

こうして、干渉の時期は、ポーランドの大国主義計画の破綻とウランゲリの壊滅によっておわりをつげた。

一九二〇年末、後カフカズは、アゼルバイジャンのブルジョア民族主義ムサバト派やグルジアの民族主義的メンシェビキおよびアルメニアのダシナク派の抑圧から解放されはじめた。ソビエト権力はアゼルバイジャン、アルメニア、グルジアで勝利した。

だが、干渉はまだ完全に停止されたわけではなかった。日本の極東での干渉は、ずっと一九二二年までつづいた。このほかにも、新たに干渉を組織したものがいた（東方ではセミョーノフ隊長とウンゲルン男爵、一九二一年のカレリアにおけるフィンランド白軍の干渉）だが、ソビエト国家の主要な敵、干渉の主要な勢力は、一九二〇年末には粉砕されてしまっていた。

外国の干渉者とロシアの白衛派の反ソビエト戦争は、ソビエトの勝利に終わった。

ソビエト共和国は、その国家的独立と、その自由な存在をまもりぬいた。
これは、外国の干渉と国内戦争の終結であった。
これはソビエト権力の歴史的な勝利であった。

五、ソビエト国家は、どのようにして、またなにゆえに、イギリス・フランス・日本・ポーランドの干渉とロシアのブルジョア階級・地主・白衛軍の反革命との連合勢力にうちかったか？

干渉時期のヨーロッパとアメリカの新聞をみれば、当時、軍部あるいは民間の著名な評論家のたれひとりとして、軍事通のたれひとりとして、ソビエト権力の勝利を信じていなかったということを確めるのは容易である。すべての著名な評論家、軍事通、すべての国と民族の革命史研究者、いわゆる学問ある人びとは、それどころか、異口同音に、ソビエト権力は長いことはないとか、ソビエト権力の敗北は避けられないなどとわめきたてたのである。

干渉の勝利をかれらが信じたのは、ソビエト国家は、まだ成熟した赤軍をもたず、赤軍を、いわば前進しながらつくり出さなければならないのに、干渉者や白軍は、多少ともできあいの軍隊をもっている、ということにもとづいていた。

さらにそれは、赤軍には熟練した軍事幹部がいない、そのような幹部の大多数はすでに反革命に走った、それなのに、干渉者や白軍には、そのような幹部がいる、ということにもとづいていた。
さらに、それは、ロシアの軍需産業がおくれているため、赤軍は、武器、弾薬の不足と、粗悪な品質に苦しんでおり、しかも、ロシアがまわりをすっかり封鎖されているため他国から軍需品を入手できないのに、干渉者や白衛派の軍隊は第一級の武器、弾薬、被服の供給をどしどしうけることができるうえ、将来もこうした供給がえられるということにもとづいていた。
最後に、それは、干渉者や白衛派の軍隊は、ロシアの当時もっとも食糧のゆたかな地帯をおさえているのに、赤軍はこのような地帯を奪われ、食糧不足に苦しんでいる。ということにもとづいていた。
これらすべての欠陥や不足が、実際に赤軍部隊の側にあったことはたしかだった。
この一点――しかしこの一点だけだが、――干渉者の旦那方はまったく正しかった。
そうだとすれば、それほど多くの重大な欠陥のあった赤軍が、そうした欠陥のなかった干渉者や白衛派の軍隊に勝利したのは、どうしてであろうか。
(1)　赤軍が勝利したのは、赤軍がそのためにたたかったソビエト権力の政策が、人民の利益に合致する正しい政策であったからであり、人民が、この政策は正しい政策であり、自分自身の政策であることを認識し、理解し、この政策を徹底的に擁護したからである。
正しくない政策のために、人民の擁護しない政策のためにたたかう軍隊は、勝利をかちとることはできないことを、ボリシェビキは知っていた。干渉者や白衛派の軍隊は、まさにそうした軍隊だった。干渉者や白衛派

の軍隊には、あらゆるものがあった。すなわち、老練な指揮官があり、第一級の武器があり、弾薬があり、被服があり、食糧があった。だが、かれらには欠けているものが一つあった。ロシアの各民族の援助と同情が欠けていた。なぜなら、ロシアの各民族は、干渉者や白衛軍の「支配者」の反人民的な政策を支持することを望まったし、支持できなかったからである、だから、干渉者や白衛派の軍隊は敗北したのである。

(2) 赤軍が勝利したのは、赤軍が自国の人民にあくまでも忠実で、献身的であり、そのために人民も赤軍を愛し、擁護し、血を分けた軍隊とみなしたからである。赤軍は人民の子であり、誠実な子供が母親にたいするように自己の人民に忠実であれば、人民の支持がえられ、勝利をかちとるにちがいなかった。自国の人民に反する軍隊は、敗北するにきまっている。

(3) 赤軍が勝利したのは、ソビエト権力が後方全体を、全国人民を立ちあがらせて前線の利益に奉仕させることができたからである。全力をあげて前線を支援する強固な後方のない軍隊は、敗北するにきまっている。ボリシェビキはこのことを知っていたので、全国を武器、弾薬、被服、食糧、補充人員を前線に供給する軍営にかえたのである。

(4) 赤軍が敵に勝利したのは、(a)赤軍兵士が戦争の目的と任務を理解し、それの正しさを認識していたから、(b)戦争の目的、任務の正しさを認識したことは、かれらの規律の精神、戦闘能力を強めたから、(c)したがって、赤軍兵士大衆が、敵との戦闘にあたって、たえず、歴史に例のないような自己犠牲の精神と、これまでみたこともないような大衆的英雄主義をしめしたからである。

(5) 赤軍が勝利したのは、赤軍の後方と前線の指導的中核がボリシェビキ党だったからである。この党は、

団結と規律によって、統一された党であり、革命的な精神をもち、共同の事業の成功のためにはすべてを犠牲にする決意をもっている強力な党であり、何百万何千万の大衆を組織し、複雑な環境のなかでも大衆を正しく指導する手腕により右に出るもののない党であった。

レーニンはこういった。

「党が警戒をおこたらなかったから、党がもっとも厳格な規律をもっていたからこそ、また、党の威信がすべての機関や施設を統一し、そして数十、数千、結局は数百万人が中央委員会の出したスローガンにしたがってひとりのように行動したからこそ、そしてまた、かつてない犠牲を払ったからこそ――これらすべてがあったからこそはじめて、現におこったような奇蹟がおこりえたのである。これらすべてがあったからこそはじめて、連合国の帝国主義者や全世界の帝国主義者が、二度、三度、四度までも攻撃をかけてきたにもかかわらず、われわれは勝利をかちとることができたのである。」（レーニン『ロシア共産党（ボリシェビキ）第九回党大会――三月二十九日の中央委員会報告』）

(6) 赤軍が勝利したのは、(a)それが自己の隊伍のなかに、フルンゼ、ウォロシーロフ、ブジョンヌイらのような新しい型の軍事指導者をきたえあげることができたから、(b)その隊伍のなかで、コトフスキー、チャパエフ、ラゾー、シチョルス、パルホメンコ、その他多くの生まれながらの英雄たちがたたかったから、(c)当時赤軍の政治教育には、レーニン、スターリン、モロトフ、カリーニン、スベルドロフ、カガノビッチ、オルジョニキッゼ、キーロフ、クイビシェフ、ミコヤン、ジダーノフ、アンドレーエフ、ペトロフスキー、ヤロスラフスキー、ジェルジンスキー、シチャデンコ、メフリス、フルシチョフ、シベルニク、シキリャトフ、その他の

ような多くの活動家が、たずさわったから、(d)赤軍はその構成員のなかに、軍事委員という非凡な組織者、扇動家をもっていたからである。軍事委員は、その活動によって赤軍兵士をかため、かれらのあいだで、規律と戦闘的な勇敢な精神をつちかい、指揮官のうちの一部の人びとの裏切り行為を、迅速に、容赦なくたちきるとともに、他方では、ソビエト権力に忠実であることをしめし、赤軍部隊の指導に鉄腕をふるった有能な指揮官たち（党員であろうと非党員であろうと）の威信と栄誉を大胆に、断固としてまもった。

「軍事委員がなかったなら、われわれは赤軍をもちえなかっただろう」と、レーニンはいった。

(7)　赤軍が勝利したのは、白軍の後方、すなわち、コルチャック、デニキン、クラスノフ、ウランゲリらの後方で、多くの非凡な党員、非党員のボリシェビキが地下活動をおこなったからである。かれらは、労働者、農民を干渉者や白軍にたいする蜂起に立ちあがらせ、ソビエト権力の敵の後方を破壊し、それによって赤軍の前進を容易にした。周知のとおり、ウクライナ、シベリア、極東、ウラル、白ロシア、ボルガ川一帯のパルチザンは、白軍や干渉者の後方を破壊して、赤軍にきわめて貴重な援助をあたえたのである。

(8)　赤軍が勝利したのは、白軍の反革命と外国の干渉とのたたかいで、ソビエト国家が孤立していなかったからであり、ソビエト権力の闘争とその成功が、全世界のプロレタリアの同情と援助をひきおこしたからである。帝国主義者が干渉と封鎖でソビエト共和国を絞め殺そうとしたとき、それらの帝国主義諸国の労働者は、ソビエトの側に立ってソビエトを援助した。かれらは、ソビエト共和国を敵とする諸国の資本家たちとたたかい、帝国主義者に、干渉を放棄せざるをえないようにした。イギリス、フランス、および干渉にくわわっているその他の諸国の労働者は、ストライキを組織し、干渉者や白軍の将軍らを助ける軍需品の荷役を拒否し、

『ロシアから手を引け』のスローガンのもとで、「行動委員会」をつくった。

レーニンはこういったのである。

「国際ブルジョア階級が、われわれを打とうとして手をふりあげるやいなや、その手はかれら自身の労働者によってねじあげられる。」（レーニン『皮革製造業労働者・職員大会での演説』）

要　約

十月革命でうちやぶられた地主、資本家は、白軍の将軍たちといっしょに、祖国の利益を犠牲にして、連合国諸国の政府と結託し、共同して武力でソビエトに国家を攻撃し、ソビエト権力をくつがえそうとした。これにもとづいて、連合国の武力干渉とロシアの辺境地帯での白軍の反乱が組織され、その結果、ロシアは、食糧、原料地区から切りはなされた。

ドイツの軍事的敗北、および二つの帝国主義の同盟のヨーロッパにおける戦争の終結が、連合国をつよめ、干渉を強めることとなり、ソビエト国家にいくたの新たな困難をつくりだした。

その反対に、ドイツの革命およびヨーロッパの国ぐにではじまった革命運動は、ソビエト権力にとって、有利な国際環境をつくりだし、ソビエト国家の情勢を緩和した。

ボリシェビキ党は、労働者、農民をたちあがらせて、外国の侵略者とブルジョア階級・地主の白衛勢力にた

いする祖国防衛戦争をすすめた。ソビエト共和国とその赤軍は、連合国の手先コルチャック、ユデニッチ、デニキン、クラスノフ、ウランゲリをつぎつぎにうちやぶり、連合国のもう一人の手先ピルスーツキーをウクライナと白ロシアから追っぱらい、こうして外国の武力干渉を撃退し、干渉者の軍隊をソビエト国家の境界から駆逐した。

こうして、社会主義国家にたいする国際資本の第一次武力攻撃は、その完全な失敗をもって終わりをつげた。

革命によってうちやぶられた社会革命党、メンシェビキ、無政府主義者、民族主義者の党は、干渉の時期には、白軍の将軍や干渉者をたすけ、ソビエト共和国にたいする反革命的陰謀をすすめ、ソビエトの活動家にたいするテロルを組織した。これらの党は十月革命以前には、労働者階級のなかでなにがしかの影響力をもっていたが、国内戦争の時期には、人民大衆のまえに反革命党としての正体をすっかり暴露してしまった。

国内戦争と干渉の時期は、これらの政党が政治的に破滅し、共産党がソビエト国家において最終的に勝利した時期であった。

第九章　国民経済回復のための平和的活動への移行期におけるボリシェビキ党
（一九二一年—一九二五年）

一、干渉と国内戦争の終結後のソビエト国家　回復期の諸困難

戦争がおわったのち、ソビエト国家は平和的な経済建設への軌道に移りはじめた。戦争により痛手をいやす必要があった。破壊された国民経済を回復し、工業、運輸業、農業を整頓する必要があった。

だが、平和建設への移行は、ひじょうに困難な環境のなかでおこなわなければならなかった。国内戦争での勝利は、やすやすとえられたものでなかった。四年にわたる帝国主義戦争と三年におよぶ干渉反対の戦争によって、国は荒廃していた。

一九二〇年の農業の総生産高は、戦前の総生産高の半分前後にすぎなかった。しかも、この戦前の水準というのが、ツァー・ロシアの極度に貧しい農村の水準だったのである。それにくわえ、一九二〇年には多くの県が不作にみまわれた。農民の経済は重大な困難にぶつかっていた。

崩壊の状態にあった工業は、もっとひどい事態にあった。一九二〇年の大工業の生産高は、戦前にくらべほとんど七分の一にへっていた。工場の多くは操業を停止し、鉱山は破壊され、水びたしになっていた。とりわけ困難な状態にあったのは冶金業だった。一九二一年の年間銑鉄の精錬高は、わずか十一万六千三百トン、すなわち戦前の銑鉄生産高の約三パーセントにすぎなかった。燃料は不足していた。運輸業は破壊されていた。国内にあった金属、織物のストックは、ほとんどつきてしまっていた。国内では、もっとも必要とされる物資、たとえばパン、油脂、肉類、履物、衣服、マッチ、食塩、灯油、石鹸などが極度に不足していた。

戦争中は、人びとはこういう欠乏や不足をがまんし、ときにはそれに気づかなくなっていたほどだった。だが、戦争がおわったいまとなっては、人びとはにわかにこのような物資の欠乏や不足をがまんできないものと感じ、即時それをなくすことを要求しはじめた。

農民のあいだに不満がでてきた。国内戦争の戦火のなかで、労働者階級と農民の軍事的、政治的同盟がうまれ、かためられた。この同盟をささえていた基礎は、周知のように農民は、ソビエト権力から、土地をもらい、地主や富農の抑圧をうけないように保護されたことであり、労働者は、食糧徴収制によって農民から食糧を手にいれていたことであった。

いまや、このような基礎では、もう不十分になった。

これまで、ソビエト国家は、農民から食糧徴収制によってすべての余剰食糧を徴収して、国防の需要にあてなければならなかった。食糧徴収制なしには、戦時共産主義政策なしには、国内戦争で勝利することはできなかったであろう。戦時共産主義は、戦争と干渉によって、よぎなくとった政策であった。戦争がおこなわれて

いたときには、農民は、甘んじて食糧徴収制をうけいれ、商品の不足を気にしなかった。ところが、戦争がおわり、地主がもどってくるおそれがなくなると、農民は、すべての余剰食糧の徴収にたいし、つまり食糧徴収制の方式にたいし、不満をしめし、十分な量の商品を供給してもらいたいと要求しはじめた。

レーニンが指摘したように、戦時共産主義の方式全体が、農民の利益と衝突するにいたったのである。

不満の気分は、労働者階級をも刺激した。プロレタリア階級は、国内戦争の重荷をおもにになって、白軍や干渉者の大軍にたいし、また、経済の破壊や飢餓にたいして、勇敢に、捨身でたたかった。もっともすぐれた、もっとも自覚した、もっとも捨身の、もっとも規律をまもった労働者は、社会主義への熱情の火に燃えていた。だが、きわめて深刻な経済の崩壊は、労働者階級にも影響をおよぼした。当時まだ操業していたわずかな工場も、生産を長く中断するという目にあった。労働者たちは、内職や、ライター作り、闇屋をやるほかなかった。プロレタリア階級独裁の階級的基礎は弱りはじめ、労働者階級はちりぢりになり、一部の労働者は農村に去って労働者ではなくなり、階級から脱落していった。飢えと疲れから、一部の労働者は不満の意をあらわした。

党は、国内の経済生活のすべての問題について、新しい環境に応じた党の新しい方針を作成するという問題に直面した。

そして党は、経済建設の諸問題についての新しい方針の作成にとりかかった。

だが、階級敵はねむりこけてはいなかった。かれらは、困難な経済状況を利用しようとたくらみ、農民の不満を利用しようとくわだてた。シベリア、ウクライナ、タンボフ県（アントノフ一味の反乱）で、白衛派や社

会革命党によって組織された富農の反乱がおこった。あらゆる種類の反革命分子——メンシェビキ、社会革命党、無政府主義者、白衛派、ブルジョア民族主義者の活動が活発になった。敵はソビエト権力にたいする新たな戦術方式をとった。かれらはソビエト色で染めかえをはじめ、「ソビエトを倒せ」という古い破産したスローガンではなく、「ソビエトに賛成、だが共産党員ぬきで」という新しいスローガンをかかげた。

階級敵の新しい戦術の明白なあらわれは、反革命的なクロンシュタットの反乱であった。反乱は、一九二一年三月、第十回党大会の一週間まえに開始された。反乱を指導したのは、社会革命党、メンシェビキ、それに、外国の代表者と結託した白衛派だった。最初のあいだ、反乱者は、資本家、地主の権力、財産を復活させようとするその意図を、「ソビエト」という看板で極力かくそうとした。かれらがだしたスローガンは「共産党員ぬきのソビエト」だった。反革命は、小ブルジョア大衆の不満を利用して、一見ソビエト的なスローガンのもとでソビエト権力をくつがえそうとたくらんだ。

クロンシュタット反乱を容易にしたのには二つの状況があった。それは、軍艦上の水兵の素質がわるくなったことと、クロンシュタットのボリシェビキの組織が弱かったことであった。十月革命に参加した古参の水兵は、ほとんどすべて前線にいって赤軍の隊伍で英雄的にたたかっていた。海軍には、革命の試練をへていないあたらしい補充兵がはいった。こういう補充兵は、まったく訓練をうけたことのない農民の大衆であり、食糧徴収制にたいする農民の不満を反映していた。当時のクロンシュタットのボリシェビキ組織についていえば、これまたたび重なる前線への動員によってひどく弱体化していた。このような状況があったので、社会革命党、メンシェビキ、白衛派は、クロンシュタットにもぐりこみ、そこをおさえることができた。

反乱者は、第一流の要塞、艦隊、大量の装備、弾薬を奪った。国際反革命は勝利を祝った。だが、敵がよろこぶのははやすぎた。反乱は、ソビエト軍隊によってたちまち鎮圧された。党は、クロンシュタットの反乱者にたいして、ウォロシーロフ同志のひきいるもっとも優秀な子弟、つまり、第十回大会の代議員たちを派遣した。赤軍兵士は、薄氷をふみつつクロンシュタットへと行進した。氷がわれて、多くの兵士がおぼれ死んだ。近寄ることもできないような堅固なクロンシュタットの諸砲台にたいして、突撃を加えなければならなかった。だが、革命にたいする忠誠と勇敢、ソビエト権力のために一身をささげる決意が、勝を制した。クロンシュタットの要塞は、赤軍の突撃で占領された。クロンシュタットの反乱は一掃された。

二、労働組合にかんする党内の論争　第十回党大会　反対派の敗北　新経済政策〔ネップ〕への移行

党の中央委員会、そして党中央委員会のなかで多数を占めるレーニン派にとっては、戦争がおわり、平和的な経済建設へと移ったのちは、戦争と封鎖という環境のもとでつくりだされた戦時共産主義というきびしい制度をつづける根拠がもはやなくなった、ということは明白であった。

中央委員会は、食糧徴収制がすでに必要でなくなったこと、農民が、その生産の余剰の大きな部分を自分の裁量で利用できるようにするためには、食糧徴収制を食糧税にかえるべきだ、ということを理解していた。中

央委員会は、この方策は、農業を活気づけ、工業の発展に必要な穀物と工芸作物の生産を拡大し、国内の商品流通を活気づけ、都市への供給を改善して、労農同盟のために、新たな基礎、すなわち経済的な基礎をつくりだす可能性をあたえるだろう、ということを理解していた。

中央委員会はまた、工業を活気づけることがもっとも優先的な任務であることをはっきり理解していたが、中央委員会の考えは、労働者階級とその労働組合を参加させることなしには工業を活気づけることはできないということ、経済の破壊が干渉や封鎖とおなじように人民の危険な敵であることを労働者に納得させれば、労働者をこの事業に参加させることができるということ、命令が必要であった前線でおこなわれていたような軍事的命令によってではなく、説得により、説得という方法によって、労働者階級にたいして行動するならば、党と労働組合は、無条件にこの事業をやりとげることができるだろう、ということであった。

だが、すべての党員が中央委員会とおなじように考えたわけではなかった。各種の反対派の小グループ——トロツキスト、「労働者反対派」、「左派共産主義者」、「民主集中主義者」などは、平和的な経済建設の軌道に移るさいの困難に直面して混乱状態におちいり、動揺していた。当時、党内には、もとのメンシェビキ、もとの社会革命党、もとのブンド派、もとのボロチビスト、そしてロシアの辺境地方のさまざまな半民族主義者がすくなからずいた（訳注：ボロチビストは、ウクライナの民族主義的・排外主義的な社会革命党左翼。一九一八年まで中央機関紙『ボロチバ』〔闘争〕を発行していたので、ボロチビストとよばれるようになった）。かれらは大部分、あれこれの反対派小グループに加わっていた。これらの連中は、真のマルクス主義者ではなく、経済発展の法則をしらず、党のレーニン的な鍛練をうけていなかったので、反対派小グループの混乱と動

揺をつよめるばかりであった。そのなかの一部のものは、戦時共産主義のきびしい制度を弱める必要はなく、反対に、「もっとネジをしめる」必要があると考えていた。他の一部のものは、国民経済の回復の事業から党と国家は手をひくべきであり、この事業は、そっくり労働組合の手にわたさなければならないと考えていた。党内の一部のグループのあいだにこのような混乱がある以上、論争ずきの連中、いろいろの反対派の「指導者」が現われ、党に論争をおしつけてくることは、あきらかであった。

はたして、事態はそのとおりになった。

労働組合の問題は、当時、党の政策のなかでの主要な問題ではなかったのに、論争は、労働組合の役割についての問題からはじまった。

レーニンに反対し、中央委員会のレーニン的多数派に反対する、論争と闘争の首唱者は、トロツキーだった。事態を激化させようとして、トロツキーは、一九二〇年十一月はじめの第五回全ロシア労働組合会議の代議員中の共産党員の会議に出席し、「ネジをしめろ」、「労働組合の刷新」という、怪しげなスローガンを提起した。トロツキーは、即時、「労働組合を国家化せよ」という要求をもちだした。かれは、労働者大衆を説得するという方法に反対した。かれは、軍事的方法を労働組合にもちこむことを主張した。かれは、労働組合のなかに民主主義を拡大することに反対し、労働組合の機関の選挙制に反対した。

労働者組織の活動は説得の方法をぬきにしては考えられないのに、トロツキストは説得の方法のかわりに、あからさまな強制の方法、あからさまな命令手段を提議した。労働組合の活動でトロツキストがたまたま指導部にいたところでは、かれらの政策によって組合のなかに衝突、分裂、分解がひきおこされた。トロツキスト

はその政策によって、党外の労働者大衆を党に敵対させ、労働者階級を分裂させた。

労働組合についての論争は、実際には、労働組合問題よりもずっと大きな意義をもっていた。のちに、ロシア共産党（ボリシェビキ）中央委員会総会（一九二五年一月十七日）の決議のなかに指摘されているように、実際に、そのときの論争の的になったのは、「戦時共産主義に立ち向かっている農民にたいする態度について、党外の労働者大衆にたいする態度について、そして一般に、国内戦争がすでに終結した時期における大衆にたいする党のかかわり方について」であった。（ソ連共産党〔ボリシェビキ〕決議集、第一部）

トロツキーにつづいて立ち現われたその他の反党グループとしては、「労働者反対派」（シリャプニコフ、メドベーデフ、コロンタイ、その他）、「民主集中主義者」（サプロノフ、ドロブニス、ボグスラフスキー、オシンスキー、スミルノフ、その他）、「左派共産主義者」（ブハーリン、プレオブラジェンスキー）があった。

「労働者反対派」は、すべての国民経済の管理を「全ロシア生産者大会」にひきわたせ、というスローガンをかかげた。かれらは、党の役割を皆無にしてしまい、経済建設におけるプロレタリア階級独裁の意義を否定した。「労働者反対派」は、労働組合を、ソビエト国家と共産党に対立させた。かれらは、労働者階級の最高の組織形態は、党ではなく、労働組合だとみなした。「労働者反対派」は、本質的には、無政府主義・サンジカリスト的な反党グループであった。

「民主集中主義者」のグループ（デッィスト）は、分派や小グループの完全な自由を要求した。民主集中主義者も、トロツキストとおなじく、ソビエトおよび労働組合における党の指導的役割を破壊しようとつとめた。レーニンは、民主集中主義者を、「どんなおしゃべりよりもさわがしい」分派とよび、その綱領を社会革

命党、メンシェビキ的な綱領だといった。

ブハーリンは、レーニンと党にたいする闘争でトロッキーを助けた。ブハーリンは、プレオプラジェンスキー、セレブリャコフ、ソコリニコフといっしょに、「緩衝」グループをつくった。このグループは、もっとも凶悪な分派の成員であるトロッキストを弁護し、掩護した。レーニンは、ブハーリンの行動を「思想的な退廃の骨頂」とよんだ。まもなく、ブハーリン派は、公然とトロッキストと提携してレーニンに反対した。

レーニンとレーニン派は、主要な攻撃を、反党グループのうちの主力であるトロッキストに集中した。かれらは、労働組合を軍事組織と混同しているトロッキストの罪状を暴露し、軍事組織の方法を労働組合にもちこむべきではないことをトロッキストに指摘した。レーニン派は、反対派諸グループの政綱に対抗して、かれらの政綱を作成した。この政綱では、労働組合は、管理の学校であり、経営の学校であり、共産主義の学校である、ということが指摘された。労働組合は、説得の方法を基礎にして、すべての活動をおこなわなければならない。こうした条件のもとではじめて労働組合は、すべての労働者を、経済的崩壊との闘争に立ちあがらせ、社会主義の建設に参加させることができる。

反対派の諸グループとの闘争のなかで、党組織は、レーニンのまわりに結集した。モスクワでの闘争は、とくに緊迫した性質を帯びた。反対派は、かれらの主力をここに集中し、首都の組織を手に入れようともくろんだ。だが、分派の成員のこのような陰謀にたいし、モスクワのボリシェビキは、断固たる反撃を加えた。ウクライナの党組織でも、するどい闘争が展開された。ウクライナのボリシェビキは、そのころウクライナ共産党（ボリシェビキ）中央委員会の書記であったモロトフ同志の指導のもとで、トロッキストとシリャプニコフ派

を粉砕した。ウクライナ共産党は、いぜんとしてレーニンの党の忠実な支柱だった。バクーにおいては、オルジョニキッゼ同志の指導のもとで、反対派の粉砕が進められた。中央アジアでは、反党グループとの闘争をカガノビッチ同志が指導した。

すべての主要な地方の党組織は、レーニンの政綱に賛同した。

一九二一年三月八日に、第十回党大会がひらかれた。この大会には、議決権をもつ六百九十四人の代議員が出席した。かれらは、七十三万二千五百二十一人の党員を代表していた。審議権のある代議員はあわせて二百九十六人であった。

大会は、労働組合問題についての論争を総括し、圧倒的多数でレーニンの政綱を承認した。

レーニンは、大会の開会を宣するにあたって、論争はゆるしがたいぜいたくであった、と言明した。かれは、共産党の党内闘争と分裂に、敵がひたすら期待をかけていることを、指摘した。

第十回大会は、分派諸グループの存在が、ボリシェビキ党とプロレタリア階級独裁にとってきわめて大きな危険であることを考慮し、党の統一の問題に特別の注意をはらった。レーニンはこの問題について報告をおこなった。大会は、すべての反対派諸グループを非難し、それらは「実際にはプロレタリア革命の階級敵を援助するものだ」と指摘した。

大会は、すべての分派グループをただちに解散することを命じ、いかなる分派活動をもゆるさないよう厳重に注意することをすべての党組織に委任するとともに、大会の決定を履行しないものは、ただちに、無条件に党から除名されることとした。大会は、中央委員会に全権をあたえ、中央委員が規律に違反したばあい、また

分派活動を復活し、または容認したばあいには、中央委員会および党からの除名にいたる一切の党としての処罰の手段をとることにした。

すべてのこれらの決定は、レーニンが提起し、そして大会で採択された『党の統一について』という特別決議のなかにかきいれられた。

この決議のなかで、大会は、第十回大会の時期のいくつかの事情のため、国内の小ブルジョア的住民のあいだに動揺がつよまっているとき、党の隊伍の統一と団結、プロレタリア階級の前衛の意志の統一が、とりわけ必要であることに、全党員の注意をうながした。

決議にはこう指摘された。

「だが、すでに労働組合についての全党的反対論の前にも、党内には分派活動のいくらかの徴候があらわれていた。すなわち、独自の政綱をもち、ある程度門戸をとざし、自己のグループ的な規律をうち立てようと意図するいくつかの小グループの成立が、それである。すべての自覚した労働者は、どんなものでも分派活動は、有害であり、ゆるしえないものであることを、はっきり認識しなければならない。分派活動は、実際には、不可避的に協力活動を弱めることになり、また、党内にもぐりこんでいる党の敵が、（党の）分裂を深め、この分裂を反革命の目的のために利用しようとしてくりかえすくわだてに、油をそそぐことになる。」

大会はこの決議のなかで、つづいてこういっている。

「厳密な、確固とした共産主義的な路線からのあらゆる逸脱を、プロレタリア階級の敵が極力利用す

るということは、クロンシュタットの反乱という実例によって、もっとも明瞭にしめされた。当時、世界のあらゆる国のブルジョア反革命や白衛派は、ロシアのプロレタリア階級独裁をくつがえすためであれば、ソビエト制度というスローガンをさえうけいれる用意があることを、即座に表明した。その当時、社会革命党および一般のブルジョア反革命は、ロシアのソビエト政府に反対する暴動がまるでソビエト権力のためをはかったものであるかのようなスローガンを、クロンシュタットで利用した。これらの事実が十分証明しているように、白衛派は、ロシアにおけるプロレタリア革命のトリデを弱め、くつがえすためであれば、共産主義者をよそおい、さらには、共産主義者よりも「もっと左翼的」によそおうことにつとめ、またよそおうことができる。クロンシュタット反乱の前夜、ペトログラードで発見されたメンシェビキのビラもまた、メンシェビキが、ことばのうえでは、反乱に反対であり、そして、ただちょっとした手直しと称するものをほどこしさえすれば、ソビエト権力を擁護するかのようにみせかけながら、実際には、クロンシュタットの反乱者、社会革命党や白衛派をはげまし支援するために、いかにロシア共産党内の意見の対立を利用したかを、示していた。」

決議は、党の宣伝は、プロレタリア階級独裁の成功の基本条件としての、党の統一、プロレタリア階級の前衛の意志の統一を実現する見地から、分派活動の害悪と危険性を詳しく説明しなければならない、と指示した。

他方では、党の宣伝は、ソビエト権力の敵のとるもっとも新しい戦術的手口の特徴を説明しなければならない、ということが大会の決議でいわれていた。

決議はこう指示した。

「いまや、これらの敵は、公然と白軍の旗をたてた反革命が見こみがないことをさとって、ロシア共産党内部の意見の対立を利用し、そして、ソビエト権力を認めることに外見上もっとも近そうにみえる政治的グループに権力を引きわたすという方法で、なんとかして反革命をおしすすめようとけんめいに努力している。」（『ソ連共産党〔ボリシェビキ〕決議集』、第一部）

決議は、さらにつぎのように指示している。党の宣伝は、「また、これまでの革命の経験をも明らかにしなければならない。当時、反革命は、やはり、革命的独裁を動揺させ、くつがえし、それによって、将来反革命、資本家、地主が完全な勝利をかちとる道をひらくために、極端な革命党にもっとも近い小ブルジョア的なグループを援助した。」

『党の統一について』の決議と密接なつながりのあるものとしては、このほかに『わが党内のサンジカリスト的および無政府主義的偏向について』の決議があり、この決議も、レーニンによって提起され、大会で採択された。第十回大会は、この決議で、いわゆる「労働者反対派」を非難した。大会は、無政府主義的サンジカリスト的偏向の思想を宣伝することは、共産党に所属することとあいいれないことであると認め、全党に、この偏向と断固たたかうことをよびかけた。

第十回大会は、食糧徴収制から食糧税への移行、新経済政策〔ネップ〕への移行についてのもっとも重要な決議を採択した。

戦時共産主義から新経済政策へのこの転換には、レーニンの政策のすべての賢明さと先見の明とがあらわれ

ていた。

大会の決議には、食糧徴収制を食糧税にかえるとのべられていた。現物食糧税は、余剰食糧の徴収よりも額が少なかった。税額は春のたねまきよりまえに公布されなければならず、納税の期限ははっきり規定された。税額をこえるすべての余剰は、完全に農民の処理にゆだねられ、農民にはこのあまった分について自由に売買することがゆるされた。レーニンはその報告のなかで、商業の自由は、最初は、国内の資本主義をあるていど活発にするであろうと指摘した。私営商業をゆるし、私営工業家に小企業の開発をゆるさなければならない。だが、これはおそれるにはおよばない。レーニンの考えは少しばかりの商品流通の自由は、農民に経営についての関心をよびおこし、その労働の生産性を高め、農業の急速な高揚をもたらすであろう、それを基礎にして国営工業が復興し、私営資本がしめ出されるであろう、力と資財をたくわえたのち、強大な工業——社会主義の経済的基礎をうちたて、そのあかつきには国内の資本主義の名残りを一掃するため断固として攻撃に転ずることができるであろう、というのであった。

戦時共産主義は、都市と農村の資本主義的要素の要塞を、強襲によって、正面攻撃によって占領しようとするこころみであった。この攻撃にあたって、党は、遠くにつっぱしり、自分の根拠地からはなれてしまう危険があった。いまや、レーニンは、いくらか後退し、しばらく後方近くに退き、強襲から、より持久的な要塞包囲へうつることによって、力をたくわえ、ふたたび攻撃をはじめることを、主張した。

トロツキストやその他の反対派の連中は、新経済政策は単なる退却だと考えた。かれらは資本主義復活の路線をとっていたので、このような解釈はかれらにとって都合がよかった。これは、新経済政策にたいするきわ

めて有害な、反レーニン的な解釈であった。実際には、新経済政策の実施後一年で、レーニンは第十一回党大会において、退却が終わったことを言明し、「私営経済資本にたいし攻撃を準備せよ」というスローガンを提起した。

反対派の連中は役にたたないマルクス主義者であり、ボリシェビキ的な政策の問題については全く無知だったので、新経済政策の本質も、また、新経済政策の当初にとられた退却の性質も理解しなかった。新経済政策の本質については、すでにのべた。退却の性質についていえば、退却にもいろいろある。ときには、敗北をこうむったために、党または軍隊が退却しなければならないこともある。このような場合に党または軍隊が退却するのは、自己を保存し、自己の幹部を保存して、新たな戦闘を準備するためである。レーニンは、新経済政策をとるにあたって、このような退却を主張したのではなかった。なぜなら、党は敗北をこうむってはいなかったし、敵から撃破されてもいなかったばかりでなく、むしろその反対に、党自体が、国内戦争の時期に干渉者や白衛派をうちやぶっていたからである。だが、ときには、勝利をかちとった党もしくは軍隊が、攻撃のさい後方の根拠地を確保しないで、あまりにも遠くまでつっぱしりすぎることもある。これは重大な危険をかもしだす。このような場合、経験をつんだ党もしくは軍隊なら、一般に、その根拠地から切りはなされないために、いくらか後退し、その後方により近い地点までしりぞくことが必要だ、と考える。それは、後方根拠地とよりしっかりとむすびつき、すべての必要なものを確保し、そのあとで、いっそうの確信をもって、勝利への保障をもって、攻撃を再開するためである。レーニンが新経済政策にあたってとったのも、まさにこのような性質の一時的な退却であった。レーニンは、コミンテルン第四回大会で新経済政策実施の理由について報告し

たさい、率直にいった。「われわれはその経済的攻撃のなかであまりにも遠くまで前進した。われわれは自分のために十分な根拠地を確保しておかなかった。」したがって、安全な後方にむかって一時的な退却をおこなわなければならなかった。

反対派の不幸は、新経済政策のもとでの退却のこの特質を、無知なために理解しなかったし、そして死ぬまで理解しなかったことにあった。

新経済政策にかんする第十回大会の決定は、社会主義建設のための労働者階級と農民の堅固な経済的同盟を保証した。

大会のもう一つの決議、すなわち民族問題についての決議も、この基本任務のために役立つものであった。民族問題についての報告をおこなったのはスターリン同志であった。スターリン同志はこういった。われわれはすでに民族的抑圧をとりのぞきはしたが、これではまだ不十分である。現在の任務は、過去の重くるしい遺産、すなわち、以前の被抑圧民族の経済的・政治的・文化的なたちおくれを一掃することにある、かれらがこの点で中央ロシアに追いつくのを援助すべきである、と。

さらに、スターリン同志は、民族問題における二つの反党的偏向、すなわち、大国的（大ロシア的）排外主義と地方的民族主義を指摘した。大会は、共産主義とプロレタリア国際主義にとって有害で危険なものとして、この二つの偏向を非難した。同時に、大会は、その主要な打撃を、主要な危険としての大国主義に、すなわち、ツァー制度のもとで大ロシア的排外主義者が非ロシア諸民族に向かってしめしたような異民族にたいする態度の名ごりと遺物に集中した。

三、新経済政策の初歩的な結果　第十一回党大会　ソビエト社会主義共和国連邦の形成　レーニンの病気　レーニンの協同組合計画　第十二回党大会

新経済政策の実施は、党内の不安定な要素の反抗にぶつかった。この反抗は二つの方向から行なわれた。一つの方向からは、「左翼的な」おしゃべり屋、すなわちロミナッゼ、シャツキン、その他のような型の政治的奇形児が立ち現われた。かれらは、新経済政策は、十月革命でかちえた成果を放棄し、資本主義に逆もどりし、ソビエト権力を滅亡させるものであるというように「証明」しようとした。この連中は、政治には無知であり、経済の発展法則に通じていなかったので、党の政策を理解せず、混乱におちいり、退廃の気分をまわりにまきちらした。もう一つの方向からは、トロツキー、ラデック、ジノビエフ、ソコリニコフ、カーメネフ、シリャプニコフ、ブハーリン、ルイコフらのたぐいの、あからさまな投降者が現われた。かれらは、わが国の社会主義発展の可能性を信じないで、資本主義の「威力」のまえにひれふし、そして、ソビエト国家における資本主義の陣地をかためるために、国内でも国外でも私的資本に大きく譲歩することを要求し、また、権利企業あるいは、私的資本の参加する共営株式会社の方式で、国民経済におけるソビエト権力の多くの経済的要衝を私的資本にゆずりわたすことを要求した。

前者も後者も、マルクス主義、レーニン主義には縁のない連中であった。

この連中を、前者も後者も、党は暴露し、孤立させた。党は、混乱助長者や投降主義者に断固たる反撃をくわえた。

党の政策にたいするこのような反抗が存在していたことは、党内の動揺分子を清掃する必要を、いまいちど感じさせた。そこで中央委員会は、党をかためるための大々的な活動をすすめ、一九二一年に党の粛清をおこなった。粛清は、党外者の参加のもとに、公開の集会でおこなわれた。レーニンは、「……ペテン師、官僚化したもの、不誠実な連中、ぐらぐらしている共産党員、および『うわべ』は塗りかえたが内心ではいぜんとしてメンシェビキのままの「メンシェビキ」を徹底的に党から一掃するよう、勧告した。(レーニン『党の粛清について』)

粛清の結果、合計約十七万人、すなわち全党員の約二五パーセントが党から除名された。

粛清は、党を大いにかため、党員の社会的構成を改善し、党にたいする大衆の信頼をつよめ、党の威信をたかめた。党の団結性、規律性は増大した。

新経済政策の最初の一年は、この政策の正しさを実証した。新経済政策への移行は、新たな基礎にたつ労働者、農民の同盟を大いに強めた。プロレタリア階級独裁の力と強さは増大した。富農の土匪的行動はほとんど完全に一掃された。食糧徴収制が廃止されたのちは、中農は、ソビエト権力をたすけて富農の徒党とたたかった。ソビエト権力は、国民経済におけるすべての経済的要衝、すなわち大工業、運輸、銀行、土地、国内商業、対外貿易を、その手に保持した。党は、経済戦線における転換をやりとげた。農業はすぐに前進しはじめた。

工業と運輸は初歩的な成功をおさめた。いまのところまだきわめて緩慢ではあったが、しかしほんものの経済的高揚がはじまった。労働者、農民は、党がただしい道にたっていることを感じとり、またその目でみた。

一九二二年三月に、第十一回党大会がひらかれた。この大会には、議決権をもつ五百二十二人の代議員が、五十三万二千人の、つまり前回の大会より少ない党員を代表して出席した。審議権のある代議員は百六十五人だった。党員の数が減ったのは、すでに党の隊伍の粛清がはじまっていたからである。

党大会では、新経済政策の最初の一年の総括がおこなわれた。これらの総括をもとにし、レーニンは大会でつぎのように声明することができた。

「われわれは一年間退却しつづけた。いまやわれわれは、党の名で、もう十分だ！　といわなければならない。退却によってもとめた目的はすでにはたされた。この時期は終わろうとしている。あるいは終わってしまったともいえる。いま提起されているのは、別の目的、つまり、勢力の再編成である。」

（レーニン『ロシア共産党（ボリシェビキ）第十一回大会への中央委員会の政治報告』）

レーニンは、新経済政策は、資本主義と社会主義とのあいだの生死をかけた、激烈なたたかいを意味すると教えた。「どちらが、どちらに勝つか」——問題はこうであった。勝利するためには、都市と農村のあいだの商品流通を極力発展させることによって、労働者と農民とのあいだ、社会主義工業と農民経済とあいだの連係を保障しなければならない。このためには、経済の管理を学びとらなければならないし、文化的に商売することを学びとらなければならない。

この時期において、商業は、党の当面する諸任務の鎖のなかの基本的な一環だった。この任務の解決なしに

は、都市と農村のあいだの商品流通を発展させることはできないし、労働者と農民の経済的同盟をかためることができず、農業をたかめ、崩壊から工業を脱出させることもできなかった。

当時、ソビエト商業はまだきわめて弱かった。商業機関はまだきわめて弱く、共産党員は、まだ商業に未熟であり、まだネップマンという敵を研究しておらず、まだかれらとのたたかいかたを学んでいなかった（訳注：ネップマンは、新経済政策〔ネップ〕の初期における個人企業家、投機商人のこと）。個人商人、ネップマンは、ソビエト商業の弱いのを利用して、織物やその他のよく売れる品物の売買を一手ににぎっていた。国営商業と協同組合商業を組織する問題がきわめて重要な意義をもつにいたった。

第十一回大会後、経済活動はあらたな勢で活気づいてきた。国をおそった凶作のきずあとは、見事に一掃された。農民経済は急速にたちなおってきた。鉄道の仕事は改善された。操業を再開する工場の数がますます多くなった。

一九二二年十月、ソビエト共和国は大勝利を祝った。すなわち、赤軍と極東のパルチザンは、干渉者の手にあったソビエトの最後の地域であるウラジオストクを日本干渉者から解放した。

ソビエト国家の全領土から干渉者が一掃され、そして社会主義建設と国防の任務がソビエト国家の諸民族の同盟をさらに固めることを要求するにいたったいま、各ソビエト共和国を、いっそう緊密に単一の国家同盟に統合するということが、当面の問題になってきた。社会主義を建設するために、すべての人民の力を結合しなければならなかった。われわれの祖国のすべての民族の全面的な発展を保障しなければならなかった。強固な国防を組織しなければならなかった。この目的のために、ソビエト国家のすべての民族をいっそう接近させせな

ければならなかった。

一九二二年十二月、第一回全連邦ソビエト大会がひらかれた。この大会で、レーニン、スターリンの提案にもとづき、ソビエト諸民族の自由意志による国家的統合、すなわちソビエト社会主義共和国連邦が成立した。最初これに加盟したのは、ロシア・ソビエト連邦社会主義共和国、後カフカズ・ソビエト連邦社会主義共和国、ウクライナ・ソビエト社会主義共和国、白ロシア・ソビエト社会主義共和国であった。その後まもなく、中央アジアには三つの独立の連邦ソビエト共和国、すなわち、ウズベク、トルクメン、タジックの連邦ソビエト共和国が成立した。いまや、これらすべての共和国は、自由意志と同権にもとづき、そのおのおのがソビエト連邦から自由に脱退する権利を保留して、単一のソビエト国家の同盟——ソ連邦に統合された。

ソビエト社会主義共和国連邦の成立は、ソビエト権力の強化と、民族問題にかんするボリシェビキ党のレーニン、スターリン的政策の大きな勝利を意味した。

一九二二年十一月、レーニンは、モスクワ・ソビエトの総会で演説した。レーニンは、ソビエト権力の成立いらいの五年間を総括するにあたって、「新経済政策のロシアは社会主義のロシアとなるであろう」という固い確信を表明した。これは、レーニンが全国にむかっておこなった最後の演説であった。一九二二年の秋、党は大きな不幸にみまわれた。レーニンが重い病いにかかったのである。全党と全勤労者は、レーニンの病気をわが身の大きな苦痛として感じとった。だれもが、親愛なレーニンの生命を気づかった。だが、レーニンは病中でもその仕事をやめなかった。レーニンはすでに重態であったが、なおいくつかのきわめて重要な論文をかきあげた。これらの最後の諸論文のなかで、レーニンは、これまでなしとげられた仕事を総括した。そして、

農民を社会主義建設の事業にひきいれることによってわが国に社会主義を建設する計画を作りあげた。この計画のなかで、レーニンは、農民を社会主義建設の事業にひきいれる協同組合計画を提起した。

レーニンは、一般に協同組合、とりわけ農業協同組合は、小さな個人経済から大規模な協同の生産連合、すなわちコルホーズへの移行の、何百万の農民にうけいれやすく、わかりやすい道である、とかんがえた。レーニンはこう指示した。わが国の農業の発展は、協同組合をつうじて農民を社会主義建設にひきいれるという道にそって前進すべきであり、集団主義の原則を農業に、はじめは販売の面で、そのあと農産物の生産の面で、徐々に植えつけるという道にそって前進すべきである、と。レーニンはまたこう指示した。プロレタリア階級独裁および、労働者階級と農民の同盟のもとで、農民にたいするプロレタリア階級の指導が確保されているもとで、社会主義工業が存在しているもとで、こうしたばあいには、正しく組織され、そして何百万の農民を抱擁する生産協同組合は、それによってわが国に完全な社会主義社会を建設することのできる手段である、と。

一九二三年四月、党の第十二回大会がひらかれた。これは、ボリシェビキが権力を奪取したのち、レーニンが出席できなかった最初の大会であった。大会には、議決権をもつ四百八名の代議員が、前回の大会よりも少ない、三十八万六千人の党員を代表して出席した。この点には、引きつづき、いちじるしい部分の党員を党から排除することになった党の隊伍の粛清の結果が現われている。審議権をもつ代議員は四百十七人であった。

第十二回党大会は、レーニンがその最後の論文や手紙のなかでおこなったすべての指示を、その決議のなかにとり入れた。

大会は、新経済政策を、社会主義の陣地からの退却だとか、陣地を資本主義に明けわたすものだとか解釈し

た人びとにたいし、また、資本主義への隷属を提案した人びとにたいし、すべて断固たる反撃を加えた。大会でこのような提案をしたのは、トロツキーの味方であるラデックとクラシンであった。かれらは、外国の資本家に投降し、ソビエト国家の生命にかかわる工業部門を外国の資本家に利権として提供することを提案した。かれらは、十月革命で廃棄されたツァー政府の債務を支払うことを提案した。党は、これらの投降主義的な提案を、裏切り的な提案として非難した。党は、利権政策の利用を拒否はしなかったが、それはただ、ソビエト国家にとって有利な部門と範囲だけに限定されていた。

ブハーリンとソコリニコフは、すでに大会前に、対外貿易の独占を撤廃することを提案していた。この提案もやはり、新経済政策を、資本主義への陣地の明けわたしと解釈したことの結果であった。レーニンは、そのとき、ブハーリンを、投機者、ネップマン、富農の擁護者として非難した。第十二回大会は、対外貿易の確固とした独占を侵害する企てを、断固としてしりぞけた。

同時に、大会は、農民にたいする致命的な政策を党におしつけようとするトロツキーの意図にも反撃を加えた。大会は、小さな農民経済が国内で優勢を占めている事実を忘れてはならないと指摘した。大会は、重工業をもふくめた工業の発展は、農民大衆の利益に反してではなく、それと結合して、全勤労住民の利益になるように進めなければならないことを強調した。これらの決議は、トロツキーにむけられたものであった。トロツキーは、農民経済を搾取する方法によって工業を建設することを提案し、プロレタリア階級と農民の同盟の政策を事実上認めていなかったからである。

同時にまた、トロツキーは、プチロフ工場、ブリャンスク工場など、国防上の意義のある大工場を、利潤を

あげていないという理由で、閉鎖にするように提案した。大会は、トロツキーの提案を、怒りをもって否決した。

第十二回大会は、レーニンが書面の形で大会に送った提案をもとにし、中央統制委員会と労農監督局との合同機関を創設した。この機関は、わが党の統一を守り、党と国家の規律をかため、ソビエト国家機関をあらゆる方法で改善するという重大な任務をになっていた。

大会は、民族問題に、重大な注意をはらった。スターリン同志がこの問題で報告した。スターリン同志は、民族問題におけるわれわれの政策の国際的意義を強調した。西方、東方の被抑圧諸民族は、ソ連が、民族問題の解決、民族抑圧の絶滅の手本であることを認めていた。スターリン同志は、ソ連の諸民族のあいだの経済的不平等と文化的不平等を一掃するための精力的な活動が必要であると指示した。かれは、全党にたいし、民族問題における二つの傾向――大ロシア排外主義と地方ブルジョア民族主義に反対して断固闘争するようよびかけた。

大会では、民族主義的偏向者、および少数民族にたいするかれらの大国主義政策が暴露された。そのとき、党に反対して発言をしたのがグルジヤの民族主義的偏向者ムジバニらであった。民族主義的偏向者は、後カフカズ連邦の成立に反対し、後カフカズ諸民族の友誼をつよめることに反対した。偏向者は、グルジヤの他の諸民族にたいし、まったく大国排外主義的な態度をとった。かれらは、すべての非グルジヤ人、とりわけアルメニア人を、チフリスから追い出し、グルジヤ婦人が非グルジヤ人と結婚したものはすべてグルジヤ籍をうしなうという法律を発布した。トロツキー、ラデック、ブハーリン、スクルィプニク、ラコフスキーはグルジヤの

民族主義的偏向者を擁護した。

大会が終わったのち、まもなく各民族共和国の活動家による民族問題についての特別協議会がひらかれた。この協議会では、スルタン・ガリエフらのタタールのブルジョア民族主義者のグループ、およびファイズラ・ホジャエフらのウズベクの民族主義的偏向者のグループが暴露された。

第十二回大会は、新経済政策の二年来の結果を総括した。これらの総括は、勇気と最後の勝利への確信をもたらした。

「わが党は終始結束し、団結し、もっとも大きな転換を切りぬけ、ひるがえる旗をかかげて前進した。」――スターリン同志は大会でこうのべた。

四、国民経済の回復の困難との闘争　レーニンの病気に乗ずるトロツキストの活動の強化　党内の新たな論争　トロツキストの敗北　レーニンの死　レーニン記念の党員拡大　第十三回党大会

国民経済の回復のための闘争は、はじめの数年のうちに、いちじるしい成功をおさめた。一九二四年ごろには、すべての分野で高揚がみられた。播種面積は一九二一年から大いにふえ、農民経済はいよいよ強固になっていった。社会主義工業は増大し、発展した。労働者階級の数は大いにふえた。賃金も高まった。労働者、農

民の生活は、一九二〇——一九二一年にくらべ、らくになり、よくなった。

だが、まだ根絶されなかった混乱のきずあとが、依然として感じられた。工業はまだ戦前の水準にたっせず、工業の伸びは国の需要の伸びには追いつかなかった。一九二三年に、まだおよそ百万人の失業者がいた。国民経済の伸びが遅々として進まなかったので、失業をなくすすべがなかったからである。商業は、都市の製品の価格が法外に高いため、その発展は停滞しがちであった。このような高価格は、ネップマンやわれわれの商業組織内のネップマン的な要素が国におしつけたものであった。そのため、ソビエトのルーブルははげしく動揺しはじめ、その価値は下落した。すべてこうしたことが、労働者、農民の状態の改善をさまたげた。

一九二三年の秋、経済上の困難はいくぶんひどくなった。これは、われわれの工業および商業機関がソビエトの価格政策に違反したからであった。工業品の価格と農産物の価格のあいだには、はげしいひらきがあった。穀物の価格は低かったのに、工業品の価格は法外に高かった。工業では諸掛りが高くつき、これが商品の価格を高めた。農民が穀物を売って手に入れた通貨は、たちまちにして減価した。それにくわえ、当時、国民経済最高委員会に席のあったトロツキストのピャタコフは企業経営の担当者たちにたいし犯罪的な指令を出した。それは、工業の発展のためという美名のもとで、工業製品を売るさいにはできるだけ多くの利潤をたたき出すこと、遠慮なく価格をつりあげること、というものであった。実際には、こうしたネップマン的なスローガンは、工業生産の土台をせばめ、工業を崩壊させることになるだけであった。こうした条件のもとでは、農民にとって、都市の商品を買うことは不利になる。それで、農民はこうした商品を買うのをやめた。販売の危機がはじまり、それは工業にも影響をおよぼした。賃金の支払いが困難になったので、労働者の不満をひき

おこした。一部の工場では、もっともおくれた労働者たちが、仕事を放棄した。

党中央委員会は、このすべての困難と欠陥をとりのぞく方法を講じた。販売の危機を一掃する手段がとられた。日用必需品の価格の引き下げがおこなわれた。幣制改革の実行——安定した強固な通貨、チェルウォネツへの移行が決定された。労働者への賃金支給の問題が整頓された。ソビエト機関や協同組合の機関をつうじて商業をひろげ、あらゆる種類の個人経営者や投機者を商業からしめだす方法が講じられた。

協力して袖をまくりあげて仕事にとりかかることが必要であった。党に忠実な人びとはそのように考え、行動した。だが、トロツキストはそうはしなかった。かれらは、重い病気のため隊列をはなれたレーニンの不在に乗じて、党とその指導部に新たな襲撃をかけてきた。かれらは、党を撃破し、その指導部をくつがえす好機が到来したと判断した。かれらは、党に反対する闘争にあたってあらゆるものを利用した。すなわち、一九二三年秋のドイツとブルガリアにおける革命の敗北、国内の経済的困難、レーニンの病気をも、利用した。党の領袖が病床につき、ソビエト国家にとって困難な、まさにこのとき、トロツキーは、ボリシェビキ党への攻撃を開始した。かれは、党内のすべての反レーニン的な要素をそのまわりにかき集め、党に反対し、党の指導部に反対し、党の政策に反対する反対派の政綱をでっちあげた。この政綱は、四十六人の反対派の声明とよばれた。レーニンの党にたいする闘争において、すべての反対派グループ——トロツキスト、民主集中主義者、「左派共産主義者」「労働者反対派」の残党が、連合した。かれらはその声明のなかで、重大な経済危機とソビエト権力の滅亡を予言し、この状況からの唯一のぬけ道として、分派とグループ形成の自由を要求した。

これは、第十回大会でレーニンの提案にもとづき禁止された分派を復活させるための闘争であった。

トロツキストは、工業または農業の改善につき、国内の商品流通の改善につき、勤労者の状態の改善についての具体的な問題をも提起しなかった。かれらは、もともとこのような問題には興味すらもたなかったのである。かれらが興味を感じたのは、ただ一つ、すなわちレーニンの不在に乗じて、党内に分派を復活させ、党の基礎をグラつかせ、党の中央委員会を動揺させることであった。

四十六人の政綱につづいて、トロツキーの手紙も発見されたが、かれはこの手紙で、党の幹部を侮辱し、党にたいし多くの新たな中傷的な非難をあびせた。トロツキーはこの手紙のなかで、党がかれからなんどもきいたことのあるむかしながらのメンシェビキ的くりごとをくりかえした。

トロツキストは、まっさきに党の機関を攻撃した。かれらは、強固な党機関がなければ党は生存しえないし、活動しえないことを知っていた。反対派は、この機関をぐらつかせ、この機関を破壊し、そして党員を党機関に対立させ、青年を党の古参幹部に対立させようともくろんだ。トロツキーはその手紙のなかで、青年学生に望みを託し、党のトロツキズムとの闘争の歴史を知らない年若い党員に望みを託した。トロツキーは青年学生を手に入れるため、かれらを「党内のもっとも頼りになる晴雨計」とよんでおだて、同時にまた、古いレーニンの親衛隊は変質したと言明した。かれは、第二インターナショナルの指導者の変質の事実を引用しながら、卑劣にも、古いボリシェビキの親衛隊も同じ道をたどっているとほのめかした。党が変質したとトロツキーがわめきたてたのは、かれ自身の変質とかれの反党の陰謀をおおいかくすのが狙いだったのである。

反対派の二つの文献、すなわち四十六人の政綱とトロツキーの手紙は、トロツキストによって各地区と各細胞に送られ、党員の審議にかけられた。

党は、論争をいどまれたのである。

こうして、第十回党大会の前の、労働組合論争のときのように、トロツキストはまたもや全党的な論争を党におしつけた。

党は、もっと主要な経済問題でいそがしかったにもかかわらず、挑戦をうけて立ち、論争を開始した。

全党が論争に参加した。闘争は、はげしい性格を帯びた。とりわけ、モスクワにおける闘争の経過は鋭かった。トロツキストは、まず第一に首都の組織を奪いとることにけんめいだった。だが、論争はトロツキストの役には立たなかった。かれらの面目をつぶしただけであった。トロツキストはモスクワでも、全ソ連にわたっても、粉砕された。トロツキストに投票したのは、少数の大学細胞と機関細胞だけだった。

一九二四年一月、第十三回党会議がひらかれた。会議は、論争を総括したスターリン同志の報告をきいた。会議は、トロツキスト反対派を非難し、この反対派は、マルクス主義からの小ブルジョア的偏向であるとした。会議の決議は、その後、第十三回党大会とコミンテルン第五回大会によって承認された。国際的な共産主義プロレタリア階級は、トロツキズムにたいする闘争においてボリシェビキを支持した。

だが、トロツキストはその破壊活動をやめなかった。一九二四年の秋、トロツキーは、『十月の教訓』という論文を印刷し、そのなかでトロツキズムをもってレーニン主義にすりかえようと企てた。この論文は、徹頭徹尾、わが党にたいする、党の指導者レーニンにたいする全面的な中傷であった。共産主義とソビエト権力のすべての敵は、中傷にみちたこの駄本にすがりついた。党は、ボリシェビズムの英雄的な歴史にたいするトロツキーのこの中傷を、憤りをもって迎えた。スターリン同志は、トロツキズムをもってレーニン主義にすりか

えようとするトロツキーの意図を暴露した。スターリン同志は、その演説のなかで、「党の任務は思想的潮流としてのトロツキズムをほうむることにある」と指摘した。

一九二四年に出版されたスターリン同志の理論的著作『レーニン主義の基礎について』は、思想的にトロツキズムを粉砕し、レーニン主義を守るうえで重大な意義をもっていた。この小冊子は、レーニン主義についてのみごとな解説であり、直剣な理論的論証である。それは、当時も、現在も、鋭利なマルクス・レーニン主義の理論的武器をもって全世界のボリシェビキを武装させている。

トロツキズムとのたたかいにあたって、スターリン同志は、党をその中央委員会のまわりに結集するとともに、党をひきつづきわが国における社会主義の勝利のための闘争に動員した。スターリン同志は、思想的にトロツキズムを粉砕することが、ひきつづき社会主義にむかって勝利のうちに前進するのを保証するための必要な条件であることを論証することができた。

スターリン同志は、トロツキズムとの闘争のこの時期を総括してこうのべた。

「トロツキズムの粉砕なくしては、新経済政策の条件のもので勝利にたっすることもできないし、いまのロシアを社会主義のロシアにかえることもできない。」

だが、党のレーニン的政策の成功は、党と労働者階級をおそった最大の不幸によってくもらされた。一九二四年一月二十一日、われわれの指導者、教師、ボリシェビキ党の創設者であるレーニンが、モスクワの近くのゴルキで死去した。全世界の労働者階級は、レーニン死去の知らせを、もっともいたましい損失としてむかえた。レーニンの葬儀の日、国際プロレタリア階級は、一切の仕事を五分間停止することを宣言した。鉄道はと

まり、工場での操業は停止された。全世界の勤労者は自分の父親、教師、最良の友、保護者であるレーニンを、もっとも深い悲しみをもって墓にみおくった。

ソ連の労働者階級は、レーニンの党のまわりにいっそう結束して、レーニンの死にこたえた。どの自覚ある労働者もこれらの悲しみの日々、レーニンの遺言を実現しつつある共産党にたいしてどのような態度をとるべきかを熟考した。党中央委員会は、何千何万という党外労働者から入党願書をうけとった。中央委員会は、先進的な労働者のこのような動きに即応して、先進的な労働者を大量に党にうけいれると宣言し、レーニンを記念して党員拡大を行なうことを宣言した。何万という新しい労働者が入党した。入党したのは、党の事業のために、レーニンの事業のために生命を捧げる決意のある人びとであった。短期間に二十四万余人の労働者がボリシェビキ党の陣列に加わった。入党したのは、労働者階級のなかの、もっとも自覚した、もっとも革命的な、もっとも勇敢で規律を守る部分であった。これがレーニン記念の党員拡大であった。

レーニンの死は、わが党がいかに労働者大衆に親しく、労働者がいかにレーニンの党を大切にしているかをしめした。

レーニンの喪中、スターリン同志は、ソ連ソビエト第二回大会で党の名において偉大な誓いのことばをよみあげた。かれはこういった。

「われわれ共産党員は、特殊な型の人間である。われわれは特殊な材料によってつくられている。われわれは、偉大なプロレタリア戦略家の軍隊、レーニン同志の軍隊を構成している。この軍隊に属することにまさる光栄はない。レーニン同志を創設者、指導者とするこの党の党員であるということにまさ

る称号はない。……

レーニン同志は、われわれのもとを去るにあたってわれわれに、党員という偉大な称号を高くかかげ、清らかに守るようにいいのこした。レーニン同志！　われわれはあなたのこの遺訓を名誉にかけて遂行することを誓う！　……

レーニン同志は、われわれのもとを去るにあたってわれわれに、われわれの党の統一をひとみのように大切に守るようにいいのこした。レーニン同志！　われわれはあなたに、あなたのこの遺訓を名誉にかけて遂行することを誓う！　……

レーニン同志は、われわれのもとを去るにあたってわれわれに、プロレタリア階級独裁を守り、強化するようにいいのこした。レーニン同志！　われわれはあなたに、あなたのこの遺訓を名誉にかけて遂行するために力を惜しまないことを誓う！　……

レーニン同志は、われわれのもとを去るにあたって、労働者農民の同盟を極力強化するようにいいのこした。レーニン同志！　われわれはあなたのこの遺訓を名誉にかけて遂行することを誓う！　……

レーニン同志は、わが国の諸民族の自由意志による同盟の必要について、共和国連邦の範囲内でのわが国諸民族の兄弟のような協力の必要について、うむことなくわれわれに語った。レーニン同志は、われわれのもとを去るにあたってわれわれに、共和国連邦を強化し、拡大するようにいいのこした。レーニン同志！　われわれはあなたに、あなたのこの遺訓を名誉にかけて遂行することを誓う！　……

レーニン同志はしばしばわれわれに、赤軍を強化し、その状態を改善することは、われわれの党のも

っとも主要な任務の一つであると教えた。……同志諸君！　われわれはわれわれの赤軍、われわれの赤色海軍を強化するために力を惜しまないことを誓う！……

レーニン同志は、われわれのもとを去るにあたってわれわれに、共産主義インターナショナルの原則に忠実であるようにいいのこした。レーニン同志！　われわれは、あなたに、全世界の勤労者の同盟である共産主義インターナショナルを強化し、拡大するために、生命を惜しまないことを誓う！」

これは、永遠に生きるその指導者レーニンにたいするボリシェビキ党の誓いのことばであった。

一九二四年五月、第十三回党大会がひらかれた。この大会には、議決権をもって七百四十八人の代議員が、七十三万五千八百八十一人の党員を代表して出席した。党員の数は前回の大会にくらべて大いにふえたが、それは、レーニン記念の党員拡大によって約二十五万人が新たに党の陣列に加わったからである。審議権のある代議員は四百十六人であった。

大会は、全会一致でトロツキスト反対派の政綱を非難し、それを、マルクス・レーニン主義からの小ブルジョア的偏向であり、レーニン主義の修正であると規定し、第十三回党会議の『党建設について』と『論争の結果について』の決議を確認した。

都市と農村の結合の強化という任務から出発して、大会は、ひきつづき工業、まず第一に軽工業を拡大すべきであるという指令をあたえ、同時に冶金業を急速に発展させる必要があることを強調した。

大会は、国内商業人民委員部の設置を裁可し、そして市場を占領し、私的資本を商業の分野から締めだす任務を、すべての商業機関に提起した。

大会は、農民にたいする低利の国家信用を拡大し、農民から高利貸を締めだす任務を提起した。

大会は、農村における活動の主要な任務として、あらゆる手段をつくして農民大衆を協同組合にひき入れるというスローガンを提起した。

最後に、大会は、レーニン記念の党員拡大の大きな意義を指摘した。そして、若い党員、とりわけレーニン記念の党員拡大で入党した若い党員に、レーニン主義の基礎を教育する活動を強化するように、党の注意を喚起した。

五、回復期末のソ連　わが国の社会主義建設と社会主義の勝利の問題　ジノビエフとカーメネフの「新反対派」　第十四回党大会　国の社会主義工業化の方針

新経済政策の道におけるボリシェビキ党と労働者階級のねばりづよい活動は、四年余りになった。国民経済回復の英雄的な活動は終わりに近づきつつあった。ソ連の経済的な、政治的な力は日ましに増大した。

当時、国際情勢は変化していた。資本主義は、帝国主義戦争後の大衆の最初の革命的強襲にもちこたえた。ドイツ、イタリア、ブルガリア、ポーランドおよびその他多くの国ぐににおこった革命運動は、制圧された。その際、妥協的な社会民主党の指導者たちは、ブルジョア階級を助けた。革命の一時的な退潮が、やってき

た。西ヨーロッパにおける資本主義の一時的・部分的な安定、その地位の部分的な強化がやってきた。だが、資本主義の安定は、資本主義社会をひき裂く基本的な諸矛盾をとりのぞきはしなかった。反対に、資本主義の部分的安定は、労働者と資本家とのあいだの、帝国主義と植民地民族とのあいだの、異なった国ぐにの帝国主義グループのあいだの矛盾を先鋭化させた。資本主義の安定は、矛盾の新たな爆発、資本主義諸国における新たな危機を準備した。

資本主義の安定と並んで、ソ連の安定が生まれた。だが、この二つの安定には、たがいに根本的なちがいがあった。資本主義の安定は、資本主義の新たな危機の前兆であった。ところが、ソ連の安定は、社会主義国家の経済的、政治的な力のあらたな増大を示していた。

西方の革命が失敗したにもかかわらず、ソ連の国際的地位は、たしかに緩慢ではあったが、それでもひきつづき強化されていった。

一九二二年、ソ連は、イタリアの都市ジェノバでひらかれた国際経済会議にまねかれた。資本主義諸国の革命が失敗したので鼻息のあらい帝国主義の諸政府は、ジェノバ会議で、こんどは外交的な方式によってソビエト共和国に新たな圧力をくわえようと企てた。帝国主義者はソビエト国家にあつかましい要求をつきつけた。かれらは、十月革命で国有化された諸工場を外国の資本家に返還することを要求し、ツァー政府のすべての債務を支払うことを要求した。こうした条件で、帝国主義諸国はソビエト国家にわずかな借款をあたえる約束をした。

ソ連はこれらの要求を拒否した。

ジェノバ会議はなんらの結果をももたらさなかった。

一九二三年、イギリスの外相カーゾンの最後通牒という形をとった新たな干渉の脅迫も、おなじように当然の反撃にあった。

資本主義諸国は、ソビエト権力の堅固さにさぐりを入れ、その安定性を確認したのち、あいついでわが国と外交関係を回復した。一九二四年のうちに、イギリス、フランス、日本、イタリアとの外交関係が復活した。ソビエト国家が平和な、息ぬきのまとまった時期をかちとることができたということは、明らかであった。

国内の情勢も変わってきた。ボリシェビキ党に指導された労働者と農民の献身的な労働は、その成果をもたらした。国民経済の急速な増大が現われた。一九二四～二五経済年度において、農業は、すでに戦前の規模に近づき、戦前の水準の八七パーセントにたっした。ソ連の大工業生産は一九二五年にはすでに戦前の工業生産のほぼ四分の三となった。一九二四～二五年、ソビエト国家は、基本建設に三億八千五百万ルーブルの資金を投下することができた。国の電化計画も首尾よく遂行された。国民経済における社会主義の支配的な地位は強化された。工業および商業の私的資本との闘争で、大きな成功がかちとられた。

経済の高揚は、労働者、農民の状態のいっそうの改善をもたらした。労働者階級の数が急速に増えた。賃金は高まった。労働の生産性は向上した。農民の物質的な状態が大いによくなった。一九二四～二五年に、労働者、農民の国家は、ほぼ二億九千万ルーブルを、非力な農民を援助するためにさくことができた。労働者、農民の状態の改善を基礎にして、大衆の政治的な積極性が大いに高まった。プロレタリア階級独裁は強固になった。ボリシェビキ党の威信と影響力が増大した。

国民の経済の回復は終わりにちかづいた。

だが、ソビエト国家にとって、社会主義を建設しつつある国家にとって、経済を回復するだけでは、戦前の水準にたっするだけでは、不十分であった。戦前の水準は立ちおくれた国の水準であった。ひきつづき前進しなければならなかった。ソビエト国家がかちとった長期の息ぬきは、こんごの建設の可能性を保障した。

しかし、そこには、見通しの問題、われわれの発展、われわれの建設の性質の問題、ソ連における社会主義の運命の問題が、さしせまったかたちで提起されていた。はたして、どのような方向に向かってソ連の経済建設をすすめるべきか、社会主義の方向に向かってか、それともなにかそのほかの方向に向かってか？　はたしてわれわれは、社会主義経済を建設すべきなのか、またそれは可能なのか？　それともわれわれは、別の、資本主義の経済のための土壌をこやす運命にあるのか　一般的にいって、ソ連で社会主義経済を建設することができるのか？　できるとしても、資本主義諸国で革命が延び、資本主義が安定しているという条件のもとでそれを建設することができるのか？　新経済政策は、国内の社会主義の力をあらゆる手段で強化、拡大しはしたが、同時に、いまのところ資本主義のある程度の発展をもたらしているが、このような新経済政策の方法で社会主義経済を建設することができるのか。どのようにして社会主義的な国民経済を建設すべきなのか？　どこからこの建設にとりかかるべきなのか？

すべてこれらの問題が回復期の終わりに、理論の問題としてではなく、実践の問題として、日常の経済建設の問題として、党のまえにだされたのである。

工業と農業の建設にたずさわっているわれわれの党の経済活動家、そして全人民が、どちらへ事業を進める

か——社会主義へか、それとも資本主義へか——ということを知るためには、すべてこれらの問題について、率直な、はっきりした回答をあたえなければならなかった。

もしこれらの問題にはっきりこたえなかったなら、建設面におけるわれわれの実践活動は、見通しのない活動、盲目的な活動、むだな活動となったであろう。

党は、すべてこれらの問題にたいし、はっきりした、確実な回答をあたえた。

党はこうこたえた。そうだ。わが国で社会主義を建設することはできるし、またそうしなければならない。なぜなら、われわれは社会主義経済を建設し、完全な社会主義社会を建設するのに必要なすべてをもっているからである。一九一七年十月、労働者階級は、その政治的独裁をうちたて、政治的に資本主義に勝利した。そのときいらい、ソビエト権力は、あらゆる手段を講じ、資本主義の経済的な力をうちやぶり、社会主義的な国民経済建設の条件をつくりだしてきた。講じた手段とは、資本家や地主を収奪し、土地、工場、交通機関、銀行を全人民の財産にし、新経済政策を実施し、国営の社会主義工業を建設し、レーニンの協同組合計画を実施することであった。いまや主要な任務は、新しい、社会主義の経済の建設を全国にわたってくりひろげ、それによって資本主義を経済的に叩きのめすことである。われわれのすべての実践活動、われわれのすべての行動は、この主要な任務遂行の要求にしたがわなければならない。労働者階級は、これをなしとげることができるし、またこれをなしとげるであろう。この壮大な任務の遂行は、国の工業化から着手しなければならない。国の社会主義的工業化こそは、社会主義的な国民経済建設の発展が、そこからはじまらなければならない基本的な環なのである。西ヨーロッパ諸国の革命がおくれたことも、ソビエト以外の国で資本主義が部分的に安定し

たことも、われわれの社会主義への前進を阻止することはできない。新経済政策はこの事業を促進することだけである。というのは、新経済政策を実施する党の目的は、われわれの国民経済の社会主義的な基礎の建設を促進することにあったからである。

これがわが国における社会主義建設の勝利の問題にたいする党の回答であった。

・しかし、党は、これではまだ、一国における社会主義の勝利の問題がつくされてはいないことをしっていた。ソ連における社会主義の建設は、人類史上のもっとも偉大な転換であり、ソ連の労働者階級と農民の全世界史的な勝利である。だがこれは、やはり、ソ連の内部問題であり、社会主義の勝利の問題の一部分をなすにすぎない。問題の別の部分は、その国際的側面である。スターリン同志は、一国における社会主義の勝利についての命題を論証するにあたって、この問題の二つの側面、すなわち、国内的な側面と国際的な側面とを区別すべきことを、くりかえし指摘した。問題の国内的側面、つまり国内の諸階級の相互関係についていえば、ソ連の労働者階級と農民が、自国のブルジョア階級を経済的に克服し、完全な社会主義を建設することはまったく可能である。しかし、この問題には、ほかにその国際的な側面、つまり対外関係の領域、ソビエト国家と資本主義国家とのあいだ、ソビエト人民と国際ブルジョア階級とのあいだの関係の領域がある。国際ブルジョア階級はソビエト体制を敵視しており、ソビエト国家に新たな武力干渉をおこない、ソ連に資本主義を復活させるあらたな試みにでる機会を求めている。ソ連が、さしあたってはただ一つの社会主義の国であり、その他はいぜんとして資本主義国であるから、ソ連の周囲には、資本主義の干渉の危険を生みだす資本主義による包囲が引きつづき存在している。資本主義の包囲があるかぎり、資本主義の干渉という危険もあることはあきらかで

ある。ソビエト人民は、自分の力だけで、この外からの危険、ソ連にたいする資本主義干渉の危険を根絶することができるであろうか？　いや、できない。それができないのは、資本主義の干渉の危険を根絶するには資本主義の包囲を根絶しなければならず、そして、資本主義の包囲を根絶することは、すくなくともいくつかの国ぐににおいてプロレタリア革命が勝利をかちとった結果としてはじめて可能であるからである。しかし、このことからつぎのような結論がでてくる。すなわちソ連における社会主義の勝利は、資本主義的経済制度の一掃と社会主義的経済制度の建設に現われてはいるが、外国の干渉や資本主義復活の企ての危険が排除されないかぎり、社会主義の国がこの危険をまぬがれる保障がないかぎり、まだこの勝利は最終的な勝利とみなすわけにはいかない。外国の資本主義の干渉の危険を根絶するには、資本主義の包囲を根絶しなければならない。

もちろん、ソ連の人民およびその赤軍は、ソビエト権力のただしい政策のもとで、一九一八―二〇年の最初の資本主義による干渉に反撃を加えたのとおなじように、外国の資本主義の新たな干渉に当然の反撃を加えることができるであろう。だがこれはまだ、資本主義の新たな干渉の危険が、これで根絶されたことを意味するものではない。最初の干渉の失敗は、新たな干渉の危険を根絶しはしなかった。なぜなら、干渉の根源、つまり資本主義の包囲がひきつづき存在しているからである。資本主義の包囲がなお存在するならば、新たな干渉の失敗も、干渉の危険を根絶しないであろう。

このことからつぎのような結論がでてくる。すなわち、プロレタリア革命が資本主義諸国において勝利することは、ソ連の勤労者の切実な利益である。

これがわが国の社会主義の勝利の問題についての党の方針であった。

中央委員会は、この方針がきたるべき第十四回党会議で討議され、党の方針として、全党員を拘束する党のおきてとして、承認され、採択されることを要求した。

党のこの方針は、反対派の連中をおどろかせた。かれらをおどろかせたわけは、なによりも党が、この方針に具体的な実践的性格をあたえ、それを国の社会主義工業化の実践的計画とむすびつけ、そしてそれを、党のおきてにし、全党員を拘束する十四回党会議の決議にすることを要求したからである。

トロツキストは、党の方針に反対の行動をとり、この方針に対抗してメンシェビキ的な「永久革命論」を提起した。この理論をマルクス主義の理論とよぶのは、マルクス主義を嘲笑するものであり、ソ連における社会主義の建設の勝利の可能性を否定するものであった。

ブハリーン派は、あえて公然と党の方針に反対はしなかった。しかし、かれらはやはり、ブルジョア階級は社会主義に平和的成長するというその「理論」をこっそり党の方針に対置しはじめ、そして「金持になれ」という「新しい」スローガンでこの「理論」をおぎなった。ブハーリン派によれば、社会主義の勝利は、ブルジョア階級の一掃を意味するのではなくて、ブルジョア階級を育成し、金持にすることを意味した。

ジノビエフとカーメネフは、一時は、ソ連は技術的、経済的に立ちおくれているので社会主義の勝利は不可能だという声明をかかげてのり出しかけたが、あとでは、鳴りをひそめるほかはなかった。

第十四回党会議（一九二五年四月）は、すべてこれらの公開の、もしくは隠れた反対派の投降主義的「理論」を非難し、ソ連における社会主義の勝利についての党の方針を承認し、これに応じた決議を採択した。

ジノビエフとカーメネフは進退に窮し、この決議に賛成の投票をする道をえらんだ。だが、党はかれらが、

第十四回党大会で、「党と一戦をまじえる」ため、党との闘争をのばしたにすぎないことを知っていた。かれらは、レニングラードでその仲間をかきあつめ、いわゆる「新反対派」を組織した。

一九二五年十二月、第十四回党大会がひらかれた。

この大会は、緊迫した党内情勢のもとでひらかれた。レニングラード代議員団のような党の最大の中心組織の全代議員団が、自党の中央委員会に反対しようとしているというような事態は、党成立いらいの全期間を通じて一度もなかった。

この大会に出席したのは、議決権をもつ六百六十五人の代議員と、審議権をもつ六百四十一人の代議員で、六十四万三千人の党員と四十四万五千人の党員候補を代表していたが、これは、前回の大会当時よりいくらか少なかった。これには多くの反党的な要素に汚染されていた大学や機関の細胞で、部分的な清掃がおこなわれた結果が現われていた。

中央委員会の政治報告をおこなったのは、スターリン同志であった。かれは、ソ連の政治的、経済的な力が増大している模様を鮮明に描きだした。工業も、農業も、ソビエト経済体制がすぐれているため、比較的みじかい期間に回復し、戦前の水準に近づいた。これらの成果にもかかわらず、スターリン同志は、これで安心しないように提議した。なぜなら、これらの成果も、わが国が、あいかわらず立ちおくれた農業国にとどまっているという事実を一掃することはできなかったからである。そのころ、農業は総生産物の三分の二をしめていたが、工業は三分の一にすぎなかった。スターリン同志はつぎのようにいった。党のまえには、わが国を経済的に資本主義国に依存しない工業国に転化させるという問題が、大きくたち現われている。これはなしとげる

ことができるし、なしとげなければならない。国の社会主義的工業化のための闘争、社会主義の勝利のための闘争は、党の中心任務となった。

「わが国を農業国から、必要な設備を自力で生産することのできる工業国に変えること、——これが、われわれの総路線の本質であり、基礎である」と、スターリン同志は指示した。

国の工業化は、わが国の経済的独立を保証し、国の国防力を強固にして、ソ連における社会主義の勝利に必要な条件をつくりだした。

ジノビエフ派は、党の総路線に反対した。スターリンの社会主義工業化計画に対抗して、ジノビエフ派のソコリニコフは、帝国主義の狼どものあいだに流行しているブルジョア的な計画を提起した。この計画によると、ソ連は農業国としてとどまり、主として原料と食糧を生産し、それを国外に輸出して、国外から自分では生産しない、また生産すべきではない機械を輸入しなければならないことになる。一九二五年の諸条件のもとでは、この計画はあきらかに、工業の発達した外国にソ連を経済的に隷属させる計画であり、資本主義諸国の帝国主義の狼どもの気にいるように、ソ連の工業のたちおくれをかためる計画であった。

この計画を採用することは、わが国を資本主義世界の無力な農業的付属物にかえ、わが国を資本主義の包囲のまえに無防備で、弱いままにしておき、結局は、ソ連における社会主義の事業を墓に葬り去ることを意味した。

大会は、ジノビエフ派の経済「計画」をソ連を隷属化する計画だと非難した。

われわれの国営工業は社会主義の工業ではないと（レーニンに逆らって！）断言したり、あるいは、中農は

社会主義建設において労働者階級の同盟者ではありえないと（これもレーニンに逆って！）言明したり、というような気ちがいじみた言動も、「新反対派」にはなんの役にもたたなかった。

大会は「新反対派」のこのような気ちがいじみた言動を、反レーニン的であると非難した。

スターリン同志は、「新反対派」のトロツキスト的、メンシェビキ的本質を暴露した。かれは、ジノビエフとカーメネフがあらためて歌っているのは、レーニンが生前容赦なくこれと闘争した党の敵の歌にほかならないことをあきらかにした。

ジノビエフ派が、下手に仮装したトロツキストということは明らかであった。

スターリン同志は、社会主義建設の事業において労働者階級と中農との同盟が党のもっとも重要な任務であることを強調した。かれは、農民問題について当時党内にあった、この同盟にとって危険な二つの偏向を指摘した。第一の偏向は、富農の危険を過小評価し、軽視することであり、第二の偏向は、富農のまえに驚きあわてて、中農の役割を過小評価することであった。はたして、どちらの偏向がよりわるいのかという問題に、スターリン同志はこうこたえた。「第一の偏向も第二の偏向も、どちらもわるい。もしこれらの偏向が発展したら、党を分解させ破滅させる。さいわい、われわれの党内には、第一の偏向も第二の偏向も、切りはらうだけの力がある。」

党は実際に、「左」の偏向も右の偏向も叩きつぶし、切りはらった。

第十四回党大会は経済建設についての論争を総括するにあたって、満場一致反対派の投降主義的計画を否決し、その有名な決議のなかに、こうかきしるした。

「経済建設の分野では、大会は、わが国、プロレタリア階級独裁の国が、『完全な社会主義を建設するのに必要なすべて』（レーニン）をもっているということから出発する。大会は、ソ連における社会主義の勝利をかちとるための闘争はわれわれの党の基本的任務であると考える。」

第十四回大会は、新しい党規約を承認した。

第十四回大会以降、われわれの党は、ソ連共産党（ボリシェビキ）とよばれるようになった。

ジノビエフ派は、大会でうち負かされたが、党に服従しなかった。かれらは、第十四回大会の決議に反対する闘争を開始した。第十四回大会が終わったのち、ジノビエフはただちに共産青年同盟レニングラード県委員会の会議をひらいたが、この委員会の上層部は、ジノビエフ、ザルツキー、バカエフ、エフドキモフ、クークリン、サファロフおよびその他の二心的な人びとによって、レーニン的党中央委員会を敵視する精神で教育されていた。この会議で、共産青年同盟レニングラード県委員会は、第十四回党大会の決議に服従することを拒否するという、ソ連レーニン共産青年同盟の歴史において前例のない決議を採択した。

だが、レニングラードの共産青年同盟のジノビエフ派の上層部は、レニングラードの共産青年同盟員大衆の気持をまったく反映していなかった。だから、これらの上層部は苦もなくうちやぶられ、そしてまもなく、レニングラードの共産青年同盟組織は、ふたたび共産青年同盟のなかでそれにふさわしい地位をとりもどした。

第十四回大会の終わりごろ、大会代議員のグループ、モロトフ、キーロフ、ウォロシーロフ、カリーニン、アンドレーエフらの同志がレニングラードに派遣された。欺瞞的な手段で代議員の資格を手にいれたレニングラードの代議員団が大会でとった立場の、犯罪的な、反ボリシェビキ的な性質を、レニングラードの党組織の

党員に説明しなければならなかった。大会についての報告集会は、大荒れとなった。あらたに臨時のレニングラード党会議がひらかれた。レニングラードの党組織の圧倒的多数の党員大衆（九七パーセント以上）が第十四回党大会の決議に完全に賛成し、反党的なジノビエフの「新反対派」を非難した。この「新反対派」はすでにそのころは、軍隊のない将軍連だったのである。

レニングラードのボリシェビキは、これまでどおり、レーニン、スターリンの党の第一線にふみとどまった。

スターリン同志は、第十四回大会の活動を総括して、こうかいた。

「ソ連共産党（ボ）第十四回大会の歴史的意義は、この大会が、新反対派のあやまりを根こそぎあばき、新反対派の確信のなさや泣きごとを投げすて、社会主義のためのこんごの闘争の道を明確にはっきりとさししめし、党に勝利の見通しをあたえ、それによってプロレタリア階級を、社会主義建設の勝利にたいするゆるがぬ確信で武装したことにある。」（スターリン『レーニン主義の諸問題』）

要約

国民経済回復の平和的な活動に移行した数年間は、ボリシェビキ党の歴史のうえで、もっとも重大な時期の一つである。党は緊張した環境のもとで、戦時共産主義の政策から新経済政策への困難な転換を果たすことが

できた。党は新しい経済的基礎にたって、労働者農民の同盟を強固にした。ソビエト社会主義共和国連邦が創立された。

新経済政策の道にそって国民経済の回復という決定的な成果がかちとられた。ソビエト国家は、国民経済の発展における回復期を成功のうちにすごし、新しい時期、国の工業化の時期への移行を開始した。

国内戦争から社会主義の平和的建設への移行は、とりわけはじめのころは、大きな困難をともなった。ボリシェビキの敵、ソ連共産党（ボリシェビキ）の隊伍のなかの反党的要素は、この全時期を通じてレーニンの党に反対して死物狂いの闘争をおこなった。これらの反党的な要素のかしらに立っていたのはトロツキーだった。この闘争におけるかれの助手は、カーメネフ、ジノビエフ、ブハーリンだった。反対派は、レーニンの死後、ボリシェビキ党の隊伍を瓦解させ、党を分裂させ、ソ連における社会主義の勝利の事業にたいする不信感で党を汚染することをもくろんだ。本質においては、トロツキストは、ソ連に新たなブルジョア階級の政治組織、別の党、つまり資本主義復活の党をつくることをたくらんだのである。

党は、レーニンの旗のもとに、そのレーニン的な中央委員会のまわりに、スターリン同志のまわりに結集し、トロツキストをも、レニングラードにおけるその新たな仲間たちであるジノビエフ、カーメネフの新反対派をもうちやぶった。

ボリシェビキ党は、十分な力と資力をたくわえて、国を新たな歴史的段階、すなわち社会主義的工業化の段階に導いていった。

第十章　国の社会主義的工業化のための闘争におけるボリシェビキ党（一九二六年—一九二九年）

一、社会主義的工業化の時期における困難とそれとの闘争　トロツキー・ジノビエフ反党連合の成立　この連合の反ソビエト的行動　連合の敗北

第十四回大会ののち、党は、国の社会主義的工業化についてのソビエト権力の総方針を実現するための闘争を展開した。

回復期の任務は、まず第一に農業を活気づけること、農業から原料と食糧を手に入れること、工業を動かすこと、つまり、工業を回復させ、既存の工場を回復させることであった。

ソビエト権力は比較的容易にこれの任務をはたした。

だが、回復期には三つの大きな欠陥があった。

第一に、この時期の旧工場は技術的に古く、立ちおくれており、すぐ役に立たなくなった。新しい技術でこれらの工場を再装備することが任務となった。

第二に、回復期の工業は、基礎があまりにも狭く、既存の工場のなかには、国にとってぜったい必要な数十、数百の機械製造工場というものが欠けていた。当時われわれにはそのような工場がなかったが、そのような工場がなくては、工業は、ほんとうの工業とは、いえないので、それを建設しなければならなかった。そのような工場を創建し、そしてそれらを近代的な技術で装備することが任務となった。

第三に、回復期は、主として軽工業を発展させ、軌道に乗せた。だがその後、重工業が弱いため、軽工業の発展そのものが阻害された。発展した重工業によってしかみたされないような国内のその他の需要については、いうまでもなかった。重工業の方面に重点を移すことが任務となった。

すべてこれらの新しい任務は、社会主義的工業化の政策によって解決されなければならなかった。ツァーのロシアになかった多くの工業部門を新たに建設しなければならなかった。すなわち、新しい機械製造工場、工作機械製造工場、自動車工場、化学工場、冶金工場を建設し、発動機と発電所の設備の自力による生産を組織し、金属と石炭の採掘を拡大しなければならなかった。これを、ソ連における社会主義の勝利という大業が要求していたからである。

新しい国防工業、すなわち、新しい大砲工場、弾丸工場、航空機工場、戦車工場、機関銃工場を建設しなければならなかった。資本主義の包囲という環境のなかで、ソ連の国防が要求していたからである。

トラクター工場、現代的な農業機械工場を建設し、これらの工場の製品を農業に供給することによって、何

百万の小さな個人農民経営が、大規模なコルホーズ生産に移行できるようにしなければならなかった。これを、農村での社会主義の勝利が要求したからである。

これらのすべては、工業化の政策によって行なわなければならなかった。国の社会主義工業化とは正にこれらから成り立っていたからである。

もちろん、このように巨大な基本建設は、数十億の資金の投下なしにはすすめることはできなかった。外債にたよることは不可能であった。資本主義諸国は借款をあたえることを拒否していたからである。外国の援助なしに、もっぱら自国の資金によって建設しなければならなかった。だが、当時われわれの国は、まだ富んでいなかった。

これが、いまやおもな困難の一つだった。

資本主義国は、自国の重工業を創建するさい、通常、外からの資金の流入にたよる。つまり、植民地の略奪にたより、敗戦国の人民からの賠償にたより、外債にたよるものである。ソビエト国家は、工業化の資金を、植民地もしくは敗戦国の人民の略奪というような汚れた源泉に求めることは原則上できなかった。外債についていえば、資本主義諸国がソ連に借款をあたえることを拒否していたので、この源泉は、ソ連にとってとざされていた。だから資金は自国の内部にもとめなければならなかった。

そしてこのような資金は、ソ連国内に存在していた。ソ連には、どの資本主義国も知らないような蓄積の源泉が存在していたのである。ソビエト国家は、十月社会主義革命によって資本家や地主からとりあげたすべての工場、すべての土地、および運輸、銀行、対外貿易、国内商業を、その管理のもとに置いていた。国営工場

から、運輸、商業、銀行からえた利潤は、もはや寄生的な資本家階級の消費にあてられるのではなくて、工業をひきつづき拡張するためにつかわれていた。

ソビエト権力は、ツァー政府の負債を廃棄したが、これまで人民は、この負債の利息だけでも、毎年、数億金ルーブル支払っていた。ソビエト権力は、地主の土地所有権を廃止したので、農民は毎年、地主におさめていた土地の小作料約五億金ルーブルの支払いをまぬがれた。これらすべての重荷からまぬがれたので、農民は、国家が新しい強大な工業を建設するのを援助することができた、農民は、トラクターや農業機械の入手に切実な関心をもっていた。

すべてこれらの収入の源泉は、ソビエト国家の管理のもとにおかれた。これらの源泉は、重工業の創建のために、数億、数十億ルーブルを提供することを可能にした。ただ必要だったのは、経営の主人としての態度でものごとを処理し、金銭の支出の面でもっとも厳格な節約を励行し、生産を合理化し、生産コストを引き下げ、非生産的な支出を一掃することなどであった。

ソビエト権力は、まさしくそのように行動したのである。

節約につとめた結果、基本建設にあてられる資金の蓄積が年々増加しはじめた。ドニエプル水力発電所、トルキスタン―シベリア鉄道、スターリングラード・トラクター工場、いくつかの工作機械製造工場、「アモ」自動車工場(現在の「ジス」、すなわちスターリン記念モスクワ自動車工場)などのような巨大企業の建設にとりかかることができるようになった。

一九二六～二七年度に工業に投下された資金は約十億ルーブルであったが、それから三年後には約五十億ル

ーブルを投下することができるようになった。
工業化の事業は前進した。
資本主義諸国は、ソ連における社会主義経済の強化を、資本主義制度の存在にとっての脅威だとみなした。そこで帝国主義の諸政府は、ソ連にたいし新たな圧力をくわえ、混乱をひきおこし、ソ連の工業化の事業を破壊し、ないし少なくとも停滞させようとして、あらゆる手段をとった。
一九二七年五月、政権の座にあたったイギリス保守党(「頑固派」)は、「アルコス」(イギリスとの通商のためのソビエトの会社)にたいする挑発的な襲撃を組織した。一九二七年五月二十六日、イギリスの保守党政府は、イギリスとソ連の外交、通商関係の断絶を宣言した。
一九二七年六月七日、ワルシャワで、ソ連大使ボイコフ同志が、ポーランド国籍のロシア白衛派によって暗殺された。
これと同時に、ソ連の領内で、イギリスのスパイと謀略員がレニングラードの党クラブに爆弾を投げこみ、約三十人が負傷し、そのうち数人は重傷をおった。
一九二七年の夏、ベルリン、北京、上海、天津で、ほとんど同時に、ソ連の大使館、通商代表部にたいする襲撃がおこなわれた。
これは、ソビエト権力に困難をつけ加えた。
だが、ソ連は圧迫に屈服せず、帝国主義者やその手先どもの挑発的な奇襲を苦もなく撃退した。
トロツキストやその他の反対派分子は、その破壊活動によって、党とソビエト国家に、これにおとらない困

難をもたらした。当時、スターリン同志が、ソビエト権力に反対する「チェンバレンからトロッキーにいたるまでの統一戦線めいたものがつくられている」と語ったのは、もっともなことであった。第十四回党大会の決議があったにもかかわらず、また反対派も忠誠を表明したにもかかわらず、反対派分子は武器をすてなかった。それればかりでなく、かれらは、その破壊活動、分裂活動をいっそう強めた。

一九二六年の夏、トロツキストとジノビエフ派は反党連合をつくり、すでに粉砕されたすべての反対派グループの残党をこの連合のまわりに結集し、そしてかれらの反レーニン的な地下の党の基礎づくりをし、こうして、分派の結成を禁じた党規約や何回かの党大会での決議に、乱暴にも違反した。党中央委員会は、有名なメンシェビキの八月連合に類似したこの反党連合が解散されないなら、その結果は、連合の参加者にとって不利になるであろう、と警告した。だが、連合の参加者はその活動を停止しなかった。

同年秋、第十五回党会議の前夜、かれらはふたたび、モスクワ、レニングラード、その他の都市における工場の党集会で奇襲に出て、党に新たな論争を押しつけようとした。かれらは、その政綱を党員に討議させるために提出したが、この政綱は、これまでどおりのトロツキスト的、メンシェビキ的な、反レーニン的な政綱のひきうつしであった。党員は反対派分子に容赦ない反撃をくわえ、ところによっては、かれらをあっさり集会から追いだした。中央委員会はかさねて連合の参加者に、党はこれ以上かれらの破壊活動をゆるすことはできない、と警告した。

反対派分子は、トロツキー、ジノビエフ、カーメネフ、ソコリニコフの連名で党中央委員会に声明書をだし、自分らの分派活動の罪を認め、こんごの忠誠をちかった。だが、じっさいには、連合はあいかわらず存在しつ

づけ、連合の参加者はその地下の反党活動をやめなかった。かれらは、その反レーニン的な党をつくりあげることをつづけ、秘密の印刷所をつくり、参加者たちから党費をとり、その政綱をばらまいた。

トロツキストとジノビエフ派がこのような行動をとったので、第十五回党会議（一九二六年十一月）とコミンテルン執行委員会拡大総会（一九二六年十二月）は、トロツキー・ジノビエフ連合の問題を討議にかけた。そして、その決議のなかで、連合の参加者を、その政綱では、メンシェビキの立場に転落した分裂主義者であるとして非難した。

だが、これも連合の参加者にはききめがなかった。一九二七年、イギリスの保守党が、ソ連と外交関係、通商関係を断絶したとき、かれらはふたたび党にたいする攻撃をつよめた。かれらは新しい反レーニン的な政綱、すなわち、いわゆる「八十三人政綱」をでっちあげ、この政綱を党員のあいだにばらまき、全党的な新しい討論を、中央委員会に要求した。

すべての反対派の政綱のなかで、この政綱は、おそらく、もっともいつわりにみち、偽善的なものであった。

口先では、すなわち政綱の上では、トロツキストやジノビエフ派は、党の決議を守ることに反対はせず、忠誠に賛意を表明していたが、じっさいには、かれらはもっとも乱暴に党の決議を侵犯し、党とその中央委員会にたいするいかなる忠誠をもせせらわらっていた。

口先では、すなわち政綱の上では、かれらは党の統一に反対はせず、分裂にたいする反対を表明していたが、じっさいには、かれらはもっとも乱暴に党の統一を破壊し、分裂の路線をおしすすめ、すでに、その独自

の、非合法な反レーニン的党をもっていた。この党は、反ソビエト的な、反革命的な政党に転化するための一切の条件をそなえていた。

口先ではすなわち、政綱の上では、かれらは工業化政策に賛意を表明し、中央委員会が十分な速度で工業化をおこなっていないと非難さえしたが、じっさいには、かれらはソ連における社会主義の勝利についての党の決議をけなしつけ、社会主義工業化の政策を嘲笑し、多数の工場を利権企業として外国人に引き渡すことを要求し、ソ連における外国の資本家の利権企業に主要な期待をよせていた。

口先では、すなわち政綱の上では、かれらはコルホーズ運動に賛意を表明し、中央委員会が十分な速度で集団化をすすめていないと非難さえしたが、じっさいには、かれらは、農民を社会主義建設にひきいれる政策を嘲笑し、労働者階級と農民との「解決するすべもない紛争」を宣伝し、農村における「文化的な借地農」、すなわち富農経営に期待をかけていた。

これは、反対派のすべてのいつわりにみちた政綱のなかでも、もっともいつわりにみちた政綱であった。

この政綱は党をあざむくことを目的としていた。

中央委員会は、討論の即時開始を拒否するとともに、反対派分子にたいし、討論は党規約にしたがってのみ、すなわち、党大会の二ヵ月まえにのみおこなわれると声明した。

一九二七年十月、すなわち第十五回大会の二ヵ月まえ、党中央委員会は全党的な討論を告示した。討論集会がはじまった。討論の結果は、トロツキー、ジノビエフ連合にとってみじめすぎるほどのものだった。中央委員会に賛成投票したのは七十二万四千人の党員で、トロツキスト・ジノビエフ派の連合に賛成したのは四千

人、つまり、一パーセントにもみたなかった。反党連合は粉砕されてしまった。党内の絶対多数は一致して連合の政綱を否決した。

これが、はっきりと示された党の意思であって、連合の参加者はこの党の意見と争おうとしたのであった。ところが、この教訓もやはり連合の参加者の役にはたたなかった。かれらは、党の意志にしたがうかわりに、党の意志を破壊することにきめた。討論がまだ終わらないうちに、かれらは、自分たちの恥ずべき失敗が避けられないことをみてとったので、より先鋭な形に訴えて党とソビエト政府にたいする反対の闘争をすすめることをきめた。かれらは、モスクワとレニングラードで公開の抗議デモをおこなうことをきめた。かれらがえらんだデモの日は十一月七日、つまり、ソ連の勤労者がその革命的な全人民的デモをおこなう十月革命記念日だったのである。こうして、トロツキストとジノビエフ派は平行のデモをおこなうことをもくろんだ。はたせるかな、予想どおり同盟の参加者が街頭にかりだすことができたのは、そのわずかな追従者たちのみじめな群れにすぎなかった。追従者とかれらの題目は、全人民的なデモによってふみつぶされ、けちらされてしまった。

トロツキストとジノビエフ派が反ソビエトの泥沼に転落したということは、もはやうたがう余地がなかった。全党的な討論にあたって、かれらは、党にむかって中央委員会を訴えたが、ここでは、このみじめなデモのさいには、かれらは、敵階級に党とソビエト国家を訴えるという道に立ったのである。かれらがボリシェビキ党の破壊という目的をいだいていた以上、かれらは、不可避的にソビエト国家の破壊という道に転落しなければならなかった。なぜなら、ソビエト国では、ボリシェビキ党と国家は不可分のものだからである。こうし

てトロツキー・ジノビエフ連合の頭目たちは、党外にでたのである。ボリシェビキ党の隊伍のなかに、反ソビエトの泥沼に転落した人びとをとどめておくわけにはいかなかったからである。

一九二七年十一月十四日、中央委員会と中央統制委員会の合同会議は、トロツキーとジノビエフを党から除名した。

二、社会主義工業化の成功　農業のたちおくれ　第十五回党大会　農業集団化の方針　トロツキー・ジノビエフ連合の潰滅　政治的二面派の手管

一九二七年末になると、もう社会主義工業化政策の決定的な成功が確実になった。新経済政策の条件のもとでの工業化は、たちまちにして重大な進展をとげることができた。工業とすべての農業（林業と漁業をふくむ）は、その生産総額からいえば、戦前の水準にたっしただけでなく、この水準を上回った。国民経済における工業の比重は四二パーセントに増大し、戦前の時期に相当する水準にたっした。

工業のなかでの社会主義的部分は、私的部分をおしのけて急速に増大し、一九二四～一九二五年度の八一パーセントから、一九二六～一九二七年度の八六パーセントに増大した。これにひきかえ私的部分の比重は同じ

期間に、一九パーセントから一四パーセントに低下した。

このことは、ソ連の工業化が、きわめて鮮明な社会主義的性質をおびていること、ソ連の工業が、社会主義的生産の勝利の道にそって発展していること、工業の分野での「どちらが、どちらに勝つか」の問題で、すでに社会主義の勝利が見越された、ということを意味した。

個人商人は、商業からもおなじように急速に締めだされ、小売りにおける個人商人の比重は、一九二四〜一九二五年度の四二パーセントから、一九二〜六一九二七年度の三一パーセントにまで低下した。卸売商業については もちろんのことで、ここでは個人商人の占める比重が同じ期間に、九パーセントから五パーセントに低下した。

これ以上に増大のはやかったのは社会主義的な大工業で、その生産額は一九二七年には、つまり回復期後の第一年には、前年と比較して一八パーセントふえた。これは、資本主義の最先進国の大工業でもおよびもつかない記録的な速度であった。

農業、とくに穀物農業は、状況がちがっていた。農業も全体としていえば、戦前の水準を上回ったが、その主要部門——穀物農業総生産額は戦前水準の九一パーセントにすぎず、そして穀物の生産額の商品部分、つまり都市に供給するために売りわたされる部分は、戦前の水準のやっと三七パーセントにすぎず、そのうえ、すべての事実は穀物の商品的生産が、ひきつづき低下する危険のあることを物語っていた。

これは、一九一八年に農村ではじまった大商品経営から小経営への、さらに小経営から零細経営への細分化が、いぜんとしてつづいていること、小農民経営、零細農民経営が、最少限度の商品穀物しか供給できない半

自給的経営にかわりつつあること、そして一九二七年の時期の穀物農業の生産が、戦前の穀物農業よりやや少ないだけだったのに、都市に売り出すことのできる穀物は、戦前の穀物農業が売りだすことのできた数量の三分の一よりやや多い程度にすぎない、ということを意味していた。

疑いもなく、こういう穀物農業の状態のもとでは、ソ連の軍隊や都市は慢性の飢餓に直面していなければならなかった。

これは、穀物農業の危機であり、この危機には牧畜業の危機がともなうのは必定であった。

このような状況から脱出するには、農業の面で、トラクターと農業機械を動かし、そして、穀物農業の商品性を数倍高める大規模生産へと移らなければならない。国のまえには二つの可能な道があった。すなわち、あるいは、資本主義的大生産に移っていく道に立つか。これは、農民大衆を破産においやり、労働者と農民の同盟を破滅させ、富農をつよめ、そして、農村で社会主義を失敗においやることになったであろう。あるいは、小農民経営を社会主義的な大経営に、トラクターやその他の現代的な機械をつかって急速に穀物農業およびその商品生産を高めることのできるコルホーズに統合する道に立つかであった。

もちろん、ボリシェビキ党とソビエト国家は、第二の道、すなわち農業発展のコルホーズの道にのみ立つことができた。

党がこの点でよりどころにしたのは、小農民経営から耕作における大規模な、アルテリ的な、集団経営に移行しなければならないということについてのレーニンのつぎのような指示であった。

(イ)　「小経営は貧困からぬけだすことはできない。」(レーニン『農村における党活動にかんする第一

回全ロシア会議での演説』）

(ロ)「もしわれわれがいぜんとして小経営に安住していくなら、たとえ自由な土地ではたらく自由な公民であっても、どのみち不可避的な破滅がわれわれを脅かすであろう。」（レーニン『第一回全ロシア農民代表者大会』）

(ハ)「もし農民経営がさらに発展することができるとすれば、ひきつづいての移行をも確実に保証しなければならない。ところで、このひきつづいての移行とは、不可避的に、つぎの点にある。すなわち、もっとも収益の少ない、もっともおくれた、規模の小さな分散した農民経営が、しだいに連合し、共同の大規模の農業経営を組織することである。」（レーニン『モスクワ市とモスクワ県のロシア共産党（ボ）細胞書記および責任代表者の集会での、食糧税についての報告』）

(ニ)「共同の・集団的・同志的・アルテリ的な経営のすぐれていることを実地に農民に示すことができるばあいにのみ、また、同志的・アルテリ的経営の助けをかりて農民を援助することができるばあいにのみ、国家権力をにぎっている労働者階級は、実際に農民に自分の正しさを証明するだろうし、実際に何百万という農民大衆を、確実に、事実において自分の側にひきつけることができる。」（レーニン『農業コンミューンおよび農業アルテリ第一回大会での演説』）

これが、第十五回党大会まえの情勢だった。

第十五回党大会は、一九二七年十二月二日にひらかれた。この大会に出席したのは、議決権をもつ八百九十八人の代議員と審議権をもつ七百七十一人の代議員で、八十八万七千二百三十三人の党員と三十四万八千九百

五十七人の党員候補を代表していた。

スターリン同志は、その総括報告のなかで、工業化の成果および社会主義工業の急速的な増大を指摘すると同時に、党の前につぎのような任務を提起した。

「都市でも農村でも、国民経済のなかでの資本主義的要素を一掃する方針をとり、国民経済のあらゆる部門において、われわれの社会主義的な要衝を拡大し固めること。」

スターリン同志は、農業を工業と比較し、現代技術の適用を許さない農業の分散性にもとづく農業の、とりわけ穀物農業のたちおくれを指摘し、農業のこのような好ましくない状態が、国民経済全体に脅威をあたえるであろうことを強調した。

「出口はどこか？」――スターリン同志はこう問い、そしてつぎのように答えた。

「出口は、共同耕作を基礎にして、小さな、ばらばらな農民経営が大きな、統合された経営に移り、新しい、より高い技術を基礎にして集団的な耕作に移行することにある。出口は、小さい、零細な農民経営を、農業機械やトラクターをもちい、農耕集約化の科学的な方法をもちいて、共同の、同志的な、集団的な耕作を基礎にした大経営に、徐々に、だがたゆみなく、強制の方法によらず、実物教育と説得の方法によって、統合することにある。それ以外の出口はない。」

第十五回大会は、あらゆる努力をはらって農業の集団化を展開することについての決議を採択した。大会は、コルホーズ網とソフホーズ網を拡大、強化する計画をたて、農業集団化のための闘争の方法について、はっきりした指示をあたえた。

同時に、大会はまたつぎのような指令をあたえた。

「ひきつづき富農にたいし攻撃を展開するとともに、種々の新しい方法をとって農村における資本主義発展を制限し、農民経営を社会主義の方向に導くこと。」(『ソ連共産党（ボリシェビキ）決議集』第二部)

最後に、大会は、国民経済における計画の原則が固まってきたことに立脚し、そして、国民経済のすべての戦線において社会主義が資本主義的要素にたいし計画的な攻撃を組織するという見地から、国民経済の第一次五ヵ年計画を作成するよう関係機関に指令をだした。

第十五回大会は、社会主義建設の問題を処理したのち、トロッキー・ジノビエフ連合を一掃する問題に移った。

大会は、「反対派が思想的にレーニン主義と手を切り、メンシェビキ的グループに変質し、国際、国内のブルジョア勢力に投降する道をあゆみ、客観的にはプロレタリア階級独裁の制度に反対する第三勢力の道具にかわった」と断定した。(『ソ連共産党（ボリシェビキ）決議集』第二部)

大会は、党と反対派とのあいだの意見のちがいが、すでに綱領上の意見のちがいに転化し、トロッキー反対派がいまや反ソビエト闘争の道をあゆむにいたったことを認めた。そこで、第十五回大会は、トロッキー反対派に属し、その見解を宣伝することは、ボリシェビキ党の陣列にとどまることとあいいれない、と宣言した。

大会は、トロッキーとジノビエフの党からの除名についての中央委員会と中央統制委員会との合同会議の決議を承認し、トロッキー・ジノビエフ連合のすべての積極的な活動家、ラデック、プレオブラジェンスキー、

ラコフスキー、ピャタコフ、セレブリャコフ、スミルノフ、カーメネフ、サルキス、サファロフ、リフシッツ、ムジバニ、スミルガらや、「民主集中派」グループ（サプロノフ、スミルノフ、ボグスラフスキー、ドロブニスら）を党から除名することを決議した。

トロツキー・ジノビエフ連合の参加者は、思想のうえで撃破され、組織のうえで粉砕されたのち、人民のあいだにおよぼしていたかれらの影響の最後の名ごりをうしなった。

党から除名された反レーニン派は、第十五回大会後まもなく、トロツキズムと絶縁するという上申書をだし、復党をねがいでた。もちろん、当時、党はまだトロツキー、ラコフスキー、ラデック、クレスチンスキー、ソコリニコフ、およびその他のものが、すでに久しく人民の敵であり、外国の諜報機関が採用したスパイであったことも、カーメネフ、ジノビエフ、ピャタコフ、その他のものがすでに資本主義諸国におけるソ連の敵と「協力」してソビエト人民に反対するため、これらの敵との連絡を整えているということも、知ることはできなかった。だが、党は、もっとも困難な時機にレーニンとレーニンの党に何回となく反対したこの連中については、あらゆる汚ない行為を想定してもよいということを、すでに十分な経験によって、知っていた。だから、党は除名されたものたちの上申書を不信の目で扱った。これら上申書を提出したものたちの誠意をたしかめる第一歩として、党は、つぎの要求を復党の条件としてだした。

(イ) トロツキズムを反ボリシェビキ的、反ソビエト的なイデオロギーとして公然と非難すること。
(ロ) 党の政策をただ一つの正しい政策として公然と認めること。
(ハ) 党とその機関の決議に無条件にしたがうこと。

㈡　試験期間をすごすこと。この期間中に党は提出された上申書を点検し、この期間がすぎたのち、党は審査の結果をもとにし、除名されたもの一人ひとりの復党の問題を個別的に提起する。

当時、党としてはこう考慮していた。すなわち、除名されたものが公然とこれらの条件をみとめることは、いかなるばあいのもとでも、党にとって積極的な意義をもつにちがいない。なぜなら、それは、トロツキー・ジノビエフの隊伍の統一をうちやぶり、かれらのあいだに分解をひきおこし、もういちど党の正しさと威力を示すであろうし、また、党としても、上申書をかいてきたものに誠意があるばあいには、以前の活動家を党によびもどすことができるし、誠意がないばあいには、みなの目のまえでかれらを、もはや誤りをおかしたものとしてではなしに、思想のない出世主義者として、労働者階級をあざむくもの、すくいがたい二面派としてばくろすることができる、からである。

除名されたものの多数は党のだした入党条件をうけいれるとともに、新聞紙上にこれに応じた声明書を発表した。

党はかれらを気の毒におもい、ふたたびかれらが党、労働者階級の一員になる可能性を拒否することを望まなかったので、かれらにふたたび党員としての権利をあたえた。

だが、ときがたつにつれて判明したところでは、少数の例外をのぞいて、トロツキー・ジノビエフ連合の「積極的活動家」の上申書は、もともと徹頭徹尾いつわりの、二面的な上申書だった。

判明したところでは、この連中は、上申書をだすまえから、人民のまえで自分の所信を堅持する決意のある政治的潮流ではなくなり、思想のない出世主義者の徒党に転化していた。かれらは、みなの目のまえで自分の

所信をあますところなくふみにじり、みなの目のまえで自分の敵視する党の見解を礼賛し、労働者階級とその党に危害をくわえる可能性を得るため、党のなかに、労働者階級のなかにいのこることさえできれば、いかようにもその色合いを、カメレオンのようにかえることを辞さなかった。

トロツキー・ジノビエフ連合の「積極的活動家」は、もともと政治的ペテン師であり、政治的二面派だったのである。

政治的な二面派は、一般に、欺瞞から出発して、人民をあざむき、労働者階級をあざむき、労働者階級の党をあざむくという方法でその暗い仕事を遂行する。だが、政治的な二面派をたんなる偽瞞者とみなすことは、けっしてできない。政治的な二面派は、政治的出世主義者の、思想のない徒党であり、とっくに人民の信頼をうしなっているが、政治活動家としての肩書を保っておきたいばかりに、そのためには、欺瞞の方法によって、カメレオンの方法によって、ペテンの方法によって、てあたりしだいの方法によって、もういちど信頼をかちとろうと努める。政治的二面派は政治的出世主義者の無原則的な徒党であり、かれらは「適当な時機」にふたたび政治の舞台にはいあがり、「支配者」の資格で人民の頭上にのさばるためには、犯罪者だろうと、社会のくずだろうと、人民のゆるすことのできない敵だろうと、どんなものにもすがりつくことを辞さない。

トロツキー・ジノビエフ連合の「積極的活動家」は、もともとこのような政治的二面派だったのである。

三、富農にたいする攻撃　ブハーリン・ルイコフ反党グループ　第一次五ヵ年計画の採用　社会主義競争　大衆的なコルホー

ズ運動の開始

党の政策に反対し、社会主義建設に反対し、集団化に反対するトロツキー・ジノビエフ連合の扇動、おなじくまた、コルホーズ事業はだめだとか、富農は社会主義に自分で「はいりこむ」から、かれらに手をふれる必要はないとか、ブルジョア階級が富裕になることは社会主義にとって危険ではないとか、といったブハーリン派の扇動、これらすべての扇動は、国内の資本主義、とりわけ富農のあいだで、大きな反響をよんだ。いまや富農は新聞の反響から、かれらが、孤立無援ではないこと、トロツキー、ジノビエフ、カーメネフ、ブハーリン、ルイコフおよびその他がかれらを保護し代弁していることを知った。こういった状況が、ソビエト政府の政策にたいする富農の反抗精神をたかめないではおかなかったのはとうぜんである。そして実際、富農は日一日と反抗をつよめはじめた。富農たちは、手もとにたくわえていた少なからぬ余剰穀物をソビエト国家に売りわたすことを、集団的に拒否しはじめた。かれらは、コルホーズ農村にたいし、農民における党やソビエトの活動家にたいする、テロルを加えはじめ、コルホーズや国家の穀物集積場を焼きはらいはじめた。

党は、富農の反抗が粉砕されないかぎり、富農が農民の目のまえで、公然たる闘争でたたきつぶされないかぎり、労働者階級と赤軍は穀物の不足にくるしみ、そして農民のコルホーズ運動は大衆的な性質を帯びることができないことと、理解していた。

党は、第十五回党大会の指令にしたがって、富農にたいし断固たる攻撃に転じた。攻撃にさいして党は、しっかり貧農に依拠し、中農との同盟をかため、あくまで富農にたいし断固たる闘争をおこなうというスローガ

ンを実行した。富農が公定価格で余剰穀物を国家に売りわたすのを拒否するのにこたえて、党と政府は、富農にたいする一連の非常手段をとり、富農や投機師が、余剰穀物の国家への売りわたしをこばむばあいには、かれらからこれらの余剰穀物を裁判によって没収するという刑法第百七条を適用し、同時に貧農に多くの特典をあたえ、その結果没収された富農の穀物の二五パーセントが貧農の処理に委ねられた。

非常手段は効果をおさめた。貧農と中農は、富農にたいする断固たる闘争にくわわった。富農は孤立させられた。富農と投機師の反抗はうちやぶられた。一九二八年末になると、ソビエト国家は十分な予備穀物をその処理のもとにおき、コルホーズ運動はいっそう確実な足どりで、前進した。

この同じ年、ドンバスのシャハト地区で、ブルジョア専門家の大規模な破壊組織が摘発された。シャハトの破壊者たちは、企業の以前の所有者、——ロシア資本家や外国の資本家、それに外国の軍事諜報部と、緊密なつながりをもっていた。かれらの目的は、社会主義工業の増大を挫折させ、ソ連における資本主義の復活をうながすことであった。破壊者たちは、石炭採掘高をへらそうとして、採炭にあたり正しくない方法をとった。かれらは、機械や通風機を破壊し、炭坑、工場、発電所に崩壊、爆発、火災をおこさせた。破壊者たちは、労働者の物質生活の改善を意識的にじゃまし、ソビエトの労働保安にかんする法規にそむいた。

破壊者たちは、裁判にかけられた。かれらは法廷によってしかるべき懲罰をうけた。

党中央委員会は、シャハト事件から教訓をひきだすようすべての党組織に命じた。スターリン同志はこう指示した。ボリシェビキの経営担当者は、こんご古いブルジョア専門家のなかの破壊者からだまされないようにするには、みずから生産技術の精通者となるべきであり、労働者階級のなかからの新しい技術幹部の養成を早

めなければならない、と。

中央委員会の決議にもとづき、高等技術学校において若い専門家を養成する仕事が改善された。数千もの、党員、共産青年同盟員および労働者階級の事業に忠実な党外者が、学習に動員された。

党が富農にたいする攻撃に転ずるまで、そして、党がトロツキー・ジノビエフ連合の一掃にたずさわっていたあいだは、ブハーリン・ルイコフグループは多少ともなりをひそめ、反党勢力の後備隊としてとどまり、あえて公然とはトロツキストを援助せず、ときには党といっしょにトロツキストに反対さえした。党が富農にたいする攻撃に転じ、富農にたいし非常手段をとるにおよんで、ブハーリン・ルイコフグループは仮面をぬぎすて、公然と党の政策に反対しはじめた。ブハーリン・ルイコフグループの富農的本性は我慢しきれなくなり、このグループの参加者は、すでに公然と富農をかばいはじめた。かれらは、非常手段のとりけしを要求し、さもなければ農業の「退化」(下向、衰退、崩壊）がはじまるかもしれないと、まぬけたちをおどかし、退化はすでにはじまっていると主張した。かれらは、農業のより高い形態であるコルホーズとソフホーズの増大に注意せず、富農経済の衰退を目前にして富農経済の退化を農業の退化だといつわったのである。理論的にその立場をかためるため、かれらはわらうべき「階級闘争消滅論」をでっちあげ、この理論をもとにして、こう断定した。すなわち、資本主義的要素との闘争で社会主義の成功が大きくなればなるほど、階級闘争は緩和されるだろう、階級闘争はすぐに完全に消滅するだろう、階級敵は抵抗することなしにそのすべての陣地をあけわたすであろう。だから、もともと富農にたいする攻撃をおこなう必要はない、と。こうしてかれらは、富農は社会主義に平和的に成長するというその使いふるしたブルジョア理論を復活させ、レーニン主義の著名な命題をふ

みにじったのである。この命題によると、階級敵がその足場をうしなうにつれ、社会主義の成功が大きくなるにつれ、階級敵の反抗もますます鋭い形をとるのであり、階級敵が一掃されてはじめて階級闘争は「消滅」することができるのである。

たやすく理解できるように、党の面前にあらわれたブハーリン・ルイコフグループは右翼日和見主義のグループであり、それとトロツキー・ジノビエフ連合とは、ただ形のうえでちがうだけであった。つまり、トロツキストとジノビエフ派は、「永久革命」という左翼的な、かん高い、革命的な空語でその投降主義の本質をおおいかくすなんらかの可能性をもっていたが、ブハーリン・ルイコフグループは、党が富農への攻撃に転じたのにともなって、党に反対し、もはやその投降主義の面目をおおいかくす可能性をもたなくなり、公然と、とりつくろうことなく、仮面をぬぎすてて、わが国の反動勢力、まず第一に富農を保護する必要に迫られたのである。

党は、ブハーリン・ルイコフグループが、党に反対する共同闘争のために、おそかれはやかれトロツキー・ジノビエフ連合の残党に手をさしのべるにちがいないということを、理解していた。

ブハーリン・ルイコフのグループは、政治行動とともに、その仲間をかきあつめる組織「活動」をおこなった。このグループは、ブハーリンをつうじてスレプコフ、マレツキー、アイヘンバリト、ゴリデンベルグらのブルジョア青年を、トムスキーをつうじて官僚化した労働組合の上層部（メリニチャンスキー、ドガドフら）を、ルイコフをつうじて腐敗したソヴエト機関の上層部（スミルノフ、エイスモント、シュミットら）をかきあつめた。政治的に腐敗し、その投降主義的な気持をおおいかくさない人びとが、よろこんでこのグループに

はいった。

当時ブハーリン・ルイコフグループはモスクワの党組織の上層部（ウグラノフ、コトフ、ウハノフ、リューチン、ヤゴダ、ポロンスキーら）の支持をうけていた。そのさい、右派の一部は、これまでどおり仮面をかぶり、公然とは党の路線に反対しなかった。モスクワの党の新聞や党の集会において、富農に譲歩すべきこと、富農に課税するのは不適当であること、工業化は人民にたえがたい負担をかけること、重工業の建設は時期尚早であることなどが、宣伝された。ウグラノフは、ドニェプル水力発電所の建設に反対し、資金を重工業から軽工業にまわすことを要求した。ウグラノフおよびその他の右翼投降派は、モスクワはむかしからサラサ産地のモスクワであったし、今後もそうあるべきであって、ここに機械製造工場を建設する必要はない、といいはった。

モスクワの党組織は、ウグラノフおよびその仲間たちを暴露し、かれらに最後の警告をあたえ、党中央委員会のまわりにいっそうしっかりと団結した。スターリン同志は、一九二八年、ソ連共産党（ボ）モスクワ州委員会総会において、砲火を右翼偏向にたいして集中しながら、二つの戦線での闘争をすすめなければならないと指示した。スターリン同志は、右派は党内における富農の代理人だといった。

「われわれの党内で右翼偏向が勝利をおさめるなら、資本主義勢力を野放しにし、プロレタリア階級の革命の陣地を破壊し、わが国における資本主義復活の機会を増大させるであろう」と、スターリン同志はいった。（スターリン『レーニン主義の諸問題』）

一九二九年のはじめに判明したことだが、ブハーリンは、右翼投降派のグループを代表して、カーメネフを

つうじトロツキストと結託し、党に反対する共同闘争をおこなう協定をかれらと作りあげた。中央委員会は、右翼投降派のこのような犯罪的な行動を暴露するとともにこの問題の結末は、ブハーリン、ルイコフ、トムスキーらにとって悲しむべきことになるであろうと、かれらに警告した。だが、右翼投降派は静まらなかった。かれらは中央委員会で、新しい反党の政綱、宣言を提出したが、中央委員会はこの声明を非難した。中央委員会は、かれらにトロツキー・ジノビエフ連合の運命を思い出させて、かさねて警告した。しかし、ブハーリン・ルイコフグループは、その反党活動をつづけた。ルイコフ、トムスキー、ブハーリンは中央委員会に辞表をだすことによって党をおどかそうと考えた。中央委員会は、このサボタージュ的辞職政策を非難した。最後に、一九二九年の中央委員会十一回総会は、右翼日和見主義の見解を宣伝することは、党内にとどまることとあいいれないものとみとめ、右翼投降派の急先鋒であり指導者であるブハーリンを中央委員会政治局から排除することを提議し、ルイコフ、トムスキーおよびその他の右翼反対派の参加者にたいし、厳重な警告をあたえた。右翼投降派の頭目たちは、事態が悲しむべき方向に向かっているのをみて、声明書を提出し、自分らの誤りと党の政治路線の正しさをみとめた。

右翼投降派は、その幹部が粉砕されるのをふせごうとして、一時退却することを決定した。

党と右翼投降派との闘争の第一段階は、このようにして終わった。

あらたに党内におこった意見の対立は、ソ連の外敵の注意をひかずにはおかなかった。かれらは、党内の「新たな紛争」は党がよわまったことのきざしであるとおもって、ソ連を戦争にまきこみ、まだ固まっていない国の工業化の事業を破壊することをあらためてたくらんだ。一九二九年の夏、帝国主義者は、中国とソ連と

の紛争、中国の軍閥による中東鉄道（ソ連に所属）の強奪、中国白軍によるわが祖国の極東国境にたいする襲撃を組織した。だが、中国の軍閥の奇襲は短期間に一掃され、赤軍に粉砕された軍閥は退却し、紛争は、満州当局との平和協定によって終わりをつげた。

ソ連の平和政策は、あらゆる妨害があったにもかかわらず、また、外敵の陰謀と党内の「紛争」があったにもかかわらず、再度、凱歌をあげた。

まもなく、前にイギリスの保守党員によって断絶されたソ連のイギリスとの外交関係、通商関係が復活した。

党は、内外の敵による攻撃を首尾よく撃退すると同時に、重工業の建設を展開し、社会主義競争を組織し、ソフホーズとコルホーズを建設し、最後に、国民経済の第一次五ヵ年計画の採用と実現に必要な諸条件を準備するという大きな仕事をすすめた。

一九二九年四月、第十六回党会議がひらかれた。会議のおもな問題は、第一次五ヵ年計画であった。会議は右翼投降派が堅持する「最少限」の五ヵ年計画案をしりぞけ、どんな条件のもとでも遂行しなければならないものとして「最大限」の五ヵ年計画案を採用した。

こうして、党は、有名な社会主義建設の第一次五ヵ年計画を採用した。

五ヵ年計画によると、一九二八～三三年における国民経済への基本投資の額は六百四十六億ルーブルと定められた。そのうち、百九十五億ルーブルが工業と電化に、百億ルーブルが運輸業に、二百三十二億ルーブルが農業に投入されることにきめられた。

これは、現代技術によってソ連の工業と農業を装備する壮大な計画であった。スターリン同志はこう指摘した。

「五ヵ年計画の基本任務は、わが国において、工業全体だけでなく、運輸業をも、農業をも、社会主義の基礎のうえに再装備し、再組織することのできるような重工業を創設することにあった。」(スターリン『レーニン主義の諸問題』)

この計画は、ひじょうに壮大なものではあったが、ボリシェビキにとっては、なんら予想外のことでも、目のくらむようなことでもなかった。それは、工業化と集団化の発展の全過程によって準備されたものであった。それは、まえもって労働者、農民をまきこみ、社会主義競争という形で表現されていた労働の高揚によって、準備されたものであった。

第十六回党会議は、社会主義競争の展開についての全勤労者あてのよびかけを採択した。

社会主義競争は、労働と、労働にたいする新しい態度とのかがやかしい手本をしめした。労働者とコルホーズ農民は多くの企業、コルホーズ、ソフホーズのなかで、呼応計画を提出した。かれらは、英雄的な活動の手本をしめした。かれらは、党と政府のさだめた社会主義建設計画を遂行したばかりでなく、さらに超過遂行した。労働にたいする人びとの考えはかわった。資本主義制度のもとでのような強制的、苦役的な義務にもとづく労働は、いまや「名誉なこと、光栄なこと、勇ましい英雄的なこと」にかわりはじめた。(スターリンのことば)

全国で新しい巨大な工業建設がすすめられた。ドニェプル水力発電所の建設工事が進展した。ドンバスで

は、クラマトルスク工場とゴルロフカ工場の建設工事、ルガンスク機関車製造工場の改造工事がはじまった。新しい炭坑や溶鉱炉がふえた。ウラルでは、ウラル重機械製造工場、ベレズニキとソリカムスクの化学コンビナートが建設されつつあった。マグニトゴルスク冶金工場の建築工事がはじまった。モスクワとゴーリキーでは大型自動車製造工場の建設がすすんだ。大型のトラクター工場とコンバイン工場が建設され、ロストフ・ナ・ドヌーでは、大型農業機械製造工場が建設されていった。ソ連第二の石炭基地クズバスが拡大されていった。巨大なトラクター工場が、十一ヵ月間で、草原地帯のスターリングラードにできあがった。ドニェプル水力発電所とスターリングラード・トラクター工場の建設にあたって、労働者たちは労働生産性の世界記録をうちやぶった。

歴史上、新しい工場建設のこれほどの大きな規模、新しい建設へのこれほどの熱意、労働者階級の何百万大衆のこれほどの労働のうえでの英雄主義はこれまでにはなかった。

これは、社会主義競争を基礎として展開された労働者階級のほんとうの労働の高揚であった。

農民もこんどは労働者におくれをとらなかった。農村でも、おなじくコルホーズを建設する農民大衆の労働の高揚がはじまった。農民大衆は、もうはっきりとコルホーズのほうへむきかえはじめた。トラクターやその他の機械をもつソフホーズと機械トラクターステーションが、ここでは大きな役割をはたした。農民は、大衆的にソフホーズや機械トラクターステーションにやってきては、トラクターや農業機械の作業を観察して、歓喜し、その場で「コルホーズへの加入」を決定した。小さな、零細な個人経営に分散し、いくらかでも使いものになる道具や畜力もなく、広大な荒地を開墾する可能性もなく、経営改善のみこみもなく、貧困と孤独にう

ちひしがれ、誰にも顧みられなかった農民は、ついに出口を、よりよい生活への道をさがしあてた。つまり、小経営を集団へ、コルホーズへ統合することに、どんな「固い土地」でも、どんな荒地でも耕作する能力をもつトラクターに、国家の機械、金銭、人材、助言による援助に、富農への隷属から解放される可能性に、出口をみいだしたのである。この富農は、ソビエト政府によって、何百万の農民大衆の喜びのうちにうちやぶられ、地にたたきふせられたばかりであった。

これを基礎にして、大衆的なコルホーズ運動ははじまり、さらに発展して、一九二九年末にはとりわけ強化され、われわれの社会主義工業においてさえみられなかったほどのテンポで、コルホーズを増大させた。コルホーズの播種面積は、一九二八年には百三十九万ヘクタールだったのが、一九二九年には四百二十六万二千ヘクタールになり、そして一九三〇年には、コルホーズはすでに千五百万ヘクタールをたがやす可能性をもっていた。スターリン同志はその論文『偉大な転換の年』(一九二九年)において、コルホーズの増大のテンポにふれ、こういっている。

「一般に発展のテンポがひじょうにはやいのを特徴とするわれわれの社会化された大工業においてさえも、こういうあらしのような発展のテンポは、いまだかつてみられなかったということを認めなければならない。」

これは、コルホーズ運動の発展における一つの転換であった。

これは、大衆的なコルホーズ運動のはじまりであった。スターリン同志はその論文『偉大な転換の年』のなかで、

「こんにちのコルホーズ運動における新しい点ははたしてなににあるのか？」と問い、こう答えている。

「こんにちのコルホーズ運動のなかで新しく、かつ決定的な点は、以前にみられたように、農民が個個のグループとしてでなくて、全村、全郷、全区、ときとしては全管区をあげてコルホーズにはいってくることにある。これはなにを意味するか。これは、中農がコルホーズにはいったことを意味する。ここに農業の発展における根本的な転換の基礎があり、この根本的な転換は、ソビエト権力の……もっとも重要な成果である。」

このことは、全面的な集団化の基礎にたって、富農を階級として一掃する任務が成熟しつつあること、あるいはすでに成熟したということを意味した。

要　約

一九二六〜二九年の、国の社会主義工業化のための闘争において、党は大きな国内的、国際的な困難を克服した。党と労働者階級の努力は、国の社会主義工業化の政策を、勝利にみちびいた。

工業化のもっとも困難な任務のひとつ、すなわち、重工業建設の資金を蓄積する任務は、だいたいにおいて

解決された。全国民経済を再装備することのできる重工業の基礎がきずかれた。

社会主義建設の第一次五ヵ年計画が採用された。新しい工場、ソフホーズ、コルホーズの巨大な建設が展開された。

社会主義の道に沿ってのこの前進は、国内における階級闘争の先鋭化と党内闘争の先鋭化をひきおこした。この闘争のもっとも重要な結果は、富農の反抗を鎮圧したこと、トロツキー・ジノビエフの投降派的な連合を反ソビエトの連合として暴露したこと、右翼投降派を富農の代理人として暴露したこと、トロツキストを党から駆逐し、トロツキストと右翼日和見主義者の見解がソ連共産党（ボ）に所属することとあいいれないということをみとめたことである。

トロツキストは、イデオロギーのうえでボリシェビキ党によって撃破され、労働者階級のあいだにおけるあらゆる基盤をうしなったのちは、すでに政治的な潮流ではなくなり、政治的なペテン師の無原則的な出世主義的な徒党に、政治的な二面派の集団になってしまった。

党は、重工業の基礎をすえたのち、労働者階級と農民を動員し、ソ連の社会主義的改造の第一次五ヵ年計画を遂行した。国内では何百万という勤労者の社会主義競争がくりひろげられ、強力な労働の高揚がうまれ、新しい労働規律がつくりだされた。

この時期は、偉大な転換の年をもって終わった。この転換は、工業における社会主義のもっとも大きな成功、農業における最初の重大な成功、中農のコルホーズへの転向、大衆的なコルホーズ運動の開始を意味したのである。

第十一章　農業集団化のための闘争における　ボリシェビキ党

（一九三〇年―一九三四年）

一、一九三〇―一九三四年の国際情勢　資本主義諸国の経済恐慌　日本の満州侵略　ドイツにおけるファシストの政権獲得　戦争の二つの根源地

ソ連が国の社会主義工業化で重大な成功をかちとり、早いテンポで工業を発展させつつあったのに、資本主義諸国では一九二九年末に、空前の破壊力をもつ世界経済恐慌が爆発し、それは以後の三年間にいっそう深刻化していった。工業恐慌は農業恐慌とからみあって、資本主義諸国の状態をいっそう悪化させた。

恐慌の三年間（一九三〇～一九三三年）にソ連の工業は二倍以上に増大し、一九三三年には一九二九年の水準にくらべ二〇一パーセントとなったのに、アメリカの工業は一九三三年末には一九二九年の水準の六五パーセントに、イギリスの工業は八六パーセントに、ドイツの工業は六六パーセントに、フランスの工業は七七パー

セントに、それぞれ低下した。

このような状況は、社会主義経済体制が資本主義経済体制よりすぐれていることをもういちどはっきりしめした。このような状況は、社会主義国家が経済恐慌をこうむらない世界でただ一つの国であることをしめした。

世界経済恐慌の結果、二千四百万の失業者が飢えと貧困、窮乏におとしいれられた。数千万の農民が農業恐慌の苦痛になやまされた。

世界経済恐慌は、帝国主義諸国のあいだ、戦勝国と敗戦国のあいだ、帝国主義と植民地国および従属国とのあいだ、労働者と資本家のあいだ、農民と地主のあいだの矛盾を、いっそう激化させた。

スターリン同志は、第十六回党大会でおこなった総括報告のなかでつぎのように指摘した。ブルジョア階級は、二つの方面に経済恐慌からの出口を求めるであろう。その出口とは、一方では、ファシスト独裁を、すなわち、資本主義のもっとも反動的な、もっとも排外主義的な、もっとも帝国主義的な要素による独裁をうちたてることによって労働者階級を弾圧することであり、他方では、防衛力の弱い国の利益を犠牲にして、植民地および勢力範囲を再分割するための戦争を起すことである、と。

結果は、まさしくそのとおりであった。

一九三二年、日本のがわから戦争の脅威がつよまった。日本帝国主義者は、ヨーロッパの列強とアメリカが経済恐慌にともなう自国の問題に手いっぱいなのをみて、この機会を利用し、防衛力の弱い中国に圧力をくわえ、中国を従属させ、中国の支配者になろうと決心した。日本帝国主義者は、中国に宣戦することなしに、自

分ででっちあげた「地方的事件」をずるがしこくも利用し、こそ泥のようなやり方で軍隊を満州にひきいれた。日本の軍隊は、全満州を占領し、中国北部の占領とソ連への攻撃のために有利な足場を準備した。日本は、自由に行動できるようにするため、国際連盟から脱退し、軍備を拡張しはじめた。

このような状況は、アメリカ、イギリス、フランスを、極東における自国海軍の軍備の強化においやった。あきらかに日本は、中国を従属させ、ここからヨーロッパ、アメリカの帝国主義列強をしめだそうという目的を追求していた。ヨーロッパ、アメリカの帝国主義列強は、軍備の強化でこれに答えた。

だが、日本は、ソビエトの極東地方を侵略するという目的もたてていた。当然ながら、ソ連は、このような危険を放置しておくわけにはいかなかったので、極東地方の国防力を極力かためはじめた。

こうして、ファッショ化した日本帝国主義者によって、極東に第一の戦争根源地が形成された。

経済恐慌は、極東で資本主義の矛盾を激化させただけでなく、このような矛盾をヨーロッパにおいても激化させた。工業と農業のながびく恐慌、大量の失業者、そして貧しい諸階級の増大した生活苦は、労働者と農民の不満をつのらせた。不満は労働者階級の革命的憤激にかわった。不満は、ドイツでは、すなわち、戦争によって、戦勝国のイギリス、フランスの賠償によって、経済恐慌によって経済的に疲弊したドイツにおいてとくに強まった。ドイツでは労働者階級は、自国およびイギリス、フランスのブルジョア階級の圧迫をこうむらなければならなかったのである。ファシストが権力の座につくまえの最後の国会選挙においてドイツ共産党が六百万票を獲得したということが、これを雄弁にものがたっている。ドイツのブルジョア階級は、ドイツにのこっていたブルジョア民主主義的自由が有害なものになるかもしれないということ、労働者階級はこの自由を

利用して革命運動を展開することがあろうということをみてとった。そこでドイツのブルジョア階級は、ドイツでブルジョア階級の権力を保持するただ一つの手段は、ブルジョア的自由を一掃し、国会の役割を奪い、そして、労働者階級を弾圧でき、報復的な気分をもつ小ブルジョア大衆を基礎とするテロリスト的なブルジョア民族主義的独裁をうちたてることだ、と決心した。そこでドイツのブルジョア階級は、人民を欺瞞するために民族社会主義党と自称するファシストの党を権力の座によびだした。かれらは第一に、ファシスト党が、帝国主義的ブルジョア階級のなかのもっとも反動的な、もっとも労働者階級を敵視する部分であり、第二に、ファシスト党が、もっとも報復主義的な党で、民族主義的な気分をもっている何百万の小ブルジョア大衆を抱きこむことができることを、よく知っていた。労働者階級の裏切り者、すなわちその妥協的政策によってファシズムの露ばらいをしたドイツ社会民主党の指導者は、この点でファシスト党を助けた。

これらが、一九三三年、ドイツのファシストの権力掌握を決定した諸条件である。

スターリン同志は、第十七回党大会の総括報告のなかで、ドイツの出来ごとを分析し、こうのべている。

「ドイツにおけるファシズムの勝利を、労働者階級の弱さのあらわれとして、ファシズムの露ばらいをした社会民主党が労働者階級を裏切った結果としてだけみてはならない。それと同時に、ブルジョア階級の弱さのあらわれとして、すなわち、ブルジョア階級がもはや、議会主義とブルジョア民主主義というふるい方式で支配していくことができなくなり、そのために国内政策のうえで、テロリストの方式による支配に訴えざるをえなくなったことのあらわれとしてもみるべきである。……」(スターリン『レーニン主義の諸問題』)

ドイツ・ファシストは、国会の放火、労働者階級の残忍な弾圧、労働者階級の諸組織の破壊、ブルジョア的民主主義的な自由の一掃によって、その対内政策を表示した。かれらは、国際連盟からの脱退によって、ドイツに有利にヨーロッパ諸国の国境を暴力的にかえるための戦争を公然と準備することによって、その対外政策を表示した。

こうして、ドイツ・ファシストによって、ヨーロッパの中心に、第二の戦争根源地が形成された。

当然ながら、ソ連は、このような重大な事実を放置しておくわけにはいかなかったので、西方における諸事件の進展をするどく注視するとともに、その西部国境の国防力をかためた。

二、富農的要素制限の政策から階級としての富農一掃の政策へ　コルホーズ運動における党政策の歪曲との闘争　資本主義的要素にたいする全戦線にわたる攻撃　第十六回党大会

一九二九〜三〇年に展開された農民のコルホーズへの大衆的加入は、それまでの党および政府のすべての活動の結果であった。社会主義工業が農業のためにトラクターや農業機械を大量に製造しはじめるまでに成長したこと、一九二八年と一九二九年の食糧調達カンパニアにおいて富農にたいし断固たる闘争がおこなわれたこと、農民を集団経営にしだいに慣らしていく農業の協同化が成長したこと、そして最初のコルホーズとソフホ

ーズの経験がすぐれていたこと、これらすべてが、全面的な集団化への移行を用意し、全村、全区、全管区あげての農民のコルホーズへの加入を用意したのである。

全面的な集団化への移行は、農民の基本大衆が簡単に、平和的にコルホーズに加入したことをつうじてではなくて、農民の富農との大衆的な闘争を通じておこなわれた。全面的な集団化は、全村のすべての土地がコルホーズの手に移ることを意味したが、当時、大部分の土地は富農の手ににぎられていた。だから農民は、富農を土地から追い出し、富農の財産を没収し、富農の家畜や機械を奪い、そしてソビエト権力に富農の逮捕と追放を要求した。

したがって、全面的集団化とは、富農の一掃を意味した。

これは、全面的集団化を基礎として、階級としての富農を一掃する政策であった。

当時すでに、ソ連は、富農をかたづけ、その反抗をうちやぶり、階級としての富農を一掃するとともに、富農の生産をコルホーズ、ソフホーズの生産をもってかえるだけの十分な物質的基礎をもっていた。

一九二七年には、富農はまだ六億プード以上の穀物を生産し、そのうちから約一億三千万プードの商品穀物を提供していた。一九二七年に、コルホーズとソフホーズが提供できた商品穀物は三千五百万プードにすぎなかった。一九二九年には、ボリシェビキ党が、コルホーズとソフホーズを発展させる断固たる方針をとったこと、農村にトラクターやその他の農業用機械を供給する社会主義が成功をかちとったことによって、コルホーズとソフホーズは成長し、重大な勢力になった。この年、コルホーズとソフホーズは、すでに四億プードをくだらぬ穀物を生産したが、そのうち商品穀物として一億三千万プードをうわまわる、つまり、一九二七年の富農以

上の量を提供した。そして一九三〇年には、コルホーズとソフホーズは、富農が一九二七年に提供した量よりも比較にならないほどおおい四億プード以上の商品穀物を提供する義務を負い、しかも実際に提供したのである。

このようにして、国の経済における階級の力が変動したことによって、また、富農の穀物生産を、コルホーズとソフホーズの生産にとりかえるのに必要な物質的基礎がそなわったことによって、ボリシェビキ党は、富農制限の政策から、新しい政策に、全面的集団化を基礎とした階級としての富農一掃の政策へ移行する可能性をあたえられた。

ソビエト権力が一九二九年前にとったのは富農制限の政策であった。ソビエト権力は、富農に高い租税を課し、公定価格で穀物を国に売りわたすことをかれらに要求し、土地賃貸借にかんする法律によって富農の土地利用をかなりの程度において制限し、個人農民経営での賃労働の使用にかんする法律によって富農経営の規模を制限した。だが、ソビエト権力はまだ富農一掃の政策はとっていなかった。というのは、土地の賃貸借と労働の雇用にかんする法律は富農の存在をゆるし、そして富農の財産没収の禁止もまたこの点についてかなりの保障をあたえていたからである。このような政策の結果、富農の増大は抑止され、そしてこの制限にたえきれなかった富農の個々の階層がしめだされ、破産におちいった。だが、この政策は、階級としての富農の経済的基礎を絶滅するものでも、富農の一掃をもたらすものでもなかった。これは、富農制限の政策であり、富農一掃の政策ではなかった。この政策は一定の時期まで、すなわち、コルホーズとソフホーズがまだ弱く、その穀物生産が富農生産にとってかわることのできなかったあいだにおいて、必要だったのである。

一九二九年末になると、コルホーズとソフホーズの成長にともなって、ソビエト権力は、この政策から急激な転換をおこなった。ソビエト権力は、階級としての富農を一掃する政策へ、根絶する政策へ移行した。ソビエト権力は、土地の賃貸借と労働の雇用にかんする法律を廃止し、こうして富農は土地も雇用労働者をもうしなってしまった。ソビエト権力は、富農財産の没収禁止を解除し、農民がコルホーズのために富農の家畜、機械およびその他の農具を没収するのをゆるした。富農は収奪された。富農の収奪は、一九一八年の工業における資本家の収奪とまったくおなじで、ただちがう点は、こんどは富農の生産手段は国家の手にではなく、統合された農民の手に、すなわちコルホーズの手に移ったことにある。

これは、もっとも深刻な革命的な転換であり、社会のふるい質的状態から新しい質的状態への飛躍であり、その結果において、それは一九一七年の十月の革命的転換と同じ意義をもつものであった。

この革命の特殊な点は、それが上から、国家権力の発意により、そして富農の隷属に反対し、自由なコルホーズ生活のために闘争する何百万の農民大衆の下からの直接の支持のもとに遂行されたことである。

この革命は、社会主義建設における三つの根本問題を一挙に解決した。すなわち、

(イ) それは、わが国のもっとも数の多い搾取階級で、資本主義復活のとりでである富農階級を一掃した。

(ロ) それは、わが国のもっとも数の多い勤労階級としての農民階級を、資本主義をうみだす個人経営の道から、共同的な、コルホーズの、社会主義的な経営の道にうつした。

(ハ) それは、国民経済のなかの、もっとも広大な、そして切実に必要とされたが、またもっとも立ちおくれた部門である農業において、社会主義の基礎を、ソビエト権力にあたえた。

このようにして、国内における資本主義復活の最後の根源が絶滅され、同時に社会主義的国民経済の建設に必要な、あらたな決定的意義をもつ条件がつくりだされた。

スターリン同志は、一九二九年、階級としての富農一掃の政策に論証を加えるとともに、全面的集団化という大衆運動の結果をあきらかにし、こうかいた。

「ソ連における資本主義の復活を夢みたすべての国の資本家の最後の期待、すなわち『神聖な私有財産の原則』は、崩壊し、灰になりつつある。かれらが資本主義のために土壌をこやす材料とみている農民は、賛美されたその『私有財産』の旗を集団的に見すて、集団主義の軌道、社会主義の軌道へとむかいつつある。資本主義復活を夢みる最後の期待は、崩壊しつつある。」（スターリン『レーニン主義の諸問題』）

階級としての富農一掃の政策はソ連共産党（ボリシェビキ）中央委員会の一九三〇年一月五日の『集団化のテンポとコルホーズ建設にたいする国の援助の方法について』という歴史的意義ある決議のなかで明文化された。この決議は、ソ連の異なった地域の条件のちがい、ソ連の異なった各州での集団化の準備の程度のちがいを十分考慮にいれていた。

それぞれ異なった集団化のテンポが規定された。ソ連共産党（ボリシェビキ）中央委員会は、集団化のテンポの見地から、ソ連の各州を三つのグループに分けた。

第一のグループには、集団化の準備がもっともととのい、トラクター数が比較的多く、ソフホーズが比較的多く、そして過去の食糧調達カンパニヤで富農とたたかった経験の比較的多い、もっとも重要な穀物地域、す

なわち北カフカズ（クバン地区、ドン地区、テレク地区）、ボルガ中流地区、ボルガ下流地区がはいった。この穀物地域のグループにたいしては、中央委員会は、一九三一年の春に集団化をだいたいにおいておわるように提議した。

第二のグループの穀物地域には、ウクライナ、中部黒土州、シベリア、ウラル、カザフスタンなどの穀物地域が含まれたが、このグループは、一九三二年春に集団化がだいたいおわることになっていた。

その他の各州、各地方、各共和国（モスクワ州、後カフカズ、中央アジアの諸共和国など）は、集団化の期間を第一次五ヵ年計画の終わり、すなわち一九三三年まで延長してもよかった。

党中央委員会は、集団化のテンポがはやまりつつあることに関連して、トラクター、コンバインおよびトラクターに連結するなどを生産する工場の建設をさらに早める必要があるとみとめた。同時に、中央委員会は、「コルホーズ運動の現段階において、馬の牽引力の役割を軽視する傾向、馬の浪費と投げ売りをひきおこす傾向に、断固たる反撃を加える」よう要求した。

一九二九〜三〇年度のコルホーズの信用は二倍に（五億ルーブルまで）拡大された。

国家の出資でコルホーズの耕地整理の実行を保証することが指令された。

この決議で、もっとも重要な指示がだされた。それは、現段階でのコルホーズ運動の主な形態は、基本的な生産手段だけを集団化する農業アルテリであるというものである。

中央委員会は、各級の党組織にたいし、「コルホーズを組織するための真の社会主義競争を、集団化のまねごとですりかえる危険をひきおこすおそれのある、上からのコルホーズ運動にたいするいかなる『命令』にも

反対」すべきである、ともっとも真剣に警告をあたえた。(『ソ連共産党(ボリシェビキ)決議集』第二部)
中央委員会のこの決議は、農村で党の新しい政策を実現するうえで、問題をあきらかにした。
富農一掃の政策と、全面的集団化の決定を基礎にして、強力なコルホーズ運動が展開された。全村、全区の農民が、コルホーズに加入し、富農を掃き出し、富農の隷属から解放された。
だが、集団化が大きな成功をかちえたのとならんで、あらわれはじめた。まもなく党活動家の実践のなかで、欠陥が、コルホーズ建設についての党の政策の歪曲が、あらわれはじめた。中央委員会が、あらかじめ集団化の成功に有頂天にならないように戒めていたにもかかわらず、多くの党活動家は、所と時の条件を無視し、農民にコルホーズ加入の心がまえがどの程度できているかを考慮にいれないで、人為的に集団化を強行しはじめた。
コルホーズ建設における自由意志の原則が侵犯されていることがあきらかになった。多くの地域では、自由意志にとってかわって、「財産の収奪」、選挙権の剝奪などで脅迫してコルホーズ加入を強制するようになった。
多くの地域では、集団化についての準備活動や、党政策の忍耐強い説明がおこなわれず、そのかわりに、コルホーズ創設についての数字資料を水ましして上から官僚的に、役人風に命令するようなことや、集団化のパーセンテージを人為的に引きあげるようなことがおこなわれた。
コルホーズ運動における基本的な環は基本的な生産手段だけが共有化される農業アルテリであるという中央委員会の指示を無視して、多くの地点では、公然とアルテリをぬかしてコンミューンへの無分別な飛び越しがおこなわれ、住宅、自家用の乳用家畜、小家畜、家禽などを共有化した。

いくつかの州の指導的活動家は、集団化の最初の成功に夢中になり、集団化のテンポと期限についての中央委員会の直接指令に違反した。モスクワ州は、まだ三年をくだらぬ（一九三二年末まで）余裕があったにもかかわらず、水まし数字を追求して、集団化を一九三〇年春におわらせるように、同州の活動家に指図した。後カフカズと中央アジアでは、もっと乱暴な違反がおこなわれた。

富農とその亜流どもは、このゆきすぎを挑発の目的のために利用し、農業アルテリのかわりにコンミューンを組織し、すぐに住宅、小家畜、家禽を共有化するよう提議した。同時に富農は、コルホーズにはいるまえに家畜を屠殺するよう扇動し、コルホーズでは家畜は「どのみちとりあげられる」と農民を説きつけた。階級敵は、集団化のなかでの地方組織のゆきすぎやあやまりが、農民を激怒させ、ソビエト権力反対の反乱を引きおこすことを、期待していた。

党組織のおかしたあやまり、そして階級敵の直接の挑発的な行動の結果、一九三〇年二月の後半に、集団化運動の全般的な疑う余地のない成功の反面、多くの地域では、農民の重大な不満という危険な徴候があらわれた。ところによっては、富農とその手先は、一部の農民をたきつけ、反ソビエト行動に立ち上らせることにさえ成功した。

党中央委員会は、党の路線が歪曲され、集団化が挫折するおそれがあるという一連の警報に接したので、すぐに事態を収拾しはじめ、おかしたあやまりを即刻是正する道に党の幹部を向かわしはじめた。一九三〇年三月二日、中央委員会の決議によって、スターリン同志の論文『成功による幻惑』が発表された。この論文は、集団化の成功にまどわされ、粗暴なあやまりにおちいり、党の路線から逸脱したすべての人びとにたいし、ま

た、行政的な強制の手段によって農民をコルホーズの道にひきいれようとしたすべての人びとにたいし、警告をあたえた。この論文では、コルホーズ建設にあたっての自由意志の原則が力をこめて強調されるとともに、集団化のテンポと方法をきめるさいには、ソ連の異なった諸地域の条件のちがいが考慮さるべきことが指摘された。スターリン同志は、コルホーズ運動の基本的な環は農業アルテリであり、このアルテリでは、基本的な生産手段だけが、主として穀物農業において共有化され、住宅付属地、住宅、一部の乳用家畜、小家畜、家禽などは共有化されないということに注意をうながした。

スターリン同志の論文はもっとも大きな政治的意義をもっていた。この論文は党組織がそのあやまりを是正するのをたすけ、ソビエト権力の敵にもっとも手痛い打撃をあたえた。これらの敵は、このようなゆきすぎにもとづいて、農民をソビエト権力に反抗させることを期待していたのである。広範な農民大衆は、ボリシェビキ党の路線と一部の地方でおかされた無分別な「左翼的」ゆきすぎとのあいだにはなんの共通点もないということを確信した。この論文は農民大衆を安心させた。

スターリン同志の論文によって開始された仕事、すなわち、ゆきすぎとあやまりを是正する仕事を徹底させるため、ソ連共産党（ボリシェビキ）中央委員会は、これらのあやまりにもういちど打撃をあたえることを決定し、一九三〇年三月十五日に、『コルホーズ運動における党路線の歪曲について』の決議を発表した。

この決議のなかで、おかされたあやまりが、くわしく解明された。あやまりは、わが党のレーニン・スターリン的路線からの逸脱の結果であり、党の指令にたいする直接の違反の結果であった。

中央委員会は、「左翼的」なゆきすぎの実践は、階級敵にたいする直接の支援である、と指摘した。

中央委員会は、「党路線の歪曲と断固闘争する能力のない、またはそうすることをのぞまない活動家を、解職し、ほかの活動家と交代させる」ことを提議した。(『ソ連共産党(ボリシェビキ)決議集』第二部)

中央委員会は、政治的あやまりをおかし、そしてあやまりを是正する能力のなかったいくつかの州や地方の党組織(モスクワ州、後カフカズ)の指導部を更新した。

一九三〇年四月三日、スターリン同志の論文『コルホーズ員の同志諸君への回答』が発表された。この論文では、農民問題におけるあやまりの根源、およびコルホーズ運動における主なあやまりが指摘された。それは、中農にたいするあやまった態度、コルホーズ建設にあたってのレーニンの自由意志の原則の侵犯、ソ連の異なった各地域の条件のちがいを考慮にいれるというレーニンの原則の侵犯、公然とアルテリをとびこえてのコンミューンへの飛躍である。

これらすべての処置の結果、党は、多くの地域で地方活動家がおかしたゆきすぎを一掃することができた。成功に幻惑され党の路線をはなれてまっしぐらに転落していった多くの幹部を、適時に正しい軌道にひきもどすためには、中央委員会の流れに逆ってすすむ最大の剛毅さと手腕とが必要であった。

党は、コルホーズ運動における党の路線にたいする歪曲を一掃した。

これを基礎として、コルホーズ運動の成果がかためられた。

これを基礎として、コルホーズ運動のいっそうのたくましい発展の基礎が築かれた。

党が階級としての富農を一掃する政策にうつるまえは、資本主義的要素にたいする、これを一掃することを目的とした重大な攻撃は、主として都市の戦線で、工業の戦線でおこなわれていた。そのころは、農業、農村

は、工業、都市よりたちおくれていた。だから、攻撃の性格は、片寄ったものであり、十分な、全面的なものではなかった。だが、農村のたちおくれが過去のものになりはじめ、富農一掃のための農民の闘争がこの上なく明瞭に現われ、党が富農一掃の政策にうつったいま、資本主義的要素にたいする攻撃は全面的な性格を帯び、片寄った攻撃は全戦線にわたる攻撃に移行したのである。第十六回党大会がひらかれたときには、資本主義的要素にたいする全面的な攻撃はすでに大々的にくりひろげられていた。

第十六回党大会は、一九三〇年六月二十六日にひらかれた。この大会には、議決権をもつ千二百六十八人の代議員と、審議権をもつ八百九十一人の代議員が出席し、百二十六万八百七十四人の党員と七十一万千六百九人の党員候補を代表していた。

第十六回党大会は、「社会主義が全戦線にわたって攻撃を展開し、階級としての富農を一掃し、全面的集団化を実現する大会」（スターリン）として党史にかきいれられた。

スターリン同志は、中央委員会の政治報告のなかで、ボリシェビキ党が社会主義的攻撃の展開にさいしていかに大きな勝利をおさめたかを指ししめした。

社会主義的工業化の面では、国民経済の生産総額のなかでの工業の比重が農業の比重をうわまわった。一九二九〜三〇年の経済年度において、工業は、国民経済の生産総額の五三パーセントをくだらない部分を占め、農業は、ほぼ四七パーセントの部分をしめていた。

第十五回党大会のとき、すなわち一九二六〜二七年度において、工業全体の生産総額は戦前水準の一〇二・五パーセントにたっしたにすぎなかったのに、第十六回大会のとき、すなわち一九二九〜三〇年度において

は、戦前の水準のほぼ一八〇パーセントにたっした。

重工業、すなわち生産手段の生産、機械製造業は、ますます強化された。

スターリン同志は全代議員の嵐のような歓呼のうちに、こうのべた。

「……われわれは農業国から工業国への転化の前夜にある。」

だが、工業発展の高いテンポと工業の発展の水準とを混同してはならない、とスターリン同志は説明した。社会主義は空前のテンポで発展したが、工業の発展の水準については、われわれはまだ先進資本主義諸国よりははるかに立ちおくれていた。ソ連における電化は大きな成功をおさめたが、電力生産の状態も同様であった。金属の生産も同様であった。ソ連の銑鉄生産は、計画では、一九二九年～三〇年度の末には五百五十万トンになることになっていたが、ドイツでは一九二九年には銑鉄の生産高は千三百四十万トンとなり、フランスでは千四十五万トンとなった。最短期間にわが国の技術、経済のうえでのたちおくれを一掃するには、わが国の工業の発展テンポをひきつづきはやめることが必要であり、社会主義工業の発展テンポをひきさげようとつとめる日和見主義者とは、もっとも決然たる闘争をおこなうことが必要であった。

スターリン同志はこう指摘した。

「……わが国工業の発展テンポをひきさげることが必要だとしゃべっている連中は、社会主義の敵であり、われわれの階級敵の手先である。」（スターリン『レーニン主義の諸問題』）

第一次五ヵ年計画の第一年度計画が首尾よく遂行され、超過遂行されたのち、大衆のあいだに、「五ヵ年計画を四ヵ年で遂行しよう」というスローガンがうまれた。多くの先進的な工業部門（すなわち石油工業、泥炭

工業、一般機械製作業、農業機械製作業、電気工業）では、計画の遂行がきわめて順調であったため、これらの部門の五ヵ年計画のプログラムを二年半――三年で遂行することさえ可能であった。このことは、「五ヵ年計画を四ヵ年で」というスローガンがまったく現実的なものであることを実証するとともに、その実現の可能性をうたがっていた悲観論者の日和見主義を暴露した。

第十六回大会は、「今後とも社会主義建設の戦闘的なボリシェビキ的なテンポを確保し、実際に五ヵ年計画の四ヵ年での遂行を達成する」ことを党中央委員会に委託した。

第十六回党大会までには、ソ連の農業の発展においてもっとも大きな転換が達成された。広範な農民大衆が社会主義にうつってきていた。一九三〇年五月一日には、生産諸州の主要な穀物地区では、集団化は農民経営の四〇～五〇パーセントをしめた（一九二八年の春には二～三パーセントであった）。コルホーズの播種面積は三千六百万ヘクタールになった。

このようにして、中央委員会の一九三〇年一月五日の決議で引きあげられたプログラム（三千万ヘクタール）は、超過遂行された。コルホーズ建設の五ヵ年計画のプログラムは、二ヵ年のあいだにすでに一倍半以上の超過遂行をみた。

コルホーズの商品生産は、三年間に四十倍以上にふえた。すでに一九三〇年、ソフホーズは計算にいれずに、国がコルホーズから入手した商品穀物は、国内の穀物の商品生産の二分の一をうわまわった。

このことは、今後農業の運命を決定するものは個人農民経営ではなくてコルホーズとソフホーズである、ということを意味した。

農民が大衆的にコルホーズに加入するまえに、主として社会主義工業に依存していたソビエト権力は、今後は、急速に成長しつつある農業の社会主義的部分、すなわち、コルホーズとソフホーズにも同時に依存するにいたった。

第十六回党大会の決議のひとつのなかで指摘されているように、コルホーズ農民は、「ソビエト権力の真の、強固な支柱」となったのである。

三、国民経済のすべての部門を改造する方針　技術の役割　コルホーズ運動のいっそうの発展　機械トラクター・ステーションの政治部　五ヵ年計画の四ヵ年での遂行の総括　社会主義の全戦線にわたる勝利　第十七回党大会

重工業、とりわけ機械製造業が創設され、強固になったばかりでなく、ひきつづきかなり早いテンポで発展しつつあることが明らかになったのち、党のまえには、つぎの任務があらわれた。それは、新しい現代的な技術を基礎にして国民経済のすべての部門を改造することであった。新しい、現代的な技術、新しい工作機械、新しい機械を、燃料工業、冶金業、軽工業、食品工業、製材業、軍事工業、運輸業、農業に供給しなければならなかった。農産物、工業製品にたいする需要が大々的にふえたので、国民経済のすべての部門の生産高を二

倍、三倍にする必要があった。だが、十分な量の新しい、現代的な設備を工場、ソフホーズに供給することなしには、これを達成することはできなかった。なぜなら、ふるい設備には生産高をこのように増大させる力がなかったからである。

国民経済の主要な部門を改造することなしには、国家およびその国民経済の、あらたな、ますます増大する需要をみたすことはできなかった。

改造することなしには、社会主義の全戦線にわたる攻勢を最後までおしすすめることはできなかった。なぜなら、都市、農村の資本主義的要素をうちやぶり、とどめを刺すには、新しい労働組織と所有制によってだけではなく、新しい技術、その技術の優越性によらなければならなかったからである。

改造することなしには、技術的、経済的な面で先進的資本主義諸国に追いつき、追いこすことはできなかった。なぜなら、ソ連は、工業発展のテンポでは資本主義諸国をうわまわってはいたが、工業発展の水準の面、生産物の量の面では、やはり著しくこれらの諸国に立ちおくれていたからである。

このような立ちおくれを一掃するためには、新しい技術をわが国の全国民経済に供給しなければならず、新しい現代的な技術の基礎にたって国民経済の全部門を改造しなければならなかった。

したがって、技術は決定的な意義を帯びるにいたったのである。

この問題の障害になったのは、新しい機械や工作機械の不足というよりは、むしろ、技術にたいするわれわれの経営担当者のあやまった態度、改造の時期における技術の役割の過小評価、技術を軽視する態度であった。なぜなら、機械製造工業は新しい設備を供給することができたからである。われわれの経済活動家は、技

術を、「専門家」の仕事であり、「ブルジョア専門家」にまかしている副次的な仕事であり、共産党員の経営担当者は、生産技術に口をだす義務はなく、かれらは技術ではなくもっと重要なこと、すなわち生産にたいする「一般的」指導をつかさどるべきだ、とかんがえていた。

そこで、ブルジョア「専門家」には、生産の問題の処理がまかされ、共産党員の経営担当者の手に残されたのは、「一般的」指導、すなわち、書類にサインすることであった。仕事にたいするこのような態度のもとで、「一般的」指導というものが、指導「一般」についておしゃべりや、単なる書類のサインに、書類いじりになり果てるほかなかったということは、いうまでもなかった。

共産党員の経営担当者の技術を軽視するこのような態度のもとでは、われわれは、先進的資本主義諸国をいつになっても追いこすことはできないばかりでなく、追いつくことさえできなかったであろうことは、いうまでもなかった。技術にたいするこのような態度は、改造の時期においてはなおさら、わが国を立ちおくれの状態におとしいれ、われわれの発展テンポを低下させた。実際に、技術にたいするこのような態度は、工業の発展テンポをおくらせ、低下させ、生産の面での責任を「専門家」におしつけ、自分のために「安穏な環境」をつくりだそうとする一部共産党員の経営担当者の内心の願望をおおいかくし、粉飾するものであった。

共産党員の経営担当者の注意を技術の方にむけさせ、かれらに技術にたいする興味を植えつける必要があった。かれらに、新しい技術に精通することは、ボリシェビキの経営担当者にとって切実な仕事であるということ、もし新しい技術に精通しなかったなら、われわれの祖国を立ちおくれた、沈滞した状態におとしいれる危険があるということを、しめす必要があった。

この任務の解決なしには、前進は不可能だったのである。

この点で、スターリン同志が一九三一年二月に第一回工業活動家会議でおこなった演説は、もっとも重大な役割をはたした。スターリン同志は、その演説のなかでこういった。

「いくぶんかテンポをゆるめ、前進をおさえてはいけないか、とたずねるものがときおりある。いや、できない。同志諸君！　テンポをおとしてはならない！……テンポをゆるめること、それは、立ちおくれることを意味する。立ちおくれたものはやっつけられる。だが、われわれはやっつけられることを望まない。断じてやっつけられたくはない！

古いロシアの歴史は、立ちおくれのためにたえまなくやっつけられるということであった。モンゴルの汗がやっつけた。トルコの貴族がやっつけた。スエーデンの封建領主がやっつけた。ポーランドとリトアニアの地主がやっつけた。イギリスとフランスの資本家がやっつけた。日本の貴族がやっつけた。みながやっつけたのは、立ちおくれていたからだ……。

われわれは、先進諸国に五十年～百年立ちおくれている。われわれは十年以内に、この距離を走りぬけなければならない。われわれが、これをなしとげるか、それとも、われわれがおしつぶされるかである。……

われわれは、最大限十年内に、先進的資本主義諸国から立ちおくれている距離をかけぬけなければならない。われわれは、そのためのすべての「客観的」な可能性をもっている。欠けているのは、これらの可能性をほんとうに利用する手腕だけである。ところでこれは、われわれにかかっている。ただわれわ

れだけにかかっている！　これらの可能性を利用することを学ぶべきときがきた。生産には干与しないといったくさった方針をすてさるときがきた。別の、新しい、現在の時期に適応した、すべてに干与するという方針を会得するときがきた。もし君が工場の支配人であるなら、あらゆる仕事に干与したまえ。あらゆることを研究したまえ。なに一つ見のがさず、学び、そのうえにもなお、学びたまえ。ボリシェビキは技術に精通すべきである。ボリシェビキがみずから専門家になるときがきた。改造の時期には、技術がすべてを決定する。」（スターリン『レーニン主義の諸問題』）

スターリン同志の演説の歴史的意義はつぎの点にあった。すなわちそれは、共産党員の経営担当者の、技術を軽視する態度に決着をつけ、共産党員の経営担当者の注意を技術の方にむき直らせ、ボリシェビキ自身の力で技術に精通するために闘争するという新しい時期をきりひらき、それによって、国民経済の改造を展開する事業を促進した。

このとき以来、技術というものは、ブルジョア「専門家」の独占から、ボリシェビキの経営担当者自身の切実な仕事にかわった。そして「専門家」というさげすんだ呼び名は、技術に精通するボリシェビキの光栄ある称号にかわった。

このとき以来、技術に精通し生産を指導する能力のある何千、何万の赤色専門家の大部隊が出現しなければならなかったし、また、その後実際に出現したのである。

これは労働者階級と農民の新しい、ソビエト的な生産技術の知識分子であり、かれらはいまや、われわれの経済的指導の基本的な勢力であった。

これらのすべては、国民経済改造の展開を促進させなければならなかったし、また実際に促進したのである。改造の発展は、工業や運輸の戦線ですすんだだけでなかった。それはもっとはげしいテンポで農業戦線でくりひろげられた。これは当然のことでもあった。なぜなら、農業は、他の部門にくらべ、機械化が劣っており、したがって、どの部門よりも新しい機械の供給を必要としていたからである。そしていまや新しい機械を農業に極力供給することがとりわけ必要となった。なぜなら、いまやコルホーズの建設が、したがってまた、何千台、何万台のトラクターや農業機械にたいするあらたな要求が、毎月、毎週あらたに増大するにいたったからである。

一九三一年、コルホーズ運動はあらたな成長をみせた。主要穀物地区では、農民経営総数の八〇パーセント以上がコルホーズに統合された。全面的集団化はすでにだいたいにおいて完成した。それらよりも重要でない穀物地域や工芸作物地域では、五〇パーセント以上の経営がコルホーズに統合されていた。二十万のコルホーズと四千のソフホーズが播種したのは、すでに全播種面積の三分の二をしめ、個人農民は三分の一を播種したにすぎなかった。

これは農村における社会主義の大きな勝利であった。

だが、コルホーズ建設はこれまでのところ、深さよりは広さの点で発展しつつあり、コルホーズとその幹部の仕事の質の改善というよりも、コルホーズの数の増加およびつぎつぎに新しい地域へのコルホーズの普及という線にそって発展していた。この状況は、コルホーズの活動家の増加、コルホーズの幹部の増加が、コルホーズそのものの数の増加についていけなかったということで説明がついた。このために、新しいコルホーズで

の活動は、必ずしもつねに満足にはおこなわれず、コルホーズそのものも、これまでのところ弱体で、強固になってはいなかった。つぎのような事実もまた、コルホーズを強固にすることをはばんでいた。すなわち、農村には、コルホーズにとって必要な読み書きのできる人材（会計係、経営主任、書記）が不足し、また農民には大規模な、コルホーズ経営を管理する経験がなかった。コルホーズには、きのうまで個人農民だったものがはいっていた。かれらには、小さな面積の土地を経営した経験はあったが、まだ大規模なコルホーズ経営を指導する経験をもっていなかった。このような経験を得るには時日が必要であった。

こうした状況だったので、コルホーズ活動の初期には、重大な欠陥が現われた。多くのコルホーズでは、労働がよく組織されていないこと、労働規律がたるんでいることが、あきらかになった。多くのコルホーズでは、労働日によってではなく、家族の口数によって収入が分配された。怠け者が、勤勉な、正直なコルホーズ員よりも食糧を多くもらうということが、しばしばおこった。コルホーズ指導のこのような欠陥によって、仕事にたいするコルホーズ員の関心がうすらぎ、農繁期の忙しいときにさえ、多くの欠陥があり、コルホーズの作物の一部は雪がふるまで刈りとられずにほっておかれ、そのうえ、刈入れそのものも大ざっぱにおこなわれ、穀物の大量の損失がおこった。機械や馬匹にたいする個人的責任の回避、仕事における個人的責任の欠如は、コルホーズの事業を弱め、コルホーズの収入を減少させた。

もとの富農やその手先がコルホーズにもぐりこみあれこれの役職につくことができた地区では、とりわけ事態がひどかった。財産を収奪された富農は、しばしば、かれらを知っているもののいない別の地区にいき、そこで、損害をあたえ、悪事をはたらくために、コルホーズにもぐりこんだ。ときには、富農は、党やソビエト

の活動家に警戒心がかけているのに乗じて、自分の地区でさえコルホーズにもぐりこみつつあった。富農が、コルホーズに反対する闘争のなかで戦術を一変したという事情もまた、富農だったものがコルホーズにもぐりこむのを容易にした。前には、富農は、公然とコルホーズに反対し、コルホーズの活動家、先進的なコルホーズ員にたいする凶悪な闘争をおこない、かれらを暗殺したり、かれらの家や納屋を焼きはらったりした。これによって、農民大衆をおどかし、かれらをコルホーズに加入させないようにしようとかんがえていた。いままでは、公然とコルホーズに反対する闘争が失敗におわったので、かれらはその戦術をかえたのである。かれらは、もはや短銃で射撃したりはしないで、おだやかな、おちついた、従順な、まったくソビエト的な人間をよそおった。かれらは、コルホーズにもぐりこんでひそかにコルホーズに損害をあたえた。かれらは、いたるところで内部からコルホーズを崩壊させ、コルホーズの労働規律を破壊し、収穫の計算や労働の計算を混乱させることにつとめた。富農は、コルホーズの馬を絶滅させることをねらい、そしてたくさんの馬を殺すことに成功した。富農は、故意に馬を馬鼻疽、疥癬その他の病気にかからせたり、なんの手当もしないままにしておいたりなどした。富農はトラクターや機械を破壊した。

富農がコルホーズ員をだまし、処罰もされずに妨害行為をおこなうことに成功したのは、コルホーズがまだ弱体で無経験だったからであり、コルホーズの幹部がまだきたえられていなかったからである。

コルホーズにおける富農の妨害行為をとりのぞき、コルホーズの強化を促進するには、コルホーズに人材、助言、指導による迅速で真剣な助言をあたえる必要があった。

ボリシェビキ党はコルホーズにそのような助言をあたえた。

一九三三年一月、党中央委員会は、コルホーズの仕事をする機械トラクター・ステーションのもとに政治部を組織する決議を採決した。コルホーズを援助するために一万七千人の党の活動家が農村に派遣され政治部の仕事についた。

これは重大な援助であった。

機械トラクター・ステーションの政治部は、二年間（一九三三年と三四年）に、コルホーズの活動の欠陥をとりのぞき、コルホーズの活動家を養成し、コルホーズを強固にし、そしてコルホーズの敵対的な、富農的な、妨害的な要素を一掃するうえで大きな仕事をやりとげることができた。

政治部は、課せられた任務をりっぱに遂行した。かれらは、コルホーズを組織的、経営的な面で強固にし、新しいコルホーズの幹部を養成し、コルホーズの経営上の指導をよくととのえ、コルホーズ員大衆の政治水準をひきあげた。

第一回全ソ連コルホーズ員突撃隊員大会（一九三三年二月）およびこの大会でのスターリン同志の演説は、コルホーズを強固にするために闘争しているコルホーズ員大衆の積極性をひきあげるうえで、巨大な役割をはたした。

スターリン同志はその演説のなかで、農村におけるコルホーズ以前の古い制度と新しいコルホーズ制度とを比較して、こういった。

「古い制度のもとでは、農民は個々ばらばらにはたらき、古い、先祖伝来のやりかたで、古い労働用具ではたらき、地主や資本家のために、富農や投機師のためにはたらき、食うや食わずで、他人をもう

けさせながらはたらいていた。新しい、コルホーズ制度のもとでは、農民たちは共同で、アルテリ式にはたらき、新しい用具、トラクターと農業機械の助けをかりてはたらき、自分のために、自分のコルホーズのためにはたらいており、資本家や地主のいない、富農や投機師のいない生活をしており、一日一日と、自分の物質的・文化的状態を改善するために、はたらいている。」（スターリン『レーニン主義の諸問題』）

スターリン同志はその演説のなかで、農民がコルホーズの道をあゆむようになったのちに、実際になにを達成したかを、明らかにした。ボリシェビキ党は、何百万の貧農大衆がコルホーズに加入し、富農の隷属から解放されるのを援助した。以前は食うや食わずの生活をしていた何百万の貧農大衆は、コルホーズに加入し、そこではりっぱな土地とりっぱな生産用具を使って、いまではコルホーズで中農の水準にまでたかまり、生活を保障された人間になった。

これは、コルホーズ建設の途上の第一歩であり、最初の成果であった。

第二歩は、もとの貧農、中農をとわず、コルホーズ員をよりいっそうひきあげ、すべてのコルホーズ員を富裕にし、すべてのコルホーズをボリシェビキ的にすることであろう、とスターリン同志はいった。

「いまや、富裕なコルホーズ員になるためいま必要なのはただひとつ、コルホーズでせっせとはたらき、トラクターや機械をただしく利用し、役畜をただしく利用し、土地をただしくたがやし、コルホーズの財産を大切にすることだけである」、とスターリン同志はいった。（スターリン『レーニン主義の諸問題』）

スターリン同志の演説は、何百万というコルホーズ員の意識に強くきざみこまれ、コルホーズの実践的な、戦闘的な綱領となった。

一九三四年の末には、コルホーズはすでに堅固な、不敗の力になった。そのころには、コルホーズはすでに、ソ連全体にわたって全農民経営の四分の三を、全播種面積の約九〇パーセントを統合していた。

一九三四年、ソ連の農業では、すでに二十八万千台のトラクター、三万二千台のコンバインが作業していた。一九三四年の春の播種は、一九三三年よりも十五〜二十日もはやく、一九三二年よりも三十〜四十日はやくおこなわれ、そして食糧調達計画は、一九三二年より三ヵ月はやく達成された。

このように、党と労働者・農民の国家があたえた大きな援助の結果として、コルホーズは二年のうちに強固になった。

コルホーズ体制が堅実に勝利し、それにともない農業が高揚したので、ソビエト権力は、パンやその他の食糧品の切符制度を廃止し、そしてすべての食糧品の自由な売買を規定することができるようになった。

臨時の政治機関として設けられた機械トラクター・ステーションの政治部は、その任務をまっとうしたので、中央委員会は、政治部を現存の党地区委員会と合併して、これを通常の党機関にあらためることに決定した。

すべてこれらの成果は、農業の部門でも工業の部門でも、五ヵ年計画が首尾よく達成されたためかちえられたものである。

第一次五ヵ年計画がすでに遂行され、期限以前に遂行されたこと、四年三ヵ月のあいだに達成されたこと

が、一九三三年のはじめにあきらかとなった。

これは、ソ連の労働者階級と農民の巨大な、全世界史的な勝利であった。

一九三三年、スターリン同志は、党中央委員会、中央統制委員会の一月総会における報告で、第一次五ヵ年計画の総括をおこなった。この報告であきらかにされたとおり、党とソビエト権力はすぎさったこの時期において、第一次五ヵ年計画の執行の時期において、つぎのような主要な成果をおさめた。

(イ)　ソ連は農業国から工業国になった。なぜなら、国民経済総生産のなかでの工業の生産品の比重は七〇パーセントに増大したからである。

(ロ)　社会主義経済体制は、工業の部門における資本主義的要素を一掃し、工業におけるただ一つの経済体制となった。

(ハ)　社会主義経済体制は、農業の部門で階級としての富農を一掃し、農業における支配的な力となった。

(ニ)　コルホーズ制度は、農村における貧困、窮乏を絶滅し、何千万の貧農は生活を保障された人びとの状態にまで、引きあげられた。

(ホ)　社会主義体制は、工業における失業を絶滅し、いくつかの生産部門では八時間労働日がすえおかれたが、圧倒的多数の企業では七時間労働日に移行し、健康に有害な企業では六時間労働日が規定された。

(ヘ)　国民経済におけるすべての部門での社会主義の勝利は、人による人の搾取を絶滅した。

第一次五ヵ年計画のこれらの成果の意義は、まず第一に、それが労働者と農民を搾取のくびきから最終的に解放し、そしてソ連のすべての勤労者にたいしゆたかな文化的な生活が確保される道をひらいたことであった。

一九三四年一月、第十七回党大会がひらかれた。この大会に出席したのは、議決権をもつ千二百二十五人の代議員と、審議権をもつ七百三十六人の代議員であり、百八十七万四千四百八十八人の党員と九十三万五千二百九十八人の党員候補を代表していた。

大会は、すぎさった時期における党の活動を総括するとともに、経済と文化のすべての部門のなかで社会主義が決定的な勝利をおさめたことを指摘し、党の総路線が全戦線にわたって勝利したことを確認した。

第十七回党大会は、「勝利者の大会」として歴史にかきいれられた。

スターリン同志は、総括報告のなかで、報告期間にソ連でおこなわれた根本的な改造を指摘した。

「ソ連は、この期間に根本的に改造され、立ちおくれた中世紀的な姿をすてさった。それは、農業国から工業国になった。それは、小さな個人農業の国から、集団的な、大規模な、機械化された農業の国にかわった。それは、暗黒な、文盲の、非文化的な国から、文盲のいない文化的な、ソ連の諸民族のことばをもちいる高等、中等、初等の学校の巨大な網でおおわれた国になった——よりただしくいえば、なりつつある。」(スターリン『レーニン主義の諸問題』)

当時、社会主義工業は、すでにわが国全工業の九九パーセントをしめていた。社会主義農業、すなわち、コルホーズとソフホーズは、わが国全播種面積の約九〇パーセントをしめていた。商品流通についていえば、資本主義的要素は完全に商業からしめだされていた。

レーニンは、新経済政策の実施にあたって、わが国には五つの社会的経済的形態の要素があるといった。第一の形態は、家父長的経済、いちじるしい程度の自然経済、すなわち、ほとんど交易をおこなわない経済であ

る。第二の形態は、農産物を売る大多数の農民経営および手工業者の小商品生産である。この経済的形態は新経済政策の初期には人口の大多数におよんでいた。第三の形態は、新経済政策の初期に活気づいた私的経営の資本主義である。第四の形態は、国家資本主義であり、主として利権企業であるが、多少ともいちじるしい発展はとげなかった。第五の形態は、社会主義、すなわち、当時はまだ弱体な社会主義工業であり、新経済政策の初期には、国民経済のなかでごく小さな地位をしめていたソフホーズとコルホーズであり、そしてまた新経済政策の初期にはおなじく弱体であった国営商業と協同組合である。

レーニンは、これらのすべての形態のなかで、社会主義形態が優勢になるにちがいないと指摘した。新経済政策が期待したのは、社会主義経済形態が完全な勝利をかちとることであった。

そしてこの目的は、第十七回党大会のころにはすでに実現された。スターリン同志はこの点についてこうのべている。

「われわれがいま、いうことができるのは、第一、第三および第四の社会的、経済的形態はすでに存在しないということ、第二の社会的、経済的形態は副次的な地位においやられたということ、そして第五の社会的、経済的形態、社会主義形態が、全国民経済のなかで、無制限に支配し、ただ一つの指揮をとる勢力であるということである。」（前掲書）

スターリン同志の報告のなかでとりわけ重要な位置を占めたのは、思想的、政治的指導の問題であった。スターリン同志は、党につぎのことを警告した。すなわち、党の敵、いろいろな毛色の日和見主義者や民族偏向者はうちやぶられたが、かれらのイデオロギーの名残りは、個々の党員の頭のなかに生き残っており、しばし

ば姿をあらわしている。経済のなか、とりわけ人びとの意識のなかの資本主義の残りかすは、粉砕された反レーニン的集団のイデオロギーを活気づけるのにぐあいのよい土壌である。人びとの意識はその発展において、人びとの経済的地位にたちおくれる。したがって、資本主義は経済においてはすでに一掃されたものの、人びとの頭の中のブルジョア的観点の残りかすは、残っており、そしてまた残るであろう。このさい、われわれがつねに備えていなければならない資本主義の包囲が、この残りかすを活気づけ、支持することにつとめていることを考慮しなければならない。

スターリン同志はそのほかに、民族問題の分野でとりわけ生きつづけている、人びとの意識のなかの資本主義の残りかすについても、言及した。ボリシェビキ党は、二つの戦線で、すなわち、大ロシア排外主義の偏向にたいしても、地方的民族主義の偏向にたいしても闘争した。一部の共和国（ウクライナ、白ロシアなど）では、党組織は地方的民族主義にたいする闘争をよわめ、それが敵対的な勢力と結びつき、干渉者と結びついて、国家にたいする危険となるところまで増長させてしまった。スターリン同志は、いかなる偏向が民族問題における主要な危険であるかという問いにこたえ、こうのべた。

「主要な危険とは、つまり、それとの闘争をやめ、こうしてそれを国家にたいする危険になるまで増長させたあの偏向である。」（前掲書）

スターリン同志は、思想的、政治的活動を強め、系統的に、敵対的な階級およびレーニン主義を敵視する諸潮流のイデオロギーとイデオロギーの残りかすを暴露するように、党によびかけた。

スターリン同志は、さらに、その報告のなかで、正しい決定を採択するということは、まだそれだけでは、

仕事の成功を保証するものではないと指摘した。仕事の成功を保証するには、指導機関の決定を実現する能力のある人材を正しく配置するとともに、これらの決定の執行の点検を組織する必要がある。このような組織上の処置がなければ、決定は生活から遊離した紙のうえの決定にとどまるおそれがある。ここでスターリン同志は、組織活動における主要な点は、人材をえらび、執行を点検することであるとの、レーニンのこの有名な命題を採用した。このさい、スターリン同志はつぎのことを強調した。われわれの実際の活動のなかでの主要な禍いは、採択された決定と、この決定の執行についての、この決定の執行の点検についての組織的な活動とのあいだの断絶である、と。

党と政府の決定の執行を点検するという仕事を改善するため、第十七回党大会は、ソ連共産党（ボリシェビキ）中央委員会直属の党統制委員会とソ連人民委員会議直属のソビエト統制委員会とを創設したが、それは、第十二回党大会のとき以来すでにその任務をはたしおえた中央統制委員会と労農監督局にとってかわるものであった。

スターリン同志は、新しい段階での党の組織的任務をつぎのように規定した。

(イ)　われわれの組織的活動を、党の政治路線の要求に適応させること。

(ロ)　組織的な指導を、政治的な指導の水準までひきあげること。

(ハ)　組織的な指導が、党の政治スローガンおよびその決定の実現を完全に保証するように努力すること。

スターリン同志は、報告をおわるにさいしつぎのことを警告した。すなわち、社会主義の成功は偉大であ

り、それが誇りの感情をうみだしているのは当然であるが、しかし、達成された成功に幻惑されてはならず、「うぬぼれ」たり、ねむりこんだりしてはならない、と。スターリン同志はつぎのように指示した。

「……党をねむりこませるのではなくて、党内において警戒心をそだてること、また党を麻酔させるのではなくて、党を戦闘準備の状況にたもつこと、党を武装解除するのではなくて、武装させること、党を動員解除するのではなくて、第二次五ヵ年計画の実現のために党を動員状態にたもつこと、である。」(スターリン『レーニン主義の諸問題』)

第十七回大会は、モロトフ同志とクイビシェフ同志の、国民経済発展第二次五ヵ年計画についての報告を聴取した。第二次五ヵ年計画の任務は、第一次五ヵ年計画の任務よりもいっそう壮大であった。第二次五ヵ年計画の終わり、すなわち一九三七年には、工業生産高は戦前水準にくらべておよそ八倍に増大するはずであった。第二次五ヵ年計画の時期には、全国民経済における基本建設の規模は、千三百三十億ルーブルと規定されたが、第一次五ヵ年計画ではそれは六百四十余億ルーブルであった。

基本建設のこのように大きな規模は、国民経済のすべての部門を完全に技術的に再装備することを保障した。

第二次五ヵ年計画では、農業の機械化がだいたいにおいて完成するはずであった。全国のすべてのトラクターの能力は、一九三二年の二百二十五万馬力から、一九三七年には八百余万馬力にふえるはずであった。ひろく各種の農業技術的な方策(正しい輪作、純良種子による播種、秋耕地の耕作など)の体系を普及することが定められた。

運輸と通信の技術的改造についての巨大な建設が定められた。

ひきつづき労働者と農民の物質的・文化的水準をひきあげる広範なプログラムが定められた。

第十七回大会は、組織問題に大きな注意をはらうとともに、カガノビッチ同志の報告にもとづき、党建設とソビエト建設の問題にかんする特別決議を採択した。党の総路線がすでに勝利をおさめ、党の政策が実生活によって、何百万という労働者と農民の経験によって点検されたときにあたって、組織問題はより大きな意義をもつにいたった。第二次五ヵ年計画の新しい、複雑な任務は、すべての部門における仕事の質をたかめることを要求した。

「第二次五ヵ年計画の基本任務、すなわち、資本主義的要素を最終的に一掃すること、経済および人びとの意識のなかにある資本主義の残りかすを克服すること、新しい技術を基礎にして国民経済全体の改造をやりとげること、新しい技術と新しい企業の運用を会得すること、農業を機械化し、農業の生産性をたかめること、これらの任務は、あらゆる部門での仕事の質の向上、まず第一に、組織的、実践的指導における質の向上の問題を、ひじょうに緊急なものとして提起している。」組織問題にかんする大会決議には、このようにかかれている。(『ソ連共産党（ボリシェビキ）決議案』、第二部)

第十七回大会において新しい党規約が採択された。これまでの規約とのちがいは、まず第一に、規約に前文がとりいれられたことである。規約の前文には、共産党についての簡単な定義、プロレタリア階級の闘争にたいする共産党の意義についての規定があたえられ、プロレタリア階級独裁の諸機関の体系における共産党の地位が説明されている。新しい規約は、くわしく党員の任務を列挙している。規約には、いっそう厳格な入党の

規則と、同情者グループについての条項がとり入れられている。規約では、党の組織機構の問題がいっそうくわしくねりあげられ、以前の党細胞、すなわち、第十七回大会以後の名称でいえば初級組織についての条項が、あらたに成文化された。同時に、新しい規約では、党内民主主義と党規律にかんする条項もあらたに成文化された。

四、ブハーリン派の政治的二面派への変質　トロツキスト二面派の暗殺者とスパイの白衛派徒党への変質　キーロフにたいする凶悪な暗殺　ボリシェビキの警戒心をつよめるための党の措置

わが国の社会主義の成功は、党をよろこばせ、労働者とコルホーズ農民をよろこばせただけでなく、われわれのすべてのソビエト知識層を、すべての誠実なソ連公民を、よろこばせた。

これらの成功は、うちやぶられた搾取階級の残党をよろこばせはせずに、ますます怒らせた。

これらの成功は、うちやぶられた階級の亜流、すなわち、ブハーリン派、トロツキストのみじめな残党を狂気のようにおこらせた。

これら旦那がたは、労働者とコルホーズ員の成功を評価するのに、これらの成功の一つひとつを歓迎した人民の利益の見地からではなく、実生活から遊離し骨の髄まで腐りはてたかれらのみじめな分派グループの利益

の見地から評価したのである。わが国における社会主義の成功は、党の政策の勝利を意味し、これらの旦那がたの政策の最終的な破産を意味していた。そこで、かれらは、明白な事実をみとめて共同の事業に参加しようとはせずに、自分らの失敗、自分らの破産をうらんで党と人民に報復しはじめた。かれらは、労働者とコルホーズ員の成功をぶちこわし、人民のあいだにソビエト権力にたいする不満をひきおこそうとして、労働者やコルホーズ員の事業に損害をあたえ、危害をくわえ、炭鉱を爆破し、工場に放火し、コルホーズとソフホーズのなかで妨害をしはじめた。そのさいかれらは、かれらのみじめなグループがあばかれ、粉砕されるのを防ぐため、党に忠誠な人間という仮面をかぶって、ますます党におもねり、党をほめたたえ、党のまえに拝跪しはじめたが、実際には、労働者と農民にたいするかくれた破壊活動をつづけていた。

第十七回党大会において、ブハーリン、ルイコフ、トムスキーは、懺悔の演説をおこない、党をたたえ、党の成果をほめちぎった。だが、大会は、かれらの演説が不誠実と二面性の兆をおびているのを感じとった。なぜなら、党がその党員に要求するのは、党の成果にたいする賛美や礼賛ではなくて、社会主義の戦線でまじめに活動することであるのに、これは、ブハーリン派にはずっとまえからみうけられなかったからである。党は、これらの旦那がたが実際には、その不誠実な演説で大会外のかれらの仲間とあい呼応し、仲間に二面性を伝授し、武器をしまいこまないようによびかけていることを、みてとった。

第十七回大会では、トロツキストであるジノビエフとカーメネフも発言した。かれらは、自分たちのあやまちについて大袈裟に自分を責めたて、また、党の成功についておなじく大袈裟にほめちぎった。だが、大会は、胸のわるくなるような自責も、党にたいするあまったるい賛辞も、これらの旦那がたのきたない、びくび

くした良心の反面をあらわしているものと、みないわけにはいかなかった。しかし党はまだ、この旦那がたが大会においてあまったるい演説をおこないながら、同時にキーロフにたいする凶悪な暗殺を準備していたことは、しらなかったし、感づいてもいなかった。

一九三四年十二月一日、レニングラードのスモーリヌイで、キーロフがピストルで射たれ非道に暗殺された。

犯行現場で捕えられた暗殺犯人は、もともとレニングラードの反ソ的ジノビエフ・グループの参加者のうちから組織された反革命地下グループの一員だったのである。

全党から敬愛され、労働者階級から敬愛されたキーロフの暗殺は、わが国の勤労者の最大の憤りと深い悲しみをよびおこした。

審理によって確認されたところでは、一九三三年〜三四年に、ジノビエフ反対派の参加者のうちから、レニングラードで地下の反革命テロ・グループが組織されたが、それは、いわゆる「レニングラード本部」によって指揮されていた。

このグループは、共産党の指導者の暗殺をその目的としていた。キーロフが、第一の犠牲者としてねらわれたのである。この反革命グループの参加者の供述によってわかったことは、かれらが外国の資本主義国家の代表者と結託しており、かれらから金をもらっていた、ということである。

あばきだされたこの組織の参加者たちは、ソ連最高裁判所軍事法廷によって極刑、すなわち銃殺の判決をいいわたされた。

まもなく、地下の反革命組織「モスクワ本部」のあることが確認された。審理と裁判によってあきらかにされたところでは、ジノビエフ、カーメネフ、エフドキモフやその他のこの組織の指導者は、かれらの共謀者たちのあいだにテロの気分を植えつけたという点で、党中央委員会やソビエト政府要員の暗殺を準備したという点で、醜悪な役割をはたした。

この連中の二面性と卑劣さはひどいもので、ジノビエフのごときは、キーロフ暗殺の組織者で鼓舞者であり、この犯行をはやく遂行するように暗殺者をせきたてておきながら、キーロフの死にあたってこれをたたえる追悼文をかき、これを公刊することを要求するということまでやった。

ジノビエフ派は、法廷では悔悟したようによそおいながら、実際には、ここにいたっても、ひきつづき二面的な手をつかった。かれらは、トロツキーとの結託をかくし、トロツキストとともにファシストの諜報部に身売りしたことをかくし、そのスパイ、妨害活動をかくした。ジノビエフ派は法廷で、ブハーリンとの結託をかくし、ファシズムの手先のトロツキー・ブハーリン合同徒党の存在をかくした。

その後わかったように、キーロフ同志の暗殺は、このトロツキー・ブハーリン合同徒党によっておこなわれたものであった。

すでに当時、一九三五年にあきらかになったとおり、ジノビエフ・グループは、偽装した白衛派組織であり、その成員を、白衛派とおなじにとりあつかうことは、まったく当然であった。

一年ほどしてわかったことだが、キーロフ暗殺のほんとうの、直接的な、実際の組織者、および中央委員会のその他の成員殺害のための準備的な措置の組織者は、トロツキー、ジノビエフ、カーメネフ、そしてかれら

の共謀者だったのである。そこで、ジノビエフ、カーメネフ、バカエフ、エフドキモフ、ピーケリ、スミルノフ、ムラチコフスキー、テル・ワガニャン、レインゴリドその他は裁判にかけられた。動かぬ証拠とともにおさえられた犯罪者は、かれらがキーロフの暗殺を組織したばかりでなく、党、政府のその他すべての指導者の暗殺をも準備していたことを、公然と法廷で認めないわけにはいかなかった。審理によってさらに確認されたように、これらの悪党どもは、謀略行為を組織する道、スパイの道をあゆんでいた。一九三六年のモスクワでおこなわれた裁判において、この連中の、もっともおどろくべき道徳的、政治的な堕落、党への忠誠についての二面的な声明によってかくされた、もっとも下等な卑劣さと裏切りがあばきだされた。

裏切り者トロツキーは、これらすべての暗殺者、スパイの徒党の主要な鼓舞者であり、組織者であった。ジノビエフ、カーメネフやかれらのトロツキスト的な手下は、トロツキーの助手であり、その反革命的指令の執行者であった。かれらは、帝国主義がソ連を攻撃したばあいにおけるソ連の敗北を準備した。かれらは、労働者農民国家にたいする態度の点で敗北主義者となった。かれらは、ドイツ・日本のファシストの卑しい従僕、手先となった。

党組織が、キーロフの凶悪な暗殺事件についてひらかれた裁判からひきださなければならなかった基本的な教訓は、自己の政治的な盲目性を一掃し、自己の政治的な油断を一掃し、自己の警戒性、全党員の警戒性をたかめることにあった。

党中央委員会は、キーロフの凶悪な暗殺に関連して組織にあててだされた手紙で、こう指示した。

(イ) 「われわれの力が増大するにつれて、敵はますます従順になり、無害になるだろうという、あや

まった推測から出発する日和見主義的な人のよさをとりのぞかなければならない。このような推測は根本的にあやまっている。それは、敵はしずかに社会主義にはいりこむだろうとか、敵も結局はほんとうの社会主義者にかわるだろうとか、いいはった右翼偏向の残りかすである。栄誉のうえに安んじていたり、ぼんやりしていたりするのはボリシェビキではない。われわれに必要なのは、人のよさではなく、警戒心、真にボリシェビキ的な、革命的な警戒心である。敵の状態が絶望的であればあるほど、かれらはソビエト権力との闘争におけるただ一つの手段として好んで『極端な手段』に手をだすであろうということを銘記しなければならない。この点を銘記し、警戒しなければならない。」

(ロ)「党員のあいだで党の歴史の教育をすること、われわれの党の歴史におけるありとあらゆる反党グループを、党の路線にたいするかれらの闘争の様式を、かれらの戦術を研究すること、それにもまして、党グループにたいするわれわれの党の戦術、闘争の様式を、これらの反党グループを克服し、徹底的にうちやぶる可能性をわれわれの党にあたえた戦術、様式を研究すること、である。党員は、党が立憲民主党、社会革命党員、メンシェビキ、無政府主義者とどのように闘争し、これを克服したかを知るだけでなく、党がどのようにしてトロツキスト、『民主集中派』、『労働者反対派』、ジノビエフ派、右翼偏向者、右翼・エセ左翼の奇形児などとどのように闘争し、どのように克服したかを、知らなければならない。わが党の歴史を知り、理解することは、党員の革命的警戒心を完全に保障するのに必要な、もっとも重要な手段であることを、忘れてはならない。」

この時期にきわめて大きな意義をもったのは、一九三三年からはじめられた、もぐりこんだ異分子の、党の

隊列からの粛清、とくに、キーロフの凶悪な暗殺後に実行された党員書類の厳密な点検、旧党員書類と新党員書類との交換であった。

党員書類の点検まで、多くの党組織において、党員証の取りあつかいは、勝手気ままと怠慢とが支配的であった。多くの地方党組織では、共産党員の登録がまったく許しがたい混乱のうちにあることが発見された。敵はその醜悪な目的のために、このような混乱を利用し、党員証をスパイ行為、妨害行為などのかくれみのとして利用した。党組織の多くの指導者は、党員拡大や党員証の発給の仕事を、重要でない人物に、またしばしば、まったく点検をうけたことのない党員にまかせていた。

一九三五年五月十三日、党中央委員会は、党員証の登録、発給、保管について全組織に特別書簡をだし、全組織が党員書類の厳密な点検をおこない、「われわれ自身の党という家のなかをボリシェビキ的秩序で整頓する」ことを命じた。

党員書類の点検は大きな政治的意義をもっていた。一九三五年十二月二十五日、党中央委員会総会は、党員書類点検の確保についての決議を採択したが、そのなかで、この点検はソ連共産党（ボリシェビキ）の隊伍を強化するうえでのきわめて重要な、組織的、政治的措置であったとのべている。

点検がおこなわれ、党員書類の交換がおこなわれたのち、党員拡大が再開された。そのさい、ソ連共産党（ボリシェビキ）中央委員会は、党員の補充を、一括してではなく、社会主義のための闘争のさまざまな領域で試練をえた、わが国の真に先進的な、労働者階級の事業に真に忠実な、すぐれた人びとをまず第一に、労働者のなかから、だがまた、農民や勤労知識分子のなかから、厳格に一人ひとり入党させるという原則によって

おこなうことを要求した。

新党員の採用再開にあたって、中央委員会は、敵対的な要素がこんごもソ連共産党（ボリシェビキ）の隊伍のなかにもぐりこむことをくわだてるであろうことを銘記するよう命じた。そこで、

「それぞれの党組織の任務は、ボリシェビキ的な警戒心を極力たかめ、レーニンの党の旗を高くかかげ、異分子的な、敵対的な、偶然的な要素が、党の隊伍にもぐりこむのを予防することである。」（一九三六年九月二十九日付けのソ連共産党（ボリシェビキ）中央委員会の決議、『プラウダ』一九三六年、第二百七十号）

ボリシェビキ党は、自己の隊伍を粛清し、それがため、党の敵を絶滅し、党の路線の歪曲と容赦なく闘争して、党中央委員会のまわりにより緊密に結束した。党とソビエト国家は、中央委員会の指導のもとに、新たな段階へ、すなわち、階級のない、社会主義社会の建設の完成へと移行しつつあった。

要　約

一九三〇〜一九三四年のあいだに、ボリシェビキの党は、権力獲得後のプロレタリア革命のもっとも困難な歴史的任務、すなわち何百万の小所有者的な農民経営をコルホーズの道へ、社会主義の道へ移すという任務を解決した。

富農という数からいえばもっとも多い搾取階級を一掃するとともに、農民の基本的大衆をコルホーズの道に移したことは、国内の資本主義の最後の根を完全に絶滅し、農業における社会主義の勝利を完成し、農村におけるソビエト権力の地位を最終的にうちかためた。

コルホーズでは、組織上の多くの困難を克服したので、最終的に強固になり、ゆたかな生活の道に踏みいった。

第一次五ヵ年計画が達成された結果として、わが国では、社会主義のゆるぎない基礎、すなわち、第一流の社会主義重工業と集団的な機械化農業が建設され、失業が絶滅され、人の人による搾取が絶滅され、わが祖国の勤労者の物質的、文化的状態がたえまなく改善される条件がつくりだされた。

わが国の労働者階級、コルホーズ員、そしてすべての勤労者がかちとったこの偉大な成果は、党と政府の大胆な、革命的な、賢明な政策のたまものであった。

資本主義の包囲は、ソ連の威力をよわめ、破壊しようとつとめ、ソ連のなかで暗殺者、妨害者、スパイの徒党を組織する「活動」をつよめた。ファシストがドイツ、日本で権力の座についたときから、資本主義の包囲のソ連にたいする敵対的な活動がとくにつよまった。ファシズムは、トロツキスト、ジノビエフ派という、資本主義を復活させるためにスパイ行為、妨害行為、テロ、謀略行為にでること、ソ連の敗北をもたらすことを辞さない、忠実な従僕をさがしあてた。

ソビエト権力は、強い腕でこの人類の奇形児どもを処罰し、容赦なくかれらを人民の敵、祖国の裏切り者として弾圧した。

第十二章　社会主義社会建設の完成および新憲法実施のための闘争におけるボリシェビキ党

（一九三五年—一九三七年）

一、一九三五—一九三七年の国際情勢　経済恐慌の一時的緩和　新しい経済恐慌の開始　イタリアのエチオピア侵略　ドイツ・イタリアのスペイン干渉　日本の中国中部への侵入　第二次帝国主義戦争の開始

一九二九年後半に資本主義諸国ではじまった経済恐慌は、一九三三年末までつづいた。その後、工業の下降は停止し、恐慌は不況に移行し、つづいて工業の若干の活況と、その若干の高揚がはじまった。だが、この高揚は、これにつづいて新しい、いっそう高度の基礎のうえで工業の繁栄がはじまるというような高揚ではなか

った。世界の資本主義工業は、一九二九年の水準まで上昇することさえできず、一九三七年なかごろには、この水準の九五パーセント前後にたっしただけであった。そして、一九三七年の後半には、すでに新たな経済恐慌がはじまり、まっさきにそれはアメリカ合衆国をおそった。一九三七年の末には、アメリカの失業者数は一千万人にふえた。イギリスの失業者数も急速に増加しはじめた。

このようにして、資本主義諸国は、ついさきごろの経済恐慌の打撃から回復するまもなく新たな経済恐慌にみまわれたのである。

このような事情のため、帝国主義諸国間の矛盾は、ブルジョア階級とプロレタリア階級のあいだの矛盾とおなじく、さらにいっそうつよまった。そこで、国内の経済恐慌による損失を、防衛力のよわい他の国を犠牲にして埋め合わせようとする侵略的な諸国のたくらみも、ますますつよまりはじめた。そしてこんどは、ドイツ、日本という二つの有名な侵略国に第三の国イタリアがくわわった。

一九三五年、ファシスト・イタリアは、エチオピアを攻撃し、それを隷属させた。イタリアは、エチオピアを、「国際法」からみてなんらの根拠、もしくは口実もなく攻撃し、宣戦布告することなく、いまではファシストの流行となっている泥棒式のやりかたで攻撃した。これは、エチオピアにたいする打撃であっただけではなかった。この打撃は、イギリスにたいしても、ヨーロッパからインド、アジアへの主要な海路にたいしてもむけられたのである。イギリスは、エチオピアにおけるイタリアの地歩の確立を阻止しようとしたが、なんらの成果もあげられなかった。そのあと、イタリアは、行動の自由をうるため、国際連盟から脱退し、軍備の拡充をいそぎはじめた。

このようにして、ヨーロッパからアジアへの最短の海路に、新たな戦争の結び目がつくりだされた。

ファシスト・ドイツは、一方的な行為によってベルサイユ講和条約を破棄し、力づくでヨーロッパ諸国の国境改訂の計画を実現することを決めた。ドイツ・ファシストは、かれらが近隣の諸国を従属させようと、もしくは少なくとも、これら諸国のドイツ人居住地域を占領しようとつとめていることをかくさなかった。この計画は、つぎのことを予定していた。すなわち、てはじめにオーストリアを占領し、そのあとチェコスロバキアに、そのあとは、おそらく、ドイツ人が住んでいるまとまった地域があり、かつドイツと国境を接しているポーランドに打撃を加え、そのあとは……おいおい「わかってくるだろう。」

一九三六年の夏、スペイン共和国にたいするドイツ、イタリアの武力干渉が開始された。イタリアとドイツは、スペインのファシストへの援助という名目で、ひそかにその部隊をスペイン領内、すなわちフランスの背後にいれ、その艦隊をスペインの領海に、すなわち、南はバレアレス諸島とジブラルタル海峡に、西は大西洋の海域に、北はビスケー湾の海域に進入させることができた。一九三八年のはじめ、ドイツ・ファシストは、オーストリアを強奪して、ドナウ川の中流地域に侵入し、そしてアドリア海に近いヨーロッパ南部まで勢力を伸ばしていった。

ドイツ、イタリアのファシストは、スペインにたいする干渉の展開にあたって、かれらはスペインの「赤色派」と闘争しているのであり、なんら別の目的を追求しているのではないむねを公然と確言した。だが、これは、お人よしの愚かさをあてにしたおそまつな、知恵のない偽装であった。実際には、かれらは、イギリスとフランスに打撃を加えたのである。というのは、かれらは、アフリカとアジアの広大な植民地地域につうじる

イギリス、フランスの海路をおさえたからである。
オーストリアの強奪にいたっては、それを、ベルサイユ条約にたいする闘争ということでも、また、第一次帝国主義戦争の結果うしなった領土の回復につとめるドイツの「民族的」利益の保全ということでも、どうしても説明のつけようのないことだった。オーストリアは、もちろん戦前においても戦後においてもドイツの一部分となったことはなかった。ドイツがオーストリアを力づくで併合することは、他国の領土を野蛮に、帝国主義的に侵略することを意味した。この併合は、西ヨーロッパ大陸で支配的地位をしめようとするファシスト・ドイツの意図を、うたがいもなくしめすものであった。
これは、まず第一に、フランス、イギリスの利益にたいする打撃であった。
こうして、ヨーロッパの南部、すなわち、オーストリアとアドリア海の区域、およびヨーロッパの西端、すなわち、スペインとその沿海の区域に、新たな戦争の結び目が形成された。
一九三七年、日本のファシスト軍閥は、北京を占領し、中国中部に侵入し、上海を占領した。日本軍隊の中国中部の侵入も、数年まえの満州侵入とおなじように、日本式の手口で、すなわち泥棒式のやり方、日本人自身がつくりだしたさまざまな「地方的事件」にペテン師的な言いがかりをつけるという方法で、ありとあらゆる「国際的規範」、条約、協定を事実上ふみにじる方法で、おこなわれた。日本は、天津と上海を占領したので、広大な市場を擁する中国との貿易の鍵をその手ににぎった。これは、日本が上海と天津をその手ににぎっているかぎり、日本は、中国中部に巨額の投資をしているイギリス、アメリカを中国中部からいつでも追いだすことができるということを意味する。

もちろん、日本侵略者にたいする中国の人民およびその軍隊の英雄的な闘争、中国における巨大な民族的高揚、中国における膨大な人口と広大な領土、最後に、侵略者を中国の国境から完全に追いだすまで徹底的に中国解放闘争をすすめるという中国民族政府の決意――これらすべては疑いもなく、中国において日本帝国主義者がいかなる前途ももっていないし、またもちえないことを物語っている。

だがまた、日本がいまのところ中国との貿易の鍵をその手ににぎっており、中国にたいする日本の戦争は、実際には、イギリス、アメリカの利益にたいするもっとも重大な打撃であるということもたしかである。

ここにおいて、太平洋で、中国の地域に、いま一つの戦争の結び目が形成された。

すべてこれらの事実は、第二次帝国主義戦争が事実上すでにはじまったことをしめしている。それは、宣戦布告なしにこっそり開始された。諸国家と諸民族は、なんにも気づかないうちに、第二次帝国主義戦争の軌道にはいりこんでしまった。三つの侵略国、すなわちドイツ、イタリア、日本のファシスト的支配グループが、世界のはしばしで戦争を開始した。戦争は、ジブラルタルから、上海にいたる広大な範囲にわたって進行している。戦争はすでにその軌道に五億以上の人口をまきこんでいる。戦争は、帰するところ、イギリス、フランス、アメリカの資本主義的利益に反している。なぜなら戦争の目的は、世界と勢力範囲を、侵略的諸国に有利に、そして、これらのいわゆる民主主義的諸国を犠牲にして再分割することにあるからである。

第二次帝国主義戦争の特徴は、さしあたりつぎの点にある。すなわち、侵略的な強国が戦争を進め、発展させているのに、その他の強国、「民主主義」的な強国は、かれらにたいしても、実は戦争の矛先が向けられているのに、戦争はかれらになんら関係がないかのようによそおい、責任をのがれ、あとずさりし、みずからの

平和愛好をほこり、ファシスト侵略者を責めたて、そして……一歩いっぽ、その陣地を侵略者にあけわたしながら、しかもみずからは反撃の準備をしているのだ、と強弁している点にある。

これでわかるように、この戦争は、なかなか奇怪な、片よった性質をもっている。だが、このことは、これが、防衛力のよわいエチオピア、スペイン、中国の人民の背の上で演じられる、残酷な、野蛮な侵略戦争であるということをさまたげはしない。

今回の戦争のこうした片よった性質を、「民主主義」諸国の軍事的または経済的な弱さからということで解釈するなら、それは間違いである。「民主主義」諸国は、もちろん、ファシスト諸国より強力である。いまくりひろげられている世界戦争の片よった性質は、ファシスト諸国にたいする「民主主義」諸国の統一戦線が存在していないことによる。いわゆる「民主主義」諸国はもちろんファシスト諸国の「極端な手段」を是認せず、これら諸国が強くなることをおそれている。だがかれらは、ヨーロッパの労働運動とアジアの民族解放運動をそれ以上におそれており、ファシズムをこれらすべての「危険」な運動の「よい解毒剤」だとみなしている。そこで「民主主義」諸国の支配グループ、とりわけイギリスの保守党支配グループは、増長したファシストの頭目どもが「極端にはしらない」よう勧告する政策にとどまっている。同時にこれらの支配グループはまた、労働運動や民族解放運動にたいするかれらの反動的な、警察的な政策を「完全に了解」し、基本的には共感をよせていることを、かれらに示している。イギリスの支配グループがここでとっているのは、ツァー制度のもとでロシアの自由主義的・君主主義的ブルジョアがとった政策とほとんどおなじである。当時のロシアのブルジョアは、ツァーの政策が「極端にはしる」ことをおそれていたが、それ以上に人民をおそれていたの

で、やはりツァーに勧告する政策に、したがってまた人民をむこうにまわしてツァーと結託する政策に移った。周知のように、ロシアの自由主義的・君主主義的ブルジョア階級は、このようなどっちつかずの政策をとったため手ひどい報いをうけた。いまやイギリスの支配グループおよびフランス、アメリカのその友人たちも、おそらくおなじように歴史の報復をうけるであろう。

ソ連がこのような国際情勢の転回に直面して、これらのおそるべき諸事件を放置できないことは、あきらかである。侵略者によってはじめられたいかなる戦争も、たとえ大きくない戦争でさえも、すべて平和愛好国にとって危険である。「しらずしらず」各国人民にしのびより、そして五億以上の人口をまきこんでいるこの第二次帝国主義戦争は、なおさら、各国人民にとって、とりわけソ連にとって、もっとも重大な危険でしかありえない。ドイツ、イタリア、日本の「反共連合」の結成は、これをもっとも雄弁にものがたっている。したがって、われわれの国家は、その平和政策を遂行すると同時に、わが国境の防衛能力と、赤色陸海軍の戦闘準備をひきつづき強化している。一九三四年末、ソ連は国際連盟に加盟した。それは、国際連盟は、弱体ではあるが、それにしても、侵略者をあばく場所として、また弱体とはいえ、多少なりとも戦争のぼっぱつを阻止できる平和の道具として役立ちうることを知っているからである。ソ連は、こういう時期には、国際連盟のような弱体な国際組織でも、無視してはならないとみなした。一九三五年五月、ソ連とフランスのあいだに、おこりうる侵略者の攻撃にたいする相互援助条約が結ばれた。これと同時に、チェコスロバキアとも同じような条約が結ばれた。一九三六年三月、ソ連はモンゴル人民共和国と相互援助条約を結んだ。一九三七年八月、ソ連と中華民国とのあいだに相互不可侵条約が結ばれた。

二、ソ連における工業、農業のいっそうの高まり　第二次五ヵ年計画の期限前の達成　農業の改造と集団化の完成　幹部の意義　スタハーノフ運動　人民の福祉の向上　人民の文化の向上　ソビエト革命の力

資本主義諸国では、一九三〇～一九三三年の経済恐慌がすぎさってから三年たって、新たな経済恐慌が到来した。ところが、ソ連ではこの全期間、たえまなく工業の高揚がつづいた。世界の資本主義的工業は全体として、一九三七年の中ごろ、ようやく一九二九年の水準の九五パーセント～九六パーセント前後にたっしただけで、しかも一九三七年の後半には、新たな経済恐慌の時期に突入した。ところがソ連の工業は発展する高揚のうちに、一九三七年の末には一九二九年の水準の四二八パーセント、戦前の水準にくらべると七倍以上増加した。

これらの成果は、党と政府が断固として遂行した改造政策の直接の結果であった。

これらの成果をかちえた結果、第二次五ヵ年計画は、工業の分野では、期限前に達成された。第二次五ヵ年計画は、一九三七年四月一日に、つまり四年と三ヵ月で達成された。

これは、社会主義のもっとも巨大な勝利であった。

農業もこれとほとんど同じような高揚をしめした。すべての農作物の播種面積は、一九一三年(戦前)の一億五百万ヘクタールから、一九三七年の一億三千五百万ヘクタールにふえた。穀物の生産高は、一九一三年の四十八億プードから、一九三七年の六十八億プードに、原綿の生産高は、四千四百万プードから一億五千四百万プードに、亜麻(繊維)の生産高は、千九百万プードから三千百万プードに、甜菜の生産高は、六億五千四百万プードから十三億千百万プードに、油脂作物の生産高は、一億二千九百万プードから三億六百万プードに、それぞれふえた。

コルホーズ(ソフホーズをのぞいて)だけで、一九三七年に国に供給した商品穀物は、十七億プード以上、すなわち、一九一三年の地主、富農、農民が供給したものよりも、最小限四億プード多かったということを注目しなければならない。

農業の一つの部門、すなわち、牧畜部門だけは、いぜんとして戦前の水準よりたちおくれ、緩慢なテンポで前進しつづけていた。

農業集団化についていえば、それはすでに完成したとみてよかった。コルホーズには、一九三七年には農家総数の九三パーセントを占める千八百五十万の農家がはいっており、そしてコルホーズの穀物播種面積はすでに全農民の穀物播種総面積の九九パーセントをしめていた。

農業の改造と、農業にトラクターと農業機械を供給することに力をいれた成果が、はっきりとあらわれたのである。

工業と農業の改造が完成した結果、国民経済は豊富な第一流の技術をゆたかにそなえるにいたった。工業と

農業、運輸と軍隊は、莫大な量の新しい技術、新しい機械と工作機械、トラクターと農業機械、機関車と汽船、大砲と戦車、航空機と軍艦をうけとった。そこで、これらすべての技術を駆使し、技術からひきださせる最大限をひきだす能力のある数万、数十万の訓練された幹部を仕事につかせなければならなかった。これがなければ、技術に精通した十分な数の人材がなければ、技術は無用な金属の堆積になってしまうおそれがあった。これは重大な危険であった。この危険は、技術を駆使することのできる幹部の増加が、技術の成長に間にあわず、はるかに立ちおくれていたからであった。ことを複雑にしたのは、つまりその当時、われわれの活動家の相当部分が、このような危険を意識しておらず、技術は仕事を「自分でやるだろう」と考えていたことである。これまで、人びとは技術を過小評価し、技術をいやしむ態度をとっていたが、いまや技術を過大評価し、そして技術を偶像化しはじめた。人びとは、技術に精通した人材がなかったならば、技術は死物だということがわからなかった。人びとは、技術に精通した人材のもとではじめて、技術は最高の生産性をうみだすことができる、ということがわからなかった。

そこで、技術に精通した幹部の問題が、最高の意義をもつにいたったのである。

われわれの活動家の注意を、技術に過度に心酔することと、幹部の役割を過小評価することとから、技術を体得することへ、技術に精通することへ、技術を駆使し、技術から最大限の効果をひきだす能力のある数多くの幹部の養成を極力強化することへ、むけかえる必要があった。

以前に、改造期の初期、すなわち、国内で技術の分野での欠乏が感じられていたとき、党は「改造の時期には技術がすべてを決定する」というスローガンを出したが、いまや技術が豊富になり、改造の時期が大体にお

いておわり、そして国内で幹部の著しい欠乏が感じられているとき、党は、もはや技術にではなく、人材に、技術を十分に利用する能力のある幹部に注意をむけるような、新しいスローガンを出さなければならなかった。

この点で、一九三五年五月、スターリン同志が赤軍大学の学生の卒業式でおこなった演説は、大きな意義があった。スターリン同志はこういった。

「前には、われわれは、『技術がすべてを決定する』といっていた。このスローガンは、われわれが技術の分野での欠乏を一掃し、すべての活動部門において、第一流の技術によってわれわれの人材を武装させるためのもっとも広い技術的基礎をつくりだすうえで、われわれをたすけた。これはひじょうによいことであった。だが、これではまだはるかに、はるかに不十分である。技術を機能させ、それを徹底的に利用するには、技術に精通した人材が必要であり、このような技術を体得し、くろうとして利用する能力のある幹部が必要である。技術は、技術に精通した人材がいないなら、死物である。技術は、それに精通した人材に用いられれば、奇蹟をあらわすことができるし、あらわすにちがいない。もし、われわれの第一流の工場、われわれのソフホーズとコルホーズ、われわれの国家は、われわれの運輸、われわれの赤軍に、この技術を駆使できる十分な数の幹部がいたなら、われわれがいま手にしているよりも、三倍、四倍もの効果をあげたであろう。だからこそ、人材に、幹部に、技術に精通した活動家に、注意をむけなければならない。だからこそ、『技術がすべてを決定する』という、われわれが技術に欠乏していた、すでにすぎさった時期を反映している古いスローガンは、いまや新しいスローガン、すな

わち『幹部がすべてを決定する』というスローガンによっておきかえられなければならない。いまや肝心な点はここにある……

最後に、世の中のすべての貴重な資本のなかで、人材、幹部がもっとも貴重な、もっとも決定的な資本であることを理解すべきである。われわれの現在の条件のもとでは、『幹部がすべてを決定する』ということを理解すべきである。われわれが、工業、農業、運輸、軍隊において、すぐれた、数多い幹部をもつようになったなら、われわれの国家は不敗であろう。もしわれわれにこのような幹部がなかったなら、われわれはまったく動けないであろう。」

こうして、労働の生産性をたかめるために、技術幹部を急速に養成し、新しい技術を急速に体得することが、いちばん主要な任務になった。

このような幹部が成長したことのもっともあきらかな実例、われわれの人材が新しい技術を体得・利用し、そして労働の生産性がひきつづきたかまったことの実例が、スタハノフ運動であった。この運動は、ドンバスで、石炭工業のなかで生まれ、発展し、他の工業部門に移り、運輸業に広がり、のち農業にも及んだ。この運動がスタハノフ運動とよばれるのは、その発起者、「ツェントラリナヤ・イルミノ」（ドンバス）炭鉱の採炭員のアレクセイ・スタハノフの名にちなんでである。すでにスタハノフのまえにも、ニキータ・イゾトフはそれまでみられなかった採炭の記録をだしていた。一九三五年八月三十一日、スタハノフは一交替時間に百二十トンの石炭を採掘し、これによって普通の採炭ノルマの十四倍を超過したスタハノフの実例は、たちまちにして、労働者やコルホーズ員が生産ノルマをたかめ、労働の生産性を新たに高揚させるための大衆運動の発端と

なった。自動車工業におけるブスィギン、製靴工業におけるスメタニン、運輸業におけるクリボノス、木材工業におけるムシンスキー、織維工業におけるエブドキヤ・ビノグラドワとマリヤ・ビノグラドワ、農業におけるデェムチェンコ、グナチェンコ、アンゲリナ、ポラグーチン、コレソフ、コワルダク、ボーリン、——これらは、スタハノフ運動の最初の先駆者たちの名前である。

かれらのあとには、その他の先駆者、さらにまた大量の先駆者がつづき、最初の先駆者たちの労働の生産性を追いこした。

一九三五年十一月、クレムリンでひらかれた全ソ第一回スタハノフ運動者会議、およびスターリン同志のこの会議での演説は、スタハノフ運動の展開にきわめて大きな意義をもった。スターリン同志は、その演説のなかでこういった。

「スタハノフ運動は、社会主義競争の新たな高揚であり、社会主義競争の新たな、より高い段階をあらわしている。……かつて、三年まえの社会主義競争の第一段階の時期には、社会主義競争はかならずしも、新しい技術と結びついていなかった。たしかに、われわれは当時、もともと新しい技術をほとんどもっていなかった。これに反し、社会主義競争の現段階、すなわち、スタハノフ運動は、かならず新しい技術と結びついていなければならない。新しい、よりたかい技術なしには、スタハノフ運動は考えられない。諸君の前には、スタハノフ、ブスィギン、スメタニン、クリボノス、プロニン、ビノグラドワ姉妹、その他たくさんの同志たちのような人材、あたらしい人材、完全に自分の仕事の技術に精通し、技術を駆使し、おしすすめた男女の労働者がいる。三年まえには、われわれのところには、このよ

うな人材はいなかったか、あるいはほとんどいなかった……。スタハノフ運動の意義は、この運動がふるい技術ノルマを不十分なものとしてうちやぶり、そしてきわめて多くのばあい先進資本主義諸国の労働の生産性をうわまわり、こうして、わが国で社会主義をいっそうたかめるための実際的な可能性、わが国をもっともゆたかな国にする可能性をみいだした、という点にある。」

つづいて、スターリン同志は、スタハノフ運動者の仕事の特徴を説き、わが国の将来にたいするスタハノフ運動の大きな意義をあきらかにしてこういった。

「スタハノフ運動者の同志たちをよくみていただきたい。かれらはどんな人たちであろうか。それは、主として青年または中年の男女労働者であり、文化的な、技術的素養のある人びとであり、仕事における精確さと几帳面さの模範をしめし、仕事のうえで時間的要素を評価することができ、時間を、分だけでなく秒で数えることを習得している。かれらのなかの大多数は、いわゆる技術的な最低限を修了して、ひきつづきその技術教育を補充している。かれらは、若干の技師、技手および経営担当者にみられるような保守主義や停滞性にそまっていない。かれらは、勇敢に前進し、ふるくさくなった技術ノルマをうちやぶり、新しい、よりたかい技術ノルマをつくりだしている。かれらは、わが国工業の指導者たちがさだめた計画上の能力や経済計画に修正を加える。かれらは、しばしば技師や技手の意見をおぎない、手直ししている。かれらは、しばしば技師や技手をおしえ、かれらをおしすすめる。というのは、かれらはその仕事の技術に完全に精通しており、技術からひきだすことのできる最大限をひきだすことのできる人びとだからである。きょうは、スタハノフ運動者はまだ少ないが、あすは十倍にもふえるだ

ろうということを、だれが疑うことができようか。スタハノフ運動者は、わが国の工業における革新者ということ、スタハノフ運動はわが国工業の将来性をしめしているということ、この運動には、労働者階級の将来の文化的・技術的高揚の種子がやどされているということ、この運動は、社会主義から共産主義へ移行し、精神労働と肉体労働とのあいだの対立を一掃するために必要な、労働の生産性のより高い指標に到達する道をきりひらいているということは、はたして明白ではないだろうか。」

スタハノフ運動の展開と、第二次五ヵ年計画の期限前の遂行は、勤労者の福祉のあらたな向上と文化的発展のための条件をつくりだした。

第二次五ヵ年計画のあいだに、労働者、職員の実質賃金は二倍以上に増加した。賃金基金は一九三三年の三百四十億ルーブルから、一九三七年には八百十億ルーブルにふえた。国家の社会保険基金は一九三三年の四十六億ルーブルから、一九三七年には五十六億ルーブルにふえた。一九三七年のわずか一年間に、労働者、職員の国家保険、日常生活や文化的需要の改善、療養所、療養地、休養所および医療扶助にたいし、約百億ルーブルが支出された。

農村においては、コルホーズ制度が最終的にかたまった。これに大いに寄与したのは、一九三五年二月の第二回コルホーズ員突撃隊員大会で採択された農業アルテリ規約、およびコルホーズにたいしその耕作するすべての土地の永久使用を確認したことであった。コルホーズ制度がかたまったため、農村における貧困、窮乏は消滅した。三年まえには、一労働日あたり一ないし二キログラムの穀物が支給されたが、いまや穀物地区の大多数のコルホーズ員は、一労働日あたり五ないし十二キログラムをうけとり、そのうち多くのものは

他の生産物の支給や現金収入は別にしても、一労働日あたり二十キログラムをうけとれるようになった。数百万のコルホーズ農家が、穀物地区では一年に五百プードから千五百プードの穀物をうけとり、綿花、甜菜、亜麻、牧畜、ぶどう、柑橘、果実野菜地区では数万ルーブルの年収をえた。コルホーズはゆたかになった。新しい納屋や倉庫をたてることがコルホーズ農家の主要な関心事となった。なぜなら、以前、わずかな一年分の貯蔵を予定していた農産物の古い貯蔵所は、コルホーズ員の新しい需要の十分の一もみたせなくなったからである。

一九三六年、人民大衆の福祉の増進にともなって、政府は堕胎禁止の法律を発布した。同時に、産院、託児所、ミルク調製所、幼稚園を建設する大きな計画がたてられた。一九三六年には、これらの施策のために二十一億七千四百万ルーブルが計上されたが、一九三五年には八億七千五百万ルーブルであった。特別の法律によって子供の多い家族には多額の扶助が規定された。一九三七年、この法律によって支出された手当は十億ルーブル以上にたっした。

一般的義務教育の実施および新しい学校の建設の結果として、人民大衆の文化程度の力強い高揚が進展した。全国にわたって、壮大な学校建設がくりひろげられた。初等、中等学校の生徒数は、一九一四年の八百万人から、一九三六年~三七年には二千八百万人となった。大学・高等専門学校の学生数は、一九一四年の十一万二千人から、一九三六年~三七年には五十四万二千人になった。

これは、文化革命であった。

人民大衆の物質的状態と文化的発展の高揚のうちに、われわれのソビエト革命の力、威力、無敵さがあらわ

れていた。

過去の革命は、人民に自由をあたえはしたが、同時に人民の物質的、文化的状態を真剣に改善する可能性をもたなかったために破滅した。

それらの革命の根本的な弱点は、ここにあったのである。わが国の革命が他のすべての革命とちがう点は、人民をツァー制度から、資本主義からの自由をあたえたばかりでなく、人民の物質的、文化的状態を根本的に改善したことにある。この点に、わが国の革命の力と無敵さがある。

スターリン同志は、全ソ第一回スタハノフ運動者会議での演説で、こうのべた。

わが国のプロレタリア革命は、自己の政治的な成果のみならず、物質的な成果をも、人民にしめすことのできた世界でただ一つの革命である。あらゆる労働者革命のなかで、ただ一つの労働者革命だけがやっとのことで権力を手に入れたことをわれわれは知っている。それはパリ・コンミューンである。だがパリ・コンミューンは、ながくは存在しなかった。もちろん、それも資本主義のかせをうちやぶろうとはしたが、それをうちやぶるまでにはいたらなかったし、まして人民に革命のよい物質的な成果をしめすまでにはいたらなかった。ただひとつわが国の革命だけが、資本主義のかせをうちやぶり、人民に自由をあたえただけでなく、さらに人民にゆたかな生活のための物質的条件をあたえるにいたった。ここに、われわれの革命の力と無敵さがある。」

三、第八回ソビエト大会　ソ連新憲法の制定

一九三五年二月、ソビエト社会主義共和国連邦第七回ソビエト大会は、一九二四年に制定されたソ連憲法の改正を議決した。ソ連憲法改正の必要は、一九二四年いらい、すなわち、最初のソ連憲法の制定いらい、現在までにソ連の生活におこったいくたの巨大な変化によってもたらされた。すぎた年月のあいだに、ソ連における階級の力関係は完全にかわった。すなわち、新しい社会主義的工業が創設され、富農は粉砕され、コルホーズ制度は勝利をおさめ、全国民経済のなかで、生産手段の社会主義的所有は、ソビエト社会の基礎として根をおろした。社会主義の勝利は、選挙制度のいっそうの民主化に、すなわち、秘密投票による普通・平等・直接の選挙権の採用に移行することを可能にした。

スターリン同志を委員長とする特別憲法委員会は、新しいソ連憲法の草案を作成した。草案は、五ヵ月半もつづいた全人民の審議にかけられた。憲法草案は第八回臨時ソビエト大会の審議にかけられた。

一九三六年十一月、第八回ソビエト大会がひらかれたが、その使命は、新しいソ連憲法草案を承認するか、拒否するかであった。

スターリン同志は、第八回ソビエト大会における新憲法草案についての報告のなかで、一九二四年の憲法制定以来ソビエト国家においておこった基本的な変化をのべた。

一九二四年の憲法は、新経済政策の最初の時期に制定された。当時、ソビエト権力はまだ、社会主義の発展とならんで資本主義の発展することをゆるしていた。当時、ソビエト権力は、二つの体制、すなわち資本主義

体制と社会主義体制の競争の過程で、経済の分野における資本主義にたいする社会主義の勝利を組織し、確保することを予期していた。当時、「どちらがどちらに勝つか」の問題はまだ解決されていなかった。そのころ、古い、貧弱な技術のうえに築かれた工業は、戦前の水準にさえたっしていなかった。当時、農業はいっそうみじめな状態であった。ソフホーズとコルホーズはただ、個人農民経営のはてしない大洋のなかのばらばらの小島という形で存在していた。富農の一掃ではなく、その制限だけが問題であった。商品流通の分野では、社会主義部分は五〇パーセント前後をしめているだけであった。

一九三六年には、ソ連はちがった情景をしめしていた。一九三六年になると、ソ連の経済は完全にかわった、このときには、資本主義要素は完全に一掃され、社会主義体制が国民経済のすべての部門において勝利をおさめた。強大な社会主義工業は、戦前の工業生産高の七倍をこえ、私営工業をのこらず排除してしまった。農業では、世界でもっとも大きい、機械化された、新しい技術で装備された社会主義的生産が、コルホーズ、ソフホーズの体系という形で勝利をかちとった。一九三六年には、富農は階級として完全に一掃され、そして個人経営部分は、国の経済のなかですこしの重大な役割もはたしていなかった。すべての商品流通が、国家と協同組合の手に集中された。人による人の搾取が永久にとりのぞかれた。生産手段の共有的な、社会主義的所有制が国民経済のすべての部門のなかで、新しい社会主義制度のゆるぎない基礎として根をおろした。新しい社会主義社会にあっては、恐慌、貧困、失業、破産は、永久にあとをたった。ソビエト社会のすべての成員のゆたかな、文化的な生活のための諸条件がつくりだされた。

スターリン同志は、その報告のなかで、ソ連の住民の階級構成も、これに応じて変化したとのべた。地主階

級とかつての帝国主義的大ブルジョア階級は、国内戦争の時期に一掃された。社会主義建設の数年間において、すべての搾取的な要素、すなわち、資本家、商人、富農、投機師は一掃された。残ったのはただ、一掃された搾取階級のわずかな残りかすだが、その完全な一掃も近い将来の問題である。

社会主義建設の数年間に、ソ連の勤労者、すなわち、労働者、農民、知識分子も、根本的に変化した。

労働者階級は資本主義制度のもとでのように、生産手段をもたない搾取される階級ではなくなった。労働者階級は、資本主義を絶滅し、資本家の手から生産手段をうばいとり、それを社会的所有にした。労働者階級は、本来のふるい意味でのプロレタリア階級ではなくなった。国家権力をにぎったソ連のプロレタリア階級は、まったく新しい階級となった。それは、搾取から解放され、資本主義的経済体制を絶滅し、生産手段の社会的所有制をうちたてた労働者階級、すなわち、人類の歴史がかつて知らなかった労働者階級に変化した。

ソ連の農民の状態にも、これにおとらない深刻な変化がおこった。昔は、二千万以上の分散した、独立の、小、中の農民経営が、自力で自分の分与地をほじくりまわしていた。かれらは、おくれた技術をもちい、地主、富農、商人、投機師、高利貸しなどから搾取されていた。いまや、ソ連では、まったく新しい農民が成長した。農民を搾取することのできた地主と富農、商人と高利貸しはもはやいなくなった。大多数の農民経営はコルホーズに加入した。コルホーズの基礎にあるのは、生産手段の私的所有ではなくて、集団労働の基礎のうえに成長した集団的所有であった。これはすべての搾取から解放された新しい型の農民であった。このような農民も、人類の歴史は、かつて知らなかった。

ソ連の知識分子も変化した。知識分子は、大体においてまったく新しい知識分子になった。大多数の知識分

子は労働者、農民の出身である。かれらはふるい知識分子のように資本主義にではなく、社会主義に奉仕している。知識分子は、社会主義社会の平等の権利をもつ一員となった。これらの知識分子は、労働者、農民といっしょに社会主義社会を建設している。これは、人民に奉仕し、すべての搾取から解放された新しい型の知識分子である。このような知識分子も、人類の歴史は、かつて知らなかった。

このようにして、ソ連の勤労者のあいだの階級的な境界はうすらぎつつあり、ふるい階級的な排他性は消失しつつある。労働者、農民、知識分子のあいだの経済的、政治的矛盾は減少し、うすらぎつつある。社会の道徳的・政治的統一の基礎がつくりだされた。

ソ連の生活におけるこれらの深刻な変化、社会主義がソ連においておさめたこれらの決定的な成果は、ソ連の新憲法のなかに反映された。

この憲法によると、ソビエト社会は、労働者と農民という二つの友好的な階級からなっており、労働者と農民のあいだにはいまなおいくつかの階級的差異が残っている。ソビエト社会主義共和国連邦は労働者、農民の社会主義国家である。

ソ連の政治的基礎は、地主と資本家の権力をうちたおし、プロレタリア階級独裁を獲得した結果成長し、強固となった勤労者代表ソビエトである。

ソ連の全権力は、勤労者代表ソビエトが代表する都市と農村の勤労者に属している。

ソ連の国家権力の最高機関は、ソ連最高ソビエトである。

連邦ソビエトと民族ソビエトという平等の権利をもつ両院からなるソ連最高ソビエトは、ソ連の公民によっ

て、四年の任期で、秘密投票による普通、直接、平等の選挙権にもとづいて選出される。
ソ連最高ソビエトとすべての勤労者代表ソビエトの選挙は、ひとしく普通選挙である。すなわち、満十八歳にたっしたすべてのソ連の公民は、人種、民族、信教、教育資格、居住資格、社会的出身、資産状態、過去の活動のいかんをとわず、代議員の選挙に参加し、また選挙される権利をもつ。ただし、精神病者と裁判所によって選挙権を剝奪されたものは、これを除く。
代議員の選挙は平等制である。すなわち、各公民は一票を有し、すべての公民はひとしく平等の原則によって選挙に参加する。
代議員の選挙は直接制である。すなわち、農村と都市の勤労者代表ソビエトからソ連最高ソビエトにいたるまでのすべての勤労者代表ソビエトの選挙は、直接の方法で、公民によって直接におこなわれる。
ソ連最高ソビエトは、両院の合同会議において、ソ連最高ソビエト幹部会とソ連人民委員会議を選出する。
ソ連の経済的基礎をなすものは、社会主義経済体制と生産手段の社会主義的所有とである。ソ連においては、「各人はその能力に応じて、各人にはその労働に応じて」という社会主義の原則が実現されている。
ソ連の公民には、労働の権利、休息の権利、教育の権利、老齢または病気や労働能力喪失のばあいに物質的保障をうける権利が保障される。
婦人には、すべての活動分野において、男子と平等の権利があたえられる。
ソ連の公民が民族、人種のいかんにかかわらず、平等の権利をもつことは、不動の原則である。
すべての公民に、信教の自由と反宗教宣伝の自由が認められる。

社会主義社会を強固にするために、憲法は、言論、出版、集会、大衆集会の自由、社会団体に結集する権利、人身の不可侵および信書の秘密を保障するとともに、勤労者の利益を擁護した、あるいは科学的活動をおこない、あるいは民族解放闘争をおこなったために追求されている外国公民にたいする避難権を保障する。

同時に、新憲法は、ソ連のすべての公民に、つぎのような重大な義務を課している。すなわち、すべてこの法律を履行すること、労働規律をまもること、社会的義務を誠実に履行すること、社会主義的な共同生活の規則を尊重すること、共同の社会主義財産を大切にし、強化すること、社会主義の祖国を防衛すること、である。

「祖国の防衛は、ソ連のすべての公民の神聖な義務である。」

公民が各種の団体に結集する権利について、憲法はその条文の一つにつぎのように規定している。

「労働者階級およびその他の勤労階層の隊伍のなかのもっとも積極的な自覚ある公民は、社会主義制度の強化と発展のための闘争における勤労者の前衛部隊であり、勤労者の社会的ならびに国家的なあらゆる組織の指導の核心であるソ連共産党（ボリシェビキ）に結集する。」

第八回ソビエト大会は、ソ連新憲法草案を満場一致で承認し、可決した。

こうして、ソビエト国家は、新しい憲法、すなわち、社会主義と労働者・農民民主主義の勝利の憲法をもったのである。

こうして憲法は、ソ連が新しい発展の時期、すなわち社会主義社会の建設を完成し、一歩いっぽ、共産主義社会に移行する時期に踏み入ったという全世界史的事実を確認した。共産主義社会では、社会生活の指導原理は、「各人はその能力に応じて、各人にはその要求に応じて」という共産主義の原則でなければならない。

四、ブハーリン派・トロツキストのスパイ、妨害者、売国奴の残党の一掃　ソ連最高ソビエト選挙の準備　党内民主主義を拡大するための方針　ソ連最高ソビエトの選挙

一九三〇年に、ブハーリン派・トロツキストの徒党の人でなしどもについての新しい事実があばきだされた。ピャタコフ、ラデックらの事件についての裁判、トハチェフスキー、ヤキトルらの事件についての裁判、およびブハーリン、ルイコフ、クレスチンスキー、ローゼンゴリッらの事件についての裁判、これらのすべての裁判は、ブハーリン派とトロツキストがもともとずっとまえから「右派・トロツキスト連合」という、人民の敵の一つの共同の徒党を結成していたことをしめした。

裁判に明らかになったことだが、これらの人類のくずどもは、すでに十月社会主義革命の当初から、人民の敵であるトロツキー、ジノビエフ、カーメネフと結託してレーニンに反対し、党に反対し、ソビエト国家に反対してきた。一九一八年のはじめに、ブレスト講和をぶちこわそうとした挑発的な企て、一九一八年春のレーニンにたいする陰謀、社会革命党「左派」との共謀によるレーニン、スターリン、スベルドロフ逮捕・殺害の陰謀、一九一八年夏のレーニンにたいする凶悪な狙撃と傷害、一九一八年夏の社会革命党「左派」の反乱、一九二一年、レーニンの指導を内部から動揺させ、くつがえす目的で故意に党内の対立を激化させたこと、レー

ニンの病中と死後、党の指導をくつがえそうとした企て、国家の秘密をもらし、外国の諜報機関にスパイ的情報を提供したこと、キーロフにたいする凶悪な暗殺、妨害行為、謀略行為、爆破、メンジンスキー、クイビシェフ、ゴーリキーにたいする凶悪な暗殺——これらのすべて、およびこれに類する犯罪行為は、もともとトロツキー、ジノビエフ、カーメネフ、ブハーリン、ルイコフおよびかれらの手下の参加もしくは指導のもとで、外国のブルジョア諜報機関の指令にもとづき、二十年間にわたっておこなわれたものであった。

裁判で明らかになったことだが、トロツキスト・ブハーリン派の人でなしどもは、その主人である外国のブルジョア諜報機関の意を体して、党とソビエト国家をぶちこわし、国防を破壊し、外国の武力干渉を容易にし、赤軍の敗北を準備し、ソ連を分解させ、ソビエト沿海地方を日本人にひきわたし、ソビエトの白ロシアをポーランド人にわたし、ソビエトのウクライナをドイツ人にわたし、労働者とコルホーズ員のかちとった成果を消滅し、ソ連に資本主義的奴隷制度を復活させることをその目的としていた。

これらの白衛派のこびとどもは、その力はたかだかしがない虫けらの力と同じとみてよかったが、笑止千万にも、国家の主人公をきどり、かれらがほんとうにウクライナ、白ロシア、沿海地方を他人に分けてやり、売りわたせるものと考えていたようである。

これらの白衛派の虫けらどもは、ソビエト国家の主人公がソビエト人民であり、ルイコフ、ブハーリン、ジノビエフ、カーメネフらの連中は、たかだか一時、国家に職を奉じていたにすぎず、国家はいつでもかれらをその事務室から役に立たないがらくたとしてほうりだせるということを、わすれていたのである。

これらのとるにたりないファシストの従僕どもは、かれらをあとかたもなくかたづけるのに、ソ連の人民は

指をちょっと動かすだけでことたりるということを、わすれていたのである。
ソビエト裁判所は、ブハーリン派・トロツキスト徒党の人でなしどもに銃殺の判決をくだした。
内務人民委員部は、この判決を執行した。
ソビエト人民は、ブハーリン派・トロツキスト徒党の粉砕に賛同し、そして当面の問題にうつっていった。
当面の問題とは、ソ連最高ソビエトの選挙を準備し、これを組織的に実行することであった。
党は、全力をあげて選挙の準備活動を展開した。党は、新ソ連憲法の施行は国の政治生活における転換を意味すると考えた。党は、この転換は、選挙制度の完全な民主化を実行し、制限選挙から普通選挙へ、完全には平等でない選挙から平等選挙へ、多段階の選挙から直接選挙へ、公開選挙から秘密選挙へ移行することであると考えた。
新憲法の施行以前には、僧職者、かつての白衛派、かつての富農および公共に有益な労働にたずさわらないものにたいしては、選挙権の制限があったが、新憲法は、代議員の選挙を普通選挙とし、これらの部類の公民にたいする選挙権のいっさいの制限を認めない。
以前の代議員選挙が不平等だったのは、都市と農民にたいしてちがった選挙規準があったからである。いまでは選挙の平等を制限する必要はなくなり、すべての公民は平等の原則によって選挙に参加する権利をもっている。
以前、ソビエト権力における中級、高級機関の選挙は多段階的であったが、いまや新憲法によれば、農村ソビエト、都市ソビエトから最高ソビエトにいたるまで、すべてのソビエトの選挙は、直接選挙の方法で、公民に

よって直接おこなわれる。

以前には、ソビエト代議員の選挙は、公開投票により、また候補者名簿についておこなわれていたが、いまや代議員選挙の投票は、秘密に、また候補者名簿についてではなく、選挙区別に推される個々の候補者について、おこなわれなければならない。

これは、国の政治生活におけるうたがいもない転換であった。

新選挙制度は大衆の政治的な積極性をつよめ、ソビエト権力機関にたいする大衆の監督をつよめ、人民にたいしてソビエト権力機関が責任を負うことを強めずにはおかなかったし、また実際に強めたのである。

この転換を十分準備してむかえるために、党は、この転換の先頭に立ち、当面する選挙のなかでその指導的役割を完全に保証しなければならなかった。だが、このためには、各級の党組織自身が、実際の活動のなかで、徹底して民主的になること、党組織が党内生活のなかで、党規約が要求するように、民主集中制の原則を完全に実行すること。党内のすべての指導機関が選挙によってつくられること、党内で批判と自己批判が最大限に発展させられること、党組織が党員大衆にたいし完全に責任をおうこと、また党員大衆自身が完全に積極的となることが必要であった。

一九三七年二月末、ソ連最高ソビエトの選挙にたいする党組織の準備の問題について、中央委員会総会でジダーノフ同志がおこなった報告であきらかにされたところでは、きわめて多くの党組織は、その実際の仕事のなかで、ややもすれば、党規約および民主集中制の原則にそむき、選挙制を互選制に、個々の候補者についての投票を候補者名簿についての投票に、秘密投票を公開投票にすりかえている。このようなしきたりをもつ組

織が、最高ソビエトの選挙にさいしその任務をはたすことができないのは、当然である。したがって、まず第一に、党組織のこの種の反民主主義的なしきたりを一掃し、民主主義を拡大することによって党活動を改造しなければならなかった。

そこで中央委員会は、ジダーノフの報告を聴取したのち、つぎのことを決議した。

「(イ) 党規約のさだめる党内民主主義の原則を、無条件に、完全に実現することを基礎にして、党活動を改造すること。

(ロ) 党委員会の委員を互選するしきたりを一掃し、党規約にしたがって党組織の指導機関の選挙制を復活させること。

(ハ) 党機関の選挙にさいし、候補者名簿についての投票を禁止し、投票は個々の候補者についておこなうと同時に、すべての党員に、候補者を忌避し、批判する無限の権利を保障すること。

(ニ) 党機関の選挙にさいし、候補者にたいする非公開(秘密)投票制を確立すること。

(ホ) 基層党組織の党委員会からはじまって、地方、州の委員会および民族共産党中央委員会にいたるまでのすべての各級党組織で、党機関の選挙をおこない、五月二十日までにそれをおえること。

(ヘ) 各級の党組織に、党規約にしたがい、党機関の選挙期限をまもらせること。基層党組織においては年に一回、地区と都市の組織においては年一回、州、地方、共和国の組織においては一年半に一回である。

(ト) 基層党組織では、工場党員総会で党委員会を選挙する手順を厳守し、代表者会議をもって工場党

員総会にかえることをゆるさないこと。

㈠　一連の基層党組織でおこなわれている、事実上党員総会をとりやめ、職場集会、代表者会議をもって党員総会にかえるしきたりを一掃すること。」

このようにして、当面する選挙にたいする党の準備が開始されたのである。

中央委員会でのこの決議は、大きな政治的意義をもっていた。その意義は、ソ連最高ソビエト選挙のための党の選挙運動の基礎をすえたことにあっただけではなかった。その意義は、まず第一に、各級党組織が改造され、党内民主主義の方針を実現し、十分準備して最高ソビエトの選挙をむかえるのをたすけたことにあった。

党は選挙運動を展開するにあたって、共産党員と党外者との選挙連合の考えをその選挙政策の頂点にすえた。党は党外者と連合し、党外者と同盟し、党外者とともに選挙区毎に共同の候補者をたてることを決定して、選挙にのぞんだ。これはブルジョア諸国の選挙運動のしきたりではみられないことであり、まったくありえないことであった。ところが、わが国にとっては、共産党員と党外者との連合はまったく自然な現象であった。わが国にはもはや敵対する階級はなく、人民のすべての階級層の道徳的、政治的統一は、あらそうことのできない事実であったからである。

一九三七年十二月七日、党中央委員会は、全選挙人あてのよびかけをおこなったが、そのなかにはこういわれていた。

「一九三七年十二月十二日、ソ連の勤労者は、わが社会主義憲法にもとづき、ソ連最高ソビエトの代議員を選挙するであろう。ボリシェビキ党は、党外の労働者、農民、知識分子と連合し、同盟して選挙

にのぞむ。……ボリシェビキ党は党外者をわけへだてせず、むしろ反対に党外者と連合し、同盟して選挙にのぞみ、労働者および職員の労働組合、共産青年同盟およびその他の党外の組織、団体と連合して選挙にのぞむ。したがって、代議員の候補者は、共産党員にとっても党外者にとっても共同の候補者となるであろう。どの党外者の代議員もまた共産党員の代議員であり、おなじように、どの共産党の代議員も、党外者の代議員となるであろう。」

中央委員会のよびかけは、選挙人あてのつぎのようなよびかけで結ばれていた。

「ソ連共産党（ボリシェビキ）中央委員会は、すべての共産党員とその同調者に、かれらが共産党員の候補者をえらぶとおなじように一致して、党外の候補者に投票することをよびかける。

ソ連共産党（ボリシェビキ）中央委員会は、すべての党外の選挙人に、かれらが党外の候補者をえらぶとおなじように一致して、共産党員の候補者に投票することをよびかける。

ソ連共産党（ボリシェビキ）中央委員会は、全選挙人に、一九三七年十二月十二日、全員そろって、連邦ソビエト代議員、民族ソビエト代議員のために、投票箱のまえにおもむくようよびかける。ソビエト国家の最高機関の代議員を選挙する光栄ある権利を行使しない選挙人が一人でもあってはならない。最高ソビエトの選挙に例外なくすべての選挙人が参加するよう協力することを、その公民としての義務と認めない非積極的な公民が一人もあってはならない。

一九三七年十二月十二日という日は、ソ連のすべての民族の勤労者がレーニン・スターリンの勝利の旗のまわりに団結する偉大な祝日とならなければならない。」

一九三七年十二月十一日、すなわち選挙の前日、スターリン同志は、自分の選挙区で演説し、そのなかで、人民からえらばれるソ連最高ソビエトの代議員はどのような活動家でなければならないかという問題にふれ、こうのべた。

「選挙人、人民は、自分らの代議員たちにたいし、かれらが終始、その任務にふさわしいこと、かれらがその活動において政治的な俗物の水準に転落しないこと、かれらが終始、レーニン型の政治的活動家の地位にとどまること、かれらが、レーニンとおなじようなはっきりした、明確な活動家であること、かれらが、レーニンのように、戦闘のなかで大胆であり、人民の敵にたいして容赦しないこと、かれらが、ことが複雑になりはじめて、地平線上になんらかの危険があらわれてきたとき、すこしも狼狽せず、狼狽めいたこともしないこと、かれらが、レーニンのように、すこしも狼狽しないこと、かれらが複雑な問題の解決にあたって、全面的な方向の判断と、すべてのプラス、マイナスの全面的な考慮が必要なばあいに、レーニンとおなじように賢明であり沈着であること、かれらが、レーニンとおなじように誠実であり、正直であること、かれらが、レーニンとおなじようにその人民を愛すること、を要求すべきである。」

十二月十二日に、ソ連最高ソビエトの選挙がおこなわれた。選挙は大きな高揚のうちにすすめられた。これは、たんなる選挙ではなく、偉大な祝日であり、ソビエト人民の勝利であり、ソ連各民族の偉大な友誼のあらわれであった。

九千四百万の選挙人のうち、九千百余万すなわち九六・八パーセントがこの選挙に参加した。そのうち共産

党員と党外者の連合に投票したものは、八千九百八十四万四千人、すなわち九八・六パーセントであった。わずかに六十三万二千人、すなわち一パーセントにみたないものが、共産党員と党外者の連合の候補者に反対の票を投じた。すべての共産党員と党外者の連合の候補者は例外なく当選した。

こうして、九千万の人びとは、その一致した投票によって、ソ連における社会主義の勝利を確認したのである。

これは、共産党員と党外者の連合のすばらしい勝利であった。

これは、ボリシェビキ党の大勝利であった。

モロトフ同志が十月革命二十周年記念日の歴史的な演説のなかで言及した、ソ連人民の道徳的、政治的統一は、ここに、輝かしく実証されたのである。

結語

ボリシェビキ党があゆんできた歴史的な道程の、基本的な総括はどういうものであろうか。
ソ連共産党（ボリシェビキ）の歴史は、われわれになにをおしえているであろうか。
(1) 党の歴史は、まず第一に、プロレタリア革命の勝利、プロレタリア階級独裁の勝利は、日和見主義と無縁で、協調派や投降主義者にたいして妥協せず、ブルジョア階級とその国家権力にたいして革命的な、プロレタリア階級の革命的政党がなくては不可能だということをおしえている。
党の歴史は、プロレタリア階級を、このような政党のないままに放置することは、かれらを革命的指導部のないままに放置することを意味し、プロレタリア階級を革命的指導部のないままに放置することは、プロレタリア革命事業を失敗させることを意味する、ということをおしえている。
党の歴史は、国内平和の条件のもとでそだてられ、日和見主義のあとについてのろのろあゆみ、「社会改良」を夢み、社会革命をおそれる西ヨーロッパ型の昔からの社会民主党は、こういう政党ではありえないということをおしえている。
党の歴史は、新しい型の党、マルクス・レーニン主義の党、プロレタリア階級をブルジョア階級との決定的

な戦闘にたいして準備させ、プロレタリア革命の勝利を組織することのできる社会革命の党だけが、こういう政党でありうるということをおしえている。

ソ連における、こういう政党はボリシェビキ党である。

スターリン同志はこういっている。

「革命前の時期、多少とも平和的な発展の時期、すなわち、第二インターナショナルの諸党が労働運動のなかで支配的勢力であり、そして闘争の議会的な形態が基本的な闘争形態とされていたという条件のもとでは、党は、のちに公然たる革命的戦闘の条件のもとでもつようになった、重大な、決定的な意義を、もっていなかったし、もつこともできなかった。カウツキーは、非難される第二インターナショナルを弁護して、第二インターナショナルの諸党は平和の道具であって戦争の道具ではない、それだからこそ、これらの諸党は、戦争の時期、プロレタリア階級の革命的進出の時期においては、多少とも重大な行動にでる力はなかったといっている。

これはまったく正しい。だが、これはなにを意味しているだろうか。それは第二インターナショナルの諸党は、プロレタリア階級の革命闘争にとっては、役にたたないということ、それらは労働者を権力にみちびくプロレタリア階級の戦闘的な党ではなく、議会選挙と議会闘争に適応した選挙の装置だということを意味している。第二インターナショナルの日和見主義者が支配していた時期において、プロレタリア階級の基本的な政治組織は、党ではなくて国会議員団であったという事実もまた、これにもとづいている。周知のとおり、実際に、この時期の党は、国会議員団の付属物であり、奉仕的な要素であっ

た。このような条件のもと、このような党をかしらにいだたいていては、プロレタリア階級の革命への準備も問題になりえないということはおそらく証明を必要としないであろう。

だが、新しい時期の到来とともに、事態は根本的にかわった。新しい時期は、階級の公然たる衝突の時期であり、プロレタリア階級の革命的進出の時期であり、プロレタリア革命の時期であり、帝国主義をくつがえし、プロレタリア階級が権力を奪取するために、直接に力を準備する時期である。この時期は、プロレタリア階級のまえに新しい任務を提起する。すなわち、新しい革命的な方式にしたがって党の全活動を改造すること、権力をめざす革命闘争の精神で労働者を教育すること、予備軍を準備し、結集すること、近隣の諸国のプロレタリアと同盟すること、植民地や従属国の解放運動と確固とした連系をうちたてること、などがそれである。これらの新しい任務が、議会主義の平和的条件のもとで教育されたふるい社会民主党の力で解決されると考えることは、みずからを絶望的な捨てばちに、避けがたい失敗におとしいれることを意味する。このような任務をになっていながら、ふるい党をかしらにいただいたままにとどまることは、完全な武装解除の状態にあることを意味する。プロレタリア階級がこのような状況に甘んじることができないことは、おそらく証明を必要としないであろう。

そこで、新しい党、戦闘的な党、革命的な党が必要となる。この党は、プロレタリアを権力のための闘争に導くに足るほど勇敢であり、革命的情勢の複雑な条件を理解するに足るほど経験があり、目的への途上によこたわるすべての暗礁をさけてとおるに足るほどに弾力的でなければならない。

このような党がなくては、そもそも帝国主義をくつがえし、プロレタリア階級独裁をかちとるなどは

おもいもおよばない。

この新しい党が、レーニン主義の党である。」（スターリン『レーニン主義の諸問題』）

(2) つぎに、党の歴史は、労働者階級の党が、労働運動の先進的な理論に精通せず、マルクス・レーニン主義の理論に精通していなかったなら、自分の階級の指導者としての役割をはたすことができないし、プロレタリア革命の組織者、指導者としての役割をはたすこともできないということをおしえている。

マルクス・レーニン主義理論の力は、それが党に、情勢のなかで方向を定め、周囲の諸事件の内的な関連を理解し、事件の過程を見通し、事件が現在どのように、どの方向に発展しているかだけでなく、事件が将来どのように、どの方向に発展するかを判断する可能性をあたえるという点にある。

マルクス・レーニン主義の理論に精通している党にしてはじめて、確信をもって前進し、労働者階級を前進させることができる。

これに反し、マルクス・レーニン主義に精通していない党は、手さぐりでうろうろせざるをえず、行動にあたって確信をうしない、労働者階級を前進させることができない。

マルクス・レーニン主義の理論に精通することは、マルクス・エンゲルス・レーニンの著作のなかの個々の結論や命題をまじめに暗記し、それを、適当なときに引用することをおぼえ、それで安心してしまい、そして暗記した結論と命題がどのような情勢にも、生活のあらゆるばあいにも役に立つものと期待することだと見えるかもしれない。だが、マルクス・レーニン主義の理論にたいするそのような態度は、まったくあやまっている。マルクス・レーニン主義の理論を教条の集成、教義問答、教義解説とみなしたり、また、マルクス主義者

そのものを、本の虫、聖書学者とみなしたりしてはならない。マルクス・レーニン主義の理論は、社会発展についての科学であり、労働運動についての科学であり、プロレタリア革命についての科学であり、共産主義社会の建設についての科学である。それは科学であるからには、ひとつのところにとどまることはないし、とどまることはできない。それはたえず発展し、たえず完全なものになっていく。その発展のなかで、それが新しい経験と新しい知識で自らを充実していかざるをえないし、またその個々の命題や結論が時の経過とともに変化していかざるをえないし、新しい歴史的条件に適応した新しい結論と新しい命題によってとりかえられないわけにはいかないのは当然である。

マルクス・レーニン主義の理論に精通することは、そのすべての定式や結論を暗記し、これらの定式や結論の一つひとつの字句にかじりつくことを意味するものでは、けっしてない。マルクス・レーニン主義の理論に精通するためには、まず第一に、その字句と本質を区別することを学ばなければならない。

マルクス・レーニン主義の理論に精通することは、この理論の本質を会得し、プロレタリア階級の階級闘争のいろいろな条件のもとで、革命運動の実際の問題を解決するさいに、この理論を運用することを学ぶことを意味する。

マルクス・レーニン主義の理論に精通することは、革命運動の新しい経験でもってこの理論をゆたかにすることができ、新しい命題と結論でもってこの理論をゆたかにすることができ、理論の本質にもとづき、新しい歴史的環境に適応する新しい命題と結論をもって、そのすでに古くなった若干の命題、結論にとりかえることをためらわず、理論を発展させ、前進させることができることを意味する。

マルクス・レーニン主義の理論は、教条ではなくて、行動の指針である。

第二次ロシア革命（一九一七年二月）までは、すべての国のマルクス主義者は、議会制の民主主義共和国が、資本主義から社会主義への移行の時期においてもっとも目的にかなった社会の政治組織の形態だということから出発した。なるほど、マルクスは、七〇年代に、プロレタリア階級独裁のもっとも目的にかなった形態は、議会制の共和国ではなくて、パリ・コンミューン型の政治組織であると指示した。だが、残念なことに、マルクスのこの指示は、マルクスの著作のなかでひきつづき発展させられることなく、人びとによって忘れられてしまった。そのほか、エンゲルスが一八九一年に、エルフルト綱領草案にたいするかれの批判のなかでおこなった「民主主義共和国は……プロレタリア階級独裁のための特有の形態である」という権威ある声明は、マルクス主義者がひきつづき、民主主義共和国をプロレタリア階級独裁の政治形態とみなしていることについて、疑問を残さなかった。このエンゲルスの命題は、その後レーニンをふくむすべてのマルクス主義者にとって指導原則となった。だが、一九〇五年のロシア革命、とりわけ一九一七年の二月革命は、労働者・農民代表ソビエトというこの社会の新しい政治組織の形態を提起した。レーニンは、ロシアにおける二回の革命の経験の研究にもとづき、マルクス主義の理論から出発して、プロレタリア階級独裁のもっともよい政治形態は、議会制民主主義共和国ではなくて、ソビエト共和国であるという結論にたっした。これを基礎として、レーニンは、一九一七年四月、ブルジョア革命から社会主義革命への移行の時期に、プロレタリア階級独裁のもっともよい政治形態としてのソビエト共和国の組織というスローガンを提起した。すべての国の日和見主義者は、議会制の共和国にしがみつきはじめ、レーニンを、マルクス主義から逸脱し、民主主義を破壊するものだといっ

て、非難した。だが、マルクス主義の理論に精通している真のマルクス主義者はもちろんレーニンであって、日和見主義者ではなかった。なぜなら、レーニンは、新しい経験によってこの理論をゆたかにして、マルクス主義の理論を前進させたからである。ところが日和見主義者は、この理論を後退させ、その命題の一つを教条にしてしまった。

かりにレーニンが、マルクス主義の字句の前にしりごみし、ソビエト共和国という新しい歴史的環境に適応した新しい命題をもって、エンゲルスが定式化したマルクス主義の古い命題にとりかえる決心をしなかったとしたら、党、わが国の革命、そしてマルクス主義は、はたしてどうなっていたであろうか？　党は、暗闇のなかをさまよったであろうし、ソビエトは解体したであろうし、われわれはソビエト権力をもたなかったであろうし、マルクス主義の理論は重大な損害をこうむったであろう。プロレタリア階級は敗北し、そしてプロレタリア階級の敵は勝利したであろう。

エンゲルスとマルクスは、帝国主義以前の資本主義を研究し、社会主義革命は単独の一国においては勝利することができず、社会主義革命はすべての、もしくは大多数の文明諸国において、同時に突撃することによってのみ勝利することができるという結論にたっした。これは一九世紀のなかごろであった。この結論は、その後、すべてのマルクス主義者にとって指導的な命題となった。だが、二〇世紀の初期に、帝国主義以前の資本主義は帝国主義的資本主義に成長転化し、上昇しつつある資本主義は死滅しつつある資本主義に転化した。レーニンは、帝国主義的資本主義についてのかれの研究にもとづき、マルクス主義の理論から出発して、エンゲルス、マルクスの古い定式はすでに新しい歴史的環境に適応せず、社会主義革命は単独の一国において勝利す

ることが、完全に可能である、という結論にたっした。すべての国の日和見主義者は、エンゲルスとマルクスの古い定式にしがみつきはじめ、レーニンをマルクス主義から逸脱しているとして非難した。だが、マルクス主義の理論に精通している真のマルクス主義者はもちろんレーニンであって、日和見主義者ではなかった。なぜなら、レーニンは、新しい経験によってこの理論をゆたかにしてマルクス主義の理論を前進させたからである。ところが日和見主義者は、この理論を後退させ、それをミイラにしてしまったからである。

かりにレーニンがマルクス主義の字句の前にしりごみしたとしたら、かりにレーニンに、マルクス主義の古い結論のひとつをすてさり、それにかえるに、社会主義は単独の一国においても勝利することができるという、この新しい歴史的環境に適応した新しい結論をもってするだけの、十分な理論的勇気がなかったとしたら、党、わが国の革命、そしてマルクス主義は、はたしてどうなっていたであろうか？　党は、暗闇のなかをさまよったであろうし、プロレタリア革命は指導をうしなったであろうし、マルクス主義の理論は衰弱しはじめたであろう。プロレタリア階級は敗北し、そしてプロレタリア階級の敵は勝利したであろう。

日和見主義は、かならずしもつねにマルクス主義の理論、あるいはその個々の命題や結論を直接に否定するわけではない。日和見主義は、ときとしては、マルクス主義のすでに古くなりはじめた個々の命題にしがみつき、それを教条にかえ、こうしてマルクス主義のひきつづいての発展をはばみ、したがってプロレタリア階級の革命運動の発展をはばもうとするたくらみとしてあらわれることもある。

エンゲルスの死後には、もっとも偉大な理論家レーニンが、そしてレーニンののちには、スターリンおよびその他のレーニンの弟子たちが、マルクス主義の理論を発展させ、プロレタリア階級の階級闘争の新しい条件

のもとにおける新しい経験によって、マルクス主義の理論をゆたかにした唯一のマルクス主義者であるといっても、いいすぎではない。

まさしくレーニンおよびレーニン派がマルクス主義の理論を前進させたからこそ、レーニン主義は、マルクス主義のよりいっそうの発展であり、プロレタリア階級の階級闘争の新たな条件のもとでのマルクス主義であり、帝国主義とプロレタリア革命の時代のマルクス主義であり、世界の六分の一の土地において社会主義が勝利をかちとった時代のマルクス主義なのである。

かりにボリシェビキ党の先進的な幹部がマルクス主義の理論に精通していなかったとしたら、この理論を行動の指針とみなすことを学んでいなかったとしたら、プロレタリア階級の階級闘争の新しい経験をもってこの理論をゆたかにして、マルクス主義を前進させることを学んでいなかったとしたら、ボリシェビキ党は一九一七年十月に勝利することはできなかったであろう。

エンゲルスは、アメリカの労働運動の指導の仕事をひきうけていたアメリカにおけるドイツ人のマルクス主義者を批判するにあたり、こうかいている。

「ドイツ人たちは、その理論をば、アメリカの大衆を動かすテコに仕上げることができなかった。多くのばあいかれら自身もこの理論を理解せず、これを教義的に、教条的にとりあつかい、理論は宙で暗記しなければならず、またそれだけで実生活のあらゆるばあいにたいし十分であると考えている。かれらにとって、この理論は教条であって、行動の指針ではないのである。」（エンゲルス『ゾルゲへの手紙』一八八六年十一月二十九日）

レーニンは、一九一七年四月、すなわち、革命運動が前進し、社会主義革命への移行を要求していたとき、労働者、農民の革命的・民主主義的独裁という古い定式にしがみついていたカーメネフと若干の古いボリシェビキを批判して、こうかいた。

「われわれの学説は教条ではなくて、行動の指針である、とマルクス・エンゲルスはいつもそういっていた。かれらが、『公式』をそらんじ、それをたんにくりかえすことを嘲笑したのはもっともである。なぜなら、『公式』は、もっともよいばあいでも、一般的任務を提起することができるだけであるが、この任務は、歴史的過程のなかでのそれぞれの特殊な時期における具体的な経済的、政治的情勢によって形をかえるものだからである。……マルクス主義者は、いきた生活を、現実のなかの正確な事実を考慮すべきであり、きのうの理論にひきつづきしがみつくべきではない、というあらそう余地のない真理を会得すべきである……。」（レーニン『戦術についての手紙』）

(3)　つぎに、党の歴史は、労働者階級の隊伍のなかで活動し、労働者階級のおくれた層をブルジョア階級のふところにおしやり、それによって労働者階級の統一を破壊する小ブルジョア政党を粉砕することなしには、プロレタリア革命の勝利は不可能だということをおしえている。

われわれの党の歴史は、社会革命党、メンシェビキ、無政府主義者、民族主義者などの小ブルジョア政党と闘争し、それを粉砕した歴史である。これらの政党を克服し、それらを労働者階級の隊伍のなかから駆逐することなしには、労働者階級の統一を達成することはできなかったであろうし、労働者階級の統一なくしては、プロレタリア革命の勝利を実現することは不可能であったであろう。

はじめは資本主義を維持することを主張し、のちに、十月革命後には、資本主義を復活することを主張したこれらの政党を粉砕することなしには、プロレタリア階級独裁を維持し、外国の武力干渉にうちかち、社会主義を建設することはできなかったであろう。

人民をあざむくために「革命」党とか「社会主義」党とか自称したすべての小ブルジョア政党、すなわち、社会革命党、メンシェビキ、無政府主義者、民族主義者が、すでに十月社会主義革命以前に、反革命政党となり、のちには外国のブルジョア諜報機関の手先に、スパイ、妨害者、謀略者、暗殺者、祖国の裏切り者に化したことを、偶然とみてはならない。

レーニンはこういっている。

「社会革命の時代におけるプロレタリア階級の統一は、ただ極度に革命的なマルクス主義の党によってのみ、すべての他の政党にたいする容赦のない闘争によってのみ、実現することができる。」(レーニン『第八回全アジア・ソビエト大会』)

(4) 党の歴史は、つぎに、自分たちの隊伍のなかの日和見主義者と妥協のない闘争をおこなわなくては、自分たちの内部の投降主義者を撃滅しなくては、労働者階級の党はその隊伍の統一と規律を保持することができず、プロレタリア革命の組織者、指導者としてのその役割をはたすことができず、あたらしい、社会主義社会の建設者としてのその役割をはたすことができない、ということをおしえている。

われわれの党内生活の発展の歴史は、党内における日和見主義的なグループ、すなわち「経済主義者」、メンシェビキ、トロツキスト、ブハーリン派、民族主義偏向者との闘争と撃滅の歴史である。

党の歴史は、これらすべての投降主義者グループが、本質的にいって、メンシェビズムのわれわれの党内における手先、その残党、その継続であったということをおしえている。かれらは、メンシェビズムとおなじく、ブルジョア的な影響を、労働者階級と党内に伝達するものとしての役割をはたした。したがって、党内におけるこれらのグループを一掃するための闘争は、メンシェビズム一掃の闘争の継続であった。

「経済主義者」とメンシェビキを撃破しなかったら、われわれは党を建設し、労働者階級をプロレタリア革命にみちびくことができなかったであろう。

トロツキストとブハーリン派を撃破しなかったら、われわれは社会主義の建設のために欠くことのできない条件を、準備することはできなかったであろう。

ありとあらゆる毛色の民族主義偏向者を撃破しなかったら、われわれは、人民を国際主義の精神で教育することはできなかったであろうし、ソ連の諸民族の偉大な友好の旗を守りぬくことはできなかったであろうし、ソビエト社会主義共和国連邦を建設することもできなかったであろう。

ボリシェビキは、あまりに多くの時間を、日和見主義分子との闘争のために割き、ボリシェビキはそれらの分子の意義を過大評価したようにみえるかも知れない。だが、それはまったくあやまりである。健康な身体のなかに潰瘍の存在を許すことができないように、自分たちの内部に日和見主義の存在を許すことはできない。党は、労働者階級の指導部隊であり、その前方のとりでであり、その戦闘司令部である。労働者階級の指導司令部に、信念のないもの、日和見主義者、投降主義者、裏切り者が座を占めているのを許すことはできない。投降主義者や裏切り者を、自分たちの司令部に、自分たちのとりでのなかにおきながら、ブルジョア階級と命

がけの闘争をすることは、前方からも背後からも射撃をうける人びとの立場におちいることを意味する。こういう闘争の結末がただ敗北のみだということは、理解にかたくない。とりでは、内部から奪うのがもっともたやすい。勝利をかちとるためには、まず第一に、労働者階級の党から、その指導司令部から、その前方のとりでから、投降主義者、脱走者、ストライキ破り、裏切り者を粛清することが必要である。

トロツキスト、ブハーリン派、民族主義偏向者が、レーニンと闘争し、党と闘争したあげくのはてに、メンシェビキ党や社会革命党とおなじく、ファシスト諜報機関の手先となり、スパイ、妨害者、暗殺者、謀略者、祖国の裏切り者と化したことを、偶然とみてはならない。

レーニンはこういっている。

「自分の隊伍のなかに、改良主義者、メンシェビキがいたら、プロレタリア革命において勝利することはできないし、プロレタリア革命を維持することはできない。これは、原則的にはっきりしている。これは、ロシアやハンガリーの経験によってありありと実証されている。……ロシアには何回も困難な状態があったが、そのさいもしメンシェビキ、改良主義者、小ブルジョア的民主主義者がわれわれの党内にとどまっていたなら、ソビエト制度は必ずやくつがえされてしまったであろう……。」（レーニン『イタリア社会党の党内闘争について』）

スターリン同志はこういっている。

「われわれの党が内部の統一をつくりあげ、その隊伍のかつてない団結をつくりあげることができたのは、まず第一に、党が日和見主義という汚物をいちはやく掃除することができ、党内から解党派、メ

ンシェビキを追い払うことができたためである。プロレタリア階級の党の成長・強化の道程は、日和見主義者と改良主義者、社会帝国主義者と社会排外主義者、社会愛国主義者と社会平和主義者を党内から掃除することと通じる。党は党から日和見主義的な要求を追い払うことによって強固なものになる。」

（スターリン『レーニン主義の諸問題』）

(5) 党の歴史は、つぎに、もしも党が勝利に目がくらみ、うぬぼれはじめるなら、もしも党が自分の活動の欠陥に注意することをやめるなら、もしも党が自分のあやまりをみとめることをおそれ、そのあやまりを機を逸せず公然と誠実に訂正しないなら、労働者階級の指導者としての役割をはたすことはできないということをおしえている。

もしも党が、批判と自己批判をおそれないなら、もしも党が自分の活動におけるあやまりと欠陥をごまかさないなら、もしも党が党活動におけるあやまりの例によって幹部におしえ、これを教育するなら、もしも党が機を逸せず自分のあやまりを訂正するなら、党は不敗である。

もしも党が、自分のあやまりをかくし、面倒な問題をもみけし、天下太平をよそおうことによって自分の欠陥をおおいかくし、批判と自己批判にたえられず、自己満足感にひたり、うぬぼれに身をゆだね、名誉に安んじて眠りはじめるなら、党は滅亡するであろう。

レーニンはこういっている。

「自分のおかしたあやまりにたいする政党の態度は、その党がまじめであるかどうか、また党が自分の階級および勤労大衆にたいするその義務を実際に遂行するかどうかについての、もっとも重要な、もっ

とも確実な尺度の一つである。あやまりを公然とみとめ、あやまりの原因をあばき、あやまりをうんだ情勢を分析し、あやまりを改める方法を注意深く検討すること、これこそ、まじめな党の目じるしであり、これこそ、党がその義務を遂行することであり、これこそ、階級を、さらにはまた大衆を教育し、訓練することである。」（レーニン『共産主義運動における「左翼」小児病』）

ついでこういっている。

「これまでに滅亡したすべての革命党は、それらがうぬぼれて、自分の力がどこにあるかをみることができず、自分の弱点について語ることをおそれたために滅亡した。ところが、われわれは、自分の弱点を語ることをおそれず、弱点を克服することを学ぶので、滅亡しないだろう。」（レーニン『ロシア共産党（ボ）第十一回大会中央委員会の政治報告の結語』）

(6)　最後に、党の歴史は、大衆との広範な結びつきなしには、この結びつきをたえずかためることなしには、大衆の声に耳をかたむけて、大衆の切実な要求を理解することができず、大衆をおしえるだけでなく大衆から学ぶ用意がないなら、労働者階級の党は、何百万の労働者階級とすべての勤労者をみちびくことのできるほんとうの大衆的な党になることはできないということをおしえている。

もしも党が、レーニンのいうとおり、「もっとも広範な勤労大衆と、第一にプロレタリア大衆と、だがおなじく非プロレタリア的勤労大衆とも結びつき、かれらに接近し、あるていどまで、必要とあればかれらと一つに溶けあう」（レーニン『共産主義運動における「左翼」小児病』）ことができるなら、党は不敗である。

もしも党が、そのせまい党のからのなかにとじこもるなら、もしも党が大衆から離脱するなら、もしも党が

官僚主義のさびにおおわれるなら、党は滅亡するであろう。
スターリン同志はこういっている。
「ボリシェビキが、広範な人民大衆との結びつきをたもっているあいだは、かれらは不敗であるということは、法則として認めてよい。これに反し、ボリシェビキがひとたび大衆から離脱し、大衆との結びつきをうしない、官僚主義のさびにおおわれるなら、かれらはいかなる力をもうしない、からっぽの人間になってしまうであろう。
古代ギリシャ人の神話のなかに、アンテウスという有名な英雄がいた。神話の物語るところでは、かれは、海の神ポセイドンと大地の女神ゲアの子であった。アンテウスは、かれを生み、育て、教育した母親に特別の愛着を感じていた。かれ、このアンテウスにとって勝てないような英雄はひとりもいなかった。かれは無敵の英雄とみなされていた。かれの力はどこにあったのか？　かれの力は、かれが敵との闘争で困難におちいるたびに、大地にふれ、すなわち、かれを生み、育てた母親にふれ、新しい力をえるというところにあった。だが、かれにもやはり弱点があった。それは、なんらかの方法で大地からひき離されるという危険であった。敵はかれのこの弱点を考えにいれ、ひそかにかれのすきをうかがっていた。そのご、一人の敵があらわれて、かれのこの弱点を利用し、かれに勝った。それはヘルクレスであった。では、ヘルクレスはどのようにしてアンテウスに勝ったのか？　ヘルクレスは、アンテウスを大地からひきはなし、空中にもちあげ、アンテウスが大地にふれられないようにし、こうしてかれを空中でしめ殺したのである。

ボリシェビキはギリシャ神話のなかの英雄アンテウスをおもいださせると、わたしはおもう。ボリシェビキは、アンテウスとおなじように、自分の母親、すなわち、かれらを生み、育て、教育した大衆との結びつきをたもつことによって、力強いのである。そして、かれらが自分の母親、すなわち大衆とのつながりをたもっているかぎり、かれらは、不敗の地位をたもつ十分な見通しをもっている。

ここに、ボリシェビキの指導が不敗であるカギがある。」（スターリン『党活動の欠陥について』）

以上が、ボリシェビキ党のあゆんできた歴史の道程における基本的な教訓である。

（おわり）

訳者あとがき

一

ソ連共産党の歴史について、ソ連でかかれたものを数えても、けっして少なくありません。ごく最近（一九七〇年）にでたものもあります。それなのに、なぜ三十数年も前の一九三八年にでた『ソ連共産党（ボリシェビキ）歴史小教程』を、ふたたび訳して出版することになったのか。そのことに簡単にふれておきたいと思います。

ソ連でかかれた党史は、スターリンの指導のもとで出版された本書――『ソ連共産党（ボ）歴史小教程』のほかに、大別するとつぎの二種類のものがあります。

その一つは、フルシチョフの時代にかかれたものです。スターリンの死後、奇襲攻撃のやりかたで、スターリンを誹謗する「秘密報告」をもちだし、ソ連の党と国家の大権をのっとったフルシチョフ現代修正主義集団は、プロレタリア革命とプロレタリア階級独裁という根本的問題で、レーニン主義を裏切り、十月革命を裏切りました。かれらのかいたソ連共産党の歴史は、マルクス・レーニン主義をかかげてマルクス・レーニン主義を骨抜きにする修正主義の路線によってかきかえられ、歴史を偽造し、歪曲したものにかえられてしまいまし

た。

もう一つは、フルシチョフの反革命クーデターの共謀者で、その後フルシチョフにとってかわったブレジネフ現代修正主義集団のだしたものです。かれらも、レーニン主義を裏切り、十月革命を裏切って、ソ連共産党の歴史を偽造し、歪曲している点では、先輩フルシチョフとまったく同じですが、ただ、かれらの場合には、スターリンの評価にみられるように、「評価している肯定的な側面」と、「批判し非難している否定的な側面」がある、とうわべは二つの側面を並列するやりかたをとって、実際にはスターリンを全面的に否定するという、より修正主義的な手をつかっています。しかも、かれらはさらに、中国共産党を公然と誹謗攻撃した箇所までつけくわえているのです。

『ソ連共産党(ボ)歴史小教程』と、そのほかのソ連共産党の「党史」との違いは、これを比較対照していただければ、いっそうはっきりするでしょう。

ソ連共産党の歴史を見事に総括しているものは、いまのところこの『歴史小教程』だと考えて本書を翻訳することにしました。多くの読者がこの『歴史小教程』の出版を要望しておられるのも、この点にあるのではないでしょうか。

二

「『ソ連共産党(ボリシェビキ)歴史小教程』は、ここ百年らいの全世界の共産主義運動の最高の総合と総括であり、理論と実際の結合の典型であって、いまのところ全世界で完全な典型はこの一つしか

ない。」

毛沢東主席は、中国共産党の整風運動をはじめるにあたって延安の幹部会議でおこなった報告『われわれの学習を改革しよう』（一九四一年五月）のなかでこのようにのべています。毛主席は、このなかで、

「現職幹部の教育と幹部学校での教育については、マルクス・レーニン主義を静止的、孤立的に研究するやり方をやめて、中国革命の実際問題の研究を中心とし、マルクス・レーニン主義の基本原則を指針とする方針を確立すべきである。マルクス・レーニン主義の研究には、また、『ソ連共産党（ボリシェビキ）歴史小教程』を中心的な文献とすべきである。」

とものべています。

毛主席は、また『党八股に反対しよう』（一九四二年二月八日）、『農業協同化の問題について』（一九五五年七月三十一日）などでも、この『歴史小教程』を引用して、そこからソ連共産党の歴史的経験教訓を学ぶよう、中国人民によびかけています。延安でおこなわれた整風運動のとき（『歴史小教程』の「結語」は整風文献の一つに指定されていた）、新中国成立後の第一次五ヵ年計画の当時、この『歴史小教程』の経験教訓が中国でもさかんに学習されたようです。

『歴史小教程』は、わたしたちがマルクス・レーニン主義を学ぶうえでも、多くの利点をもっています。

本書が、歴史の具体的な事実をとおして、マルクス・レーニン主義の基本的思想をのべているので、マルクス・レーニン主義の実質をつかみとるのに有利だという点。

本書が、理論と実際とを結合させてのべているので、理論と実際とを結合させる方法を学びとり、日本革命

の問題と結合させながら学ぶのに大いに役立つという点。

本書が、マルクス・レーニン主義のあらゆる敵との闘争の歴史によって貫かれているので、反マルクス・レーニン主義のあらゆる思想、とくに日本における反マルクス・レーニン主義思想を批判するのに大いに役立つという点。

本書が、各章の「要約」でその時期の経験教訓をしめくくっており、また、巻末の「結語」で、一九三七年までのソ連共産党の歴史の全過程をしめくくって経験教訓として簡潔にのべているので、学んだものを整理し、深めていくのに大いに役立つという点。

こうした利点をいかして、ソ連共産党の歴史のなかから、マルクス・レーニン主義の基本的原理と革命の方法を学びとることができるわけです。

『歴史小教程』には、プロレタリア革命とプロレタリア階級独裁についての多くの問題、なかでも労働者階級の指導権の問題、労農同盟の問題、大衆路線の問題、知識分子の問題など、わたしたちの学ぶべき多くの内容がふくまれています。これらの問題を学ぶ場合、わたしたちは、ただ歴史的事実として学ぶのではなく、ソ連共産党がそのときどきに問題を処理した立場、観点、方法を学ぶことによって、それを深く身につけていくことができます。

三

レーニンは、マルクス主義をうけつぎ、守り、発展させて、マルクス主義を新しい段階――レーニン主義の

段階に高めました。

スターリンは、レーニン主義の事業をうけつぎ、守って、社会主義の道をひきつづき前進させ、偉大な勝利をかちとりました。

毛沢東主席は、マルクス・レーニン主義をうけつぎ、守り、発展させて、マルクス・レーニン主義をまったく新しい段階――毛沢東思想の段階に高めました。

レーニン主義は、帝国主義とプロレタリア革命の時代のマルクス主義であり、毛沢東思想は、帝国主義が全面的な崩壊にむかい、社会主義が全世界的な勝利にむかう時代のマルクス・レーニン主義です。毛主席は、マルクス・レーニン主義を、ただ単に個々の問題で発展させたというのではなくて、全面的に発展させています。だから『歴史小教程』を学んでマルクス・レーニン主義をいっそう深く理解するためには、毛主席の著作を学ぶことがどうしても必要になってきます。

植民地・半植民地の民族民主革命の問題、この民族民主革命と社会主義革命、社会主義建設との関連の問題については、『新民主主義論』をはじめそのほかの毛主席の著作を学ぶと、いっそう明確になるでしょう。

毛主席は、プロレタリア革命とプロレタリア階級独裁についてのマルクス・レーニン主義の理論をうけつぎ、守り、発展させて、プロレタリア階級独裁のもとでひきつづき革命をおこなう理論を提起しました。そして、プロレタリア階級独裁の時期全体にわたって、矛盾、階級、階級闘争が存在すること、社会主義に敵味方の矛盾と人民内部の矛盾という性質の異なる二種類の矛盾が存在することを提起しました。『人民内部の矛盾を正しく処理する問題について』をはじめそのほかの毛主席の著作を学ぶと、この問題を明確にすることがで

きます。『中国共産党第九回全国代表大会における報告』も、そのためのよい参考になります。この理論は、中国のプロレタリア文化大革命の理論的基礎になった重要な理論でありますし、『歴史小教程』を深く学びとるためにも、かかせない問題だと考えます。

また、『歴史小教程』でのべられている党建設の問題についても、毛主席の著作や、中国共産党第九回大会の報告と、同大会で採択された中国共産党規約をよんで深めてほしいものです。

哲学の分野でも、毛主席は、マルクス・レーニン主義をうけつぎ、守り、発展させており、とくに毛主席の五篇の哲学著作（『実践論』、『矛盾論』、『人民内部の矛盾を正しく処理する問題について』、『中国共産党全国宣伝工作会議における講話』、『人間の正しい思想はどこからくるのか』）の学習は、弁証法的唯物論と史的唯物論を把握するうえでどうしても必要だと思います。

四

「レーニン、スターリンが、どのようにマルクス主義の普遍的真理をソ連の革命の具体的実践と結合させたか、また、それによって、どのようにマルクス主義を発展させたかをみれば、われわれは、中国でどのように活動すべきかを知ることができる。」

毛主席は、はじめにあげた『われわれの学習を改革しよう』のなかでこのようにのべています。

毛主席は、武力で権力を奪取するというマルクス・レーニン主義の普遍的真理にもとづきながらも、中国という具体的条件にあわせて、十月革命のときとは違った中国革命独自の特徴のある道をすすみました。（十月

革命はプロレタリア社会主義革命、中国革命は新民主主義革命の完全な勝利をへて社会主義革命に転化。十月革命は都市で武装蜂起をおこなったのちに革命を農村におしひろめた。中国革命は農村をもって都市を包囲し最後に都市を奪取して全国的勝利をかちとった。)

わたしたちが『歴史小教程』を学ぶ場合、そのなかにのべられているマルクス・レーニン主義の普遍的真理と、日本革命の具体的実践とを結合させながら学ぶことが大切です。

毛主席がのべているように、

「マルクス・レーニン主義の普遍的真理と日本革命の具体的実践とを結びつけること、これを真剣になしとげさえすれば、日本革命の勝利はまったく疑いない。」(「日本の労働者の友人たちに贈った重要な題辞」一九六二年九月十八日)

ソ連共産党（ボリシェビキ）歴史小教程

1971年6月5日　初　版　発　行
1975年8月15日　初版第4刷発行

訳　者　東方書店出版部
発行者　株式会社　東方書店
東京都千代田区神田神保町1の3
電話　294-1001（代）　振替東京36500番

ソ連共産党（ボ）歴史小教程

東方書店

本書は、マルクス・レーニン主義のあらゆる敵との闘争の歴史によってつらぬかれているので、反マルクス・レーニン主義のあらゆる思想、とくにげんざい日本におけるあらゆる反マルクス・レーニン主義思想——現代修正主義、トロツキズム等々を批判するために、正に最適の書である。